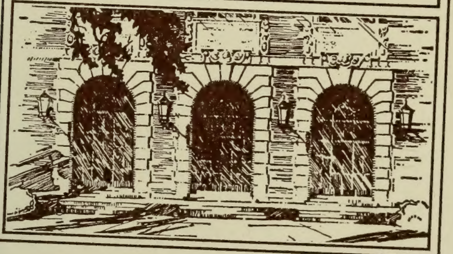
PL
700
.M41
no.7-9

UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
3 0112 071411752

LIBRARY OF THE
UNIVERSITY OF ILLINOIS
AT URBANA-CHAMPAIGN

PL
700
.M41
no.7-9



明治文庫

短篇小說

博文館發行

中村花瘦作

臧長者

狂蝴蝶

合歡花

俠魂

片時雨

破鏡

明治文庫第七編

LIBRARY U OF I URBANA-CHAMPAIGN

PL 700 .M41 no.7-9

俄長者　中村花瘦

（第一回）不思議の老僧

今は昔し幾年をや經りけん、麻布廣尾邊りの淋しき處に、隣りもなき一つ家、九尺二間の一と搆ひ、疊六ひらを玄關とも客間とも、又臥床ともして、六尺の上り口、半間の流し元。柱は羽蟻の生ひ出でゝ年々に礎の枕を外し、傾く軒は蜘蛛の糸に日毎さゝえらるゝ。霜白き夜は北山下風遠慮なく入りて骨をもひしぎ、寢ながら良夜の月に嘯ぶく幸はあれども、五月雨頃には疊乾く隙なし。鼠饕り廻るも主人の腹肥やす美味もなければ、戸棚囓まるゝ憂ひもなからん。荒繩の向ふ鉢卷したる七輪、其が上には膏藥幾何となく張りて、閉ぢ蓋したる鍋一つ、是れにて米も炊ぎ、汁も煮、物も洗ふ。棚には活計の隱せぬ貧乏德利、兀げて躄よなりたる膳の上に、大小取り雜ぜの茶碗四つ五つ、納所の飾りは言ひたくも是れのみ、座敷には何やら火鉢、張る反古に傷を隱し、蓋は異姓のもの且つ口は缺け損じ、煤びて摸樣も知れぬ土瓶の螢火に尻を炙るは、如何な茶人も是れには鼻抓むべし。煎餅より薄き蒲團二三

枚、處〻に膓を吐きて、片隅に積まるゝ他には無一物。されど感心なは形斗りの佛壇に位牌の奇麗に並ぶ。

淸貧か抑も寡欲か、主人の名は與太郎といひて、業ひハ左官、妻との間に三界の首枷といふもの、男女合せてしかも三人、親子五人の水入らず、此處も住めば都、居れば城郭として、其日〳〵を暮すなる。この男至つて信心ものにて、神佛を尊がめ奉るといへど、如何なるものか福の神に緣なし。心質朴にして寧ろ愚に近かく、別に殘れる財なきに、一日休めは五人の口は彌生の濱邊、腰曲る迄に働きても、湯澤山の雜炊が關の山なり。雪の降る日に空仰ぎて、哀れ是れ程のもの米ならばと腹を撫で、白雨篠突く夕邊、哀れ是の水酒なればと咽を鳴らす。花美しきも樂しからず、月涼しきも可笑からず、却て椽の下の竈馬に冬着の算段を促さるゝ心地す。三百六十餘日樂みハ塵ほどもなく、苦しみハ山を爲し、只枕取る時より夢破るゝ迄を莫妄想の安樂國、是れにて貴き五十年を終るとハ、扨も浮世ハ苦の世界ぞかし。

與太郎この二三日は少しの錢も摑まず、米入れる袋底を叩きて、今日ハ漸く一度の粥。其れも子供不憫と己れ口を減らして、小さき腹を滿たせ遣りたれバ、夕頃にハ虫酸走る苦しみなり。生唾呑み込んで明日の食ハ如何にと考ふれば、胸一杯に張れど別に考へもなし。明日にならば又どうとも、果報ハ寐て待てと鬼〻しく腹を据へて枕とれば、小供ハ夢の中の馳走に遇ふか、舌鼓打ちて旨し〳〵と言ふ。背中

合せし女房に振り向きて顔見合すれば、女房の眼ハ玉なす露の溢るゝ斗り、與太郎是れに鼻つまらせて、寐返り打ちながら灯吹き消しつ蒲團かつげば、足の央ハ出て寒氣骨に徹るに、長者になりしを夢になと見んと眼一心に閉れば、晝の勞れに程なく樂土に分け入りぬ。

音のふ聲と一つ置きに、門の戸しきりに打叩く音す、折角の長者の夢は是れに破れて、ふつと目覺ませば捨ても置かれず、返辭に燧火打ちて紙燭に火を移して戸を開けば、先づ寒さに體の振ふ。風に火を取られじと襤褸の袖を屏風として、誰ぞと眼擦れば、古木の如く疲せて骨のみ高く、顏の色青白く、眉茫々と長く生ひ、眼は谷の如く窪みて、鼻いよ〳〵高く、頭の毛五分程に延びて然かも白銀の針植たるに似たり。丈見上ぐる斗お高く、白き衣を身にまとひ、竹の杖に兩手を重ねて預けたる大坊主、ぬつと佇立む。きやつと云ふ聲歯に噛みしめてよく見れば足あり、扨は幽靈にはあらすと胸擦れど、一時の驚きに口も聞けず。大坊主よろ〳〵と近寄りて、皺枯れて霜夜に鳴く機織の如き聲細ふ出し、

僧『主人ハお前かい、乃公ハおまへが信心者で、正直者だといふことを聞ひて、賴みに來たが……。

アノ今夜にも仕事をして貰ふ事が出來るかナ。

是れも一つの旦那、與太郎は初めて叮嚀に首を下げ、

與『左樣で御座い升か……、御覽の通りの貧乏、仕事がなければ口ヰ濡らす事は出來ない程で御座い升から、……もう夫れは、手間さへ直に下されば是方から願ひましても、お斷は致しません。

僧『それは何よりだ、そんなら頼むとしやう。然しその儘ヂやお連れて行かれない……。

與『如何なさいますので。

僧『何、おまいの眼を隱して貰ひたいのだが……、承知ならば今直に連れて行くよ。

與『へー……。

老僧は懐さぐりて取り出す黒き布、

僧『如何だい。

與『よろしう御座い升。

己れ正直の心に決して人を疑はず、門の戸鎖して儘になれば、軈て兩の眼は黒き布に蔽れぬ。怪しき老僧の冷たき手に手を取られて、足元浮雲なく爪先に探ぐり〳〵後に附けば、梟梢に鳴きて淋しみ膓に透る。

與『旦那眼の見えないといふものは、不都合で御座い升ね。

僧『シッ……無言てお歩るき。

（第二回）　不思議の古家

與太郎は老僧に手を取られて、烏婆玉の暗路をたどるに、道は何處か白菊の、秋に錦織りたる草も今は末枯に伏し折れて　爪先をすくひ、凩空を走る度に冷々と身に入みて、歯は自から噛み合ふて鳴る、立枯の尾花がさ〳〵と鳴る度に、寒氣骨を裂くなり。右へ曲り左へ折れ、立樹兩方より蔽ひ掛る細道を縫

ふぞと思へば、はや人の家ありと知らるゝ街に出づ、行く處更に胸に覺えず。一時程經たりと思ふ頃、又野原めきたる處を歩む、野狐キャッと鳴くに胸跳らすれば、老僧は歩を止めたり。目指す家の門か、老僧は懷搜る氣配して、鍵取り出したるならん、錠きしませて鎖を開く音す。鎖開かれたるに門を押すやうなり、音を以て考ふれば、いと重やかなる扉とぞ思はる。眼の黑布此處にて取らるゝと思へば左は無くて、與太郎を伴ひ入れ、戶は再び音を立てゝ閉ぢられ、錠をさへ下ろされたり。玄關めきたる處を上りて段々と行くに、奧深ければ廣やかなる住居と見へたり。されど人の氣配せねば、出で迎ふものもなきなるべし。與太郎も無言、僧も無言、彼方此方と間數幾つとなく越せば、廻廊めきたる處に出づ、板敷をすり足して進み、手を持て闇を摑み、黑布の内に眼大きく開けど、是は實に無益。やゝ歩行きて引戶開けば、一と間に出たり、眼の蔽ひ是處に取り外さるゝに、夜の明けたる心地す。瞳定めて如何なる處ぞと見れば、十疊も布からんと思はるゝ、いと廣やかなる座敷の眞中に立ちたり。尙能く見れば、是れ丈の間に、床あれども軸なく、違ひ棚は甍の厚衾をかさぬ、是れにても人の住居かと驚かるゝばかりなり。有るは只一つの行燈、紙いたく煤び、灯引き込まるゝ樣に薄暗くなりて、あはれ消るぞと蹈み寄らんとすれば、燚と明るし。陰氣滿々として物凄く、時々鼠さら〳〵と音をさせて天井を歩む。與太郎は心消へ魂身に添はず、穴へ沈む如く覺えて、傍へに立てる老僧の顏を見れば、折から段々黑ふある燈火に向ひ立ちたる姿、さらにこの世の人にあらず。體はぞく〳〵と粟立ち、頸元より冷水注ぎ入れら

れし如く、立つ足に力なく、思はず其處へぴたりと坐りぬ。上に持佛あるか、細骨に縁黒く塗りたる小障子四枚立つは持佛堂か。下は戸棚か二枚の小襖あり。老僧は糸の如き指をさして、

僧『其處の戸棚の前の根太下に、小さい穴藏をこしらへて貰ひたいのだ

與『へー……其處の下に……

立つて進み寄り襖に近づけば、折悪しくも襖は柳の摸樣、又慄として冷汗腋を傳ふ。

與『こ……こ……この下に……

僧『ウム、マア疊を上げて見なさい、

疊を引き起して、襖の摸樣の見へぬやうに立て掛け、床板四五枚引き離せば、何やら顔へ。アッと一と足下りて肩を見れば、濕氣虫一疋。

與『エー、人驚かしめ。

僧『如何だい、仕事は出來やうか。

與『出來ますとも……ですが道具は鏝の外ありませんが。

老僧は無言に傍らの襖を開けば、次の間に鍬、鋤、石の類ひに添へて、石灰の俵、扨も何時用意せしか怪し。先づ土を掘り初むるに、濕氣に豆腐を崩す如く苦なく掘れしも、二尺ほどより鍬先に力入りて、鋤の柄に汗を握る。されば思ひの外手間取りて、穴藏三分の一計り出來る頃には、遙かに一番鶏の聲聞ゆ。

僧『最う仕事を止めて呉れ。
與『なに今日の晝頃迄には出來上りますから、遣つて仕舞ませう。
僧『さうでない、少し都合があるから……。
與『へエー……では止しますか。
根太板の上に登れば、老僧は例の黒き布を取り出して。
僧『さあ、是れを又掛けて呉れ、さうして最う歸つて貰ひたい。
與『へエ、またですか。
再び布に眼を隱されて立てば、老僧は與太郎の掌に小判一片攫ませ、手を引きて此家を出で、來たりし如き道を踏みぬ。暫くして立止りて眼の蔽ひを取らるれば、我が家の前なり。
僧『マアお前の骨折で、あれ迄出來上つたが、最う一度來て出來掛りをやつて仕舞つて呉れないか。
與『まいりませうとも、殊に多分の手間を戴きましたから……是非もう一度上りまして、遣り掛けを仕舞ひとう御座い升。
僧『それは難有い、では今夜の四ッ頃に又迎ひに來るから、その積りで待つて居てお呉れ。
與『是れは大きに難有うございました、誠に恐れ入升遠方の處を……最う御歸りで……では今夜御待ち申升。

多分の手間賃に、地に附かん斗りに頭を下げ、七重の腰を八重に折りて、暫くして首を上げて見れば、今其處に立ちし老僧の影は朝霧の何處へ消えしか、霧を分けし跡もなし。昨夜よりの不思議、古狸か、惡狐か、吾れ抓まれたるかと眉に唾を附け、小判は定めし木の葉と、堅く握りたる掌を開けば、黄金の光り眼を射る。まだ化かすか小憎らしと、石を目掛けて發矢と打ち附くれば、宜い音のしてけり。

（第三回）　不思議の葬禮

北斗の光り冴え渡りて、近き山寺に四ッの鐘をまだ撞き終らぬ頃、約束の如く老僧の影は、風にあふつ枯れ柳の如く門に顯はれて内を覗く。昨夜より少しく慣れたれば、此方より出で迎ひ、左樣と覺悟はしても、何んとなく心淋しく、例の黑布に眼を蔽はれて、老僧の導くこと前の日に同じ。覺えの家に入り覺えの座敷に通れば、眼の蔽ひ此處にて取り捨てらる。爲しかけし仕事は、昨日歸りし時の儘に片寄せもせず。老僧は目打きもせず見て居るに、與太郎身を粉に碎きて働けば、九ッ少し過には、穴藏出來上りたり。裡は石を以て兩側を疊み上げ、石灰に繼ぎ目を塗り、御影石の蓋三枚はその用意あり。與太郎は尙彼方此方と仕事の拔目なきを見終りて、疊の上に這登り、

與『如何で御座います、御氣に入りません處は直しますから、どうか一つ御覽下さいまし。

僧『いや誠に御苦勞だつた、先刻から此處に見て居たが、別に直して貰ふ處もないて。

與『それは御氣に入つて、幸福で御座い升。

僧『時に最う一つ頼みたい事がある。外でもないが、此の穴藏へ葬むる物があるのだ、然し私一人でハ手に餘るから、おまへの手を貸して貰はずばなるまい。

發矢！、葬ると云へば人の死骸か。筋ぶる〳〵と動きて肉慄き、髪の毛竦氣立ちて風なきに戰ぐ、老僧の顔をそつと覗へば、窪みたる眼きらりと光つて、眸子を据へて怨めし氣に見つむるに、辭まば取つて喰ハれんも知れずと思へば、老僧の口ハ耳迄も裂けたるやうなり。只恐ろしくて二度は仰ぎ見ず、脣振はして、

與『へエ……か…… 畏まりました、

老僧の後へに從つて行けば、踏む足吾れにもあらず振るへて、體定まらず。死體！、死體！死骸！と思ひ續くれば、土色の顔、閉ぢし眼の縁青白く、結びし唇紫を帶びての寐姿、あり〳〵と眼に寫る。鶴龜〳〵と眼閉づれば、この度は血走る眼赫と見開らき、口ハ無念の齒を喰ひ結ばりて、額破れて流るゝ血潮紅を染め、今にも飛び掛らんず面持胸に浮む。心に堪へず又眼を開けば、天井、壁、疊、何處も皆恐ろしの顔のみ見ゆるに、與太郎身も世もあらず、小聲に南無阿彌陀佛！彌陀佛！助けたび給へ八百萬の神々！

足ハ千鈞の重量附けし如く、又漆の中を蹈むに似たり。進まぬ足を老僧に疑はれじと無理に進めて、薄暗き一つの部屋に來るに、すは今こそ！と思へば、體無上に固く凝りて、腰の振ひ止まらず、眼ハ却つ

て鋭くなりて、死骸を見出さんと四方に配れど、それらしきものなし、只片隅に大瓶三つ四つ。恐しとのみ思ひし氣拔て、與太郎今ハ五里霧中に立ちて茫然たり。老僧は瓶の側に寄りて、

僧『これだ……是れを皆んな葬るのだ……一つゞゝ穴藏まで運んで呉れ。

與『へー是れですか……宜しう御座い升。

瓶といふに與太郎元氣附きて、老僧と片々づゝ持ちて見るに、中ハ何とも知れねど、中々死骸の重さに非らず。二人とも背に汗を流し、腕に力瘤を張らして、以前の座敷に運び、先づ一つ穴藏に下す。そも裡は何ぞと不思議に思へば、見て惡しきもの益々見たく、隱すこと彌々聞き度に、老僧を遣り過ごして一足跡に殘り、瓶の蓋をそつと開けて一寸覗けバ、不思議！不思議！不思議！、こは如何に、瓶の裡なるは、大判！小判！小粒！しかも立派に通用する貨幣！老僧振り向きはせずやと、直に蓋して後に繼けど、胸の有無無耶、五色の糸の縱横無盡に纏れ纏るゝを、素知らぬ顏して歩びながら、殘りの瓶の目方引けば、皆同し樣、扨も大したる金と老僧を仰げば、白き眉長やかに垂れて福相を顯はす。然し此の僧如何にして斯樣に金持か、恐らくハ恐ろしの切取強盜かと瞪視れば、窪き眼、高き頰、一つとして惡相あらぬハなし。一つ一つ瓶を運び、不殘埋め終れば、老僧の差圖に、御影石を以て穴藏の蓋を成し、次に床板を打ち附け、疊元の如く布き列らぬれば、暫時の後は元の座敷に返りて、別に變りし事をせしとも見えず。老僧は最早用なきぞと告げて、再び例の黑布を取り出せば、與太郎の眼ハ來りし時の如く

また物を見ず。老僧の手を便りとしてこの家を出て、家路に歸るならん、先は恙もなく毒蛇の口を逃れしと心の裡に悦こべば、左はなくて此度は二た夜足馴れし道にはあらず。又新らしき心配湧き出で丶、何處とも知らず歩むに、落葉堆高く重なりて踏む度に鳴るゝ、林の內を行く樣あり。小石破れ草履に蹴付て飛ぶゝ、人通りゐる路と覺ゆ。考ふれば家路二里とは離れぬ處を、往來すると覺ゆれど、曾つて一度も通りし處とは思へず、今ゝ往く時の途二度も歩みたらんと思ふ頃、老僧は歩みを止め、與太郎の手にこの度は小判二たひら握らせて、

僧『六ッの鐘が聞える迄は、是處に立てゐて、決して忘れても鐘の鳴る迄は、目の布を取つてはならんよ。宜いかい……若し取れば、汝はどんな災難に遇ふか知れない、――命もことに依ると危ひ――、其の積りで氣をお附け。

與太郎は小判戴きて、禮一言云はんと覗へども、闃として邊りゐ人の氣配もなし、手の裡には黃金――有か、確に冷！

（第四回）　不思議の疑惑

與太郎元より正直素朴の男なれば、老僧に言はれし儘に眼の蔽ひは取らず、今有りしことを繰り返に、雲晴るれば霧湧き、晝とあれば夜、千々に胸を碎けど、想像の山岐路多く、其れぞと思ふ道に出でず、只た不思議々々々に頭爬き亂されて、迷はトとすれば益々迷ふのみ、果ては自から考へ勞れて、手に受

し金の二ひらを右手左手に取り交し、或ひは目方を計り、又は二つ合せ拍子取りて打ち鳴らせば、子供らしきに自から腹を抱えて笑ふ。二足程は歩きて見れど、其の先は山か谷か、浮雲なしと胸を冷やし、又元の所に佇むに、足は棒の如く、筋張りて堪へ難し、倦みたり、立つたり、欠伸幾百度算へ盡し、凍る計りの引き明けの寒さに、嚔幾千度、鼻汁限りなく出でゝ、咽ひり〳〵と傷む。時の長き事常よりは二倍三倍、山寺の坊主の撞き忘れしかと怨めし。其の内東白むか、栖を後ろに烏の聲聞え、群がる羽音頭の上を翳て彼方に飛び行き、朝風一段と身に入みて振え止まらず。こは有難し夜は明けしと思へど、目無鳥のかなしさ、只だ耳を側立てゝ鐘の音を待つのみ。

遙かに距たりたる山寺の鐘の音、朝霧潜りて餘音空に長し。待ちに待ちたる身、布に手を掛けながら、捨鐘より一つ二つ三つと叮嚀に數へて、五つ六つと撞き切る時眼の蔽ひを取ば、四方ぱつと明るく、登り掛りし朝日に顔を射れて、暫時は眼も開けず。兩の掌に眼の霞を拭ひて見渡せば、此所見覺の小川の畔、細き流れ丶氷に閉ぢられて、下行く水の聲聞えねば、今迄はそれとも知らず、抑も何處を經て此處までば來たりしぞ、夢か幻か、幻か夢か、我身行しか、魂遊び出しか、此處に立つ我が身も、人やら我やら、氣の拔けし如く動きもせず、佇みて口閉づる事さへ知らず。腹鳴るに飢へたりと知りて、股きつと抓れば、痛し、此は慥に我が身と初めて知るほどなり。是の小流れを遡れば、我が家の背戸に出る路也、考ふれば考ふる程、僧の身の上、そも人か鬼か、何んとなく恐しく、後ろよりものに追はるゝ心地

して、足に任かせて我が家に歸りぬ。

妻子にはこの不思議胸に疊みて、毛筋程も聞かせず、好き仕事に儲けありとのみ云ひ聞かしたり。賤しき人の習ひ、持ち附けぬ金、——然も十日二十日と働かざれば得難き金、——三兩まで纔か二タ夜に手に入りたれば、俄かに登る槐門の榮え、心驕り氣奢りて、女房の喜ぶ顔、子供の嬉しと狂ふさまを肴として、酒を飮み物を喰らひ、十四五日過る頃には、一度燃え上りし火の、續く焚木なければ再び消えて、殘るは明き樽、魚の骨。

榮華は半月の夢と覺めて、其の後は以前に增して洗ふ如き貧しさ、前の如き泡沫錢も攫まねば、取りては食らひ、食ひては取り、與太郎一日樂をすれば、三人の小兒は飢に泣く。されば金も爍くると云ふ夏の日も、葉越しの風に夢を吹かする手枕の味ひは知ず、月も鐘も凍る如き冬の夜も、重ね衣して小半合に温まる幸はなし。入る金は直に出でゝ、鄕の業物水もたまらず。新らしき着物一枚着る餘りもあらねば、着たる衣は年々に破れて、肱も心地よく張ること出來ず、充分なる食も腹に入らねば體益々痩せて、この世からの餓鬼、いまだ人の門に立ちて、食を乞ふ程には至らずも、是れ等の伴侶に異なるなきぞ哀れ！

（第五回）不思議の俄長者

此頃は果か〳〵しき仕事もなく、牧の痩せ駒のごろりとして、草の軒端近く外の方を眺め居るに、立ち

止まる人あり。仰ぎ見れば此處ら邊りに家藏地面幾箇處と限りなく持つ富限者あれど、赤西屋、無理地主と仇名負はせられて、面の當りにては金の光りに旦那〳〵と持て囃さるれど、蔭には兎角舌數多く言はるゝ老爺なり。老爺はこの家の前に立ちて、主人の顏を己が茫々たる眉毛の下につく〳〵眺め、

老『いやはや聞たよりひどひ貧乏トやないか。

與『なんと云はれても仕方がありません、貧乏は人に云はれなくつても、自分から知つて居ますが、こいつどうものがれる事が出來ません。

老『さふ云へば話しが早い、おれの來たのは外でもないが、おまへも此の姿では仕事をするのは大喜びだろう、どうだい極く安く遣らないか。

與『旦那それは元よりのことです、此の江戸の同業の安い手間より、最少し安くつても宜しう御座い升。

老『それはおれの望む處だ……おや話すが、おれは大きな家を一軒持つて居るが、今の儘では誰れも借り手はなし、是の備置くのも殘念だし、手入れをして人に貸せば、今手元から出す修繕よりは、きつと儲かるだろうと思ふから、一つ手を入れたいと思ふのだ。然しおいらの事だから多分の金は出せない、此處が相談だて、どうだい、外の工手間よりぐつと安く遣れないかね。

與『よろしうございます……が、一つ拜見して御相談致しましやう。

與太郎は是の老爺の後に附て、貧乏の氣安さ、着替も晴着もなく、其の儘伴はれ、只ある家に至り見るに、瓦葺の門巖めしく、屋根に草茫々と生ふるも、礎堅たければ小動もせず、築き廻したる塗塀、濕吹に苔の生ゆれど土も落さず、中に入れば雜草丈高く體を埋む。玄關開きて入るに、箒の先何時當りしか知らねば、塵芥山をなし、人暫く住まねば、疊濕りて黴臭し。されども木口は總て稀ものなるか、斯程になれど雨露も凌げぬ程には至らず。數多の虛しき部屋坐敷を彼方此方と見行きて、一つの部屋に出でたり。あら不思議！指を折れば三年前の冬、しかも二タ夜、怪しの老僧に伴はれて來たりし時、見たりし部屋と其儘違はず。違はず！我が仕事迄なせし處なれば、間違ふ筈もなし、慥かに其の時の部屋。見れば柳の摸樣ある小襖も其儘！その時の老僧の顏の眼に浮び、折角忘れしと思ひし事の湧き出で丶、そゞろ身の毛のいよ立つに暫らくは寄りもせず、心緒百端亂れて麻も物かは。

與『旦那〳〵、私は餘程前是の處へ來て、仕事をした事があるやうに覺えます……。然し夢かまことか自分にも分りません……が、まあ一體前に此處の家を持て居た人は、どんな人なのですか』

老『是處か、是處は元慳貪邪見な坊主が住んでいた處だ。マア話せば長いが、其の坊主は出家にあるまじき人で、人はのめつて死ふが、自己さへ好ければよいと云ふ質よ。人の物は乃公のものと云はん計りに、何んとかかとか云つて取り上げたがる、だから隨分金は有ると云ふ話しだつた。もとより身寄親族はなく、誰にそれを遣るといふものも無いから、何んでも貯へは寺か何にかへ隱くして

あるだらうといふ評判……。處が此の坊主、二年ばかり前に流行病に取つ附かれて、三日と寢ずに死んで仕舞た、すると平生の事を知つている坊主や朋友が、殘つて居る金を取らうと思つて集つて來たが、思ひの外のものは金で、其の人達は方々探したが、只だなめし革の文庫の中に、少し計りの金が有つた切り、外には鐚一文も見當らないといふ話しだつたから、初から無かつたのか、それでなければ梵妻でもあつて、それに注ぎ込んだのだらうと云ふ話よ。坊主の死んだので、第一損をしたのは乃公さ、坊主ひどひ奴で、住み初めてから此處の家賃をいくら催促しても拂はない、乃公も忌々しいから、今に恐れながらと持ち出さうと思つて居るうち、脆く死だものだから、死人を相手に喧嘩も出來ず、遂ひそれなりに泣き寐入りよ。まあそれならいゝけれど、泣き面に蜂とやらで、誰が云ひ出した言か知らないが、其の坊主の寐て居た居間で、金を算へる音が聞えるとか、又は呻る聲がするの、泣き聲が聞えるから、何んでも坊主の執念が殘つて居るに違ひない……などと一人が云ひ出すと、乃公は雨の降る夜、あの家の前で青褪た坊主に出遇つたとか、家根の上を火の玉が轉がつたとか云ひ出して、虚言か誠か、是んな話しが嵩じて、とう〳〵是の家へ化物家敷だと名が附たものだから、それからといふものは、疑心暗鬼で、折角借り手が附ても、三日と住むものは無く、皆んな逃げ出してしまひ、とう〳〵是んなに住み荒らしてしまつた譯さ。

與『ナル程ソウ云ふ譯なのですか……。何んと御相談ですが是の家によい借り手の附まで、無代で私

に貸して下さいませんか、さうして下されば、手間賃も何にもいらないから、ぽつ〳〵修繕ひをします。さうすれば第一旦那も金を出さずに是の家が元の通りになる、又私が是處に無事に住んでいれば、成る程化物も出ないと前の評判も消える、それに私の爲にも、家賃を出さずに住つて居られると、三方徳の行く話ですが……どうです、私も男だ、よし又化物がほんとうに出た處が、一たん受合つたからには、迯るなんぞといふことはしません……貧乏人だからと云つて、化物が洒落て、金の袋に化けて來れば、それこそわたしは大福長者となります。アッハヽヽヽ、御不承知ですか、どうです。

篤實無二の與太郎が眞面目に云ひ出だせば、懐から金も出さずに、この家奇麗となるといふに惚れて、忽ち相談まとまるに、與太郎は翌日とも云はず、其の日家族を引き連れて、是の家へ移りて見れば、今迄の犬小屋に比べて左程違ひなき家に居るよりは、荒れたれども金殿玉樓、貧なれども玉を爨ぐ思ひに、與太郎化物屋敷の殿と成り濟しぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

一年經る程には、是の家見違へる如く華々しく、貴人の住み給ふも恥かしからず、化物屋敷の名化物と共もに跡なく消えて、死したる慳貪無慈悲の老僧が部屋に夜每聞えしと云ふ、金算ふる音も、今は白晝與太郎の懐ろに響く。

元より一朝の富、そは云はぬは云ふに增穗の薄、人知らぬ罪ほろぼしの爲めとて、寺院に祠堂の料とし、修繕の料とし、或ひは何と名附け彼と稱へて、納めし金少なからず。只俄に長者となりし譯は、そが身死するまで子にも孫にも口を甜みけるとぞ。

◉狂蝴蝶

（第一）

此處何處の二階にやありけん、近き頃番匠の顔を疼ませ、内匠の考へを凝らして、墨繩の直もわざと曲げて床柱となし、曲尺の曲も直くして長押となして築き上げたる一と間、美しさ王宮に比ぶるの觀はなしとも、亦僞似文人造りの阿房めきたる箇處は兎の毛程もなし。三五の月も見る人の心にて、賤が家に伏す身と覺ゆべく、霏々と六葩を散らす雪も、簾をかゝぐる心あらば其觀あり。茶を煎ずれば魚眼生ずるの句も味ふべく、茶を點ずれば千の奥義も覗ふへき造りざま、この家の主人の顔拜まぬ迄も、此一間にて風流は早や談ぜらるべし。

南西の方に細椽を取りて、杉の面取りの棧に黒邊杉の腰障子を開けば、講武所とか稱ふる原の目の下に青き蓆を布き、少し仰げば著作堂の住居せしと聞く飯台も懐かしく、大都を名乘る河の水、うねる松が枝の間にきらめき、船唄艫拍子に腸は洗はれずも、滊笛の聲時々に騒がし。後ろは駿台を脊負ひて冬暖かく夏冷しく、東の方に小窓開けて、北には押入れ、芭蕉布に雪輪散らしの珍らかなり。眞西に一間の床の間、柱は百日紅の曲も直さず、欅一枚の床板鏡に似て光る。文晁が夏不二の一軸は、畫學齋の落欵面白ふ、梨子地蒔繪の亂れ箱一箇違ひ棚を押えて、小倉の山莊も懐かしふ覺ゆ。壁は黒く塗られて、蠅も糞を掛くるに遠慮すべく、天井の糸目杉、木目數ふれば目も眩めくべし。床の花は何？交趾の形好き瓶に著莪二三輪、鳴かぬ時鳥の待ち詫し。

四方の障子も窓も明け放ちて、駿台の木茂みより來るそよ風に、眞晝前のきらめく日の光を消させて、連れ立つ比翼の鴛鴦一雙。

女は年の頃二十二三、數寄屋の紺飛白衣に、緋縮緬の襦袢を薄紅ひに透し、繻珍の帶をキチンと結びて絹縮みの帶上げ、白茶地に藤紫の薄隈取りて柳に蝙蝠の形ある半襟は、時候柄冷し氣なり。色は白々と富士の雪を耻かしめ、束髪の亂れ髮二三本そよ風に靡く。眼淵小刀を以て深く筋付しに似て際立ち、眼は明らかに天眞の美を湛え、鼻筋玉山の人形程に通りて、口は露含む未開紅にも似たり。兩つの頰薄う紅隈取られて、指先に押せし如き笑窪、愛嬌の源い是れぞかし。椽の柱に凭れて遠き景色に見入る

姿、腰細々と美術家の摸型よも外には。

欄干に輕ふ腰預けて、同じ景色に眼を凝らす若もの、是れも年は同じ程の何れ兄やら妹やら、薩摩絣飛白の單衣憎らしき迄に白き肌に映させ、白縮の素でき帶を大樣にくる〳〵と巻き附け、團扇時々に動かして胸の邊を煽ぐ。水に濡れたる烏とも見迷ふ黑髮は、少し長めに苅らせて左の方へ寄せて梳り、眉は濃く鼻勃然と高く、口元固くしまりて無益には開きし事もなささうなり。勉強の餘波は眼に及ぼしてか、近眼鏡掛けたる有樣のかへつて愛嬌をぞ添ふ。この男肥肉少し瘦せ過ぎしは、神經の質にぞあらんすらん。二人押し並べて見たる處は、三月の小さ內裏を寫したるに似て、花心に宿る雙蝴蝶、時ならぬ春は此處にも優々たり。

二人とも同じ向きを詠めて餘念もなかりしが、女はちよつと顧り向きて、男の顏を流し目に覗き、

『河田さん好い景色では御座いませんか。

『見附けて居るせいですか、さうも思ひません。

男は女の顏を下よりつく〳〵と見上ぐれば、少し顏をそむけて他處を見るも、秋波は倘寄せて返さす、

『御普請が結搆ですから、倘見榮えが致します。

『さう御世辭を仰有つては何か奢らなくつてはなりますまい。

話しの糸口此處に切れて、無言の境に落つ。

抑も清淨無垢の心を持て人に對へば、美も醜も、老も若きも、同じ世に生れ來し男なり女なり。若き男の若き女と語り合ふことの、自然に耻かしきは、何ものか心に蟠るあるべし。若し無きとすれば、老女と語り老爺と語りても耻かしからぬことは、若き男と語るも耻かしからざるべきに、それなきは全く曲者のあるなるべし。此の二人も亦兎角に言葉にごり勝ちに、時には互に知らせじと吐息を密と漏らすれは、此處にも曲者のあるか。そも二人の胸の中には何の潜むぞ、戀なり。互ひに心ありて目も物は言へど、口は却つて閉ざして知らぬ振りの憎さ、この戀導く丸木橋もなく、はしたなく云ひ出して、下げすまれんと思ふ心の、彼にも是にもあれば、話せば答ふるのみ、餘の事には口の自由にならで、話の接穗を己が心から破る初心のあどなさ。戀は恐ろしきものゝ中に、耻かしく樂しきものと思ふこそ眞の價値なり。されど戀の一端氣ざしては其儘には消えず、何ものにか依りて必らず顯はるゝその好き場合は、人も吾れも知らず、知り玉ふはそれ出雲の神のみ。

能く吹き拔くとはいへど、夏の眞晝近なれば、肌汗にしと〳〵濡るゝに、女は堪り兼ねて男に向ひ、

『申兼ねましたが、貴君其の御團扇を少し拜借な。

男は胸の邊り煽ぐ手を鳥渡止め、殊更惜しさうに團扇を詠めて、

『是れですか……お暑いの、お暑ければ煽いで上げませう。

『どう致しまして、罰が當ります、おほゝゝゝゝ。

『では御貸し申悪いが、貴女の事ですから、御貸し申ませう……はい。

女は腰を龜めて右手を出せば、此方は團扇持つ手を後ろに隱して、微笑、

『まあお人の悪い。

『でも大事な團扇ですもの、さあ今度は、ほんとうに上げませう。

『いえ又おだましなさるのですから、もう宜しう御座い升。

『今度はほんとです。

『きつと。

『ゑゝ。　右手の團扇を左手に持ち替へて。

『はい。　女は前に戀りて恐る〳〵密と出す手を、男は右の手に忽然ゑつかり握りて、

『おみやさん。　『はい。

互に見合せし顏を左右に避けて、酒得呑ぬ人の無理に強られて、二つ三つ猪口重ねし程に赤らみけり。男も怯けし身の、今ぞ却て膽の据り、握る手首に力を籠め、情知れとの一と握り、女の胸は續け打つ鐘の響を漏らす動悸、耳は燒け咽喉は乾く。情に答へぬも無情、元より心に〆めし男の誘ふなれは、下行水の通ひ路は、今この時と思へど女氣、只上氣のみして、我は此處にあれど心は何處に逍遙ぞ、心は此處にあれど我身は何處にあるか、前後暗く眼は翳み、只わく〳〵として體の打ち振ふを凝乎と堪へ、目

を張り心を定め、同しく力を入れて握り返す手首、見下ろす顔、見上る顔、情兒ハ手と手の連理の枝に戯むれて〆居らん。
雲何處より湧きしか、風何處より吹き荒るか、降り來る雨ハ棟も折れ梁も裂け、閃めく電、轟く雷、今迄ありと見し高樓は陽炎の跡なく、頭の上に鳴り渡る雷の音恐ろしく、女ハ男の手を無理に引きて、雲を踏み靄を破りて走り出せば、道は銀座の大通りを見るやうに廣く濶かに、人通りさへ織るか如し。と見る中に出で來る山又山の九十九折。鳥路の羊腸たるに眼くらみ魂消え、辿る足に力を込め、大汗になりて登り果れば、一と目に都をも見下す景色、其の美しさ口にハものかハ。男と共にあれハ何處、これハ何處と、指さして樂しむと思ふ間に如何したるや、羽もなく翼も持たぬ身のふハ／＼と天に登る。餘り恐ろしきに身を縮むれば、動と落ちしハ地の上なり。雪ハ脚を埋め、又身の丈さへ立たぬ處もあり、日に解けしハ枯木の枝に氷垂となりて、鋭き白刃を植えたり。美しと寒さを忘るゝ後ろに、恐ろしき呻り聲の聞ゆるに振り向けば、牛の如き大熊紅流す口を開きて、鼻息荒く此方へ走り來る。あはや今は絶體絶命、馳せ出さんとすれば雪に腰までも埋れて、歩行く事は扨置き身動きさへも出來す。熊は次第／＼に近づきて今一分も過ぎなば、五體は八つ裂き、膽も魂も身に添はす、今は女なからも一生懸命、命限りの力を出して、男の手を握りし儘に雪の外へ飛びながら身を投げ出せば、幾千仭とも知らぬ山の上より、俵を轉ばすやうにころ／＼と轉げて、谷の底へ落るまでの長さ、早やさ、その心持は段々にて

の身消え行くやうなり。見れば下ば谷、しかも石をも轉ばす急流の中へざんぶと落たり。おみやあなやと思へば、是れ夢なりき、身は机に凭れて、小春の暖かき障子を打ち叩く虻を見詰め、遂心持ち能くなりて、我れ知らず夢に入りしなり。手には物書かん爲めに取りし筆一本、落しもせず握りて、机の上には地理書一册、明日の教授の下調べに、今讀み掛けし北海道の部なり。身は夢に襲はれて汗襦袢を濡らし、胸先を押ゆれば動悸の餘波まだ騷がしかり。溜息長く一つ吐ひて、獨り笑みながら筆投げ捨て、机の抽斗を開けて取り出したる一葉の寫眞に、寫し出す一人の年若き紳士は、洋服出立ちに眼鏡を掛けたり。是れぞ夢中の男、魂の通ふ人、裏を返せば水莖の跡も薄きを忌むか、墨も濃く香を籠めて然もやさしく、

『お宮さまへ河田機一郎』

(第貳)

おみや、姓を竹屋と云ひて、積み重ぬる程の富はなくも、二年三年遊びたりとも口糊に困しむ家にてはなし。父はおみやが被髮やう〳〵に取り上げて、緋鹿の子の切れ端お煙草盆に掛る頃、野末に宿る露の朝霜と消えぬ。家はそれより先づ瓦解して、親子離れ〴〵に親族に寄食るは常なるに、おみやの母は男にも勝りて、三人の女子を抱えて傾く大廈を一木のしつかと踏み止め、小動ぎもさせず、人の後指にも賞ものとなりて、あつぱれ孟子の母親と肩を並べぬ。その身は世話する人ありて、日々に

ある役所めきし處の女工の取締に雇はれ、男も及ばぬ腰辨當に、吾妻下駄の齒を減らし、家に歸へれば三人の娘を膝元に呼びて、晝の學校の復習をさせ、影薄き行燈の下に操針の運びいそがしく、男親持ちし娘子にも負けさせぬ春着の色撰み、夏着の縞好み、女の手一つにては苦しみに泣くことはあれど、子供達には何時も好い顔しての丹誠。時鳥の記念育つる鶯の心はいかに、あの方の眞似は出來ずと、下女が井戸端の話し草に乘せれば、ある時はお引きづりの細君へ夫の小言の能き種となる、兎に角に今の世には稀れものとの噂。

おみやに姉二人、その身は末の子と生れぬ。三人とも母親の教訓小さき腸にまで染み通りて、物心附く頃よりは、父君の在さず、母の手一つに育てたれば、かまへて男親なき子は甘やかして我儘ものぞと、世間の口端に掛らぬやうと、夜毎の寐物語耳の底に沈めば、互に物爭ひもせず、筒井筒の睦しく、妹よかれ姉よかれと助け合ひて、あつぱれ三人とも立派の女子と育ちぬ。母親段々に寄る年波に勤もものの憂く、第一の娘は最早年頃になれば、これまで苦を嘗め辛きに堪へし胸を今こそ休めんと、勤を辭して姉に聟をば取り、樂隱居とは呼ばれき。

男氣なき家に姉の聟出來しことなれは、礎是れより堅固く、川添の堤風波にも破れず、母親の重荷先づ脊より下りて、妹二人の肩味も潤やかになれり。聟は至極に氣順しき質とて、母親を實母のやうに、妹二人も血を分けしと同然、此の節の女子は學問もなくてはと、女大學今川の舊きを加味して、一本の腕

に生み出して學問まで爲すれば、難有過ぎたお兄い樣と、妹達の腹の中に合す兩手は形にも顯はれ、エデンの樂しき園も、華胥の樂しき國も、竹尾の家にはなんの〳〵。兄の誠に激まされて、雨の日風の晝も、紫の服紗小脇きを離さず、復習の咿唔の聲、夜深かまで聞えたる効能は、美ごと二人ながら學校の椅子二番目とは下らず、規定の學科卒業といふ、譽れの溢るゝ斗りなる紙一枚手に握りて學校を退きぬ。それより緣ありて次の姉は、長崎とかに在勤する身分高き家に、奥樣と呼ばるゝ身となりき。人に敎ゆる程の學問ある身なれば、四時の外に手紙度々に送り越せど、いやな事とては一筆もなく、いつも〳〵樂しく暮らす話しのみ、女子の德もさこそと知られぬ。末のおみやは、兄の厄介になるも氣の毒、且つはいま迄の恩もあれば、是れよりは兄の手助けにならずとも、せめては己れの喰へる丈け、または母親の小遣ひ斗りにても、緣あらん迄はと山の手の女子の小學校に人を敎ゆる身となり、是れも亦醜しき聲さへ外の面には漏れず。三人の姉妹三人ながら美しく、兼ねては點の打ち處もなく生ひ育ちたれば母親の鼻益々高く、近所の評判にいよ〳〵賞めものとなりぬ。

河田機一郎の身の上は、さまでの變遷りはなし。父親はもと陸軍の會計に頭立ちしものにて、一時は時めきしも、寄する年波は門松潛ぐる度に增して、人間の定まる年の數も過ぐるに、いつまで身を苦しめんも心苦しく、此の頃は健康なりと自慢せし體の少しづゝ病氣も覺ゆれば、至尊に盡す誠も最早

此處までと知るに、四五年前に骸骨を乞ふて致仕の身となりぬ。されど歸去來の辭を慕ひ、門前三逕荒れて、松菊猶ほ存する田舍へ引き籠り、自分のみ氣を散じて、子供達の勉强盛りを手離すも親といふ字に悖るぞと思ひ、風雅大悟は深山蕪村にのみは濟まず、塵中に悟の開けぬ事もなしと心一つに定めて、神田の猿樂町に、節なしの檜門をこぢんまりと搆へ、家居濶からず狹からず建なして、養老の根城と託み、子供の脊丈延すと、庭の草木の霜除の取り外しを身の勤め、春の宵の寐む氣ざましには、黑白の石を握り、時雨板庇に竦々と音を立つる比には、爐の釜の松風を撫で、千古の一軸には落欵の善惡を評し、古器物の艶に五十年百年を指して、當らずといふこともなく、耳は浮世に隔てなけれど、風流の極粹を壓えて、心中白地に一塵の横はることもなし。

機一郎は兄一人弟一人妹三人を持てり。兄なる人は身體あまり壯健ならずして、過る二三年前、心臟とか云ふ病に盡きぬ天命を縮められ、兩親弟どもの血の涙に包まれ、無常の風を案内に北邙の烟を跡に殘し、佛壇の白木に居士名附けられ終りぬ。己れ兄に代りて、兩親妹弟を引き受くる大切の身となりしに、機一郎も知らず〳〵に勵まされ、元より才は溢るゝ斗り、學も之れに伴へば、出來榮えも衆くの生徒に一と際頭を出し、教員も先づ難問は機一郎に問ふ傾きあり。優等生の首坐にありて、横濱商業校に名を轟し、來春は卒業證書手に握りて、あはれ商業社會に目覺しき働すらんと、人も云へば身も許して、彼の岸に至る用意怠らず。元よりおみやは機一郎とは舊き學校友達なり、機一郎石盤に姉様書きて見す

れば、おみや紙の鶴折りて機一郎に贈る、運動場の諍ひに、機一郎澁面作れば、おみやも目の邊を赤うし、おみや友達の邪見に遇へば、機一郎何時も慰めの位置に立つ。蟠りなき無心の子供の胸は、難行苦行に鍛え研ぎし尊き僧よりも淨らかに、佛菩薩も遠慮なく宿借り給はん。

戀といふ曲者、いまだ芽も出さぬ內に、互に愛すといふ、是れ既に心の畑に戀の種を伏せしなり。いまだこの戀芽も張らず土も起きぬに、朋友に相合傘を書るれば、その譯は何の爲めぞといふことも知らずに、只だ二人とも顔赤うせしこと度々あり。其の後家の移轉せし爲め、おみや此の學校には通はずなりて、機一郎も是處ぞ子供の無心、別に中よき朋友の出來て、忘るゝとはなくおみやの事などは、心に跡なくなりぬ。

この二三年舊誼を暖むるとかの主意にて、同窓會といふものあちらこちらに起りて、同じ友の世に出でゝ、今は髯附けし人、または蝶々髷の娘の子持となりし人など寄り集ひ、教師に惡戯して叱られ、黑板の前に一時間立せられたることなどを語り合ふ事、一時の流行のやうなりし。機一郎の通ひし校にも此事起りて、校友會とか名附け、春秋に大會二度、月々に小會を開く事となりぬ。事は敢なく運びて、いざや第一會を開きしその日、緣の糸の細々と切れもせず、出遇ひしはおみやなり。互に昔しの話しの胸にあれば、遇ひ見ては一々に其の時の行狀浮び來りて、人知らぬ事に顔紅ひを散らすも可笑し。今は昔のおみやにもあらず、無心の機一郎にもあらず、一箇の男となり女となりたれば、見合す顔、立派なる

男と為り給へり、美くしさ此れ程とハ思ハぬにと相互ひに心に譽めて、昔しの話し殊更に親し氣なり。おみやは二十三、機一郎ハ二十四、十二三年の間逢ハぬ間に、戀の茅は早や幹となり、枝さへも生ひ茂げるべし。其の日ハ初々し氣に別れても、胸にハ寫す面影風姿、この戀神かけて遂げさせ給へ。

それよりなか〳〵に親しくなり、問ひ訪はれの絶えず、二人ハ戀の奴となりて、今日逢ハヾ試みん、此次の話しにハほのめかさんと思ひ思へど、棹なき船は思ふ處へ行かず、互ひに初心の心弱く、我れにハ確にこの戀叶ふと見ゆれど、若しや己惚れかとの弱味心に有れば、まだ火も附けぬ炙のいやな心持と同じく、それも皮切濟めば、なんのと思へど、若し云ひ出して恥かくことハなきか、それのみ心配になりて、出掛けし言葉を咽喉に殺ろす事度々なり。いつも別れた跡で殘念がれど、逢ふた時には胸先づ轟ろきて、言ハずに仕舞ふ云ひ甲斐なさ。おみやの方よりハ度々歌など讀みて、直し給ハれと眞面目に出すを、跡にて讀めば嬉し沖の鮑にてもなし、物に事に譬へて、慕ふ迄の確かなれど、女子丈けに口にてハ少とも云ハず。云ハぬ丈けに若しやと機一郎も疑がふ。解けてハ氷る汀の氷、出雲の神さまも扨世話の燒けた中なり。

逢ひ見んの心互に重なりて、機一郎ハ妹の英學教授とおみやを託む事に取り繕ろひぬ。機一郎ハ横濱に寄宿して學校に通ふ身なれど、この頃は暑中休業とて日々に家に在れば、愛の女神を拜まぬ日も

なし。度重なれば遠慮も退きて、互に馴れ染むれば、昔しの學校時分に歸り、戯談の一つ二つも云ひかはすこともあり。ある日の事二階に上りて、得難き場合ありしに機一郎心むらく〳〵として、團扇受取らんと出すおみやの手を握れば、なんの心配程にてもなし、この花今は我が詠めとなりぬ。

（第三）

夢は不思議なもの！　生れてから初めて嬉しと思ひし三年前の事を今有りし如くありく〳〵と覺えては、今更に其時の有樣に胸先動く、情籠めて贈られし命より二番目の大事の寫眞、机の抽斗よりそつと出して見れば、何時もながら憎らしき迄に慕はしき御姿、萬の事心を離れて、右の掌に輕く戴せ、左りの手に轟く胸先を壓えて、少時茫然、小聲にあなたと呼んで微笑む眼には無量の情あり。其の身は縛られし戀の八重繩、扨も戀は盲目なりとは、よく穿ちし言葉よ。

二間程隔て丶、おみや〳〵と呼ふ母の聲に、あたふたと寫眞を隱して、音せぬ樣に抽斗を閉めれば、途端に又おみやと呼ぶ。片膝立て丶アイと返事し、身を起しながら錠を下して出で行きぬ。

樂しき竹尾の家も、幸のみには止らす、不斗災ひに遇ひぬ、二週間程前、長崎なる聟より電報屆きたるに、取る手おそしと見れは、妻病氣危篤とあり。寐耳に水！　第一に驚きしは母親・聟に相談もあくせくとして、其の日直に便船に乘りて長崎へと赴きしも、六日に見る菖蒲の口惜しく、いとしき娘は十日の菊の佛となりし次ぎの日なり。流石氣丈の母親だけありて、歎きにくづをれもせず、野邊送りも聟を助

けて立派に濟ませ、一と雫の涙を新墓に手向けて、昨日東京へ歸り、何かの相談にてもあるか、今日ハ親しく力と託む親類を集めて、先程より客間にあり。

何心なくおみやハ座敷に入れば、親類のもの二三人程よく座に居流れ、兄姉それに母親も加はりて事あり氣に見ゆるに、何やら物改まりて、母親の何時の顔も恐ろしく覺え、程よく客に時候の挨拶して、云ひ付かる用を目にて伺へば、母親は長烟管を手に持ちて。

『おみや……。』何事で今日は聲迄も常にあらで、腸に響くやうな。

『はい。』といふ返事を聞流して、煙草を輪に吹き、

『今日はお前の心を聞ひて見やうと思つて……御親類方のお出でを願ひ、先刻皆樣のお胸を伺つたら、至極よからうとおつしやるし。するから……、私斗かりの言ふ事と思はないで、御親類御一同のおつしやる言を思つて聞ひてお呉れ。

先づ大盤石は、おみやの幼いげな身體の上に乘せ掛けられぬ。何んな大事の起りしか、身に及ぶ事なら。それに少しは胸に當ることもありと、おみや總身に力を入れて、乘地になりて見すれば、母親は烟草をはたいて、右の手を帶の間に挾み、體眞直に胸少し突き出し、

『外の事でもない、お前の身の定まる事……縁談の話したが……。』

先づ胸にひしと當る縁話し、流石は乙女氣の恥しく、入れし力瘤も我れ知らずこの一と言に解けて、見

上げたる顔を俯向ければ、白薔薇の簪髪を辷り、含みし香水の匂ひを立てゝ膝の上に落つ。幸ひと手に簪を持ちて、珍らし氣に葩を數へれば、

『姉さんがこの間死んだ斗りで、こんな事を云ひ出すのも變んな譯だが、ね、宜い事は早く極めるが能い、尤もお盃の事なぞは今でなくつてもよい、いづれ取り極め丈けしといて……。先は兄さんの處長崎の兄さんの處だよ。

『ゑ、兄さん……。

頼むまじき事ながら、今迄は若しやと頼みし事の仇矢の只一筋に的を外れて、思ひの外の君へ緣話し。過る日彼の君に遇ひ參らせし時云ひ給ふは、この身年も明くれば目出度卒業とならんに、今より妻定めせんも生賢しく氣には聞こえまじ。言ひ難き事ながら、君の爲め我が爲めにこの心鬼となして、父母に君貰ふて呉れと云ひ出すべし。近き内はに我が方の使ひ、君の家に至れば其心して待ち玉へと、心底嬉しき話し戀しき君の脣より漏れて、其時の我が身は烈火に解くる鉛の思ひ、嬉し〳〵に胸を突かれて、直に答とて出ぬを、彼の君言葉を續けて、お返詞のなきはいやか、今となりてかぶり振り玉ふは、この男一疋を焦れて死ねとの仕打、怨めし〳〵。知らざりし女は恐ろしきもの！ その眼その口にこの哀れな腸を蕩かして、いざといふ時に土俵の外へ投げ出すとは！ 是よりは明日にも頭圓めて、一生女といふ字を心に畫かず、清淨無垢に世を終ん。今迄の勉強は誰が爲め！ 來る春は卒業して、こう〳〵と

心に巧みし事は誰が爲め！　秋の空は頼むまじきものと立ち給ふ袂緊かと取りて、眼に溢るゝ涙に君の姿は憎くや見えず、言葉切れ〴〵に言ひ譯して、只だ嬉れしさに返事もせず、私しの惡さは許し給へ、嬉しふお人を待ち升と答ふれば、彼の君以前の座に返りて、氣の毒氣にハンケチ出して、涙ふき給へ、其心は知り拔きぬ、今云ふたはほんの嘘、嘘！　それ鳥が笑ふて居るに、大事の奥樣はそう涙脆さぬもの、餘り喧嘩が過ぎて、今更謝罪やうもなし、二三日中に行く使の人を謝罪の種とせんに、機嫌直して歸りて待ち給へといはるゝに、思はず笑ひを漏せば、今初めて海棠の雨に濡れし美しさを知りぬと冷笑されて、羞かしく別れて歸れば、使の人の來るを一日三年の思ひ、もし學校の留守に來給ひしか、きつと左樣なり。母さまはなぜ話して下さらぬ、今日の樣子は必然其の事、河田樣へ行くかとの尋問と思ひて、力瘤を入れて潔ぎよく參りますと答へんとすれば、案外な！　長崎の兄さんの處へ……情なし、先刻見し夢の誠になりて、今この場の事は夢になれ。

母親は前の嚴固しき姿を崩づして、にこ〳〵と笑ひ、横からおみやの顔を覗き込みて、

『お前も知つて居る通り、兄さんはあの通り氣もやさしく、柔順つて、道樂などは塵ほどもなさらぬ質、一晩でも他處に寢泊りをした事はなく、よく氣が附ひて、始終優さしくして下さると、姉さんから度々手紙て云つて來たらう……それにお前顔形ちも奇麗だし、學問はあり地位も高し、實に過ぎものではないか。この間私しの行つた時も、どんなに優しくして呉れたらう……私は家にはあ

の通り優しい兄さんがあるし、外にも優しい兄さんがあるし、どんなに嬉しいか知れない。他處の方は芝居だとか花見だとか、よくお出歩行きなさるが、私しは家に居た方が餘程樂しみさ。まあそれは兎も角も、この間長崎で、姉さんの柩を出したその晩、兄さんとさし向ひになつて、つく〴〵お話しをしたが、兄さんの云ふのには……。

と襦袢の袖を出して霞む目をそつとぬぐひ、聲少し曇らせて、

『お母さん、私しはほんとによい家内を持ちまして……、私の世話は一から十迄、人手にかけずして呉れ、私に心持のよくない事を覺させたことは、此の年月一度も御座りません。それですから外で勤めをして歸つて來ても、その苦しみは直に忘れて仕舞ひ升位で、私は今の今迄一生このやうに樂しく暮せる事と、悦んで居りました。早く子でも持つて、あなたの喜ぶお顔でも見たいと、思つて居りましたに……最う申ますまい。こんな情けない事は御座いません、あのやうな妻は尋ねても、必定ありますまい……ありません。私は是れから獨身で暮します……。

と膝の上に滴る一と雫、鼻つまらせて溜息吐くのみ。

『と云ふだらう、其時はあゝ優さしい人だ、姉さんもあの世で定めし悦んで居るだらうと、腹の中て手を合して兄さんを拜みました。自分では獨身で暮らすといふものゝ、まだ若い身空、是れからと云ふ處で可愛さうに獨り身でも置かれないから、お前の云ふのは誠に難有い、娘も悦んで居ませ

う、さういふ心持ちなら娘に對しても、私しが一人お世話しないでは濟まないと、段々云つて見たが、中々聞かないで、あなたには誠に濟ませんが、最早決心をしたからと、どうしても思ひ返して呉ないのさ。此處で私しが思ひ附ゐたのは、おみや、お前の事、氣も知れない人の處へ遣ふより、兄さんの處へ遣たらお前も居づらくあるまいし、又兄さんも姉さんの妹だと思へば、外から貰つたやうでもあるまいと思つたから、其咄しをすると、兄さんも大變に喜んで、どうか是非遣來して貰いたい、それは私の望む處だ、當人がなんと云ふか知らないが、若しいやだと云つたら妹として一處に暮して居たい、それは死んだ家内が生きたと同然だと大變に喜んで、成丈け早いがよいと云ふから、私しも嬉しく、おみやは極く素直な質で、是迄私しの云ふ言に逆ふた事はなし、必然承知するに相違ありませんから、歸つたら早速差し上げませうと云つて歸つて來て、今日お前にそれを云ふ序、先づ御親類方に御相談申たら、至極宜しいと皆おつしやるし、私は元より兄さんが可愛さうだから、慰めて上たい。それに兄さんは、何時迄も聟と云つて私しの死水を取つて貰ふ積りだし……これでお前が片附けば、私しもお父さんにあの世でお目に懸つても、譽られる積りだから、私の心配を休ませてお呉れ……、お前の事だから否やはあるまいね。

あるまいねとの言葉の切れは、必らず長崎へ行けと云ふ謎。いかに親子の間にても、餘りな極め方、長崎の兄さんは柔順しいお方には違ひない、學問もあり、才智もあり。然し河田さまもやわか劣りは仕給

はじ。人の心は相縁奇縁、命迄もと思ふはあの君一人、お母さんも亦常にも似合はず、私の心を聞きもなさらで、獨り極めの呑み込み顔。なぜ初めに私の心を聞ゐては下さらぬ。行けと云ひ給ふは、お母さんのお心では無理ならぬ事ながら、私には無理！　もつたいないがお怨しい。

先きには兄の話しに貰ひ泣きをさせられたれど、今は我が身に纏るゝ怨めしの涙、娘心の腹立しさに答へもせず、黎明の櫻、朝露に頭重たげなり。定めし行つて呉れるだらうねへとは、知り給はぬか、我が身には大事の君あり、この命は任せてあるものを、どうしても長崎へ行くは嫌なり。お斷りせうか、何故いやと聞かれたら、もう小供でもなき身の、何故でもとは云へず、いつそ打ち明して。いや今日の母さまの言葉振り、思ひ入つて居たまへば、生な中な事云ひだして、戀しい君に離れねばならぬ事になりはせぬか。最う少し先に知れゝば、云ひ分けは考へて置うもの、足元より立つ鳥の姿は、見極めの附かぬもの。と胸は綾糸の千々に亂れて、深き霧の中に行く舟の碇を下ろす先は何處か。咄嗟の間に浮ぶ計は吾れながら好き案事、それ〳〵それよ、今は只一寸逃れ、其中にあの君の力借りてと、

『一生に一度の……一度の事で御座い升から、よく考へまして……。

賢こう云ひまぎらさんとすれど、母親は親丈け其手に乘らず、

『何だね小供ではあるまいし、考へるなどとは、氣の知れない人に云ふ事ゝやないか、お前年を勘定して御覽、娘盛りは濟んで居るよ、我儘をいつてる年ではないよ。

美事計を破ぶられて、落付き掛けし胸の又跳り出すに、姉迄が言葉を添へて、
『おみやさん、悪い事は言はないから、行く事とお極めな、それとも否なの。
家の兄、親類迄も皆母の味方、口々に行けと云ひて、行くなといふものは一人もなし。孤城落日の今は凭りすがる枝もなく、いや／＼と腹の中には幾度も繰り返せど、扨口にとては出です、何故と聞かれた時の云ひ解けは、道闇うして導く灯もなし。母はせまる、兄姉は勧める、寄りたかつていぢめると思はれて、今日斗りは常に拜む兄迄も憎らし。心で云ひたる不厭といふ言の葉の、我れ知らす聲に出で丶、はつと氣の附けば、素早くも出ぬ咳に雜らせて、
『私は……。　と跡は切れて咽喉に消ゆるを、
『行つて呉れるかい。
と母の根問ひ、辛し、哀し、怨めし！　いなやる心の察しても見えさうなもの、
『默つて居るのは承知なのかい。
と云はれては捨て置き難し、あの君への操は此處と、優しき心も亂れて後先の考へもなく、
『私はどうも行きたく……御座いません。
と一息に云ひ切りて覗へば、座に居る人は互に顏見合せて、是れも案外といふ樣。母親は、
『何故行きたくないの。

果してその問ひ、云ひ解けはなし、たゞあの君への操立。然樣とつい云つて仕舞ば、譯もなきなれど、云つてよいやらわるいやら、この苦みは骨も碎け、節々へ注ぐ鉛の熱湯、五臟は沸え六腑は處を替へ、肉動きて堪へ難し、救はせ給へ神！・この身を神の御側へ呼び取り給え！　慕はしきは死のみ、浮世はほんに可厭なり、可厭なり。

（第四）

塵芥重なれば堰の口の水はけ悪く、云へ〱と攻めかけらるれば、尚更言葉は出ぬもの、涙のみ先に立ちてハンケチも絞る斗り。こうなれば我身に我身が自由にならで、只譯もなく哀しく、座る體の自から支ゑ難くて、疊の上に俯伏になり、いや〱と口の中に繰返すのみ、霜夜の蟋蟀枯草を抓かみて聲も得立てず。母親は穩やかな調子に、慰めるやうに、

『小供ではなし、譯もなく可厭では、お斷りにも困りますよ。私の心も少しは察してお呉れでも宜いぢやないか、お父樣がお死亡なすてからは、三人の小兒を抱えて、ほんとうに途方に暮れて仕舞つたが、いや〱斯うして居る處ではない、お父樣の御記念の子だから、三人とも立派に仕上げて、竹尾の家の名を起さなければならないと氣が付ひたから、知つての通り人のお世話で、あのやうな處に通つて、僅か斗りの月給を戴き――それもお父樣のお殘しのものへ、手をつけまいと思つて――まあ如何やら斯うやら、人に後ろ指も差されず、悪い噂も立てられず、人並に三人とも育て……そ

れハお前方が、利口だつたのだらうが、私の心配も一と通でハなかつた。今ハ家にハ優しい兄さんが出來、長崎にも物固い兄さんが出來、二人ながら幸福をして、私も安心ゑて重荷を下したが、今一人はおみや、お前。お前の身が固まらないうちは、私は心持よく目は眠られません。此迄色々と緣の話しもあつたが、兎角長し短し、氣に入つたのはなく、困る〳〵と思つて、云へない心配をして居るうち、こんだの仕末。氣立も知れ、人物も確かだしするから、內端で事を納めやうと思つて、云ひ出して見たのさ。何か氣に入らない處でもあるのかい、それは最う緣の事だから、お前の口でこれ〳〵の事が氣に入らぬと云へば、無理にとは云はない。ただいやでは我儘としか思はれないから、色々聞ひて見るのさ。遠慮するには當らない、云つてお聞せゑ、ゑ、おみや。ゑ、お前も學問のある身だから、私も無理に道理に違つた事は云はあい積り、それとも私が無理かい、間違つて居るか。私に安心させて呉れる氣はないのかい、行つてお呉れか、否なのかい、どうしたのだよ。

勿體あい、なんで無理と聞きませう、御安心させたいは山々、長崎の兄さんも嫌ふ處はなし、あれぞ河田さんに優るお方の、此の世にありとは覺えず。無理云ひ給はぬだけこの胸が！　根堀り葉堀りも最う止めて、苦しい雲の中から救ひ出して下され。此處は只いやで通して給はれば、後でお胸の開けるやう、申解はいたします。と迫り來る淚の堰に留められて、腹に思ふ丈けの百分の一も舌の上に登らねば、勿論唇の外へは出でず、齒を嚙〆めて、哀しさを呑み込む辛らさ。母親の柔らかく話す程、眞綿で首を

〆めらるゝやうに苦し。幼き時より手鹽に掛けられしことを言はるれば、膓は寸々、逆らひたくはなけれど、義理の柵、まして可愛いと思ふ君を、今更捨てられもせず、捨てやうとは、さら〳〵思はず、

『是れ程云ふに返事をしないのは、不承知なのだね。何故不承知なのかい。

と母親も今は少しおれて、聲は遠山を渡る雷の荒らかなり。最早絶體絶命、明らかに云解けせねば、是の坐は立たせ給はじ、一層かう〳〵と云ひ出して仕舞へば、情深き母さま、許し給はぬ事はあらじ。しかし云ひ惡し、女の口から男がありとは。されど二人の間は清淨潔白、後闇い事はなけれど、母さまはともかく、外の方が惡戯者と思ひ給ふや知れず。人は何と云ふとも、此の身さへ淸ければ、天にも地にも耻かしき事はなけれど、云ふは何んとなく耻かしいやうな。止めやうか、何時迄も母さまに氣を揉ませねばならぬ。と雪より白き娘氣の考へは、一と筋道を往きつ戻りつ、面壁九年に業は終へても、この事は十年立てど果しなかるべし。母親はいよ〳〵いら立ちて、疊み掛けて返事を催す聲音益々荒く、濱邊の眞砂は波に嚙れぬ。最早有の儘云ふより外はなし、一思ひと心を決めて、涙をハンケチに包み、唾を呑み込みて口を切らんとするとき、年老りては氣も短かく、先の先まで計りし推量。されども少しはあたりに遠慮してか、聲の調子を低めて、

『お前約束した人でもあるのかい。

發矢！　今云はんとせしこと、既に咽喉迄出し事の先を越されて、おみやの決心は水の泡と消えたり。

はいと云ふて仕舞へばよきに、口は心を迷はして、
『いゝえ。
殘念！　一時の耻かしさに乙女氣の怯弱くも百年の計を誤り、刹那の迷ひに嘘るといふ悪い心はなくも、吾知らず答へて扨考へれば、馬鹿な事、もう云ひ直す事は出來ず、好い塲合を外しては、崑山の玉の再び手には入らず、出でたる言は駟馬よりも早くて、追へども及びもせず。今迄は懸念に思ひし母親も、此の答に眉際の八の字忽ちに跡を消して、
『お前の事だからそんな事はしまいと思つては居たが……しかしなぜ否なのだへ。
賴みし細綱は鈍き太刀に眞二つ、そんな事はない筈と云はれては、有りますとはどの口に云へやうぞ、自から苦を求めて、その苦の中に落るせつなさ、闇路を求めて闇路に迷ふは吾ながら愚なり。何故あの時にはいと云はなんだか、それは吾にも知れじ。扨なんと云つたもの、最早母親に從ふより、好き手計ハあらし、手計ハなくとも從へず、從ハねば許し給ハじ。ゑゝ一層妹となつて行かん、妻となるハいやなこと。河田さまに別るゝハ辛らきも、一月か二月の事、彼の君卒業したまふ迄長崎へ行て居て、其の頃兄さんに譯を打ち明けて話し、母樣に願ふて貰はん。それ〳〵それに越したる分別ハなし。妹となつてと云つたらば、彼の君も否やハない筈と今ハ中〻に心の中の潔ぎよく、
『私しハ參ります。

『ゑゝ行つて呉れる……能く聞き分けてお呉れだ。　といふ母。

『それでわたしも御安心です。

『おみやさん、私も落付きました。

『御目出度御座い升。

と口々に囃されて心も定まれば、涙も咽喉に關を造らず、

『母さま、妹となつて參りたう御座い升。

『それはお前の勝手さ、後で奥様になるとも……。

話しは全く喰ひ違ひぬ、今更のおみやの驚き、聲に力を入れて、

『いえ妹分で御座い升。

『まあ人前はどうでもよいわね。

怨めし氣に母の顏見れば、母は笑み溢るゝ斗り。何事ぞこの間違ひ、察しの餘り早さ、妹分なら兎も角も、奥様は可厭、尚今一つ確かめんと、

『奥様では御座いませんよ。

耳にも入れず打ち消して、

『なんだね、羞かしがらなくつてもいゝやね、もうよいから部屋へお出で。

苦心は書きし餅の手にも取り得ず、何云ふても聞かれねば、云つても今は無駄、夜にならばしみ〴〵と話して置かんと、しほ〳〵と立ちて部屋へ泣きに行くぞ、可憐!

（第五）

一ト筆しめし上まゐらせ候一昨日はいろ〳〵御厄介さまに相成御迷惑の御事と万〻御詫び申上まゐらせ候御宿へもよろしきやう御禮願上まゐらせ候定めし御宿にても御腹いための御事と御氣の毒に存じ申候妾より御禮申上度は山〻におわし候得ど角立ち候も申譯なく候まゝ打捨申候滊車中も人目少なき處へ御心附け戴き返す〳〵も御親切の御事御禮の申上やうもなき身にしみて嬉しう尚更迷ひの種に御坐候兼て歸り候後も首尾如何かと案し申候處何の變りもなく全くわきへ參り候やう心得も相見え候まゝ先つ〳〵御安心被下度當日は定めし學校の方は御欠席被遊候御事と御推もし何とも申譯なく妾故と存し候得は勉強の御邪魔は身を切らるゝよりつらく覺え申候其夜は歸り候ても何分彼れ此れ考へ候へば夜すがらつら〳〵と致し候て目のみさへ返り一と寢入りも致さず本日は風邪氣にて引籠り居りまことに昨今の胸の中は筆にも口にも書け申せぬ苦みいつそこの世に居り不申候はゞこの憂き目はなき事と涙にのみ暮れ居りまゐらせ候指折り數へ候へば過ぎし三年のあとより御心も知りつたなき情も知り給ひて末はあれこれと存し候ひし事も妾一人の心得違ひより其甲斐もなく何樂しみにこの世に生き可申や貴君樣は此先き良き御緣を御求め被遊候御事も御自由に候得共妾は此先き深き歎きの中に涙につゝまれ候て命を終

りし果敢なさこの邊の心の中御すいもじ被下度たまさかハ哀れのものよと御思ひ出し被下しハヽ妾のくるしみもせめてもの幸にぞんじこの世に思ひ殘す事もなく嬉しう存し上まゐらせ候一昨夜哥羅西傳を引き給ひて子ハ兩た親に隨ふべきものとの御さとし又妾の身を思ひ給ひての御情の言の葉身にしみ〳〵と嬉しく今ハふつつりと思ひ斷ね候へども今迄妾が胸に宿り候ひし君の御面影御情ハとても忘れ候事かなはず候まゝ今よりは神を念じ候て心に記しまゐらせ候是よりハ君の御行末必らず妾如きふつつかものに御かゝづらひなくよき御縁を御求め被遊候て睦しく樂しく御暮しのほど蔭ながら祈り居りまゐらせ候唯〻うらめしく候ハ如何なる星の廻り合せにて御情深き御言葉を戴きながら貴君樣のやうなる御方の御傍に朝夕苦も樂も共に致し候て夫と呼び申妻よと呼び給ふ御聲を聞き候ハぬ事のみ死に候迄の怨みに存しまゐらせ候又思ひかへし候へば貴君樣に是より妻と呼ばれ給ふ御方は如何なる月日の下の幸ひを持ちて生れ給ひし御方に候やらんと羨ましく存候昨日迄も貴君樣を杖柱とも賴みまゐらせしこの身今日よりは寄る邊離れし捨小船の何時迄も波にたゞよひ可申あはれ思ひ出し給ふ時のおはし候へば不憫の者と御覺え被下度是のみ息あるうちの願ひに御座候是も迷ひには候はんか迷ふまじとぞんじ候だけ迷ひ候も因果の身に御座候只〻神の御傍のみ今更戀しく覺えそれのみ願ひ居りまゐらせ候

かなしき長崎へ參り候は來る春睦月の五日程と取極り居候まゝその前今一度戀しき御顏ばせを拜み度は山〻には候得共なまじ御目にかゝり面の當りやさしき御情御言葉をいたゞき候へば思ひ切り候ひし心

の又もや亂れ候て過る日の御言葉にもそむき世にあぢきなき心も出て候はゞ御情も朝の露となり候はんとぞんじ御目にかゝらず心を鬼と致し出立致し候積りに極め居り候も万一思ひたえず伺ひ候やもこの身なから知れ不申候まゝ其時はつれなく御取あつかひ願ひ上候今迄の通りやさしの御言葉は却て御怨めしくぞんじ上まゐらせ候　是迄は書き候得共最早手ふるへ目の霞み候て涙のみ湧き出て致し方なく候まゝ申上度事は山も澤も及ばず候得ど惜しき筆止めまゐらせ候　前後不覺の事故定めし御讀み惛き處もおはすべく宜敷御すゐもじ願ひ上まゐらせ候　不智なる女子の愚痴は例の持病と御ゆるし被下度差上候手紙も最早是れのみに相成候事のそゞろかなしくぞんじ候先づはあら〳〵芽出度かしこ

尚は悪き流行風邪有之候折柄御身御大切に祈りまゐらせ候　來春は御目出度卒業被遊候やう蔭ながら神に念じ居候御老母さま御父君さまにも御心配御掛け被遊ぬやういのり申候私事仰に隨ひ氣を取り直し居候へ共いろ〳〵考へ出し候故か氣分悪敷食事も進み不申困り入候さりながら仰は何處迄も守り居り候間御心配被遊ぬやう願候命あるうちの御願ひは何卒兄君と存し候間不束ながら妹と御思召被下度是のみ一生の御願ひに御座候御許し被下候はゝ笑ふて長崎へ參り可申候伏し拜み願上まゐらせ候

涙に汚れ候處は失禮御ゆるし願ひ上まゐらせ候

妹　みやより

なつかしき兄君へ

昨日にて學校の授業は終へ、今日より冬の休課になりたる機一郎は、一昨日思ひがけなくも逢ひたし見たしと思ひたるおみやの、家を抜け出て汽車一瞬の便りに、この横濱の下宿を叩き、出來し二人の中の災禍を話して、有りし事を語るを聞けば、無理ならぬ仕末。言葉の行き違ひより母親頑として動かず、乙女氣の羞かしさ一方と酌み取り、押し付けて長崎へやらば、北風の南に吹き代るべくと、老ひたる人の一圖の決心も、我あるを知らぬ故なればそれも理あり。怨めしきは我方の使ひ、今少し早かりせば、この花仇人には手折せじものを、殘念！　なれど不思議なは母親、我方の使ひの事を、おみやに語らぬは如何なる心ぞ、心ありてか、なまじ他に心を移させまじの是れも老の一轍か。その事を我よりおみやの聞きて、唇嚙んで口惜がり、母親を怨みて死ぬと迄云ひしを、よく考へれば、この戀は我より仕掛けし戀なり、人の大事な娘、無垢神の如き乙女心を、我より苦むるは罪なり。互に肌身を汚さぬぞ幸ひ、是方より切れんと思へば、おみやより尚一層思ひ切られぬ身を幾度と叱りて、切れ話しを是方より仕出し、やうやくに云ひなだめて歸せしものゝ、慕るは煩惱、離れぬは執着、あの女可愛しと思へば、思ひ切れど心に心をさとせど叱れど、いつかあく〳〵迷ふばかり、今は眼中に寫す森羅萬象、皆戀と化せり。

一昨日おみやを停車場迄送りてより、心持惡しき儘早く床に入りて夜着をかつげど、泣きくづをれしおみやの姿あり〳〵と顯はれて胸苦しく、幻の中に日は戸の隙間よりさして、啞々と鳴く烏も氣に掛

り、起き上りさま口嗽がんと前栽を見れば、是處にもしよんぼりと立つおみやの姿、氣も狂はしく心は千々に亂れ、朝飯の味も糠を嚙むやうなり。その日一日は學校に暮せど、出て來る教師の眼口おみやにその儘なり、君は今日は變だと肩を打つ隣座の朋友を顧れば、笑顔笑靨のおみやに生寫し、迷ひかと氣の附く心は既に迷ひたり。宿へ歸れど浮むものは長崎の港おみやの泣き顏、己も男一疋、斯程迄に腐れしかと力を入れて机を打てば、憎くや机の上の寫眞立におみやの笑顏。又頭重くなりて其儘に夜着にもぐり、考への中に我知らず眠れば、同じ樣な夢に幾度も襲はれ、一時間とはまどろみもせず、二番鷄を耳にして初めてすや／＼と眠れば、おみやの來りてしきりにゆり起すに、斷乎と眼を開けば思ひの外に寐過ごして、下女の飯を報するにてありき。そんなものは喰ひたくなしと、夜着に頭を入るれば、下女はあきれ顏に、お手紙と枕元に置きて逃げ行く後ろ影を袖の間より見送りて、もしやと手紙を手に取ればそれなりそれなり、おみやの手跡なり、いそかはしく封切つて讀み下せば、書きし筆の跡處々にぢみて、字の慥ならぬ迄に淚の跡、あの愛らしき眼より落ちし雫かと、指の腹にて擦りて見れば、歎きの眞心はいまだ乾かず、濡れて居るだけ書きし時の苦しみぞ思ひやらる。一行毎に情溢れ、一句毎に胸せまり、一字毎に此方の眼も淚なり、箇程迄にこの我をと思へば、今更に思ひ切ると云はせし事の口惜し、斯うと知ればあの時何とか工夫して、たとへ一日なりとも夫婦と呼ばれんものを、我ながら心强かりし。されど今は詮なし、垣越しの花の手出しは出來ず、獨り枕濡らして考へれば、倘更に慕はしけれど百計盡

きぬ。入りかゝる日の影ハ呼び戻し難きもの、何とか法ハなきか。連れて退かんか。叱！　是れよりの我ハ名譽こそ大事なり、我ながら愚なるべし。母親に直に掛合ふて見んか、馬鹿な事！　見下げられんも憂し。然りとてかくてあらば我ハ戀に死なん、獨り焦れて死なんハ口惜し。いやそれもあの女の爲めならば死ぬも惜しからじ、何死ぬ事などを惜まんや、死ぬ！　死ぬ！　いつそ死ぬに益す事ハなし。いや吾にも父母兄弟あり、死ねず、是れ迄になりし身の、女一人に命をなくすとハ、痴！　愚！　なれどもこの戀、愚と云はゞ云へ、痴と嘲らば嘲れと、手紙ひしと胸に當てゝ夜着の襟を喰ひさけば、忘れたり、かゝる時こそ朋友なり、あの親しき高橋に物語りて、よき智惠を借らん、文珠の智ハ出でずもあれ、好き事のなしとも限らず。それよ、學校ハ休み、今より東京へ歸りて、高橋に相談せんと、窮鼠の大膽、直にむつくと起き上りて、顏をいきなりに洗ひて衣物着替ゆれば、下宿の女不審氣に、

『御飯ハ……。

『飯などハ喰ひたくない。

『どちらへか御出掛けに。

『長崎へ行つて來る。

下女は笑にこけ倒るれど、この方ハ夢中。

『河田さん、ほんとに長崎へ……おほゝゝゝゝゝ。

『何が可笑しい、馬鹿な。長崎へ行くが悪いか。
『御戯談斗り……東京でせう。
『ゑゝ五月蠅奴……その東京だ。

(第六)

數ふれば三年跡の夏の日、團扇の媒介に初戀の芽の萌え出してよりこの方、昨日までも今日迄も、この戀遂げねば置かぬと、つまらぬ事にも互に背を向け合ひ、可笑しくもなき事に笑みかたむけ、怒るも樂しく笑ふも哀しく、或る時ハ末を語りある時ハ今を話して、比翼の鴛鴦を書き、連理の枝を植へしこの二階の一と間なりしが、今は悲しき風の滿ち〳〵て、何處ともなく裏淋し。

更紗の布團二枚重ねて、其の上に白金巾を蔽ひ、めりんすの夜具小がい卷にくるまり、手拭ひに頭結へて打臥せし枕元には、小盆の上に茶碗一つ、藥罎の札には河田機一郎樣と墨色薄し。立廻らしたる屛風の龍田の紅葉を畫くハ、散り安き世に變り易き飛鳥川を數え顏に、床の間に積む菓子折、人の深切を無にして蓋をも開かず、片寄せし洋燈の油吸ふ音の竈馬に似て、四季の哀れをあつめし秋は、此の一と間に籠りつ、病にさゝると火の心を暗うせし丈け尚更に啾々たり。

機一郎は過る日横濱より滊車一瞬も遲しと走せ登りたる戀の苦しみを、直に親友の高橋に打ち明して相談すれば、なまじ眞向より打つ太刀は外れ易く、裏木戸より敵の不意に入り込まんには如かじ、おみや

の母親をば外より解かせて、見事この戀遂げさすへきにと手輕く云ふに、少しは力附けど、出來上る迄ハ頼みにはなり難し。と思へば怏々として家へ歸りしに、憎や流行風邪迄が弱味に附け入りて、明る日は頭重く、遂に病にまけぬ。初めは左程にてもなし二三日のことゝ吾も思ひ醫師も云ひしに、ある日彼の高橋が託まれし事の返事に來て、昔ならばこの髷坊主になりて謝びすると云ふ處なれど、世が世なれば散髪の詮なしと云ふに、先づ途胸を突きて夜具を刎ね上げ、其後はとせき込めば、推量は外れず、おみやの勤むる學校の長より説かせしも、母親は年歴りし大木の膊を固めて根も動るがず。受合ひ甲斐なきこの身、不親切とばかり怨み給ふなと云はれて、顔の色までも變り、失望の海に漂ふて返事もせず。高橋は惡しき事を聞かせて病の障りと思へば、今一つの策を施して見んに、左程力を落し給ふな、又こそと鼠の如くこそ〳〵と歸りぬ。

それより機一郎の病ハ俄に重りて、熱度高く日に登り、四十一二度を越すこと度々なり。鵜の目鷹の目も欲しき大晦日も、枕さへ擡げず明かして、今年の一日となりけり。朝より東風を含みて登る紙鳶の唸る音も、病の身には哀しき泣聲と聞え、梅が香透す鞠唄も、おみやの姿を思ひ出す種なり。世の人は宜き春と賞美れど、機一郎の身には來る五日の早く近づくだけ心ぞ消ゆる。眼は落窪みて眉茫々と茂り、頬は刀に削らるゝかと疑がはれ、高きは骨のみ、出す手は蚊の如くに痩せて、爪は色を失ふ。食物は咽喉に通らで、一と匙のスープに五尺の命をつなぐ哀れさ、冬近き蟬の霜を命の綱とするそれにも似たり。』

人の來りて慰めらるゝも五月蠅と避けて、兎角一人居るを好み、初めは只無言に考へてのみありしが、この二三日は氣も狂はしくなりて、熱の高まる度にあらぬ事を口走り、誰か枕邊にある如く親しく話すかと見れば、忽ちに悲鳴を上げて現に襲はるゝなり。醫師首を傾くれば、二親の心痛激しく、人の來るを嫌ふ病人の意に逆ふも爲にならずと、枕元の襖の影に樣子を覗ふことの日に幾十度なり。機一郎人を嫌らへど、妹のみは酷く嫌はず、妹も女子の優しさ、大概は枕元にありて藥餌の世話を爲したりけり。

今は熱少し醒めしが、眠りし眼はつきりと開きて枕邊を見詰め、

『おみや……じやあない……あの――ね。

『兄さんお眼が醒めたの……スープか何か上らあくつて。

機一郎は苦しげに息を吐き、頭を左右に振れば、又しても五臟を絞る咳、妹の呑ますする藥に辛じて留めて。

『あの……今日は……あの四日だね。

『ゑゝ四日で御座い升よ。

『明日は……五日……五日かい。

『ゑゝ。

『五日は延びないかね。

『おほヽヽヽ何をおつしやるの。
其の儘目を閉ぢてすや〳〵と睡るに、妹も讀み掛けの小說を手に取れば。
『おみやさん……おみやさん……船が出る。わいこの船は長崎……長崎へ行くのか……延ばせ最う二三日……延ばせ……。苦しい體が燒ける……熱い〳〵……おみや……さん……長崎……。
『兄さん〳〵。
『兄さん、又熱が出ましたね。
さも苦し氣に手足を煩悶に、見兼ねて叫ひ覺せば、汗は額より流れて、下着の單衣の絞るが如し。
『おみやさんは來なかつたかい……、船は長崎へ出れしまいね。
『兄さん夢でさあね。
『さうかい。
と別に話しとてれせず、仰向きに寐て天井のみ見詰め、又も夢中の苦しみに入る因果、妹が額の汗拭ふてくれるも、知るか知らぬか。少時すれば又聲を立てゝ。
『高橋……高……橋……、賴む……手を……これ手を……合せて……賴む……、骨を折て呉れ……いゝかい……。おゝあなたはおみや……おみやさんのお母さん……。私は病氣で……どうかおみやさんを……私に……、私は死にます……どうか下さい……どうか……、酷いそれは酷い……、病人

を捕へて……苦しい……許して……あゝ苦しい。
『兄さん〳〵夢ですよ、又初つてさ、兄さん〳〵。
『苦しい……高橋……頼む……熱い。
『夢ですよ、兄さん夢……。
と徐かに搖起せば眼を開ゐて、不思議さうに四邊を詠め。
『おや高橋ハ……居ない。
『又夢を御覽なすつたのですよ。
『さうかい……噓だらう。
『いゝえ夢でさあね、丁度御藥りをあがる時ですよ……。ハイ酌ぎましたから……。
出すを一口に呑み乾して俯向きになり、枕に顏を伏せて震へながらの溜息一つ、淋しさうに笑ふて妹の顏をしげ〳〵と見詰め。
『お前に云つて……云つて置く事がある。
『おやなんで御座い升。
『呑むもの……を一杯お呉れ。と微温湯の湯を旨さうに呑みて。
『明日が過ぎ……過ぎれば、私の命ハ……ない……無いからね……、お前ハ後に殘つて……お父さ

まや……御母さまを……、私に……なり替つて……孝行してお呉れ。私は大變に……不孝をしたから……その代りに……代りに頼むよ……。

途切々々に息を足して、落窪みたる眼には涙の溢るゝ斗り、いとゞ枯れたる聲の咽喉に詰りて、聞き取れ難き程に細し。十の八九は、魂魄遠からず黄泉の道を辿らん。夜は更けれども人は吾と兄とのみ、寂として音もなく、火鉢の鐵瓶木枯を鳴らす悲しさ。妹は今更胸に突き掛くる泣聲を、必死と齒に嚙み〆めて、病む兄に氣を落させじと、

『又兄さんが……そんな……そんな事を、私を、泣せやうと思つて……。お醫師さまも今が大事の處だ、最う二三日で驗が見えるとおつしやりましたから、心配なんぞはなさらずに……、早く快くなつて下さい……よ、兄さん……。か……かゝ悲しい事計り云はないで……、私がこの小説のお話しをして上げましやう。

『難有う……、お前の心切は……う……う……嬉しいが、とても……助からない……明日が……この世の……見納め……。

妹はたまらず枕元へ俯伏になりて、聲は呑みても咽せ返る、涙を袖に啣へ居りぬ。機一は妹の手を緊乎と握り、

『云つて……置のは……、忘れても……戀と云ふ……ことに迷つてはいけないよ。

『はい。
『戀は人の爲の仇だから……、死ぬ……死ぬ私を……手本にして……いゝかい。
『それから……私が……アノない後で……私の指輪ね、あれを……お前からおみやさんへ……上げてお呉れ。
『はい。
『は……は……はい。
『こればつかりはお前に死に……死に際の……お頼みだから。
答へんにも胸は張り裂く斗り、聲は咽喉の口に消えて、增すは涙の露、肩先しきりに動ふは、腸を斷つ嘆きに沈むなるべし。
『それから……解つたら……、お前下へ行つて……、お父さまとお母さまを……呼んで來てお呉れ……、不孝のお詫びを……して置たいから……。それでなければ……行く處へ……行かれない……ゑ……ゑ……解つたかい。
足は踰へ、胸は寸〻、今は耐へられず忍び音ながら聲を立てゝ、兄への返事は只泣のみ。
階子段踏む音して、二三人の來りし氣配。間の障子開けて顏出すは下女なり、
『お孃さま〳〵……、あの高橋さまとおみやさまが。

機一ハ病苦も忘れて、青白き顔に眼の光り鋭く、斷乎仰ぐ方に走り入るハ戀の女神。つか〳〵と臥床の側へ行きて、投げ出されし樣に動乎と座り、見上る眼にハ早や涙、

『河田さん……、是れ程にお……お……お瘦せなさつたとハ……。

跡の言葉ハ機一郎の膝に消えて膝ハ雫に濡增るらん。

次きて這入る高橋、憂ながらの眼尻に忽ち笑みを浮べ。

『河田君安心したまい、長崎迄行つて、おみやさんは僕の方へ貰ふ約束にして來た……今歸り掛けだが、君を喜ばさうと思つて、竹尾のお母さんの處へ行つて、おみやさんを當分借りて來たから、おみやさんに看病して貰ひ給へ。

船に艪あり舵あり、失望の海ハ渡り負せて、彼岸の樂土へ登りぬ。

『高橋君、難有い、死んでも忘れない……、僕の病氣も……明日ハ全快する……。

と骨斗りなる瘦枯れの手を、いた〳〵しげに組み合せて。

『高橋君……、君ハ二人の爲に……、神だ……神た!

（をはり）

◉合歡花

（其一）

千家の澁味に間取の都合を考へ合せて、辛からず甘からぬ嗜好の梁組み。椽の障子開けば飾霜除け敷松葉を踏へて、苔に手を打たす石燈籠を仰ぎ、蜘手に張る小まい繩に松の素直な枝を隱蔽ふべしとは極めを付けても、ひたと閉ぢられたれば白く明るき面取り棧の障子を譽むるに止るぞ心殘りなる。是處は階子踏み登りての上、南向きの角切窓に寫る梅の影法師、尾形がその儘の筆意長閑に、身を逆樣の鳥の枝移りするさまも折には見ゆれど、谷の戸出しまゝの咽喉滑かならで法々とのみ鳴くは、佐保姫の朝化粧まだ調はぬに罪は歸すべし。蠣灰殘の雪を眞似たる三味線胴の唐桑の火鉢を、二人が中の吉野川、下行く水の通ひ路は互に胸に許す間か、誰尤むるものもなき天下晴てのさし向ひ、黒七子三處紋の羽織に一樂の二枚襲ね、黑八丈の襟二三枚重ねたるは氣高き眉目光彩を增して、白縮緬の水色拔けぬ襟卷に、大やうの擧止動坐卑しからぬ男、愛嬌深き眦に笑を殺して故意と眞面目らしく、懷中より出す縮緬の服紗とく〳〵。

『お氣には入りますまいが……お絹さん、平常掛けの半襟を見當りましたから。

『度々難有う御座います。

俯視たまゝ微笑ともせで、男の信切を突き放したるお絹は、うつくしき所すくなし、たとへば上手の繪にかける天人の顏にひとし、どこやら佛めきて心こそおかるれと譏したる蓮の、朝露に首重たげの風情。男は喜ばるゝと思ひきや、禮は口にすれど左程ならぬ女の姿に心を躊らせ、島田髷見越す眉の間には知らぬ間の八の字

『お氣に入りませぬか。

お絹は見もせずまして手にも取らず。

『いゝえ。

『ではお氣に入りましたか、使用て下さいますか。

力なげな聲に溜息を雜せて、

『はい。

心は見えねど顏を讀む目はあれば、勸まぬ返辭と知れど兎も角も受けられたるに、我知らぬ溜息を煙管啣へる隙に走らせ、青竹の灰吹にボウと音を立てゝ迯る煙を見送り、何に心を配るか恐る〳〵。

『今日は丁度日曜で天氣も暖かですし、梅もそろ〳〵宜からうと思ひますから、龜井戸邊を步行積りで誘引に來ました。如何です御一所に。

先づ言葉を切りてお絹の返辭如何にと覗へば顏も得上げず口を開く景色も見へぬに重ねて

『如何ですか。

と言へど紅梅の唇なか〳〵に固し。男も少し焦慮て、

『お嫌ですか。

首いよ〳〵重げに、疊の目を數ふるのみにて埒明かず、行きたくもなく嫌でもなき樣なは、行きたきか嫌か何方とも分明らず、出るならば女の身嗜み少なくも一と時、後れては何かに都合惡るければ、機嫌損ねる迄もと心にもなき嫌味。

『私とはお嫌で御座いませう。

腹よりの言葉あらねば後は笑の雜れど、却て胸を劈く大利劍にや、お絹は首微かに擡げて怨めし氣の流眄も、よくは男の顏を見ず。

『さう云ふ譯では御座いません。

『では如何云ふ譯なのです。

透さず切り返す鋭き切先、柳は寄らず觸らず受け流して。

『貴君の御勉強のお邪魔になりますから。

『妙な事をお仰言いますね、今日は誰も知つて居る日曜ではありませんか、學校へ行つても課業はなし、家に居て勉強の出來んことはありませんが、七日に一度の休暇ですもの、遊んでも別に差支

はありますまい。又御一所に出懸るが初てではなし、此れ迄も有つたこと。人に後指を差される秘密の間でもなし、立派に許の出て居る身體。矢張私と歩行のがお嫌なんでせう。何處迄も嫌味は離れど兎も角も道理の煎じ詰め。お絹は言ひ出んことは腹膨るゝ程なれど、流石に乙女のそれと直には打ち出し難く。鼻白む詞辭にはあらぬも胸に纏るゝ一と塊、容易くは舌の根に解けず。

『貴女も是れ迄のはき〳〵した氣性に似合ない、嫌なら嫌と仰言いな

荒き中にも何處やら柔らかき詞の脈にすがり、

『嫌で御座います、御勉強のお邪魔になりますから……。

さつと上ぐる顔は何となく憂苦を呑めど、春雨に濡れては何ものも趣を深めん。男は思はずお絹の顔に瞳子を寄せて、

『私とではですか、云ひ直せば私がお嫌ですか。

根を押して聞き直す男は生死の境。

『はい、貴君とでは嫌で御座います。貴君は嫌でございます。

斯程迄とは思ひも掛けぬお絹の大膽、今迄はよもその可愛らしき口元に、我を嫌とは云ひ得まいと腹を据へて、踏切る芝居まで押し付けし身の淺猿しや、吾が思ふ程には先は思はず、可弱き口より嫌――立派に嫌と云ひ切るは、この身に飽きしか、又他所の桂男にその花の姿を命かけて打ち込みしか。嫌とは

見捨しと同じ心、秋の空と女は儘な難癖を男に付くれど、七八の子はあすともの例令、まだ夫婦と呼ばれぬ中なれど、まこと心の下紐は解けぬものよ。女に愛といふものあれば男にも愛はあり、愛あれば嫉妬は連立ちて離れぬもの、されば男も嫉妬はあり、嫉妬なき愛情は誠の愛情にてはなしと誰やらは云ひし。我もいま迄誠の愛に迷へばこそ、今更嫉妬の心も起れ。飽きられしと知りながらその譯聞くは、妄執を深むる業なれど、聞かで濟ますは煩惱の絆絶ち切れぬ原因と、膝組直して兩腕を突けば、今更侵し難きお絹の顏色。吐き出さん言葉は怨める如き眼元に挫かれ、それを避けて壁へ向ふて吹く息は、目には見えねど定めし火焔。僅かに騒立つ心を落ち附け今度はと顧むけば、幸ひにもお絹は下を向くに、得たりと睨む男の眦は釣り上りて、少し延し上る體に飛ぶは火鉢の輕灰、ひら〳〵と眼先に懊惱さや

（其二）

谷川奔せ下る水と日頃自慢したる辯舌も、只一と言嫌といふお絹が詞辭の邪魔な石奴に距へられ、その譯聞ひてからの分別と焦慮れど、僣言はん詞辭は咽喉三寸の細道まで來ては後へ戻り、目の前に横たふ島田髷の丈長も朦朧と、常時譽めて居た憎らしき迄に奇麗な頸足も、今日は人を見下すやうに見え、一圖に飽きられしと思へば、吾知らず齒を嚙ひ切り、握る拳も乘せし膝の上にわな〳〵と顫へ、男が斯のやうな微細な事に腸を燃やすはと自分から叱れど、胸自然と跳り出してそれを押ゆる力は消えぬ。心

狹き男とお絹に腹の中を見透かさるゝも愚かなれば、せめて言辭なと落付けてと我から大船に乗る心になりて、必死となりてやつと云ひ出す言辭は調子の變りつ。

『お聞き申のは未練らしいですが、全體私の身に付て何がお嫌の原因です。是れは私一人の誤解でしたか知れませんが、一昨年の夏不斗このお家へ上り初め、お互に斯うと思ひ合つた……、是れが私の誤解でした。貴孃は何とも思つて居らつしやらなかつたでせう。しかし私斗り斯うと思つたから貴孃に申と、早速にも御兩親に左樣言つてとのことでしたから、宅へ歸つて兩親にも相談し、立派に媒介人を以て御兩親に申込み、お宅でも御不承知でない處を見ると、既に結ばつて居る御縁でせう。

疊まりし言の葉を、息も續がず述べてお絹の樣子を見れば、まだ俯向ひて首を上げず。先づと少し心の弛めば扨も氣弱な、息は切れて咽喉の乾く、云ひ掛けて續けぬは變なものと無言のお絹を此方の僥倖。

『世間によくある野合の中なら、嫌になつた別れやうといふのも、合せものに離れもの無理はありませんが、まだ式は上げなくつても立派な約束の出來て居る許嫁であつて見れば、只嫌と斗りでは未練かは知りませんが不承知です。物には原因の無くつてはならぬもの、その嫌といふ譯をお話し下さい、私に末の見込でもないといふ御決心なら、別に方法も有りませんから、私も男です奇麗に破談いたしませう。さあその譯をお話し下さい、伺ひませう。

と一と言づゝに膝少しづゝ進めて、間の火鉢はその度々にお絹の膝を突けば、男優りとまで言はれしお絹も、女松は何處か嫋しきところありて、膝の上に組み合せし掌を表裏と打ち返し〳〵、何事も得こそ言はず。

熱へ返る胸燃え上る心に男はもどかしと、お絹が垂れし首を横の方から可恐い顔をして覗き込み、八の字寄せた額の上目遣ひに凝乎と返辭を促せば、窮鼠却つて猫を嚙むお絹、坐り直して行儀よく兩手を膝に突き、

『只今までは最うお氣が付くか〳〵と思つて控へて居りましたが、その御樣子も見えませんゆへお話しをいたしませう

と待ち草臥れし口はやつと切りたれどまだ顔は上げず。

『實のところは貴君の御氣性が、嫌……嫌になりました。

男は思はず身體二三分を延し上げて、

『な…な…何故……、その……譯は

急けどお絹は騷がず、それが態と落付きしやうに見ゑて小憎らし。

『譯と申は外の事でも御座いません、先刻も勉強々々と仰言いますが、何程位の御勉强が出來ました、失禮ながら只今の級に坐つて居らつしやるのは何年になります。私の宅へお出にならぬ前

は、學校中でも一の指にお折られ遊ばした御身、それが私の宅へ度々お出になるやうになつてから
は、何時の試驗にもお上りになつた事はなし……
お絹はいよ〳〵首を垂れて聲次第に細く。
『お容姿を見ますれば、何時も〳〵奇麗になすつて……畢竟はその爲に御修業がお留守になつたの
で御座いませう
忍び泣くかは知らねど、亂れ掛る姿を屹乎直し、聲も元に還りて、
『浮氣家業でも致します女はそれを喜悦びませうが、私をそれらの女と一所になすつた御氣性が嫌
で御座います。これまで種々のものを頂戴きましたり、また休息日には遊歩にお誘引下さいます
は、有難くないことは御座いませんが、これが一々御勉強の御邪魔になるかと思ひますと、私は樂
みなことは少しもなく、却つて苦しうございますゆへ度々お斷りを申上げ、又他所ながら御勉強の
ことをお勸め申ましたが、少しもお聞き遊ばさぬのは、貴君のお身體に取つて私は惡魔で御座いま
せう、御勉強のお邪魔をする惡魔と思ひます。
男は急所を突かれてか一言も云はず、お絹も是處に口を絕つて暫時は鐵瓶の松風靜かに呂律を調ぶるの
み。やがてお絹は袂より紙を出してそつと鼻涕を拭ひ、風邪引きしとも見らぬに聲は枯れ曇りて、
『この惡魔が附從て居りましては貴君の御出世のお邪魔、また……私も……御一所になつた後で、

末の見留が附き兼ねますから、この御縁は……。
男は傾けし首を急に立て、火鉢の上に身體半分ほどを被せ、
『破約しやうといふのですか。
『は…はい……。
男はぷいと立ち上りて暇も告げず、階子踏む音を殘して下へ行きぬ。取り殘されしお絹は、朝霧と消え行く男の後姿を眺め、兼て覺悟したことか送らうともせず、その儘襟に腮をさし込む眼に寫るは、男が忘れしハンケチ、手を延して引き寄せ、階子口見詰めて腰を立てしがまた座り直し、叮嚀に膝の上に延して四ッに疊み、それを二ッに折りて帶の間へ挿みながら、憂苦の中に飜す一と滴の笑顔。
耳を立てゝ聞けば玄關の障子の開くは、男の歸り行くならんと、坐を立ちて門の方の見ゆる窓に手を掛け、下駄の布石を舐る音は確かにそれと知れど、今此處を開けては顧視く顔に正面とドつと堪忍して、門外の溝板響くを相圖にそろりと六分ほど開けて見れば、腕組み合せて下を向き勝に歩行く男の姿、心にもなきことをいふて腹を立たせませしも、皆爲めにしたきからのこと、腹赤きは後にこそ分明れ、その時こそ今日のそでなき謝罪の秋と、胸の中に手を合せて男の後姿を拜めば、憎くや有らずもがなの塀際の柳、惜しき人を隱すに猶思ひ切れで、障子からりと柱を摑む手に身體を釣りて木蔭を避けて覗けば、今横町へ曲らうとする影をちらりと宵の三日月。柳の木も憎らしく横町も憎くなりて、障子をはつ

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

たと鎖し、しほ〳〵と自分の机の前に戻り、何氣なく抽斗を開ければ、先日貰らひし生の儘の男の寫眞、緊乎とした口元はこの身のそであきを睨むやうに見えて、お絹は初めて涙の堰を破られ、机の上を前髪の顫ひながら舐めけり。

（其三）

神田の英學院にて江村忠雄といへば、校内通つての寧馨兒と評判高く、入學せし初めより級の一の椅子は、終始忠雄の專有と極印を打ちて、敎えられし一字半句、嘗て忘れしといふことなく、時には敎員も知らぬ理論を吐くに、江村が胸の中には、書物庫の設つやとまで、雇の赤髯に首を捻ねられしこともあり。年に二期の學業試驗にハ、傍の見る目も面白きほどに、答案水の流るゝ如く、筆を取らすれば、瞬間に大阪洋紙五六枚を考案もなく書き上げて、定限の時間は三十分も過さぬ達者もの。香ばしき栴檀の二葉、木理の嵩の增したる曉には、民間に下りなば代言人の北斗と仰がれ、龍門へ登りなば江村司法大臣と署名すべし。といふは諂諛ならで、まだ三寸の小蛇の氣を見破りし賞辭。敎員室の評議、小使部屋の喫茶話に、唯一人としてこれに異議の申立てなし。

江村〳〵と校中の敎員達に、愛子の待遇を受くれど、己が背後に牽ゆる學生輩の妬もなく、黑板にあらぬ名を唄はれしこともなきは、性質温厚て、敎員の待遇を楯に專擅する心などは、微塵藥にしたくもなく、我が次席より席末に至るまで、同じやうに交際ふ德は、風に草の靡くがごとく、覺え惡しき物

忘れ、又ハ居睡に筆記落せし處などは、江村に問ひ質すに、敎員より信切に敎へ遣れば、自然と恩の網を多人數の頭より被せて、德と恩との二道掛けし城廓堅固に楯籠れバ、嫉妬の鏃立つ瀨もなく、偏執の刃切り込む間隙もなく、旭の登る勢に、忽焉卒業の期は、拇指一つ折れば事足るほどになりぬ。

疲勞たる身體をもがひて、今一息と卒業間際を焦慮るは、誰も背に重たき名譽といふものを負へばなるべし。日頃牛肉鍋の香に親しみ、辭書に縲絏の耻辱を與へしものまでが、一時過ても洋燈の火を落さず、一心不亂になりて、机にひがみ付く頃なるに、今迄の江村の樣子、雲泥がらりと變りて、いかな風雨にも顏を見せぬことなき忠雄が、勤怠簿に珍らしき欠の字、一週は一週より激しく、遂には七日の中に、席の暖かなるは僅か二三日。卓几に坐りし時の樣を注目れば、書冊は開けど眼は字を辿らずにあらぬ處を凝視め、便所へ立ちし跡の筆記録を見れば、蚯蚓の蜿蜒、鹿尾藻の體操、一つとして字の形なしたるはなし。始終物思はしげな顏して、人と言葉交すも懊惱き樣子、されども料理店の味、公園の風景を話せバ、嬉しげに答へて、談話に來る顏は髯の跡青く、頭髪に香水の薫り高く、絹物びらりと身に着けて、左の手に金剛石の光り面眩し。心ある朋友、江村が此頃の樣子はと、眉を蹙めて語り合へば、薩摩飛白に向脚を顯出し、達摩下駄に石を踏み碎く男、自然木の洋杖に大地を打つて、咄、江村の腐腸男兒。』今の世は好事門を出ぬとは嘘僞なれど、惡事は二千里も走る可恐しさ。あれ程の江村がこの節の擧止動坐、合點行かぬと斗り一級中の疑問にのみ殘りしに、早くも證據物件を押えられて、疑念はさらりと晴

れけり。

『君嘗て探索しおつた、證據物件が上つたぞ。

『何か、江村の一件か。へん晩い〳〵、最う速に逮捕狀はこの判事さまが、さし出したは。

『君は如何して發見したか。

『如何したも斯うしたもない、發見どころか露顯させた一件だ。

『陳述して見い、口供書き作るぞ。

『口供が凄ましい、宣告するから驚くな。……昨日一寸最終の時間を逃出して、向島の花と出掛けたところ、いやどうも實に爛熳たる眞盛り、花か雪か雲か花か、呉か越か。

『れい、こら。事實外のことは中立へでも宜いは。

『いや、連絡して居るから默つて聞け。實は花より團子の方だけれども、例に依つて無一物と來て仕方がない、まづ言問ひの前へ眼を眠つて驅けぬけ、白髯梅若と見廻つて後へ少し歸り、橋場の渡舟を越して雜踏を避けやうと思ひ、舟にひらりと飛び乘ると、前の方に立つて居るのは江村さ。旨い處で出會したと……。

『是處が裁判官の聞き處だぞ、旨い處で出會したと云ひれつたな。それぞ前の言葉の中に、囊中無一物……うむ……。

『當然よ、勿論考へるまでもなく、腰巾着の積りさ。……一番聲を掛けてと段々江村に近寄ると、彼奴め一人の女と何か囁て居る、女を見ると無類別品と來たらう。其處で自然に勇氣が拔けて、踏み出した足が後へ下つて仕舞、はて女は何ものかと考へる方に思想が走つて、ぐづ〳〵して居る中に舟が着ひた。すると江村の方は先に上り、僕の方は群集に隔てられて晩く上る、取り逃がしては一大事と見れば、江村奴、待して在つた車に合乘りして、驅けて行つて仕舞た。その時の殘念さ宜しく察して呉れ給ひ。うむ女か……僕の審理した處では、さうさ、何處かの娘だなあ。

『左樣か。我輩の遇つたはその後だ、我輩淺草の中見世を通りおると、万梅ちう料理屋の前を、何處の紳士か知らん美人を連れて來るぢや、羨望に堪えんぢやによつて、顔なと睨み付けて遣うとよく見れば江村ぢや。我輩の懷中には、ピンヘッドを買ふた釣錢が五厘か無いぢや、好期會ぢやから……。

『待てよ。是處が裁判官の聞き處だ、囊中五厘……好期會……うむ……。

『人を眞似るな、馬鹿め。……奴何處か奢らせて呉れやうと、江村と聲を掛けたら、奴め驚いたぞ。

『ふーむ、君の方が僕より餘程大胆だ。

『當然ぢや、君は女と見ると腸を腐らす男ぢや、僕は婦人ちうものを虫けらとも思はんによつて、

清潔なものおや。

『分つたよ、それから。

『何程大胆でも、直に事實に切り入るちうは難いから、種々に話を仕掛けて廣小路まで出た。いろはでも奢らせやうと思ふ中、奴め、車が待たしてあるから失敬と放言しおつて、迯げて仕舞おつた、その時の殘念さは宜しく察すべしかゑ。

『おは、、、、直に眞似をする奴があるものか。

己も見し我も見しと云ふもの日增しに殖えて、衆多の學生の中には、その說も種々に分かれ、放蕩生は江村の艶福を羨み、貧しきものは江村が費ふ金錢慾しと呟やき、慨嘆家は擬男子と罵り、狡猾者は江村が惠みの露に霑はんと覗ふ。江村が信友は、聞き兼ねし見兼ねしことを、打ち附に數え立てゝ諫めたれど、まこと膓の腐りしにや、忠言腑に落ちぬ顏色に呆れて、末を心配ふのみにて、今は手を引く仕末。以前の江村とは別人となりて、德もなく恩もなければ、威儀も自然と失せて、好男子艶冶郎と嘲けらるゝ虛に附け込み、江村が德と恩に押え附けられし嫉妬偏執、報仇の時來れりと頭を擡げ、江村が身體を四方八面より取り込めて、肉體に傷の附かぬ言葉の笞鞭、丁々發矢罵ましけれど、蛙の面に水とも思はぬ江村、果ては彼樣のものを置きては、學校の信用に關はるといふ急激家の旗色、校中を吹き靡かせんず勢力凄まじ。

試驗の度ごとに優等なりし裏の落第、卒業の土俵際にて二度斗り續け、己と同級に居たりし人は判事となり、下級に居たりし人は代言の札を掛け、器量それ〴〵に世に出たりと聞けど、江村は鬼界が島の弱法師。往來步行てさへ後の人の先へ越せば、快よくなきものを、嘆かばまだしも、口惜しい顔もせず。衆多の人に脊を見せし身の、衆多の脊を見る席末に在りて嫌な氣色もなし。校の幹事も眉を蹙めながら、惜しき人物、今に悔悟て以前の江村になるべしとのみを賴みに、囂ましき衆口を耳より耳へ聞き流したれ、悔悟の標とては少と斗りも見へぬのみか、ます〳〵激しくなる斗りなれば、惜しけれど校外へ投げ出して、他の學生の殷鑑となさではと、密々名簿に黑星の附きしを、知るや知らずや。ふわり〳〵と花に狂ふ、春の蝶の江村忠雄。

（其四）

龍門登る出世魚の忠雄が、曳捨てたる坂の車となりし譯は、十目の見る處十指の指す處、相違もなき戀なりけり。父が別懇なる五十嵐といふもの、足懸け三年の前八月、買入たる松の木姿、十五日の月に見せたしとの招狀。五十嵐は當時屈指の紳商なれば、面會て置くも後日の利益。と忠雄父に附從て行きて見れば、淺からぬ饗應。折から自慢の松に月轉び掛りて、參差の影法師疊に漾ふに興を增して、主人の五十嵐妻を呼んで何か咡けば、莞爾笑みて退り、時も經過す連れて入り來しは娘なり。絹と云ふ不束もの、以後お見知り置れて。といふ母親の挨拶濟みて、覺束なき一曲お聞に入れよ。と主人の命令に、

恐づ〳〵琴を引き寄せて、雲井に琴柱を配り、會釋して彈き初めし爪音は、谷川を走る水、野末に鳴く虫、時ならぬ松風を坐敷に聞きて、仰げば月もいよ〳〵冴えたり。

初見參のこの時より、忠雄は戀の山路に登り初めて、お絹の面影一寸も心を離れず、ある時は夢となり、ある時は現に顯はて思ひに堪へねば、せめて床しき姿なりと拜みて、心遣りの種にせんと、用事を漸くに拵えて尋ね行き、五十嵐に遇ふて四方山の咄をすれば、これほどの男兒、とんと五十嵐の氣に入り、妻も出でお絹も出て、さま〴〵に饗應なされて、思はず長座して歸りぬ。遇はねば遇ひたく、遇へば猶遇ひたく、五十嵐が頻繁來よ。といふ言葉を潮時に、二三日ほど經過て行けば、應接前に變らず。四度五度と行けば馴染の附きて、六度七度となれば戲談も云ふやうになり、思ふその人とも口利くほどにありては猶足の繁く、時折はさし向ひの首尾を樂しみて、遂には五十嵐の子程近しくなりぬ。

ある日二階に只二人の時、心のあり丈を口に出して、浮きたることならぬより說き起し、及ばぬ願望なれど、この緣結びたく。としげ〴〵云へば、お絹も否にはあらず、兩方の父母さへ承知すれば。と確の返答、乙女らしき中に、何處やら侵し難き威のあれば、忠雄は猶更慕はしく、返答を聞ひて躍り上らん斗りに喜び、家に歸りて耻かしながら始末を話せば、忠雄の兩親もお絹の身の上は知りたり。去る女學校を卒業して、才名一時に高かけれど、この頃のお刎ねとは違ひ、能ある鷹は爪を隱し、身を謙退りて賢女ぶらず、擧止動坐重もりと、口數少なく、手は書き、針は利く、その上容姿の天女も耻かしきは、忠

雄にとつて叉となき良緣、彼女ならば嫁といふ我達も鼻高し、と兩親も喜んで異議なし。此方はよけれど、先は一粒種、さてどんなものか。と父が傾ける首を、母は何にも緣づくと勸めて、此方も知り、彼方にも懇意なる何誰某を媒介人に賴みて五十嵐へ遣れば、世に言ふ媒介口は聞くに及ばず、忠雄が望みある男といふことは、五十嵐商機を見る目に早くより透かして、席も替えずその坐に妻と娘を集め、先づ妻にその話をすれば、是女は寢物語に承知のことゝいふ。當人に元より可厭のある譯はなく、前世から出雲の帳に書き置かれたる緣と笑ひ合ひ、五十嵐骨折の報酬と一杯出せば、このやうな緣談は、此方から願ふてもと微醺機嫌の媒介人、當日の稽古と高砂唄ひながら、しどろの足元に扇拍子打ちて歸りけり。

卒業しての後身分定りて、婚禮の式を上げん約束なれど、人には指も附けさせぬ立派なる我が妻。誰に忌憚ることとなければ、大手振つて五十嵐の家に這入り、勝手のときには連れ出して、人に顧視せることも儘なるに、樂しき事この上もなく、日曜の度には必らず訪問て、花は上野飛鳥、月は綾瀨品川、料理は何處、劇場は替り目、果はそれの高じて通常の日の逍遙遊歩。修業は身の修飾の好みに替えて、鉛筆離さぬ手に、毛刷毛沙汰、書册革囊は何時か縮緬の小服紗包となれば、賢こきお絹は是處に心の附きて、わが身可愛がらるゝは嬉しくなきことはなけれど、その爲めに靑雲の防害となりては、憎まるゝより辛らく、よき折を見ては氣の附くやうに針を打ちて見れど、空掃ふほども手對なく、その翌日も何喰はぬ

顏して來ては、何處へか行かぬかと云ふ。學校の沙汰も時々耳に入れば、他人ならぬ中とて我身を抓めらるゝより痛し。思案餘りて我が親、忠雄の親にも相談して見たれど、惡い放蕩ならねば強ひて小言もと云ふ。取り附く島もなくお絹心を痛めて、暑からず寒からず、この頃の寐心よき夜に、夢は幾度も斷れて、今の若年に、鷄鳴く鐘を數へて目を閉づることもあり。

三年も經過たるこの頃、お絹の樣子少し變りて、奧齒に物のある擧動の見ゆれば、忠雄は首を捻り、慕はしといふ一歩讓りたる心に飽かれてはと恐氣の立ち、機嫌直させて元の鞘へ、納めんと斗り工風暇なく今日の日曜に一段と着飾りてお絹を訪問れば、輪に輪を掛けたる不機嫌にて、折角の贈りものさへ、突き戻したる擧動合點ならず、今迄には無き疑惑を浮べて、お絹の心を問うて見れば、口惜しやこの身に飽きたりと確かの答辨。戀に亂れし心は以前の忠雄にあらで、一圖に心變りを憎み、詐されしを怒り、むら〳〵として後をも視ず、まして問ひ極めもせず、五十嵐の家を蹴返す斗りに飛出でぬ。

道行く人も步るく邪魔、尾を振る犬を蹴散らし、眞直に我家へ歸りて部屋に籠り、只一人腕を組みて考ふれば、我ながら愚かなりけり、性の腐れし女とは知らず、何にもならぬ心中立てして、齷齪と獨相撲、まんまと釣られたる上、土俵際にて投げ出され、何處の馬の骨やら知らぬものに見替られたるとは。浮草の寄る邊なき花にも實はあり、それにも劣りし彼女奴の不實、眞情めかして兎や角云ひし口に、今となりて二枚の舌を使ひ、彼女奴我が身を意氣路なしと云ふ、口惜しけれど三度の落第、殘念ながら彼女

奴が云ふ如し。學問にては二と下らざりしこの身を、二度までの落第させしは誰、皆彼女奴が業の果てなり、憎みても餘りある彼女奴なれど、誑されしは是方の罪、五尺大の男として、可弱き女の手に掛りしは、我れ過ちたり過ちぬ。過つて改むるに恐ぢぬ我も男、今日より破草鞋を捨てたると思ひ、念頭より彼女奴を掃ひ退けて、清浄無垢の忠雄となるべし。親友の忠告にも、この試驗外しては校に置かれ難きよし、重ね〳〵愚かなりし。よし夜の目も合さず勉强したらんには、よも落第はせまじ。首尾よく卒業證書を握らば、一つは今迄の呆氣の面晴れ、二つには憎まれ口利きし彼女奴が横顔、卒業證書に一つ喰はして、今日の無念を晴し呉れん。

性質が愚ならねば、さらりと水に流したる決心、自分に自分を確かむる爲とて、手文庫の底を掃ひ、大事に掛けたるお絹の文殼を、四分五裂に破りて丸めつくね。編みて呉れし毛糸の肱突、花瓶敷は、戸棚の奥へ投け込み。恭しく違ひ棚に立ち姿の取り替せしお絹の寫眞は、磨ぎ澄したる洋小刀逆手に、顔も手も足も胴も、別々に切り離して火鉢に投げ入れ、早附木に火を借りて移せば、ぱつと立つ火焔に連れて、後の襖五分ほどを開け、この有様見る人ありとは白煙、灰となりては色即是空、忠雄はてんと悟り、顔なり。

（其五）

左中將殿も内侍に迷はれずば、あたら深田の中に最期は遂げられまじきものを。お絹の他人がましき擧

動。迷ひたる忠雄の心を突き開きて、正覺の悟を得させたれば、忠雄は昔の忠雄となりけり。落花一様の春を知りて、白雲青山を蔽ふと見る物思ひもなく、次の日より學校へ登ることも人より先きに、夜は鶏を聞くまで机を離れず。坂の中途の車を、めき〳〵と引き上ぐる勢力凄まじく、同級の耳語に漣立てゝ、忠告したりし朋友は小踴りして喜び、さればこそ忠雄は捨つべきものにあらず。と小鼻高やかにするが、教師の耳に入りて、幹事局の名簿に乗せられし黒星は、美ごと棒を引かれたり。

試驗の日割掲示場に出でゝよりは、忠雄の勉強又百倍して、人の六か月の間苦みてさへ猶覺束なきを、僅少温習三日の間に腹へ呑み込みて、勇ましく試驗の塲へ臨みたるが、七日ほど後に卒業生の順次を見れば、末席にありし忠雄が名は滿點に僅か缺けて、筆頭晴れ〳〵と張り出されぬ。

今は怠惰ものゝ冠脱ひて、卒業の晴衣を着たる忠雄、何と思ふてか、二月振りにて五十嵐の家を訪ひけり。主人は社に用ありとて留守なれど、應接過ぎし日に變らず、卒業の喜悦など云はるゝを聞き流して、世間話一つ二つ、よき程にその坐に合せて扨お絹はと聞けば、常時の二階なる部屋にありといふ。すこしお話申たきことあれば、參りてもよきやと聞くを打ち消して、でも他人行儀な。と何にも知らぬ五十嵐の妻が高笑ひ、速に他人とありしものを。と心には思へどさらぬ顔色して、

『餘り御不沙汰を致ました所以か、敷居が高くなりました。

二階に上がれば、その人は後脊向きに頸足を見せて、毛糸を手に持ちたりしが、忠雄と見るより、いそ

〳〵として座蒲團を直し、まめ〳〵と火鉢の炭を見て、二た月前の愛想盡しは何處を吹く風か、以前に少しも變らぬ擧動。胸に物ある忠雄には空々しく、この狐奴と爪彈きして、お絹の顔はよくも見ず、直された蒲團も、火鉢も避けて、故意と有らぬ處に坐り、慇懃にするお絹の辭儀は無言に受けて、頭を方法ばかりに下げ、何か俄かに言はんとして躊躇しが、思ひ切つてお絹に知らせじと、溜息を肩より密と迯がし、

『お絹さん。

何となく稜立ちし言辭に、尻聲高く呼べば、

『はい。

と氣のなき返辭、俯視たるは先日の言辭の、流石に面目なきか。自から招きし罪今こそ思ひ知りたらん。と忠雄は笑みかゝるを無理に押へ、威儀らしく改まりて、

『意氣路のない私も、此度やつと卒業しました。

懷中より卒業證書を出して、お絹の眼の前へ擴げて突き附けて、

『ようつく、御覽なさいまし。

見しか見ぬか、俯向きたれば知れねど、お絹は穴の中より物言ふごとき聲して、

『結構でございました。お喜悅申ます。

忠雄は妙に笑ひながら、鼻の端にふんと受て、

『あんまり結搆でもございますまい、お鑑定違ひ、お氣の毒でございます、以前の如き中なれば、喜びも喜ばれもして、樂しく語り明すべきに、葛城の姤に脊中合せの間となりては、互ひの言辭は此處に切れて、膠せし琴柱に和合の音は立たず。

お絹の顔を得上けぬに、忠雄はさてこそと頷き、以則の返報は今こそと云はん計り、

『首尾よく卒業いたしましたは御覽の通り、そこで先日のお言辭の通り、これを面晴れに今日から他人になりませう。何れ親父にも申聞けて、お約束の取り消しは立派にいたします。これで何も申すことはありません。用のないところに長居はお邪魔……。

と尻眼に掛けて起たうとすれば、お絹は倉皇

『少しお待ち……お待ち下さいまし、申上げることが……。

『何も他人の貴女に、言はれることはありません。

無情き言葉に少しおろおろして、

『お立腹は御道理……でございます。が、お謝びも致たし、また……聞ひて頂きたいことも……。

『お謝びには及びません、最早その手は……、お蔭さまで卒業を二年延しました。

劍の刄を渡る危ふき言葉、お絹は腸を斷たれたり。忠雄の留まるべき氣色なければ、お絹は堪らず膝

を泛らせて、起ちたる忠雄の袂に手を掛け

『これには譯のございます……ことで、願ひ……願ひ、願ひますから、如何か少しお坐り遊ばして……。

『いゝえ、坐りますまい、是れから立派な聟をお持ちなさるお身躰、私ごときの爲めに、とんだ噂でも立ちましては、どうも濟みません。

飽まで木に鼻を附けし言葉、寄る邊なければ離してはと、お絹は握りたる袂を一生懸命。

『何卒哀れと……、一寸でも下に……お坐り下さいまし。

お坐り下さいましに力を入れて曳けど、鬼か蛇か、袂を握んで曳き戻しながら、

『懊惱ございます、お離しなさい。

『何卒……一生のお願ひ。

『いけません、懊惱い。

無理に袂を引き離して一と足。猶纏はる手先を、身を替はせて摩り抜けられて、空虚を抓むお絹、

『如何しても……。

と怨めしげに見上ぐれば、

『そんな忠雄ではありません。

冷たげに笑ふに堪り兼ねて、がばと伏すや芥子の花、涙眼に溜り果せで、野末を吹く秋風に、散り敷く白露繁く、曇る瞳子に朧氣ながら見れば、心強きも程こそ、忠雄の後姿は襖の彼方に霧隠るゝに、思はず聲を立てゝ

『慈母さま、忠雄さんが……。

木綿襷、後は何を言ふやら、震えて、曇りて、低うて聞えず。

呼ぶ聲を後に聞ひて、忠雄は度胸を突き、何氣なき顔して奇麗に歸り、縁切り話は後のことゝ思ひしに、今お絹の母に來られては、何かの都合悪しき。と足早に階子を下りて、今一段にて終らんとするとき、急はしき疊の足觸り、扨は早くも聲聞きて、お絹の母の來たりしよ。と手早くせざりしことの口惜しく、心寸時亂れし折しも、上り口に姿顯はしたは、お絹の母にあらで、思ひきや我が母なり。出る時まで家に在せし母の、如何して此處にと驚かされ、踏み出さん足の留まれば、母は早くも聲を掛け

『忠雄、少し待つてお呉れ。云ふことが……。

と云へば、母の後に又一人、これぞお絹の母なり。

『忠雄さんお願ひです、少々お待ちなすつて、どうか……。

二人揃うて斯くの仕末、忠雄には何が何やら少しも解せず、母とお絹の母の顔を睨み詰めて茫然と立てば、母は重ねて、

『忠雄、最う一遍お二階までお出で。
不厭な二階、二度と踏む氣はなし。それにお絹は定めて泣て居らんに、その姿見られてはいよ〳〵都合惡しと、
『私は急ぎますから、お先へ。
『なんだね、嘘をお言ひなさい、お絹さんを如何する心算なのだえ。
事は早くも知られたらしきこの一言に挫かれて何とも言へず。母は先に立ちて忠雄の手を取れば、お絹の母は後より肩を押すに、親の威光の振り切れもならず、不承不性に引き上げられて、お絹が泣き伏す傍に、迷惑ながら坐らせられたり。
母はお絹の脊を擦でゝ、
『お絹さん堪忍して下さいまし、酷いことでも致しましたか……ゑ……致しません、左樣ですか。
まあお可愛さうに、堪忍して下さいましよ。
と慰めて忠雄の方を向き替え、
『お前何故こんな事をなさいます。
小供を叱かるやうに云へば、忠雄も亦子供らしくなりて、
『何にも致しません。

『致ぬことがありますか、こんなに泣て居らつしやるではないか。

『それはお絹さんが悪いのです。

『まだそんなことを。今に謝罪らして上げるから左様お思ひ。

忠雄は不平相に母を睨めたりしが、きつと心に極めることあるや、言葉を改めて、

『慈母さん、お絹さんの氣は替りました。何卒か先日の約束は、反古に致したうございます。

と云ふ言葉の切れぬ中母は、

『馬鹿なことをお言ひでない。

と一寸忠雄の顔を睨む眞似して、

『お前今度の卒業は、誰のお蔭でなさいました。

知れたことをと思へば、忠雄は思考もなく、

『それは……意氣路なしながら。

とお絹の方を尻眼に掛けて、

『私の力でございます。

『それは間違ひだよ、學校の方はお前の力だらうが、その力を激まして下すつた方があります。

耳新らしき母の言葉、我が力に我が卒業したが、何の不思議。

『變なことを……如何いふ譯だか伺ひませう。
と肱を張つて掛れば、
『聞かぬとて云はんでは置きません。
母は柳の柔らかき中に、折れぬ處あり。
聞ひて見れば、何程云ふても聞かぬ忠雄が怠惰癖を正さんとて、お絹種々と氣を疲らせし果が、苦肉の計客を思ひ浮べ、母にも相談し忠雄の親にも云ふて、今日のやうなる事にならば、兩人證人に立て貰ひ、移ろはぬ常盤の色を、忠雄に訴えれば濟まんとて、態と飽きしやうに忠雄を罵り耻かしめしなり。元より外の心はなくお絹可愛しと計り、學問を捨てし忠雄なれば、計畧その圖に當りて、忠雄が意馬の手綱の縷は元へ戻り、首尾よく今度の卒業。忠雄の母は直にもこの事を明かさんとせしが、同じくはお絹と並べた席に打ち出したらば、味も一層にて後の契の結び目、いよ／＼固からんと口へ出さず。さるに今日忠雄が、それとなく五十嵐が行くといふに、先日歸りて來たりし時の忠雄の振舞を、襖の影にて見たれば、何事か仕出來させてはならず、と引き違えて跡を附け、此處に來會せし譯。とお絹の母と互代に說かれて、今更耻かしき若氣の短慮に萎れ還りぬ。
又有るまじきお絹の心性を知りては、慕はしさは前に一際增して、氣早く寫眞など破りし事の口惜しく、一言もなく謝びるやら、禮言ふやらして、二人が中は後の世も又後の世も、替らぬ證據を女蝶男蝶の銚

子に見せて、濟んだことは、それ〴〵寐物語。

（をはり）

◉俠魂

（其一）

酒召しませ、お肴には鯉の濃汁鯰の蒲燒、お望みとあらば畑のものも心を酒旗に閃らつかせて、豐後は松浦川の岸、水床足に騷ぐところに、浮世めきたる草の家。座敷は一間二間なれど、掃き庭三坪ばかり取りて、飛石の置き樣都振たるは梅若葉繁る綠屋とて、石燈籠もの欲しげに小首傾けても、吹き通す風の價は取らぬを自慢の店と名高し。

肥前蓮池の城主、鍋島攝津守殿の御内に、さるものありと知られぬ小林喜兵衞、面摩れの横鬢より年の波は剃げ込めて、分別盛の四十には一つ二つ若く。今一人は喜兵衞と同じ小身もの、折々の追從笑心の底の見透ひて卑賤しく、年も同じやうに三十の坂七合ほどまで、大越半藏といふ武士なり。』

入梅開のおり〳〵日を笠に避けて、釣竿を肩に兩人ゆらりと綠屋に入り、亭主よきものはあるかといへ

ば、片襷の手を前垂れに拭きながら飛んで出で、一昨日からの天氣續き、松浦川の泥水も濟みたれば、釣は大のお好き、今日あたりはと待ちて、昨日は詐され、今朝は必然と虫の知らせに、浮草まぶれの大鯉、殺しもせず活して置きたり。菊川銘酒の口切りに、庖丁自慢の鯉のさし身、これにても落ずば落る頬と取り替へて來給へ。何はさて、先づ例のお座敷へと、獨り喋り獨り笑ふ商業上手、喜兵衛堪らぬと額を擦でれば、半藏咽喉を鳴らして驅け上りぬ。

頭の壓し人はなき大胡座、理に落ちぬ酒は廻り早くて、差しつ押えつ、酌ぐ程に飲むほどに、下瞼に紅隈とつて、上目遣ひ重たく、乾く唇舌舐め摩らして、言葉まで蹣跚く大越半藏。何を感じてか、乍理らしく歎息して、小林聞て下され、我先祖は大越太郎左衛門、太郎左衛門は則ち我先祖なり。大强のものとて國中に動搖渡り、大坂御陣矢合せの砌り、似合しき御奉公仕りたりとて、父帶刀の代まで、千石の祿高を頂戴したる家柄あるが、帶刀風邪の心地より餘病を曳き出だして、定命盡るときか、我家の廢る秋か、ころり墓石と姿を變へられ、後嗣は相違なく我に下し置れたれども、我東西知らぬ赤兒なりしかば、御用勤め難しと千石は召し上げ切り。四十年に近き今日まで、赤兒と同しときの僅かの扶持、武役も人並に仕らねばならず、家柄とて交際は張る、少しの遺物は賣り盡しても貧窮は何時までも追懸け來て、妻貰ふ力なきまでに零落、孤獨身に一僕召仕ふて、明日の食糧を氣配ひ、快く炊烟も上げ得ぬとは、よく〳〵惡き星の生れ替りたるなるべし。と述懷して冷へたる猪口の酒を飲み干し、人手を待たず獨酌に

滿み〱。

然るに、と又一口飲むで眼を据へ、この程御當地へ來り、眞影一流の小手先、計らず御城中に聞えて、わざ〱拾ひ上げられ、即座に若殿の御指南番と成りすまし、二百石の祿を頂くは、我等とは雲泥の相違にて、彼奴に當る星の羨ましや。武田淺右衛門と名乘れど、拜領の御紋服褫ぎ取らば、編笠一蓋の浪人もの、人を討つて、命惜しさに逃げ隱れし加賀の士、堀伊右衛門とは見違ゑもすまい。當時出頭並びなきに肩を聳立て、新參の分際にて譜代の我々を足下に見下し、出るまゝの棒杭、横柄の擧止は、弓矢八幡も當にはならぬ世なり。禍福善惡を說く佛は、あざなへる繩を捻り戻したると覺し。

何時來りたるか、心計りの四目垣の外、梅の一と枝さし出たる木下蔭に、天下を我が家として、日の照る空を天井と思ひ、草の繁る地を青疊と見て、三日成つては忘られぬ境界、と無事を樂しむ菰被り一人。脊を此方に向けて、虫狩してありしが不圖小林の眼に入りて、急に大越の大聲を押へ、見られよ。と指さして半藏に知らせ、壁にも耳はある世に、四邊關係はぬ怨言、心あらばせぬものよと云ふ喜兵衛が忠告を、醉ひたるもの丶癖にて聞き入れず、半藏外の方を向き替へて、なんと其處な菰奴、今言ふた我が言詞を、道理と聞たるか。と大聲に問へば、菰被り立ち上りて、お旦那お手の內と云ふ。半藏大口あひて、から〱と笑ひ、手の內遣るとは云はず、馬鹿奴。と叱り附くれば手拭被り直して、小股走りに迯げて行きぬ。

此上半藏を醉しては、介抱に手の掛りて、折角樂しみて來りし川狩の一事は、水に流れ行かんと堪兼て、喜兵衛半藏を急き立つれは、醉たれど本性違はず、いざと足元より鳥の立つ如く、我のみ仕度して立ち上り、我は舟の方をと云ひ捨て、勘定の聲聞かぬうちに、半藏は敷居を跨き越えたり。

榛の木蔭の金剛を、しどろの足元に曳きずり、喜兵衛も待ち合せず獨り川端を歩みて行けば、常見馴れたる舟小屋に來りけり。中にごそ〳〵と人音するに、船頭奴かと川を見れば舟はなし、小屋の物音は怪し。と醉ひ心留め難く、餘計な世話ながら好むでして見たくて、半藏その前に仁王立に突立ち、小屋に居るは何奴ぞ。と高聲に罵れば戰え聲して、腹の痛激しくて歩行くこともならず、暫時明小屋を借り申たる乞食といふ。

半藏垂れ菰の間隙より覗きて見れば、其處に俯伏して、如何にも腹痛の態なり。莞爾と獨り笑みして、是れ菰被りどの、其方に折入つての無心あり、武士が頼むといふ一言、冥加至極と心得て、無理なりとも聞ひて貰はねばならず。外でもなし、我先つ頃國貞の脇差まだ荒身なるを求め得たれど、切れ味は試みたることなし。幸ひ今日も差來りたれば、其方の一命を我貰ひ受けて、生胴を試みたし。但し一命申請けたる報酬には、懇ろに我が菩提所に葬り、善智識に經文讀ませて、立派に石碑の主とすべく、七日〳〵の弔ひを他人とは思はず、浮ばれるやうにして取らすべし。何んと不用の命、惜まず我に呉ぬかと云へば、菰被りむく〳〵と頭を擡げて、垢染斑らの顏に、怨めしさうな眼付して半藏を睨め、思ひの外

の御所望、さりとは迷惑至極なり。外ならぬ御武家樣のお賴み、應と申たけれど、蚤蟻の虫けらさへ命惜しきはこの世の習慣、まして是れは五尺の男一疋、恥を捨てゝ人の袖の下の惠みに露の命を繼ぐは、惜しからでは出來まじきこと、外の御用なれば何なと可厭は申まじ、これ計りは偏にお免を、と額幾度か土を摩りぬ。

情は微塵も知らぬ半藏、朦朧たる醉眼豁然とおつ開ひて、默れ乞食、扨も其方は未練なる心かな。我が言ふ道理を特と聞ひて、死際の引導とせよかし。男一疋、五尺の身體、如何にも立派の人間なり。いやしくも人と生れて、あることか、垢面を諸人の門前に晒らして恥と思はず、一握りの喰ひ殘し飯、半片の鐚錢に、大事の首を輕々と下け、風雨霜雪に體を任せて、菰一枚に肌を飾るは、人の爲すべき業くれか、犬猫さへ家はあるに、それにも劣りたる生界、見ても唾の走る姿に、よく愛想の盡きぬことよ。呼吸ある中はそれもよし、恥辱と思はねば譴ねど、蜉蝣の一命、白露の朝も待たで消えし亡體を如何にと見れば、路頭に殪れて烏の嘴に眼の玉を突れ、野末に横はらば山犬の牙に臟腑を喰はれん。夢のこの世の別離を惜んで、死後までも恥辱を殘すは愚かならずや。されど若し我が望みに從ふ時は、それ等の恥辱は隱して晒さず、疊の上に眼を眠りしと同じく、懇ろの吊ひを受けて餓鬼道の辻に迷はず、佛果を極樂に得て蓮の臺に座り、彌陀の本尊を目前に拜むべし、これにてもまだ夢の醒めぬか。と聖人めかして有難げに說けば、菰被りは俯向て何とも言はず、焦慮りて如何に〳〵と急けど無言なり。半藏足拍子鳴ら

して暴怒ち、この大越半藏、一言云ひ出して後へ退くは嫌ひなり、たとへ可厭と云とも貰ひ掛けし一命取らで置べき。砂濱へ曳ずり行きて、眞二つ。覺期せよと叫べば、垢に黒みたる顔に、底光りの眼可恐しく、起き上つて膝に兩手を突き、如何に申ても許さぬとあれば是非もなし、乞食となり果ても男は男なり、一命確にさし上げ申べし、暫時待たせ給へ。と云ふ態度、少しも動ぜぬことの不思議や。

（其二）

菰被りの世迷ひ言、待てとは何を待てか、胴と足との別れ際、上は極樂へ下は地獄へ、分れて行くも不都合あるべし、迷はぬやうによく暇乞をせよ。と半藏は嘲笑ひて、小屋傍の河原石に尻を預け、黄平漆紋の衫、二の腕まで卷くり上げて、腰の扇子を拔き出し、胸毛そよ附かせて待てば、ことり〳〵と音をさせて、小屋には何かする樣なり。六月の日光に燒かれて、餘熱肌に浸み込み、汗毛穴よりおり〳〵と迸りて眼ぐら〳〵とすれば、乞食名殘はまだ盡ぬか。と聲を掛ける途端、應と答えて垂れ菰を刎ね上げ、跳り出てし人は。

只見れば先刻の乞食、細金實の腹卷緊乎と〆めて、一枚金の鉢卷に亂れ毛を押ね、太き竹杖左手に下げて、大越の鼻の先に踏み跨り、身に大望のあればこそ、先刻より言辭を盡して詫びぬでもよきに詫び、無理を道理に聞ひて避けて通すは、大事仕遂るまでの命惜しき故なり。さるを弱きものと蔑りて、如何にしても一命取りたきといふ、眞の武士ならぬ汝ごとき無分別なる馬鹿者の、相手になるは好ましか

らねど、手を束ねて命は捨て難し。いざ切れ、早く起て。おのれ如きへろ〲武士、五人十人來たりしとて、やはかこの首は渡すまじ。と提けたる竹杖二つに割れば、緣頭鍔目貫、眩きまでの黄金造りの鞘拂ふて目先へ突き附け、關近江守兼道が、君万歳と打たる二つ銘の二尺七寸とくと見たらば、汝が自慢の國貞の一と口見たしと名乘る姿、一分の間隙もなし。容姿こそ變らぬ乞食なれ、大越半藏案に相違し、氣を呑まれて柄へ手を掛たる儘、拔き合す氣色もなく、尻込みに後へ〱と下がり、酒の醉も何處へか消えて、晝頃の朝顔日に萎靡ぬ。

後れて綠屋の門を跨きし喜兵衞、河原傳ひに遙かこの有樣を見てとり、大越が身體危ふしと韋駄天走り、風を切つて近附き、鈎竿捨てゝ大手を擴げ、白刃の先へ飛び込みて半藏を後背に圍ひ、我はこのものゝ朋友なり、何事の行違ひより破れてこの仕末、委細承りたしと睨め附くれば、我は先刻に、綠屋とか云ふ酒店の垣の外に居りし乞食なり、腹痛凌かんと明小屋に在りしを、その者無體の所望を仕掛けて、我一命を貰ひ受けんと云ふに、大望ある惜しき我なれば、身を謙退り、言詞を盡し、さま〲謝びて見たれど、中々に宥さず、たつてと强ゆるに手を束ては死に難く、武士道の表面余義なく立合ひ申と、辨舌は松浦の川波にうたかたの防害もなし。

喜兵衞聞ひて笠の紐とく〱腰を跼め、お言詞聞き參らせては、一向驚くより外はなし。これはこのものゝ曲ごと、平常より酒の癖惡くして、愼めと云ひ聞かするは數へ難き程なれど、猪口見ては逃し兼る

好者とて、御覽の通り今日も斯の如く過し居りぬ。不禮は幾重にもお謝び致さすべければ、何事も酒興、本心にあらぬ醉奴の惡戯。と我にお預け下さるべしと首を下げて、後ろなる半藏の袖一寸曳けば、その心を得て半藏は、喜兵衞の身體を小楯に取り、御不禮面目もなし、何卒お免しと見苦しく謝びれば、乞食も手を上げて禮を返し、歴々のお武士がたが斯樣事を分けて仰せらるゝは、身に過ぎて冥利の程も恐ろし。先刻にも申たる如く、乞食は乞食相應に身の願ひもあれば、決して此方より事は好み申さず。お聞き苦しき廣言は、今更汗の至り、何卒お手上げられて。と莞爾としながら刀の塵を拂へば、喜兵衞の口利に、この雨風靜りて、何事も元の鞘へすらりと納まりぬ。

俄然の事に、恥かしながら心顚倒して、まだ名乘りも申さず、武士道にあるまじき擧動、お免し下さるべし。かく申すは、肥前蓮池の城主鍋島攝津守どの御内に、下方の御役勤むる小林喜兵衞。と名乘れる尻に附て、腕まくりを面目なげに下し、先の威勢は何處へやら、同し家中に仕ふる武士の片割れ、大越半藏と青菜に鹽なり。喜兵衞言辭を改めて、襤褸に包み給ふ名玉の御姓名はと問へば、御覽の通り菰一枚に肌は包みても、恥は隱れもなき袖乞ひと答ふ。怨しきお言辭、包み給ふはまだお心解けぬか、喜兵衞に武士を捨よとの爲されかた。語るに足らぬと思召すは無理ならねど、兩刀帶び給ふ仁には似合しからぬ情なり、是非に御名乘り。と道理に責められ、默然としてありしが、女はおのれを知るもの丶爲めに姿をつくるとや、君が一言の情には我が百とせの怨も解けたり。少と人には憚る名ながら、多宮仙助

と呼ぶは昔し、今はそれも雨露に褪げたりと俯向く。

さらばと云ひ捨て行く仙助を、喜兵衞暫時と呼び留め、懊惱き奴と思ぼすは承知の上、まだ聞き參らせたきことを殘したればと聲を密めて、多宮氏、貴殿は不倶戴天の仇讎を探ねて、そのお容姿ならん。いや隱し給ふはお心掛けさこそと感じ申たり。今の先刻遇ひ參らせて、今又斯樣打ち出せば、誰しも包み給ふは道理なり。自分に申は可笑しけれど、喜兵衞は義俠の眞似をと心懸る癖ありて、時折は身に相應しからぬ腕立、最早止めに致さんとは思へど、目に懸るもの丶あれば、この胸がいかな承知をせず。先刻も名乘り給ふを聞けば、輕からぬ大望ありて、惜しき一命と仰せられたり。お容姿を見申せば、細金實の腹卷、一枚金の鉢卷、今日浪人して活計なき乞食の、金拵えに曇りなき刀は、心無くてはせぬ嗜好あり。日頃の癖むら／＼として堪ね難く候、一樹一河も他生の緣、隱し給ふ譯精細に聞き申たく、若し仇讐をこの城下に追ひ込まれたるほどならば、首尾して御手引もいたし、及ばずながら半臂の御力ともなるべし。聞かさば他に洩れん御心配は御無用、言はぬと誓へば喜兵衞は骨が粉になるとも、三寸の舌の爛る丶とも、一命掛けて申まじ。と思ひ込みたるさまに腰刀拔ひて即座の金打、多宮氏御返答は。』

餘熱少し冷へ掛りたるに大越半藏は口を出して、事を分けて云ふ小林の言辭、多宮氏何と聞かれし。御返辭のなきは御不承知か、御不承知ならば、貴殿のお爲め宜かるまじ。知らる丶通り兩人は、この地の役人に知己少なからず、罷り歸つて役向へ只今河原に胡散嗅きもの、腹卷鉢卷の威もの造りして徘徊さ

廻るを見たり。何とも點合行かぬ擧動は、よしなき事を企つるものか、盗人か知れず、早々人を向けて召捕り、詮議あるべしと訴へなば、氣の毒ながら貴殿は縲絏の恥辱、さありては折角の大望も、水の泡なるべし。何も兩人邪魔を入れ、貴殿の迷惑を喜ぶといふ惡しきことにはあらで、仇讐の手引して及ばずながら一臂のお力となり申べしとは、寐て待つ果報、開ひたる口に餅の這入ると同しことなり。金打までさせて隱し給ふは武士にあるまじき所業、斯く申半藏も醉は大分に醒めたれば。この度は大信實の話と、苦々しげに喜兵衞が目顔に知らするも曉らず、乘り掛つて喋る袖を強く曳かれ、後へだち／＼と蹌踉めくに言詞は切れて、目許り見張る梟の可笑しや。

仙助、半藏が喋る方には目も呉れず、腕を組んで土偶のごとく、喜兵衞の顔と自己が胸とを照り合せて、暫時思案の態なりしが、小林氏お免下され、無雜と人に打ち明け難き大事を胸三寸に疊めば、そでなき無禮も致したれ、鐵石の御胸中とは見貫きたるのみならで、半面の知己なる我に、酌み兼ぬる程の御信實、頑固の心今こそ解けて、委細御話し致すべし。成る程お察し正鵠に當りて、如何にも仇敵一人を持ちたり。御城中に潜み居るとは確かに知れど、助太刀は願ひ申さず、只だ首尾の御相談申て、不知案内のお手引願ふのみ。と初めより斷りて、扨てと緒口を切れば、喜兵衞は小屋を見て、此處にては語るも辛らく聞くも辛らし、彼處にてゆるりと云へば、首肯く仙助に半藏袖を潜りて走り、小屋の中に菰二枚布ひて、主人めかす挨拶ぶり可笑しく、小手招きしてこれへ／＼。

（其三）

瓶子逆かに掛けしを、僧都が手を打つて喜び給ひし鹿谷の別莊ならねど、影眞直なる日中に、人足とんと絶えし河原の一つ家、川波岸を嚙みて咳くのみ、鳥一羽下さぬ氣安さ。一枚の蓆に仙助を乘せて上坐に直し、喜兵衞半藏は半座づゝ分けて下に坐り、鼎形取りたる座組定りて、扨如何にと仙助が口開くを待てば、先刻は事に雜れて精しく名乘らず、改めて告げ申姓名は加賀の國の住人、大聖寺の御城に仕へ申多宮仙助、當年二十六歲の黃口孺子なり。事實は河原の眞砂の數々繁けれど、最初より語らねば仔細は盡し難し、飽かで暫時の間を貸し給へ。

多宮の一族に堀伊兵衞といふものあり。同じ大聖寺の御城に仕へたる身ありしが、假初の風邪の臥床日に增し重り、定まりたる命數は尊き權者も遁れ難くと云ふに、凡人の伊兵衞昨日は小鼻の窪みて落ち、今日は頰骨の殊更に表はれ、さんざんに瘦せ弱へて、黃泉の迎ひ目に見ゆるやうなれば、耆扁の針灸藥餌も水となりて効なく、一夜無常の風に誘はれて、魂魄空に歸り、六十三を名殘の遺骸は、妻子眷屬が淚に送られて、菩提所の仙福寺と云ふ山寺へ住居を替へ、生々しき土饅頭に手向の葉雫を受けて、夕部の嵐夜半の月、昨日は夢と百か日も過ぎれば、伊兵衞が悴伊右衞門に傳來の祿高五百石確かに下され、家督相違なく、繼目の御禮首尾申上ければ、卒土婆となりし伊兵衞どのも、安心して極樂へ急がれたるなるべし。

重役廻りも滯りなく濟ませし次の日、相續の祝の莚、堀家は手狹なればとて一族多宮の家にて開くことにありぬ。こは我が家にて、その時の主は將監と呼ばれ、我が父にて坐せり。親屬遠緣、さては知己の人々さへ招きて、伊右衛門一世の祝ひなればと、將監殊に心を注けられ、饗應美を盡し善を盡し。その上ならず今日の主人伊右衛門相撲の大好者なれば、餘興には多宮家に召抱へたる力士に相撲はせて、伊右衛門を慰めんと、庭先近々と土俵築き上げたる注意こそ、後の仇なりと知らぬ淺猿しさよ。

此の催あるを聞きて、元來好きの伊右衛門、おのれが抱えの力士もあれば、よき折柄將監方の力士と合せて見んと所由なきことを企て、赤鬼、仁王倒などいふ力自慢のものを引き連れて來り、番數拵へて合せ見に、伊右衛門方の力士とも隨分結びまで取るものなれど、その日は如何したりけん、一人も砂の附かぬはなく、殊更伊右衛門が頼み切つたる秘藏の赤鬼、將監方の鐵金輪が爲めに腕車の一手に懸けられ、土俵の左右前後を風車の廻りたらんやうにふり歩行かれ、眼闇みて綿となりたるを見濟し、鐵金輪の一聲鋭く、土俵の眞只中へ、ゑいやつと投つくれば、俯向に倒れて大の字を砂に殘し、鼻を打ちて鮮血夥しく、息詰りて暫時く起き上からん力もなく、さん〴〵の態體餘り見苦しければ、看物の一同聲を上げて、やんや、赤鬼どのこそ、赤味噌どのになられたり、と席を崩してどつと笑ふ。

胸は修羅と燃えて、兩手に熱湯を握り、片唾を猪口の酒に呑み込み、さあらぬ態に落付を見せたる伊右衛門、將監方の力士に一番も負けたるはなく、今又片腕と頼みし赤鬼さへ半死半生の有樣、その上なら

ず一同に笑ひ掛けられ、若氣の思慮赫乎と上氣して、顔は夕映衒ふ紅葉より赤く、眼尻米嚙みまで釣り上りて、物も言はず突立ち上り、羽織袴を手早く投捨て、獨鼻褌緊乎と〆め上げて土俵の中へひらりと跳り出て、角力には必らす結びといふ事あり、將監御出あれ。いざ一番と力足踏む氣色何處やら穩かならねば、老の前途を氣遣ふて將監何氣なく打笑ひ、座興も事にこそ、將監今十年も若ければ相手すべきなれど、六十の坂を登る身にて、若年者を相手に角力とはおとなげなし、あたら老の腰骨打ち折りたらんには、今端の御奉公の支え。これ計りは御免候へと一座を見れば、深きこゝろを知るも知らぬも、伊右衞門が擧動苦々しと笑止がりて、老餘の將監に左袒し、口を揃えて取り成すといへど、伊右衞門頑に頭を振りて中々に聞き入れず、何も座興なるに、事／＼しく仰せらるゝこそ心得ぬ。名乘り掛けられて尻込み給ふは、潛り過ぎたる門松に、老の恐氣付き給ふと覺えたり。さらずは折角此處に出し我を、相手に取つて不足と思ぼし、丸裸に恥辱晒さする心か、その分ならば多衆の人の手前、尊長なりとも用捨はなし。相手せらるゝか、恥かしめ給ふかと、理非も盲目に騷き立ちて、高聲にいひ募り、相手せずばさし違へんず氣色。一つは抱えの力士の負けたる口惜しさなれど、實に酒は狂氣の水なりかし。

今日の主人に不興ありては、折角の饗應も風後の花、一座の興を雨後の月にするも心一つなり。と詮方なげに起ちて、負も勝も一時の遊興、さらば將監相手いたすべし、角力は只一番として、かまえて後日

の遺恨を含みなせそ。と裸體になれば、云ふまでか、ほんの座興なり、老體砂摑む格期し給へと憚らず
廣言して、將監土俵蹈む頃には、伊右衛門早や蹲踞りて待ちたり。靜かに身構る相手に、伊右衛門いよ
〳〵焦慮り、行司が引く團扇より早く、稻妻の一と投げと飛び來るを、右に左に二三度透かし、自己の
力を身體に餘して、よろ〳〵とする脊の眞中、顧回りざまの將監力を籠めて、兩手突一つ吳れば、立つ
足力なく爪先に走りて、伊右衛門手もなく土俵の外に出たり。

座興とは云へ、老たるものゝ若きものに勝ちては、行司が高く上げたる團扇も苦々しく、おとなげなし
と人の笑はんも恥かしければ、將監そこ〳〵に土俵を下りんとするを、伊右衛門抱きながら呼び留め、
只今足の筋の釣りて踏み對へなく、思はず勝を讓りたり、今一と勝負と云ふ。老の手對へ餘り弱々しと
思ひしに、扨は痛所のありたりけるよ、實輸贏を賭ける程にもあらねば、以前の約束通りこれにて止む
べし。身體も疲れたれば、勝は將監に讓りて、老木に花を咲かせてほし、負けならぬ怪我負は一同も承
知のこと。と云はせも果てず、比怯なり將監、當座の輿と拔けて我に恥辱かゞやかせ、死際近かき身に
勝を驕るゝ武士道に有るまじき心得なり。輸贏は賭けぬと云へど、誠の勝負なくては角力とは云はれ
じ、是非に今一勝負あれ、さなくば是處を下さぬ。と傍若無人に罵り、將監が犢鼻褌の結目を取つて動
かさねば、事を好まぬ將監なれど、餘りの過言許し難く、萬座の人にも面目なくて、土俵の中に踏み止
り、穩かなれど言辭を讓れば、出る儘の廣言聞く耳痛し。若年ものゝ瘦せ腕にて、老強漢に勝たんと

は、卵積み重ねて盤石に當る小賢しさ、負じ魂砂に埋めて呉れんずと再び立ち合へば、將監は年こそ老たれ、若年の頃鍊えし力瘤中々に散らで、しやにむに組みて金剛力を出し、捻り倒さんと結目を取る伊右衛門がさし手、腰を捻つて引つ外し、貫拔に輕々と釣るして、焦慮るを何の思慮もなく土俵際まで運び、此處らと大の男を打捨れば、悶がく伊右衛門踏み外して仰さまに轉けたるは、さながら手鞠に似てほんの他愛なし。

我から望むで、虎穴を捜りたる小鼠の、眠れる虎の鬚をせゝりて、一聲唸られたらんやうにて、廣言せしに似氣なく、有るまじき負に伊右衛門面目を失ひ、一座に顔見らるゝも辛らく、只笑みて計り居る將監も、無言に嘲けると覺え、耳に入る話聲、目に寫る人の擧動、一つ〳〵胸に對へ心柄に潛り廻る茨の林は、右も左も刺ばかりの思ひして、顔は土色に變り、手足に顫動の附きて、身體にまみれたる砂さへ碌々に掃ひ落とさで、座に歸るが早き衣紋も直さず、衣裳名のみに着て大小刀袴を丸げて一所に、取り敢へず小脇に搔ひ込み、一同に會釋もなく、怨めしげに將監を尻眼に睨み付けて、血相惡しく座を退かれば、折角の饗應も落花狼籍に散り果てゝ、以の外の不興と變り、呑み掛けの酒もそこ〳〵と、來客一人立ち二人退り、取り殘されしは手持ちなき詮方なさに、せめてもと懇篤の禮云はるゝ氣の毒さ、跡は膳椀皿小鉢、其處此處に算を亂して、重なり合ふ折れ箸を弓矢鎗刀と見れば、戰場の後の趣その儘に疎ましや。

年甲斐もなく一圖の事して、青雲前の若者を恥しめしはと後に悔みて、將監それより二三度堀家を問ひたれど、留守と云ひ、病氣と稱え、浮世通りの嘘を楯に、伊右衞門面會を嫌へば、心互に通はずなりて、怨憤ゝ彌が上に深み此方にてはさも思はねど、彼方より覗き難き中垣を結びて一族の和好此處に絶え、先祖の同じ腹より出しは忘れ、果ては殿中に遇ふても言葉一つ交さず、途中に摩違へば、顏を脊向けて赤の他人にもあるまじき擧動淺猿し。不和の元は、成程將監が堪忍袋、年甲斐もなく切らせしは悪しけれど、父なき後の父に均しき尊長に、爭ひを挑みし伊右衞門が罪ならずとは云へまい。將監見ぬ顏して厚氷自然と解るを待てば春過ぎて、夏來にけらし半年餘りは何に事もなく過ぎて、鐘聞かぬ里もかな、一年の哀を一時に集めし可厭な秋となりけり。

（其四）

生あれば死ありと孔子は曰ひ、佛は生者必滅と說かれ、紫野の大和尙、元日髑髏を杖に掛けて、人間は白骨包む血の袋と悟されたれど、凡俗の執念無明の光に燒けず、念頭忘れもせねど思ひ出るときなく、我が身一つの秋にはあらねど、目に見る度の胸は千々に哀しや。

其の年秋は最中の八月十五日、伊兵衞葬りたる仙福寺の住持より消息して、二三日の空工合殊に穩かに、この分ならば今宵も、雲の惡戲はあるまじく、男どもに云ひ含めて、今朝より庭の箒目を立てさせたれば、目違ふほど淸げになりて、穗に出し尾花の元の萩桔梗、人待ち顏なるも可笑し。例の奈良茶、

焼米も用意したれば、日暮る頃より登られて、芭蕉叩く窓に肱を持たせて、松か枝轉ぶ眞如の月を賞翫するは如何に、其心して待つと書きたり。住持は山寺に似合しからぬ風流にて、香茶の湯花に馴染みて、碁詩歌にも闇からず、殊更父將監とは、笑ふて憎み合ふ好き碁敵手なれは、日頃の交際淺からずして勤仕の間暇には寺に登り、寢栖に急ぐ鳥に驚かされ、撞き出す夕暮の鐘に送られて歸らるゝこと常なり。屆きたる消息一向に喜ばれて、嬉しき旨を書き返し、待ち兼ねてや晝餉濟して少し過ぎ、若徒一人、下部一人を連れて出てられしこそ、御顔面の見納め、お言辭の聞き仕舞と、我も知らねば父も知らず、若し夢にだも怪しと知らば、逆ふても留めしものを。

今月今宵の月、一度西の端山に落ちなば、來る秋ならでは遇ひ難しと見惜しみ、奈良茶一杯に清談盡くる間隙なく、風流に現をぬかして、夜の更くるも知らず。光明赤々と形大きうなる月の、惜しや有らずもかなの茂へ落ち入りたる頃は、早や曉近くなりたり。さらばと暇乞ふを住持は打ち消して、是より歸り給はば、家の門跨く頃に鳥鳴き渡りて、枕落付かぬ間に東は赤うなるべし、供達が快く夜船漕ぐを、心なく起すも罪なれば、嘴破れ蚊は懊惱くとも、此家に一と夜を明かして、明日歸り給へと云ふも聞かで、明日は殿中に去り難き要事あれば、黎明に出仕せねばならず。又こそと云ふて自から供のものを起し、信切を袖にして出づれば、老體の夜深步行き、霧に濕るゝは毒なり。と呟くを笑ひて、腰は程なく梓弓なれど、入梅頃の白木弓の狂ひは出ず。と暇乞ひせられたるは、如何でも逃がれぬ天命是非もなし、

覗ふものありと知り給はんには、押しても一夜宿り給はんに。

夜は世界を黎明に譲りて一段と闇らく、霧朦朧と立籠めて爪先も分明らぬ中を、丸巴の紋付けたる燈灯下部に持たせ、後に附く若徒を傍に呼びて話し相手としながら、山寺を出離るれば十万石ばかり一目の田なり。十束八束に穂波重き間を分けて、畝道傳ひ曲り廻る中に衣裳は霧に玄つとりと、草履は草に置く霧を吸ひて足掌冷々とす。製作可笑しき見覺の案山子に、蜿蜒る蛇腹の道半分ほど來たりたりと知れば、仙福寺の鐘脊を叩きて、七つと數へ盡す頃畝道も盡きて、家に遠からぬ松並木へ懸りぬ。

蓊鬱茂る老樹若幹、道の左右より枝を接ぎ合せ、葉を組み重ねて日さへ覗かず。風なきに鳴りて物凄き中を飛根避けつゝ辿れば、次第に松は疎らにありて、こゝ片野と呼ぶ地藏堂。立ち並ぶ閻魔石の片蔭に、物こそあり、薄暗うなりたる燈灯に見れば、非人壹人、菰頭よりすつぽり被りて、草を敷寐に石枕、よくも夢は騒がぬものよと。若徒に話しながら行くを遣り過ごし、非人は突然に菰を刎ねて跳り上り、拔く手も見せず下部が下げし燈灯をばらりと切り拂ひ、返す刀に父將監が肩先、後袈裟に野深く一と大刀、や何奴、と柄に手を掛る聲を案內に、閃めく刄光りは右手その儘に切り離され、老體の痛手いかで堪へむ、蹣跚き掛りて其處に縋るゝを見透し、下部は腰も立たず蟇耻かしく這ふて逃ぐれど、若徒は拔き合して申譯に二三合、鋭き癖者が白刄鼻先に閃めき、後へ／＼と切り卷くらるれば、命あつての物種と引つ外して霧を潜りぬ。

轉びつ倒けつ、下部が歸り來たりしといふに、我は眼を覺まして、緣端近々と注進を聞けば、下部は齒の根も合はず、土氣色に目ばかりきよろつかせ、口は開いても聲は詰り、只後の方をしきりに指さすは只事ならず。度胸を突ひて刀を杖に身を起さんとすれば、若徒髻刎ねし散し髪に、刄物を引投げて驅け込み、敷石に動乎と坐りて、大殿、片野の地藏堂、癖者、と切れ〴〵なる言葉を聞き取り、おつ取り刀して緣側より飛び下り、地藏堂と聞くを栞りに、ひた走りに走りて千里一と跳來りて見れば、曉かりし。癖ものゝ影はなくて、鮮血其處此處に夥たゞしく、秋の錦を目前に染めて、知らず顏の閻魔石の傍に親人は俯向に倒れ給ふ。走り寄つて抱き起し、二聲三聲呼びて見れど、胸先冷たく脈は絶えたり。明方の風松を渡るに、露呑んで鳴く虫の序破急、答ふるは我が呼子鳥のみなり。折から家僮の二三人、我に續いて走りたるが、今來て亡體に取り附き、我と同じやうな事するを、最早甲斐なしと我先づ悟り顏に慰め、程近き田舍家に炊烟上げたるを起して、戸板一枚、菰一とひらを買ひ取らせ、淺猿しの姿人目に懸けじと繕ふとき見れば、右の手は柄を握り給ふまゝ、二の腕より體を離れたるこそ、平常の氣性の考へられて、無念は此處に留まりたるならん。と仙助傍なる刀の柄を指して喜兵衛半藏に示し、懷舊の臟腑を絞る涙、はら〳〵と襤褸の膝を濡しけり。

彼れも此れも涙繁くて、六つの袖絞る中に、殊更なる喜兵衛が義俠心、唇を齒に喰ひしばりて薄う血の浸染みけり。仙助逸早く涙を拂ひて、それより花は昔しの亡體を乘せたる戸板を家僮に荷はせ、家に歸

りて佛間に家屬を集め、親人の平常として人より意趣を受けらるゝとも覺えぬに、白刃は闇に晃めきて名乗り合ひもせぬ御最期は、いとゞ不思議けれど、さりとて切取り强盗の業とは受けられぬ有樣なり。物一つ落しあらぬ癖者の强膽に、怨憤を晴らす手掛り更になくて、ほと〳〵に困じぬ。誰にもあれ心附きたる意趣のあらば、隱さず話して見るべしと云へば、最後に居合せし若徒する〳〵と席に進みて、此の春ありし角力の仕末委細しく話して、これにもやあらむと云ふ。一坐顏見合せて、誰れも伊右衞門、此れも伊右衞門と衆口齊しかるに、我も思ひ合すことあり。其折我は江戸に在りて、國元を離れたれば意趣の樣子委しく知らねど、歸へり來て見れば往來繁かりし堀家と音信不通の樣なり。何さま伊右衞門こそ怪し、と我れも初めて疑ひぬ。

證據あらば即坐に打て捨ん心なれば、仕度を緊乎と下に着込み、親人が今際に帶び給ひし重代の刀を引提げ、程近からぬ掘の住居へ何氣なき顏して訪問れるに、門に閂掛りて人の氣配なし。扨てはと氣の焦慮ちて後に廻れバ、出入の口引き閉たるまゝなり。其處より入りて見れば、諸道具ざつと取り片附けて、見惽しからぬ有樣は、召使ふものにも暇を出して獨身の心易く、遠より格期せしごとく覺しくて、子供連れて遊ぶ長押の鼠、不意の人に驚き騒ぎ、垣潛る野良犬臺所嗅いで通りけり。後闇からぬ人の無殘と迯走らんやうはなし、仇敵は確かに伊右衞門。と正鵠を付けたれど、蟬は殼を殘して何處の梢を鳴くやら。

赤澤山の木の間隠れ、誰白羽と立つ矢の怨憤は十八年永の日を潜みて、裾野の狩屋の五月雨に、徒然〲なる武士の目を攪したり。我れも仇敵伊右衛門が首切つて、世を早め給ひし無念の亡魂を祭り、之れを孝行の終にせむと思立ち、仇敵討の願書に、お暇願ひを添へて出さむと云ふを母人は留められて、せめて魂魄迷ふなる四十九日を濟してと云ひ給ふに、外に杖柱なき御身はさこそ心細からむと推し量りて、云わるゝ儘に啓行は延ばすことになりぬ。之の日仙福寺の住持も來られて、葬禮の万端信實を盡され、珠數さら〲と揉んで即身成佛と稱へ、頓生菩提と説かれたれど、我れは之れを願はず、只何時迄も影身に添ひて、仇敵の住む所を敎え給へと思ふのみ。やがて佛間の看經濟して、住持我れを傍近かく招かれ、過る夜のことゝも落ちなく語り、物懷中より取り出して、是れは將監どのが朗かなる月に浮かれて、悪戯書せられしもの、その時は何とも思はざりしが、今ぞ絶筆となりたり。と黒染めの袖搔き合はされ打濡りて見ゆるに、聞く我れは懷かしく、手早く披きて見れば、之の夜の最期を知り給はでや墨色常時にまして濃く、風微雲捲啓南軒　萬里賞看月一痕　常避世喧夜來静　松林深所叫孤猿、と書かれたり。さらでも面影忘れ兼ぬるを、筆の痕を見ては其處らに居ますやとの心して、之れよと摑まんとすれば手向し香の煙の靉靆くにぞある。松林深所叫孤猿とは、我が今の境界を知り給ひての吟か、月夜の景趣身に染みて哀れ深く、今更の涙留めん關はなくて流れぬ。

四十九日果つるを待ち兼ねて、仇敵討ちたきよし御家老の手して申上ぐれば、殿にも外ならぬ將監とて、

無念に思すと難有き御言辭を下され、願の旨早速に聞き届けられて、例はなけれど譽まれの旅立。と髪延びたるまゝ御前に召され、御盃の流れを戴き、本望達して芽出度歸參せよ、と首尾よく御暇給はりたり。心逸れば明日とも云はず、嘗て薄々用意したれば、その日親屬を呼び集へて御前の首尾を語り、心計の水盃して家を後に立退き、城下の土橋前途に越して、見送りの人々を歸し、雲抓む万里の旅に草鞋片足蹈み入るれば、棹雁渡る空風の騒ぎて、雜木山に落葉の雨を見せ、片足の蟋蟀薄霜にこそ咽ふらめ。

武者修行と姿を替へて、道筋の國々道場のあるところは洩れなく探ねて江戸へ下り、繁華なる土地とて諸國の人の輻湊れば、暫時此處に足を留めて心長く探ねんと、嘗て知る商人を託み、町家住居に身を窶して一年ばかり。少との手掛りあければ金比羅詣に便船して四國へ渡り、不斗似付かしき話に直と又山陰道へ入りて、因幡の城下を探ねたれどその人今は京に行きたると敎へられたるに、用のなければ足も留めず出立して普化僧と變り、天蓋に顏を隱し尺八に手の內を乞ひ、京に宿を重ぬることや、又一と歳。似合ひたる人にも遇はねば、大阪を歷廻り又京を拔けて、近江の國水口に來り、鳥居播摩守どのが城下を探ぬるときより、今このさまの袖乞に窶しぬ。

（其五）

礎鹿島の要石に續きて、大黑柱數へ憎き程ある大搆え、奥行は覺ゑねど、間口十何間かを黑塗の土藏に

して、鑄物の天水桶五つも据り、用心手桶を三角形りに積み上て、雨避けの小家根さへ添えたるは、時を違へず店先の栖に來ては歸る乙鳥と同しく、子孫曾孫玄孫の數を殖して、算盤に乘せたらば、出店十桁もあるべし。今日は商賣休みてこの見店一體に格子戸を立てたれば、何賣らるゝやら知らず。見世に並びて、四間に六間の黑藏外れし處ろに僅少ある板塀ありて、衡木門さやしやなり。兎も角も水口の城下通つての、大商人の老見世と誰にも一目なるかし。

衡木門明け放して、上下抔つけたる人の出入繁く、讀經の聲微かに洩るゝは、今日は必ず佛のあると覺えたり。餘り賑々しさに手の中には用なけれど、我菰を搖り上げて思はず門前に立てば、主人かと思はれて六十に餘る古禪門、家内步行なから我立姿を見留め、袖乞ぞの、僅少なれど手の內參らせんと云ふ。呼び留められては迯げも得ならず、小腰龜めて衡木門を潛り、顏包む破れ手拭を取つて程よき處の土に手を突き、我先つ忝なしと云ふ。兩刀帶びて假りにも武士を名乘るものが、町人風情に土下座して頭を下るは得こそ出來まじきことなれど、初めこそ親人に辭義する心になりて、やうやく無念を押へたれ、慣習は恐ろしきものや、一日廻る數十軒に癖の附きて、この頃は唐土吹く風の何とも思はずなりぬ。』

古禪門腰巾着開けて、錢百文を數へ、二つ重ねて高く上げたる我が掌に乘せ、少なけれど等閑に思ふべからず、呂氏春秋に、趙宣孟翳幸の元に餓人あるを見付、車より下りて是がために錢百文をあたふといへり。彼の如き人さへその如し、この構え持たる古禪門が、只百文かと蔑られては迷惑なり。錢は和漢

共に天下の大寶、百文の錢百兩となる事のなからめやは、今日は我が亡き兄の爲めに志を施にこそ。と我を通常の乞食と思ひ、意見めかして云はるゝことの可笑しけれど、最少と孝行したき父を亡くなして、同じほどの老年を見ればひたすら懷しく、我ながら怪しき程なれば、古禪門の言葉輕々とは聞かず。若氣の一すぢに錢金の冥利を知らで、抱乳母侍婢に日傘さし掛けさせし身の、加報負けして酒浸りの罰は、古孤の正宗を脊に匂はせて、人の軒下の雨露に叩かれ猪口一杯粒々の絞汁鯨飲りし口に、一握の飯も入らぬこの頃の恐しく、ふつに愛想の盡きたれば、頂戴たる錢を土臺にして何にあと喰ひ付き、せめては麥飯など腹にしたき心と。打ち萎れてその場を繕へば、さりとは知らず話に乘りの來て、老人は正直のものかな、忙しき中に古禪門入口に蹲踞り、にこ〳〵と笑みて、乞食に種なしといへども、生れながらの乞食は罕なるべし、見た處まだ花は盛りの年榮ゐ、殊生氣に老人の云ふ言を聞くとは、意見甲斐ありといふものなり。これより一人前の人にならば、今日の佛も喜ばれぬらん。我れ年齡若き頃び人相少し學び得て、大概の禍福は胸に浮ぶ事常なり、今其方の相を見るに、額際に運氣立ちて、眉尻に福あり、眼は鳳眼に似寄りて、是れとても先づ善き方なり、兩頰の骨に可厭なるありて、身を過まる前祥なれど、心して愼まば畢竟は幸福に逢ふべし。さてそれに附て談話あり、去年の春も容姿そぼろの乞食、門へ立しを呼び入れ、病氣ありと云ふに捨て難くて、暫時物置小屋に留め置きしが、このものゝ人相、眼に隱儉の瑕ありたれど、他の福相に勝たれたるは、よしある人と思ひしに、正鵠を外れず、出際に名乘るを

聞けば、加賀の國の歴々の武士にて、止み難き意恨に寄り、人を討ちて立ち退きたるよしなり。舊恩忘れずと消息して、救命の禮云ふたる末に、今は肥前の國蓮池の城主、鍋島攝津どのに有り付き、祿高二百石とは、天下に有るまじき出世なり。と語るを聞きとがめて、我は思はず顏をのし出し、憚ながらその武士の姓名はと根を堀り掛くれば、古禪門何の氣も附かず、堀と云ひ掛るとき、蚰蜒蜻蛉の小僧耳端へ來て、隱居さまと呼べは、おいと立ちながら、伊右衞門と呼びたりき。と云ひ捨にして奥へ這入りたり。

思はず手の合されて、古禪門が後影伏拜むを、小僧は譯も知らで、肩怒らして跡に付くも可笑し。我は直に其處を出離れ、人通り少なき、只ある片蔭に休らひて思へば、因果車のこの世は俗眼に知り難きぞかし。國を出てより、三年の月日は短かゝらず、鵜の目鷹の目、日本の半分は探したれど、噂さへ耳にせざりし今日、さる心もなく覗く門口に、錢百文が自然と蔓になりて、問はず語りに年來の仇敵の身の上、住む土地まで確かに知りたるは、神佛の加護疑ひなしといへど、親人の靈魂の導きなるべし。先刻の古禪門、何となく目鼻その儘にて懷かしかりしは、親人彼の身體を一時借りられて、仇讐の有所を口づから我に知らせ給ひしにてはなきか。佛神三寶の效に、親人が亡魂の導引、本望達するは手の中。と心しきりに勇まれ、天に拜し地に轉べは、知らぬ間に周圍は惡太郎の群れて、乞食よ狂氣よと囂しく罵り、古草鞋馬の沓、手々に取りて投げ付け、果ては塊土小石なども雜るに、腹立しけれど大事の身、菰に頭

を隱して迯げ出せば、小賢氣に勝鬨上げて追ひけり。
心早りて木賃に宿借ことも惜しく、莚一枚に雨露を忍びて、足の痛きまで步行み、疲るれば野とも云はず山とも云はず臥し倒れ、眼覺むれば又直に步行みぬ。されば野に迷ふて、一日食を斷ちしこともあり、山に行暮れてやうやく里に出れば、雀軒に囀りて一夜寢ぬこともあり。無理に無理を重ねての旅も、仇讐討ちたき計りの一心、天に貫通じたる故か、身體に少しの恙なく、嬉しき足の當地へ入りしは、昨日の今頃なりけん。
當地の樣子少しも知らねば、取り付く島のなくて徘徊ひ、役もなく一日を消して、今日は如何にして探らむと、獨思案の胸ぐるしく、手計も若葉の綠屋の垣に身を凭せて憩らふ中、不計耳を立てしは大越氏の高聲なり。述懷に堪へられ給はで口走り給ふは、人の身の上ならず却て吾身の上にて、今迄での心苦しさは長閑に解けて、春の水の胸は優々たり。伊右衞門今は武田淺右衞門と名乘り、過ぎたる祿高に腰を据へて、當城若殿の御指南役とさへ分明なれば、覘ふに難きことはなく、伊右衞門是處にありと確かあれば、本望今日明日に遂けぬとも仔細なしと獨笑まるゝ折り、大越氏に呼ひ掛けられ、忍ふ身の悸然として、覺られまじと乞食の姿に繕へば、心附き給はぬと見えて叱られたり。それを幸ひに、足早に迯け出して、いよ〳〵仇讐に近かん臍を固め、胸の錵た刃を合するこの小屋に、入梅の雨の又降りかゝる難義至極の仕末。斯く打ち揃ふて、信實深き人々と知らねば、窮鼠猫を嚙む作略の狂氣染みて面恥か

し、許し給え大越氏。伊右衞門首にせぬ中は、我が命あらぬ命。と廻り雙六の長物語は京上りの是處に盡きて、破れ手拭に腋を拭ふ仙助。對ひ合ふ二人は力入れて聞きたる話に、漸と重荷を下し、吐息一つ、二つの扇俄かに忙がしく動く。

喜兵衞疊む扇を肱の柱にして、極めて聲を密め、若し我身とするも、人にはなかく語り難き大深秘、よくもお明し下されたり。物數ならぬ二人を武士と思はれたればこそ話し給ふお心、近頃喜兵衞忝なく覺えぬ。それに對しても、熊野午王を誓に立て、決して他言はいたすまい。諸天万神も照覽あれと半藏の方を見れば、扇の手を俄かに止めて、しきりに首肯き、二言なき我も武士。と云ふに解け合ふて、先刻の刄物三昧は、三人の胸に一つの影も止めず、男心清くして、底の玉柏も白地なり。

伊右衞門今の名は武田淺右衞門、御親父將監どのを討て立ち退きしとは人傳に聞えたれど、元は彼奴が口より出でし自慢話なるべし。佞奸邪智の曲物と速とり睨み、若殿の御指南任せ置くは危ふき白徒と思へば、討ち果すか、國を追ひ退くるか、何れにしても、永く安穩には置かぬ心なりしが、多宮氏が苦心を聞きて又憎き心の一と際增したり。と咳く半藏の言葉を受けて、三年附け覗ひ給ひしを、助太刀は本意なきことあらむ。約し申せし如く、兩人首尾よく手引して、討たせ申べし。それにしても此處に長く忍ひ合ふは、安きに似て却て危ふければ、我等方へ密かに忍ばせ申さん格期なれど、今は白晝の人目繁く、大事の御身過ちありては、菊の十日の悔みても還らず、窮屈なりとも今少し忍ひ給へ、二日と出

ぬ中の夜に密かに迎へ申べし。と喜兵衛滿面に誠實を見せて云へば、仙助はら〳〵と涙を流し、只片時の面識に血縁も及ばぬ誠實は、仙助申すべき言葉もなし。若年ものゝ淺き思慮、前向にのみ走りて後の破れは知らず、万事頼みの綱の小林氏、大越どのよきに計らはせ給へ。懐中探りて取り出す胴卷兩人が前に置て、僅少なれど金子二百兩、不時の用意に肌へ付けて、路用食事は人の恩惠の一文二文に事足りけり。若し仇讐を計る爲にならば、隔なく使用ひ給ひてと押し出しぬ。

大越半藏小膝ぽんと打つて、又有るまじき御格期、無にするも異なものなり、兎も角も預かり申てと手を延すを、喜兵衛は忙がはしく留て、胴卷を押返し、是ぞとさし懸りたる入用もまだ覺えず。用あらば掛念なく申べし。と膝傍の刀取りて、先刻も大越の談話を多宮氏の聞かれたる如く、油斷は少しもなり難し、万事はまたの見參に盡さん、必らず迎へ申までは。と一禮して立ち上がれば、暫時此處の主人めかして、小屋口まで送る仙助、岸邊の蘆に少し戰ぎ見えて、よし切の聲近く、二人の影は遠ざかりけり。

愛たき人の情けに、仙助は今までの獨苦勞をからりと忘るれば、無下に疲勞の出でゝ人の身體かと疑はし。三年安らかに眠らぬ眼重く、凝りたる手足一時に緩むに、堪へ兼ねてころりとなり、肌馴れし菰一とひら、今日は綾錦の心地して、胸に蟠りなき久しぶりの夢は、安樂國を逍遥ふ眞夜中、手拭眉深かに面を隠し、脚高ゝと身輕の拵へ、素跣に砂を噛ませて足音を竊み、次第に小屋へ、ひたりと身を寄せ

て耳を澄し、仙助が寢息を特と覗つて、すらりと引き拔く刄物を後へ逆に隱し、垂れ菰上けて忍び込む人は、善か惡か。やがて立ち出し姿は、鮮血ぽた〳〵と滴たる切首の髻口に啣えて、玄中の月に笑む面影淋しく、裾取つて白刄の汚れを拭ふとき、一團の雲澄む空を包みて、波の泣く音に闇は深みぬ。

（其六）

島原の謀叛鎭まりて後は、血腥き風日の本を吹かぬこと百年に近し。されば人々命惜しきことのみ知りて、名の惜しきことは知らず、風俗華奢にばかり走り、役にも立たぬ細身の大小刀に腕の力ば自然と拔けて、今十年も經過たらば犬の首も切るは難澁しかるべし。人躓けど起してはやらず、飛越して進み、黄なる光りものに頰を叩かれて、鷺を烏と云ふはまだしものことなり、馬を鹿とする襟元に附きたがりて、秘藏の名笛微塵も蹈み折る氣性を嫌ひ、義と云ふ男兒の魂用なくて下ぐる頭の先より迯せば、腸は浮薄に腐りて骨なく筋なく、世はくらげ揃ひなるこそ口惜しき。と我れ斗り心鐵石にして、足輕にも道理あれば首を下げ、大身もの丶無理には言葉も曲けず、鷄群の一鶴並より毛色の變りて、あたら筋鐵入の腕を持ちながら名は砂の中に埋る詫住居も、知る人ぞ知ると苦にせで、小祿を不義の五斗米より嬉しがりて暮す小林喜兵衞。祿高相應の小家を戴きて、供もし飯も焚き草鞋も作る調法男とたつた二人暮し、破れ壁に這ふ蝸牛に敷島の道は此處と首捻ることは知らねど、枕上に騷ぐ鼠は煙管の雁首に一と打ち、義俠の心一すぢに辿りて、清貧洗ひ晒せし如し。

調法男に一と夜の暇を與れて、今宵は話し相手もなし、慰みがてら藁槌を取つて土間へ下り、作り掛けの草鞋を編み初めしが興に入りて、二足三足と慾に限りなく、夜の更け行くも知らで現になりし背戸口、間を置いて又ほと〳〵と叩たくものあり。喜兵衞耳に入れて應と云ひながら起ち上り、紙燭片手にがた〳〵自由にならぬ戸を開き、誰ぞと灯火さし出せば、小蔭に身を隱して半藏と答ふ。大越が何用あつて今頃。と呟やくには答へで、下男は居るかと聞く、一と夜の暇を遣りたれば、明日ならでは歸へらぬと云ふ喜兵衞が答詞を聞きて、半藏ぬつと姿を顯しけり。

平常になき半藏が擧動不思議く、しかも手拭に面を包み、尻端折りに身輕の姿尙更怪しく、紙燭持つたまゝ小首傾けて立つ喜兵衞に關はず、半藏は足の汚れを洗ひ終り、小さき包みものを入口の端に置きて、菰包みを抱えながら後を鎖し、ずつと歩みて坐處の中へ入り、小林是處へと坐る。これに氣を附けられて跡に添ひ、稍々腑に落ちぬ顏して半藏が正面に坐れば、突くばかりに膝を進めて半藏聲を密め、思はぬ得分してけりと呟きながら懷中を探り、喜兵衞が膝の上へづしりと置くは、重みにしるき金包みなり。

何んの尊からぬものと思へば、可厭な冷氣の身體に染みて、喜兵衞は身震しけり。之れを見て半藏にや〳〵と笑ひ、何んと喜兵衞、心惡きものにてもあるまじ。とは蔑視果てし言葉、喜兵衞は男だと腹に云はせて半藏を睨め、大越、是れはどのものを何如して。と首を曲ぐれば、後にて特と話すは。と云ふて

取り合はず。先刻の姿と云ひ、人目忍ぶの擧動と云ひ、今又膝の上へ少からぬ金の重み、何とも合點行かぬ事斗りあるに、喜兵衛腕を組みて肩に皺を寄せ、半藏が爲ることを見て居れば、やがて菰包みくる〳〵と解ひて、是れと兩手に乘せて突き出すは、黄金造りの大小刀、白晝見覺えの仙助が所持なり。最早無言には居られず、それはと乘出して、如何して貴殿の手にと又坐り直すを、半藏反り身になりて小林欲しくはなきか、何にしてもこの光りはうい奴よ、と鍔をこちりと彈きけり。

大越が卑賤しき擧動に喜兵衛赫乎と急き立ち、愚かなり半藏、云はずば此方より云ふて聞かさん。白晝多宮に暇乞ひして歸る途中我に向つて、武田淺右衛門は新參と云ひながら、若殿の御指南役たれば傍輩なり、多宮仙助は元加賀の武士なりといへども、今は淺猿ましき乞食ならずや。片面識の乞食に賴まれて傍輩を殺すは道理にあらず、且つ殿に對しても不忠の至り、此處に大事の相談あり。武士にあるまじきことゝ厭はるゝか知らねど、今時義理は入用ぬことぞ。四知の恐れといへど誰一人聞くものもなければ、我心底を話すべしと云ひたる多宮の所持品なるべし。先刻にも懇々卑賤しき所業と理を說ひて聞せたるに、初めの心失せやらず、今宵忍びて竊みたるか。言語に斷へたる卑賤き所業、即坐に心を改めて多宮に之れを還せば既往を咎めず、喜兵衛同道して謝びてやるべし、もし右樣左樣云へば朋友とは思はず。と威丈高に刄に手を掛くれば、半藏は三尺計飛退ひて、暫時〳〵。

入口の端の包物下げて、元の坐へ戻り、如何にも是れは仙助のものなり、小林よく聞いて被下れ、貴殿

も我れも知らるゝ通り、追ひ付難き貧窮に、平常武役の勤まらねば、此度殿松浦口へ御出馬ありても、御供は致されまじ。この二百兩と、此の刀さへあるからには、百兩づゝ配け取りにして武具馬具を調へ、立派な御供をするならば、年來の本望嬉しからずや。先刻に貴樣の言辭はあれど、如何考へ直しても欲しくて堪らず、つい出來心に爲て遣つたり、何んと小林、聖人めきしことは止めにして、少と綺羅を飾る氣は出ぬか、と齒莖顯はに笑ふ。

喜兵衞立ち上りながら金包を蹴返し、不義にして命長きよりは、夭死にしても義を捨てぬこそ優る。卑しきものは喜兵衞欲しくなし、汚れたる言辭を聞く耳は持たず、いざ同道して船小屋へ行き、多宮に謝びん、來たれ。と肩に手を掛くれど半藏ハ妙に落ち付きて動きもせず、鼻の先にふんと笑ふて、謝るとは誰に謝ぶるか。と云ふ口憎しと睨み付け、知れた事なり、多宮にと引き立てかゝるを、半藏包みもの手早く解いて、河原迄は道遠し、謝るなら多宮是處にあり。と云ふに驚され、何處に。と顧視く目に入るは、行燈の穗口にさし付けられて、顏の色青褪め、鮮血切り口に生々しき仙助が首なり。はつと慌れてつか〳〵と半藏の傍へ坐り、切首覗き込みて、扨ては大越、殘念な。

半藏も油斷なく刀引き付けて、斯して仕舞へば謝びるも何もなし。仙助が死骸は松浦の川へ水葬禮、今頃は海へ出て、餌食探す鮫の舌打なり。知りたるは小林、貴殿と我、人に骨折らして懷手に金を配け取る貴殿は、よき朋友を持たれたるよ。これ、無言で居るは不承知か、殺したが氣に掛かるとあらば、

この首ばかり菩提所へ葬りて、正直に貴殿が心遣りの種にすべし。その位の事ハしても、我輩の爲めの大旦那損は行かぬ。なま中勸めても貴殿の動かぬを知り、迷ふ心を決定させんと斯くの如し。仙助がこの姿も、一つは貴殿の爲めと云はせも果てず、小林が眼ハ見るうちに釣り上り、鬢の毛むら〳〵と動きて、人非人、人畜生、汝如きものに一言も云ふハ無駄なり、多宮への謝びは斯樣。と拔く手も白刄の早業、半藏ハ柄に手を掛くる間もなくて、血烟の中に二つとなりて仆れけり。

刀取り直して首打ち落し、仙助が首を上坐に直して半藏が首を供へ、多宮氏仇讎ハ即坐に。と云ふて首を見れば、生けるが如き無念の顏色、向齒白く脣を嚙みたり。涙はふり落して、喜兵衞男泣きに泣しが、暫時して獨り頷き、猛然として外の方を睨み、やがて又莞爾と笑みて半藏が死體の袖を引き裂き、首二つ別々に包みて腰に附け、態と己れの刀は其處に置いて、半藏が持て來し多宮重代の兼道が刀とさし替へ、立ち際に行燈消さんとすれば、何處よりか火取虫の飛で來て消して吳れけり。

喜兵衞が行く先きは、黑門隆然と立ちたる立派の屋敷、票札には武田淺右衞門と墨黑く筆太に書きたり。曰窓の門番所に身を寄せて、喜兵衞はほと〳〵と訪ひ、火急の要事ありて小林喜兵衞參りたり。取次賴むと云へば、寐惚聲して幾度か聞き直し、應といふて立つ氣配なり。暫時佇立むうちに小門は內より開かれ、這入給へと云ふにずつと通りて玄關に行くに、此處には若徒の手燭照して待ち、一禮して夜中の御用はと聞く、武田氏が身に掛かりたる至急の用事、人の耳には聞かせ難し、是非直々にと言葉確かに

云へば、是處にも又暫時と殘されぬ。
取り亂して無禮なれど此方へと以前の若徒の先に立つに、之れに添ふて客間を通り越し、居間らしき次の間へ行けば、燭臺我れを待ち顏なり。喜兵衛威儀を繕ふて待つ中に、正面の襖さつと開けて、白地の寐衣姿しどけなく前帶して、鬢髮少し寢亂れを見せ、左手に朱鞘を、右手に煙草盆を提げ、しづ〱と這入る淺右衛門、三十鬚の跡青く殘して、底光りのする眼に指南役の位は見へけり。
一禮濟まして、扨て至急の用とはと淺右衛門口を切るを、喜兵衛御免と一膝進ませ、今日松浦川の岸にありしことを微かに説き解かし、人の噂ながら確に貴殿は堀伊右衛門どのなるべし。と問へども知らずとのみなか〱に明さず、此處なりと喜兵衛持て來たる首包を前に直し、乞食の分際にて指南役を覘ふとは小賢しけれど、若し知らぬ間に覘ひよりて、貴殿の身體に過ちあらば、第一に當家の不面目と、今夜密かに船小屋へ忍びて、寐鳥は只一と討ち。お土産の一品お見分下されと云へば、淺右衛門少し解け掛りて、包とく〱仙助の首級、穴の明くまで凝視めてにつこりと笑ひ、見覺えたり、多宮將監が一子仙助の首級に相違なし、過分のお土産淺右衛門忝なく受領申と云ふ尾に附ひて、人の噂は嘘僞ならで貴殿は確かに堀氏か。と念を押して聞けば、斯程傍輩を思ふ信實を見るからは、何を隱さん、加賀の浪人堀伊右衛門なり。と歯より外へ出す一言は駟馬も及ばず。
血相變りて喜兵衛跳り上り、之の名聞かむ爲め心にもなき僞を云ひたり、實は首級となりし多宮仙助に

賴まれ、朋友の和好捨てかたくて、小林喜兵衞推參せり。汝も人打つ程の武士、よも二枚の舌はあるまじ速く立ち上りて尋常の勝負。と名乘りを上ぐれば、鈍く謀られて伊右衞門言葉はなく、飛退つて拔き打ちの片手撲り、喜兵衞目早く引つ外して拔き合せ、白刃は多宮重代の業もの、腕は覺への小林喜兵衞、受よと掃ふ切先に、脆くも伊右衞門刀を跳ねられ、蹣跚く間に左の肩より乳の下まで、斜にばらりと切り下ぐる。あつと云ふての世の一聲、奥と表へ聞へてか、疊急しく踏む音するに、手早く伊右衞門が首搔き落して、仙助が首と二つに抓み驅け出す出合頭に、癖者と呼ぶ若徒、無言に背打ち一つ喰はして玄關を走り下り、血刀啣えて松の下枝に片手掛かれば、木傳ふ猿猴の身も輕く、息も吐かぬ間に塀の外へ。

夜ハ明けて昨日の背中合せの今日となりての正午前、笹岡町大行寺の門前、男波女波の人群がりて、寄り返しつ囂しき中を分けて、横目役設樂五郎左衞門上使と呼べば、本堂の式臺しづ〳〵と下りて、甃の上を素跣に歩み、水色無紋の衣服𧘕𧘔、無刀の儀式正しく、よき程に坐りて平伏するは、小林喜兵衞なり。先に立ちて本堂に案内し、疊二丈斗隔てゝ、首を下ぐれば、五郎左衞門聲高やかに、切腹の願趣聞き屆けられず、上には其方の擧動殊勝の事と御感ありて、武士の般鑑と御意遊ばし、傍輩打ちたる罪は御譴めなく、武田淺右衞門が知行貳百石を加增し給はりて、新に物頭役仰せ付けられ、足輕三十八御預け成さる御墨付斯くの通り。印されたる月日は元文二年六月中の十五日、月眞圓に光明增りて、佐世姫な

らぬ松浦川の岸の眞砂の數重なる今日迄、童の口の碑に面影を殘しぬ。

（をはり）

◉片時雨

（上）

長い路次の溝渠板の上を、かた〳〵小走りに驅けて、突當りの塵芥溜の右手なる棟割長屋、日に乾されて板は反り返り、釘の力も拔け果てたる破れ戸に手を掛けたれど、首を傾けたる柱に敷居鴨居は喰ひ違ひたれば、小兒の力にては中々に云ふ事を聞かず、幼き心に早やくも焦慮て、早蕨の拳に二三度叩き、涙聲になりて、

『慈母ちやん、開けてよ、早く開けてよ』

と云ひながら足踏みをすれば、あいよと柔しく答へて、やがて手洋燈を片手に戸を開ける母親。

『よし坊、お前何處に遊んで居たの、今ね慈母ちやんがお迎ひに行かうと思つて居た處だよ、女の兒が夜になるまで、戸外を遊んで歩行くものではありませんよ、さあ早くお這入り。』

と云ふを下から見上げ、母親の袖に縋つて敷居を跨ぎながら、
『妾いはね、往還へ行て市を見て居たの、お隣家の安ちやんと、お向ふの菊ちやんと妾が最う歸らうと云ふのにね、否やだつて云つてね、いろんな事を云つて妾に惡戯の、だから妾は先へ還つて來たの。
甘へるやうに話して、母親と一所に奧へ上がれば、擴ろくも無き九尺二間。左樣かい〳〵と一言〳〵に返事して、母親は石油箱の上へ手洋燈を置き、取り亂した早附木の箱の張り掛けを片寄せ、緣の無き火鉢に掛けたる口の缺けた土瓶を灰の上へ下ろして、埋め込んだ炭團の頭を火箸で掻き分け、
『よし坊、寒むかつたらう、さあお溫り。
と云へば、紅葉のやうな手を出して整然と坐るに、母親はその手を握つて見て、
『まあ、この冷たいことは、氷見たやうだね。
と云ふ母親の顏を凝乎と見詰めて。
『慈母ちやん。
『何だね。
と答えられて、何か急うに哀しくなりたるか、丸々として可愛らしさの泉源なる眼に涙を一杯溜め、鼻を啜り上げて、何にも言はず。

『如何したのよし坊、可怪しいぢやあないか、泣くものではないよ無闇に。

と母親は額際に被る髪を撫で上げて遣れば、

『でも、菊ちやんだの安ちやんだのが、いろんな事を言ふんだもの。

『何て云つたの、云ふものには云はしてお置な、そんな者に關ふと馬鹿になるよ。

『いや、妾は口惜しいは。

『打棄つて置くもんだよ。

『打棄つて置かないの、いや。口惜しいから驅けて歸つて來たの、慈母ちやんは口惜しくないかへ。

『一體まあ、何て惡戯つたのだい。

と聞けば思ひ出したと見えて、灰の中へ落る涙を倉皇てゝ手の甲に押へ、しやくり上げる哀れさ。

『いろんな事を云ふの、あの芳ちやんの家は貧乏だから、明日お正月になつても、あの……あの……、着る衣類もないつて。それから……あの、慈父さんがないものは、何にも買つて貰うことが出來ないだらうつて。嘘なら羽子板も無い、羽子も持つて居まいつて……云ふの。今に買つて呉れるのだつて云つたら、お前處の慈母さん見たやうな……。

と手を外して、母親の顏を一寸見て、

『……意久路なしにやあ、買へるものかつて云ふの。うゝん今に買て呉れるつて云つたら、お前は

馬鹿だ、そんな事を云つて誑されたのも知らないのだつて……。慈母ちやん妾を誑したの。
と聞かれて母親はぐつと詰りたれど、然り氣なき顔をして。
『否ゝ、何で誑すものかね。
およしは母親の答詞を聞ひて、さも嬉しさうに眼を幾度も摩りて涙を掃ひ、
『眞當、慈母ちやんは誑しやあしないのね、それだのにあんな事を云つて、いやーな安ちやんだよ。おやあ慈母ちやん好い衣裳はあるの。
誑さぬと思つての問ひ事、しかも佛のやうな心を持ちたる小兒を、誑さぬといふ口の下より誑ますは、外の方便とは違つて、如何程罪の深いことか、我ながら淺猿しと思へど、今更無いとも云へず。
『有るともね。
『羽子板と羽子は。
『今に買つて來て上るのさ。
『何處へ行つて。遠くなの。否、慈母ちやん。明日のお正月に間に合つて。
『あゝ間に合ふともね、直に買つて來るよ。
と言へば、火鉢に翳した手を打つて、
『嬉しいね。宜いは、明日お正月になつたら、早く起きて宜い衣裳を着て、羽子と羽子板を持つて、

皆なに見せびらかして遣らうや。皆な吃驚するだらうな、宜い氣味だ。必然妾の衣裳は、皆なのより奇麗に違ひないよ、皆なが羨ましがるだらうな。

と今泣ひた烏が最う出て笑ひ、子供心にも無念と云ふことを知りて、惡く云ひたる朋友に、是れ見よがしと見せびらかして、仇討ちの出來ること〻、前後の考案もなく喜こびて、母親が俯向ひて居るは何故と云ふことも知らず、思ふたことを獨り喋べりしが、不圖氣の附たる樣子にて小首を傾むけ。

『慈母ちやん、妾の衣裳は如何なの。

聞かれて母親は俯向きたる頭も持ち上げず。

『奇麗つて分らないは、赤いのが澤山有るの。

『奇麗なの。

『あ〻。

『帶も赤いの。

『あ〻赤いよ。

『何處に有るの、妾見たいは、見せて頂戴な。ゑ、慈母ちやん、てば慈母ちやん。

母親の無言で居るが心配になりてか、首を横にして下より覗き込み。

『如何したの、慈母ちやん。矢張無いの、ゑ、慈母ちやん。

おやツ、貴郎松坊は何處へ參りましたらう？

あんまり話に夢中になつて居る、內退屈だもんだから一人先へ橋を渡つて行つたのかも知れない？

と兩人共橋の袂へ少し早足に四五間も行つたかと思ふ內、兩人の鼓膜を貫く入水の音ドブン！兩人ハ轉けつ轉びつ橋の中央へ取て返し、若しやと欄干から首を出して水面を見ると、闇黑にもきらめく波の光を遮る黑い影が浮きつ沈みつ。

おやア、マ、松坊が……ア…あすこに……。

おきわは淚の聲高く

あ、あ、あ、誰か助けて——。

第二回

此處は廐橋を渡つて左へ曲つて行くこと四五町も隔たつた或る格子戸造の一ト搆、今しも此處へ來かゝつた男女の兩人連、尋ねる家でもある樣に、格子戸の前を往つたり來たりして居たか、其家が見當らぬかウロ〳〵して居るかと思へば、急ぎ足でヅカ〳〵と其黑板塀の脇へ身を寄せかけ、節穴の隙から家內の樣子を窺く……かと思へバ又二三間後方へ戻つて、以前の通り格子戸の前を往來して居ます。何さま此家と目星を附けて來ては見たが、思ひ切つて入りかねたかの如くに見えた。あまり家の前を徘徊するから忠義一圖の此家の洋犬は癖物ござんなれと、板塀の下から兩人の足を見附出して、矢庭に板塀の下から

其半身を現ハしながら吠えかけました。兩人は此深夜大きな聲で犬に吠えられ困つたものだと思つたが、叱つとこれを追拂ふ勇氣は無かつたと見え、ます〳〵逡巡したから、犬はます〳〵怪むで、こゝぞ主人の日頃の恩を報る處だとワン〳〵と囂く吠え掛け、とう〳〵板塀の下を潜つて兩人の避ける跡を追ひ駈け、嚙み附く如く吠えかけました。兩人ハ二三間も後の方へ此犬をれびき出してろして始めて、これ黑‥‥ッ！何んだいと小さい聲で諭す樣に叱ると、犬は早くも聞覺の主人の聲に驚き、遽に首を垂れ、尾を振りながらチョロ〳〵と兩人の足元にまつはり、鼻でフンフン嗅ぎながらぢやれて居たが、最愛の主人を怪しいものと思ひ違へて吠えかけたのが、畜類ながらうら恥かしいとでも思つたか、さも極り惡るさうに四五間前の方に駈け出して、板塀に向つて何も目的なしに頻に吠えて居たが、それも暫くして聲を止め、又兩人の足元の處へ飛んで來て、嬉しさうに尾を振つてぢやれて居るのを見て、兩人はまた茲に泪の媒を求めた樣に悄然として居ました。犬は最愛の主人が首を垂れて、何か物案じ顏に何時までも格子の内へ入らないのを不審とでも思つたか、格子の内へ入れと云はぬばかりに首を振つて先導して居ました。此夫婦のもの自分の家へ入るに、何んの遠慮も無いが、今夜に限つて全で始めて行く處へでも入る樣に只モヂ〳〵して居ましたが、夜もだん〳〵更けて行く樣子、何時まで此處に立つても居られないから、兩人共思切つたかして互にうなづき合つて、男の方が先づ右の手を格子の間から入れてかきがねを外づして戸を徐々引きあけたが、夜陰の事ではあり町の中がシーンとして居たからガラリッとした響が、老

を着せて、欲しいと云ふ羽子や羽子板を買つて上げやうと思ふからさ。今夜これを張り上げて問屋さんへ持て行き、お金錢を澤山と頂ひて、歸りにお前が欲しいと云つた、羽根も買ひ羽子板も買ひ、明日のお正月に喰べる餅も買つて、それから他家の小母さんの處へ寄り、預けて置たお前の衣裳を取つて來やうと思つて居るのだが、そんな分らずやを云ふなら慈母ちやんは最う關係いません。私の子とは思はないから、衣裳もそれを着て、何にも持たずに明日遊びにお出、いやな事〳〵そんな無理を云ふ子は大嫌ひ。

何喰はず口には強く言つて。心の中には手を合せ、許して呉れと拜むを知ぬか、娘は母親が道理の言葉、且つは最う關係ふて遣らぬといふ恐赫に掛けられ、切なき心にさし詰めの當惑。優柔しき性質とて自己が惡きと覺りては、謝びねばならぬと思ふしほらしさ、對向ふ火鉢の傍を一と膝退つて、疊の上に兩手を突き、

『慈母ちやん、最う分らずや言ひません、決然と云ひませんから、衣裳も着せて下さい、欲しいものを何卒買つて下さい、この衣裳を着て出ますと、明日また皆なに惡戯れます、堪忍して下さいまし。今迄の通り慈母ちやんの子にして置いて下さいまし。今慈母ちやんに怒られると、慈父ちやんは居ず、妾は如何することも……。

と急に悲しくなりて、後は得言はず兩つ揃へた手の上へ、顏を乘せたまゝ泣きたきを堪忍して居るを、

見る母親の胸は寸斷、謝びたきは其方より此方、有りもせぬ嘘言を言ふて恐赫付け、明日にならば此の母親は如何程面目なき、優柔しい其方を叱る母親は、鬼か蛇か。何罪もなき其方が謝びを受けて、何知らぬ顏がして居られうぞ。最う謝びでもよきにと抱き起さんとせし手を後へ退き、今なまじ誠實を話さば、さぞ子兒心に落膽して、この母親を怨むならん、その顏が如何して見らる可きぞ。一寸延びれば尺とやら、今少し經たば如何かなるべし、怒つて見せたも娘の爲めの一つの慈悲と、故意と膝も崩さす。

『左樣分つたら最う宜いよ、分らない我儘を云ふから小言を言つたんだが、分りさへすれば叱りはしません。

『では慈母ちやん、堪忍して………。

と擡げる顏の露は、吾娘なれど氣の毒なり。

『あゝ堪忍しますとも、最う怒つて居ませんよ、さあ是れで涙を拭ひてお仕舞ひ。

と傍の手拭を膝へ乘せて遣れば、云はるゝ通り柔順に拭ひて、

『慈母ちやん衣裳は。

『取つて來て上るよ。

『あの羽子板と羽子は。

『買つて上るよ。』

『何時。』

『この箱を張つて仕舞うと。さあ〳〵晩くなると明日寐むいから、心配をせずに今日は早く寐て、明日のお正月に早くお起き。慈母ちやんはお前が寐た間に色々用をして、明日お前が目を覺まして見ると、枕元に衣裳も羽子板も羽子も、並べて置て上るからね、お寐衣は今お火鉢で暖めて上るよ。』

と母親は臥床を布き、寐衣を火鉢に翳して着せて遣れば、確かに言はれたに心配が無くなりて、明日の朝の枕元の樂しく、はい〳〵と頷ひて、いそ〳〵と衣裳を着替へ、欲しきもの買うて呉れる嬉しさに、寐際の挨拶も常時よりは叮嚀にして、枕頭に附けば直に夢に入り、大晦日とは樂しみなお正月の前の日とばかり知りたる心は、そも〳〵神樣か佛樣か。

（下）

吾娘の臥床に入るが早き、すや〳〵と寐入る罪のなき素振を見ては、物思ふ心も自然と慰められて、吾知らす莞爾と笑ひ、冷たくなりたる手先を温めんと火鉢を引寄せれば、先刻の火は今少しにて消ゑなんとするを、消しては益なきことゝ、繼ぎ足さんとて探る炭取の中、哀れや殘る炭團は只一つになりぬ。』貧は何事も哀れにて、是も買はねばと思へば、直に金錢といふことの胸に浮び、母親は薄闇き手洋燈の

方へ向き直り、最早殘り少なになりたる仕事に取りかゝるに、早く仕上て仕舞はん心のみ一杯なれば、何事も忘れて一生懸命に成るに連れて、思ひの外に捗が行き、手に持つものゝみにて出來揃ふと云ふ時、裏手に當る差配人の家の時計、ちんと鳴り初むるを數ふれば、何時の間に宵は過ぎけん、夜中の端口の十時なりけり。

出來上りたる箱を數へながら叮嚀に積み重ねて、風呂敷に包み、問屋へ持行かん計りにすれば、初めて覺ゆる肩の凝り、痛たやと手を長々延して欠伸をする下に、

『慈母ちゃん……、宜い衣裳…羽子…。

未だ眼が覺めて居たかと顧視ば、後は何を言ふやら、むにや／＼と口舐りして、笑ひながら寐返りを打つは、嬉しきか心配にありてかは知らねど、兎も角も心に思ふことを、夢の中にまで語りたるなるべし。

彼れ程確かに約束したればこそ、定めし宜い衣物を着て、欲しと思ひし羽子板を持ち、朋友に雜りて羽子など突く夢を見たると覺し。それに明日眼を覺ませしとき、枕元に約束の品無かりしならば、子供心にも母親が嘘言云ふたを、さぞ怨めしく思ふなるべし。約束した通り枕元に揃えて、慈母ちゃんと笑顔せらるれば、初日の出拜んだに倍して嬉しかるべく、左樣したきは山々なれど、左樣出來ぬ譯ありて心に任せず。

今この仕上りたる品を問屋に持ち行き、二度ばかり溜りたる勘定を取りたりとて、漸く五十錢には成るや成らずや、他處の小母さんに預けたりと云ふて置た衣裳も、實は金を持つて行かねば出して貰れぬ家、利子も少しは溜り居るべし。羽子板も羽子も買うて遣ると容易くは云ふたものゝ、是れとて無錢で呉れる譯にもあらず。餅も金錢何もかも金錢あれど、入る金錢は僅かに五十錢、二倍に遣ふても未だ不足なるに、約束した品の一つが漸つとなるべく、とても〳〵二た品は無圖かしかるべし。

彼娘も一夜明ければ最う是れ八歲、嬉しきとか悲しきとか、殊更口惜しきなどの心附きては、三歲兒とは違ひて善し惡の分別もあるべければ、二度三度と重なりては詐しも聞くまじ。よし詐すにもせよ、明日の朝起きたときに先づ枕上を見て、慈母ちやんと落膽した顏に呼ばれたらば、それこそこの胸の中へ熊手を入れられて、彼方此方と掻きむしらるゝ如く、堪え得べしとは思へず。

是れが去年の我身なれば、この大晦日の苦勞も知らず、廿日頃には衣裳も新らしく拵らへ、欲しきものも立派に買うて當てがひ、今頃は火燵櫓のさし向ひに手鞠唄など敎えて、除夜の鐘は暖かき臥床の中に聞くべきものを、變るは世の常なりと云へど、去年は暮と云ふもの、斯の樣に苦しとは知らざりき。

つく〴〵思へば、女ほど意久路なきものはあらじ、男の手より突き離されては、大海の中を漾ふ盲龜の如く、親子只二人の口を過ごし兼ねて、寒夜壁住居する蟋蟀の果敢なさ、せめて夫さへ居られたらば、相談相手ともなり成られて、苦しきながら斯く迄には苦しみもせまじきに。

手寄る木の蔭に雨は洩りて、夫は昨年の暮の大穴、今年の春になりて手入れもならぬ程に崩え込み、常時の才覺も算盤玉に乗らなくなりしか、只一封の遺書に可愛盛りの小兒を殘し、何罪もなき女房さへ振り捨てゝ、或る夜中に忍び出でられ、最早來年も來るといふに、そよ吹く風に厂の傳言もなし。遺書の筆の痕にも、手紙遣らぬ中は無事と思へ、手紙受取りたらば、變りたる事有りと思へと云はれたるに、音信の無きは無事にて座すと見えたり、債主の催促ること嚴しく謝びも慰めも盡くして、女の口の云ひ譯に困り、乞はるゝまゝに家を渡して此處へ移轉したれば、若し左樣と知らず以前の家へでも音信をせられたるか、然し此家へ移るとき呉〳〵も託み置きたれば、音信有らば直に通づる筈なり。

何處に居らるゝことか、この日本か但しはまた海を越した外國か、如才なき方なれば、決して無益に月日を遊ばるゝとは思へねど、心配なは家を起さんことにばかり齷齪して、諺言に云ふ凝つては思案の違ひ、再び身を拔き難き深淵へでも陷入りなされはせずや。我が身の苦しさを思ふに付けて、思はるゝは夫の身なる。一日も早く歸り來ませよと忘るゝ隙はなけれど、若し斯のやうなる時に不意と歸り來られなば、年の内に春の來たりしごとく、顏見たばかりにて此の苦しみは忘るゝなるべし。

我が身は苦しとて辛らしとて堪忍もすべし、可愛想なは娘、兩親揃ひて持ちたる子達の、取り膳に我儘云ふを見たらば心細く、今日歸りて話したるやうなことを朋友に云はれたらば、口惜しくも思ふべし。父なし兒は如何しても意久路なしと後指さゝれぬやう、この如く夜の目も寐ずに稼けど、貧乏に追ひ附か

るゝとは、よく〳〵の不運か、わが身の働きの無いのか、愛想もこそもこの身に盡き果てぬ。及ばぬことを思ひ、愚痴を並べたりとて、今更十日の菊。それよりは明日の朝のこと、何にも知らで居るわの寐顔を見ては、約束の事を仕果てずに置きて、親と云ふ字に濟むべきや。と云ふて是れと思ふ金錢を取る工風はなし、工風なしとてこの儘にしては置かれず、僅か一圓程あれば何事も出來得べきに、曩昔は百枚の束を數へし身が、只一枚も握れぬとは何たる因果ぞ。有りし物は今日迄に皆賣り盡して、殘るは役に立たぬものばかり、考へても無きものは無けれど、何か賣り忘れたる物にても無きか。おゝ忘れたり、幸ひの不用のもの。外飾も外聞も要らぬ身には、この髮の毛も有て益なし。春よりの心配にて解かす度に毛は櫛の齒へ殘り、一二年前程には濃くもなけれど、髮結を泣かせた事もあれば、薄くなりたりとて鼠の尾のやうにはあるまじ。是れを切つて髢師へ賣り、それに問屋の拂ひを入たらば通不及望みの金錢には成るべし。彼娘さへ笑はせずは、わが身は笑はれたりとも苦にはならず、殊に都合よきは夫家に有らねば、知らぬ人は後世を阿彌陀佛に契る女と思ふべし。彼娘の耻辱は夫の耻辱、その耻辱を隱す爲めに切りたる黑髮は、何故に切たと叱られはせまじ。先刻に鳴つたは十一時、如何に今日日なりとて、賣り物の晩くなりたるは氣の毒なもの、少しも早くと母親は吾娘の愛に溺れ、それと決心しては女子の却つて氣丈夫にて、棚の上より赤錆の附ひた剃刀を取り出し、結び髮をくる〳〵と解ひて片手は根元を握り詰め、片手は剃刀逆手に持つて、女の第二の命と賴む大事のものを惜し氣もな

く、今や緑髪さらりと落ちて、額際を舐めんとせし時、表の戸を叩きながら、

我が名を呼ぶは誰人なるか、今時分何の用ありてか、折悪るかりきと手早く髪を結び、剃刀棚へ隠くして直に手洋燈を持ち、表の戸をがらりと開くれば、洋服出立ちの商人らしき者、大きやかなる手草包を下げて、立ちたる姿を一と目見るや、

『おさよ〳〵。

『おゝ貴夫は、まあ御無事で。

『お前も無事で、何しろ斯様云ふ有様になつたとは。外國に居たものだから少しも知らず、やつとの事で尋ね當てた。よし坊も無事かね。まあ早速喜んで貰はなくつてならないのは、夜逃げをした明石屋忠藏ではない、二三年前よりは立派な忠藏になつた。是れ迄の苦勞は大變だつたらう、よく堪忍を爲て居て呉れた、此恩返しは……まあ話は、上つての事にせう。

悲しき涙は嬉し涙と降り替りて、娘のよしは絹物の三枚重ねに朋友の眼を麼し、おさよの切り掛けた髪は流行の丸髷に結はれ、親子三人揃ふて迎ふる春は、万年の松に栖を食ふ千歳の鶴空に舞ひて、さゞれ巖の上には龜遊ぶなり。

（をはり）

◉破　鏡

（第一面）

不沙汰の顔出し又は暑氣見舞と名を付けて訪ふ人每に『あなた此節は大分お瘦せ遊ばして、何處かお惡くでも』と聞かれて、『いゑ何處も、暑氣に負ける性質の方ですから、夏瘦せで御座いませう』とて奇麗に答へて居るものゝ、三重廻つて丁度緊頃なりし帶の、此の頃は四重も廻るかと覺え、大事に掛けた金の指輪、肉に喰ひ込むやうに痛ければ、その中に打ち直させてと思ひしに、此の頃は苦もなく指の節を脫けて落ち。朝夕身化粧に向ふ鏡に寫る吾が姿を見れば、勃然高かりし頰は落ちて、幾人男を殺せしと云はれし靨の影も失せ、溢れる程愛嬌を湛へた眼邊も、情なや窪んで今云へば野中の古井戶。濃を自慢の眉毛、鎌の刃を入れぬ蓬とも見えて今更憎らし。人の見て氣に掛るも無理ならず、自からこれが吾が姿かと訝るほど變り果てたる情なさに、手荒く鏡の蓋を合せ、何人か惡戲に後ろに立ちし姿の寫りしかと顧向けど、誰の影もなし、再び鏡の蓋を取れば以前に異らぬ面影、眼打けば眼打くこれぞ眞の吾が姿。斯く人の違ふ迄に瘦せ衰へしか何んで夏瘦せ。人前造る僞せ笑ひは、哀しさを奧歯に嚙む苦しみあるを人は知らト。假令人の知りて問はれたればとて、ついそれとて打ち明け難きこと、云へば吾が身の恥辱人の恥辱、この胸一つの堪忍袋に疊み込んで、何處までも夏瘦せと云ひ通せど、心は知ぬ間に顏に

出て、兎や角訪ねらるゝ懊悩さ。これも我が身の謹慎薄き罰にて、訪ふ人を怨みんやうはなけれど、朋友の身の上を思ふに付け、心のみ結ぼれて我が身に降り掛る恩恵の露は、葉末に置くそれ程の樂しみもなし。せめて片親などこの世に居給へば、我が身の不束を叱り懲らし給ひて、是れ程の果敢なき處までは陷りもせまじ、又させもし給じ。木から落たる猿の境界、離れ島に取り殘されし流人の身の上、右を見ても左を見ても、取り附き難き千仭の崖、前を見るも後を望むも、助け人もなき白波斗り、他所目から見れば白米の價も知らぬ奥様なれど、味噌漉下げて豆腐の使ひする方ぞ遙かに今の身よりは増なれ。』幼きときより病ひ知らぬことの口惜しや、三寸の息咽喉元に通ふを止めなば、何事も白木の位牌と姿を變へて、この辛らき目は線香の烟にも知らぬものを、人は生れて必らず一度は死なねばならぬ身、佛に人を救ふ誓あれば、五十年の命數を繰り上け、勝手が間しけれど早く迎ひの船をよこし給へ。浮世は苦の塊と知れども、苦を過して果敢なき我れには、最早生きて居る心とてはなし、戀しきはあの世の兩た親、最愛しきはこの世の夫、早く十万億土に旅立して、蓮の半坐にこの世の人を待ち、あの世の人にお物語りを仕度し。

軒端に釣せし岐阜提灯の摸樣も、朝に咲ひて夕に萎む朝顔の花、風なきに蠟燭の光息を吐ひて闇らく明るく、霧吹ひて遣る草の葉艶薄青ふ照りて、隣りに掛る籠に松虫聲を呑みてりんとも云はず。眞如の月今や村雲に隱れ、星斑らに光さやけき空を眺めて椽端近ゝと腰を掛くる女。手に持てる深草團扇に、足

に纏つるゝ蚊を時々に追へど、手の力は兎角心に移りて、多くは蚊の荒るに任せて深くは追ず。又下駄脱ぎ捨てゝ内に入らうともせず、此處にあらぬ心を空に走せて、餘念なく見入りし月を雲に取られ、はつと溜息を洩らして腮は半分襟に隱るゝ時、後ろに肝走りたる聲して『奧樣、お涼み遊ばすも大概に遊ばしまし、夜更てからの風はお體に毒で御坐いますよ、お奧に蚊帳を釣りましたから少し横におなり遊ばせな』柳は風に逆らはず、吹く儘に任かして『あいよ、今上ります』。
呼ばれた儘に下駄を脱ぎ捨て、座敷へ上り來たりし女の眼には、何に感じてか宿す一と雫。早くも見付けたる下婢は『又お考へ事で御座いますか、さうお考へ遊ばして斗り居らしつては、お體がたまりません、最うよい加減に遊ばしませ』と云はれて心付きしか、衣服の袖に兩方の眼を拭ひ、改めたやうに微笑としながら『清や、私は最う何も考へては居ませんよ』『それでもあなた、お眼が濡れて居りますじやあ御座いませんか』透さず急所を突かれても何氣なき顔付き『今嚔が出掛つたのだわね』知れども隱すは隱に任せて深くは聞かず『それ御覽遊ばせ、お風邪を召しますと申上る口の下から。お椽側の戸を引きませうか』『まだ宜いだらうよ』と云ひながら槻の長火鉢の向側へ坐る女の年頃は、やう〳〵に廿を越すか越さず、面窶せし處を知らぬ人に見せたらば、その上四つとは云ふべし。この女の後へ附きて同じく火鉢の傍へ、少し遠退ひて膝を据へた下婢は、是も主人に二つ程劣りて、まだ世の憂き事は白齒の娘、此の頃結ひ初めた島田髷を繕ひもせず、鬢櫛に掻き丸め、紅白粉戀き年頃を、手も大根のやうにして働

くは、天晴れの忠義もの。顔色さへ餘り醜くからぬは、育ちの卑しからぬによるか。主も召使ひも姉妹ほどの年頃なれば、隔ての中垣は互ひに捨て合ひて、上邊計りの主と家來、奥樣と呼び淸と呼ばれしはまだ一年にはならぬも、相互の心は三四年も馴染みた程、親身となりて我が家の積りにてお淸も働けば、小言いふ世話もなく、又妹の心にて何事も任せ置けば、氣に入らぬことは一つもなし。

今も火鉢の側へしとやかに坐り、長煙管手に取れど煙草吸はふともせず、額へ當てゝ物思ひの柱とするを淸は見やり、奥底もなくて勿體なきことながら、姉とも思ふ奥樣の此の姿、この人の笑顔はわが笑顔、この人の憂はわが憂ひと、心配氣に膝少し進ませ『奥樣、お加減でもお惡う御座いますか』物や思ふと人の問ふ迄の胸の有邪無邪は、つい擧動に顯はれ、又も人に問はるゝ切なさ、何にも知らぬ淸に迄心配を掛くるは罪と『いゝえ、惡くはないのだよ』さうで御座い升か、大分更けましたから、お横にお成り遊ばせな』いゝえさ、旦那さまのお歸りにならないうちに横にでもなつて、つい寐忘れてお歸りを知らなかつたら濟まないから、私は起きて居ませう。最う程なくお歸りだらうけれど、お前はまた明日の朝が早いから遠慮なく先へお寐な。お歸りになつても御寐なる計りで、外に御用はあるまい。よしあつても私で十分間に合ふし、關係ないから早くお寐よ』有難う御座いますが、奥樣は昨晩も二時迄お起き遊ばしてお出でなさりましたから、今晩は私が起きて居りませう。毎晩〳〵少しも御寐にならなくては、お身體がたまりません。私の事は兎も角もあなた早く——少しでもお横に、お歸りの聲が聞こゑました

ら、直にお起し申ましせう』召使ひの口より此の位の事の出づるは當然の事ながら、思ひ細る身にれ殊更情深く聞えて、一寸した情にも脆ろきは女の常、只何となしに鼻は詰り眼も濕ひの來り、胸に有る言葉を妙に封じ込められて、お清が信切に返事することも出來ず、我れ知らず重くなる頭に下を向けば、清も涙を見て徐ろに貰ふ哀れ、これも涕二三度連けさまに啜る計り、賢こ氣に見ゆれど世には馴れぬ乙女、慰むる二の次の言葉は浮まず、同しやうに俯向ひて前垂の皺を人指に延すのみ。

（第二面）

口利かぬ靜は沸返る鐵瓶の沁り、洋燈の油吸ふ音に破れ、椽の下に鳴きしきる竈馬哀しげに、夢覺めてか犬の遠吠妙に膓に染み込む。互ひに鬱がじとすれど、扨話し掛くる言葉はなく、顔上げて見交すことも、頭上より押されるやうにて、下ぐるのみは下がれど、上げやうと思へば、一寸——一分も上がらず。是の儘にて過ぎなば、時計の針は一と廻りしても、何時方の付くことやら知れねど、折よく粹な火取虫奴が、開け放したる坐敷を僥倖と飛び込み、兩人が睨め合ふ中垣の洋燈を目掛けて、身の程知らず礫と當たれば、暫時にても靜かに馴れし膽を驚かされ、疊へ落ちし虫を見た返し目は、不斗兩人見合して莞爾と笑み合ひ、元より角芽立ちし睨み合ひならねば、再び下は向かねど、笑みたる中には無量の哀慟の潜むべし。流石年嵩丈はだけにて、何か言ひ出さんと口動かして腹の中を探す清に向ひ、『それ程庇つてお呉れのは嬉しいけれど、私が寐むい目でもして居ては、又お疳癖に觸り、どゝのつまり罪も

ないお前に迄、迷惑をかけねばならず。何二た晩や三晩起きて居ても、晝間お留守の時に横になれば濟むから、お前そんな事を言はずに寐てお呉れよ』『はい』と返辭をしたお清は、後の言詞を唾と一所に呑み込み、此方の顔を目打ちもせで見詰しが、次第〳〵に涙湧き出で、果ては瞼に堰き止め難く、思はず『奥樣』と云へば、葉末の露は風に散つて、はら〳〵と滴る膝の上、倉卒て丶前垂れに眼を押へ、『その……お柔さしいお心が、お……お可愛いさうでなりません』泣きたきは其方より此方、なれども今泣きては涙に堰はなしと、じつと胸に堪らへ齒に噛い切り、『清が又。最う泣かせてお……お呉れでない』はい……はい、でもあんまりその神さまのやうなお心が……、旦那さまにお分りになりませんのか、傍で見て居ります私さへ、口……口惜しい。怨めしい程な無理ばつかり』『これ清や、旦那さまがお惡い……のではない、皆な私が足らないから』『お仰言ますな、學問は致しませんが、私しにも目が御ざいます。その御無理を少しもお逆らいなさらず、私などには到底眞似の出來ない御辛棒……』と云ひながら、袖から塵紙を出して、鼻の側を辷り落る涙を押へ付けて、まくり上げた前垂を膝の下に折り込み、『御一所にお成りたては、誠にお優柔くつて居らしつたのに、三月程前から鬼と佛の違ひ、針のやうなことを棒ほどのお小言、それが高じて此頃では、一た言目には手をお上げなさる旦那さま、そのお心が……そのお心には、魔が入れ替つて居るに違ひ御座いません。その魔と云ふのはあの美麗しい……あの女』と云ひ掛けるを、『清や』と打ち消し、手を左右に振りながら、『お願ひだから、最う言つてお呉れでない』最

う申ませんが……、今朝程も旦那さまのお部屋をお掃除いたしますとき、一寸お床の間を見ますれば、あの女奴がすましくさつた顔、あんまり憎らしう御座いますから、寫眞でも少しは通じませうと思つて、頬端の處を指で彈てやりました』一ト角の大手柄した氣になりて言ふを、眉の間に八の字を寄せて苦〻しげに睨め、『とんだ事を仕てお呉れだねへ、旦那さまの大事にして居つしやるものに、若し少しでも傷が附て御覽、お前の仕た事とは思へやあしない、私の嫉妬としきやお見えないから』勿體ない主人が下婢に手を合せて『後生だから……私を哀れと思つて、何卒そんな事はこの後止してお呉れ』その手のお痩弱はそのお柔しいお心の業と云ひたけれど、咽喉一杯に舌硬りて其儘横へ俯伏に倒れ、胸の中に拜みながら『奥樣お許し遊ばしまし』と云つた積りなれど、自分ながら聞こえず。遠くうち響く車の音に耳を立てゝ聞き、若しわが家の前に止るかと靜かに待てば、腰半分立てる刹那、又嘘僞されて遙か彼方に走せ過ぐ。あの車の音も矢張妻待たせ置く人の晩歸りかと思へば、物思ふ身の何の關係はなけれど、さぞな待詫しかるらんとうら哀しく、玄關へ出迎ふ妻には優しくしてと、何處のものやら何の歸りやら知れぬ車の音に心の中で願ひ、扨我が身ながら可笑しきこともあり。この度は必らずそれと紙燭に火を移し、出迎ひの用意をすれば、何時迄待ちても近よらず、不思議なと耳を澄せば、門の前へ來ぬも道理、遠空渡る雷の響。聞こえぬ空やと睨み附けし顔を稻妻に射られ、生得の雷嫌ひに急いで耳を押へしこともあり。

毎夜〳〵時計の數字も睨め飽き、草紙開ひて馬琴の五七に欠伸を消せど、讀むものも〳〵も身に摘されて少しも面白くなく、人情は可厭と戰爭もの語を繙けば、門外の音計り耳に入りて一つ處を幾度も讀み直す愚鈍らしさ。それも直飽きて好な畫手本に筆取りて見れど、棒のやうな蘭の葉、不正圓な梅の花、さては猿のやうな人物のみ出來て、一つも氣に入つたはなく、何時も引き裂き捨てゝ、喜ぶは出入の紙屑買。家の爲めにならぬ事は半紙半分もせぬことゝ、その後心附きては筆を取らず、さもなき時は心切な清に話仕掛けて笑ふことのなきにあらねど、必定仕舞は涙と降り替りて、清が誠から出る眞情は却つて思ひを増す種ぞかし。この柔しさの三つ一つもわが夫のお胸にあらば、二た夜が三夜はまだしも、一年二年起て居たとてこの痩せあるまいに、命迄もと思ふわが夫なれど、他人にこれ程の信切ありて、身中に少しの思ひ遣りのなきは、これが浮世か、浮世はこれか。

時計を見れば二時は今の間、今夜も空に待つことかと吐息吹けば、小石蹴立てゝ此方へと近よる車の音、丁度時刻若しやと思へば、泣き倒れた清が枕元、煙管の先で靜かに叩き『清や、車の音がするやうだよ。何んでもないことに涙を飜して、又旦那に知れるとお小言の種だから、さあ掃てお仕舞ひ、私も……私も……最う泣き……泣きは仕ません。さあ清』『は…は…はい』濕みたる聲に直ぐには起きも上らず、車の音は次第に高く響き、二三間前より音の少しく緩みて、今我が家と思ふが早き、音はひたと止り、連ひて聞ゆる車夫の聲『お歸り』

お清は鬢櫛振り落して起てば、『はい』と一聲高く答へて清がさし出す手燭に、暫時も置かず火を點し、眞先に立ちて足早に出迎ふ玄關。車を横附けにさせて蹴込みより片足下し、何處で醉ひし酒か泥の如く、踏む足定かならで倒けながら玄關へ尻餅突くを、『お危急な』と我れ知らず驅け下りる妻。顧視ながら瞬据へてはつたと睨め、『だ…だ大丈夫だ』後ろから抱える手を振り解き、酒の香外面へ長く吹ひて、『何をする、よさんか、馬鹿奴。暗い〳〵燈火を先へ出せ』馴れし耳には叉かと何にも言はず、清が手より手燭を取りて、夫が傍に膝を附き、高く指し上げる手燭の光りに、おのが穿きし靴を車夫の手に脱がせ、大汗握る掌の辷りて踵皮を外るゝを焦慮れて、空を蹴る足に靴を四五間先へ飛し、力を貸す妻が手には觸れもせず、玄關の式臺を態と手寄りて身を起し、妻と下婢を後邊に從へ、〆らぬ足を我慢に踏み、先へ立ちて我か部屋と定めし處へ蹣跚ながら這入り、重き瞼を勢一杯開きて、四邊を一と廻り見まはし、突然に頭の帽子を取つて投ぐれば、帽子は持ちて立てる手燭へ當り、燈火は消えて眞の闇。その闇を兩足にどう〳〵と踏み鳴らし『暗い、早く燈光を』この闇僥倖とそつと瞼を拭ふ人の情なや。

（第三面）

自から燈火を消して、さも人でもしたやうな小言、憎い旦那さまと見えぬ闇に睨み付け、誰が燈火などと思へど、晩れては叉奥様を叱らせるといふ弱味に免じ、奥様の爲の使と尻輕く一と間を出で、洋燈片手に再び來れば、突然の燈火に醉うて鈍き眼を照らされ、足元定らずたぢ〳〵と倒れかゝる壁を、後ろ

手に突き飛して前に蹣跚、扨もよい氣味と見るお清が顔、危急と冷やりする胸に見る妻が顔。一人は怒り一人は腹に笑ひ一人は胸に泣く、一つ／＼に違ふ人の胸の中、佛れ世に少なきものなり。

仁王起に立つて前後左右に身體の調子を取り、時々人の顔を睨めては坐らうともせず、上着の釦一つ外してじれて、酔ふた指先を嬲り廻るを、面倒臭しとめり／＼兩手の力に任せてもぎ取り、引き取らんと後へ廻る妻をくるり前を向ひて遣り違はせ、手早く獨り脱ひて足元遠く投げ退け、短胴衣も搦り襟飾りはむしり取り、立し儘洋袴を脱がんと足を折れば、二本足に起ちてさへ覺束なき造り人形、自分の足を自分から曳きて動乎と後ろに倒るゝに、お清が吹き出したき笑ひ聲咳に雜らすを、悪し／＼と眼顔で知らせる妻。叱らるゝは格期の上なれど扨見捨て難く、恐づ／＼近寄るを、膝頭延せし足に突き退け、自から招く禍い流石己れにも分解るか、ちよつ／＼と舌打ちして妻が出す手に足を引つ込め。『邪魔だ、止せ／＼』

何程奇麗に咲きても茨の花、手を出せば思ひもよらぬ刺に痛まる。幾程焦慮るが氣の毒とは云へ、出さぬ手に小言はなしと、爲る儘に爲せて置けば、何やら斯やら獨りで丸裸體となり、衣物／＼と喚めく脊へ、夏は清淨したがよきと、落る日一ばいに乾かした粘硬の浴衣着せれば、脊中が痛いと云ひながらぴよいと脱ひで、折角の心盡しも翻す盥の水の泡、矢張お氣に入りはこの浴衣と、何時ぞや烏渡耳にした彼の女と揃ひの秋草の中形を出して後ろへ廻れば、荒き中にも柔しく脊を向くるに、斯く迄この身が氣

に入らぬかと、淺猿しくも翻す一と滴、折惡しく向けた頸元へひやり『ゑゝ、冷たい、何だ』云ふが早く、浴衣引手繰りて我れから身體に纒ひ、白縮緬の素扱くる〳〵と腰に巻き附け、『まだ臥床を布ひて置かないか、何時だと思ふ。歸れば何時でも直に寐るぢやないか、兩人とも揃つた氣の拔作だ、又芝居話や役者の惚氣で夢中になつて居たのだらう。目に見えるやうだ』この惡口に堪り兼ねて、『いゝえ、旦那さま……』と向きになる清を、『お前お臥床を出してお異れ、今此處を片寄るから』と云ひ雜らせ、何事も胸一つの堪忍袋へ無理にも仕舞込むは、一日――只の一日にて指の細り頰の落るは道理、よくも命に別條のないと思ふ。

無言で延て清が臥床を外るゝや否や、入れ替つて大の字に倒れ、釣らんと持ち掛る蚊張を不用と叱り飛ばし、蚊が居りますからといふを、何にと無我夢中に我を通し、無據く枕元離れて、脫捨の服を疊む清に手傳ふ妻を恐ろしき眼をして、『おい』と呼び寄せ、『水を……醉醒だ、この味を知らぬ下戶は話せない。是れから必然――忘れずに水を持てこい』答ふるより早く次の間へ辷り出で、惡しき病の流行る折柄全くの水は毒と、注意ての湯と水の半分合せ、尙生鹽酸少し垂して枕元に置けば、取つて一と口呑み、忽焉眼に角を立てゝ、『何だ是れは……』『お氣に逆らいましたら御免下さいまし、水はお毒と思ひましてお湯と生鹽酸を少し雜せました』『大きにお世話、是んなものが呑まれるものか』下へも置かず膝を目掛けてコップを投げ付け、其の儘後ろを向ひて枕に付き、疊の水仕末して仕舞頃には、酒

嗅き大尉息の白川夜舟、着くは八軒家ならで、時計三つ響き渡りぬ。
媒介人が謠ふ調子外れの高砂を後に聞きいざお開きと六枚屏風に入相の空、朧氣に見る床島臺、新枕交すその夜は、九十九の契は愚か幾千代掛けて變らじな變らじとこそ思へ、一と日經ち二た日と過ぎ行けば、縺れし鬢の毛油嗅く、しどけなき容姿意氣路なく見え、佛菩薩の化身と思ひきや、口返答する顔は惡鬼羅刹、未央の柳の腰は大道臼のしよなり〳〵。三年の戀も醒め肌の薄化粧、何事も新らしき中が花なり。障子も張りたては明るく、疊も替へし計りは青々としてよし。などゝ勝手な理を附けて、人間一度の大事な婚禮を犬猫の遣り取りするやうに心得、結納の勝男節有るが儘にふんだんに遣ふとは、草履と下駄の片々づゝ、穿き違ひたる人の多さよ。
主人は山阪賢太郎といひて五歳の時に父を失ひ、覺期よき父が殘せし財産と、母が負けず嫌の男優りの氣性に育てられ、寐物語の敎誨をよく小耳に挿んで、小學の卒業も人より早く十三歳のときに濟せ、中學を踏んでは遲延しと、神田邊のある英學校へ入り、三年經か經ずに學問めつきりと上達して、廿歳といふ年に兼て志願の大學校へ、首尾よく入門して角帽に金釦。最早世に出る時に近くなりしと、母親を悦ばせたは束の間、賢太郎が紳士姿を後に、初孫の顔見ねばといひし事も一朝の露、今四五年の後には樂隱居とあるも待たで、母親は桐の一葉。勉强の切先是れに鈍り、氣から病氣を引き起して試驗の前二た月程、無駄に外床に暮し、敎育に身を入れてより以來、何時にても一と云つて二と下らぬ男が、欠席

した爲めに點は落第、自分も自然凝性だけに氣を朽らして横道に蹈み込んとしたを、兄弟のやうな朋友にて平尾龍之助といふ二歳優りの兄が、實情籠めての意見に狂ふ意馬の轡面緊乎と取り留め、母親無き後の獨り住居は煮炊に不都合、さりとて別に人を雇ふも贅費、吾とて父もなく母もなく、妹と二人暮しの水入らずなれば、別に氣の置け心を遣ふものもなし、其處元に都合さへ宜くば遠慮なくとの勸誘に、難有しと直に住居を疊み、賢太郎平尾方へ財産持つての食客人となりぬ。

机向ひ合す勉強は自然と智惠の交易となり、吾怠れば人勵まし人惰れば吾勸めて、速記録始より終まで腹に入り、一年の學期の書籍不殘胸に藏むれば、試驗前に徹夜の苦しみもなく、笹の葉落る雪のさら〳〵と三年を濟ませ、龍之助は一年前に學士となり、賢太郎も亦一年後れで首尾よく學士となりけり。何れ劣らぬ梅櫻と大學に花を咲かせ、平尾は卒業前より教師に目を附けられ、角帽脱ぐや脱がすに教授を拜命し、一年も經過ば外國へと內〻の旨も下りしとか。

賢太郎も同じく卒業すると其の儘、平尾の嗣後を受け、平尾はいよ〳〵獨逸へ法學の修業と定り、出立前に莅み賢太郎と膝突き合せし時、數ならぬ妹なれど、今兄が出立しては賴み汀の捨小舟、外に心掛りはなけれど、幾千里の波枕に騷ぐ夢はこの事計り、妹が氣性に取り得もあらば妻に持てはと云ふに、元より此方も貰ひ受けやうかと思ひし腹あれば、二つ返辭に否やは云はず、祝言もまだ若い書生同士、淡然と濟ませて平尾の妹のおまつは、賢太郎の妻と呼ばれ、二十五と十九の花聟花嫁を後に、平尾

は千里の波路を蹴て、日本には四五年の別離。
山阪の家名立派に起して、二三月の新世帯おまつと呼ぶが耻かしき中は宜けれど、學士仲間の交際に柳橋の月と見たが初り、二度が三度と重り四度五度と深くなり行き、粋な姿の酒の酌面白く、素人臭き膳立て不旨く、段々深入りしての夜遊び日宿り、新松葉の小高といふ古猫が爪の先に、膽玉までを綾なされ、一かたならぬ平尾の恩は忘れて、見たくもなしお松の顔、龍之助の顔などは夢にだも見ず。

（第四面）

抑も〳〵賢太郎が身を持ち崩せし初は、學士仲間の交際酒の原因とは云へ、それは溺れてからのこと、重なる原因はその外に二つありき。己れより四五枚の下の成蹟にて卒業したる男、何某伯の甥とかにて、電氣の引力強く、順通りなれば賢太郎に札の落る處を、後の雁が先になりてその男が海外留學の辭令を貰ひしこと、小癪にキリヽッと觸り、負けぬ氣性とて一時は辭表を出すと迄决心せし位、且つ學問のある處から慢心にてはなくも、尙々其處の場合を氣不味くしたるが第一の原因。今一つは學校へ出ては奏任五等の俸給を取り、歸り路にも二つ程の私立學校の講師に聘かれ、又家に在れば法律書の飜譯をするより、月に握る金は三百圓近く有るに遂ひ融通の利ひて、自然と不平を酒の力に散らしたるが第二の原因なり。

幼稚時から母親の膝元に引き付けられ、お前は慈父上の無き子なれば、女親の甘かして育てたと云はれ

ぬやうと二た言目の教誨、耳の穴に鱆となりて何でも早く立派に〳〵と思ふ三歳兒の魂魄。生意氣盛りの十七八の年頃も、人には變屈ものと笑はれ、惡所通ひの風には顏も吹かれで育ち上りし賢太郎なれば、三味線の糸が何と鳴るものやら大皷の音が何と響くものやら知らねば、二三度は學生の頃より遊びの道の師匠と噂高き男に連れられ、祝義の出し樣話の工合、才智ものだけに何事にも早く、一を聞いて十を知る朱には雜り安く、今は全くの此の道の達人と成り果て、あれでは不粹これでは通と、諸譯胸一つに疊み込み、通ひ果して二分殘る紙衣の、目の前に下がるは知らず、何女の手などに乘るものかと高を括つたが過失、乘らぬと思ふうちに吾れから最早乘せられ、蔭の舌は目の前の涙と覺られず、わが手に殺せぬ女はなしと思ふこそ、粹は身を喰ふ戒なり。

賢太郎鏡へ向つて見る吾が顏が、眉毛眼元口附き天晴れの好男子なるぞ却て身を果たす種、何處の割烹店船宿あるは待合へ行きても、顏が奇麗で金はあり切り廻しに拔け目なく、三拍子先づ揃ひし客といふに大事に待遇はれ、下へも置かぬ世辭追從。不平胸にあれば學校にての人の談話、一から十迄氣に入らず、日々の勤を果すとその儘、直に車の梶棒を行き附けの茶屋へ走らせ、酌に立つ女や內義に有りし仕末是れ〳〵と話せば、客の心に逆らはぬが商賣とて、百囀りの口々を揃へ、御尤も盡しに煽り立て、果ては心切めかして、私が男なら無言ては置きませんに、よく貴君御辛棒遊ばしてと、何にも分解らぬ薪に油の口車嬉し。是と違ひ家へ歸りて無念な話、我れ獨り口惜しがりてお松に話せば、流石

敎育の有る龍之助の妹とて、御無念は御尤もなれど、曲つた事は何時迄も續かず、お氣に入らぬは何事もお心の不平の手傳ひ、御堪忍遊ばして今に見返してと云ふは何となく不心切に聞こえ、良藥は苦く毒藥は甘く、家へ歸れば薑酒茶屋へ行けば玉子酒、遂玉子酒の口當りに引かされ、度重なればお松の容姿擧止、何となく憎くなりて顏を見るも疳癪の種、このやうな賢太郎にてあらぬものを、色は思案の外とは此處か。

この頃は賢太郎が持ちものと、この社會切つて誰れ知らぬもののなき新松葉屋の小高に、當時名代の紳商一人思ひを掛け、賢太郎行かぬ時は紳商小高を招き、紳商來ぬときは賢太郎小高を呼ぶ。互ひに意氣路の高じて、果ては小高を引き合ふ爪、兎角若き丈風は賢太郎の方へ靡けど、さて油斷は大敵と入らぬ處に力瘤を出して、賢太郎は家に寐る夢も安からず、その紳商奴と小高が手を引き合ふ夢に襲はれ、飛び起きてはお松を驚かすことも度〳〵。

今日も己れが取る金悉皆集めて懷中へ押し込み、狂ふ心猿の止處なく抱えの車夫が汗も何の苦にせず、夕映空のじり〳〵と暑つきを脊に、戀故の一と筋道。他目も振らず驅けさせて、吾が爲の極樂淨土、兼て馴染の茶屋が敷石に車の輪金を噛ませ、玄關へ横附けに下せば、その音を聞ひて飛んで出し女中、『御入來いまし』と挨拶して車夫へまで振り掛る愛嬌、『若い衆さん御苦勞さま』この度は内所の方へ顧視き、『あのお内儀さん、山坂さんが……』聲を聞ひて小股に驅け出す三十四五の意氣な年增、鳴海絞の浴衣

に肌の白さを增して、眼元莞爾やかに板間へ一寸指の先を突き、『山坂さんよく……、お暑う御座いましたらう。これ誰か團扇を持て來てお煽き申さないか、氣が利かないねへ』腰を掛けながらお世辭を頭より被り、靴を脫ぎ捨て『昨夜はお邪魔……』といひながら上がつて、每日每夜來て案內は我が家程よく知つた座敷の間取、鼻の先に掛る表梯子を上がらず、その傍に添つて奥の方へ行き掛るを、帽子と提革袋を持て後から附ひて來た女、賢太郞が顏覗き込むやうに近づき、『あなたどうぞ此方へ』と目で知らすのは梯子の方。踏み出す足を一寸挫かれ、立留つて女の方を振り向き、『奥の離坐敷は明て居ないのかへ』『はあ、只今……お一足違ひで、誠にお氣の毒さま』折惡しと思へど我儘を云つて女を困まらせるでもなし、輕く首に肯ひてこんどは女中を先に立て、二階の梯子を上り川添ひの四疊半へ、晝からの汗を下しぬ。

『中ゝ今日も暑かつたねへ』女中は帽子と提革袋を三尺の床の間に並らべ、次の間から蒲織の夏蒲團を持て來て川に脊の向くやうに布き、『なんといふお暑さで御座いませう、只今お風呂を見て參りますから』立つて行きし跡に。懷中からハンケチを出して額や鼻の際に殘る汗を、ホワイトローズの香ひに消して居る折柄、下座敷で調子を合せ出す三味線の音、誰か藝者が上つて居るなと思ふ中、冴へた撥音にやがて合す鶯の初音、澁た中に意氣な細い音のあるのは、何うやら知つた聲、知つた聲處か違ふこともない、小高の聲。小高と思ふ途端に叉胸に浮ぶは例の紳商、今日も彼奴が先へ來て居るかと顏を蹙める時、三味

線の音はふいと止み、男と女の話し聲の密かに切れ〳〵に聞こゆ。紳商かと思つてもまだ顏を見たでもなし、聲を聞ひたでもなし、只もしやと浮んだ計り、さうなると若しやでは安心がならず、疑ふだけその原因を確かめたくなり、そろ〳〵立つて拔足をしながら二階の椽側へ出て、聲のする方を覗へば、下坐敷は青簾一面に下りて、障子は明け放してある樣子なれど、中の現象は簾の間からも見えず。扨斯樣なると何うかして見たい氣計り勝つて、此方にも掛る青簾から首を出せば只空しく彼方に見らる〻計り、宜い工風はないかと椽側を忍びやかに、二三度往來をして見しが、矢張銘案も出ず、やつと考へて椽側へ長〳〵寐轉び、欄干の一番下の隙間より、邪魔な松が枝の間を透して、彼方の簾の横手より遙かに覗き込まんとするとき、意路惡な、階子段を踏む音をさせて、前の女中は浴衣を小脇にしながら顯はれ『山坂さん何をして居らつしやるの』『是處に變な小さな虫が居るからさ』女中ハ本氣になつて、小さい目を皿のやうにしながら、首斗り先に延し『何處に……』賢太郎も同しやうに何にもない椽側に瞬を据へて『おや、お前の來た爲めに何處へか行つてしまつた』『嘘でせう、人を銜して、憎らしい山坂さんだよ』『憎らしいければ憎らしいとして置て、時にお風呂は……』『今お湯加減をして居ります』

（第五面）

派手な大形の湯衣に着替へ、風呂場へ行きたれども、小高のことが兎角に氣になつて、毎度來ては幾分かの心附をする故、風呂番の男まで追從を云ふ、その世辭も小桶の水と飜し、風呂の中へ這入つて何の

氣なしに小窓を覗けば、掛けてある簾を透いて中庭を一つ隔てた向ふの小坐敷、常日頃來馴れた離坐敷ぞ見ゆる。丁度この風呂の窓と向ひ合つた、その坐敷の窓が開けてあつて、中に居る客も膳も徳利も、扨は灰吹に立つ烟までが手に取るやうに。客は誰かと思へば、憎い――戀の仇敵の例の紳商、大やうに巻き附けた白縮緬の帶、それに纏れて居る金鎖までが、何となく人を見下すやうに覺え、でつぷりと肥えた肉付、耳朶の重さうに垂れた工合は、その前にお辭義してその人の手から出る金に命を繼く人は、蝦子さまともいはふが、賢太郎の目からは芝居にしても敵役の土百姓、鼻低く目尻下りの亂杭齒、一つとして女に好かれる處のなき御人相。その前に坐つて三味線を傍の方へ置き、煙草盆を引き寄せ煙草を吸ひながら何か話しをして居るは小高、氣の故か知らねど何となく憂を含んで居るやうにも見えぬ。』にた〳〵と嫌味たらしく笑ひ掛けて、小高の前へ顏を突き出す紳商に、何の爲めか小高三つ四つ辭義をして、首を下げた儘頻りと何か言ふ有樣はよく見えても、少し離れ過ぎて居る哀しさには、言語は少しも聞えず。聞えぬと思へばます〳〵聞きたく、手拭を指へ巻ひて耳の穴を拭ひ、せめて話の緒口でも耳に入れねばと、心を澄して窓へ横顏を寄せれば、先刻から待ち草臥れて、石鹸箱の蓋を刎ね、流す湯を汲み替へ、手拭を折つたり疊んだりして居る風呂番は、不審氣な顏付をしながら、『旦那流しませう』と云ふに、序手惡しと其儘風呂を飛び出し、小桶に腰を掛けたるが、今日は風呂番がいやに丁寧にて、一つ處を幾度も〳〵も擦り、最う湯を掛るから仕舞ふのかと思へば、又擦り直し掛るに賢太郎は氣が氣で

なく、毎日來ては這入る湯に、左樣垢が出るものか、氣の利かぬと思つてもさうは云へず『毎日の事だからざつとでいゝせ』と云つて見しが、まだ中々止めさうにもせず、少し焦慮つたくなつて、身體を振りながら『最う澤山だ』と云へば、やつと流す手を止るに、湯を掛るのも待たずふいと立つて風呂中へ入りぬ。

扨何うしたと直に離坐敷の方を見れば、紳商は小高の顔に己が顔の付く斗りに膝を進ませ、小高は又首を垂れて、前挿の金釵を亂杭逆茂木と、ます〳〵進む紳商を拒ぐやうなり。聲は彌〻低くなりてや、以前より又一と際聞こえず、その樣の現象にて推し計れば、聲は聞へねど大概云ふ事は知れけり。嫌らしき紳商奴、可愛相なは小高と瞬を定めて見て居るうち、小高の姿はついと立つて次の間へでも行く事かと思へば、開けて有つた窓の障子をぴたりと鎖めぬ。

斯樣なると又分解からぬは小高の心、例令紳商が何と云へ、公明正大話をするに何も障子を立てへでものこと、障子を立てるからは何か人に見られ聞かれては惡い事のあるなるべし。あれば今迄云つた事は皆噓にて、この賢太郎を旨く綾なし、疾くよりあの紳商めと……。でなければ今見て居る我が目褄を忍んで、當附がましく何も障子を……。てつきりこれは古猫が手術、愚かにも我が迷ひしぞ口惜しと、まだ海のもの山のものとも知れぬに孤獨の當推了は、迷津に首まで入れし過失と知らず。只殘念がりて後先も關係はず風呂を飛び出し、風呂番が心切に汲んで呉れた、嗽ひの冷水も熱湯とありて、身體もよ

くは拭かす、濡れた儘に浴衣を着れば、濕り氣に身體へ吸ひ附くを、怒つた餘り無理に手を透せば、八つ口の邊りがびり〳〵。

浴衣を身體へ巻き附けたまゝ二階へ驅け上り、四疊半へ這入りて見れば、脱ぎ捨てゝ行きし洋服はちやんと疊んで、床の間の亂れ箱の中へ入れてあるのを、下の方から引きくり返して、懷のハンケチを出し、口惜しさと暑さに流るゝ額の汗を拭ひ、蒲團の上に大胡座を組んで、舌打ちをしながら手を二つ三つ打ひても返辭はなし。諱ま〳〵しいと云はん計りの顏付をして、自分の手の痛くあるのは知らず、猶連けざまに四つ五つ叩けば、漸く返辭する聲、その聲の長く引張るのも間緩し。』

階子段優長に蹈んで上つて來る女中、次の間から首の見えるが早さ、賢太郎は聲に角を立て『酒を、直に』何時になき劍幕と女中は驚きて返辭も輕く、不思議に思ひながら出て行く後影を睨んで、口の中で何か咳やいては舌打ちをするもまだ治まらぬ痲癪。胸に有邪無邪の關を据へ、心を五里霧中に走らせ小高紳商と代る〴〵口の中に稱えて、わが身是處にあるかを知らぬ迄に端坐れば、例の小坐敷の話し聲は終りを告げてか、再び響く小高が浮調子。常時は耳を樂しました三味線の音も、今日は我が身に叫喚の聲、端歌の文句までが我れを嘲笑けるやうに聞へて、名譽を荷はぬ身あれば、彼の坐敷へ踏み込んでと迄考ふれど、金で買れぬ學士の肩書は早急る心をじつと押へ、額に顯はるゝ筋は無念を焔と燃やし、口惜さは油汗のじり〳〵トり。

盃洗の水漣と湧ひて、それに浮ひた猪口の舟、汀へ當つてちりゝんと鳴り、片手に袴着せた徳利を持つて、腰より先に頭を下げ、『誠にお待遠さま』と當然の事を謝びながら並べる會席膳、水切つた利休箸に手前味噌辛からぬ、鳥味噌一と塊りは後の肴待つ箸の賑ひ。不取敢盃洗の猪口を箸で捕へてさし出すを、無言のまゝ取つて波々注がせ、息も吐かぬ驅け附け三杯、不用膳を持て立つ女中を一寸呼び止め、『小高が來て居るやうだから、貰へるなら直に貰つて呉れ』何となく様子の變なのに氣を呑まれ、近よらぬが勝ちと『へいかしこまりました』末は野となれ山となれ、直に下りて行き、暫時らくして入れ違つて這入て來たは、四十の阪に近い此處の女中頭、賢太郎の顏の色を見た計りで、心の中の奥まで讀み『山阪さん今日は』と云ひながら坐つて、『高ちやんは今直に貰つて參りますよ、今日はなんだかお顏の色が大變お惡いこと、またお勤め向きのお心配ですか、お止遊ばせよ、お身體が惡くなりますよ』流石この道の手練。先を越されて賢太郎は少し逡巡、まさか風呂場で見た仕末が癪にとも云へず、云へば不粹と一と口に云はれるは知れたことゝ、奥歯にものゝ挿まりしやうな挨拶『又少し癪なことがあつたもんだから、つい顏へ出たのさ』『それ丈正直で居らつしやるから、お氣の毒でならないは』といひながら、盃洗に殘つた猪口を取つて、『くさ〱するときは御酒に限ります、さ、一つ』『まあお前お呑み、私しやあ最うこの通り』と顏を指さして『赤くなつたから』と云ふを左りの手で一寸打つ眞似をしながら『高ちやんのお酌でなければお嫌ですか、邂逅には婆のお酌で一つ上れよ』『戯談を……』と云ふ中猪口を渡

されて轉れるやうに注がれて仕舞ぬ『今日は離坐敷でなくつてお氣の毒さまでした』流行る家は違つたものさね』あれ、そんな嫌味は拔きにして下さいよ、ほんの一足違ひ』お客は誰』知らぬ振りをして何喰はぬ顔で聞けば、丸髷は一寸鼻の先に皺を寄せて、聞く人もなきに聲を窃め『そら例の……』と顔に手を遣り、丸るい形ちをして見せながら『ですよ。高ちやんが可愛相なんですよ、貴君が入らしつたのは地獄で佛さ、高ちやんも喜びませう』扨は我が思ふ程でもなきかと、張り詰めし梓弓少し弛むも妙なり。

（第六面）

兎や角と話し掛けられて居る中に、何時の間にか膳の上も賑やかになり、知らぬ程に銚子も二三本入れ代りて、腹の中に這入し酒と拔目のない世辭に、外面と內裏とに攻め立てられ、賢太郎が守つた癇癪といふ城は、今や浮き足、春めいて來る心に風呂場の事などは烟りと消へ、常時に變らず惡口などを云つて、腹を抱えて笑ふやうになりぬ。

態と姿を葭戸の蔭へ七分ほど隱して『姉さん』といふは小高の聲、丸髷は顧向ひた儘『お待兼』といへば、衣の音さら〳〵と疊を引摺り、丸髷の傍へ坐つて『今日は。姉さん先刻程は有りがたう』高ちやんお前が困るだらうと思つて、早く〳〵と急き立てゝ上げたのさ』ほんとうに困つて仕まうよ　嫌味な事斗り云つて』山阪の膳に有つた猪口を取つてぐつと一と呑み、その儘手から離さず丸髷の傍へ突き出し『姉

さん、はばかりさま』『又お前焦慮酒かへ、お止よ』といひながら注いで、まだ三分の一はある酒を、『熱くして』と持て立つを、小高は猪口の酒半分呑んで下に置き、『姉さん……』と用ありげに呼べば、行き掛けた身體を逆に顧向き、『何に……』『ほんとに私はくさ〳〵するよ』『樂しんで計り居ないで、苦しむのも樂さ』と小高の背中を平手で打てば、小高は莞爾笑つて『手水に行つた振りで逃げて來たのだから、宜しくね姉さん』『あいよ、知つて居るよ』咽喉へ指をさして呑み込む眞似、他方から無心に見て居ては、何の事やら少しも――石地藏への談話。

階子踏み切つた音までを聞ひて、賢太郎が傍へ膝を進ませた小高、紺數寄屋の衣服に緋縮緬の長繻袢を襲ね、白茶地に目立たぬ金糸入りの朱珍の帶、菖蒲打の帶留に赤銅の狂獅子のパチン、黒元結〆めの壓しの島田髷、根に掛けた新藁計り青く目立ち、玉子色の櫛水の垂るゝやうに冷しく、顏はと云へばいふ迄もない美人の三十二相、一つや二つは缺けて居らうも知れねど、兎に角色の白き肌の細かさに隱れて、惡しき所は少しも見へず。微細に惡所を上げよと云へば、眼尻少し釣り上りて、人を見る瞬の働き、獰惡と迄は云へぬも凄味は何處にか忍ぶやうなり。年頃は漸く十八、山茶も出端といふに、是れは又玉露の口當り、不旨からう筈もなければ、迷ふも無理はなし。

無理酒に頰の邊り薔薇の花瓣を彩り、眼の淵朝霞靉靆く櫻のやうにほんのりとさせ、海棠の蕾の唇に紅梅の愛嬌を浮めて賢太郎に寄り添ひながら『山阪さん』といふ流眄は、金も石も蕩けて水となるは今

の間。何時も直に返辭をする賢太郎、今日は先刻の事を根方の雪のまだ解けやらず、膝を土臺に頭を手に支え、この美しき顏を見やうともせぬは、法うと斗り云つて華經と鳴けぬ鶯の枝移り。小高は膝に手を掛けて動かしながら『何處かお惡いの』暫時返辭を待つても梨の礫。『何かお氣に障つたの』と重ねて問ふても、まだ無言、まして身體さへ動かさず。小高も少し焦慮て『如何したんですよ山阪さん』と少し荒く云つて又『私に氣に入らない事が有つたの。ゑ、そんなら堪忍して頂戴な』覗き込むやうにするを、柱にした手を外づして、この情の籠る言葉を横に見る焦慮たさ。小高もツンとして片手は賢太郎の膝に乘せ、片手で德利を引き寄せ、明ひた吸物茶碗の蓋へ、酒を溢れる程に波々と注いで口へ當てるを、先刻から横眼に白眼で居た賢太郎、何と思つてか吸物茶碗を持つ小高の手を捕へ、力を入れて下へ置かせながら、『毒だ』と初めて聞きし時鳥の一聲、『人の心も知らないで……、口惜しい』其處に伏し倒れて血も吐くやうに鳴く小高、是處を家に待つて居るお松に見せたら——是の言葉の少しでもをお松に掛けたら。さぞや。

萌え出づる若草が織り寄す野邊の綿に、鬪ふと見せて狂ひ遊ぶ男蝶女蝶、眞情が過ぎて何とやら、賢太郎は吸物茶碗の蓋の酒を盃洗へざんぶと溢し、『馬鹿な毒ぢやあないか』さもなきに怨みを含んで持ち上げる小高の顏、眼には嘘か誠か白露を置きし樣は、春雨に濡れし梨花一枝。『毒でも關係いません、死んでも關係いません』といふを、ジロリと睨め、毒でも關係はぬ事があるものか、死んだら何處かの大商人

に濟ますまい』後はフヽンと鼻の先で笑ふを聞いて、小高は崩れ掛る身姿を立て直し、賢太郎が膝に己のが膝を突き附け、凄味ある眼尻に凝乎と見詰め『貴君、それはほんとうにお仰言ることですか、ゑ、山阪さん『此方は態と空惚氣『胸に聞ひたら分解るだらう。己は知らない』と何氣なく見る賢太郎が顔を、穴の明くほどしげ〳〵と眼打きもせず睨め、何か云ふかと思へばさはなくて、自分の膝の前にあつた絹のハンケチを引握み『口惜しい』といふかと見れば、瓢の種のやうな白齒を當てゝ、見る〳〵中にハンケチは、四分五裂。之れをもまだ足らず、數寄屋の衣服の袖を喰へて引き裂うとするを、賢太郎は手を出して口から拂ひ除け『宜い加減にしないか』『でも私の心がお分明りにならないのですもの』といふも涙に掻き曇る聲『いゝよ、分明つたよ』『分明つたつて、まだ疑つて入るのでせう』『疑ぐりやあしないよ』猶念を押して、眉に八字を寄せ聲に力を籠め『きつとですか……きつと疑ませんね』『あゝ、その氣性を……その氣性に迷つて居るのだ』賢太郎脆くも落ちけり。白脛を見て術を失ひし仙人もあるものを。』

簀戸透ひて來る川風に、片燃えする蠟燭の心を切り、小高は改めて賢太郎に向ひ『少し氣に掛ることが出來たの』賢太郎は態と何氣なく『何んな事が出來たの』『まあ平氣な顔をしてさ、憎らしい』『平氣で惡ければ變な顔付もしやうが、一體何んだい』『斯うなんですよ、今日も來て居たあの人ね、先刻も段々云つて呉れるんですが、身を引かして遣うつて。だけれどあの人は噂の女好き、此の間も一人引かせて、今ドやお妾斗りが家に五六人も居るんですとさ。そんな處へ私のやうなものが行つたつて、直に秋の

扇は知れ切つて居ます、私は何處までも嫌だといふんですのに……』突然に賢太郎が手のハンケチを取つて、濕ふ涙を拭ひ、『どうやら家の慈母さんが、承知した……らしいの。これが一本前の私なら、何處までも强情を張り通しますが、何を云つても抱えの身、强情を張るのも家へ對して出來ない譯。』と云つて行くのは――あんな人の家へ行くのは嫌……』後は何を言ふやら涙に聲は分明らず。賢太郎はつく〴〵聞いて居しが、やがて『では、乃公がその前に引かせれば宜いだらう』小高はハンケチの間から、密かに眼斗り出し、『それは願つたり叶つたりですが、貴君は奥様のあるお身體、それにまだ〳〵御出世遊ばす御身分。私のやうなものが附き纏つては……』『乃公でも否だといふのか』『いゝえ、決してさう云ふ譯では御座いませんが、お氣の毒なは奥樣。奥樣が若し……あの……お怒りでも遊ばすと』後の言葉は意味ありげに濁すを、乘り掛けし船の賢太郎、迷ふては何んの義理も人情も。『男の働きで拵らへる妾の一人や二人、誰に何と云はせるものか』夏木立通ふ風の冷しく云ひ放てば、小高は思はず手を合せて、では貴君が……』賢太郎は輕く頷き、『うむ』といひながら起ち上つて、床の間の方へつか〳〵と行きしが、見れば小高が合掌する手元へ、まだ新らしき紙幣の紙の帶したのが二た括り。『それはほんの手附だ、家へ歸つてお母親に渡して置きな』

（第七面）

妹背は名のみに川一つ隔て、その川も我れは清む積りなれど先方より濁り、夫妻といふは表向きの呼び

聲、戸籍帳のみに頭を並べて、夜の枕は離れ鴛鴦の片衾冷めたく、同し家に住居しながら互ひに顔はよくも見ず。同し飯を食ひながら、八寸の膳にさし向ひの樂は僅か三月か四月に絶えて、三世相繰つて見たらば定めし前世は、犬と猿の生れ代りなるべきや。

今日は日曜と云ふに常時の例に違ひ、昨夜は早く歸りて家を明けず、珍らしき事と清と次の間に話し合ひて、今朝は定めし早起きしてあの女の手を携へ、池上か磯部か、一夜泊りに箱根邊りへの暑氣避けと、清が一點張りの鑑定も空を打つ槌と外れ、漸く九時頃に寐床を出て、無言て顔を洗ひ無言て食を濟ませ、その儘自分の部屋へ引き籠つて、晝餉を知らせても出て來ず、只不用〳〵と計り机に寄掛り、頭を抱えて何か考へて居るのみ。四五か月この方無き不思議の仕打なれど、扨例の苦い顔は少しも變らず。氣分にても惡しきかとお松心配になれど、無闇な言を云ひ出して又虫の居處を惡くしてはと、我が身の病氣を堪へる氣になりて、何とも言はで只胸を痛め、たま〳〵家に居てやれ安心と思へば、安心は安心ならで居れば居るで又心配とは、よくも〳〵我か身は苦勞を持つて生れたものと、お松火鉢の側に胸を押へる無情さ。

間を隔てゝ夫とも云はず妻とも呼ばず、睨み合ひの姿にて暮し、二時と過ぎ三時と經ち四時を打てども賢太郎は出て來ず、お松遂〳〵堪忍比べに負けて、臺所の傍の女部屋に浴衣解ひて居る清を呼び寄せ、二人ひそ〳〵相談してやつと事を決定め、九谷の急須に玉露の湯加減を試み、水羊羹を四切れ唐渡りの

皿に乘せて、お松自分に全權大使となつて、賢太郎の部屋へ行く事になりぬ。夫とは云へど他人のやうな心持、他人とは云へど是れ程恐しき人はなく、吾が家と思へど人の家の如く、人の家と思へどこのやうに針の山程には思はゞ。竊まゝとすれど自然と足音を竊み、次の間へ行けば急に騷ぎ出す胸の波、部屋へ這入れば叉首の根を抓まるゝやうに恐しけれど、是處迄來ては後へ歸るも異なもの、やつと胸を靜め心を鬼にして、ずつと部屋の口へ身體を出せば、賢太郎は今朝のまゝ机に掛り、今朝のやうに頭を押へ、生人形の如く身動きせず。お松しとやかに坐り恐る〳〵茶と菓子を机の側に並らべ、昔の御殿女中が殿の御意を伺ふやうに、『あなた何處か御氣分でもお惡ふございますか』暫時く間を置て『お頭痛でも遊ばしますか』賢太郎は閉し目を豁と開き、罪人取り調ぶる焰魔顏『何處も惡くはない』叱られても言葉交さるゝは嬉しく、慳どんなは格期の前と『で御ざいますか、餘り御退屈かと存じましてお茶を入れました。この水羊羹は昨日お留守に貰ひましたのを切しましたが、如何で御坐います』さも面倒臭きと言はん計りに、其處へ出したものを見向きもせず『つべこべと囂ましい、だれも賴みもせんのに』心切を横に押し通す車にも逆はず、上から出れば猶々下に廻り『出過ぎましたかは存じませんが、淸とも相談いたしまして、お退屈のお慰みに……。どうか召し上つて下さいまし』『ゑゝ食べたくないものは喰べん、人の考へ事の邪魔をして、こんなものは持つて行け』と云ふが早さ、茶盆を其處へ引繰り返せば、出頃の茶はお松が膝へ飜れて、洗ひ立ての白地に黄金の色。はつと思ふ處へ

清は片手に手紙を持つて、入り來りさまお松に顏を合せ、目付で柳橋からの手紙と知らすれど、そんな處ではなく後は清に讓り、倒げし羊羹を菓子器に拾ふて、行く先は、次の間へ泣きに。

清が持つて來た手紙を、引つたくるやうにして取り、口の中ですら〳〵と讀で返事を認め、膝を突て仰せはと待つ清を出し抜き、自分からついと起つて出た事もない臺所口へ行き、揃ひの仕着を着た意氣な男に、中は幾干か白紙の包もの、それと手紙を渡しての佛顏。直に行くからと傳言して、幾度もする男の辭義を腮の先で受け、歸つて行く後姿殘り惜さうに見送り、やがて部屋へ歸つてまだ其處に居る清に、『出て來るから衣物を』

黑縐の羽織に當時流行のお召縮緬の單物、帶は博多の三枚折りに白足袋出立ち、何處へ行くとも云はず出るを玄關まで見送り、火鉢の側に歸つて眼の邊赤うして居るお松に向ひ、清はほつと溜息を吐いて、『奧樣、お口惜しう御ざいませう。あんまりな旦那さまのなされかた、貴女は火傷でも遊ばしはなさりませんか』優しく聞かれて先づ出るは涙、出でぬは聲。首を左右に振つて答ふれば、『それは宜しう御ざいました、何んでも旦那さまは本氣では御ざいませんよ』と云ひ慰めて、先刻の急須に湯を注ぎ、お松が呑み付けの茶碗に移して膝の前へさし出し、おのれは火箸を持つて灰の中へ、しきりに字を書き、何か云ひたげに見えても扨て云ひ出さず。お松は酌んで呉れた茶を一口呑み掛くるとき、清は突然に口惜しがつて自分の膝を連けさまに打つに驚かされ、可笑しな清とお松何事と聞けば、清は帶の間より先刻の

手紙の丸げたを取り出し、丁寧に指の先で延してお松の前に突き付け、糸切齒きり〳〵と噛んで『申上げまいと思ひましたが、何う考へ直してもお可愛想……、何にも知らぬ貴女が、お可愛想でなりませんから申上ます。奥樣お聞遊ばしまし、この金釘――蚯蚓の蜿蜒の手紙の文句を、旦那さまの鼻の下の長い譯を――お免遊ばせ旦那さまの衒された事を』

疊叩いて清が辰巳上りになつて言ふを聞けば、先刻來た手紙を賢太郎は直に丸め、衣物着替へて出て行く時、そつと袂へ入れし積りなれど、袖口を外れて後ろへ轉げ落ちたるを羽織引つ掛けし清が目早く認め、早速自分の袂へそつと忍ばせ、送り出した後で手水場へ這入つて讀めば、昨日お渡し下されしお金、直樣母親の前へ並らべ、退引させぬ强情を張りしところ、母も目の前の金に餘義なく承知して、此の身は貴君さまの自由に相成り申し。かやう事が運び候得ば、一日も商業をいたし、例の嫌な人の顏を見るも辛らく候まゝ、今朝より突然に軒提灯を引き、見番へも廢業の事を屆け、わざとながら身祝ひの赤の飯拵へ候に付、この手紙御覽次第直樣お出被下度。それにまだ廢業あとの事に付種々御相談もいたしたく、母も是非〳〵お目に掛り御禮申度と申居り候に付、奥樣の前宜しく御首尾遊ばされ、一寸なりともお顏御借し願ひ度と、惜しき筆を止め申し目出度かしこ。殊更返す〴〵までも書き加へて、明日遇つた人に時節柄の殺し文言、かしこは客を釣る道具とは金言なり。清は餘りの事に慌れて手水場を飛び出し、お話申もお氣の毒なれど、こんな事があるとも知らず、辛苦思ひ斗りして居給ふ貴女さまがお可

愛想故、お心得までにお覧に入れますと言葉を切り、暫時く思案して賢しげに小膝はつたと打つて、『扨奥様、少しも早くこの手紙を證據に遊ばし、封じ込んで外國のお兄様の處へお送り遊ばしましたら如何で御座います。お兄様の御意見なら。義理として旦那さまもお聞で御ざいませう』先刻から何一言云はず、胸先の痞を指の先で押へて居たお松、この時やう〳〵顏を上げて、眼一杯の涙を眼打きして絞り落し、清の顏を怨めしさうにじつと見詰め『あの——、清や。お前に別れなくつては成らなくなるかも知れないね』

(第八面)

その晩は泣き飽して待てど賢太郎歸らず、その次の日もまた歸らず、勤め向きの方は如何した事やら、今では我が身の心配より、勤向の不首尾になりはせぬかと、その方が心配になりて、寐るどころか命を繼ぐ食べものさへ、其方へ退けての物思ひ。柳橋の方から毎日御出勤なさるゝか、さうなされば好けれど、いや〳〵一昨日お出懸けの時に、袴はお持ちなさらず、ましてお履物は駒下駄、是れは勤めにはお出なさらぬと見える。せめてお袴と靴を清に持たせて上げやうか、それよりは洋服を揃へて、いや却つて當つけがましくなりて嫉妬やうに聞え、罪もなく持つて行つた清迄が、お小言を戴くやうでは氣の毒、吾が身が持つて行かうか、それでは猶々變に當るし、また旦那さまに遇せも仕舞ひ。一層人を託んだら事が穩かで、それもよけれど餘り自慢にもならぬ不行跡、知らぬ人に知らせるは闇の恥辱を明所へ

出すやうにて、是れも好もしからぬこと。はて如何か好い工風がと煙管を杖に考へる眼前に、先刻淸が置て行つた新聞、胸に餘る思案の手に擴げて、讀むとはなしに見れば、好める儘に何時しか興に入りて、一頁より二頁と讀み下し、第三頁に至れば、淺猿しや新松葉屋小高と見出し黑々と置ける一と行。遇ひはせねど知り人だけ眼鋭く、何事かと眼を拭ふてよく見れば、同人はある學士の肩書ある人に引され、目出度廢業の祝とて、同業の家には强飯と鰹節とを添へ、また出入の箱屋には浴衣地一反づゝを添へて配り、昨日土足を洗ひしとは、不景氣の世の中に扨も景氣の好さ、引かした學士どのが三千丈の鼻の下、長い間に數へ損ねぬやうし給へと、相變らずの惡口。扨は浮名の早くも世に知られぬ、旦那さまがこの頃の譯を知らぬ朋友はなきを、學士と斗り名を隱しても知れぬ譯はなし。こんな事が不首尾の元にて、兼々お冀望の洋行なさる障りにもならば、御出世の妨害、何とかしてこのやうな不行狀、直して上る仕法はなきか。芝居でする生血を雜ぜものゝ藥も、必らず利くとあらば探ね出して、わが身の瘦せた血を絞つても飮ませ申に。

斯程胸を痛むるお松が操を振り捨て、野に咲く蓮花草に心を蕩らかせ、新松葉の小高の身祝ひ立派に濟ませ、島田髷を目の前に丸髷に直させて、合せ鏡に似合ふか似合はぬかを心配する顏の、可笑しと後髮引かれながらに歸り來たりし賢太郎。今迄笑ひ轉けた顏を、家の門を入ると直に澁面造り、敵の家にでも來た樣に其處等睨め廻して部屋に入るに、今迄心配したお松ハ俄かに重荷下せしやうにありて、立

働きの腰も輕く、いそ〳〵とするを又しも眼を剝き出して叱り附け、四邊へも寄せ附けず、獨り部屋に籠つて其の後は音もなし。

夜になりて洋燈持つて行きし淸が、部屋を出るとお松の前に來り、『奥樣、私はお使に行つて參ります』『さう、何處へ』『ラムネを買つて來いとお仰言いますから』例の買附けの家は何處より十町からの路程、氣の毒な事とお松思ひ遣りの深く、『今から大變ね、夜道をお氣を附けよ』口先に言はれても信切は嬉しきもの、まして是れは心から出た眞情、心に押し戴き『何奥樣、直で御ざいます、却て夜の方が冷しくつて宜う御ざいます。では行つて參りますから……』『御苦勞だねへ』といふを聞き流して淸は臺所へ下り、やがて水口の戸に音を殘して出て行きぬ。その音聞こえしか聞えぬか知らねど、部屋の方にてお松と高く呼ぶは夫の聲。身を冷やりと顫はせながら、久しぶりの呼び聲に嬉しく、又小言かと思へど叱らるゝ中にも喜悦はあり。はいと答ふるも今更氣の更るやうに覺え、晩れては惡しと吸ひ掛けの煙管投げ出して部屋へ行けば、賢太郎は何か書きさしものを卷き納めて居りぬ。

お松は賢太郎が机に向ふ後姿を、疊二た枚ばかり隔たり、腫れものにでも觸るやうに恐る〳〵『何か御用で御座いますか』と言へど、賢太郎は見向きもせず返事もせず、書きさしものを靜かに卷ひて、手紙疊むやうに折目を附け、先づ硯の蓋を閉し筆を硯箱に納め、遣ひし文鎭片隅に寄せ、机の上を二三度掃ひて扨此方を向けば、今迄見上げしお松の頭は、急に疊の目を數へ初めけり。

直に用にても云ひ附くるかと思へば、さはなくて優々と煙草盆を引き寄せ、お松が俯向く髷をぢろりぢろりと見ながら、吸ふ煙を天井に吹き壁に霎靆かせ、いろ〳〵に戯びて稍飽きしころ、力任かせに灰吹の音一つさせて、煙管膝の前へからりと投げ出し、心に威義を繕ふ氣か、顔色を改むると均しく、居住居を一寸直し『お松』鷹に取られし暖め鳥となりて、呼び附けられしより身動きもならず、掃き馴れた疊を針の筵の思ひ、今日は何事の無理かは知らねど、清は留守にてさし向ひの仕宜、常時もならば事難澁しくなるごとに、清が間にいりて四角ながら兎も角も丸くするを、今日はその清も折悪しく居らず、何を言はれても謝びてさへ居らば濟むとは云へ、打ち叩かれでもしては腹癒へる迄の堪忍が辛し。云はば他人の清、頼みて頼まれまじき人ながら、斯う云ふ時には清斗りが頼みの綱。何事か知らねど、呼び附けしからは又無理の出るには決定りぬ。何卒今日は荒れ増らで穏やかに事を仕舞たしと、俯向きし儘思ひ入る處へ、突然にお松と呼ばれ、すはや暴風の落し際と胸の中に身顫ひしながらの『はい、御用は』『別に用ではないが、今日は少し其方に聞き濟んで貰いたい事があるのだ』とは又何時になき穏かさ。この身に相談めきしことの出しは、幾月ぶりのことか。何の譯あるか知らねど、恐ろしとのみ思ひ込みし夫の口より、珍らしき優しき言葉、薄氣味悪きほどなれど何となく嬉しく、吾れ知らず顔を上げて夫の面相を見れば、今日迄焔魔とも見しは勿體なし、瞼尻に二筋ほどの皺は愛嬌を含みて、大慈大悲の誓立て給ひし菩薩にその儘。兄龍雄のまだ此國に居た時分の、山坂賢太郎に戻りしかとお松初めて心落付き、

春の雪の我れから解け掛りて、思はずにつこり笑むは、心からの喜悦。夫の方に膝すこし進ませ、『何んでございますか、この身に叶ひましたことなら御遠慮なく』嬉しげに見ゆるお松に引き替へ、賢太郎は淡き笑も浮めず、眞面目に搆ゆれど、さて常時のやうに澁面ハ造くらず。お松が潔き答へに、云ひ出す言葉の鋒先を挫かれてか、膝に置く手も邪魔氣に、暫時は言辭もなく思慮、漸〻心を決定しやうに、一と息呑み込み『お前でなければならぬ事だ』

左程優しくは言はねど、枳棘にのみ觸りしお松には、茨の刺は優しく覺えて、言葉替されるのみにても嬉しく、思はずも漏れ來る唇の笑『おほゝゝゝ、私でなければならぬ御用とは、まあどんな事で御座います』不思議や海棠笑ひ掛くれど、節瘤立ちし松の幹は固く蹲踞りし姿も崩さず。賢太郎の胸には何事の潜み隱てあるにや、笑ふお松の方を見やりて、氣の毒氣の顔付。自然に俯視く己が頸を腮へ掛けて、右の掌に幾度も撫で返し、左の手は帶の間に挿んで動かしもせず。しきりに用をと促かすお松に激まされ、俄かに造る鋭き眦、何にも知らで仰ぎ見るお松の顔をはたと睨み。『用とは外でもない、いま迄の縁は夢と思つて、夫婦の名を消してほしいのだ』身を反り回す計りに驚くお松、襟かき合せて何にも言はず賢太郎の方へ一と膝、可愛や唇の色少し變りて顫へさへも見ゆ。

（第九面）

如何な無理如何な我儘も耐へ、犬猫同樣に打ち叩かれても尾を卷ひて首を垂れ、仰せ一つとして御無理

はなく、皆私の不調法、お打ち遊ばすお手のお痛はど、無念の涙も夫と云ふ字に呑み込み、口答へもせず、まして、手向ひなどは只の一度もしたことはなし。それとこれとは異ありて、今日は一生の大事、云はゞ我が身の關が原、夫婦の縁を切るとは忌はしき一と言。學問もなき愚かものならば知らぬこと、又は墻を越へた野合の夫婦ならば兎も角、身は忝なくも大學を卒業して學士の肩書ある人、二人が中は兄の許可を受けて立派に取り結びし縁、それを犬か猫を捨るやうに、一と言の相談もなく離縁とは、是れもわが夫彼の女に迷ひ給ひし果の曲ごと。聞へぬ仕方や、我が是れ迄に何事も耐へ忍び、嫉妬がましき言は針の先ほども言はで、人に瘦せしと云はれ吾が身も瘦せしと思ふ迄に苦勞するは誰の爲め、皆なく夫可愛しと思へばこそ。元より愚かならぬ夫なれば、何時かは迷ひの夢醒めて、松今迄のことは我が罪、腹も立たうけれど煙にしてその一と言を賴みに、針の山も登り血の池にも入りて、末を樂しみしは花の命の短かき夢、淸を先刻使ひにと出し給ひしも、邪魔を拂ふてこの言を云ひ出さん計畫にや。怨めしのお心口惜しのなされ方、恩に掛けるではなきも、母上失くなられてからのお世話は誰がなせし、兄上が引き取り給ひての御面倒、又衣服の破れ足袋の穴、曲りながらも氣を附けて直して上げしはこの身、前世の縁の深くて、他人より許嫁のやうな中になりしを、兄上が情に一所になりしを忘れ給ひしか。されば他々の見合ひ一つした夫婦とは異り、恩義の繩と縁の網との結び合せ、それをむざと解くお心は、朽りしか氣迷ひか。理は何處までも此方にあれど、それを言つては事難澁しく、無理の通る道は避ける道理

に災禍はおし、と云つてついそれと別れる譯には、金輪奈落出來ず。お留守の兄上へ聞てえも、我が身が耐へ性なく、どんな不貞の事でもしたやうにて、口惜しきことなれば何事も頭を下げて、兎角丸く治むるに優りしことはなしと、賢しくも可憐の心に決定て、打れても尾を振る犬となり『何んな不調法を致しまして、お氣に逆らいましたか存じませんが、お謝言はお心の癒るやうに致しますから、それ斗りはどうかお勘辨遊ばして』と云ふも、先立つは女氣の涙、口惜しさも雜れば情無さも雜るべし。是れ迄云ひ出してからは後へ引かぬ賢太郎、弱味へ附け込む鋭き切先『誠に私も氣の毒でならんが、色々と考へ直した末の決心、惡く思はれては甚だ困る。お前の兄さんには厄介にもなつたし、お前にも書生の中には世話になつたし、只今は兄さんも留守ではある旁々こんな事は云ひ出たしくないが、こ處はどうかお前無言て身を引てお呉れ。その代り糊口に困るやうにはしない、お前の財產も兄さんの財產もお前に渡して上げる』流石邪見な賢太郎も、無理と知れば自から心の心を攻めて、何時になく優しき言葉遣ひ、是處ぞ手寄るべき隙とお松も今は一生懸命『はい、お仰言ることはよく分りました、兄の恩も私のお世話もお心に掛けらるゝ程でも御座いません。只今もお仰言る通り兄も留守中の事ゆへ、何うか御勘辨遊ばして、この事斗りはお免遊ばしまし。是れからは心を附けまして不調法を謹しみますから』『左樣無闇に謝罪らんでもよい、常時の己の氣性は知つて居るだらう』『然し私が惡う御座いますからお謝言を』賢太郎の額には早や蕨程な筋『懊惱さい、言ひだてしは後へ引かぬ氣性だ、それを持て出て行け』と投げ

出したは先刻の書きもの、扨は早くも書きしか三行半の離緣狀。膝の前へ投げ出されたる忌はしの去狀、夫の方へ向けて押し戻し、淚片袖に押へながら『以來氣を附けますから、こ……この度の處は幾重にも……』『分らん奴だな、氣に入らぬ事は一度や二度ではない』『左樣でも御座いませうが、以來氣を……』『懊惱さい』『何うかお小言をお仰言つて……、お置き遊ばして……』『いや家風に合はん妻は片時も置けない。お前も立派に敎育のある身體だ、ぐず〳〵言はずに出るが宜い』お松は堪えず平伏した顏を僅かに擡げ、怨めしげに賢太郞を見上げ『斯うなりましてはお聞き入れも御座いますまいが、只今この家を出ましては、外に親類緣族もなし、一人の兄は幾千里を隔てた外國の空、明日より……明日から……路頭に迷はねばなりません。女の身一つで糊口が如何まお致されませう。と申て今迄の通夫とお呼び申、妻と仰言て下さいと願ひましても、到底もお聞入れは御座いますまい。それゆへこれ……この離緣狀は慥に頂戴いたしまして、此處に松が一生のお願ひが御座います』堰き上げる淚に留どはなく、斷ね入る計りに啜り上げて、四方を闇の悲歎の數々、それを空向ひて見る賢太郞の顏の憎や。漸々ありて餘る忍び音を奧齒に嚙みしめ、兩の袖に淚しきりに拂ひて、兩手を行儀よく疊の上へ突き、叮嚀に下る頭は定めし口惜しさに腦や破れん『その……お願ひと申ますは別の事でも御座いません、兄が歸つて參りますまで、お臺所の隅でも物置の蔭へでもお置き遊ばして——淸と同じやうお思召でお置き下さいまし、私も下女の積りで立ち働きを致します。後へ奧……奧……奧樣が出

來ましても、嫌な風來などは決して〱致しませんから、どうかこの願ひ計りは——不憫と思召してお聞き濟み下さいまし』云ひ終つてがつぱと伏すを、賢太郎眉逆立て、睨み附け『馬鹿、後の奥樣だと、第一それが氣に入らぬ、嫉妬も大概にするがよい。不憫ゆゑ置ても遣りたいが、その嫉妬では丸く治まるまい、離縁を承知すれば赤の他人だ、一日も家に置くことは出來ん、今直に出て行け』『左樣お怒り遊ばさずと、只今の言は私の言ひ損で御座います、どうかこの願はお許可下さいまし、歸つて參りまず兄へも申譯が御座いません』云ひ譯のないのは自業自得、己の知つた事ではない』飽まで辛らく當る賢太郎は鬼か蛇か。斯程までにされても怨めしと一と言も言はず、先の罪までを我が身に脊負ひて、謝言の數の百度千度、如何なるお松が操も、小高に迷ひし心の千曳の石は轉し難く、賢太郎は左の耳より右の耳へと流して、少しも氣に止めず『何んと言つても無駄だ、今直に出て行け』流石のお松も堪へ兼て、思はず辷らす怨憤の一と言『それは貴夫御無理で御座い升』よき間隙を得たりと忽焉附け入る病犬の牙『何が無理だ、夫が妻を離縁するに無理はあるまい、無理だと思ふ家には居ぬが宜い、さあ出て行け』『どうか今夜の處は、ご……ご免を……』『ならぬ、無理な處に居るには及ばぬ』と云ひながら起ち上り、手近の煙管取つて泣き伏すお松が頸首を引き寄せ、振り上げたる邪見の拳。お松はその手を外づさうともせず、只『ご免下さいまし、御勘辨を』と繰り返す頭を、連打の雨霰『これでも行かぬか、出ると云はぬか』と怒りに少し聲高になりし處へ、お松が忍び泣きの聲を雜せて、この一と間は落花狼藉、夫婦

と呼ぶ樂しき春は何處にある。
獏も喰はぬこの騷ぎ外へ漏れしか、疊さわりも荒く馳け込んで來しは、使歸りの忠義もの丶お清、兩手に下げしサイホンの罎を襖の外へ置き『旦那さま』と呼びながら、煙管振上げし賢太郎が腕へ、喰ひ附きたきは堪忍して、骨も拆けよと計り緊乎摑む。

（第十面）

惡き處へ歸りしと思へど、お松が堪忍强きに我を折りたる賢太郎、何時まで打立ても際限なければ、留めらる丶を花と取りし頸髮を突き遣り、猶足らずや淸が摑む手を振り解き、そこに橫はるお松を蹴返し、さも憎さげに『馬鹿、今夜丈けは許して遣るが、明日はあらんぞ』慌れて立つ淸を睨み『淸、常時の衣服を出せ』賢太郎を敵と思ふ淸は返事もせず、傍の簞笥の抽斗より羽織衣服襦袢と、投け出すやうに取り揃ふれば、直に脫ぎ替へ四邊を睨め廻して、玄關の方へ行くを、憎くても主人は主人、淸は洋燈持つて後に附從、下駄箱より下駄を出して揃へ、賢太郎が後影まだ門を出るや出ぬに、玄關の障子鎖して再び奥の間へ。
來て見ればお松はまだその儘倒れて、淚も乾き切らす。洋燈其處に置くが早き、いま迄賢太郎が坐りし處を、可恐顏をして睨め附け『奥樣、如何遊ばしました、貴女早くお逃け遊ばせばよいものを。何處もお怪我は御座いませんか。ほんとうに亂暴な旦那さまつちやあない、無理斗りお仰言つて、私が最う一

と足早ければ……手も上けさせ申しやあしないのに』お松は身體の傷を堪へながら、片身起き上り片手を膝に突き『清や有難う、只だ傷い斗りで怪我はしないから心配おしでない。あヽ咽喉が乾くから水を一杯』見上ぐる瞼は赤く膨れて、乾かぬ涙の露繁し。これを見るに附けても憎さは旦那さまと、清は思はず拳を握り『お可愛相にまあ……、お冷ですか只今持て參りませう』と起ち掛るを止めて『次の間へ行つて呑まうよ、それに又お前に話さなければ』と云ひながら一寸眼を拭ひ『ならない事もあるし、云つて置きたい事もあるし』今迄の事を知らぬ清は氣も輕く『左樣で御座いますか、ではお次へ』洋燈片手に片手はお松を扶ける心切、お松の胸には又一種の涙湧くべし。

『へい奥樣お冷水を、只今酌で參りました斗りで御座います』『左樣かいそれは難有う』息も吐かずに呑み干し、コップを置て胸先に手を當てヽ一と思案、心配さうにお松の顏斗り見て居る清を見返り『清やお氣の毒だがね、私の部屋へ行つて簪箱と、簞笥の二番目の抽出しにある紙包みを持て來てお呉れな』怪幻な顏をして返辭しながら起て行く清の後姿を眺め、ほろり膝に一と雫。

言ひ附け通り持て來し品を膝近くへ置かせ、清の顏をトつと見詰めて『清や』『はい』『今日私は旦那さまに離縁されました』『ゑ、奥樣、ほんとうで御坐いますか』顏色替へて驚く清に、思ひ出す今更の涙『何噓を言ひませう、それこれを御覽』帶の間より二つに折つた離縁狀、清の前へ置けば、清は擴げて見ながら『ねヽ聞えませぬ旦那さま、何の落度があつて奥……奥樣を』『清や最う斯うなつては仕方が

ない、何にも言つてお呉れでない』『でも奥様、あんまり……あんまりななされかた。で御座い升が奥様、御離縁にお成遊ばしましても、矢張此家にお居で御座いませうねへ』『私も今出て行つては寐る處もないから、せめて外國の兄さんがお歸りなさるまで、置て下さるやうに願つたけれど、お聞きなさらない、今夜直にとお仰言るけれど、それ丈けはお前が留めて呉れたお蔭で、明日まで延びました』清は最早泣き聲になりて、前垂れを前齒で啣へながら『何と言ふ旦那さまでせう、是れ迄の御堪忍をお思ひ遊したら、そ……そ……そんな事はお仰言れない筈』お松の膝の前へ泣き伏しながら『奥様』お松も是れに誘はれ、眼は開けど曇りて洋燈の火も見えず『清や私ほど不幸福のものはないねへ』

正體なきまでに泣き倒れるお清、それに誘はれぬにはあらねど、年嵩だけ且はこれぞと決心の附きしかお松は今更惡びれず、さればとて湧かぬにあらぬ涙幾度となく拭ひ、先刻清に持て來させし簪箱と紙包み、自己が膝の前へ引き寄せて『あの清や』『はい』と答ふる聲濕みてたしかには聞えぬほど、お松は連けて、『これはね、いつか私が拵へた時に、大層お前が譽めて居たが、大方氣に入つた事と見へるから、これはお前に上げやう、氣に入らなければ打ち直して挿すといゝよ』と云ひながら清の前にさし出す簪は、當時流行の銀の平打。お拵らへにあつた時は、ひどく氣に入り飛び附き度程にほしく、お給金を溜めて置て、何時かは我が頭に乘せてと思ひしも、斯うなつては何んの簪、常時の下されものなら直にも戴ひて喜ばふけれど、云はば忌はしき場合。奥様何時迄も此處に居て下さるやうなれば、簪一本

なんど下さらなくてもよし。しかし眼の前に出されたものを、無下に突き戻すも異なもの、腹の中にては不用ぬ〳〵と思ひ連けて、口には素直に『はい』お松は猶も紙包みを解き、叮嚀に取り出す朱珍の丸帶、一寸疊み直して、『それからね、この帶だが、少しお前の年に合しては澁過るかも知れないけれども、お前も最う直に縁附く體だから、その時に〆めてお呉れ。この襦袢も仕立て直して一遍しか手を通さないが、松の肌……肌へ付けたのだから、私だと思つてお前着てお呉れ』云はれる毎、品を出される度に胸一杯にありて、何か言はふとすれど、一言も出ず、血を吐く思ひに『はい』とのみ言ふが勢一杯。まだこの上にも泣かせる氣か、自分も啜り上げて居るくせに、お松は再び言詞を重ね『明日別れては最う何時逢ふか知れない、愚痴なやうだけれど、今上げた品は私の記念と思つて、だ……だ……大事にしてお呉れ』お淸今は堪へず、疊片手に叩きながら『奥樣、お情ない事計り、私はお別れ申すが嫌になります。か……か……記念とは、記念なんど〳〵お仰言つて。頂戴いたしましたお品は、死まで肌身を離すことでは御座いませんが、記念など〳〵お仰言つては淸は戴きません、はいお斷り申ます、それにこれが別れ……聞えませぬ奥樣、例令貴女が此家をお出になつても、お住居遊ばす處さへ分明て居りませば、お使の往還り御用の暇には、必定お尋ね申します積り、それをこれがわ……わ……別れ、貴女は淸を不實ものと思召ましてか、口……口惜しう御座います。最う斯うあれば私にお暇が出るまでも、貴女は此家へお置き申やうにいたします』又淸が氣の早いお前がいくら置くと云つても旦那さまが……』はい、御

不承知は知れて居ります。それゆへ私はこれから柳橋の彼女の處へ行きまして、掛け合つて見ます。もし奇麗に離れると申せばそれ迄、何か申せば堪忍がなりません、喰ひ付たり撲つたりして足も腰も利かぬやうにしてやります、さうすればいかな旦那さまも、愛想が盡きて仕舞ませう』そんな荒氣な事を……、今言つた事は皆な私が惡い、だから記念だの別れるだのとは云ひますまい、堪忍してお呉れ。私が居ない後でも決してそんな荒い事は、思ひ出してもなりませんよ、つまり私に罪が來るからね。さあお前最うお引けにしませう、明日は早く起きて手廻りの荷物などを手傳つて貰はなければならない。さあ寐てお呉れ』は……はい……、かしこまりました』明日別れると思へば、片時も離るゝは惜しき袖袂、清はうじ〳〵と立ち兼ぬるを、お松は一向に急がして、互ひの臥床へ分れ入れば、何を騷ぐか天井の鼠、嬉し鳴きも今日のみは憎し。

（第拾一面）

清は其處はかと取り片付けて臥床へ潜りたれど、涙乾かねば夢に入らず、主とも思ひ又勿體なくも姉とも思ひしお松に、短き蘆の節の間の別れ、一所に居ると云ふはこの一と夜、明日は袂を右左り。情けなや初奉公によき主人取り當て、慰め慰られての立働き、家に居て兩た親の小言聞よりは、遙かに樂、成る事なら末の世の又末の世も、此家に奉公してこのやうなお主に使へれば、他人が樂しむ緣の話も何んの、美い衣服もいらねば櫛も簪も入用ずと迄思ひ込みしものを、一寸使ひした留守の間に、離緣狀

の取り遣り濟ますとは、旦那さまも聞こえぬなされ方。せめて家にでも居れば、丸く治まらぬにしろ、明日と眉を焦くやうな事にはせまいに、それを承知してか知らずか、邪魔を拂ひてさし對ひに事を決定し、旦那さまのいよ〳〵憎し。それも今更奥樣承知遊ばされた上では、召使ひの女一人何と云つても取り回しは付かず、別に辛らいことはなけれど、只あの情深い奥樣に一分時もお別れ申は、この腸が千切万裂になるやうな。我家を出るときも哀しかりしが、これ程までにてはなかりし。たとへお別れ申たとて、これが死に別れはでなし、明日にも亦た逢ひ申ことの出來れど、記念……記念などゝお仰言つたが氣に掛り、何となくお離し申が死別れでもするやうな心持。この淸を哀れと思召たら奥樣も奥樣、何故離縁狀などをお貰いなされたのかと、怨みまじきことを怨みて、又先刻のお松が言葉を繰り返して見れば、何處まで不幸福に生れ給ひしかと、同じく涙の種なり。時の經過を空にして寢る心も失せ、彼方此方と幾度となく寢返り打てば、その度々に枕は濕れまさりて、心いやが上にも澄み渡り、寢氣は何處へ逃げ去りしか、不斗氣付けば奥の時計、只一つ鳴るは最早一時ださうな。

明日寢過しては濟まずと、夜具胸まで掛けて一心に眼を閉づれど、生憎や蛩の鳴きしきる聲そゞろ腸に染みて物哀しく、又しても我れから畫く忘想に襲はれ、うと〳〵とすれば驚きて眼の覺めけり。不斗耳に入る物音、怪しやと枕を外せば、椽側の雨戸そろ〳〵と開くやうなり。したりこれは盜人、旦那さまのお留守を付け込み、忍び入つたるものか、物盜まるゝは惜しくなけれど、大事の奥さまに傷でも付

させましては、女ながら召使ひの耻辱、聲を立てしとてこの夜中、誰も來て呉れる人はあるまい。何かよき思案がと考ふれば、庭下駄かたりと音のする同時、庭先に鳴く虫の聲はたと止り、響くは時計の針の音。何程考へても早急の智惠はなし、兎も角くも當つてからの事と、身體むく／＼と起して忍び足、そろり／＼とお松の寢間に近つき、襖越しに密と覗き込めば、洋燈晃々と照りて刎ねのけし小夜具、主は何時か藻脱の殼、はてと傾ける小首に見付けしは枕元の手紙一通、朧氣ながら旦那さまと薄墨の走り書き。南無三奥さまはと我を忘れて馳け出し、椽側へ行けば果して雨戸半分ほど開けて、踏み返した庭下駄はその儘、是處よりと度胸を突いて跣足に飛び下り、心當りは裏の井戸と、脚も露はに走せ出し、庭と裏の境の四つ目垣、垣越しに透かせば、今にも一と雨掛るか空摸樣惡しく、何處の山より上げしか黑雲の幾塊、四方八方に馳け廻りて月を包み、その間を照る星の光り青く殊に凄味を帶びし中に、井戸覗き込んでしよんぼりと立つ、朧氣の女姿。

嬉しやまだこの世にと清は氣も狂亂、垣廻るもゝどかしく走り寄つて、突然に後ろより抱き止め、肝走る聲我れ知らず振り立て『奥樣御短氣な、お氣でもお狂ひ遊しばましたか』扨は早くも清に心付かれしかと驚きしも、今になれば死に後れて、よも清の見逃しはせまい。流石に心を落付け『清惡るかつた、最う馬鹿な事はしません。旦那さまの耻辱にあるから靜かにしてお呉れ』

その夜は短氣を叱つた清に、かへつて短氣を意見されて、お松だん／＼考へて見れば、我ながら馬鹿げ

た譯、只一圖に口惜しと思ひ、又外國の兄へ面目なくと思ひ詰めし處へ、人の云ふ死神でもつきしか、むら〳〵と死ぬ氣がさして、後先の志慮もなく賢太郎へ宛て書置き一通、あはや今一分時の違ひにて、まだ咲き切らぬ花を、井戸の藻屑とせしものを、天晴れな清が働き危き一命を助けられ、今となつては狐が離れたと同然。これが教育もなきものなら知らぬこと、學校へも通ひ尊び教えも聞ひた身にて、つまらぬ事に掛替のない命を捨てやうとしたは、一寸した場合の魔の惡戲、泣ひて不量見を諫める清に對しても耻かしく、井戸端に立つた身は他人のやうに覺えて、我か身がそんな事をしたとは夢の中の業かと疑ひ思ふ程なり。愚かなことゝ覺つて見れば、清にくだ〳〵云はるゝ迄もなく、最う死ぬといふ氣などは更に脱けぬ。されども主思ふ一圖に、繰返す清が管言、知つて居るはと退けることもならず、謝びぬもよき家來に頭を下げて、私が惡い是れからはこのやうな不所存はせぬと、清の氣の解けるやうに五六十度も並列るうち。短夜の癖として夜隱烏の聲を生み出し、東天の横雲口紅をさして、夜は昨日と過ぎ去り、名殘は盡きぬ此家を離るゝ今日となりけり。

それと決心しては女氣も中々に猛く、勸まぬ清を激まして朝餉を終ると直に、先づ手廻りの荷物を取片附け、投げ込んで行く新聞も手に觸れで、そこはかと立ち廻り、殘すものは殘し包むものは包みて、持ち出す品は座敷へ積み、後より送らるべきものは、清に云ひ含めて、兎角の用意出來しは、夏の街頭に片日陰やゝ出來初めし頃なり。

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

情は鉢に盛る氷と消してか、賢太郎は昨夜の儘まだ歸らず、九十九髪の末までと契りし妻が出で行くに、如何に他人になりしとて餘りな思ひ切りやうと、ぼろり落ち掛る涙を清に見せじと『清やさぞ暑いだらう、最う片附ひたからお休みよ』『はい、何んだか今日は手足が重くて、常時のやうに動けません』、と云ふも雑る忍びの涙。其の後は二人とも漲る涙に、何か言ふが最期、瞼の堰も推し流されんと思へは、時々顔を見合しては背け、成丈見ぬやうにはして居れど、清が見はせぬかとそつと忍ばせて見る目を、何時も〳〵清と見合せ、はつと思ふて傍を向けば、清も同し思ひか同じ仕こなし。互ひに一と言も交へず時を經て、今日も最早五時頃、火鉢の傍に向ひ合ふたるお松は、時計を一寸と眺めて、『おや、最う五時だね、旦那さまにたつた一と目、お面謁つて行かうと思つて、今迄待つて居たが、離縁遊ばした女に用はないと云ふ思召か、いまだにお歸りなさらず、私が出て行つた後にお歸りになるお量見と見える。それでは如程お待ち申ても無駄。又お目に掛つた處が、そのお量見ではお氣に障り、柔しい言葉もお掛なされはしまい。清や私は思ひ切つてお目に掛からずに行くとしませう』清は片時も留めてはしき心『でも奥様、最う直にお歸りで御座いませうに、最少し……最う三十分ばかりお待ち遊ばせな』『それは山々だけれど、お歸りが夜にでもなつてごらん、今度は明日と云つてもお聞濟はあるまい、すれば女の身で夜道は出來ず、如何することも出來ないわね。御縁さへあれば同し東京に居る事だから、又途中でゝも他所ながら、お目に掛かられやう』云ひながら平常着を脱ひで、目に立たぬ薩摩の細かい

飛白と着替へ、黒繻子と鼠縮緬の腹合せの帶緊と結んで其處に坐り、『その着ものは又包むのも面倒だから、お前寢衣にでも着てお呉れ』

清は何にも言はず頭を垂れて、脱捨の着ものの疊む手に、葉末を辷る露一と滴。

（第拾二面）

車云ひ付けに遣つた清は、『只今直に』と復命をした儘、その坐に堪へず、おのが部屋へと泣きに行きしが、暫時らくして門の方に空車の音、やがて清は再び出で來て、『あのお車が參りました、今日は大變に早う御座います』瞼泣き腫して赤くありしは氣の毒なれど、是れよりは又一と泣きの別離と、お松も流石に心騷ぐ『清や、一寸此處へ』返事はなくてべた／＼と坐るを待ち、『では、いよ／＼、わ……わ……別れる事になりました。お前に頼んで置くがね、旦那さまは常時も胃のお惡い方、よくお胸が痛むとお仰言るが、その時にはあの茶簞笥の上の抽斗にビットルが這入て居るからそれを上げてお呉れ。それからと……ゑゝあの、旦那さまの袷衣ね、私の身體が惡かつたので、片袖と襟が縫ひ殘してあります。秋へ這入ると朝晩は冷しいから、私の代りに明日でも縫つて上げて置て下さい。それに靴足袋に穴があるから、大きくならない中と思つた斗りで、とう／＼出來ないでしまいました、あれも序の時に繕つて置てね。最う何も言う事は無かつたか知らん、なんだか氣が變になつて何にも思ひ出せない、まあ後の事は後の奧さんが氣を附けて下さるだらう。それでは清や、あが……なが永／＼お世話になりました、お

前も身體を大事にしてね。緣……緣があつ……たら又遇ひます、こんだの奥さんは私のやうな馬鹿ではあるまい、よくお氣が附くだらうから、麁相をしないやうに。又私が居ないから旦那さまのお小言も出まいが、よく氣を附けて叱られないやうに御奉公をしてお呉れ、私がお付申さない代りをお前に賴んで置きます』清は何と思ふてか、幾度もお松の前に辭義をしては言ひ損ね、言ひ損ねては辭義をして漸つと『お……お……奥樣、私も此處に御奉……奉公いたしますのが、い……い……いやになりました、どんな辛らい目……たとへ人の門へ立ちましても、奥樣お一人はお養ひ申ますから、どうぞ一所にお連れ下さいまし。き……き……清が一つ生のお……お願……お願で御坐います』と言はれて、今迄堪へしお松も俄かに湧き出る淚の泉、やつと振ひ落して『又分らぬ……こと……ことを云ふね、最う遇はれぬではなし、お前も二三度お使ひに行つた、お朋友のお玉さんの處へ暫時く居る積りだから、用があつたら遇へるではないか。又直に家を持つ積りだから、その時お前にお暇が出たら、一所に暮しませう。是れから人の家へ行くのに、供も連れて行けないではないか。分明つたかい、ゑ、清や』『はい、それではお供も出來ませんか。わ……わたくしは殘つてど……ど……どう致しま……』『それは心細いのは……お前ばかりか、この私も心細いが、今云ふ通りの譯だからね』『御無理ではご……ご座いません、分明りました、はい、以來旦那さまを貴女だと思つて、お奉公いたします。奥樣、今から願つて置きますが、お玉樣のお門を通りました時にはお寄り申ますが、お遇ひ下さいますか』『あゝ……あゝ〳〵それは遇ひま

すともね』『そ……そ……それではあの、若しも貴女がお家をお持ち遊ばした時分、私の御奉公が勤りませんで此家をお暇が出ましたら、私をお使ひ下さいますか』『あゝ〳〵遣ひます處か……、一所に仲よく暮します』『えゝ難有う御座います』よき汐時とお松は立ち上りながら『ではもう行きませう』『奥樣、呉れ〴〵も昨夕のやうな……』『最う心配してお呉れでない』後髪引かれながらにこの家の見納めと、賢太郎の部屋しげ〳〵と覗き、心に別れを告げて玄關へ出れば、何にも知らぬ車夫が大欠伸。氣の毒なとお松は清を顧向き『身體を大事に……』と云へば『御機嫌よう』と云ひながら取る袂の先を不憫ながら鳥渡拂ひ、心を鬼にして足早に車へ――門の外へ出て耳を立つれば、泣き落せし清が聲。車の上でお松そつと眼を拭ひけり。

山坂の家の基礎なる、操は千歳の末迄も固きお松閾を跨ひでより、この家は火の消えたやうに淋しく、朝勤めにと賢太郎の出で行く後はお清只獨り、箸の上げ下しに付けお松の事のみ思ひ出されて、忘れねばこそ片時も思はぬ暇はなし。奥樣居たまふ時は今時分こんな話をして笑ひし、生れてからあのやうな可笑きことはなし。又夜になりて賢太郎歸らぬ時は、斯樣いふて慰めあの話して奥樣の泣き顔解かせしと、嬉しきにつけ哀なしきにつけ、お松のことのみ胸に浮び、ある時は獨り笑み或時は獨り鬱ぎ、兎もかくも清にとりて今日此頃は、何んとなく面白くなく只この世のかなしきやうあり。

元より賢太郎も愚かならねば、清がこの頃の素振知らぬにはあらず、知れば流石に氣の毒と思ふてか、

何にかと機嫌とるやうな氣色の見ゆれど、無慈悲な旦那さま、奥樣の仇敵と心に一重隔ての垣を造れば、清は少しも打ち解けず、賢太郎の笑顔よりお松の小言の方、遥かに嬉しと口には云はねど、擧止に顯はれ、折には氣に入らぬ事もあり。しかし今清を出しては、朝夕の世話も自身手を下さねばならぬ仕義に、賢太郎も堪忍して云ひたい事もよくは云はず。

この二三日の賢太郎の樣子、只そは〳〵と斗りしていろ〳〵と物品などを買ひて戻るに、何事の爲めとお清氣を付けて見れば、客でもする氣か饗應の用意の品々、客をするならすると言ひ給ふ筈と不審を打てど、主人といふ字に口の重くて此方からは聞かず。指を折つて數ふれば、お松この家を出てより七日目の夜なり。賢太郎晩饗の膳に獨樂の小半合、深く呑まぬ酒に猪口三つ四つ重ねて、早や微醉の上氣嫌、膳を宛てがひしまゝ流元の用をする清を呼び寄せ、膳の向ふへ坐らせて我のみ笑み掛ける深山の花『清、お前の手一つに働かして氣の毒でならんから、何うか仕やうと思つてたが、いよ〳〵明日の夜家内を一人貰ふ事に極めた。その積りで明日は少し身化粧て呉れ、然しお前も美しい方だから、身化粧過ぎてお嫁さんと間違つては困るぞ』奥樣お出になつてからまだやつと一周間、それに最う後の相談とは、近所の手前朋友の間へ對しても、外聞のよくない譯。いよ〳〵旦那さまは正氣の沙汰ではなしと、清は開いた口も閉ぢず、暫時は惘れて居しも、泣く子と地頭には勝たれず、據なく不興氣に『それはお目出たう御坐います、こんどの奥樣は何方からお貰ひ遊ばしました』この問には賢太郎も逡巡ぎ

『うむ』と云つた斗り、徳利の酒を猪口に酌いで一口に呑み干し、妙に苦笑ひをしながら他所を向いて『その……何よ……何さ、あの……あのそれ』と云ひ切らず、傍に有つた寫眞立てを取つて淸の前に置き『これ……この女さ』云はずと知れた新松葉屋の小高、大概はそれと思ひたれど、もしやと聞けば矢張違はぬ推量。お淸が腸は此處に至りて熱へ上り口惜しと思へば聲も自然に荒く『左樣で御坐いますか』ついと立つて臺所の方へ行きぬ。

明日になれば何時云ひ付けたやら、婚禮の諸道具を知らぬ人の入れ變り立替り持て來て、晝過る頃には料理屋の仕出し、料理人四五人さては見ず知らずの人の手傳ひ、山阪の家は急に時めきて騷がしく、忌々しけれど外は皆新參、淸が皿小鉢の有處一々敎へるも面倒臭し、初めより嬉しくなきこの婚禮騷ぎ、淸は髮を結へと云はれたれど、忙しきと嘘言ふて態と亂れ髮をその儘、摩で付けもせず居れば、成丈け動かぬやうにして居ても忙しさに時は經過て、あらましの用意調ふ頃、五六臺の車の音勇ましく玄關へ横付けにしたは、慥かに嫁御寮のお入り。それと思へば引き違へて淸は裏の物置部屋へ、無念の淚潛しに行きけり。

（第拾三面）

目出度もなき口惜しい婚禮の濟みしよりは、賢太郎の夜遊び晝遊び、梓弓の弦切れてふつゝりと止り、近所隣家の口喧しき噂の中に、新松葉屋の小高ずつしりと尻を据へて、半元服の丸髷姿、名も小の字を

取つて實名のお高となり、長火鉢の傍にくの字なりの不行儀の、馴れし事とてつい折〻に出るを賢太郎は叱りもせず、却つて笑の種となし、晩餐のさし向ひに昔し取つた杵柄、爪弾の忍び駒に仇いやらしいは水調子の文句。聞くたび見るたびにお清苦が〱しく、是れでは山阪のお家もと我れ知らず呟くを、こんどの奥様に聞かれはせずやと、我が口自から抓ることもあり。

初めより清と不和になるは知れたことなれど、賢太郎まだ清に暇を出さず、よく考ふれば出さぬも道理、お高は來てからまだ一と月とは經過ず、今清に暇を出しては物品の在處もよくは分らず、徒らにお高を苦しめるもとゝ、お高が馴るゝまで辛抱すると見えぬ。それと思へば今迄の清が奉公は裏表、到底永いことはなきと知れて居れば、山阪の家の爲思ふも無駄なり、よい加減に働きて通常一と通りの奉公人が務めさへすればよしと、自然用に氣が付ても云はれねば爲ぬことゝ決定ぬ。今日は暇を取つて出やうか、明日は云ひ出さうか、永く使はぬ處と知りて暇の出るのを待つも愚かと、お高の前賢太郎の傍に膝突き付けしことも二三度。しかし又考ふれば先の奥様のお言葉にも、私の代りに旦那さまへ奉公してとのお聲、まだ耳の端を離れねば、今此處を出ては山阪の家はあの古猫の氣儘、海とするも山とするも勝手、さうさせては先の奥様へ申譯けなし、此處は何處までも堪忍して、先の奥様の犬となり、厭や〱ながら古猫に頭を下げて取り入り、何か落度を見付け出した上、旦那さまへ證據を見すれば、如何にお迷ひ遊ばしても根が好いお方、あの古猫を叩き出して仕舞遊ばすも知れず。その夢の醒めた時を見計

ひ、先の奥様がお心の万分の一もお話し申たら、是れ迄の邪見の角は折れて、又元の鞘へ治まる目出度ことのおしとも云へず。それでこそ清がお恩の報し處、奥様も定めしお譽め下され、又このお家も万代不易。左様ぢやと未通女心に決心して、旦那さまが暇をとお仰言るまでは、金輪際此方より身は引くまド、辛らい目を見るも先の奥様の堪忍に比べては、鉛と綿の違ひ。願ふはあの古猫早く尻尾を出して、この身がお暇にならぬ先に、首根固を押へてやりたしと、今は暇の事も奉公の事も忘れて只それのみに浮身を窶え、人は知らぬ鵜の目鷹の目を研ぐ殊勝さ。賢太郎に知れたらば直に暇もの、お松之れと知れば、定めし合す掌に涙の玉を傳はらせて嬉しがらん。

奥様交代りてよりは淋しかりしこの家俄かに賑はしくなり、入り代り立ち代りての人出入り、來るものはと云へば、新宿の内儀料理店の亭主、三味線の師匠仲間の藝者、果ては茶屋の下女箱屋まで、蔭で見て居れば腹の立つ世辭追從、あれでもよく頭痛が起らぬと思ふほど頭を下げ腰を折り、奥様〳〵と持ち上げに來るを、自慢らしい顔付をしてのお高の挨拶。お松が正しい擧止動作に馴れた清が目には、虫唾の走るほど不厭なれど、何が面白きかその都度の馳走、客も〳〵還り掛けは清に向ひ、奥様はお金遣ひが奇麗故、お馳走を頂戴しても咽喉の通りが宜う御座います、定めしお前さんもお勤めよいことゝ云ふ顔を睨み付け、その代り着物の裾がたまりませんと、當て擦りの悪まれ口も高笑ひに雜らして柳の風。自分の身の下女奉公は忘れて、扨ても世間の人は卑しいもの、私しでさへ爲を思はぬお金なら、大根下し

の中へ金貨を雜せて食べさせ申す。

流石粋の果てと憎いうちにもお清が感心したは、お高が人の使ひ振りなり。賢太郎がよく云ひ含めたかは知らねど、お清〳〵と眞身のやうに取りなし、先のお松と少しも違はねど、五臟六腑割て見たなら何んなものか。あれも遣るこれも遣ると、半襟前掛け頭のものより、元結油に至るまで、お清が手より錢出すは罕れなり。これが先の奥樣の手からなれば、夢にまで見て嬉しかれど、信切にさるれば倘々薄氣味惡るく、いよ〳〵遠ざかりたくなれど、此處が眞棒の仕處とわざと嬉しい顏を見せて、その都度〳〵の貰ひものは、脊負籠の底へ使はずに仕舞て置くも、心斗の先の奥樣への義理立て。何故使はぬとお高の目鋭く見付けるを、古いのから使ひ捨てゝと嘘を並らべ、蔭で舌を出すは、憎くなき乙女心の仕打、明治の世に加賀見山のお初はこれなり。

男女となく繁く出入する中に、奥樣の從弟と名乘る若ものあり、眼鼻立ち清らかに年の頃は二十五六の男盛り、誰れよりも壹番足繁く尋ね來て、奥樣の相談相手、常時も身姿は小ざつぱりしては居れど、絹物の氣は更になく、小意氣な薩摩出立ちに、角帶きちんと結び、商賣はと聞けば呉服と答ふれど、何處か目端の利く工合、中々苦勞した上でなくてはならず。賢こき清がはてと目星を附けたはこの男、日を經るに從つて不審も追々増すやうなり。先づ第一に怪しきは、この男の來る時は大概旦那さまは留守、二つにはこの男が來るが早く清に使を云ひ付けて、出したがる樣子は一と癖、三には邂逅に何も云ひ付

ける用のないときは、一と間に膝を突き合して語り、兎角清の來るを嫌ふも妙なり、四にはこの男何時も旦那樣のお歸り時分には急いで歸り掛け、又その時には清に何か必らず鼻藥りを飼つて行くも變な譯、この四ッを引きくるめて清が胸に浮ぶ不審は、これがもしや奧樣の小指とやらには……。』何時かは確かな證據を押へて、古猫が化けの皮と片唾を呑んで待つと知るや知らずや、例の男今日は大分落附て來にけり、常時よりは少し遲い來かたと、清よく〳〵首をひねつて考ふれば、それもその筈、今日は土曜日にて明日の日曜を幸ひと、旦那さま人に連れられての海水浴遊び、今夜はお歸りなき晩なり、扨こそいよ〳〵臭いと、何氣なき顏をしてお清臺所に居れば、果して買もの丶用、傳手に何處々々へ廻つて、それにお前家へ行きたいと云つて居たが、今日は旦那もお留主、ゆつくり行つておいでとは、考への的少しも違はず。今日こそは大願成就の日と嬉しく、曉られまじと態とそは〳〵して、云ふが儘に家を出で丶、暫時考へしが、向ふも去るもの歸る頃の時刻は量り知つて、むざと證據は押へさすまじ、此處は一つ思はぬ方に出で何もかも聞きたく見たし。されど云ひ付かりし用を退けて直にも證據は押へがたく、たとへ證據を押へても、密と旦那さままでお報知せ申のなれば、古猫に知られては何かの不都合、今後へ歸りて何處へか忍んで覗へば、何か耳よりの事はあるべきも、用が足せねば後で顯はれる小口。されば用も足したし證據も取りたし、心は二つ身はほんに一つ、我れながらもどかしく思ひて、焦慮たき足に小石蹴付ければ、後ろから聲を掛けた車夫、見れば屈強の大男に、忽ち心を決定め、

何事も用を足してからと、急くまゝに代價もよくは極めず、直にそれに飛び乘り、云ひ付かつた丈の用を車夫待たせて濟ませ、氣の付けばまた忍ぶには明るくて早し、云はれたやうにやがて家に行けば、餘り急がせたに車夫男にでも遇ひに來しものと思ふてか、變に笑ひながら酒手をと云ふは憎い奴なれど、これも御恩になつた先の奥樣のお爲めと、素直に拂ふて遣り、邂逅に歸りし我が家に、兩親が主扱ひの世辭も、物思ふ身には勿體ないが嬉しくもなし。

（第拾四面）

家に居た時分は土鰌鍋の大好き、今でも變りはせまじ、鰻の御飯は時節柄惡い病の毒と、母親が獨り心配しての馳走も、何となく針でも呑むやうに咽喉につかへ、今度の奥樣の樣子はと聞かれても懊惱さく、よい加減に返事しても女親のくどく、幾度も〳〵聞き直すに、急に家に居るが可厭になり、夕飯の箸置くが早さ、今日は急ぎの御用、遲れてはお首尾がと、よい加減なことを言ひ、今少しと留める母親の手を振り拂ふて、御奉公中は自分の身にて人の身體、家の用に手間取れては濟まずと、只一と言に云ひ破りて挨拶もそこ〳〵戸外へ出れば、まだ少し明るし、是れより腹こなしに歩いて行けば丁度よき時と、急ぐ心を落付けて行けど、何處か變な處でもあるか、往違ふ人の顧回りては見て行くに耻かしく、下斗り向ひてせつ〳〵と行けば、向ふから來た人に最少しで突き當る處、おゝ浮雲なやこの度は足元の大石。山坂の門の閾にお清の足の掛ゝりしは逢魔時過ぎ、天帝も清が忠義を愛で給ふものか、云ひ

合したやうに今日は宵闇、忍ぶ身には最屈強の夜なり。盗みするでもなく惡い事するでもなけれど、忍ぶと云へば心咎めがして、自然と後と先に氣を配り、門の外より拔き足して先づ家の樣子を伺へば、玄關は戶を早や閉ぢて人の來るを嫌ふ氣を顯はしたり。そろり〳〵と足を進めて、臺所口を見過し、物置と塀の庇間ひを身を横にして通れば、憎くや入用ぬ處に蜘蛛の待網、取る間もなくやつと裏へ拔けてはつと一と息、心持ち惡き顏を手拭で拂ひて、さて是よりが大事の關所、段々と步を進めて先づは首尾よく庭の境の垣根まで來たり。是處にて座敷の方を透かせば、まだ閉めぬ戶に障子一重の關、それにあり〳〵と男と女の影法師、いざや敵は本能寺にと今更胸しきりに踊る。手を延して片折戶の鑰を外し、音せぬやうに開けて身體を入れしが、待て暫時穿きものは音せぬ爲の邪魔と其處に脫ぎ捨て、一と足ぬきに近寄れば、大膽とは云へど年から見てもまだほんの處女、氣のみわく〳〵して息のはづみ、足は顫へて踏む處を定めず、首斗り先へ出で身體は兎角晩れ勝ちなり。兎角して手水鉢の傍迄忍び寄り、此處に身を龜めんと下を向けば、足元に何か白きものあり、闇にて正體は知れず透しても黑きものあるやうにて、字やら書やら分らねど、何か後の爲めにと袂へ丸げ込み、腰其處へ落ち附けて息を吞み、さて耳を欹立つると同時に、切れ〳〵ながら聞こゆる話聲『でもそれでは……あんまりひどひ』と云ふはお高の聲『何、ひどひ……まだ未練……、馬鹿な……勝手にしろ』これは例の男の聲、これでも呉服店の手代かと恐ろし『さう怒らなくつても……さう仕ますよ、しかしお金は……、今ではいけない月の末

でなけれ……『衣ものでも……引きさらつて……』『まあ氣を急かずと……月の末までお待ち、逃げ出して……高崎とはあの上州の……』清が鑑定に違はず、いよ〳〵何か計畫で居るに違ひいなし。二人は初めからの好い中、男も承知で此家へ乘り込ませ、好き汐時を計つて有金やら衣類やらを持ち出し、後足に砂を掛けて此處を逃げ出さん談話の工合、等閑にして取り逃がしては何にもならず、明日旦那さまお歸り遊ばせば、直に申上げてと忍ぶお清は齒切りをして、後を聞かんと尙も耳を立てるうち、影法師むく〳〵と動ひて直に明ける障子。中よりさす光明にお清忍び姿を射られて、驚きながら立ち立つてこそ〳〵と逃ける後影をお高に見られ『誰れだい、其處に居るのは』南無三と返事もせず、開ひた木戸口より馳け出しは出せしも、殘念や餘り慌てゝ木戸口に脫き捨てし下駄を忘れぬ。

此處まで斗りで惜しや慌てし爲めに尻尾を押へられ、取り殘した下駄を證據に詰問れたら、忍んで立ち聞きした一條は、白狀してしまはなければならず、密かに遣つて避けんものを殘念なことしてけりと、先づ下駄の云ひ譯に當惑したるお清。されど逃げ出した今になりては、向ふから云ひ出さるゝ迄は、飽まで素知らぬ顏をして居ねば不味し、何うなるかとやら當る所まで遣つて見るべしと、又もとの庇間より急ひで拔け出し、臺所口にあつた下駄を手早く引つ抓んで、門の外まで驅け出し、其處で下駄を穿ひて我れ獨り何喰ぬ顏、態と下駄の音高〻とさせて、再び門の中に入り、この度は大手を振つて臺所口よりがたすたと這入り、雜巾で足を拭ひて奥の間へ至るも、流石心が尤めて襖の蔭より顏斗り出し『奥

樣只今、まことに遲なはりました』清かい、大變に早かつたねへ、あのね今怪しいものが忍び込んで、手水鉢の處へ隱れて居て、何んなに驚ひたか知れなかつたよ』兩人して清が顏を恐しい目をして見るは、事は早や露れたるかと清が胸には立つ矢のひつしり。しかし何處までも知らぬ顏、はざと驚ひた風をして『ゑ、何が居りました、盜人で御座いますか』といふ顏、お高はトろり流眄に見やり『盜人だか、犬だかさ』氣のせいか言葉は針を包んで居るやうなり。永居は身の不爲と早〻部屋へ歸れば、お高再び呼び止めもせず、其の內密談の盡きしか、例の男は歸り行きぬ。定めし今日は一夜泊りて、勝手な眞似しやうと思ひしも、斗らぬ人影よりそれも思ひ絕えて歸り行きしか、よい氣味やと清は胸を摩り下しけり。歸つて行つた後では定めし奧樣自身の詮義、時ならぬ白洲へ呼び出されて、さあ〳〵の詰め開き、下駄の白狀せねばならぬか、それも儘よ、呼び出したが最期鬪ひたことを殘らず並べて、古猫に耻面搔かして呉れんと心を決定れば、何の恐しくもなく、却つて今か〳〵と待つに、先も尾に毛のない白漢、そんなことは一と口も云はず、變なと暫時して奧へ行つて見れば、自分で夜具引き出して自分で潛り込むは、思ひ通り行かで男に別れし腹立ちか、又はこの後のことを思案するものか扨も笑止。しかし默つて居る譯にも行かず『奧樣、お加減でも……』夜具の中より少し調子變りし聲にて『頭痛がするから……お前も最うお寢な』と云ひて、寐返り彼方へ打つて　咳一つせず。

聞かれねば幸福、そこ〳〵に其處ら取り片附けて同しく部屋に入り、先刻庭先で拾ひしものはと思ひ出

して袂を探れば、振り落しもせず確かにありけり。何か手蔓にでもなれと心に念じ、薄暗い行燈の光りに開けて見ればこれは手紙の裂き切れ、二行斗り確かに字の殘りぬ。難有しと心に拜んで秘密といふ秘密は字の裏までも見透さん覺期、兩眼も裂けよと豁開きて讀めば、

『折よく一日留守のよし、直樣出向き候て御相談可申左樣御承知……』

幾度讀み返しても、二行の字は是れ丈け、しかし一筆啓上の處でもなく、早々頓首の終りでもなく、先づは後の證據の緊要ともなるべき箇處、字體は男の手なれば、お高へ宛てし返事なるべし。是れさへ手に入れば何んの下駄の一足や二足、明日旦那さまお歸りならば直に之れで名乘りを上けて、今迄の見し事聞きし事、一々陳べ立てゝお耳に入るればお怒りなさらずとも、せめては疑惑給ふ種。布團の上にお清動手と坐して、兩手を合せ先づ忝なしと禮を云ふは神の助け、後は小聲に『奥樣お喜び下さいまし、貴女の仇讐は、この清が取りました、最う二三日のお堪忍遊ばしまし』

（第十五面）

何時も八時か九時頃でなければ、目を覺してたとのあきお高、如何したのか一番雞の唄ふが否や、お清〳〵と呼び起し、まだ暗いのに雨戸から〳〵開けさせ、臥床の中から首を延して『お清、誠にお氣の毒だがね、急に忘れて居た用を思ひ出したから、今日の一番滊車で大磯へ行き、旦那さまにお目に懸り而うして歸りにその用を足して、御一處に歸つて來る積り、どうか六時の滊車に間に合ふやうに、支度を

してお呉れな』扨れこの古猫め、早くも事の露れたを知つて、此處にては何とも云はず、先を潜つて大磯へ迄出張り、有ること無いことを並べ立て、旦那さまを好い鹽梅に手の中に丸げ込み、あの不義の罪を脱れる積りか心悪し。先へ遣つて先へ旦那さまに遇はせ、先へ宜いやうなことを云はれてハ、少と此方に取りて不都合と思へば、『奥様、態々大磯までお暑いのにお出なさらずとも、夕刻までには旦那さまもお歸りで御座いませうに』『それまでお待ち申て居ることの出來ない用だもの、旦那さまもお出での時、都合が宜かつたら後から來いとお仰言たし。何一番滊車で行けば暑くないうちに行かれるよ』『それはさうで御座いますけど、貴女たつたお一人りで、若し間違ひでも御座いましたら』『何そんな事のあるものかね、初めての處では樣子が分らないが、去年も行つたことがあるから大丈夫だよ、この節の人がそんなことを云つて居るやうトやあ……。お前外國とやらへまで一人で行く人があるのに』一方は一方より先に遇はねば、罪を云ひ瞞めるに不都合千萬、又一方は一方を先に遇はせてハ大罪を露はすに不都合、南の果てと北の端との思考へなれば、行かうと云ふはうは何程留めても留らず、留めやうと思ふ方は何を於ても留めねばならず。しかし互に胸には打ち明け難き秘密のありて、その又秘密は秘密と云へど互ひに分り切つた秘密、何方も綿に針を包んで、表はがりの主從扱ひ、奇麗に話し合つても心の刃は磨き合ふ中なれば、遂には口論の端ともなる。お高は少し聲を荒らげ『何もお前に留められる筋はないよ、お前の足を借りて行きはしまひし、私の足で私が歩ひて行くのに餘計なお世話だ、お前ハ早く臺所へ云

つて御飯の仕度でもおし。朝つぱらからくだらないことを云つてさ、縁起でもない』古猫そろ〱尻尾を露はし、浮た水で研き上げた舌の先、氣強よくつても世間馴れぬお清は、云ひ卷くられて返す言葉もなし、只口のうちでぐど〱云つて居るを、焦慮つたしとや夜具刎ね脱けて飛び起き『なんだね奉公人の癖に生意氣な、主人の云ひ付けだよ、早く用をしてお呉れ』いよ〱激しき毒口、昨日の柔しき樣子のがらり變りしは、昨夜のことを根に持つての業か、恐ろしき女菩薩の外面、内心の如夜叉露はるゝは明日とは延びじと、お清少し恐ろしくなりて尾を卷く犬の一言もなし。

罪もなき襖障子に當り散らし、車夫の來やう晩きと小言を云ひ、寢衣其の儘に脱き捨てゝ出で行きたる後に、清は臺所の竈前にどつさりと坐り、さて是れからは如何したものか、大磯への用は昨夜のことの云ひ譯を付けに、先を越したに相違はなし。あの舌先で瞞めては成程旦那さまのお迷ひなさるも無理ならず、若しも宜いやうに事を拵へて、何に喰はぬ顔で一所に歸つて來られては、今迄の苦心も水の泡、これが奉公の身でなければ、是方が先へ大磯へ行かうものを。二人並べていざ對決となつては、とてもあの口には勝てず、まして此方は奉公人、先は旦那さまの戀人それに口前が宜く、その上主人といふ肩書あれば、何程骨を折り理を持て居ても、負けるは知れたこと。はて如何して仇敵を取つたものか、暫時襟へ首を入れて考へ、立ち掛ける膝をぽんと打つて、その時こそはあの手紙の裂き端。

何程古猫の天眼通にても、この證據のあるはよもや知らじ、樣々白らを切らしての上、いざと云ふ此方

の行き詰りにこれを出し、不意打を食はして只一と挫ぎ、嬉しやと用をずる手ももどかしく、早く歸りて早く事の初まれかしと、首を延し足を爪立てゝ待てば、何うしたのやらその日は歸らず、とう〳〵一と夜待ち明して次の日となりたり。今日こそはと思ふて居る朝冷の中、睦しく手を引き合ふ計かりにして歸りたれど、不思議なは三十恰好の小意氣な年増、一處に兩人が後に附ひて來たりぬ。

お清の目には只仇敵を取ること計り寫りて、外のことには氣が付ひても心か付かず、妙に澄したお高の顔付、あのつんとした鼻柱今にへし折りてと、胸の中に小躍りして、這入り掛けに睨めた賢太郎が常時に變りし眼は少しも知らず。奥には衣類着替へるやら、海水浴の面白き話しやらにて賑ふうち、最う程なく晝時と清は飯の用意して居れば、先刻附從て來た女臺所へ出て來て、何か手傳ふと言ふ、別に用もなければ水でもと頼めば、手桶下げて酌んで來る姿のよた〳〵として可笑けれど、笑ふては惡しと見ぬ振りをして、薪のいぶるに雜らし、顔に袖を當てゝやつと笑ひを逃しけり。

お清〳〵と連けさまに呼ぶはお高の聲、此方にても待ちに待ちし處、二つ返詞して立ち上り、濡れ手前垂に拭きながら奥へ行き、襖の處にて片襷を外して手を突き『何か御用で』と見れば、二人向ひ合ふて坐り、お高賢太郎の顔を見るを相圖に『此方へ這入れ』と云ふ賢太郎の眼は早や釣り上りたり。心は決定て居れど、改まりて見れば何となく恐氣の付き、白洲へでも呼び出されたやうな氣になりて、自然俯視き勝になるも、主と家來の間仕方なきものなり。

敷居を越して末座に引き下り、お高の尻の處に端坐まるを待ちて、賢太郎は聲高く『淸、貴樣は不埒ものだな、今日限り暇を出すから出て行け』驚きしお淸、先を越して何か拵へごとはして來たことと思ひたれど、突然に暇をとまでは考へず、俄然思ひもよらぬ一と言に度膽も拔かれ、腹に拵へて置きし對決の言葉は一切うたかたの泡、古猫が腹の中の巧計は、到底も淸が及ぶ所にてはなし。不意の横槍にどぎまぎして、流石に言葉も四途路、何にも言はぬ中から早や受身になるお淸『お暇を……不埒……何が不埒で御座います』『何だ、何が不埒、聞くまでもない貴樣の胸に覺えがあるだらう』覺えがでは辯解の途も立たず、元より覺えの無きこと、先づ聞ひてからでなければ、云はん言葉も闇と『覺え……少しも私には分明りません』賢太郎は鼻の先で笑ひながら『分明らぬか、覺えが無いか、好い加減に惚氣て置け。何にも知らぬと思て居るか馬鹿奴』淸は前掛けの膝を直して、やうやく落付く心に少し眞面目になり、充分云はしてから化けの皮を剝ぎ掛けんと『何で御座いますか、どうも分明り兼ねます、この麁相くさい人間ゆへ、何か落度が御坐いましたか知れませんが、どうか不埒の件をお仰言つて下さいまし。只覺えがあるだらうと斗りお仰言つては、お詫びのいたしやうも……』と云ふを賢太郎は打ち消し、『馬鹿、惡い名を付けずに奇麗にして暇を遣らうと思へば、自分から詮義立て、聞きたくば聞かしてやらう。一昨日の晩手水鉢の蔭へ何んの爲に忍んで居た、大方細君が手水に入つた隙でも見て、何か持ち出し、色男にでも遣る積りだらう』古猫旨く拵らへたり、されど色男とは好い塲合と淸は透さず『奥樣

こそお留主に色……』と云ひ掛けるを、今迄默つて居たお高、忽焉居を反り返して『この人にも驚くよ、自分の事を人にして仕舞ふとは』賢太郎の顏じろりと見る眼れ、那須にありしと聞く殺生石の毒よりも可恐し。

（第十六面）

お高の流眄には氣も魂も朽り、理も非も分らずなる賢太郎は『何んと云ひ譯をしても宜けん、それでは何んの爲めに用もない薄暗がりに踞んで居た。忍んでは居りませんと云ふだらうが、それこそ頭隱して尻隱さず、細君に見付けられて倉皇て逃け出し、下駄を忘れたドやあないか、此方には歴乎とした證據のあることだ』斯う辰巳上りになりては、何んと云つても云ふことは通らず、證據呼はりをするこそ幸ひ、是處ぞ例のもの丶出し處、是れで火の手の勢を弱らし、弱つた處に付け込んで、次第〳〵に譯を云へば、旦那さまとて少しは疑惑の起らぬことはあるまじと『清は帶の間に疊んで仕舞て置た手紙の切れ端、丁寧に取り出し片手に持つて、お高の方を睨め『私も申上げたくは御座いませんが、斯う云ふ事が御座いますから、一昨夜お庭先へ忍んで居りました』果してぎよつとするお高、何ぞと覗き込めば、賢太郎は氣も付かず、清の方のみを眺め、其處へ出した手紙の切を手に取りて、大きく讀み上げれば、變り掛るお高の顏色、清はそれと賢太郎に知らせたけれど、左樣も出來ず。賢太郎は疑ふかと思ひの外、益々怒りを増して『何だ是れは、それ問はずに落ちず語るに落るとはこのことだ、おれの留守に色男を引き込む

相圖だらう。書いてある御相談とは何だ、品物でも持ち出すのか』と云ひながら、手紙の切れを猶細々に裂きて丸めるに、是れでこそと思ひし清が賴みの綱も今は絶えたり。餘りの口惜しさに堪へず、わつと泣き出せば、賢太郎はせゝら笑ひて『何うだ云ひ譯はあるまい』飽まで鼻の下を長くし、折角の清が忠義を烟と消して賢こぶるに、安堵の胸そつと摩で下すはお高、靴を隔てゝ痒きを搔くと人知れず齒を嚙ひ切るは清なり。

『さあ云ひ譯はあるまい、物の紛失ぬを汐時に、何にも云はず暇をやる、明日にも出て行け。貴樣が居らんでも今日代りを連れて歸つて來たから、困りはせんぞ』と云ふ賢太郎、お清今はふつ〳〵愛想も盡きたり、一端は思ひ返して家の爲めと折りたくなき腰を折り、取りたくなきお高の機嫌を取りしはこの古猫を退治せん爲め、それを確かな證據まで出して見せても動かぬ迷ひに、何程骨を折りても馬鹿らしと、出ろと云ふを幸ひに出る氣になりぬ『何程申上げてもお分解にならなくつては仕方が御座いません、お暇を戴くと致しまして……がこの申譯は必らず致します』『申譯も糸瓜もあい、明日にも出て行け』今は何處迄も向ふ面、清は惡びれもせず『明日と申さず只今からお暇を戴きます』是れには賢太郎も少し驚きしが、さらぬ顏付『露はれた處に永居は出來まい、それも宜からう』主人とは云へ無き名を付けて、それに又この惡口、飛び付きて遣りたけれど、ドつと堪忍して己か部屋へ入りぬ。

一と時二た時の内多くもなき荷物を揃へて、風呂敷に包む計りに仕立て、車屋へ一と走り行つて兩人乗

一臺を託み、引き返して先の奥樣に貰ひし數寄屋の衣物、お高へ當て付けに着替へ、同しく拜領の朱珍の帶、嫁入りの時よりこう云ふ時とゞめて、自分の荷物を殘らず奥へ持ち込み『出ます時には奉公人の荷物をお改め下さるのが、例になつて居りますさうで御座いますから、一寸お目をお貸し下さいまし』と斷つて、衣ものより髮の道具一つ〳〵に殘らず兩人に見せて荷物を結へ、終りにお高に貰ひしもの一つも缺かず其處へ揃へて『奥樣、貴女に頂きましたものは、何時ぞやお返え申ます積りで取つて置きました。只今お返しにいたしますから、こんどのお女中にでもお遣し下さいまし』是の深き意は流石に賢太郎にも分明らず、又古猫の胸にも曉れず、只怪幻な顏して居るを小氣味よしと腹に笑ひ、挨拶も輕く出で行く先は何處、先の奥樣のお住居を目的に……。

東京にて根岸と云へば、世の風塵を避けた別界、まだ都のお江戸と云つた頃には、驕奢贅澤の人の下屋敷、又は妾宅隱宅計り軒を並べ、米の價も知らぬ顏揃ひ。されど今は汽車の烟、製造所の機械の音に、名物の鶯は何處へか住み替へ、次第〳〵世の塵の侵しては來ても、まだ昔しの面影を殘して、船板塀青竹の建仁寺垣に靜かを樂しむ人もありけり。

卯の花垣の折廻し、前に小溝を据へ、手斧目の衡木門小じんまりとして意氣に、二年程前に建てた家あり。敷居鴨居まだ曲まず、檜柱の香ひぷんとするに慕れて、一と月ばかり前より此處に住ふ人は、まだ年若き女一人、面姿麗しく衣容も見憎くからで、擧止動坐も優しく、一目見れば處女かと思へど、よ

く氣を附ければそれふてもわらず。近所の評判も姿美しき丈けに早く立ちて、先づ不審を打ちしは何ものと云ふこと、或ひは圍ひものといふもあれば、華族さまの姫君が勘當の謫居といふもあれど、人の妾の身にしては旦那らしきものゝ出入りも見ず、第一男たるものは八百屋酒屋のやうな用を聞くものゝ外、この門を潜つたことはなし。華族の姫君にしても怪しく、何程謫居の身にしても適には實家より人の來さうなものに、そんな人の蔭はなし。只出入繁きは十二三より十七八迄の娘、大概日々に門を潜りたり出たりして、中々に賑はし。さて女主の姿を見れば、何時も同じやうに紙布を來て、別に風潮に連れやうでもなく、只清潔と造りし中に何處か氣高し。人の噂も中々に當らず、何をして何に活計を立てゝ居るやら、少しも知れぬ中に、近所にて僅か物の讀める嬶が、ある日この門の前を通り、表札を覗ひて來しの談話に、手跡美事に優しく、平尾蓮香女史と書ひてありと云ふ。されどまだ分明らず、その次の人の話にては丁度通り掛りし時、門の内より出て來た小娘、聲高に竹や梅の書きやうを話しながら行くにて、やつと女主は畫師といふことだけが分りぬ。

ある日の夕刻なりけり、二人乘りの車に荷物を乘せ、自分はその傍に付ひて歩行て來し一人の女、この家の前にて車を留め、表札をつくづくと眺めてやがて内に入り、玄關を遠慮してかわざと臺所口に音信へば、主も從もなき一人住居の畫師は、返事をしながら立ち出で、開く障子に顏を見合せたる内と外、外の女は早くも聲を掛けて『奥様』此方も同しく『おゝ清かい、よくねへ』

甲斐が不審打ちて只ゞ見て居るお松に、委細は後にてと斷り言ふて、早や自分の家へでも來たやうに、甲斐がひしく乘せて來た荷物を臺所へ上げ、車夫に代價を渡してお清『お丶暑い、奥樣御免下さいまし』と、其處に有つた七輪煽く團扇取つて、胸先へと送る冷風、お松は『まあ其處に居ないで、此方へお出な』自から先に立つて茶の間へ案內して、その身も其處へ坐り『清、お前お暇が出たのかい』

これを口切りにして清はこれ迄の一分什麼、落ちもなく話して『と申譯で御坐いますから、餘義なくお暇を戴ひて參りました。奥樣貴女は只今何を遊ばします』『幸ひと習ひ覺えた書を書ひて、ハンケッチや半襟のやうなもの丶下繪にでも貰うと思つたら、あのお玉さんのお骨折で今では大分お弟子が出來、下手ながらもお師匠さんをして居るのさ。まあ私はこれでよいが、お氣の毒なは旦那さま、お前の話の通りでは今に大變が起りはしまいか知らん』離れて迄も氣に掛ける誠情、清はそんな事には關係ず『奥樣、お氣の毒で御坐いますが、お約束通り私をお使ひ下さいますか』お松は莞爾として『あ丶丁度人手がほしひ處だから、お前さへ宜ければ何時迄でも居るがよいよ』淸は手を合して『奥樣、難有う御座います』

（第拾七面）

お松お清は又元の間好き主從となりて、誰に氣兼ねも入らず、姉妹のやうに暮して居る中、浮世は早くも秋風の立ち初み、軒端覗く梧桐に一葉散り敷き。哀れを招く尾花情を知る女郎花、園に置く露の夜に

増り來て、女計りの淋しき宿。小男鹿の聲は聞かずも、衣かたしき虫の音に腸を絞られ、秋雨軒端叩く夜などは、一と間に清と二人り塊り、氣味惡く思ふ時もあり。それを付け込みてか、知れる人の折々心配めかして、二度の夫をと勸むることもあれど、最う夫には手を燒きしとて、談話の緒口も耳に止めず、まだ財産もあり細きながら金を生む腕もあれば、下女一人位遣ふて居ても、食うに困ることはなし、その中には兄も歸るに、よき養子一人世話して貰ひ、それの生長の面倒見て遣るも、却つて樂しみ。山阪へ面當てと云ふにはなくても、美事後家を通して見せうと、元より固き操をいよ〳〵固めて、女ながら一軒の土臺を踏まへ、貧乏動きもさせぬれ、今時に珍らしき天晴れ女丈夫。强將の元に弱卒はなく、清も同しくよい聟見當る迄はと、我が家のやうにして働き、此處のみは千字文の中の上和下睦の金言に違はず。

今日の繪具やら紙やらを買ひに出し遣りたる清は、歸りさう〳〵お松の前に坐り、突然に『奥樣、それ御覽遊ばせ、とう〳〵誑されてお仕舞いなすつた』お松には何のことやら更らに分明らず、小首傾むけて『何だい、突然に又お株が初まつたよ、後も先もなくつては少しも分明りやあしないやね』成る程我が身許り合點して話し掛けても、無心に居ては何が何やら知れぬも道理、氣の早いことゝ我れながら可笑しく、笑ひ倒るれどお松には又少しも可笑しくなし。餘り笑ふに釣り込まれてお松も、『おほゝゝゝゝゝ、何だよ清や、譯も云はずに笑つてさ、いやな人だよ。お話なねへ』

やつと笑ひを止めて得意に語るを聞けば、今日清は出先にて山阪の近所のものに出遇ひ、最う出し家にて關係はなけれど、その後の樣子の聞きたく、一寸の立咄しに山阪の家のことを叩けば、嬉しきやら氣の毒やら、清があの家を出てから二た月目と云ふ終りの日に、山阪賢太郎が取納し金幾千と、使ひ餘しを溜めて置きしものとを合せて二三百圓、それに手當り次第衣服やら道具やら、目ぼしきものを一と包みに掻き攫ひて、新參の下婢を供に連れ、お高眞晝間の賢太郎が留主を幸ひ立ち退きけり。何にも知らぬ賢太郎は家に歸つて此の有樣を見、男泣きに齒切りをして口惜しがり、清が訴へを水と流したを悔めど、今更になりては祭濟みて跡の花車、六日の菖蒲は賣れ口のなく、十日の菊は賞美ぬと均しく、只開くは口計り。しかし無殘〳〵と捨てるも愚か、元より公にしては耻辱の耻辱、忍び〳〵に手を分けて行衞を探づぬるうち、ある處から不斗聞き出し、上州前橋へ人を出してやつとお高丈けは押へしも、盜み出された金と衣服は、押し隱したか知れねど一つもなし。例の男はと聞けば、これが元は上州の博徒とやらにて、旨くお高を喰へて迯けしも、前橋へ行つて好の道と直に手を出した惡さを、折惡しく警官に踏み込まれ、今では八十日の苦役の中。天網いかで惡人を迯さんと喜んでも、賢太郎が損は損、愚かならぬ性質とて忽ちに改心し、持ち出されたものを手切金と其後お高を見切り、今では老人の下婢に活計向きの事を任せて、不自由勝ちにその日を送る自から糺明の身の上。

吾が先見が當りしと勇み立つて語るお清に、萎るゝはお松、それも無理ではなし、初枕交してより憎さ

とは思はず、今も折々には胸に浮ぶ賢太郎が、改心しての自分糺明と知れては、最愛しさも増して清が前に坐らざりせば袖は瞼を拭はんものを。

宜い氣味とはさら〳〵思はず、お氣の毒なことと最う少し早くお氣が付かれたら、こんなことは有るまいと思へど、今となつては言つても過ぎた後、せめて御改心なされたはまだしもの取り柄なれ、お諦らめなされたと聞けば、何もくよ〳〵思ふ程の事はなし、此方にても諦らめて最う心配はせじと、それよりは一心に繪の事斗りに身を入れ、兄の歸るを待つより外の胸に掛る雲もなし。

上野に繪畫共進會を開かれると云ふに、名を賣る爲にはなくも好の道、勸むる人さへあるに勵みの出て、出品して見んと極彩色の大幅、圖は袈裟御前が夫の死に代るところを、身につまされし一心、下圖から念を入れて筆を振ひ、仕上りは最う二三日、吾れながら宜くと思へば嬉しく、見落しの色彩りはなきかとそれのみに身を窶し、繪筆片手に待つて眺め入る處へ、表口に案內の聲、それも耳に入らずして居れば、やがて清が取り次ぎ、けたゝましく畫部屋へ飛んで來て息も世話しく『まあ奧樣、山阪の旦那さまが』お松は繪筆其處に落して『ゑつ、何』『旦那さまがお光來になりました』『嘘だろう、恐驚したよ』清は血相を變へて『いえ嘘では御座いません、お玄關に待つていらつしやいます』思ひも掛けぬこと、お遇ひ申たきは山々、何うか此方へと清に云はんとせし舌先元へ呑み込み、立ち掛けた膝を動乎と落付けて『眞當かい、眞當なら斯う申てお呉れ、何んな御用かは存じませんが、お離緣になりましたからは

他人、女計りの所帶で御坐いますから御過ひ申ことは出來ません。又貴夫も離縁遊ばした女の處へは、何も御用のない筈、それを他人となつて遇ふとお仰言るなら、私の方も亦只今手離し難い事に掛つて居りますから、お目には掛れませんと斯う申てお呉れな』乾度喜ばれんと思ひの外、動かぬお松の一言に清は惘れ顔、さう云ひに行つて宜いか惡いか、決め兼ねて立つて居るを、お松に急がされて不性〳〵に行きぬ。

玄關に立つて清が返事遲しと待つ賢太郎が前に手を突き、氣の毒げにしほ〳〵として、お松の口上を述ぶるも澁り勝ちなり。賢太郎も案外の思ひ、暫時は言葉もなし。しかしよく〳〵考ふれば、お松の云ふ言に一つとして筋の違ひしことはなく、男の身として離縁した女の處へ來るは、實に呆氣極まりし譯なれど、過つて只の一と言、不實の謝びをしたく、改心の印も見せたく、斷はられて再び遇はんとするは、面目もなき次第、男といふ字に耻かしけれど、是れも皆吾が爲せし災禍、聞かぬ迄も今一應清に賴んで見んと、我慢の角も是處に折れて『清や、誠に氣の毒だが最う一ぺん取り次ひで呉れないか、外の用ではない、今日は今迄の罪を謝びに來たのだと云つてお呉れ。賴むから、え、清』尾を下げて來るには左樣手強くも云へず、さりとて奥樣あのやうに思ひ切りよくお仰言ては、最う何んと云つても取り上げはなさるまじ『はい、申ますは幾度でも申ますが、どうもあのやうにお仰言てでは……』流石に賢太郎强ひてとは云ひ兼ね、小首傾けて思案のやうなりしが、やがて『それではお前の骨

折を頼むより外に仕方がない、隨分お前も不實なめに遇せて置て、今更頼むとも云へない義理だが、昔しの賢太郎ではない、山阪賢太郎改めてお前の情を頼む』女なら手をも合すべきところ、男だけに口先にて云へど、眞情は面に表はれて爭はれず。頼むと云はれては義に強きお清、お高こそ憎め賢太郎は憎まず、どうにか元のやうに御一所にと思ふは常時の願ひなれば、どうかしてお遇せ申たきと獨り心を碎けど、別に宜い思案もなし。なしと云つて賢太郎を立たせて置く譯にも、ゑゝ叱られたらその時と決心して『宜しう御坐います、どうか奥樣に願て見ませう』

快よく獨斷にて受け合ひ、玄關より賢太郎を上げて、次の間の應接處を眞似し一と間へ通し、聲を密めて『奥樣を何とか拵らへて見ますまで、暫時らく是處でお待ち下さいまし』忝けなき清が情けに賢太郎は合點くのみ。立つて行く清が後影を見詰め、あの心操は皆なお松の仕込か、お高に比べては雲と泥の違ひ、そのお松を無慈悲に逐ひ出した時のこの身は——その時の心は、鬼にてありしか惡魔に魅入られしか、思回せば自から身の恥かしと、賢太郎吐息を漏らしぬ。

お清は賢太郎を忍ばせ、以前の部屋へ行けば、氣強くは云ひしもの丶氣に掛るかお松、繪筆も捨て丶何か思ひ入るやうなり。お清つか〳〵とその前に進み、かばと身を倒して『奥樣、お許し下さいまし』何をだへ、山坂さんはお歸りになつたらうね』はいその事で御座います、乃公が悪いから不實の謝びをしやうと思つて來たのに、遇はないとは氣強いと大變なお力落し、餘りお氣の毒で見兼ねましたから』如

何しましたへ『はいお通し申ました』『え』『どうか私を御存分に遊ばして、旦那さまにお遇下さいまし。清が一生のお願ひで御座います、奥様どうか清を不憫と思召して、奥様』清が口説くを默つて聞き流し、襟へ首を中分入れしお松、暫時して顔を擡げ、清の顔をじつと見詰めて怨めし氣に『お前の顔に免じて今日はお遇ひ申します。然し二度とは……それをよくお斷り申て置てお呉れ』『え、お遇ひ遊ばしますか、奥様難有う御座い升』我が身に掛ることのやうに喜んで、小兒に均しく賢太郎を待たせた方へ驅て行く。

清を先に立てゝ這入り來し賢太郎、元はわが夫か松かと云ひ合し間なれば、氣強く云つても耻かしき處もあり、擡げし首を垂れてお松は、只賢太郎が足を見るのみ。賢太郎も亦面目なく、今更合す顔はなしと下を向き、二人顔は見ずに改まつた時候の挨拶、我より話でもなく彼れより語るでもなく、互ひに疊のみ睨み詰てとんと埒もなし。お茶をと清が立つて行きしはよき場合、男は男だけ賢太郎より口を解きて『お松……お松さん、今日は我の不埒をお謝びに來ました、定めしお聞及びでせうが、今更面目次第もない不行狀、自分では生れ代つた積りゆへ、以前の悪い事は許して下さいまし』頭を下げられてお松は、その罪を憎んでその人を憎まぬ度量濶く、捧げる手に禮を返して『さうお謝びでは恐れ入ます、貴公がお悪いではなく、皆な私しの足らぬから起りましたこと』『それではお謝びの仕やうも御座いません、お心に入らなければ如何にもお謝びを……』決してお謝びには及びません、御一所になるも御縁ならお

別れ申ますも御縁で御座います』清が入れて來た茶に暫時話は途絶え、繪のことやら繪畫共進會のことやらの話をして時を費やし、賢太郎は改めてお松の顏色を覗へば、常時の愛嬌深き靨、心配なき此の頃の氣樂さに元へ回りて、平尾松子と云つた時分の容姿に變らず。怒りの影は笑める口元に宿さぬを幸ひと、云ひ憎さうに頭を搔き『少しお願ひがありますが、お聞き下さいますか』何氣なく『何んで御坐います』その何氣なくが却つて面目なけれど、扨止める譯にもならず『厚皮な奴と思召さうがお松さん、最う一遍山坂の家へ歸つては下さいませんか』聞くお松は殊更に形を正し、身繕ひも甲斐〲しく衣服の亂れを直し『そのやうな松と思召して御離縁なさいましたか、如何に馬鹿でもそのお言葉には從へません。しかし一遍夫を持ち――山坂賢太郎といふ夫を持ちましたこの身體、頑固のやうで御坐いますが、操を汚して二度の夫は決して持ちません積り、これ計りは御斷り申て置きます。是れからは畫師の平尾蓮香で死にます。今日は貴公の御改心を伺ひ、又私の心をお知せ申ませうとお目に掛りましたが、此次よりは最う決してお目には掛りませんから、その思召でこんな女は思ひ切り遊ばし、よい奥樣を――お高さんとやらのやうでない奥樣をお貰ひ遊ばし、山坂のお家の礎をお固め遊ばすを、蔭ながら願ひます。私の心はこれこの書の通り…………』

出して見せたは筆力非凡の例の袈裟御前、賢太郎一と言も返す言葉なく、只感心してこの家を出で、待たせた車に乘つて家路へ向かへば、往來の見える窓を明けて後影を見送る人は、清か、否お松、見れば

襦袢の袖を啣へて眼をしば叩く憐れさ、實にや破鏡は再び照さず。

短編小説明治文庫第七編終

博文舘編輯局校訂

帝國文庫

全部五十卷
紙數五萬頁
全部厚サ七尺五寸
一冊紙數壹千頁

正價 一冊金五拾錢○五冊前金二圓四拾錢○十冊前金四圓六拾錢○卅冊前金拾三圓○全五十冊前金二拾圓○郵便税一冊十四錢宛○通運便全國一般一冊拾錢

體裁 縱六寸五分横四寸五分厚サ一寸五分◉洋裝背皮金字入堅牢最上美本◉毎卷密畫數十個挿入◉全文總フリ假名ヲ付ス、印刷ハ日本第一ノ活版工場秀英舍ニテ新鑄五號活字ヲ以テ鮮明ニ印刷ス、洋紙ハ上質堅靭ナルモノヲ用ユ、校正ハ嚴密正確ヲ極ム、全部五十卷ノ躰裁同一ナルヲ以テ完成ノ際ハ其美觀實ニ居室ノ飾品トシテ絶美ノ光彩ヲ有スベシ

出版期限 明治廿六年三月ヨリ毎月二回宛出版シ廿八年三月迄ニ全部完成スベシ、本舘ノ出版ハ豫約申込ノ多寡ヲ論セス陸續出版スベシ、殊ニ本書ハ大出版ナルヲ以テ秀英舍ト特約シ數十名ノ職工ト數臺ノ蒸氣器械ハ常備運轉シ期限内ニ全部必ラズ完成ス

本書特色 本書ハ和漢ノ軍書小説實錄等大家ノ傑作名著ハ悉ク網羅纂輯シ其紙數ハ五万頁ノ大卷ニシテ本邦著名ノ群書類從ニ數倍ノ字數アリ實ニ從來未曾有ノ大出版ニシテ其價格僅ニ二拾圓ニ過ギス其便利有益ナル、其低廉無比ナル亦多言ヲ要セズ

著述出版の二業は最も文運の進歩を資け而して出版の難きは實に著述の難きよりも難し故に往昔某侯は僅に康熙字典を飜刻するがために其の封三萬石を擧げ水戸侯は大日本史の爲に三代の間年々五萬石を供給せりといふ嗚呼當時に在て大出版の事業は諸侯の力を以てするも尙且辛ふじて之を成せるに過ぎず今や明治聖代活版印刷術の進歩に由て出版事業の難易固より當年の比に非らずと雖も尙ほ決して容易なりと云べからず弊舘幸に優握なる國恩と世上海岳の眷顧とに由て此大事業を成すことを得るに至れり依て玆に大に奮發して帝國文庫なる大出版を企てたり帝國文庫は毎冊一千頁全部五十卷總紙數五万頁に達し字數三千二百万に餘り收むる所幾千卷なるをしらず洋裝堅緻の製本とし尙之を積めば高さ七尺五寸に達す古人等身の書を大部とすと雖も帝國文庫は遙かに其上に出づ大平御覽群書類從の浩瀚なるも本書に比すれば實に遠く及ばざるなり眞に和漢開闢以來絶無の大出版なり、帝國文庫を出版する爲日本第一の活版工場なる秀英舍は精良なる數臺の器械と熟練なる數十名の職工とを增置し特に萬端の準備を盡せり其器械職工洋紙を要すると恰も年中間斷なく日々二万枚以上を發刊する大新聞と相當れり而して其年月を要すると二十有五ヶ月即ち滿二年と一ヶ月に至る抑も弊舘今特に此の大出版を成すは大に和漢名家の好著述を傳へて文運に資益し聊か江湖に酬ゆるの微志に出づ幸に平常愛顧の諸君は此書に由て無二の至樂と明治聖代出版業の大進歩とを徵せらるべし、出版業に尙ふ所は廉價を以て好書を供給するに在り故に和漢開闢以來絶無の大出版なると同時に又古今無雙の廉價を以てせり其鮮明堅牢精正兼ね備へて而して非常の廉價なるは當に當代出版業の模範たるべくまた以て出版業の大進歩を示すに足るべし

● 自第一編 至第四編 校訂 眞書太閤記 全四冊 四千百頁

皇祖開國以來玆に二千五百有餘年、英邁非常の士實に千を以て算ふべし、然して一時俊傑雲の如く英豪林の如くなりしは元龜天正の際を尤も盛なりとす、中に就て身僕隸より起り風雲に乘して天下を席捲し職

関白の尊に至りて位人臣の榮を極め所謂一世の智勇を推倒し萬古の心胸を開拓するの偉畧を備へたるは豐太閤その人に非すや、勳業の隆經綸の大實に千古比なしさいふべし、眞書太閤記三百六十卷、その一生の經歷を模寫曲盡して人をしてその烱々の眼光を視、暗啞叱咤の聲を聽くの懷あらしむ、唯た惜むらくは魯魚頗る多く亥豕亦少なからず、仍て善本數種を取りて參訂比校し、廣く世に公にす、蓋し英雄の面目を全するに庶幾からんか、此書一讀以て閑を消し鬱を排するの小說に充つべく、以て正史の闕漏を補ふべく、亦以て勇武節義の氣象を養ふに足るべし

第五編 校訂 源平盛衰記 全一册 千三百頁

我邦演義の稗史中殊に著くして尤も面白きは源平盛衰記に若くものなし其事其文共に千古に傳ふべきに足れり、古來版本寫本十數種ありて廣ろく世に行はるゝも之が爲め也 但當時文運未だ開けさるの際に成り、而して歲次の久しき彼此傳寫したるが爲め、魯魚亥豕の訛謬頗る多く、假字の用法を誤れる、假字文中に往々和習の漢語調を雜へたる等は諸本何れも然らざるなし、隨て世人か此書の流讀に不便なるを歎ずると久し、仍て今回數本を集めて互稽參訂し、字を正し、假字を改め、句讀訓點の謬誤を校正して、以て世に公にす、盛衰記の版本世に多しといへども、恐らくは本書を以て唯一の正本となさざるを得す、猶ほ古劔の新たに磨を經たるものゝ如く、精氣光怪、千歲始めて顯るゝと云ふべし

自第六編至第八編 校訂 南總里見八犬傳 全三册 三千五百頁

文の妙、事の奇、馬琴氏の八犬傳は實に宇内の有數珍書なり、唯其卷帙浩瀚にして藏架に不便なるを憾むるのみ、本館仍て之を三卷に約す、用紙精良、印刷鮮明、製本は美にして堅く、挿畫は密にして麗し、且卷首に附するに依田學海先生の細評を以てす、先批評を讀みて後本書を味ひなば、必ずや手の舞ひ足の踏むを覺えざるの妙味あらん

第九編 東海、木曾 奥羽、江ノ島 道中膝栗毛 全一册 千二百頁

快活磊落なる二人あり、膝栗毛に鞭ちて海内を跋渉し、足跡大八洲に遍し、頂天立地、旅を家とし形骸を土石とす、放浪自恣、滑稽洒落、世途の塵熱に勞るゝの人、無事に困しむの人、嚴寒炎暑に苦しめらるゝの人、怱忙に倦めるの人、共に一本を購ふて以て、清涼の仙丹に當て給ふべし。抑も二人を誰とす、曰く彌次郎兵衞、曰く喜多八、二人の言動を爲したるものは誰ぞ、人も知たる一代の奇人、十返舍一九その人なり、一九は如何なる人物ぞ、卷首の詳傳を讀みて、一九と膝栗毛とを知悉すべし。

第拾編 校訂 梅曆、春告鳥 全一册 千百頁

爲永春水の小說は天然の美人の如し、敢て意を用ゐて修飾せざるも、情致纏綿、愛嬌滴れんとするものなれはなり、その人を動かす處はその天眞爛熳の處にあるなり、梅曆、春告鳥は、爲永流即ち人情本中の傑出たり、これによりて彼は馬琴、種彥、一九、三馬等と併稱せらるゝを得るなり、梅曆は惠の花、梅曆、辰巳園、英對暖語、梅見舟以上五種の總稱にして、春告鳥は春告鳥、籬の梅、春の若草三種の總稱なり、本編は此八種を集めて、例の美麗鮮明なる印刷堅牢精良なる製本を以て發刊せられたり、

第拾壹編第拾貳編 校訂 通俗三國志 全二册 二千百頁

策畧、戰法、盛衰、興廢共に奇正の變を盡し、謀臣猛將雲の如く、俊傑各々其の技倆を逞ふして、人生の奇觀を極めたるは、實に支那三國の時代なり、東亞の大陸を三分して、奇正相爭ひ智勇相角し、縱橫步幻殆んど端倪すべからず、之を古今東西の史に求むるも一も比敵すべきなし。故に三國志は水滸傳、西遊記と合して中華の三大奇書の隨一とす。特に此の書は歷史的小說にして、又小說的歷史なり。文章趣向の妙は能く英勇俊傑の眉目心胸を露はし、奇變縱橫の奇觀を極めて遺憾なし。之を歷史として讀むも小說として視るも眞に宇内の奇書天下の逸品なり。全部七十五卷、今別て兩册とす、後漢の衰運より、奸臣の跋扈、忠良の苦心、美人の魂膽、梟雄の覬覦を首め、時會竟に英雄を生じて、桃林の盟となり、曹瞞の雄圖となり、臥龍の三顧、天下三分の神算となり、又赤壁の血戰に至るまで、人生の奇變、天下の妙觀を極む。

第拾三編 校訂 三馬傑作集 全一册 千百頁

輕妙の筆を以て、敏活の意匠を寫するものは、式亭三馬か特有の技倆

なり「浮世風呂」「浮世床」は、如何に江戸の社會を、活描せる「辰巳婦言」「船頭深夜」が、如何に深川の花柳を模寫せる「百馬鹿」「四十八癖」が、如何に人情の微細を曲盡せるかを見よ、

●第拾四編 柳澤、越後、黑田、加賀、伊達 **騷動實記** 全一册 千百頁

主闇弱にして妾姿驕り、權奸威を弄して佞邪之に乘す、奸臣驕婦と相結托して所謂「お家騷動」茲にその形體を生成すめり、古より今に至るまで、殆ど一轍に出づるもの、如し、而して國亂れて幸に忠臣の出づるものあれば、天日を殆ど傾に回すことを得るも時に慘毒を後に殘さざるもの稀なり、主たるもの深く省みる所なかるべけんや、若し此意を以て此書を讀まば、或は修身齊家の龜鑑に充べし、獨り消閑の樂のみに非さるなり。

●第拾五編 校訂 **京傳傑作集** 全壹册 千百頁

山東庵京傳は我邦小說界中の泰斗なり、實に一の滑稽洒落を開きて世を嘲り、又所謂寶□流の一派を開き、門下に有名なる曲亭馬琴を出せり、其傑作の多き中に就て「昔語稻妻表紙」「本朝粹菩提」「雙蝶記」「忠臣水滸傳」「優曇華物語」等は彼の創体に係るものあり、其他「京傳予誌」「白川夜船」「通言總籬」「娼妓絹篩」「仕懸文庫」「夜半の茶漬」等は彼の玅筆を揮へり

●第拾六編 校訂 **種彥傑作集** 全壹册

幽婉の筆を以て偉麗の結構を描寫し、京傳馬琴以外別に一機軸を出せるものは柳亭種彥氏その人なり、惜むらくはうの著書今傳はるもの多からず、依て廣搜博綴「淺間ヶ岳面影草紙」「逢州執着譚」「正本製」「綟手摺昔木偶」「觀音守護寶劍」「勢田橋龍女本地」の六部を集めて世に公にす、或は讀本あり、或は脚本院曲に擬せるあり、之を繙かは一種異樣の光彩眼を射來るを見るべし、

●第拾七編
- 校訂 **星月夜鎌倉顯晦錄** 全一册
- 校訂 **北條九代記** 全一册（二月出版）

●第拾八編
- 校訂 **北條五代記** 全一册
- 校訂 **甲越軍談** 全一册（二月出版）

●第拾九編
- 校訂 **武王軍談** 全一册
- 校訂 **十二朝軍談** 全一册（三月出版）

●第二拾編
- 校訂 **漢楚軍談** 全一册
- 校訂 **呉越軍談** 全一册（三月出版）

●第廿一編 校訂 **西鶴傑作集** 全一册（四月出版）

●第廿二編 校訂 **焉馬傑作集** 全一册（四月出版）

●第廿三編 校訂 **風來山人傑作集** 全一册（五月出版）

●第廿四編 校訂 **六樹園傑作集** 全一册（五月出版）

●第廿五編 校訂 **其磧自笑傑作集** 全一册（六月出版）

●第廿六編 校訂 **水滸傳** 全一册（六月出版）

●第廿七編 校訂 **西遊記** 全一册

●第廿八編 校訂 **楠廷尉秘鑑** 全二册（七月出版）

●第廿九編

●第三拾編 校訂 **椿說弓張月** 全一册（八月出版）

春夏秋冬

毎編讀切　上等洋紙（一冊紙數百六十頁）密畫挿入　雅裝美本

四季壹回發兌　正價一冊　拾五錢　郵税一冊四錢

春の花、夏の山、江月、暮雪、天地の美を鍾め、宇宙の妙を極むるに擬し茲に**春夏秋冬**と題し、四季毎に各家の新作數篇を綴れる、小説を發刊せんとす。羅する所は偏に當代知名の大家のみに非らず、後進の才子、未顯の俊髦に及び、時に懸賞の方法を以て、普く傑作を募り、之を江湖に紹介すべし、此等秀才の錦心繡腸より織成す文辭の美は、天地宇宙の妙と相對して、特に精華絢爛たらん、抑も又後進を誘掖して、深山幽谿を拓き、名花美玉を世に出さば、斯文進歩上の一功徳たるべき哉。

●第壹回

競馬（くらべうま）

（桂舟、永洗、永興、丹陵、廣業、年方、國松、柳塢諸氏密畫）

廿七年一月二日發賣

本篇は夙に文壇の一方に雄視して、梁山泊と呼ばる硯友社の尾崎紅葉、川上眉山、巖谷漣、石橋思案、江見水蔭、中村花痩、渡部乙羽の七氏が**午の年**に因みて、結構意匠を馬に寓し、各妙想奇文を鬪はしたる新作七篇を聚めたり。

版權所有

明治廿六年八月三十日內務省許可
明治廿七年二月十五日印刷發行

明治文庫定價	
一册(二百頁)	金拾五錢
六册前金	八拾五錢
十二册前金	壹圓六拾錢
廿四册前金	參圓拾錢
郵稅一册六錢	

編輯兼發行者　大橋新太郎
日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　杉原辨次郎
京橋區元數寄屋町四丁目貳番地

印刷所　杉原活版所
京橋區元數寄屋町四丁目貳番地

發兌元　博文館
東京日本橋區本町三丁目

大賣捌所

東京　東京堂
仝　水野慶次郎
仝　東海堂
仝　巌々堂
仝　信文堂
仝　石川商店
仝　上田屋本店
大坂　盛文館
仝　吉岡平助
仝　柳原喜兵衛
仝　梅原龜七
仝　岡島新聞舗
仝　平井新聞舗
仝　中村峯雄
京都　東枝律書房
仝　田中治兵衛
名古屋　川瀬代助
仝　新文舎
仝　片野東四郎
神戸　熊谷久榮堂

神戸　舟井新聞舗
仝　吉岡支店
仝　船山堂
熊本　長崎次郎
鹿兒島　吉田幸兵衛
長野　西澤喜太郎
松本　水琴堂
仝　高美書店
四日市　伊藤善太郎
津　河島九右衛門
岡崎　愛友舎
濱松　谷島屋源三郎
仝　林新聞舗
沼津　關契社
甲府　柳正堂
横濱　丸屋書店
仝　里見亭太郎
鴻ノ巣　長島爲一郎
東金　多田屋本店
千葉　仝支店

佐倉　吉田德兵衛
佐原　朝野利兵衛
水戸　川又銀藏
大津　澤一二郎
仝　太田支店
上諏訪　宮坂日新堂
小諸　廣文堂
飯田　皆川文星堂
前橋　煥乎堂
宇都宮　内山港三郎
栃木　宮川庸三郎
平　清光堂
白河　奥村書店
福島　卜野屋彦太郎
仙臺　木村文助
仝　佐勘書店
石ノ巻　山口德之勳
盛岡　佐藤庄兵衛
仝　便益堂
弘前　野崎九兵衛

青森　鎌田商店
山形　八文字屋書店
仝　牧野德太郎
米澤　素月晨平
秋田　成見清兵衛
仝　鈴木秋穂堂
横手　大澤忠四郎
增田　東海林書店
酒田　鈴木喜八
福井　品川太右衛門
武生　安立庄三郎
金澤　雲根堂
小松　宇都宮源平
富山　清明堂
高岡　學海堂
新瀉　櫻井産作
長岡　覺張治平
仝　目黑十郎
高田　室直三郎
仝　高橋書店

水原　西村六平
松江　川岡清助
岡山　武内[illegible]三郎
姫路　朝榮社
廣島　松村善助
山口　宮川臣吉
和歌山　平井文助
德島　阪井萬吉
博多　積善舘支店
仝　森岡商店
久留米　菊竹儀平
大分　山川正三郎
長崎　虎與號書店
仝　鶴野書店
佐賀　河内汲古堂
函舘　魁文堂
札幌　聚文堂
仝　野前長發
仝　小鹽白治堂
仝　萱間左右太

圖書出版
東京博文館

明治文庫

短篇小説

博文館發行

明治文庫第八編

目次

村上義光錦旗風　山田美妙斎
若みづ　巖谷漣山人
國民大帝　嵯峨の家主人
二十日月　田山花袋
滑稽二人男　骨皮道人
夜行汽車　松華庵主人
江戸の舞踏會　眼花道人
青春夢　抱一庵主人

LIBRARY U OF I URBANA

◉ 村上義光錦旗風

山田美妙齋

吉野落城の場上

〔本舞臺一面の平舞臺上の方柱まで菊の御紋附きの陣幕で見切り下手同じく陣幕で繋ぎ、向ふ山山の書き割り城の櫓陣幕旗印しなどの遠見、下手陣幕の上に見越して鎗、薙刀、旗挿し物などの先きを見せ、平舞臺宜しき處に二三枚の損じた楯を散らし、下手に松の立木これと陣幕並びに楯とに何れも矢を射立て舞臺宜しく矢を散らし、日覆ひから松杉の釣り枝すべて吉野城敗軍の體。爰に大塔宮緋縅の鎧、素頭、頬に矢創を受けて血みどろになり、手に一本の矢を引き拔き、血を舐めて居る。少し下つて上手に律枝坊海博兜巾鎧の扮裝ちにて扣へ、下手に無上坊唯適同じ扮裝ちで各薙刀を持ち居る。此模樣宜しく山下ろしを掠め陣鐘攻め太皷の音で幕明く〕

海博『いかに無上坊此度の此敗軍殘念には候へ共今とありては詮方無し　恐れ入つたる事なれども宮には此れより熊野へなり、落ちさせ玉ふが焦眉の急策』

唯適『殘念は言ふ迄もなし、敵に糧道を絶たれし計りが思へば不覺であつたよなあ、然ればとてやみやみと此處明け渡すも無念なり。某は踏み止まり、畏けれ共宮の御先途見屆け參らせん』

海博『こは無上坊の詞とも覺えず、某こそ踏み止まつて御先途を見屆け參らせん。味方の中の杖柱、御身はなどてやみやみと此處で打ち死にしたまふべき、何卒踏み止まつての事は某に仰せ付けられませ』

唯適『あいや律枝坊兼ねての御恩報じ斯かる時に御馬前にて命を捨つるが吾等の務め。御身こそ年も若し、何卒宮に添ひ參らせ何處迄も御供し召され』

海博『あいや其儀はとても適はぬ。某こそ……』

唯適『いやいや某……』

海博『いや某……』

唯適『何んの御身が…』

海博『何を……』　〔兩人宜しく急き入る〕

宮『こりやこりや兩人喧がしいぞ』

兩人『はあ』　〔と兩人靜まる〕

宮『何れも此身を思ふ一心必ず仇には思はぬぞよ。然りながら最早運命の決する處大人げ無く爭うても要なき業、役目は各身が命せん。かまへて爭ひばしするな。こりや無上坊！』

唯適『はあ』

宮『踏み止まつての事は其方に任すぞ！』

唯適『はて有り難う存じまする』

海博『すりや吾が君には無上坊に……』

宮『はて念には及ばぬこと』

海博『其れおやと申して……』

宮『言葉を還すな』

海博『ははあ』〔と海博是非無い思ひ入れ〕

宮『律枝坊！其方は身が供にする。命を捨つるは易けれど熟ら國家の運を想へば此處にて捨つべき身にあらず。恥ちを忍んでをめをめと此城を落ち行く胸中、孰れも無念を察して呉れ』〔と宜しく殘念のこなし〕

唯適『申し上げるも涙の種、今更何んと申さうやら。御跡の事は御心殘さず、然る可き道を御見計らひにて何卒落ちさせ玉へかし』

宮『決して仇には思はぬぞ』〔と宜しくこなし。風の音烈しく、攻め太鼓の音急になり、鬨の聲など聞こえる。唯適きつとなり〕

唯適『あれ彼の聲はや敵が間近く寄せしと覺えたり。宮には早く、いざ、いざ、いざ』

宮『詮無い。然らは……』〔と立ち掛ける。ばたばたになり、向かふから足羽左衛門重氏大童ちぎれた鎧ひ、雜兵二人をあしらひながら出で來り舞臺宜しき處まで來て、とゞ二人を斬り伏せる〕

海博『貴殿は足羽左衛門どの』

唯適『大手の樣子は如何でムる』

海博『疾く疾く御聞かせ……』

海、唯
兩人『下さりませ』

足羽『ははあ殘念至極に候ふ。大手の木戸は某が、二の木戸の西に扣へ居つて今迄くひ留め候ひしが、最早運命盡きて候ふ。早や此上は恐れながら宮にも御決心遊ばしませ』

海博『そりや心得て候へど、敵はさて何れに掛かつたでムる？』

唯適『よも未だ搦め手には……』

足羽『あいや掛かつてムりまする』

海、唯
兩人『ちえゝ』

海博『すりや搦め手にも……や是非も無い』〔ときつとなり〕

海博『早や此上は猶豫し難し。いざ一刻も早く參らん』

足羽『暫く御待ち爲されませ恐れながら宮の御身をば敵の大將二階堂貞藤是非共討ち止め奉れと配下に示す劇しい嚴命、其如き御姿にては御無難なかなか思ひもよらず』

宮『何んと申す？』〔とこれで足羽淚を拭ひ〕

足羽『緋縅の御着脊長召したる君を見奉らば大塔宮と心得て容赦するなと諸方へ手配り、早や門門の固めには廻つたらしく覺え候ふ』〔とこれで主從一同當惑の思ひ入れ、攻め太鼓の合ひ方いよいよ烈しく鬨の聲益強く、ばたばたになり、向かふから村上義光紺糸縅しの鎧大童になり、血みどろの眼色矢の立つた儘の身體で三人の雜兵をあしらいながら出て來り、花道善き處で二大刀、三大刀。とど雜兵逃げて上げ幕へ這入る。跡見送つてきつとなり〕

義光『早や落城となつたるか。今となつては宮の御先途心懸りの至りである。どれ本陣へ……』〔とばたばたになり、平舞臺宜しき處に來り、はつと平伏する〕

宮『義光か？』

義光『さん候ふ。村上義光御先途の段伺ひ度く、此れまで參つて厶りまする』

宮『義光！殘念なことになつたぞよ』

義光『殘念で厶りまする。最早致し方も無し。敵は宮の御在處を草を分けても搜す所存、御落去危いてとで厶る』

海博『其儀は足羽氏から聞いて厶る。如何が爲たら宜からうか』

唯適『吾吾思案に暮て厶る』

義光『其事に就き義光最後の御目通りを願ふ次第。恐れ入つたることなれ共、今は何卒某にその宮の御着脊長何卒賜はれかし。御名を冒す恐れあれど、其れにて敵に詐り名乘り、大塔宮の御際期ぞと觸れ知らせ候はば、如何に鋭き二階堂にても、欺かるるは必定なり。差し付けたる御願ひ、そら恐ろしくは候へども猶豫の場合ひに候はず枉げて此儀を海博どの、唯適どの、宜しく御差配願ひまする』〔と思ひ切つた思ひ入れ。宮は感じた體〕

宮『今に始めぬ其許の忠心、念無い鎧ひは取らさうぞ。然りながら鎧ひのみにてはよもや敵も欺かれまい。然る上は此御旗も義光其方が最期の死に花!』〔と重重しくいふ。義光はらはらと涙になり〕

義光『忝う存ドまする。逆徒の手に渡すは殘念なから、これとても宮の御爲め』

海博『一時を緩める苦肉の計畧』

足羽『御明智感ド』

一同『入つて厶る』

宮『それッ』〔と目配せ、足羽心得て錦の御旗を戴き平伏する。義光は直ぐに宮に立ち寄り鎧ひをぬがせ自身着用する。此間一同は捨て臺詞宜しく、いろいろ世話を爲るこなし〕

宮『天晴れ見上げた其武者振り、これ程の士ひをやみやみ殺すことか、喃』〔と宜しく惜しむこなし。義光堪まらず涙になる。一同も目を拭ふ體〕

義光『卑しき身をも顧みず願ひ上げしに御許容ありし御仁慈の御心添しと思ふに付け、これが此世の御別れかと想ひまはせは女女しけれど……』〔と力を入れて〕

義光『心で心を取り締めて泣くまいと思へども涙がどうも勘忍せず』

宮『そりや身とても同じこと。今まで爰に何年か同胞同様暮らしたる頼みに思ふ其方に別れ獨り落ち行く心の中義光推量しや』〔と宜しく泣く〕

海博『常は千軍萬馬をも恐れぬ許りの御心にて、これまでの御歎き』

唯通『然こそと思ひ參らすれば、吾吾とても所存は同し』

海博『村上どのに別るる胸中……武門の常とは言ひながら』

宮『はて是非も無い』

宮、海、唯三人『事ぢやなあ』〔と又攻め太鼓烈しく打ち込む〕

義光『早や御間近く敵も參れり、何時まで居つても盡きぬは歎き、微官草莽の卑しい身分、これが誠の武臣の面目、己やれ二階堂！北條方の痩せ犬め等、掛からば掛かれ、斬らは斬れ、大刀の刄の續かん限り斬つて切つて斬りまくり』

足羽『首に戴く錦の御旗一天四海を照覽ある此日月を翳しにて』
義光『最期の道を』
足羽 義光『照らして呉れう』〔とばたばたになり向かふから敵の大將長崎三郎助鎧、兜、金の麾を持ち眞先に立ち、續いて雜兵三四人好みの拵へで出で來り〕
長崎『すはこそ宮には彼の本陣、者共ぬかるな』
雜兵『畏まつた』〔と平舞臺に來る〕
義光『吾が君然らば御變り無う』
宮『義光！潔く……』〔と宜しくこなし〕
宮『海搏續け』〔と上手陣幕の蔭に這入る。見送つて義光初め淚のこなし〕
義光『早や此上は心易し。方方さらば』
足羽 唯 兩人『大事おぢやらぬ』
義光『寄手の者共 承 れ！今上の皇太子大塔宮これに在り、思ひの儘の最期の一戰、吾が首欲しくば寄つて取れ』
長崎『すはこそ宮ぢや弓矢八幡、それ者共』〔と宜しく掛かる、大立ち廻り烈しく、唯適、足羽之に搦んで立ち廻り、とど長崎は敵はぬ風情、追ひ散らされて逃げて行く、此間義光は始終後を振り返り、宮

の御先途を氣遣ふ體とどばらばらになり、　唯適は敵を追つて上手、足羽は同じく下手へ這入る。義光は花道の中程まで敵を追ひ、一人になり、きつと思案して身體疲勞のこなし、平舞臺に來てどつかりとなる」

義光『嬉しやこれで』、〔と手を合はせるを木の頭〕

義光『武士も立たうぞ』〔と宜しく太皷烈しく、道具廻る〕

吉野落城の場下

〔本舞臺三間の間、上へ寄せて高足の二重、岩の張り物、下手宜しき處に同じ岩の張り物、松、杉の立木一面、下手岩の蔭より繪心に杉の梢を見せ、此蔭切り穴、谷の心。向かふ吉野城の遠見、山山の書き割り仕掛けにて吉野城に火のかかつた體。酒精に色硝子をあしらひ、急かしき合ひ方都て吉野落城の體。此模樣宜しく烈しき山風に陣鉦の音を加へ納まる」〔と直ぐにばたばたになり向かふから以前の村上義光苦戰の體にて出で來る。これを切つ掛けに上手より前幕の足羽重氏ぐだぐだになつた體。切れ切れの錦の御旗を杖によろぼひ出で、平舞臺宜しき處にて雙方ぶつつかり會ひきつと見え」

義光『足羽どの』

足羽『村上どの？』

義光『嬉しや恙なく御はせしか？最早戰ひも終りとなつた』〔と後ろを振り向き燒け落ちるのを見て無念の思ひ入れ〕
義光『早はや城もあれ彼の仕儀』
足羽『無念で御ぢやる』
義光『敵は一旦退けしが早や込み入るに間もあるまじ、此度こそがいよいよ最期』
足羽『はは面白し遣つて呉れうぞ』〔ときつとなる。ばたばたになり、向かふから前幕の無上坊唯適の雜兵をあしらひ立廻りながら出で來り、とゞ雜兵を薙刀にて薙ぎ倒し平舞臺に來り〕
唯適『面面此處に御座あつたか？嬉しや同し處で討ち死に……』〔と此時向かふ遠見の崖に馬に乘つた宮の小さな人形之に二三人の家來を附けたのを引いて見せる〕
唯適『彼の御姿は』〔と一同振り返り、嬉しき思ひ入れ〕
義光『吾が君』
足羽『宮で御ぢやるか？』
義光『ちええ有り難や、忝や。武運全き御身の上』
唯適『地獄へ參る宜い土產』
足羽『南無八幡大菩薩』〔と三人宜しく拜む爲打ち。どんどんになり、三階總出、眞先に敵の大將長崎三

郎助麾を振つて」、
長崎『者共掛かれ！　爰で討ち止め！』〔と總掛かりに掛かる。烈しき大立ち廻り、風の音、烈しき合ひ方、物凄さ思ひ入れ、とど山の上に士卒を追ひ詰め、なだれを打たせて谷へ落とす趣向、此間捨て臺詞宜しく、やあやあの掛け聲凄く、とど足羽、唯適の兩人は斬り倒される。義光は激しく長崎と渉り合ひ士卒ともども追つて上手へ入る。直ぐと奈落を潜り向かふから義光ばたばたにて出で來り平舞臺に來てがつくりとなる。此時又向かふから村上義隆卯の花縅しの鎧血みどろの體、血眼で出で來り、花道にて〕、
義隆『宮の御着背長を拜領し敵を散散追ひ散らし此方へ父君は御渡りあつた樣に見しが、はて最期の一目御目に懸かりたいものじや』〔と宜しくこなし、平舞臺に來り、其處に倒れた死體を見て吃驚〕、
義隆『やや父君』〔と差しかかつて〕
義隆『ちええ御情け無い。もう斯う御なり遊ばしたか？　はは一と足遲かつた』〔と宜しくこなし、活を入れる。これより息を吹き返す〕
義隆『父上、父上！　義隆で厶る』
義光『ふん、悴か？　あゝ命恙無く――み……み……宮は恙なく』、
義隆『落ちさせられて厶りまする』
義光『嬉しやそれで命の捨て甲斐、ちえゝ義光も……悴喜べ、武士の冥加に適つたぞや』

義隆『さぞ御本望でムりましやう。落城の悲しさ、宮の御無難の又嬉しさ、父上の御最期と見る又悲しさ、嬉しいと悲しいとを此一日に寄せた今日、はて何んとした事でムらう?』〔と宜しく泣く〕

義光『白癡者めが!何を泣く?』〔と泣きながらいふ〕

義光『其處に落ち散つた錦の御旗敵の手に渡すは無念。義隆心得たか?』

義隆『心得ましてムりまする。死に身になつて是からは御守り致しまする』〔と旗を取り上げ、きつと抱きしめて無念の思ひ入れ〕

義隆『御心殘さず……』

義光『それで安心、介錯頼む』

義隆『ちつ、何うしたら……ふん』、〔といふを木の頭、刀を拔くをきつかけ〕、

義隆『御免下され!』〔と刀を振り上げる見え、引つ張り宜しく拍子幕〕

（完）

* * * * * * * *

村上義光墓　依田學海

不際艱難日。安知烈士心。疾風勁草喩。旨義一何深。戰鼓雷聲殷。
慘澹陣雲沈。紀信代漢祖。死節素所欽。城樓瀝熱血。義氣蓋翠岑。
名留千秋後。骨香萬櫻陰。吾來讀碑碣。愁淚灑春秋。

* * * * * * * *

花やぐら

（其二）

佐々木信嗣

夏箕の川の川戸より　山路遙に見わぐれば
麓をまもる兵士の　甲の星はきらめきて
築きし城ははるぐ〜と　雲井に高くそびえたり
頃は延元三年の春　二月半の事なりき
こもりゐませる大塔の　宮を攻めんと畏くも
きこえし出羽の入道が　ひきゐつれたる數萬騎
はや矢合の始まりて　麓ま近く寄すれども
然のみならず忠勇の　心に富みて山道の
七日のほどの合戰に　討れし者は數知らず
多勢を頼みし賊軍も　この有様にをぢ恐れ
岩菊丸はうちいでゝ　かく徒に日を經るは
攻れば人のみ討れつゝ　いかでか落る時あらん
思ふに城のうしろなる　金峯山には嶮しきを

高峯につゞく白旗は　み山おろしに打靡き
寄せくる敵を防ぐなる　其有様の雄々しきに
まだ雪深きみ吉野の　吉野の山の奥深く
押寄せきたる賊兵は　北條方にさる者と
城のあたりは殊更に　道細くして谷深く
案内くはしき官軍に　いかでかいかで勝るべき
暫したゆたひゐし程に　城の案内にやとひてし
最も甲斐なき事ぞかし　つくぐ〜見るに大手より
頼みて守る武者あらじ　物になれたる足輕を

夜のまぎれに忍ばせて　ほがら〳〵と明ん頃
鬨の聲をばあげよかし　聲に驚く頃にしも
大手搦手おしよせて　攻落さんと言出ぬ
かくと聞つゝ賊軍は　いたく喜びさらばとて
殊にすぐれし兵卒を　金峯山へと赴けぬ
こゞしき岩根傳ひつゝ　谷を廻りて行たれば
嶮しき方とたのみけん　梢に高くゆひつけし
旗のみ風にひらめきて　防がん人もなかりけり

《其二》

足利方の伏勢は　思ひのまゝに忍び入り
繁る木の下岩陰に　弓矢を伏てほの〴〵と
夜の明ゆくをまつ程に　はや東のしらみそめ
相圖の時に成たれば　大手のつはもの五萬余騎
右左より押寄せて　たゞ一もみと攻上る
勢づきし足利の　賊の有樣見おろして
容易ならずとみ吉野の　吉野の大衆五百人
命も惜まず攻口を　守りて敵を追下す
かゝる折しも搦手に　廻りし賊兵數百人
此處に彼處に火をかけて　鬨の聲をぞ揚にける
さしもに猛き大衆も　前後の敵をふせぎかね
殊に火勢の強ければ　敵に引組さしちがへ
共に死するもあるは又　猛火の中に走せ入て
死するも有ておのがじし　思ひ〳〵の討死に
深き大手の堀一重　空しき骸に埋もれぬ

勝に乗じて賊兵は　勝手の杜を跡になし　猶も進みて大塔の　宮の籠りておはします
藏王堂へと打かゝる　宮も今はと思しめし　討出給ふ御ありさま　のぼる朝日にかゞやきて
赤地の錦の直垂に　鎧の緋縅きら〳〵し
忠勇共にならびなく　すぐれし兵士二十人　宮の左右に從ひて　雲霞の如く進みくる
敵の眞中に打入て　彼方是方と斬りたつる　寄手の數は多けれど　眞心こめし人々の
刄にいかでむかふべき　四方の谷間にさつと引く
其間に宮いちはやく　藏王堂へと歸りまし　今は防げど詮もなし　年頃よくも仕へしよ
いでや最後の酒宴せん　いざ人々と大庭に　立せ給へる御姿を　見れば立たる矢七筋
頬のあたりも傷つきて　流るゝ血汐おびたゞし

〈其三〉

雄心たけき宮なれば　流るゝ血をも傷手をも　更に物とも思されず　常に替らぬ御けしきに
大盃を三度まで　打傾けてましませば　木寺の相摸大太刀に　敵の首を刺し貫きて
宮の御前にかしこまり　聲勇ましくうたひいづ
『戈鋌劍戟を降す事　電光の如くなり　磐石岩を飛ばす事　春の雨に相同じ
然りとはいへども　天帝の身には近づかで　修羅彼が爲に破らる』と　はやしを擧て謠ひつゝ

刃を左右に打ふりて　舞たる樣こそ雄々しけれ
大手の戰其ほどに　いよ〳〵はげしく成增り　入交りたるときの聲　聞ゆる折しも入來る
村上義光口惜げに　一二の城戸は敵の爲　討破られて今ははや　防がんやうもなく成ぬ
何處にもあれ切敗り　宮には早く落給へ
われ御跡に留まりて　申すも畏き事あれど　めさせ給へる御鎧　錦の直垂給はりて
御名を冒し御命に　替りまつらんいざ〳〵と　申せば宮はいかで〳〵　忠義にあつき心ざし
喜ばしとは思へども　我も打つれ世をさらん
聲あらゝげて義光は　いひがひもなき御詞　大事の御身と思さずや　早とく〳〵と上帶を
とき奉るに宮も亦　實にと思して義光よ　汝の恩は忘れじと　涙ながらにのたまひて
勝手の杜の御前より　事なく南に落給ふ
義光鎧をぬぎかへて　二の大城戸にかけ登　宮の御姿幽にも　成ゆくさまを見定めて
早時よしと高やかに　打名のりつゝ大塔の　宮の最後を見よやとて　潔きをはりを遂果ぬ
あはれ千歳の春かけて　其名かゞはし花やぐら

* *

◉若みづ　漣山人

（一擲）

羽子板の表面を覆した元日の賑ひ、明日とはガラリと變つて、車の輪馬の蹄、さては獅子舞の太鼓鳥追の三味と、市中はさながら喧擾い中にも、自づと春は春らしい、長閑さ。人の氣も何處となく悠然として、今日一日にはや一年も生き延びた心地。目出度い御代のこれも餘徳でがな！

その喧擾い市中を少し離れて、此處は松飾も疎々な高台の邸町、而も一昨年新たに開けて、四邊の家作り生々しい中に、一際目立つは銅の金物打つた二間の冠木門、門番所から續いて右手は廐かと思はれる長屋、右は十間ほどの高塀、まだ檜の香も失せず。中は庭かと見えて、松の緑を打ち混ぜての冬木立。奥二階も半分は埋もれて、外からは見透されず。門から正面を見込めば、一抱へほどある赤松を隔て、搏風作りの玄關。障子左右に開いて、眞中に小机の置いてあるは、年賀の客に名刺を受ける爲か。正面の長押には、大文字の額が掛つて、其下には山水の歩障内の見えぬも奥床しく。何樣いかめしい一構へさても見事なお邸と、往來の者も立ち止まつて表札を見れば、從五位大崎嘉兵衞。

これこそ先年海防費の獻金から、元は平民の身を五位の肩書肩幅廣く。現に某の會社の頭取に撰まれて、府下でも屈指の紳商。馬車は二臺馬は四匹あつて、小供の學校通ひにも、さう遠くも無い處を、人力車

で送り迎ひをさせる贅澤。橋場と青山、少し離れて相州の富岡に別莊の一ッ宛扣へて、避暑の冬籠りのと、遊ぶには事欠かぬ身の上。何の苦勞もあるまいと、餘所目に羨むは大きな間違ひ。神樣はさう一つ處によい事計りは集めず、此嘉兵衛が、老後の苦勞には此身代を讓るべき、歴とした男子が無く、子と云ふては只十七になるのと九才と、……お須美お多香、此二人の娘計りであつた。

其處で去年の春、親類相談の上で、女房お民の遠い緣續きで、澤益彥と云ふ若者を、兎も角もお須美の聟として、末はこれに家督を取らせ、嘉兵衛は隱居の心算。……が、元より一代で此迄に仕上げるほどの老父、中々物事に拔目は無いから、まだ氣心も知れぬ益彥に……女房の緣者とは云ふもの丶、云はゞ赤の他人の益彥に、頭の禿るまで面白い事も澤山せず、人にも隨分惡まれて仕上げた身代、おめ／＼と渡すは流石に剛腹、何も疑ふと云ふでは無いが、兎も角益彥の氣心の充分に知れて、これならば確乎と云ふ目星の付くまではと、褒めて云へば所謂る老實な考から、まだ表向き披露に及ばず、家も女房の實家に同居させて、これに相應な會社の用を命け、折々は大崎の家へ來て、何かの用事は達して居るものの、內幕を知らぬ岡目からは、尋常一樣の會社の役員。如才なく胡摩を摺りに來るなと、廻り氣を起す者もあつた位。但し當人同士は夙に承知して、目遣ひも自ら啻ならぬ間柄。……さてそれを羨んで、兎や角う水を差したがる者も、亦萬更無くもなかつた。

今日は元日と云ふに、嘉兵衛は朝から馬車を驅つて、年始廻りに半日を暮らし。午後の二時頃に歸つて來た處へ、丁度益彥が來合はせ、續いて一人殖え二人殖えて、座敷は今酒宴の眞最中。

お須美も亦今朝から學校へ行て、規則通り祝賀を濟し、夫から教師の許友人の許、序に親類の許を廻つて、今しかた歸つて見ると、何より第一番に氣が付いたは、玄關に見覺えの益彥のゴム靴。常から戀しいと思ふ其人、而も霜月の末から社用で上方へ行き、一週間ほど前に歸つて來て、自家へも一度來たけれど、生憎く駈け違つてまだ逢はなんだ益彥。實に一月の餘も見ぬ折から戀の慾はいよ〳〵募つて、早く其顏が見度く、此間土產に貰つた京襟の禮が云ひ度く、それから今日は是非とも引止めて、晩には一所に歌留多をと、はやそれまで胸算を立て、まだ晴衣のまゝ着換へもせず。母の居間に座はつて、珍らしくもない双六の繪を念入れて見て居るも、心の中には今にも此處へ來るであらうと、人目がなくば待人でも掛け度い心。それも先へは通せぬか、心憎いあの笑ひ聲、人の氣も知らないで、何が面白いことかと、少しは焦思て居る處へ、何も知らぬ妹のお多香は。次の間から這入て來て、姉を見るより嬉しさうに、『姉さま　今お歸り?』『ハア……多香ちやんにお土產があるよ。』

云ひながら、火鉢の陰においた菓子の紙包みを出して渡すと、お多香はそれを受取て明けて見て、『まア奇麗だ。何處で頂いたの?』『先生の許で』『さう』

と云つたが、元より珍らしくもない干菓子、そのまゝ冷淡に見放して下に置き。更に姉に向つて、『姉さ

ん羽子を突きませんか』『エヽ　突きましやう』

とは云ふものゝ、お須美は少し別の樂みを抑へて居るから、實はさほど氣の乘らぬ返辭。お多香は一向無頓着で、はや押入から羽子板を二枚取り出し、一枚を姉の前に置き。自分は躰に似合ぬ大形の羽子板を持つて、先へ立て緣側へ出やうとするに、お須美は居ながら聲をかけて、『性急だねエ。もつと後にしましやうよ』

と云ふとお多香は大不承知、『アラ　姉さん、今突かうと云つておいて。……　妾は今まで待つて居たんだワ、姉さんの歸るのを』『それぢや　艶や君と(二人共婢の名)お突きなさいな』『だつて　彼等はお客樣で御用があるんですもの。……よう姉さん』『だつて　今手が冷たいから少し煖たまつて』

と、倘兎に角と時間を延ばさうとする。妹は、一端約束したものを、今更それは卑怯なと、云はぬ斗りに急き立る、傍に居た母親は見兼ねて、『五月蠅いぢやァないか、お前が行てやれば可いのぢやないか』

と、母までが妹の加勢するに、此上は是非に及ばぬと、お須美は迷惑さうに立上り。衣服の前を搔き合せ、いゝ、しごきを〆め直して少し高く端折り、不精無精にお多香の後へ尾いて、やがて庭へ下りて來た。

(三掬)

母屋から五六間ほど離れた芝原、日當りは好く而も霜解もせぬ處。こゝぞ屈竟と、前に立つて行たお多香は、立止まつて姉を見かへり、『姉さん早く入らつしやいよ、此處が好くつてよ』『そんなに急いだつ

て……此庭下駄は突き悪いんだもの……』

云ふ中芝原の上まで來ると。お多香はこれを待ち兼ねて、袂から羽子を一ッ出し、仔細らしく息を吹き込んで、二ッ三ッ突いて見て、また手に取つて羽根を直し、更に一ッ突いて、『今度は可い。さア姉さん上げてよ!』

と、聲を掛けて突いて渡したが、姉は衣服の裾を汚すまいと、これに心を取られて、褄計り氣にして居た故、ツイ鼻の前へ羽子の落ちたも知らずに居ると、お多香は焦思つたさうに、『アラ受けないんだもの……』『だつて今は知らなかつたから仕方が無いワ』『今度から落すと墨よ』『姉さん墨いや!』『それおやアお尻……ほんとに打ちますよ』『もう大丈夫だワ』

云ひながらお須美ハ、落ちた羽子を拾つて突き返す。それをお多香は受けてまた返す。突いては返し返しては受けして居る中に、段々調子付いて來て、今妹のお多香が、一突勢込んで突いた羽子が、少しはづみ過ぎて、二間ほど横にある楓の木に落ちかゝり、枝を二三段滑つて、アレ〱と云ふ間に……、下は生憎井戸、其井戸の中へヒラ〱と舞ひ落ちた。

お須美は二足三足退ふて來たが、此有様に呆れて立止まるとお多香ハ急いで驅け拔けて、突然井桁に取り付き、首を伸ばして中を窺き込だ。『多香ちやんおよしよ。落ちたら如何します?』

姉ハ一寸叱つたが、お多香は自分が突いた羽子故、責任は自分にあると思ふかして、頻りに氣を揉んで

中を窺いて居るに。姉は故意と聲を勵まして、『羽子の一ッ位、また別のを出せばいゝぢやないか』『だつてあの羽子ハ好いんだもの……姉さん取つて頂戴な！』『私には取れやしないワ』『困るねエ、誰か來てくれないかねエ』

と、途方に暮れて居る時、不意に後から『如何したんです？　何か落ちましたか』

聲を掛けられて、急いで振り返て見ると。これこそ例の益彦。最前からの酒の相手に、首筋まで櫻色にあつて、いとゞ涼しい目少し潤みを帶び短く刈つた散髪を右の手で掻き上げながら、左の手をズボンの隱袋に入れて、穿き惡くさうに庭下駄を、靴足袋のまゝ突掛けながら、此方を差して靜かに進んで來た。

それと見てお須美は、思ハず顏に淡紅を注ぎながら、改まつて挨拶をしやうとする。それに對へて益彦も答禮をしやうとするも。お多香は透かさず走り寄つて、突然益彦のフロックコートの裾に取り着いて、『澤さん取つて頂戴よう』『如何したんですか』『早くさア……今羽子が落ちたんだからよう！』

無理に井戸の傍まで引張つて來た。

これが爲に益彦は、祿に挨拶をすることも出來ず、其儘引張られて井桁の傍へ取りつき、『どれ何處に？』

と云ひあがら中を見込む途端。捜す羽子よりまづ目に着いたは、これも同し樣に中を見込んだお須美の顏。……元より深くもない井戸の底、繪にかいた樣に生へ際から、新月の眉星の樣な目、羽子板の隅を一寸前齒で咬へたも風情らしく、ふつくりとした鬟を越して、花釵のピラ／＼まで、益彦の醉眼にも

ありく\と見えるに、益彦は吾を忘れてツイ見惚れて居ると、お多香はもどかしがつて釣瓶の縄に手をかけ、『早くよう澤さん！』

アラ！　水鏡は破れて、惜しやお須美の顔は……』

《四掬》

『早くよう　澤さん！』

と、少しぢれて催促したお多香の言葉に、益彦は轉寢の夢を破られた心地初めて吾に返つて、思ひ出した樣に、『なるほど、彼處に見ますネ。よろしい、今取てあげますよ、危險いから少しお退きなさい』

云ひながら縄に手を掛け、下を覗いて、浮いて居る羽子を釣瓶の中に入れやうとしたが、醉眼の朦朧として居るのと、羽子の輕いのとで、思ふ樣に釣瓶の中へ這入らす、二三度揚てはおろし、おろしては揚げ、彼是して辛うドてすくひ上げ、『〆めた、取れましたよ』

と、云つて縄に力を入れ、井戸車を軋らして、得意顏に手繰りあげて、靜に井桁の上に載せ、中にあつた羽子を摘み出せば、お多香は嬉れしさうにそれを受取り、『まア代無しに成つてましつたよ』

と、つぶやきながら持ち直して、濡れて居る羽根を絞らうとして、袂からハンケチを出して、そつと其上から押さへると。最前から水に漬かつて居る爲、漆は剝げ膠は離れて、折角の大切な羽子、折角骨折

つて酌み上けた甲斐も無く、羽根は掠子を拔けだしてバラ〳〵。お多香は只呆れて『アラ………仕樣が無いねェ』

傍に居た姉のお須美は。それと見て少し笑ひながら、『そら御覽な！　だからうつちやつてお置きと云ふんぢやないか。澤さんに折角取つて頂いたつて、何の役にも立ちはしない』

と、云はれるだけお多香は、いよ〳〵腹を立て、『おれッたいねェ！』

云ひながら羽子を大地へ投げつけた。

益彦は斯くとも知らず。酒の醉の苦しさに、今酌み上げた水を、これ幸だと釣瓶の端に口を着けて、呼吸も繼がずに呑んで居るのを。此時お多香れはトめて見付けて、『アラ　澤さん、嫌な！　其の水は不潔つてよ。………チー　姉さん』

云はれて益彦は漸く氣が付き、まだ左の手を釣瓶に掛けたまゝ、『何故です?』『だつて此間大きな蟇が居てよ』

と、少し眉を寄せて、さも嫌らしさうに云ふと。益彦は何の事だと云はぬ斗り、『ハヽヽ、井戸の中に蟇の居るのは當然でさアネ』『だつて不潔いワ』『ナニ、不潔いもんですか………』

云ひながら又呑まうとする。お多香はいよ〳〵聲を急にして、『澤さんおよしなさいつたら、毒よう！　人が信切に云ふのに………』

と、眞顔になるだけ益彦には可笑しく只アハヽヽと笑つて居る處へ、何時の間にやらお須美は母屋からコップを持つて來て、『澤さんこれでお呑み遊ばせ！』
と渡すのを、益彦は受取つて、『ヤ、これは憚りでした』
と云ひながら又それに一杯、三息ほどに呑み干して、『アヽ甘かつた』
と、舌打しながらわざと嘲戯つて、『お多香さん、如何です一杯？』『嫌なとッたワ』
少しムッとしてお多香は他を向く。其間にお須美は進み寄つて、『澤さん、妾にも一杯と…………』と、小聲で云つて酌んで貰ひ、コップを受取つて呑んで居るのを。お多香はヂロリ尻目で見て、『アラ 姉さん！…呑んで…………』
と、さも不思議さうに……不服さうに……そして憎らしさうに、お須美と益彦とを睨めて居る。

《五掬》

此水呑みの爭ひの爲に、いつか追羽子もお留守に成つてしまつた。其處でお須美は更にお多香に向つて、
『多香ちやん、もうお家内へ這入りましやう。お庭は寒くつていけないから』
と云へば、まだ不平らしいお多香、それに答へるでは無く、『姉さん寒いと云つてながら水なんぞ呑んで』
と、小聲でつぶやきながら、先へ立つて座敷の方へ行くに、お須美も益彦も、それに續いて やがて家

内へ這入つてしまつた。

母の居間へ來ると、お多香は最前からの不平を漏らす心か、まだ坐にもつかぬ中から、『お母さん〳〵』と、さも事あり氣に呼ぶに、母は靜に顧みて、『何だネ、さう〳〵しい』と、窘められても一向應へず、母の側へドッカと坐はつて、益彦の方を折々見ながら、『今ね、澤さんてばネ』『澤さんが如何あすつたんだネ？』『ソラ此間お母さんとお庭に居た時、お庭の井戸から大きな蟇が出ましたねェ』『ハア、、、お前のは何の話をするんだか、ちつとも解らしない』云はれて當人のお多香よりは、益彦とお須美が可笑しく成つて、思はずクス〳〵と笑へば、お多香はそれを聞付けて、いよ〳〵憎らしさうに睨めながら、また母に向つて、『それから………』云ひさして母の袖を引いて『まアお母さんお聞きなさいつてば』『ハイ〳〵、聞いて居ますよ』『それをネ、今ネ、澤さんてばガブ〳〵呑むんでるの』

先刻羽子を揚げて貰つた、其恩を今は仇お告訴口。然し母は更に採用げもせず、一向冷談に、『それが如何したんだネ』『だつて、不潔いぢやありませんか』『ナニ、蟇が居たつて別に毒になる譯では無し。そんあ事云ひ出したら、臺所の井戸だつて何が居るか知れやしない』と、今はお多香の旗色が少し惡くなつて來る樣子に、お多香はいよ〳〵力味返つて、『それからネ、姉さんまで』云つてお須美の顏をヂロリ『その水をまた呑むんだもの』

と、さも得たり顔に云つた。これには流石にお須美も、……ちと身にひけ目のあるだけ、少しひるんで顔を外向け、そして僅かに頬を赤らめた。

が、母にはそれも氣が付かず、只お多香を宥めながら、『お前勝手へ行つてネ、澤さんにお屠蘇を！』と、云ふのを益彦は打ち消して、『もう何卒、お屠蘇は御免蒙りましやう。お座敷でもう充分頂いて、少し閉口して居る處ですから』『さう……なるほどよいお面色ですと。それでは蜜柑でも、お多香蜜柑をお出し！』

お多香は母の命令に、澁々立上つて次の間から、盆に乗せた蜜柑を持ち出して益彦の前へ置くかと思ふと。其儘ツイと立つて、また母の傍へ座を占めた。

處へ、これも今まで座敷に居て、父の相手に酒を飲んで居た男、益彦と同役の立岡平吉が、縁の障子をガラリ開けて、敷居越しに半身差し入れて、『へイ　奥さん！　お須美さん！　お多香さん！　皆さんあけましてまづ御目出度う厶います、ハヽヽヽ』

と、何の譯も無いに高笑ひ、其儘居間へニヂリ入るに連れて、プンと臭ふ熟柿の臭氣。お須美は鼻を掩はぬ斗りに、少し除けて座を移しながら、人知れず眉を顰めて居るのを、立岡一向無頓着で、『何時も御奇麗などとで……ハヽヽヽ』

云つて……生醉本性たがはず、意味ありそうに益彦の顔を………。

（六掬）

却說此處に現はれた立岡平吉と云ふ人物、其素性を一寸洗つて見ると。
平吉……明治元年の二月生。父平馬ハ七八年前に歿つたが。以前幕府の勘定方を勤めて、壯年の頃から嘉兵衞にハ別懇にし、血こそ分けぬが親類同樣の間柄。幕府瓦解の砌に、二人とも敏捷く立廻はつて、互ひに身代を仕出したが。其後會社も一所に興し、相場へも一所に手を出し、萬づに力を合はせて居た程ゆゑ。平吉も幼少の頃から大崎の家へ出入し、嘉兵衞夫婦を叔父さん叔母さんと懷けば。お須美も亦此の平吉の肩に負はれ、腕に抱かれて、守護をされた事もあつたが。それハ全く無心であつた頃の事で、やゝ人情の付いて來るに從ひ、如何したものか酷く此平吉を嫌つて、正月の歌留多にも、此者が這入れば自分ハ廢め、彌生の花見にも、平吉が一所ならお須美ハ家に殘り、果ハ口さへ碌に利かず、顏を見てさへツンと横を向く樣に成てしまつた。然し平吉の心中にハ、父か存生の頃チラと小耳に挾んだ言葉を、綸旨でも承けた樣に覺えて、此お須美ハわが許嫁娘、今に彼が年頃になれば、吾が方から聟に這入るか、彼方から嫁に來るか、二つに一つ、何の道二人ハ離れぬ緣と、一人で極めて一人で樂しみ、時々ハ友達にも吹聽して、頻りに嬉しがつて居たに。其後先方の兩親からハ何の談判も無く、ツイ知らぬ間に益彥と云ふ邪魔者が、ヒヨツコラ横合から割込で來て、まだ確とハ定まらぬまでも、如何やらそれに横奪されさうな勢。……かてゝ加はへて當の本尊のお須美にハ、蛇蝎の如くに嫌はれる、……斯う何

もかも逆に廻つてハ、到底當撰の目的ハないが、それに屈せぬ自稱候補者。何を云ふても此方が先口、中原の鹿の狙ひハ外さぬと。……さても恐ろしいハ人の自惚心！

かく迄お須美が嫌ふて居るのも、自惚れた眼にハ眞に嫌はれたとは見えず。是ハ人目を憚かる外面計り、あの年頃にハ誰もあゝしたもの。吾が顏を碌に見ぬも、吾とろくに口を利かぬも、皆耻かしい！が先に立つ故。心の底にハ可愛い！が一杯押し詰まつて、人にハ見えぬが此平吉にハ、ちやんと見え透く以心傳心。此處が生娘氣質の安く無い處だ、よし益彦が何と氣張らうとも、兩親が頭を振らうとも、當人の命ハ疾うに此平吉が貰ひ受けて居るワと、少しハ自棄まぎれに自惚れて、そして幾分か腸を癒やして居るものゝ。さて其顏を鏡に寫して見ると、ちと吾ながら耻かしい面相。

まづ色ハ妙に青黑く、頰骨高く張て眼ハ少さく、而も薄い眉毛いかにも貧相に見え。只筋の通つた鼻と、其下に生へて居る八字髯とが當人の自慢だけに十人に五人までハ褒める者もあらうけれど、可笑しくも無い事に大口開いて笑つて、そしてあまり列のよく無い齒を奥まで現はすにハ、折角の男振りも打ち破れて、只安つぽい生紳士に成てしまふ。

容貌已に如此にして、それで叉頗るの虛飾家。少し赤味を帶びた頭髪に、香油をテラ〳〵光らせ。和服なら一樂かお召し、糸織や銘仙が着られるものかと云ふ贅澤、洋服ならば黑の一本綾、これも流行を追ふて何時も新らしく。黄金の指輪二個まで左右にはめて、襟飾のピン一本に八九圓も掛け。少しは金

錢の廻るにまかせて、出來る程の伊達を盡し、オホンと反り身にならぬ計り。惡く通人振つて一人で喜んで居たが。其割に人の交接には頗る吝いので、友人には寧ろ爪彈をされて居た。

さて人物もまた右の次第で、更に長所ハ無い男だが。これでも高等商業學校の卒業證書を持ち、簿記が殊に達者に、而も一寸辯口が巧いに、嘉兵衞も其點を取り立てゝ使ひ。年も上であり、顏も古い處から、會社では益彦より、一段上の椅子を占めて居た。

然し其實は益彦の方が、……仝じ商業學校に居て、二年後れて免狀は取つたが。實際の力は遙かに秀て、溫順な中に機敏な點もあつて、今少し事務に慣れたなら、天晴利者になる腕ハあるけれど、何分まだ年は若し、經驗には乏いし、世間にもまだ暗いので、其技量の充分に現はれる時が無く。隨つて嘉兵衞の目にも、是ぞと云ふ功勞は見付らなかつた。

其弱點をつけ込でか、元來傲慢な平吉、一つには戀の意趣もある處から、常に益彦の敵役にまはつて、互ひに犬と猿。最前も座敷で同し席に連つたが、何となく面白くないので、益彦ハ途中から出て來たが。それと悟つて平吉ハ、吾より先に益彦の、お須美に近づくのが心憎さに、自分も後から邪魔に出て來たが。……その間に只せつないハお須美。正月早々……あゝ情無い事だと、……それで眉を顰めて居るのを。罪の無いお多香は、左樣とも知らず、また一人友の殖えたを喜んで、『平さんが來たから、丁度いゝから四人でトランプしましやう……子、姉さん』

云へば立岡は得たりとつけ入て、『仕ましやう、持て入らつしやい！……今日こそお多香さんに墨をつけてやらあくつちやア』『ナニ平さんこそ』云ひながら、お多香はヽや立上り、次の間へトランプを取りに行くに、お美須はもう堪らなく成つて、ツイと立て障子を明け其儘出て行きかけるのを、『お須美さん何處ィ行くんです？』後から平吉が呼止めたが、お須美は見向きもせず、やがて障紙をピシヤリ。

《七捌》

『お須美さん！お須美さん！』と、忙しく呼んで平吉は、自分も中腰に成り、片手を障子にかけながら、『何處ィ行んです？逃げなくつてもいゝぢやありませんか』

お須美は三足計り行き過ぎたが、思切つて『妾は嫌ですもの』『嫌？そんな事があるものか』平吉は酒氣に乗じて、突然障子を明け、縁側へ出て追ひ驅けるに。お須美は捕へられまいと、足速に逃げ出す。逃がしはせぬと追つて行く。元より男の足ゆゑ。忽に追ひ付いて、已に其袂を取らうとするをお須美はアレッと呼んで振放す。其途端に平吉は、磨き上げた縁の板に足を取られて、スルリと滑りかけたが。酔つて居る故踏みこたへる力は無く、其儘ズテンドー。『ア痛ッ！』此物音にお須美は思はず立止まれば、お多香も室の内より走り出て、此體を見るより袂を口に當てゝ、

二人ながら、『オホヽヽヽ』『アハヽヽヽ』
以前の部屋からは、妻君のお民と例の益彦が出て來て、是も仝し樣に、『ハヽヽ』『クス〳〵』
平吉は腰の骨を嫌と云ふほど打つた故、暫時は起きも上らず、仕方なしに苦笑ひをして居たが。辛ふじて起き直り、二足三足よろぼひながら、『アヽ痛、酷い目に逢つた。お須美さんは酷い力だ』云にも、お民は氣の毒がつて、『ほんとに危險い、何處ぞ怪我はなさらなかつたか』『イヱ、怪我はしませんけども、酷く尻餅を搗いたもんだから痛くつて………』『ほんとに………お須美無暗な事をしでないよ』
と云はれてお須美は、急いで辯解、『アラお母さん、妾は何もしやしませんワ。平さんが追駈けて來て自分で勝手に轉んだんですもの。妾の所爲にして酷い人だよ』
と、平吉を尻目に掛けて、不平さうに云ふと。お多香も傍から姉の加勢して、『そりやア平さんが自分で轉んだんですよ。此處のお緣側は平常から大變よく滑べるんですよ。妾も此間すべつたわ』
と、話して居る處へ。是も此騷ぎを聞きつけて、何事かと出て來た嘉兵衞。平吉の傍へ進み寄つて、『平さん今の騷動は一體如何したんだ？』
と、聞かれて見ると、さて說明する程のこともでも無く。說明すれば却て自分の顏の立たぬこと故、平吉は極まり惡さうに、『ナニ一寸……何でも無いことで、此處でお多香さんと、今一寸巫山戲て居たんです』

と、云ひて紛らさうとすれば。お多香は早くも聞き咎めて、『アラ嫌な！　妾は何も知りやしないワ。自分が姉さんを追駈けて來て、滑つて轉んだ癖に………』と云ふにいよ〳〵狼狽へ。流石の平吉も、今は酒の醉を醒まして、また更に面を赤らめ、横眼にお多香を睨らんで、『此お多辯め、覺えて居ろ！』と、云はぬ斗り。

《八拘》

此騷動で折角のトランプの發議も、何時と無く廢案と成てしまつたのを。お多香一人殘念に思つて、其後度々云ひ出して見たが。お須美は勿論平吉も、何か心中に面白からぬ事でも出來たと見えて、最初の元氣に似合はず、只スパリ〳〵煙草を吹かして、再びトランプの事も云ひ出さぬに。お多香も取り付く島なく、其儘不快さうに何處へやら出て行つたと思ふ間に、茶の間の方で、『艶ア、御用が濟んだら羽子板持つておいでなア』

また羽子の友を募集する聲が聞えた。

其中に益彦は、また此から一二軒年始に行く處があると云つて暇を告歸つてしまつたが。平吉は惡く御神輿を据へて、まだ母の前で咄し込で居るに。於須美は掌中の毬を取られて、代りに炭團でも置いて行かれた心地。世の中は斯うも意地の惡いものかと、獨り部屋に引込で焦思て居る。が、それにしてもあの平吉め、何を何時までも咄し込で居るとか。常から母は大嫌いな男、嘸五月蠅つ

て居るとであらう。何卒して早く歸へす工風は無いか、箒木を立てやうか、靴に灸を据へやうか。それでは氣が付いた時に好く無いからと、獨りで半紙を切つて小縷を拵へ、それで小さな犬を作つて、其尾に火を付け、早く平吉が歸りますやうにと、心に祈念して、さてもう歸りさうなものだと、忍び足で次の間まで來て、母の室の樣子を覗ふと。先刻の平吉に引かへて、頗る眞面目な話し聲。而も折々澤が〳〵と云ふ聲も聞えるにては聞き捨ならずと。其儘其處に佇んで耳を側立ると、中では斯くとも知らず、平吉の聲で、『然し、澤だつて實に惜しい人物で、……よく役にも立つ男ですが……今あのまゝに打棄て置いては……つまり當人の利益にも成らんとで、私も朋友ですから。……是は誰も知らんとで……私はちやんと其證據を突き留めて居るんですから、いくら澤が隱したつて……』

また母の聲も聞えて、『それは然し有難う……よく云ふて下すつたいづれ妾から……』『然あなたから言しやるより、矢張り旦那からの方が驗ましやう』『では早速良人にも話して……』『元日早々飛んだとを申上げました』『イヽエ、聞いてよい事しましたよ』

と、頻りに話して居るが。襖の外のお須美には、話の筋が少しも解らず。兎に角澤と云ふからには、益彥のとに違ひないと。然ドそれ丈解つて、却て心は落ち居ず。と云ふて其處へ這入つて、譯を質すともならぬので、一人モヂ〳〵氣を揉んで居る處へ。お多香がまた歸つて來る樣子に聲でも掛けられては面倒と、心殘して其處を立ち退き、何氣無くまた以前の部屋へ歸つて居ると。お多香は續いて這入て來て、

『おのチ、澤さんが宜敷ッて。それから晩にまた來ますつて！』

《九掬》

今朝は待焦れた初日出、果れ初日祝と惜まれ、折角樂みにしたお正月も、其一日まゝや名殘無く消えて、剩すは夜の五六時間と成てしまつた。

お須美は今しかた夕餉を濟まして、暫時兩親の前で話をして居たが。何とやら先刻の事が氣に成て、……元より立聽の事ゆゑ、其本末の確然と分らぬだけ、なほさら案じられてならず。と云ふて母に仔細を糺すのも、流石に氣が咎めて、例の內氣の質にはそれも出來ず。只一人で胸を苦しめる斗り。で、兩親の前に居ても面白くない故、やがて自分の居間へ引込み、今朝半分ほど讀みかけて置いた、初刷の新聞を取り出し。讀むでもなし讀まぬでもなし、實は先刻の話の事のみ考へて、一人淋しげに居間に閉ぢ籠つて居た。

處へ妹のお多香は、又跡追ふて尋ねて來て、『姉さん、何故出て來ないの？』と、云ひながら這入つたが。何返事も無く新聞を見詰めて居る、姉の顏色の何うやら勝れぬのを、速くも見て取つて、自分もやがて眞面目になり、『姉さん何か考へてるの？』云つてズッと覗き込で、又『何處か鹽梅でも惡いの？……それとも阿母さんにお譴責受けたの？』と、さも心配さうに熱心に尋ねるに。お須美も無理に笑顏を作つて、『ナニ、お譴責なんぞ受るもので

すか』『それぢやァ　如何したの？』『只……少し……』『妾が先刻あんな事仕たから怒つてるの？』『何もお前に怒る樣な事は無いぢやないか』『だつて……お庭で姉さんが水を呑んだのを、妾が阿母さんに告發たから……』『なんだチー、そんな事姉さんが怒るもんかチ……』

お多香は少し　焦思つたさうに、『それぢやァ　如何したのよゥ？　云つたつて可いぢやありませんか。……妾は心配だワ』

と、逆拗て見せる愛らしさに、お須美も機嫌を直して、『そんなに心配するとはありやァしない。姉さんは只少し考案事が在るんだよ』『考案事？……何イ？』『お前なんぞの知つたとぢやないよ』『知てるワ……當て丶見ましやうか』

お須美ハ少し嘲ふ樣に、底に笑を沈めた眼をして、妹の顏をヂロリと見ながら、『當たるなら當て丶御覽んな！』

お多香は譯も無く、『明日は何の衣服を着やうと思つて、それで考へて居るんでしやう』

どうです　左樣でしやうト、云はぬ斗りの得意な顏附。お須美は妹の、あまりと云へば邪氣の無い推量に、堪りかねて、ホヽヽヽと笑ひながら、『まさかァ。多香ちやんぢやあるまいシ。衣服なんぞでそんなに心配するものかチ』

と、無造作に打消されて、お多香ハ仔細らしく首を傾け、また更に考へ直したが。如何も思ひ付かぬと

云ふ風で『よう……教へたつて可いぢやありませんか』
云ひながら姉の膝を搖振つたが、不圖何か思ひ出して、さも會得した樣に『アッ　解つた、妾知てる。當て丶見ましやうか』『當て丶御覧なさい！』『澤さんが　まだ來ないもんだから、それで心配してるんでしやう』
南無三！　當らずと雖も、正鵠を五寸とは離れぬ矢頭。流石の姉も少しひるんで、思ハず頰を赤めたのを、お多香ハ速くも見て取り、弱味に付け入て手柄顔に『ソラ當つた〳〵』

（十掬）

年こそ行かぬ、お多香ハ中々の利發者。姉の日頃の擧動やら、また女中共の陰での噂を、聞くとも無しに小耳に狹んで、お須美と澤との關係ハ、小供ながらも疾く猜して居る故。今夜のお須美の屈托も、考案事と聞いた最初から、大方それと悟りながら、態としらばくれて餘所を指し、姉の由斷を見澄まして、やがて其要害を捕えた手の中、それとも知らずに冷笑つた姉よりは、寧ろ遙かに上手であつた然し元より姉妹間甚た睦ましく、而も至て姉思ひのお多香、事に依つたら片臂にもなり兼ねぬ頼もしい其心底を、姉も萬更知らぬでは無かつた故。此上は仔細を打ち明けて、そして其智恵をも借りて見やうと、漸くに分別を定め。態と打ち解けてお多香に向ひ、『多香ちやんの云ふ通り！……何故晩だろうと思つて、それで姉さん心配してるの』『妾だつて心配だワ！。澤さんが來たら歌がるたをしやうと思つて、樂しみ

にして居るのに。……一體もう何時？』

お須美は地袋の上の置時計を顧みて『オヤもう七時だワ』『七時？　ほんとに如何したんだらうネ。澤さんが來なくつちや百人一首も出來やしないワ。……折角姉さんに敎れつて、漸く取れる樣に成たのに………』

と、何時か釣り込まれて　同じ樣に思案顏。……是も流石は小兒だけに、先刻の平吉の談話は露ほども知らぬ故。姉の心配も只是のみと思ひ、さては其同意を現はす了簡。

お須美は齒痒く思はぬでも無いが、何を云ふてもまた年端のゆかぬ妹、それを捕へて六かしい談話もならぬに、又氣を變へて『多香ちやん！　お前は澤さんと平さんと何方が好きだイ？』『澤さんと平さんと……云れなくつても知れてるワ』『何方？』『澤さんの方が可いワ』『何故平さんは嫌い？』『嫌だワ。ほんとに平さんは虛飾家ねエ。あんな人……妾ア澤さんの方が餘程好い』

さもあらんとは思ひながら、それも或は姉への義理では無からうかと、お須美も今度は由斷なく、心中の嬉しさは押し隱して、表面を繕ふ不平顏。『さう？……だつて平さんも面白い方ぢやないか』『面白くつたつて嫌だワ。……そんなら姉さん好き？』『唯々！』『うそ〳〵、嘘ばつかり。妾ア聞いたワ、阿母さんに。姉さんは澤さんが好きなんだつて。さうして澤さんが、將來妾の兄さんに成るんだつて……』

果は藪から蛇、姉は吾と求めてまた候赤面。脆くも妹に嬲られて、何時か例の心配も忘れ、多愛も無く

嬉しくなつたが。さあらぬ體でまたお多香に向ひ『そんな事、お前饒舌るんぢやないよ』と、態と嚴格に誡めた甲斐も無く、『饒舌らなくつたつて、一同もう知てるワ』『まア仕方が無いねェ』と、呟く裏は嬉しいやら……さて恥かしいやら。

それにつけても氣に成るは今日の話。こりやもう寧そ母に聞かうかと、思ふ折から廊下に足音。やゝ障子近く成て、エヘンと輕く咳拂をしたは確かに母の聲であつた。

《十一掬》

母の來たらしい氣勢に、姉妹共暫らく談話を途切らせ、引立耳に成て待ち搆へて居ると。やがて母のお民は、靜に障子を押し明けて、靜に部屋の中へ這入て來た。

お須美は自分の敷いて居た友禪の坐蒲團を取つて、急いて母の席を設ければ。お民は『大きに憚り』と輕く會釋して、其上に坐を占めたが。見れば何か物思はしげな顏色。只默つたまゝで捨てゝある新聞を、見るとも無しに手に取り上げ、讀むとも無しに目を注いで居るに。お須美も何うやら氣が置けて、此方から話しかけるともならず。同じく無言で居たが、やがて云はゞてれ隱しに、火鉢を倚近く母の前へ寄せつけた。

お民は其儘火鉢の縁に片手をかけ、右の手で一寸帶の上を押へて見て、初めて氣か付いたか、傍に居たお多香を見返りながら、『お前チ、御苦勞だけれども一寸阿母さんのお居間へ行つて、お煙草を取て來

てれくれな』『お居間にあるの?』『ア、、あのお煙草盆でも持て來ておくれ。それからお煙管は火鉢の傍にあつたから、一所に!』『ハイ』

お多香は快く返事はしながら、何故か尙モジ〳〵と立ち兼ねて、妙に姉の顔を見て居るに。姉は大方猜して、『また恐がつてるんだよ、弱虫だチー』『だつて……暗いもの』『恐い事があるものかチ、家の中ぢや無いか。先刻は一人で來た癖に』

と、お須美が窘めると。根が負けぬ氣のお多香、少し激した樣に、『おやア行きますよ』

勢好く立ち上り、廊下へ出たかと思ふと、障子も震ふ計りにドン〳〵。

お民は後を見送つて、『ほんとにお轉婆だチー。あの足音は!』

お須美も苦笑をして、『また平さん見たいに滑倒らうと思つて』

と、呟いて居る間に。又廊下を鳴らして、今度はお艶と云ふ小間使を供に連れ、お多香は命令られたままに、煙草盆を持て來て、母の前へ突き付ける樣に据へたが。お民は碌々禮も云はず、直ぐに二三服吸ひつけて、煙の間からお多香を尻目に掛け、邪魔あと云はぬ計り態と不興らしい顔をして居るに。お多香はいよ〳〵不満な顔色、手持無沙汰さうに只母と姉とを見較べて居たが。やがて引返して、行くお艶の後を追ふて、『オイ艶ァお待ちよ、一所に行くからサァ』

とつかは立て出て行つた。

後は母子のさし向ひ、元より遠慮は微塵も入らぬ間であるに、さて不思議に心が臆し。お民が只煙草のみ吹かして居れば、お須美は取り殘した袂の仕付糸を、丁寧に拔いて、珍らしさうに眺めて、また大切さうに丸めなどして居る計り。暫らくは木偶を列べた樣な鹽梅。……是も相互の胸の中に、何やら一物あればこそ。

稍々あつてお民は、流石母親だけにまづ口を開いて、『お須美！　今夜益彦がまた來ると云つてたさうだが、まだ見えない樣ぢや無いか』

と云へば、お須美は俯視いたまゝで、『さうですねー』

さも冷淡な挨拶、是に拍子が拔けて、また少し言葉は無かつたが。やがて又お民は、意味あり氣にお須美の顏を、額越しに覗いて、『大方もう來やしまいよ』『さうでしやうか』『自家より他に好い處があるんだもの』『何處です？』『何處だか知れたもんぢや無い。ほんとに現今の若い者の堅いのは、當に成りやしないよ。妾は呆れ返つてしまつた』

さてこそ御座んなれと、兼て覺悟のお須美、お民の思つたほどは驚きもしないが。元より此一事で。先刻から胸を痛め、妹にも嬲られた位。何でう聞き逃がしのなるべき、吾知らず膝は向き直つて、『まア何故？　阿母さん！』

と、忙はしく問ひ返へせば、お民はさてこそと同じく居住ひを直し、折角今煙草を詰めた煙管を其儘暫

らく煙草盆に預けて、少し小聲に成り、『ほんとに飛でも無い人だ。……今に阿父さんがお歸りに成つたら、一度伺つて見る積りだが。まァお聞き、斯うなんだよ』

と、枕詞を置いて、さて說き出す本文を聞けば。

益彥は知つての通りの男振り、如才の無いと云ふ方では無いが、まだ世の中の風に揉まれぬ、其初心な所が又女に可愛がられる處か。去年の秋に社の親睦會が花月とやらであつた時、程近い烏森の赤襟上り、何子とやら云ふ若い藝妓に、思ひ付かれたとやら、思ひ染めたとやら、兎に角それが病み付きと成ては、社の事務も手に添はうか。其後良く無い朋友の案內で、卅間堀の船宿に、こわ〳〵戀の瀨踏みをしてより、度胸が据つて後は人手を賴まず。次第に深處に浮かれ込で、果は義理も德義も忘れてしまひ、惡い事は早く覺えて、社の金を少しづゝ昧ませ、現に此間上方へ行つた折も、ちと旅費の入り過ぎたも、皆其引け道あればこそ。まだ其上に噂を聞けば、其妓が春衣の丸帶も、西陣で飛切りの代物、益彥が見立てゝの土產とやら。又此正月も、元日から三日まで、益彥一人で仕舞つて置き、白晝は年始廻りで多忙しいが、夜は其方へ引取られる寸法に、ちやんと去年の暮からの約束。なんと呆れたものでは無いか。まづ大畧は此の通り、まだ此他に如何な事があるか、其處まではまだ聞かなかつたト、母が眉を顰めての物語。

お須美は兼てより、大方此樣な事とは推しながら、さて面り聞いて見ると、腹も立ち又悲歎もあるが、

扨はした無く怒りも出來ねば、母の手前聲立てゝ嘆きもならず。只吾が頤を襟に埋めて、手は何時の間にやら胸に當たり太息のみ僅かに聞えて居た。

暫らくしてお須美は母に向ひ、『阿母さん！……その事は一體誰からお聞きなすつたのです』『誰からッて……妾は今日平さんから聞いたのサ』『平さんから……？』『平さんだつて、まさか嘘も吐くまいぢやないか』『でも……』『それに益彦が。今夜來ないのが第一の證據だ。……先刻も云ふ通り、今夜は約束があつて其何子とか云ふ奴の方へ、行て居るに違ひない。晩に又來るあんて、好い加減な事を云つて置いて、……今頃は如何な事して居るか知れやしないよ。ほんとに呆れたもんだ。それをまた眞實にして、待つて居るお前もあんまり正直過ぎるぢや無いか。……妾はほんとに腹が立つて堪らない。先刻は人の前で訝う氣取つて、お酒ももう飲めませんなんて、猫を被つてサ、人の眼を昧ましてサ。ほんとに今度來たら思ひ切り云つて遣らなくッちやァ』

と根が正直なお民、今まで信用して居ただけ、斯う聞いては一層憎らしく。若し眼の前に居たなら直ぐに打ち据へかねぬ權幕。見れば何時か眼の底に涙を溜めて、餘程悔しさうに見えた。

それも其筈。元來彼の益彦は、お民からはまづ從弟に當る親戚の者で、お民に男子が出來ぬ處から、是をお須美の婿の候補者と定めたも、最初は此お民の推擧で、それも畢竟益彦の人物を、充分是認したからである。然し益彦が候補者と定められてから以後、是ぞと云ふ功勞もまだ立てぬ故、將來舅となる

べき人の、信任をまだ全く得ない矢先き、此樣な失策を仕出來されては、益彥の首尾は云ふに及ばず、自分も爲に面目を失ふ次第ゆゑ、腹が立つも無理ならず、悔しがるも無理あらず、實に肝腎のお須美よりは、尙胸は沸き返る感ひであつた。

然しお須美は、無論心を痛めぬでは無いもの丶、此事の平吉の口から出たと聞いた計りに、幾分か其心配を減らして居た。と云ふものは……是は母も知らぬ事で、平吉は常から益彥とお須美の間へ、水を差さう〳〵として、實に云ふに忍びぬ擧動も今迄に度々。が、元より人に咄された譯でもない故、母に告訴けたともなく、又母はそれを知らぬ故、平吉の言葉も信ぜやうけれど。それを思へば今度の事を何うやら例の手ではあるまいかと、全部信ずるをは出來なかつた。とは云ふもの丶、戀の山の奧には、疑念の鬼が棲んで居り。空摸樣や風の吹き廻しで、兎角此奴が躍り出たがる。

今夜來ると云ふて來ない、それが第一の證據と、母の言葉に吾が心を動かされると、其隙に付け入る例の疑念。火の無い處に煙は上らぬ道理、さては……もしや……。

果はお須美も吾からと釣り込まれて、母と共に物思ひの淵に沈み掛る時。連忙しく駈けて來る足音、かラリと障子を明けて、『姉さま！　姉さま！』

と、例のお多香の呼ぶ聲に、何事かと振り向けば。こは如何にお多香の後に、立つは正しく澤益彥。『どうも大變晩くなりました』

《十二掬》

もう所詮來まいと斷念て居た益彦が、今突然現はれたに、今迄の心痛何處へやら、お須美ハ只嬉しく、且は少時なりとも疑ふたが、今更面目無く成て、目にハ見えぬが胸は躍る思ひ、挨拶もろく／＼出來なかつた。

然し母のお民は、老人丈にさう容易く心は變らず。寧ろ益彦の何も知らぬ其面色が、まだ猫を被るかと、却て憎らしく思ふかの樣に、凄い目をして其顏を見つめて居たが。稍あつて言葉鋭く、『お前に少し云ふとがある、此方へ來ておくれ』

云つて立上るに、益彦は更に合點のゆかぬ乍らも、『ハイ、何ぞ御用で……？』『何でもいゝから此方へお出で！』『ハイ』

氣味惡々益彦はお民の後を尾いて、其居間の方へ出て行つた。

取り殘されたお須美は、更に氣が氣で無く、益彦を疑ふ心よりは、母の胸を計り兼ねて、もしや大事に及びハせぬかと、今ハそれのみ心に懸つて。後に尾つて行つて樣子を見たくもあり、それもはした無いと又自ら窘め、只獨り立つたり居たり……居ても立ても堪ぬ心地。

然し元より嗜みの善いお須美、外面へ出しては騷ぎもせず。只沸き返る感情を狹い胸の中に疊み込み、細い手でそれを押へて、身を机に憑し掛け、脇目も振らず一心に祈るハ……益彦の身持放埓は虛構であ

れかし、母の腹立の快く癒えかしと、……只是ばかり。
さうとハ露はども悟らぬお多香、最前から待ちに待つた益彦の、姿を見るより直ちに捕へ、一角の功勞を爲た了簡で、誇り顏に此處まで引張て來たものを、忽ち母親に横奪され、また傍に見て居たお須美まで、……同じく待焦れた味方同士でありながら、止めもせずに知らぬ顏、而も何處やら不興さうに、默つて何か考へて居るに。お多香は折角の張合拔け、又少しは腹も立つて、悔しさうに母の居間の方を見ながら、『酷い阿母さんだよ、折角連れて來た澤さんを……御用なんぞは後だつて可いのに……晩く成つちやア歌がるたも出來やしない。　姉さん行つて呼んでいらつしやいな！』
云つても姉は無言、お多香は彌々焦思て、『ぢやヤ妾が行て呼んで來るワ』
と、云ひながら行かうとすると。姉は忙はしく呼び止めて、『多香ちやん御止しよ』
お多香は不審さうに、また不平さうに、『何故？』『今行つちや不可い！』『如何かしたの？』
と、問ひ返したが、さてそれには姉も辯解を與へず、又默つてしまふに。お多香も變に思つて暫らく逡巡つたが。又行かうとする故姉は又速忙しく『行つちや不可ッてば！』
と、小聲に力を入れて制すと。お多香はいよ〳〵合點のゆかぬ顏色で、『何故？　誰かお客樣があるの？　御用があるの？』『何でも可いからお前は此處にお居で！』『だつて不愉快いぢやありませんか、折角澤さんが來たのに……一體如何したの？』『…………』

今はお多香ももどかしがつて、突然立つて居間を出た故。お須美は又驚いて自分も伸びあがりあがら、『アレ不可いッてば！』『よくつてよ……妾は樣子を見て來るんだよ』

と、云ひ捨てゝ又行かうとする。今は呼んでも止らぬと思つた故、……お須美も流石に才子、一策を案ドて聞えよがしに、『多香ちやん、ソラ何か出るよ』

云ふと。お多香は忽ち『アレッ』と叫んで、飛ぶ樣に引返し、『アラ嫌だア、姉さまおどかすんだもの』

『それぢやお止しな！』『だつて…………』

今度は少し違拗はじめ、首を斜めにして體を搖振りながら、何か口の中で囁いて居たが。其時丁度違棚の置時計が鳴つたに、お多香は氣が付いて其方を見ながら、『アラもう八時だワ。早く始めなくちやア仕樣が無いねエ。よう姉さん行つて呼んで來ましやう』『まアもう少しお待ち！』『だつて段々晩く成てしまふワ』

と、お多香はまだ歌がるたの事で頻りに氣を揉んで居る時。先刻來た艶といふ小間使が、お須美の處へ來た年始狀らしい郵便を持て這入つて來ながら、『お孃樣まだでムいますか』

と、お多香に尋ねると。お多香もう泣き出し相な顏して、『あんだか阿母さんが御用があるつて、澤さんを連れてつてしまふんだもの』

云ふとお須美も傍から、『何か御話でもして居らつしやる樣かイ？』

と、それと無く樣子をさぐる下心、然しお艶は何氣無く、『いゝヱ、なんだかお靜でございますよ』『さうかィ……』『それぢやァもう御用が濟んだんだから、呼んで來ましやう』『それに只今平さまが入らつしやいましたよ』

と、小聲で云ふに、お須美は驚いて、『え？　平さんが？　今來て居らつしやるのかィ？』『いゝえ！一寸お臺所まで入らつしやいまして、アノ澤は來てるかとおつしやいましたが、先程澤さまが御入來の時、立岡が後から尋ねて來たら、來ないと云つて呉れとおつしやいましたから、其通り御入來が無いと申しますと。そいつは變だト、少し何か考へて居らつしやいましたッけが、……私の來た事は秘密にして呉れ、誰にも云つて呉れるなとおつしやつて、其儘急いで行てお仕舞遊ばしました』『澤さんが居ないと云つて呉れッておつしやつたのかィ？』『へィ』『平さんが來たのは秘密だつて？』『へィ』『なんだか怪訝しいチ』『變で厶いますよ』『姊さん何か變なの？』『お前の知つた事ぢやないよ』『ほんとに姊さん意地惡だよ』

と、恨めしさうにお須美の顏をヂロリ。お須美は何か獨り合點して此時少しは眉も開けた樣子。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

話は變つて益彥は、お民に尾いて居間まで來ましたが。まだ仔細を知らぬ故、胸は流石に安からず、お民の尙落付いて居るだけ、却て薄氣味惡さは一層であつた。

で益彦は、只俯視いて私かにお民の鼻息を覗つて居ると。お民はやがて言葉を改めて、『云ひ度い事とは他でも無いが、お前も少し氣を付けて貰らはんと、第一妾が困るから』

と、思つたよりは手和かな鋒頭。然し眞綿の裡には得て針のあるものと、益彦も更に油斷無く、極めて戒愼した語氣で、『ハイ』

お民は尙語を續いで、『唐突に此樣な事を云ひ出しては、お前も譯が解るまいが、今日お前が歸つてから、妾は立岡から嫌な噂を聞いて』

と、云ひながら以前の話を殘らず咄し、『元よりお前の事だから、決して其樣な事はあるまいとは思ふが、……若い中は無いにも限らず、よし又虛搆にした處で、そんな評判を立てられると云ふものは、つまりお前の方に油斷があるからで、此方さへ確乎して居れば、人が何と云はうと、ちつとも恐れるとは無い、兎に角お前は今が大切な時節だから、充分氣を付けて、怪我にも人に彼是云はれない樣に、品行を愼まなければ成らない。若し良人の信用を失つてしまひ、又お須美にも愛想を盡かされる樣に成てしまへば、折角妾も心配して、是迄に仕て來たのが、悉皆水の泡に成てしまふ。今も一寸お須美の氣を引いて見たが、彼はよい鹽梅に此事を信用にせぬから、まづ大丈夫と云つてもよいが。氣に掛るは良人の了簡、何うもまだお前を充分信用せぬ樣子で、益彦もまだお坊さんで困ると、平常からさう云つて居る時だから、今若し其樣噂でも、良人の耳へ這入つた日には、何う風が變るか知れやしない。それだから妾

が心配して、此噂はよし虚搆とした處で、尚此上にも品行を愼んで、人に後指をさゝれぬ樣にしてお呉れと、くれ〴〵もお前に頼むのだ』

と、眞實を籠めたお民の意見、深くも肝に銘じたか、益彦は只首を垂れて聞いて居たが。稍やあつてお民に向ひ、額上の汗を拭きながら、『段々との御意見、實に難有う厶います。立岡が其樣な事を申上げたも、つまり私の油斷に違ひ厶いませんので……貴婦のお蔭で斯う云ふ身分になり、まだ是ぞと申す仕事も致さず、うか〳〵今日まで暮らしましたは、如何にも不覺で厶いました。今日からは年と共に魂も入れ替へ、屹度勉强致します。……それにつけても思ひ當りますは、今日も立岡が、先刻同僚の宅で落ち合ひました時、頻りに私を進めまして、是非其の花月まで付き合へと云つて、斷はつても中々聞きません故、曖昧な挨拶をして置いて、間隙を見てそつと此方へ逃げて參つたので厶います』『それでは立岡がお前を誘つたのか』『ハイ……成る程去年の親睦會に花月へ參つたことはありますが、其後一度も參つたとはありません。却て立岡こそ馴染なのです』『左樣か。……立岡の遊ぶと云ふ事は、妾も內々聞いて居たが、それでは皆自分の事を云つて居たのか』『大方其樣な事で厶いましやう、……然しまだお疑念か厶いますなら、花月へお問合せなさいますとも、……また旅費の事も、委敷計算して社の方へ出してありますから、其帳簿を御覽下されば、直に解るとでございます』『それは元より妾だつて、立岡の云ふ事などを信じはせぬが。……それにしてもあまり淺墓な虚搆を云ふ人では無いか、あれで社務

が取れるのか知ら？』『實は社でもあまり評判は宜敷無い方ですが、……然し決して間に合はぬ人でもありません、事務には隨分慣れた處もあります』

と、敵ながらも辯護をして居たが。元より益彦も男一匹、あまりと云へば失敬な讒訴に、心中充分に憤懣して、己れ何時か思ひ知らすぞと、私かに拳を握りしめた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

お多香はもう堪り兼ねて、お艶と共に母の居間に來たり、襖の外から、『澤さん、御用が濟んだら歌留多しましやう！』と、聲を掛ると。母のお民は以前と打つて變つて機嫌好く、『さア　それではお始めなさい。……妾も讀み役に行て上るから』

云ひながら立ち上れば、益彦も續いて出て來て、『それでは始めましやうか。お多香さん負かしますよ』『澤さんこそ、眞黒に付けてあげてよ』『お多香、早く姉さん呼んでお出で！』

云ふ時。……先是樣子如何と。次の間まで來て居たお須美は、いそ〳〵として出て來て、『さアそれでは始めましやう』

と、云ひながら一寸母を顧み、又益彦と顔見合はせた。時其時。譯は語らず聞かずとも、互ひの胸に以心傳心。今こそ夕立の雲晴れて、虹鮮麗に見える嬉しさ。雨降つて地堅まるとは是。

（完）

◉國民大帝

嵯峨のや主人

（上）

天高く地浩き岩山の巓、旭日東海に昇りて影扶桑に横はり、霜花草を結んで朝の風冷かなり、誰や巨人一個叢の裡に立つは、其人面は白きこと美玉の如く、鬚髯長く垂れて胸を過ぎたり、廣額濶面隆鼻丹唇、眼に明星の光をかけ、眉に江山の秀を萃めて、器宇元より豁如たるに、緑の髮頂の中央より分けて肩に垂れたる、一見凡人の種ならざるを知る嗚呼是を是、誰と歟なす、是は是天照大神が第五世の御孫にして、日本國民の大帝、皇祖神大和伊波禮毗古命にてましますなり、御身には雲の如くなる大和衣の白き筒袖の長衣を召したまひ、御腰には筑紫糸を以て綾織したる玉帶、前に結びて長く垂れたまひたるが、厚房の風に飄へれる美しさ、又御頸より御胸へかけては雲立昇る霧島の寶石を以て製したる曲玉の飾をかけたまひ、又右の御腰に附たまへる長袋には、阿蘇山に狩倉して射て落したまひぬる大荒鷲の羽を以てはいだる尖矢を幾筋となくさしたまへり、御足には皮の沓を穿ち、御腰には金の飾輝ける長劍を帶びたまひて、右の御腕に玉の鞆をかけ、左の御手に藤の蔓巻したる太弓を杖つきて、遙に海の面きッと見たまひたる、御容儀のいや尊き、御風采のいや高さ、誠に神表凛々として四下風を生して御足の下の草を靡したり、暫くして尊傍なる險しき巖に御腰をかけ、弓杖突て休ひたまふ、御眸を動して

四方を顧みたまへば、空濶として御目にさへぎるものもなく、南に江代、神門あり、北に松山、志布志あり、西に霧島一帶の山横はり、東に太平洋の水渺々として際もなく、誠に長空萬里の眺なり、此に於て尊御喜び斜ならず、仰で大空の蒼々たるを望み、俯して山河の連なれるを見て、天地の極りなきに感したまひつ、頻りに御胸を波打せたまふ、嗚呼其大なる御心の海には果して如何なる大なる波歟寄せぬる。

時しも彼方の茂林の裡より薪負へる一個の老翁、頭には西海の波の白沫をかつぎ眉には三冬の霜の氷れるを載たるが、老鐵脚に徑路の霜を蹈破りて現はれしが、近く儘に尊を見擧げ奉るや、周章て薪を傍に投やり、尊前に蹲踞して恭しく額づきぬ、尊其姿を一目見るより快然として打笑たまひて、御聲さわやかに、をゝ汝は鹽土の翁ならずや、久かたの天のいや高き上よりやふりし、あらがねの土のいや深き底よりや湧きし、如何にして此處には居る、汝は先つ年の先つ年の其先つ年の末つ方、魚とる爲めにとて一葉の小舟に其老の身を乘せて、海原遠く出し時しも、暴風の俄に荒て船は渡津海の底の其底の深き底に沈みしと歟、あるはまた汝は千尋三千尋の深き水底の龍の宮城へ往きしと歟聞しに、綾なくも面を見ける哉、如何にして歟歸り來ぬる、何處に歟住居ける、聞かまほし、語れよかしと問ひたまひぬ、翁が謹みて頭を擧げ、尊の御貌を敬ひ見る、其容貌を見れば、頰の肉甚しく落て、腮の骨高く出たるに、銀の如くなる白鬚髯滿面を埋めて、くぼめる眼に異樣の光を放てるに、筋骨愈痩て細けれどもきたへ

にきたへて鐵の如く、松の拳を握れるに似て、雪を嘲り霜を凌ぐの風情なるに、雪白の長髪をさッと吹き來る寒風に曝してたゆまず、凜乎として扣ゆる有樣には、如何に此年頃千難萬苦を風露宿の間に凌ぎし歟と思はれて、哀にも叉健氣にもみゆめり、翁は更に天を仰ぎて神を祈る如く見えたるが、やがて謹みて申すらく、さん候、臣過る年の其過る年の過る年、一葉の小舟も覺えある腕には物の數とせず、老と水とは馴し身の、其みなれ棹とりのべて、八重の鹽路を漕分つ、彼方の海へ出し時しも、阿蘇山颪吹おくる暴風の俄にあれ出て、ふる雨は荒瀧津瀬の流れおつるが如く、雲射る電は臣が耳を聾ん斗なるに、あれよあの如く平かなる海の面も、其時しもは久方の天、おしてる海の潮を卷て、あの霧島の山より高き大荒波の押寄するに、臣が船は此山の木葉の一葉よりさゝやかなれば、阿蘇山の嶮しき巖より堅き此腕も、波を破りて岸邊に船を寄難かりき、臣は此現身も今日ぞ渡津海の底の藻屑となる事と思ひ極めて、其後は腕を働かせず、只船底に身を打伏せておすてる大神を祈りてありしに、臣が船は射る矢よりも早く流れて、あくる日の朝、一ッの湊に着て候、此時は雨晴れ風をさまりて、久方の天には赤き日美しくて輝き、おしてる海には沖津波平かに靜まりをさまりて有たれば、臣は少しく心を安んじたれど、顧みれば雲漫々、水渺々、故鄕の天の見えざるを如何にとやせん、殊に其處とて龍の宮城の美しの姫の住む所歟、鬼ヶ島山の恐ろしの鬼の住む所歟定かならざれば、胸は荒波のごと轟けるを、兩の手を以てしッかりとおし靜め、靜に歩みを移し始めぬ、時しも日陰小闇き木下闇路の森の熊笹ざはくと戰

きて、怪しの男兒すッくりと立出たり、嗚呼其時の臣の驚き、臣は覺えず立止まりて彼奴の貌をきッと見詰ぬ、彼奴は抑何者ぞ、茨のごと尖れる鬚髯は滿顔を埋めて光る眼の凄じく、頭におどろの髪をふり亂し手に生木の弓を挾み、腰に堅石の尖矢をさしたるが、彼も又眼を見張て臣が顔をきッと弓睨まへぬ。臣先づ聲をかけて試みんとせし時しも、彼奴は何を思ひけん、腕の弓に腰の尖矢がッちり打つがへて大空の月のごと曳しぼりぬ、嗚呼其時の臣の驚き、臣が聲を擧げ手を擧げ制すれども聞かばこそ、早くも切て放せし一の矢は臣が面門を望んで飛來りぬ、臣は弓弦の響と共に身を縮めて、右手に飛矢をかいつかめば、隙もあらせず射出す二の矢は臣が胸板を、正しく此處を望んで飛び來りぬ、臣は目早く身を避けて左手を擧てかいつかめば、早くも飛來る三の矢は臣が喉の笛を突んと風を斫てぞ飛來りぬ、されど臣は右手を擧て其をも何なく叩き落しぬ、嗚呼瞬間の臣の身は風に戰ぐ葦の葉末の露よりも危かりき、此時怪しの男は何思ひけん弓を投棄て、面の形があらがねの土につくまでに禮拜して申すらく、を丶高きみ天の尊き神よ、汝はよも人間にては非ざるべし、曲れる心に曳し矢の立ざりしこそ幸なれ、荒き夷が荒き心の其荒々しき大罪を許したまはらば幸なりと謝るに臣も心を安んじ、近づきて我身の上を語れば、荒々しき夷心にも哀とや思ひけん、臣を其穴籠の岩穴に導きて、猪の肉取出して食はせける、臣は其より彼等が仲間に入りて、野原の草を馬にまぐさかひ、馬の脊を我住家とし、弓矢を我友として、野山の間を、其處としもなく、野山の風のごと押歩きぬ、されどすめら命よ、臣は一日として故郷の事忘

る丶ひまはあかりき、夕暮の雲の旗手を見るにつけ、入る日の方を故郷の天と眺めて戀しく、歸る波の東より西に向へるを見て、あの雲の彼方にこそ故郷と其方の天のなつかしく、我子我孫の事の心に懸て腸を斷つ思ひなれば、久方の天の照る星に據りて我歸るべき方を定めなば、歸れぬ事も非ざるべしと思ひ定め、彼等の群に別を告げ、海山の苦惱を忍てやう〳〵故郷へ歸り侍る。

（下）

翁の長語を命は感に堪つゝ聞居たまひしが。やがて御聲爽かに。あゝ翁よ、汝は頭に雪を戴く老の身を以てよくも露霜の艱苦を忍びしよ、よくも海山の故郷へ歸りしよ、我生れてより四十餘年未だ汝が如き奇しき事に出遇ひしものを見ず、今日計らずも益ある物語を聞て、如何計此身を德しけるよ、そも〳〵汝が在りし土地、其名を何と云ひて、又如何なる有樣の所なりしぞと問ひたまへば、翁は謹みて彼が始めて流着し所は淚速と云へる入江にして、如何に潮の流早き所なる歟、又其より內地へ進みては、山代、山外、河內など云ひて、如何に是等の地の山翠にして水清く、如何に土肥地味豐にして、木の實草の實の自らみのる歟を說奉りぬ、命は聞終りて大に喜び、一ッには其談話の愉快なるを賞し、二ッには翁が異境にさまよひし艱苦をなぐさめんが爲め、頸にかけたる曲玉をとりて與へ玉へば、翁はおどり上り〳〵て打喜び、其をあまたゝび押戴き〳〵て、やがて御別を告て山を下りぬ、命は下りゆく翁の後姿を見送りたまひしが、其影が徑路の岩角に消ゆるや、太き息をはッと吐たまひて、山上の稍平めなる芝原を右

に左に歩みたまふ其御容貌は沈々として深く思ひたまふ所あるが如し、嗚呼海の如く大なる其御心には如何なる大畧の波が皷うつ唯蒼天の之を知るのみ唯蒼天の之を知るのみ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

月澄み風靜なる秋の夕暮、高千穗の大宮にては今日御手の下の勇將等を集め玉ひて東夷征討の御評定ありしが、愈不日　王の師を興して之を征し、王城を其土に定めて、四維を治め八方を撫する天下一統の大策定りぬれば、今宵は壽の盃を擧よとて、專ら御酒宴の御催あり、先づ大廣間に花の筵を敷せ、大なる瓶に壽の美酒をたゝへさせ、山海の珍味を積上て花やかなる御事あり、今宵此席に集りし方々には、皇祖岩禮彦命、皇兄五瀨命、皇兄稻坂命、皇兄三毛入野命、皇子手研耳命を始めとして、幾十百の神將勇士、孰れも熊を手捕にし猪を足蹴にする大勇の猛者のみなりき、神代の昔、八百萬神が八十河原に會して、神樂を奏せし古例にならひ、今宵も舞を舞はさせて酒宴の興を添させんとて盃一巡せる時大小の皷を打はやせば、十七八の一個の美人狹き衣の袖をひるがへして

高千穗の峯の夕月影さえて　まぼろしの狹霧深谷に夢結ぶ
松風の時雨をさそふ音さびて　月やどる梢の猿猴聲悲し、
小夜ふけて駒の轟何事ぞ　おさ〳〵が大宮使昇るなり

千萱生ふ山の常陰の岨道を、　鞭擧て駒を追ふこそ危けれ、
心して雲井を翔れ若駒よ、　あな哀れ夫が馬上の姿こそ
あれ駒とめて岩角高く月にらむ　山風におどろの髮をけづらせて。

と聲朗に舞ひ歌ふ其姿。柳腰嫋々として風を傷み雨を哀む風情なれば、滿堂の諸將士笑壺に入りて囃立つるに暫時は鳴も止まざりき其よりは人々興に乘じて春の花よりも香ばしき香のせる美酒を、くり拔の大盃に汲んで引受引受呑居たるが、如何に我々の祖先の酒宴には其盃のゆるやかに巡り居たるよ、彼等の中には或は劍を引拔きて猪の肉を割き、傍の火に焙りて食ふもあり、或は拳を握り或は眼を見張りて手柄話を誇るもあり、或は此度の征討軍には如何に荒くれの大男を斬りて敵の膽を寒からしめん歟など、威張るもあり、其聲々は一ツになりてにぎはしく、酒宴やう〳〵酣になりけり、時に數人の猛將堂の中央に踊出で、劍を舞はし鐘を鳴らして大平樂を舞へば、他の猛將聲を放て歌を歌ふ、其聲洋々として凱歌の如く滿堂に滿つれば、尊達御機嫌斜ならず、君臣一致、上下和樂の間に今宵の宴は果てにけり尊は諸將士の退出するや早く夜のおとどに入りたまひたり、されど小夜ふくるまで眠りたまはず、獨り短檠の下に腕を組みては、英雄の物思に沈みたまふ、時に大宮を退ぞきて我家〳〵へ歸る諸將等が、秋風に戰ぐ千萱の岨道を手綱ゆたかに駒を歩ませながら、滿顏の酒氣に意氣昻く、山の端に落ちかゝる殘月に嘯きて、

駒に鞭いざ雲翔ん夕月夜　荒れ荒るゝ風に鬣けづらせて。
弓に征箭いざ射て捕ん荒猪を、　紅の赤き血汐に霜染て。
よき獲物肩に打かけいざ家路　美しの美しの妻の笑顔見に

と歌ふ其聲遠く山彦に木精して聞えけり。

* * * * * * * * * * * * * * * *

旬日を出ずして…………………………………………………………

皇祖は諸皇兄と共に虎豹の士を帥ひ、羆熊の卒を率て、三軍堂々旌旗草野を蔽ふて中原掃蕩に進みたまふ、嗚呼錦旗の向ふ所、誰歟是に敵せん、高千穂ヶ原の朝嵐は凱歌を唱へて國民大帝の勝利を歌へり、國民大帝の勝利を歌へり。

（終）

◉二十日月　田山花袋

（一）

一日照り付けられた自分の身體を、涼しい夕風に吹かせながら、琴の音の奥ゆかしい牛込の小路〳〵を散歩したが、二十騎町の宿所に歸りたのは、丁度夜の九時頃でも有ッたらうか。

玄關から默ッて上ッて、自分の室に這入らうと思ッたが、只今歸ッたとも斷らないでは、餘り酷いと思返して、其儘奥の間に行うとすると、四疊半の閾の處で、折よくも出逢ッたのは此家の夫人。只今戻りましたと、自分は挨拶を仕たが、どうしたのかいつものやうに確りとした返答も仕ない。自分は不審に思ひながら、それとも無しに、夫人の方を見ると、何となく勝れぬやうな、悲しいやうな顔色、眼の底には涙を一杯にためてゐるらしい。はてなと自分は心の中に少し考へて、どうか仕たのかと飜ッて又一層深く考へた。

思當ッたことが有るので、自分は夫人とは一言も交さずに、此處を去ッた。直ちに下女室に行ッて、定といふ小女に詳しく聞いてみると、泣きたいやうにして居る夫人の樣子が殘らず解ッた。又あの頑固な女隱居奴が、いつもの嫁いびりを始めたのであッた。

かくて自分は己の室に戻ッて、洋燈も點けず唐机に凭れたまゝ、つく〳〵と限無き妄想に耽ッた。そし

てその妄想も、多くは夫人の身の上のことで。

まことに此家の夫人の身の上を、自分ほど好く知ッて居る人はあるまいと自分は思ッた。まことに此家の夫人ほど、不仕合な氣の毒な人は、廣い世界にも二人とあるまい。自分は幼稚さい頃からこの夫人を知ッて居る。まゝ事の莚に連り、かやつり草や、ぺん〳〵草を玩んで、餘念無く一日を遊び暮した事も、思へば目の前にちらついて見えるやうだ。

まだ其頃は自分は國に居ッて、夫人の家とは隣同士の好みで、親々も互に往來を仕て居ッた。勿論自分には妹や弟は澤山有ッたが、不幸にも親切にして呉れる姉が無かッたので、この夫人を隣の姉樣〳〵と本當の姉のやうに自分は思ッて居ッた。又隣の姉樣も、自分を弟のやうに思ッて居ッたと見えて、二ッあるものならば、必す一ッは分けて呉れて、子供には有り勝な喧嘩なぞも、一度も仕た事は覺えて居ない。その優しい姉樣が、いつの間にか、この家の夫人と爲ッて、見るも氣の毒な不仕合に逢ふとは。自分ながらまことに夢のやうに思はれる。

それに就ても、若しも夫人の兩親が親らしうして居ッたならば、少しは力にと爲らうけれど、父親にはまだ國に居る中に死別れ、母親は世にもあられぬ放蕩者とて、力になるどころか、途中で逢ふても母樣とは名告れぬほどの腐甲斐無し。只國に居る伯父伯母ばかりは、何のかのと不憫がッて居る樣子だか、何にしても四十里五十里と隔ッては、思ふ十分一の世話もとゞかぬは餘義無きいたり。

自分かこゝに寄食するやうになッたのも、皆幼稚馴染のこの夫人の世話であッた。自分は法律を勉強仕たい〳〵と、國に居て思ッて居たが、何分にも十分な學費が出せないので、空く志を抱いて居ッたのを、夫人の結髪の夫(則ちこゝの主人にて養子)が大學を卒業して、この度一家を持つに就て、一人書生を置きたいと言ふので、自分は東京に出て勉強することの出來る身となッたのだ。

それからはもふ二年にも間も無くなるが、この二年の間の夫人の難義は、果してどれ程で有ッたらう。自分は好く知ッて居る。自分は考へてみると、可愛想で涙が滴れる。自分は夫人の心根を思ひやッて、よくもあの難義を凌ぐと感服の涙を流した事もあッた。その上、夫と頼む人は、養子の分際で有りながら、おのれの生家の一族を、この西川家に合併させて、氣の毒とも思はぬばかりか、夫人の財産まで自由につかひ果して、その擧句は、世にも二人とあるまじき女隱居の嫁いびりを。諌めやうともなされぬは、お夫婦の間柄のそれほどに睦しからぬ故とは言ひながら、餘りと言へば義理知らぬ致方。まして意地惡き小姑まで二人あッて、朝夕夫人の耳こすりばかり。何の彼のと爪の垢ほどのことまで、女隱居に告口されては、嘸々立つ瀬とやらも無いことであらう。

きけば此家の主人は、同居してゐる村山家の次男で、夫人の父親の歿られるとき、養子にとて貰受け、西川家より學資を送ッて、修業させたとの話であるのに、漸く一家を持つやうになれば、その殘れる愛娘はかゝる始末。草場の蔭にて、父親はどんなに悲しく思ッて居玉ふことか。

親兄弟は無く、夫とは睦からず、舅姑には散々いじめられて、力に思ふ親類は遠くて役にはたゝず、世にも頼り無き夫人の身の上。せめて自分ばかりは、苦しさを慰むる友となッて上げたいと、思ふて居るは居るけれど、食客の身の悲しさには、何一ッ碌な事も出來ず、何一ッ慰める手段も無い。

今宵は又何故あッての譴責か。お定に聞いてみれは、元は武雄樣との些な事から起ッたお小言なれど、仲が惡い故、遂に大きくなッたとの話であッたが、大方またいつものひがみ根性で、噛付くやうに小言を言ッたのであらう。つく〴〵も氣の毒なは夫人の身。自分より一ッ年上なれば、今年廿の花盛なのにいろ〳〵御心配もなさると見えて、この頃はお顔色もいつものやうでは無く、身體も大層痩せ衰へた樣子。嫁の身として寢ても居られねばこそ、平生の如く立働いて居なさるが、このまゝ二月も經ッたなら、床に就くやうな不幸を見るかも知れぬ。そのやうな事があッては、猶々お氣の毒と、容易に絶えぬ妄想の糸口を、猶もつゞけやうとする途端、奥座敷に女隱居のだみ聲が聞えた。自分は耳を欹てた。耳を欹てると、尖ッたやうな、怒ッたやうな、女隱居の早口か、へら〳〵と聞えたと思ふ間も無く、自分さへ膽がちゞむやうな鋭い聲で、お絹ッ〳〵ッ。

（二）

聲の餘響が靜まッても、答へる聲は聞えなかッた。が、やがて疊を蹴立てるやうな音がして、その四疊半のしきりを開けたのは、確かに女隱居と思ふと、自分は頭から水でもかけられたやうな心地がした。

『お絹。お前は耳を持ッて居ないかえッ』矢張女隱居の恐ろしい聲であッた。『え、お絹、お前は何といふ強情だらう。きゝたいことがあるから、鳥渡こッちへお出で』

と、女隱居は言葉を續いだが、夫人は何故か返答も仕ない。『私の言葉は、お前には聽えないか』

と、老母はいよ〳〵詰懸る。『否、きこえました』

と、夫人は早涙聲。『御前は私を誰れだとお思ひだ。姑の言ふことが聽えて居ながら、返事を仕ないといふ法は何處の國にある。お前はそれで濟むと思ふか』

夫人は顔を掩たまゝ返答無し。『私ばかりでは無い。お父樣もお前に聽きたいことがあるとお言ひなさる私と一所に奥にお出で』

袂を捕へぬばかりの權幕に、夫人も今は覺悟したとみえて、澁々ながら奥の室に連れて行かれた。

自分ははッとため息を洩したが、偖つら〳〵考へてみるに、お父樣も聽きたい事があるとは、何か譯あり氣な口振。勿論村山の老父は、譯の分らぬ男で、義理も法も知ッた人では無いけれど、流石男丈に、嫁いびりといふやうな事を仕た例は、今迄無かッたと言ッても好い位。それが今、改めて夫人に聽きたいとは何ごと。

もしや夫人が、舅姑に對して申譯の無いやうな事を仕たのでは無いか。それでこのやうに烈しい小言を言はるゝのではあるまいか。もしもそれならば、倘更傍觀してゐる譯には行かぬ。時宜によッては、力

になッてあげねばと自分ながら殊勝にも思立ッて、今まで凭れてゐた唐机を離れて、其まゝ立上ッた。佇立上ッてはみたが、食客の身分でありながら、餘計な世話と頭から睨め付けられたらば、何としやう。別段六ッかしい話も無く、いつもの嫁いびりならば兎も角も、と思迷ッて思返し、亦座らうとするときに自分の耳を衝いたのは、女隱居のがん張ッた聲。自分は思はず足を進めた。四疊半の座敷、六疊の中の間を通り拔けると、やがて其處は八疊の奥の間。夏の頃とて、閾にはめた唐紙も無く、あたり明通しの有樣に、我身體を見られては、話を立聽くのに不便と、自分は思はず足を停めた。何處か好い處はあるまいか、と自分はふッと考へた。

見ると中庭の玄げみ、折よくも宵闇の空には月もまだ昇らぬ。若楓などの名殘なく茂ッてゐる中に、佇立んだなら、戸内から見らるゝ恐はあるまい。それのみならず、闇から明るい處を見るほど好く見える事は無い。話を立聽くにはこれ究竟と自分は思付いた。思付くと其儘、裏に廻ッて首尾好く中庭の玄げみに隱れた。まことに自分の思ッた通り、八疊の奥の間は殘る處無く明かに見える。主人は晝頃出たきりまだ歸らぬとみえて、其影は見えぬが、上座を占めてゐるのは村山の老隱居。夫人の低頭いて座ッてゐる傍には、あの意地悪い女隱居が、眞自目そうに座を取ッてゐる。

不意に自分の鼓膜に響いたのは、老隱居の聲で、『お前はこの家はお前の家だと思ッてゐるかも知れぬが、女は男に從ふは理の當然だといふ事位は知ッてゐるだらう。夫の父母は則自分の父母、粗略にし

てはならぬといふ事も知らぬ事は無からう。お前が今こゝで、夫に離縁されたらどうする積りだ。自分の夫は養子だなどと思ふから、遂そのやうな了見になるのだ』

隠居の言葉はこゝに絶えた。自分はこれを聞いて、怪しからぬ事をと思ッた。殘念さ口惜しさに夫人は涙を流してゐるかと思ふと、自分は氣の毒さに堪へられない。が、躍る心を押へて、猶其後を聞くと、此度は女隠居の聲で『お前はそんなに私達を邪魔にするが、私達はお前に邪魔にされてはゐない。私達が邪魔になるなら、お前が此家を出るがいゝ、私達はこれでも義雄の親だから、死んでも此家は出られないからね』噛付くやうなこの言葉を聞いた時は、自分ですら慄として變な心持にあつたものを。正面から言聞かされる夫人の心は、まアどんなに殘念に思ッたらう。

堪かねてか、夫人は聲を立てゝ泣きながら、起上らうとすると、女隠居は、まだ言ふ事がある、と其裾を捕へて留める。振放ッて夫人は逃げやうとする。暫時互に争ッてゐる折から、門前に車が留まッた樣子。やがてお歸りと車夫の高聲。

最早立聽も出來ぬと思切ッて、自分は歸ッて來た主人を迎へた。

暫くして主人は留守中の出來事を殘り無く母から聞いて、そのまゝ夫人のゐる室に行ッたが、折々洩れて聽えるには、夫人のひた泣きに泣く聲ばかり。自分は氣に懸ッてく堪られなかッたが、其後は立聽する隙も無いので、不快極まる想ひをおのれの胸に包んだまゝ、ねられぬ一夜を僅かに過した。

《三》

翌朝日が高く登ッても、夫人の影が見えないのは、如何にも不審と、自分は態〻その室に行ッてみると、とッたまゝの床の上には、眼際の脹れ上ッた、顔の蒼さめた、いかにも悲しそうな夫人の寝姿。『何かなされましたか』

と、聲を低くして尋ねると、夫人は靜かに自分の方を振向いて、『否、少しばかり』

と、微かに答へた。が、心の中ではどんなに悲しく思ッてお出なさるかと思ふと、自分は氣の毒で涙が溢れる。『何か御用でもあれば、何なりと御遠慮無く』

堪かねて落る涙を片袖に隱しながら、たえ〴〵に自分は言ッた。すると丁度霜を經た虫のやうな聲で、

『御親切は難有ふ御座いますが、別段用もありませねば……』

見る〳〵珠のやうな涙は、夫人の眼から溢れ出でた。『どうせ私は邪魔者ですから』

跡は込上げて來る涙に胸が支へて言切れぬ樣子。夫人はそのまゝ傍を向いて仕舞ッた。

自分は室に歸ッて猶よく〳〵考へてみたが、どうも。昨夜の小言は、いつもの嫁いびりとは少しく違ふやうに思はれる。隱居の言葉と言ひ、老母の惡口と言ひ、今又夫人の涙と言ひ、これは何でも尋常の事ではあるまい。何か其外に込入ッた話でもあるのではあるまいか。

考へてみたが、それと思當る事も無い。只昨夜主人が歸ッて來てからの事。夫人の泣く聲も時〻聞えた。

主人の錆びたやうな聲も時々聞えた。もしやあれから後で、亦一層烈しい小言があッたのでは無いか。有ッたかも知れぬと自分は思ッた。昨夜までは起きて居た夫人が、今朝寢てゐる處から推してみても。どうせ私は邪魔者と、涙を交せて言ッた今の夫人の言葉から考へてみても。

あゝ氣の毒な〳〵と、自分の腦はひしやくしやして仕舞ッた。義理も知らね奴輩の集りと、自分は家内の人に顔合はせるのも厭になッた。

けれど家内の容子を見たならば、或は思當るやうな事もあるかも知れぬと思返して、纔かな事に迄自分は氣を付けてゐた。

主人は今少し前起きて、おのれの書齋に楯籠ッたまゝ、手紙らしいものを書いてゐる。老隱居と女隱居とは、奥の座敷で密〳〵と何事か相談してゐる。お秀は先程北町の小學校に行ッて仕舞ひ、武雄は庭の楓に的を懸けて、この前の毘沙門で買ッた小弓を試めしてゐる。別段これといふほどの心當りも無い。偖自分は茶の間へ行ッてみた。小女ハ今跡仕舞最中で、あちこちと忙はしく立働いてゐる。夫人に御膳を上げたかと聞けば、差上げましたけれど、召上がられぬとて下げられましたとの事。どれほど悲しい事があるのか。

八時の時計も鳴る、やがて九時にも間があるまいと思ふころ、車が來て、主人は例のごとく出勤した。その後で夫人を醫師に懸けるのかと自分は思ッて居ッた。いかに嫁姑仲が悪いからとて、まさかに寢て

ゐるほどの病人を、醫師にかけぬやうなことも有るまいと思ッて居ッた。處が、十時が鳴ッても、その樣子も無い。十一時が鳴ッても、まだその樣子が無い。

餘りに思ッて、自分はその由を女隱居に話してみると、『何、自分の好きで寐てゐるのに、醫師も何もいるものか』

つんけんとして、餘計なお世話といはぬばかりの言葉。自分はこのやうな薄情者が、又と一人世の中にあることかとほと〳〵呆れ果てた。呆れるに就ても、夫人の身の上がいよ〳〵可哀そうになッて、言ひやうのない不快をおぼえた。

二年間日々の心配に、あのやうに痩衰へた夫人を、自分の好きでねてゐるなどとは、何といふ言草か。あのまゝに、飯も碌々召上らず、五日と十日床に就いてゐたならば、この上どんな不憫を見るかも知れぬものを。賴りよなる人とては只の一人も無く、あたり皆敵といッてもよいやうな中に陷ッてゐる夫人の心はと、自分は心中に同情の涙を滴しながら、又も夫人の室に行ッてみると、今朝のまゝ身搖もせずに安臥んで居る。

二三度言葉をかけて、少しは其心を慰めて上げやうと思ッても、餘程悲しいことが胸の中を惱ましてゐるとみえて、平生話好な夫人も、中々其の慰めに應しやうとも仕ない。據無く自分はこゝを立去ッた。

午後に成ッた。自分はこれやあれやの考へに氣が塞いで堪らないから、友達の家へでも行ッて來やうと、

照付る熱さにも拘はらずに家を出た。

自分の最も親しい友の家へ、こゝよりさして遠くも無い。納戸町砂土原町を通抜けると、間も無く其處は友の家。折よくも在宅で、今晝寐を仕やうと思ッた處であッたそうだ。

例の如く快活にいろ〳〵の話をして、時を過したが、最早歸らふと思ふ頃になッて、友は俄に言葉を改めた。時に君にきゝたい事がある。何がと自分も俄に耳を傾けた。『君の處の細君は此度變るといふが本當か』何にッ！自分は風雨雷電一時に耳を貫いて過ぎた樣な心地がした。譃か實か知らないけれど、そんな話を或人から聞いたから。

全く思ひかけぬ尋問。我家の細君が變るとはいかにも分らぬ。もしこれが實ならば、それこそ一大事。假令虚誕にしても、只は聞流されぬ話と、猶よく聞いてみると、友の知人に某銀行の頭取を親しく知ッてゐる人が有ッて、その人の話とか。三年前に大學を卒業した法學士西川義雄といふ人を、頭取の一人娘が、或る宴會で見染めて、あの人の處へ嫁たい〳〵と、一年も前から騷いで居ッたが、聞いてみれば、先には結髮の細君もある事で、その戀は到底遂げられぬといふに、娘は落膽し、うつら〳〵と氣鬱のやうになッて居ッたのを、近頃西川は今迄の妻を離別して、その娘を妻にすることに内約定り、その代りに二萬圓以上の持參金とか。娘はその戀が遂げられるので、大層喜んで結婚の日を今から待遠しかッてゐるとの事。君の家ではその樣な樣子は見えないか。何にしても君の主人は好男子。世間の孃樣達が默

ッて置くまいと友は語ッた。

さてはと思へば、心に思當ることも無いでは無い。二三月前から、怪いと思ッた主人の素振。近頃はいよ〳〵夫人に對して無情になつたのも、さてはさういふ事が有ッた故か。あゝ世の中にはかゝる不道德極まる人間もある事か。幼稚い頃から、世話になッた西川家の一人娘を、罪も無いのに離別して、自分は四五十圓の月給が取れる身分に成ッたから、もう世話するのは嫌だといわぬばかりの仕打は。これが人間の心がある人に出來る仕業か。加之、持參金に目を呉れて、家附の娘を邪魔にする隱居共の心は。あゝ何とも言ひやうのない不道德。それでも天下幾人の學士だといふのか。

自分は實に言ふに言はれぬ口惜しさを心に感ドたが、面にも顯はさずにそのまゝ友と別れた。歸る路々考へてみると、昨夜の出來事、夫人の言葉、いつれも釘を打つやうにひし〳〵と自分の胸に思當る。

（四）

さてこの話は虛か實か。それを探るのが今にしては第一の問題と自分は思ッた。虛ならば何の事は無いけれど、若し實ならば默ッては居られぬ。敵中に圍まれてゐる恩人を、救出すのは自分の義務、及ぶだけの力は盡さねはならぬ。それにしても、夫人はこの事を知ッてゐるか。薄々は知ッて居やうと思ふけれど、何にしても自分は食客の身分。狹いこの家では、人目があッて詳しく面談する譯にはとても行かぬ。それと言ッて、床についてゐる夫人を外面に連出す譯には猶々行かぬ。遮莫このまゝで二三日を過

してみやうか。否々過すのも好けれど、夫人の病氣が日增に重くでもなッたなら、それこそ取かへしがつかぬといふもの。まゝよ、國の伯父へ自分から手紙をやることにしやう。けれど國の伯父、夫人からやるのならばよいけれど、自分からやッては何だか筋道が違ふやうだ。仕方が無い、自分の父母に書いてやッて、先から夫人の伯父に話して貰うか。さう〳〵、これが一番の上策と自分は僅かに分別した。分別したまゝ、半切を取ッてさら〳〵と筆を下してみたが、虚か實か知らぬ事を仰々しく書立てるのはいかゞと思返して、夫人の病氣の事、世話する人も無いといふ事の外は、大方略して仕舞ッた。

一日と立ち二日と立つ。何一ッそれと思ふなどの變事も起らぬ。只夫人の病氣が日增に重くなッて、身も衰へ頰も瘦せて行くばかり。その上一家の人々はまことに冷淡な取扱ひ。病室を見舞に行くことなどは、一日に一度もあるまいと思はれる位。それを見る自分は、まことに身も世もあられぬ心地がして、どうかしてあげたいと思はないことは片時も無かッた。

然るにその三日目の夕暮。思ひもかけぬ事が起ッた。この日は主人も早くから役所を歸ッて來たが、いつにも無いほどの好機嫌で、見舞に行ッた例の無い夫人の室に、二三度は見舞に行ッたやうな樣子。けれど後から思ッてみると、この親切は、自分が今將に罪を犯さうとしてゐるのを、責めて〳〵せめ拔いた良心の所爲であッたのだ。

その思ひかけぬ事、その犯さうとする大罪とは何かといへば、それは主人が病氣にかこつけて、義理あ

る夫人を、國に送返さうと言ひ出した事である。

あれは丁度夜の九時頃でもあッたらうか、夫人の室がいつもにも似ず、大層賑はしいのは不審と思ッてゐると、不圖泣聲が自分の耳に這入ッたので、さなから劍で胸を貫かれたやうに自分は驚いて、壁に耳をよせたまゝ、何事かと立聽いた。夫人の室は自分の書齋の隣りにあるので、その話は一々殘無く聞取られた。

泣いてゐるのは、確かに夫人に相違ない。『お前は。泣いて居ッては辨らないでは無いか、お前がかうして寢て居ても、世話して呉れる人も無し。それといッて、世話させずにいつまでもこのまゝにしては置かれぬ。それよりは、最早伯父樣達にも三年近くも逢はないから、保養旁〻遊びに行ッてはどうだと言ふのだ。何もお前を此家から逐出さうの何のといふのでは無い。平癒ッたなら、いつでも歸ッて來るがいゝ。

主人の聲は暫く絶えて又續づく。『そればかりでは無く、自家では母樣が喧ましいから、お前がかうしていつまでも寢て居ると、何のかのとつゐ口小言を言ふやうになる。さうすれば、病氣の治りやうも自然遲いといふものだ。それよりは、田舍に行ッて、緩り養生して早く元の身體に治ッて來るが好い。えお絹。何故泣くのだ。何も泣くには及ばないでは無いか』

程經てから夫人の涙聲がきこえる。『私は。私は。伯父樣などには逢ひたくはありませぬ。私は老母樣

に小言言はれても、辛くはありませぬ。私は病氣が治らないでも、此家にゐて、死ぬものなら、此處で死にますのが當り前……』

跡は込上げて來る涙に言きれる樣子。『解らない女だな、何人もお前を此家に置かぬとは言ひは仕ないではないか。實は伯父樣にも手紙を出して置いたが、その返事はけふとゞいた。久し振でお前の顏を見たいし。お前の病氣をきいては、只一人の姪の事とて氣にもかゝる。田舍の靜かな處で保養するのは、至極好からうと思ふから、早速送ッてよこすがいゝと言ッてよこした。それでもお前が疑ふなら、その手紙を見せてやらうか』

夫人はます〳〵泣崩折れて返答も仕ない。

かくては我友の言ッた話も、いよ〳〵實に違ないと自分は思ッた。家附の一人娘を邪魔にして、持參金に目を吳れるやうな人非人。二年も添ッた夫人を、無理に國へ送歸さうとは、よくもおのれの良心に恥ないで出來た事だ。それにしても、夫人ばかりは……女の中にもあれほどの賢婦は多くはあるまい。難義、無情を、何處までも怺へに怺へて、死んでも此家を離れぬとは、いかにも殊勝な、いかにも氣の毒なお心掛。けれどこの家を離れずに居ッたとて、親切に看病して吳れる人も無く、日增に衰弱して行くばかりでは、とても全快する見込も有るまい。夫人の心はまことに立派な心掛、死んでもおのれの家を失はぬとは、つく〴〵もよいお心掛なれど、この儘命を失ふやうな事があッては。猶更の一大事それよ

りも、假令一時は不得策でも、今すなほに國に歸ッて、一先病氣を全快させ、其上いくらも好い分別は出來やうと自分は思付いたまゝ、主人の去るのを窺ッて、その夜夫人の室に行ッた。他人には知れぬやうに、密々と自分の心を話して見た。すると泣つゞけに泣いて居ッた夫人も、自分の眞情には感したとみえて、『御親切に。いろ〳〵御心配下すッて』と言かけて涙を押へ、『こんな事が無くッてならば、二年も三年も逢はぬ私、本當に伯父樣や伯母樣の御目にもかゝりたいが、今私が此處を出れば、丁度父母の家を捨てるやうなもの。それゆゑ私は、どうしても此家は出られませぬ。假令あの母樣に叱り殺されましたとて………』

言葉を追越して新らしい涙は夫人の兩眼から溢れいでた。自分も正しい道理に言伏せられて、其儘同情の涙に咽んだ。

（五）

病氣の方も氣にはかゝるが、あれほど立派な夫人の言葉を、それでもとは押返し難く、それなりに自分は室に戻ッたが、枕を着けてからも。いろ〳〵の事が考へ出されて、二時をきいても、熟睡の境には入られなかッた。

翌日になッた。するとこの日は實に珍らしい人が訪ねて來た。それは大川正幸といふ夫人の從弟で、東京での夫人の親類は、この人ばかりと言ッても好い位。けれどそれほど力になる人でも無いとみえて、

暑寒年始の外は、あまり尋ねて來る事も無かッた。それに今日は日曜日といふのでも無いのに、尋ねて來たのは果して何の用事であらう。

加之、主人も今日は役所を休むとて車夫を歸し、隱居達も頻りに何か密々と相談してゐる。邪推の眼からみる故かも知れぬが、總じて何となく騷立ッてゐるやうに自分には思はれた。もしや何か變ッた事がありはせぬかと、油斷無く氣を付けて居ッた。

處が午前十時頃、自分は主人からある些細な用事を吩附られて、小石川富坂町迄行ッてこねばならぬ。行き度く無い。留守の中に夫人がどんな事をされるかも知れぬと思ふと、つく〴〵も行き度く無い。が、自分は食客の身の上。そんな我儘は言ッて居られないので、澁々ながら宿所を出た。

用事を濟して歸ッて來たのは、十二時少し過ぎ。路〱も夫人の事が苦になッて溜らぬゆゑ、少しも早く家に歸りたいと、自分は急いで歩いて來た。

玄關を上ッて、最先に夫人の室を覗いてみたが、別にこれといふ事も無い樣子。自分は少し安心して、主人の書齋に行き、使の返事をそれ〲に話して、もうこれで好いと立上ると、川上貴樣に少し頼み度い事があると突然に主人は言ッた。又かと自分は心に思ひながら、徐ろに頭を上げて、正面からじッと主人の顏を見た。

主人は少し躊躇ッた樣子であッた。『貴……貴樣には氣の毒だが、貴樣も丁度土用休暇だから、學校の

障げにはなるまい。實は奥を。病氣で寢てゐるのに、看病する人も無いのは不憫だから、保養旁々國にやらうと思ふのだが、己れは役所もある事故、とても送ッて行く譯には行かぬ。其故貴樣にはまことに氣の毒だが、送ッて貰ふ譯には行かぬか』

自分はあまりの事に度膽を拔かれたやうな心地。頓には返答も出來かねる。

『勿論貴樣も久し振りで國に行く事だから、十日や二週間は滯在しても苦しく無い。只病人を四十里もある處まで、世話して貰うのはまことに氣の毒だが……』『それは好う御座いますが、奥樣も御承知なのですか』餘程激昂したと見えて、自分はかゝることを、主人の前で言ふのを憚らなかッた。

唯と主人も亦少し躊躇ッて、『奥も承知してゐる……』『御承知ならお送り申しませう』

自分はこの時言ふに言はれぬ怒を心頭に發した。『それでは明朝發足せやうと思ふから、…… 氣の毒だが……』

皆まで聞かずに、自分は、こゝを立出でたが、明朝といふ二字は、心の底に響き渡ッた。

そのまゝ夫人の室に行く。『奥樣、……』呼んで見ても返事を仕ない。『奥樣、……』自分はいよ〳〵床の傍に近寄ッた。『何かなさいましたか』

言懸けて顏を覗くと、返事を仕ないのも無理では無い。悲哀に胸が一杯になッたと見えて、涙を兩眼からはら〳〵と落す。『奥樣、明日お國へお歸りなさいますッて』

されますよ』

自分もほと〳〵泣聲になッた。すると夫人は涙を搔卷の袖に拭ひながら、『孝様、私は。無理に國に歸この悲しい一語に、自分は最早涙を押へきれなくなッて、霰のやうに落るのを自からふり拂ッた。自分は一種高尙な悲哀を心におぼえた。『おく様。お國へお歸りなさッた方が、却ッて御身體の爲めに、宜しう御座います。こんな薄情な』

跡は言はずに、自分は室へ泣きに行ッた。

* * * * * * * * * * * * * * * * * *

假令それほど睦くは無かッたとて、二年間も一所に連添ッた夫に離れて、四五十里もある國へ追やられる夫人のお心は、果してどんなに悲しからう。それも病氣さへ治れば、歸ッて來られるのなら好いけれど、一度此處を離れては、跡にどんな故障が起るも知れず。まして夫と頼む男は、養父の義理を思はぬばかりか、持參金に目を呉れて、頭取の娘を女房にしやうといふやうな薄情者。嫌といふのを無理やりに押付けて、あのやうに瘦衰へた病人を、四十里五十里とある處まで送歸すほどの人非人。長い留守の間には、叉どの様な不道德をせぬとも限らぬ。先祖からの財產を殘り無く遣ひ果された擧句に、もしもそのやうな事があッたなら、そのときの夫人の心は…………

思へば思ふほど悲しい想像を、人力車が來たとの下女の注意に破られて、偖どうしても今朝は行かねはならぬのか、と思ッて、夫人はどう爲されたかとあたりを見廻すと、他の一臺の人力車に夫人は悲しさうに乘ッてゐて、車夫は今一包の荷物を載せやうとしてゐる。

後を見れば、主人が一寸顏を出してゐるばかり。隱居どもは見送りにも立ッてゐない。

自分は呆れて言葉も出なかッた。夫人を載せた車夫は、一禮していよ〱曳出す。やかて門を出る、四角をまがる。夫人の心は……と自分は又思出して、溢出る淚を手巾に吸はせたが、その儘二臺の車は驀地！

《六》

夫人の故鄕は磐城の棚倉町で、東京からは大凡五十里も有ッて、隨分近いとは言はれぬ田舍ではあるが、東北鐵道が通してからは、一日で往ことが出來るとの事。左ほど難義な旅行でも無い。

自分は上野の停車場で人力車を下り。ふさぎ勝な夫人を親切に世話して、九時何分の二番汽車に乘ッた、汽車に乘ッたならば、夫人の氣分も少しは恢復するであらうと自分は思ッて居ッたものを。王子赤羽と過ぎても、まだはき〱した樣子もみえぬ。見えぬばかりか、時々は汽車の窓から東京の方を振向いて、淚をほろ〱と落すこともある。自分もその心根を思やると、譯も無く悲しくなるが、これでは好く無いと込上げて來る淚を押へて、何の彼のと慰めてゐた。

然るに大宮も蓮田も過ぎて、車の栗橋近くなッたころ、夫人は亦も首を窓の外に出して居ッたが、何か感じたものが有ッたとみえて、自分を振返ッてあれ見よといはぬばかり。何かと思ッて、自分も立上ッてみると、畑の眞中で、ふから〳〵といかにも樂しさうに、煙草をふかしながら、此方を眺めてゐる若夫婦。『あの人達は、……どんなに樂しいだらうね』

轟々とひゞきわたる汽車の音に、分明とは聽き取られなかッたが、夫人はそのやうな悲しい言葉を放ッたので、自分はぞッとしてそのまゝ腰掛の上に腰を卸して仕舞ッた。夫人は又ほろ〳〵と涙を流す。不幸に逢ふと、あんなものまでも、おのれの身に引較べるやうになるのかと、自分は氣の毒で溜らなくなッた。

默ッてゐる中も車は馳る。

數へられぬ停車場もいつか過ぎて、宇都宮に着いたのは、丁度十一時少し過ぎ。準備した辨當を夫人に勸め、自分も亦濟まして休舞ひ、時々過くる山、森、田などに目を樂ませて、東京での出來事は可成言ひ出さぬやうに勉めて居ッた。折角落付いて來た夫人を、また悲ませてはならぬと思ッて。

那須も過ぎ黒磯も過ぎた。最早白川までは何程も無い。あゝもしも途中で病人に變でもあッたらばと、つく〴〵と苦にした昨夜の心配も、これではそれほどの事も無かッたと、自分は胸を撫でた。夫人も亦

故郷に近づくにつけて、伯父伯母の事などを段々に思出して、次第に氣もはき〳〵となる樣子。誰か白川まで迎ひに來てゐて呉れるといゝけれども、夫人は絶えず願ッて居ッた。

やがて白川々々と役夫の呼聲がきこえて、汽車の窓越にちら〳〵と白壁造の停車場も見える。車が止まるのを俟ッて、先夫人を扶け下し、荷物を提げて、自分は跡から車を下りた。

停車場に行ッて見ても、誰も迎ひには來て居らなかッた。

これから棚倉までは六里。人力車を搜して見たが、生憎一人乘が一挺も無いので、據無く夫人と相乘の車を走らせた。

六里の田畝道。まして田舍の車の遲さ加減は、東京の人にはほと〳〵意想外と言ッても好い位。其故二人の話の種も次第に盡きて仕舞ッて、つい東京の事を話し出す。すると夫人も少しは氣が落付いたと見え、おのれの難義、おのれの心配、舅姑の意地惡、夫の薄情などを自から語る。

床に就く前の晩の小言は、まことに些少な事から起ッたので、武雄樣が自分の裁縫の邪魔をする故、邪魔を仕てはいけませぬと叱ッたのが、姑の氣にさはッて、あの樣にやかましく小言を言はれたといふ事。夫が歸ッてから、又散々小言を言はれた上、その樣に母の氣に背いては、妻にして置かれぬと言はれた事。それからは家内中で、私を邪魔にするやうな仕打のあッた事。又昨日は大川までも呼んで、自分に歸國の事を勸め、嫌といふのを無理にも逐出したといふ事を話しながらも、時々その悲しかッた事、口

惜かッた事を思出して、夫人は數滴のなみだをそゝぐ。『あの事は知ッてゐるかしら』不圖悲しい事が自分の胸に上ッたので、自分は俄かに玄ほれ掛けた。『本當に知ッて居らッしやるかしら』

自分は思切ッてそれとなくその事を糺して見たが、夫人は少しも知らない樣子。けれど万更知らぬ事はよもあるまい。万更知らぬものならば、あの樣に國へ歸るのを嫌がる事は無い譯だと自分は考へた。大方おのれの耻になること、胸に包んで隱してゐらッしやるのであらう。殊勝な心中を思やッて、自分は又も淚を催した。

三里ほど來ると、一ッの宿驛がある。其處に夫人の伯父ヽ迎ひに來て居ッた。

（七）

オヤ伯父樣がと目敏い夫人は、最先に其姿を認めた。『お絹では無いか』旗亭の榻に腰をかけてゐた伯父ヽ、人力車の傍に驅寄ッた。人力車は留まる。夫人は下りる。けれど二人は暫時言葉も交さぬ。夫人の眼には早くも累々たる淚をやどした。『大層早かッたな』言かけて伯父はつく〴〵と夫人の痩果てた顔を見詰る。と夫人は淚を拭ッて、『川上樣が御親切にお世話して下さいましたものですから、思ッたより早く』跡は胸が支へて言切れぬ樣子。伯父は又も言葉をつゞける。『お前大層痩せたやうだが、病氣がどうも

好くないか』

『はいと』夫人は涙を呑込む。『おれは又そんなに悪い病氣では無いと思ッた。義雄から手紙が來て、お絹が少々病氣で臥ッて居るが、田舍にでも行ッたなら、氣も晴々して保養にもなるだらうし。久々御目にもかゝらぬ故、十日ばかりお前をよこすとの事故、それはうれしい、早速よこすが好いと返事してやッたら、一昨日、今日來るとの端書があッた。それではこゝまでゝも迎ひにと相談して來て居ッたのだが、そんなに痩るやうでは、嘸々大儀であッたらう。まア緩り勞を休めて、……こゝから家までは二里。もう今一息だ』

さて伯父は更めて自分に挨拶する。道中の世話介抱の禮を、呉々と述べた。

午後三時頃、今一臺車を雇ッて、自分達はこゝを立ッたが、日の暮々に棚倉の伯父の家に安着した。氣の毒な夫人を先安穩に送りとゞけたと思ふと、自分は何となくうれしいやうな心地がする。まして伯父伯母も頻りにいろ〳〵と介抱して呉れるのみか、家の娘までも、何彼と餘念無く慰めてくれるに、夫人も多少は機嫌よさそうに談話してゐるのを見て、自分は夫人をこゝに連れて來て好い事を仕たと心に悦んだ。此處にゐて病氣を養ッたならバ、よもや治らぬ事もあるまいと思ッて。

兎にも角にも一先安心して自分は父母の家に行ッた。

自分の家はこゝから凡そ十町ばかり。左程遠くも無ければ、また明朝と夫人と伯父伯母にも挨拶して、

其夜はなつかしい親兄弟と、樂しい團欒の席を開いた。

翌朝食事を濟してから、病氣はどんな樣子かと夫人の宿所を尋ねて見ると、荷物等も段々片附いたから、奥の離れをお絹の室に仕まえたとの伯母の話。そのまゝ奥へ行ッて見ると、夫人は丁度窓に凭かゝッて、向ふの山々の朝景色を眺めてゐる。成程これは病氣を養ふには至極好い一室。一體この家は町内でも高臺にある搆へで、田、山林などの景色を見るには、適えてゐるだらうと昨日も思ッたが、これほど好い室があるとは思はれかッた。

新綠に包まれた山々が、日の前にいくつとなく突立ッてゐて、東南の方は、山間には珍らしい千畦の田畝が、はる〴〵とつゞいてゐる、その間を數帶の溪川が、さながら亂れた帶のやうにちら〳〵と流れて行くが、折しも上ッた朝日の光に、きら〳〵とかゞやきわたッて、まことに目覺ましく金を碎く。右にあるのは、都々古別の神社。左にあるのは、中伊野の茅屋。前面に横ッてゐる林の中から、少えばかり露はれてゐるのは、積雲寺の敗瓦。朝霧の絶え間から見えるあの長久寺の墓地には、私の祖父が埋ッてゐると、自分は何の氣無しに獨言いた。『おや、あなたのお寺も彼處でしたッけかね。私の父親の墓も彼寺ですよ』『さうですか』

と答へたが、自分は寺の事などをと思ッて、そのまゝ其話は止めて仕舞ッた。

それから病氣の樣子を聞くと、伯父の家に着いたと思ッて、安心した氣の弛みか、昨夜から大層疲れが

出たやうだと夫人自から語ッた。それでは、醫師に見て貰はなくッてはいけませぬと忠告すると、伯父もさう言ッて呉れますから、今日はかゝッて見やうと思ひますとの事。その他別に用も無いので、自分は歸宅した。

一日立ち二日立つ。病氣にも別段これぞといふ變も起らぬ。只日増に少しつゝ、快方に赴くやうな心地がするとて、夫人は喜んでゐる。

それにしても、夫人はあの事を知ッてゐるのかと、又この事が自分の心に絶えず上ッて來た。話して見やうかしら。自分は自分の心に、幾度か相談して見たが、知ッて居るには相違無い。知ッてゐながら、秘してゐらッしやるに相違無い。それを自分が言出すのも、あまり心無い業と、口まで上ッて來る言葉を押へたのは、幾度であッたか。

けれどあの話の虚實は、はッきりと分ッた譯でも無い。嫌がる夫人を無理やりに送歸した。これから考へて見ると、どうも虚談とハ思はれぬが、自分だとて判然とした證據を發見したのでも無いから、今暫く默ッてゐた方がと、その秘密を心に包んで置いた。

又二日立ッた。夫人の容體にはさしてこれぞといふ事も無い。醫師も幽鬱病の事だから、さう急には治らぬが、變さへ起らずに月日を過したなら、追々全快するであらうと言ッたとの話。かくてはこちらにそれ程心配する事は無い。が、東京では……留守中にどんな事を仕てゐるか。もしやひよッとしてあの

事が。かう思付くと、氣になッて〳〵、果ては一刻も堪られなくなッた。

遂に五日目の朝、自分は明朝を以て東京に歸ることに一决した。

《八》

其日の夕暮、用事旁々暇乞にと自分は夫人の宿所へ行く。これで暫くは逢はれぬのかと思ふと、何故かしみ〳〵と悲しく成ッて來るが、いづれ亦病氣が全快して、目出度く歸るときをと、自から心を慰めてゐた。

明日自分が東京に立つといふので、夫人の伯父伯母等に、土産物だとか手紙だとか、何の彼のとやかましく相談しているらしい。けれど、自分は別段その方に關係も無いから、そのまゝ直ちに夫人の室へと這入ッた。

這入ッて見ると、いつも寢てゐた例の無い夫人が、今宵に限ッて臥床の上に横ッてゐる。はッと思ッて、御病氣が好くありませんかと最先に尋ねると、『否……』と微かに言ながら、夫人は臥床の上に座ッた。まだ洋燈をつけないので、好くは辨らなかッたが、夫人は確かに泣いて居ッたに相違ない。『それでも今日に限ッて臥床などをお取りなすッて、何處か御氣分でも宜しくありませんですか』『否……何處も氣分の悪い事はありませぬが、今少し寒くありましたから、それよりも、貴郞は明日いよ〳〵お歸りなさるッて』

末の一句は、何となく悲しいやうに自分には聞取られた。『え、もう五日にもなりますし、東京にもいろ〳〵心配になることも御座いますから』

言懸けて自分は夫人の顔を見た。『さうですねェ、折角の御勉強中を。いろ〳〵とお世話を願ッて、お蔭様で近頃は病氣も好くなりました』『いえ何も行届きませんで』

と挨拶を仕て、『それにしても奥様御病氣は幾重にも御大事になさいまし。御大事にさへなされば、最早直きに治ると師醫も申したさうですから。成たけお考へごとなどはお止なすッて。何でも氣丈夫に思ッてゐらッしやるのが何よりも藥……』『本當にね。孝様。私も隨分苦勞性で、考へるといろ〳〵お取越苦勞を致しますが、もう私も考へても仕方がありませんから。何も考へませぬのさ』『何でもお心を大きくお持ちなさッて、一刻も早く御全快の上、一刻も早くお歸なさるやうに』

言葉半分を夫人は遮ッた。『けれど孝様、私ほど不幸の者が又と世の中にありませうか』

自分もこれには答へかねる。『女は三界に家無しと諺にも申しますが、私のやうに自分の家を追出されては』『奥様、そのやうな事はお考へなさいますな。そのやうな事をお考へなさると、お身體にもよろしくありませぬ』

自分はそのまゝ首を低れた。『それでは。愚痴は。もう申しますまい』と夫人は涙ながらにうつ伏して仕舞ふ。

折から椽側を歩む足音がきこえたとおもふ間も無く、家の小さい娘が、洋燈を點けて持ッて來た。あたりの有樣を見て、暫く怪訝な顏を仕て居ッたが、やがてそれを座敷の眞中に置いたまゝ出て行ッた。

夫人は顏を上げた。自分は明らかに夫人の顏を見た。顏は蒼ざめ、眼は脹れ上ッてゐる。

『けれど』と夫人は亦微かに言葉を續けた。『貴郎の御親切は死んでも決して忘れませぬ。東京にゐる時分から、何彼と御心配下すッても、その甲斐も無くッて、嘸お快よくはありますまい。これも皆私が不束故で』

堪かねて自分は傍を向く。『加之、伯父樣や伯母樣にまで、御心配をかけて、本當にすまぬと私はつく〴〵と考へました。又東京の事を思ふと、私や父親のお位牌にも顏は向け……られませぬ。せめて。母樣でもちやんとしてゐて下さると、少しは力になッても下さるだらうけれど』

一時に込上げて來る悲哀を押へかねて、夫人はひた泣に泣出すに、自分も今は慰むる手段が盡きて、低頭いたまゝ一言の言葉も無い。

暫時立ッた。

自分は漸く思返した。今からそのやうな取越苦勞をと、幾重にも慰めて見た。が、その悲哀は深く夫人の腸に嚙入ッてゐると見えて、中々心を取直す樣子も見えぬ。

困ッてゐる處へ、折よくも此家の伯母が這入ッて來たので、夫人は淚を匿さうとしたが、更に又悲しく

なッたのか、其儘後向になッて、忍び音に泣いてゐる。『お絹はまた何か取越苦勞を仕て、泣いてゐるのかえ。本當にそれだから、病氣が治りッこはありやしない』がみ〳〵と言放ッて、夫人の傍に行き、お前はそんな事では仕方が無いでは無いか、と思ふ存分諫められて、夫人はやう〳〵に涙を收めた。

この伯母は夫人の父親の妹で。夫人の幼稚い頃から、何彼と親切に世話をしたので、今も自分の子のやうに全く思ッて居ると見える。

この伯母の快活な話に、遂誘はれて、夫人も寂しい笑顔を見せるやうな話をつゞけたが、伯父か少々用があるといふので、自分は暫し此處を去ッた。

種々の用事を仕てゐるうちに、夏の夜は間も無く更けた。長久寺の十時の鐘が、遙かに山々に響きわたッて、谷川の音がいとゞ耳につくほどに、世間は靜になッた。明朝は拂曉に家を發たうと思へば、御目にかゝッてゐる譯には迚も行かぬ故、今一度夫人にお暇乞をと自分は立上ると、彼は苦勞性で困るから、餘り悲しい事などは言ッて下さるなとの伯母の賴み。

承知して奧に行き、閾の處から聲を懸けて、『奧樣、それでは私はお暇を致しますから。お病氣をお大事に。又いづれお迎ひには私がまゐりますから』『孝樣。いよ〳〵、それでは歸るかへ』

夫人は床を離れて、自分の傍に來た。『お名殘が惜いけれど、いつまで居ても限りがないからね。家に

歸ッたら、皆樣に宜く申して下さいよ』『貴郎も御丈夫で御勉强を……』『はい……皆樣にも宜しく申上ますが、奥樣もお身體をお大事に……』

心を鬼にして、自分は暇を告げた。

跡には、夫人のかなしげにすゝり泣く聲がする。

《九》

翌朝ゝのゝめに自分は棚倉を立ッた。夫人の宿所の屋根を、車の上から見えなくなるまで見返ッたが、まだ誰一人起きたやうな樣子も無かッた。

入野橋を渡ッて坂にかゝると、夏の曉の習はしで、一間先も見えぬ程朝霧が深く立籠めて居る。山も見えぬ。町も見えぬ。田も、森も、何一ッ眼界に觸るやうなものも無いが、折々遙か遠くで、犬の吠ゆる聲、鷄の啼く聲。果ては一種名狀せられぬ、牛の長吼も聞えて來る。坂を下りながら、不圖首を上げて見ると、自分の頭の上に、霧の少しく薄らいだ間から、弓形の殘月がいかにも物淋しく懸ッてゐた。

自分はこの時ぞッとして、何となしに悲しく成ッた。何となしに淚がこぼれた。何となしに後を振返ッた。

* * * * * * * * * * * * * * * * * * *

自分が東京に歸ッてから、もウ一月にも程無くなるが、只一度端書の音信があッたばかり。其後引つゞいて、夫人の病氣が好いのか、または惡るいのか、詳しい音信は一度も無い。けれど音信の無いのは、變ッた事が無いからと思ッて、別段それほどの心配も仕なかッた。

又東京の留守宅でも、一寸〳〵と怪しく思はれる事はあるが、思ッたやうな薄情な仕打も先無かッたので、自分も以前のやうに烈しい惡感情を抱かなかッた。

すると、驚くまいことか。九月の十一日の夜に、棚倉から電報といふ騷ぎ。封を切る手も遲しと、披見した主人からきけば、絹事病氣危篤との簡單な一言に自分はほと〳〵狂して仕舞ッた。

いくら薄情でも、おのれの妻の病が危篤といふ報に接しては、取るものも取敢へず、出立するだらうと思ひの外、偖も主人の氣の長さ。一日二日經ッてから、のそ〳〵と旅行三昧！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

主人の立ッた日の午後に、又一通の電報！いよ〳〵と自分は心を躍らして封を切ると、十三日の朝、萬事無常。夫人はあの世の人と成ッて仕舞ッた。迎ひに行きたくも、もう行かれぬ。自分ハ聲を擧げて泣いた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

一週間後には、無情の主人も歸ッて來た。夫人の病根を詳しく聞いて見ると、病氣が激して熱病に變し、唯二晝夜の中に、あのやうな始末で、今更どうも據無い。その遺骸ハ十五日の午後二時過に、長久寺へ。あの長久寺へ葬ッたとハ！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其年の冬、自分はかの朋友から、西川義雄の再婚の噂を聞いた。朋友の話は全くの事實で、新婦は矢張某銀行頭取の一人娘。持參金は二萬圓、其他山の手の別莊一箇。西川は性を改めて村山を名乘り、村山義雄は其時から學者仲間の財產家の一人に數へられることになッた。

この話を聞いて、自分は二度と舊主人の門をくゞるまいと決心した。嗚呼自分も、夫人の歿後、西川家に居るのを屑しとしないで、今はこんな汚ない下宿屋の二階に籠城してゐる身分だ。けれど光風霽月、天地に俯仰して、一點の耻る處が無いと思ふと、自分ながら喜ばしさに堪へられない。

それに就ても思出すのハ夫人の一生！幼稚い頃から、姉とも賴み、主人とも賴んだあの夫人が、如何なればとて、あのやうな不運な一生を過したか。自分とは三ッ身の衣着るころからの交情で、いぢめた頑童も自分が追ッかけて泣かせてやッた事もあッた。あの夫人が、今はこの世に居らぬのか。舅姑にはあれほどにいぢめられ、夫にはあれほどに薄情にされた上、二十歲で早世しては、一日と樂しい生活を送

ッたことも無かッたらう。一日も心を休ませることも出來なかッたらう。あゝ浮世は思ふまゝにならぬもの。死ねと思へば百歳までも長命して、死なれてはと思へば朝の露のやうに消えて仕舞ふ。あゝまことに浮世は夢か、この人世は幻か。自分のこの悲哀さへ、たかゞ百年とつゞいては居らぬのでは無いか。只々今も自分の心に氣懸りなは、あの頭取の一人娘との結婚話を、夫人は心に知ッて居ッたか。果して又少しも知らずに歿なられたか。只こればかりが心懸り。月の照る夜、雨のふる夕、流石にその事の思出さるゝ度毎清淨な夫人の性靈が、かゝる悪魔の爲めに惱まされてはゐ玉はぬかと、自分はいつも涙が滴れる。

《をはり》

◉滑稽二人男

骨皮道人

第一回

初めて聞た國會の議事に
びッくりした壯士の詰問

國は何國か更に分らず、作者に分らぬ位なら讀む人には猶更分らぬ筈なれど、知れざるを知れずとして知れた振に御覽を願ふ、とは隨分厄介な笑說ながら、或る旅人宿に滯在して居る二人の呑氣連、(言語は皆田舍訛りなるべきも餘り煩はしければ假に東京の方言を用ゆ)。一人を猫六と呼び又一人は狆九郎と云へる男ありとか、扨て此猫狆の二人は別に是ぞと云ふ當途もなく、只毎日旅人宿の飯を食て、ノラリクラリと瓢簞鯰で日を送る中、一日隣の坐敷で客の話し　甲『どうですねえ今度の國會は』　乙『左樣さまだ國會の初まらない中にハ、國會さへ初まりやア各自に金の千兩づゝも貰ッて、門並銀行でも出來るやうに思ッて居たが、何が扨て銀行が出來る處か、國會が初まつてから以來と云ふものア、其せゐでも有るまいが金融りは段々惡くなるし商賣ハ不景氣、今となつて見ると國會の初まらない時の方が却ッて宜かつたかと思はれますねえ、お負に國會と云ふものア何の稅金でも皆なお廢止にして吳るものかと思ッて居たらどうして〳〵中には是までよりか餘ッぽど高くなつたものも有るぢやアありませんか』

甲『ヘエさうですかねえ、國會〳〵と騒ぎ立て税金を高くされちやア國會先に立ずと洒落ても居られませんねえ』　乙『夫に今度の國會議員は各自に競争してなつたのだから、中には夫が爲め身代を棒に振て仕舞た人もあるさうですが、イクラ國會議員になつたからッて肝心な身代を滅茶〳〵にして仕舞ちやア、詰らない話しやアありませんか』

と頻に國會の話しをして居るを、彼の猫狆の二人が聞て　猫六『オイ狆公、彼處で國會の話しをして居るので思ひ出したが、ナント國會見物と出掛ちやアどうだらう』　狆九『さうよ自己もさう思は無いでもないんだが、併し何樣な都合にしたら行て聽けるだらう』　猫六『どんな都合も斯樣な都合もあつたものぢやアねへ、木戸錢せへ持て行やア誰が行たッて立派なお客樣だ』　狆九『馬鹿ア云ひねへ、寄席や芝居ぢやアあるめへし、國會を聽に行のに木戸錢が入るもんか』　猫六『イヤに兄ィ振た事を云ふぢやアねへか、夫ぢやアどうすりや宜のだ』　狆九『造作もねへ事だ、夫やア何よ、何すりやア宜のだ、エヽト何よエヽト自己にも矢張り知れねへ』　猫六『夫れ見ろ、知れ無きやア默止て居れば宜に、何ぞと云ふと人の事を馬鹿だの何だのと生意氣に……』　狆九『マアサ其樣に脹れッ面をするものぢやアねへ、朝ッ腹から延喜の悪い、兎に角宿の亭主に聞て見やう』

と亭主に就て種々樣子を尋ねて見れば、議會を傍聽するには議員の中に手蔓が無ければ議場へ這入事は出來ず、夫に又た着物も洋服で無げれば行ぬとの事に、二人は殆んど閉口したが、其處は萬端亭主に賴

んで其手續きに運んで貰ひ、猶ほ出來合ひ洋服などを買ひ來りて、何にか斯にか牛乳の配達人位の身支度も出來上りたれば、意氣揚々として國會の議事堂へと押出したり、折から議事の眞際中にてズラリと列んで二百人以上の議員、議長は羅漢中のお釋迦樣然として正面に椅子を占め、其横手には委員あり書記あり、傍聽席には數百人の老若が天窓を揃へてゴタ〳〵と騷いて居る、其體裁を遠くより望めば、恰かも西瓜畑の當り年か下手畫工に於る米點の山水の如し、時に鬚の中から顏を出したやうな一人の議員が

甲『議長……本員は緊急の動議があります、議長……緊急の動議……發言を……』乙『無用〳〵、默止〳〵……』丙『馬鹿……馬鹿……止せ〳〵……馬鹿野郎……』甲『ウンニヤ無用でない、默止らない、如何なる動議であるか未だ其何事たるを聞ずして、漫りに無用の辯を强るは失敬ぢや……議長……緊急の動議……』丁『無用〳〵、止せ〳〵』甲『議長緊急の動議……』議長『七十八番何尾勇造君、緊急の動議ならば成るべく簡短に……』甲『本員が緊急の事件として、議長より特に發言の權を得たるは決して餘の儀ではない』乙『餘の儀ではない……宜しい、分ッた〳〵モウ宜〳〵』甲『已に議長並びに滿堂の諸君も御承知でありませうが、此頃この議場の亂れて騷々敷事は、恰かも火事場へ野次馬の飛込たるが如きの有樣であります』丙丁『ノウ〳〵〳〵、馬鹿野郎……頓痴奇……瓢ッ床ウ……默止……………素ッ近で居ロ……』戊『無用〳〵、囈言を吐べからず』甲『アレ彼の通りであります、本員は曾て歐米各國の議會を傍聽した事もありますが、佛國にせよ英國にせよ、或ひは亞米利

加の如き獨逸の如き、何れの國何れの地と雖も議場は皆な靜肅にして、斯く火事場の如き事はありません、夫れ我々は幾萬の人民を代表すべき重任を帶ながら、此の如き議場の體裁にては我々を杖杜と賴んで居る、彼の幾萬の人民は我々を目して何と云ふでありませうか、必らずや賴み甲斐なき議員である、實に賴み甲斐なき代議士であると云ふでありませう』　丙『分ッたく、モウ宜しい、下手の長談議、馬鹿野郎引ッ込メ……』　甲『否な人民が賴み甲斐がないと思ふのみならず、他の文明國に對しても實に恥べきの至りであらうと考へます、古人曰く其本亂れて末の治まるものはあらずと、夫れ然り、凡そ議事を整頓せんと欲すれば、先づ議員の品行を改ためるの方法を設けるのが第一の急務であらうと考へますから、本員に同意の諸君は宜しく此の整理法を設けられん事を希望いたします』　議長『七十八番の動議は贊成の人がありませんから議題と成りません、ソコで百三十五番議員より本日の議事日程に就て發言の申し込みがありますから是より本題に移ります……百三十五番尻馬乘太君』

議長より許可を得たるの尻馬乘太は、得たりや應と演壇に突ッ立ち、尻馬乘太『本員は此の原案に對して充分に意見を有する者である、即ち海軍と陸軍とを比較して、何方が重いか何方が輕いかチウと、海軍も重けりや陸軍も重い決して輕重の別はないぢや、ぢやから國に海陸軍のあるのは、譬へば人にして左右の手あるが如く二本の足あるが如く、猶ほ車の兩輪鳥の双翼に於るが如くである、故に世人動もすれば富國強兵チウぢや、成るほど富國強兵は本員も希望する所である、希望する處ではあるが、國をして

富み且つ强からしめやうチウには、宜しく其方法と順序とを得んければ是が好結果を奏する事は出來ん、ぢやで其好結果を得やうチウには、第一殖産興業を盛んにして輸入を防ぎ輸出を計るのが今日の急務ぢやらうと考へる』

原案は如何なる箇條か知らねど、一人の議員が頻に海陸軍の効能、及び之を盛んにするの順序方法等を演説すれば、其傍らより或ひはヒヤ〳〵と呼ぶ者あり或ひはノウ〳〵と叫ぶ者あり、傍聽席の者には何が何だかサツパり聞取れざれど、彼の猫狆の二人も、人がヒヤ〳〵と云へば己れもヒヤ〳〵と云はねば成らぬものと思ひ、人がノウ〳〵と云へば矢張りノウ〳〵と云はねば成ならぬものと心得、恰かも芝居の聾棧敷から舞臺の役者を譽るが如く、根限り有りツたけの聲を出して、無暗にヒヤ〳〵ノウ〳〵と出鱈目に吐鳴て居りしに、同じ傍聽席に居た書生體の若い男が突然猫六の傍へ來り、壯士『僕が先刻から聞ちよると、君は頻にノウ〳〵チウとるが、何で彼の議員の說に不同意ぢや、ノウ〳〵チウには定めし其理由があるぢやらうから、其理由を聞かう』

と突然に詰問されて猫六は膽を潰し、猫六『何だか知らねへが、皆ながノウ〳〵と云ッてるから、自己も其眞似をしてノウ〳〵と云ッたんだが、全體お前さんの云ふ何だか小六ケ敷事は自己にやヤ些と分らない』壯士『これは意外な答辯ぢや、苟くも政治思想を有して此議事を傍聽しやうチウ者が、ノウ〳〵の何たるを知らずして只人の眞似をしたチウは、餘り人を輕蔑した答辯ぢや、猫六『辯當か何だか何が

いやしいのだか知らねへが、何てッたッて知らねへんだから仕方がない』

狆九郎も何が何したのやら頓と其譯は分らねど、何に致せ只々謝罪さへすれば宜からんと、小腰を屈めて頭を掻きながら、　狆九『エヽ夫が何なんで御せへやして……夫がマア抑々元來一體全體……旦那もお腹が立ませうが……エヽ是は自己の友達でげへして……エヽ夫だもんですから其處はマア大目に見て下さる樣な譯で……ねへ旦那さうぢやありません』

其云ふ處少しも辻褄の合ざれば、壯士は己れを愚弄すると思ひて益々猛り立ち、　壯士『イヤさう云ふ君もノウ／＼チウた反對者ぢや、ノウ／＼チウには定めて確乎たる論旨もあるぢやらうから、サア其說を述たまへ僕がお相手にならう』

と飛でもない奴に揚足を取られてグウの音も出ず、只壓氣にとられてマゴ／＼して居る、傍らの人々ハソレ喧嘩が初まつた決鬪を申し込だと立騷ぐ折から、傍聽席取締りの役員とも覺しき人が夫へ來りて別段その理由をも正さず、　役員『議事の妨げと成ります、退場なさい』

是ぞ所謂る鶴の一聲、彼の壯士は勿論猶六狆九郎も亦た遂に門外へと放逐されたり。

第二回

小學校の參觀に失策を招ひた
女生徒の一口評

何事も金が敵きの世の中よどうか敵きにめぐり逢ひ度、個は是れ何人の詠じたる狂歌なるか、昔しも今も變りの無きは金の威光、金さへあれば何ぞや一文の乞食も旦那樣と尊ばるゝを得べく、金が無ければ乃公が〳〵の旦那樣も乞食となつて卑めらる、然れば彼の千両幟のおとわが稻川の爲に身を賣しも金の爲め、與市兵衞が命を取られしも亦た五十兩の金の爲あり、若し紀文をして一文なしの貧乏人たらしめば大門を打の贅澤ハ思ひも寄らず、若し仙臺侯をして其日暮しの貧的に生れさしめば高尾を殺すの我儘も出來ざるべし、近來の流行詞に權力よりハ金力と云ふも尤もなる哉、閑話休題彼の猫狆の二人も其腦髓を直踏すれば、宛然ら天保錢と同樣、身體の見て呉ハ十人並より立越て居れど、大男惣身に智惠が廻り兼ね、實際の正味ハ漸く八厘にしか通用しない男なり、然れども如何なる譯にや少々ばかり〇助を持て居て旦那〳〵と煽動られる處から、本人もイヤに獅子ッ鼻を勃起て毎日彼方此方をほつき歩く中、フト通り掛りたるハ小學校の門前なり、折から放課の時間と見へて敎師は大勢の生徒を前に立せ、

敎師『一……二……三……四……五……』

と號令を掛つゝ體操をさせる樣子を見て、　猫六『オイ〳〵狆公マア來て見ねへ、子供が大勢で踊つて居らア』　狆九『何だか間の拔た踊りだなア、奥の方で彈てる三味線たア些とも調子が合ねへぢやねへか』と二人ハ物珍らしさうに、ワングリ口を開て見て居れば、傍に居合せた一人の人が、　某『あれはお前さん踊りを踊つてるのぢやアありません、學校の生徒が體操をして居るのです』　猫六『へーさうですか

○○○○ヽタイソウ能く踊りますねへ』　某『それから奥の方で三味線見たやうな聲の聞へるのハ、彼りやア唱歌と云ふものを謠つて居るのです』　猫六『シヤウカなア』　某『アハヽヽヽお前さんハ何でも洒落の挨拶だねへ、然してお前さんハ未だ學校を知らないのですか』　猫六『ナニ噂にやア聞て居るんですが未だ見た事はわりません』　某『何處の人だか知らないが、今はモウ赤ン坊でも知ッて居る學校を知らないたア隨分野ン氣な人ですねへ、夫れぢやア校内へ這入て見せて貰ッたら宜でせう』　猫六『見せて呉れませうか』　某『見せますともねへ、彼の洋服を着て居る先生に頼めば直に見られます』　猫六『然して木戸錢ハ何程とります』　某『木戸錢なんざア一文も入りません』　猫六『夫おやアお茶代ハ……』　某『茶代も入りません』　猫六『然ッて萬更只と云ふ事もありますまいが、夫ぢやア中錢を取るのですね』　某『へヱヽ中錢も入りません皆な只で見られます』　猫六『へー只ほど安いものアありませんねへ、夫ぢやア這入て見ませう……オイ狎公此處も只で見せるさうだから何樣な事をするか這入て見やう』　狎九『見るハ一時話しは萬古末代、何樣なものだか御見物仕つらう……ヤイ猫六其方に案内を申しつける』　猫六『何を云ッてるんだ狂人野郎が……』と常談を云ひながら校内へ這入り、敎へられた通りに彼の敎師の傍へ行て小腰を屈め』　猫六『ヱヽ學校を一ッ見せてお貰ひ申し度ッて參りました』敎師は此男を世話役の處から寄越た職人と思ひて、　敎師『アヽお前さんは何かね、彼の世話役の處から

來たのかね……彼處に小使が居るから……』 狎九『それ見ろ矢張り只ぢやァねへや小遣ひ錢が入るのだとよ』 教師『能く小使に案内をして貰ッて方々を見て下さい、第三室の屋根も漏るし、教員扣所の壁も此間の風で大層破損で居るし、其外まだ五六箇所も直して貰ハねば成らない處があるが、兎に角マァ彼處へ行て能く見て下さい』

と案に相違した挨拶に、 猫六『ナニ自己等ハ其樣な處を修繕に來たのぢやァありません、只學校の中が見せてお貰ひ申し度んでして』 教師『なるほど夫では彼處かの學校が新築になるに就て、雛形を取に來たのだね』 猫六『イエ何も取に來たのぢやァありません』 教師『是ハ分らない人だ』 猫六『お前さんも分らない人だ』 教師『これハ困ッた』 猫六『自己も困ッた』 狎九『何を云ッて居るんだ……エヽ實の處此奴子は少し拔作の方でして、お負に此節ァ陽氣の加減で餘ぽど狂の字なんですから……』 猫六『オイ〳〵常談云ッちやァ行ねへせ』 狎九『マァサ宜から默止て居たまへ……ですから彼樣な分ねへ事を云ッてるんですが……實ハ彼の大勢の餓鬼め等が何樣な事をするか夫が見せてお貰ひ申し度んでして』 教師『如何樣それでヤット分解た、夫では參觀に來なさつたのだね』 狎九『ヘー三貫錢を出しますので……』 教師『お前さんも矢張り分らない人だ、併し夫でも授業法を參觀し度とは感心だ、夫ぢやァ私しの行く方へ附てお出で』

と教師が先に立て案內を爲し、先づ幼年生の室へ入れて、 教師『彼處の參觀席と書てある下の臺へ腰を

かけて見て居なさい、夫から又た外の授業が見度と思へば何處へ行て見ても宜しい』

と誠に親切に敎へられしゆゑ、二人は其通り腰をかけて見て居れば、敎師は一枚の圖を掛て生徒に向ひ、

敎師『これは何でありますか知ッて居る人は手を擧て……』 猫六『何だ人を馬鹿にして居らァ、彼の位な物ァ誰だッて知て居なくッて、彼やァ大根だァ……ソレ手を擧ろ〳〵』 狎九『右の手か左の手か』

猫六『何方だか分らないから兩方の手を擧ろ……ソーラ此通りだ』 狎九『何だか欠伸の稽古でもする樣だなァ』 敎師『モシ〳〵參觀席で其樣なに手を振廻したり何かしては行ません、靜にして參觀成ない』

猫六『此奴ァ大失策、只見て居て宜のなら其方が餘ぽど樂だ』 敎師『中村さん其樣なに横ッちよへ出しては行ませんズット斯う先直に擧るのです……小林さん其樣なに人の頭を打たり何かしては行ません……皆な手が擧りましたね、夫では遠藤さんから云ッて御覽なさい』 生徒『夫はダイコです』 敎師『其の次の中村さんは……』 生徒『夫はダイコンです』 敎師『さうです是は中村さんの云ふ通りダイコンですダイコではありません……夫で此大根と云ふものは何處な處に出來る物だか知て居る人は手をあげて……井上さん知て居るなら云ッて御覽なさい』 生徒『畑の中へ作る物です』 敎師『左やう畑に作るものです……さうして是はどうして食ますか、近藤さん云ッて御覽なさい』 生徒『煮たり燒たりして食ます、』

敎師『その次の窪田さんは……』 生徒『煮たり漬たりして食る物です』 敎師『さうです是は煮たり又た漬物にしたりして食る物です、近藤さんは燒て食ると云ひましたが燒ては食られません』

敎師ハ野菜物に就て頻に其の性質と効用を敎へて居る、猫六『なんだ面白くもねへ、是やア八百屋の餓鬼を敎へて居るんだ、モット面白い軍人か何かの子供を敎へて居る處へ行て見やう』卯九『さうサ大根が畑に出來て夫を羨て食ふ位な事ア赤ん坊だッて知て居らア、何か斯う藝者屋の子でも敎て居る處を見度もんだ』

と丸で見當違ひの事を云ひながら、其處を出て隣の敎塲へ這入て見れば、此處は今作文の時間と見へて、敎師は其文法を說明して居れり、敎師『手紙と云ふものは口で云ふ代りに文字を書て遣るのですから、別に理屈ヶ間敷事を書いたり六ヶ敷文字を用ゐないでも、只其の用向さへ足れば宜のであります、尤も先方の人が理屈でも六ヶ敷文字でも差支へなく了解る人ならば何でも宜やうなもの丶、若し先方の人が碌々分らない人であつた時には、折角用向を足さうと思ッて遣た手紙が何の役にも立ないやうな事が出來ます、然から遠方の人に遣る御無沙汰尋ねか何かなら益々御機嫌よろしくと書も宜し、時候の挨拶を書のも宜しいが、ツイ目と鼻の先の近所の人や毎日顔を合せる人に遣のには、別に時候の挨拶も御機嫌宜敷も何にも入りません、只彼れはどうして是は斯してと用向だけの事さへ書ば夫で宜のであります、例へば一寸口で云へば『このあいだお頼み申しておきました事は如何なりましたか一寸お聞せ下さい』と云ふのを手紙に書けば『此間御依賴申し置きし儀は如何相成し哉一寸御知らせ下され度し』と斯う書ば宜のであります、ソコで今文題を出しました『注文品の相違を問合せる文』と云ふのを私しが此處へ

口で云ふ通りに書ますから之を手紙の文に直して御覧なさい』
と教師は白墨を取て塗板に向ひ『せんトつ、注文を致しました品が、今日届きましたから、調べて見ました處、色々違ッた品物が交ッて居りますが、是は何かのお間違ひではありますまいか、一寸お問合せ申します』 教師『此の言葉書を成たけ短く、手紙の文に書て御覧なさい』
教師は一生懸命に生徒を教へて居れども、參觀の猫狆は空吹風、 猫六『あの初ッ端から三番目に居る女の子は頗る附だ、今に刃物持ずに人殺しと云ふ別嬪になるぜ』 狆九『ナニ彼よりか、此方のソレ、彼の色の眞黒な狸見たやうな奴の隣に居るのが遙か上等だ』 猫六『手前も餘ぽど茶人ぢやアねへか、彼れよりか未しモッィ其處に居る奴の方がとりものだ』 狆九『ナニさうでない』 猫六『さうで無いものか……そら此方向た……オヤ自己に氣があると見へてイヤに笑ッてやがら……へー今日は……』
二人が頻に女生徒の美醜を評論して居るを教師が聞きて、 教師『先刻から聞て居ると、お前さん達は何だか頻に猥褻な事を云つて居るやうだが、教場で其樣な事を云はれては甚だ迷惑だから、氣の毒ながら參觀を禁ドます』
と忽ち一本遣れて二人は據ころ無く、悄々として其席を立ち、猫六は口の中にて、 猫六『ヘン宜年をして燒餅を燒きやアがらア、人ウつけ面白くもねへ』
此時腕白盛りの男生徒は後を振向て、 生徒『ヤーィざまア見ろ先生に叱られたヤーィ』

第三回

譯も分らぬ癖に　又も飛込む政談の演說會

學校の集觀で又も追拂ひを食た猫狆二人は、別に此處と云ッて目指す處は無けれど、只ポッ〳〵と足の向た方へ步み行く中、フト政談演說會と大書したる立看板を見出しければ、猫六は性懲もなく、　猫六『ムヽ此處に演說會があらア、本日午後一時よりと書てあるから、丁度宜い時刻だ、一寸這入て見やうぢやねへか』　狆九『止せよ藝もない、演說なんぞを聞よりか、阿房陀羅經でも聞た方が餘ぽど面白いや』　猫六『マアさう云つたもんでもねへ、阿房陀羅經は阿房陀羅經よ、演說會は說演會よ、ヱヽヽー恐レーながら勿體ながら、申しあげますお經の文句が、何が何だと尋ねて見たらと來たろ、口から出任せお氣に障らば眞平御免だと來たろ……』　狆九『ソラ夫が阿房陀羅經だ』　猫六『噓言うつけ、是やア演演の假聲だ』　狆九『人を馬鹿にした、其樣な見當違ひをしちやア困らア』　猫六『マア何でも宜からチョ〳〵一寸と……』

と猫六が先に立て飛込みしゆゑ、狆九郎も餘儀なく飛込めば　切符賣『モシ〳〵切符をお持に成りましたか』　猫六『其樣なものア持て來ねへ』　切符賣『夫では傍聽料を十錢ヅヽ戴きます』　猫六『ナニ傍聽料が十錢だと、馬鹿に高へぢやないか、國會でせへ只聞せる位だから、二人で二錢ばかりに負らな

いかなア』　切符賣『そんな譯にやア參りません』　猫六『そんな譯に參ら無けりやア仕方もねへが、夫ぢやア君に此二錢を奉納するから、密と二人を内證で……』　切符賣『そんな譯にやア參りません』　猫六『イヤ＝頑固だなア夫ぢやア仕方がねへ、此樣な處へ引掛つたのが此方の不運だ、十錢ヅッ散財しやうよ』と文久錢やら青錢やらを取交て傍聽料を奮發し、コウ見て呉れ乃公やア十錢のお客樣だぞ、と云はん計りに肩を怒らかして演説場へ這入ば、滿場已に立錐の餘地もなく、皆口ゞに、辯士はどうした、早く初めローヽと例の壯士連中が敦圍あらく騷ひで居る樣子に、二人は薄氣味惡く思へど、先づく障らぬ神に崇りなしと、小身なつて片隅に蹲踞り居りしに、程なくニユッと顯はれたる一人の辯士、僕は下宿屋の支拂ひの爲に演説の前坐を勸めるのだとは腹の中の目算なれど、上邊は金の一萬や二萬位は袂ッ糞に包束て居ると云ふやうな面附をして、先づコップの水をガブく呑み夫から後ろに張出した演題を見て、　辯士『ショく諸君……私しがコヽ今日一席の演説をコヽ試み、以てショく諸君の高聽をワヽヽ煩はさんと欲するものは、ナヽ内閣の責任とダヾ題する一題でゴヾ御坐ります（引込メー馬鹿野郎）ソコで此の一題をベヾ辯ずるには、各國の内閣はイヽヽ如何なる有樣であるかとイヽ云ふ事と、且つ内閣にはレヽ聯合内閣、政黨内閣、セヽ責任内閣の別ある事を辯ずるが、ダヾ第一の必要であらうとカヽ考へます』

と餘ほど急込で辯じかけると、聽衆はドット騷ぎ出し、甲『馬鹿、馬鹿、大馬鹿野郎、引込メー』　乙

『受賣の安物……』 丙『傍聽無料の處へ行て稽古シロー』と種々樣々の惡口を怒鳴り、辯士が一口云はんとすれば、パチ〱〱〱と手を叩き、少しく靜りたるを見て又た饒舌り出さうとすれば、相變らずパチ〱〱と手を叩くゆゑ、辯士はとう〱遣り切れずして壇を下れり、續いて演壇に登りたる辯士は呑湖の洒亞突として突然に、辯士『聽衆諸君は皆な堂〱たる御學者樣で入らッしやいます(ノウ〱)聽衆諸君は皆な充分なる才能智識を有せらるゝ處の御方〱で入らッしやいます(ノウ〱)その御學者樣で充分なる才能智識を有せらるゝ處の諸君の御面前に於て、我々の如き大馬鹿野郎受賣の安物が、然も大枚十錢ヅヽの傍聽料を頂戴して、生意氣にも內閣がどうだの政府の方針がどうだのと、諸君が百も二百も御合點の事を、ペラ〱〱〱と物知らしく饒舌繰とは、是が世に云ふ釋迦に說法、イヤ世の中には隨分目先の利ない鐵面皮の奴があつたもので御坐ります(笑聲起る)處で之を譬へて申せば毎日三度食ふ飯の度毎に、ソレお刺身だヤレ煮肴だと、旨い物ばかりをノベツに食て居た日には、どんな旨い刺身でも煮肴でも、仕舞には頓と旨くないやうに成て、却つて香の物で茶漬を掻込み、芋の煮轉ばしで麥飯を食ふのが旨いと思ふ事も御坐ります(ヒヤ〱)是と同じ事で、諸君は常に上手な面白い演說を聞て居られますから、偶にやァ我々の屁ッ鉾演說も却ッて興味があると思しめして、何か末を御遊樂とお聽を願ひます(落語家の前坐――、ヒヤ〱、ノウ〱)そこで私しが此處に揭げましたる處の屁ッ鉾演題は、議員の一致を望むと云ふ一題で御坐ります、扨て

諸君よ世の諺に三人寄れは文珠の智恵ありと云ふ事が御坐ります、此語たるや何の何兵衛が云ひ出したのでありますか、私しはまだ其の出處來歷を穿索した事もなし、叉た三人寄合て相談をすれば果して文珠の智恵の出るものでありますか、是とても慥な處は存じませんが、併し只一人一個の了簡を以て盆槍然安閑乎として、苦世〳〵と物案ドするよりは膝とも談合、縱ひ木偶の坊同樣な人間ありとも相手があつて相談すれば、其事の早く纏ると云ふ事も無いでは御坐りますまい（ヒヤ〳〵）然れば此三人寄れば文珠の智恵ありと云ふ事も、强がち出鱈目出放題でも無からうと存ドます（ヒヤ〳〵）とは云へ叉一歩退ひて考へて見れば、船頭多くして船山に登ると云ふ事も御坐ります……如何さま僅か一艘の船に大勢の船頭が乘組で、甲は西へ遣れと云ひ乙は東へ遣れと云ひ、丙丁戊己みな各自の勝手に櫓櫂を動した時には、素より櫓櫂によつて動止するの船は、忽ち水面を離れて巍峨たる山上に攀登るかも知れません（ヒヤ〳〵）扨て斯樣に兩方へ理屈をつけて見ると、相談の相手があるのが宜のやら、將た相談相手の無い方が宜のやら、何方がどうだかサッパリ分りませんけれども、要するに三人寄て文珠の智恵を絞り出すのは一致協和の力に富るの致す處、大勢の船頭があつて船を山に登せるのは一致協和の力なきに出るの結果であらうと判斷を下さねば成りません（ヒヤ〳〵〳〵）夫れ一致協和すると協和せざるとの差違よりして、斯の如き反對の結果を顯すものとすれば、世上百般の事物、何事に依らず何物を論せず、一致協和と云ふ事は至極必要な事で御坐ります（ヒヤ〳〵）然れば我々人民を代表する處の、町村會より區

會、市會、府會、縣會、殊に國會の如きは、其議員に於て尤も一致協和と云ふ事を第一にせねば成りません(ヒヤ〳〵、ノウ〳〵)何となれば若しも我々を代表する處の議員が協和せずして、例へば彼奴は我黨でないから彼奴の云ふ事は、其説の善惡に拘はらず、何でも彼でも反對の位置に立て、滅茶〳〵に駁撃して打潰さなければ成らぬとか、或ひは彼奴は全體小癪に障る奴だから、どうかして彼奴の團子ッ鼻をヒン捻ッて遣らなければ成らんとか、オッな處へ力瘤を入れて肝心な議案を翫弄にするやうな事があつた日には夫こそ大變、折角旨く行ふと思ッた船がズン〳〵と山の上へ登ッて仕舞ます(ヒヤ〳〵)さうなッた日になッて見ると我々人民こそ宜面の皮、先づ是で安心した學識經驗ともに倶備した代議士を頼んだから、其人が旨く取計らッて呉るだらうとダラリと伸した翠皺も、前に云た通り船が山の素徹邊へ登るに至りては又候元の木阿彌で御坐います(ヒヤ〳〵)故に議員諸君はよく此邊の事情をお呑込み下されて、三人寄てさへ文珠の智惠あれば百人或ひは二百人寄れば、其人數だけの智惠も出なければならぬ道理ですから、何卒一致協和してお骨折の程を希望致します(大喝采)首尾よく饒舌り負せた辯士は、最も天狗顔して演壇を下れり、　猫六『手前今の演説ァ何の事だか了解たか』　狎九『うんにやァ些とも了解なかつたが手前にやァ了解たのか』　猫六『自己にも本當にやァ了解なかッたが、船頭が智惠を出して舟を山の素徹邊まで漕ぎあげたと云ふ處だけは了解た、然が今の演説で初めて發明した事があるよ』　狎九『何を發明したのだ』　猫六『ナニ外の事でもねへが、彼のヒヤ〳〵ノウ〳〵と云ふ事よ』　狎九『夫れや

ア感心だ、然してヒヤ〳〵てへなアどう云ふ理由だ』　猫六『どう云ふ理由だッて其樣なに安かア致へられねへ』　狎九『イヤニ慾張てやアがら、夫がやア幾許出すのだ』　猫六『錢は出さねへでも宜から、誠に恐れ入り奉りますが何卒御傳授を願ひ上げ奉候也恐惶謹言と云ひねへ』　狎九『人を馬鹿にしてやアがるなア、おやア恐れ入り奉るが恐惶謹言よ』　猫六『ハイ〳〵御傳授申し奉りませう、抑々ヒヤ〳〵と云ふなア水の事よ、水ア冷てへもんだから夫でヒヤ〳〵と云ふんだ』　狎九『なるほど夫からノウ〳〵と云ふのは』　猫六『彼りやアノウ〳〵と云のおやおやアねへ、のむ〳〵と云ふのだ』

折から又た一人の辯士が演壇に登り。我政府には耳目なき歟と云へる演題に就き、先づ商業の不振より金融の閉塞を說き、夫より論旨を一轉して父子の愛情より政府と人民との關係に說及ぼす時、臨監の警吏はット椅子を離れ　警官『辯士……辯士』　辯士『ハイ』　警官『治安に妨害ありと認むるに依て中止を命ドます』

辯士ハ居直りて警官に向ひ　辯士『中止を命ずるとあれば據ろ無い事でハありますが、併し如何なる箇條が治安妨害でありますか』　警官『夫ハ答辯するの限りでない』　辯士『貴官は答辯するの限りで無いと仰せられても、已に治安に妨害ありと認められし以上ハ、必らず其理由と云ふものが無けらにや成りますまい』　警官『素より治安に妨害ありと認めたから中止を命じたのであるが、其理由を說明ハ出來ん』

辯士『なぜ理由の說明が出來ませんか』

と茲に警官と辯士との間に一場の爭論が初まると、聽衆の中の彌痴馬連ハ面白半分にワイ〳〵と騷ぎ出し、辯士シッカリしろと云ひ、或ひハ張倒せ撲り付ろと怒鳴ものもある中に、猫六の隣に居た兵子帯の書生さんハ、自介に喧嘩でも仕掛られたやうに、腕捲りをして拳骨を固め、サア來い僕が相手だと威張て居りしが、どうした表裏にや猫六の頭へポカーンと一ッ拳骨が飛で來たから、猫六ハ膽を潰して、

猫六『オヽ痛へ〳〵、此野郎何をしやァがる』

と此方も腕捲りをして突立てハ見たが、先方ハ名に負ふ側の壯士、殊に雲を衝ばかりの大の男なれば、猫六の拳ハいつしか萎てグニャ〳〵〳〵其中今度ハ狆九郎の横ッ面へもポカーンと一ッ喰はされしゆゑ、狆九郎も亦た吃驚仰天　狆九『オヽ痛へヽ、是奴ァ堪らねへ』

云ひ合さねど兩人ハ、ソレ逃ろ飛出せと碌々履物をも穿ずして、ヤット負せのドッコイショと命から〴〵逃出したり。

第四回

重疊裁判の傍聽で
放逐丁度三回目

演說會で圖らずも、頭と横ッ面を毆り付られたる兩人ハ、重ね〳〵の失敗を取りながら旅の耻ハ搔棄と、旅宿へ歸りてハ素知らぬ顏付、ソレ茶を持て來い按摩を呼べと虫同樣の女等に、威張り腐ッて其夜ハ寢

しが、翌日も亦た朝早くより起出て、今日ハ何方へ行かん彼處へ行かんと、鼻を揃へて相談最中、表に聞ゆる新聞の賣聲、　賣子『エヽ是れ今日發兌にありました社會新聞……エヽ本社特別の大勉強、本紙同樣の大附錄が附て代價は例もの通り……エヽ是は今日發兌の會社會　新　聞』　狎九『オイ新聞屋ア一枚買て遣らう、何程だ』　賣子『一錢五厘で御坐います……今日ハ本社の大勉強で本紙同樣の大附錄が附て居ります』　狎九『附錄なんざア入らないから本紙だけを一錢に負て置きねへ』賣子『一錢にハ負りません』狎九『ケチな事を云やアがるなア、只た五厘バかし何方どう成たッても宜ぢやアねへか』　賣子『只た五厘ばかしですから旦那の方で出して下さいな』　狎九『夫もさうだ、宜しい、ソラ是が一錢よ、エヽト五厘錢がないからモウ一ッ一錢出して是で釣だ』　賣子『ヘイ有がたう、私しの方にも生憎五厘錢がありませんから、どうか是で御勘辨を願ひます』

と賣子ハ釣錢を出してスタ〳〵と逃行ぬ、跡にて能く〳〵見れば青錢に文久錢一ッ、　狎九『人を馬鹿にした、難の艱のッてどう〳〵一錢六厘五毛に賣付て行きやアがつた……エヽ何だと、政黨の分裂ハ我黨の希望に非ずカ、政黨だか金米糖だか知らねへが、此樣な屁痴理屈ハ何が何だか分アらナーイと……エヽ夫から雜報と御坐ッて、小說と御坐ッて……』　猫六『なんだ手前ハ新聞を讀むのぢやアねへ勘定するのだ、どれ〳〵自己に見せろ』　狎九『見料ハ何程出す』　猫六『マア宜テー事よ、代ハ見てのお歸りだ、イヨーなるほど旨く字が並んで居らア、是やア何だ姑の嫁いびりか、極ッて居らア、夫から投身か、

馬鹿な奴だ、其次ハ死人に口なしと、エ、重罪の公判か、此野郎何か悪い事をしやアがつたな、ざまア見ろ……エ、豫て〳〵本紙に記載せし記載せしか、強盗エ、強盗金尾取助の公判ハか、エ、いよ〳〵エ、いよ〳〵本日重罪〳〵裁判所に於てが、開廷せられ〳〵辯護人ハ口崎輕之助氏なる由……オイ狆公今日ハ裁判所で泥坊の調べがあるとよ、行て見やうぢやねへか』 狆九『さうサ芝居の泥坊ハ見た事もあるが、眞物の泥坊テーものア見た事がねへから、どんな面をして居やアがるか見てへもんだ』 猫六『夫ぢやア直に出掛るとしやう』

と是より兩人支度もそこ〳〵にして旅宿を立出で、彼方で聞き彼方で聞き此方で尋ね、ヤットの事で重罪裁判所の門前に至り、狆九『ソラ此處だ〳〵泥坊が珠數繋がりて居らア』 猫六『嘘言をつけ、イクラ裁判所だッて其樣なお泥坊ばかし居てたまるものか』

と二人ハ常談を云ひながら、ツカ〳〵と門を這入れバ、門衛『コラ〳〵何處へ行のぢや』 狆九『ヘイ泥坊を見に參りました』 門衛『ナニ泥坊を見に來た、可笑な事を云ふ奴ぢや、夫ハ監獄と間違ふて居るぢやらう』 狆九『イエ重罪裁判所を新聞に書て御坐いました』 門衛『なるほど夫でハ泥坊を見に來たのぢやあるまい、重罪裁判の傍聽に來たのぢやらう』 猫六『左樣その通り序にお手の筋……』 門衛『何を云ふのぢや失敬な、傍聽に來たのなら傍聽願ひを書て來い』 猫六『ヘー傍聽願ひたア何樣な事を書て來るのでせう』 門衛『此處に雛形があるから此通り書て來れば宜のぢや』 狆九『オイ〳〵猫的イ、見るのな

ら宜が傍聽と來ちやア少し考へものだぜ』猫六『ナゼ考へものだ』狆九『だッてマア考へて見ねへ、先第一國會の傍聽ぢやア喧嘩を賣掛られて撮み出される、演說會の傍聽ぢやア頭を張倒されたぢやアねへか、二度ある事ア三度テーから今日ハ何樣な目に逢ふか知れねへ、然から自己ア見るんだから宜が傍聽と來ちやア鼻平だ』猫六『さう云はれて見りやア自己も何だか心細くなつて來たが、兎に角一寸聞いて見やう』

と猫六ハ再び小腰を屈めて門衞に向ひ、猫六『エヽ早速ながら申しあげ奉るやうな譯なんで御坐り奉りますが、今日傍聽を致しますと、例の通り頭ポカンの橫頰ッ頰ピシヤンの追出されと云ッたやうな事に相成奉るの御坐り奉りませうか』門衞『蒼蠅奴ぢや、誰が其樣な亂暴な事をする、何でも宜から只神妙にして聽て居れば宜のぢや』猫六『オイ狆公、只神妙にして聽て居れば宜のぢやと仰しやる』狆九『なる程さう仰しやり奉りやア、自己も安心奉て這入て見やう』

と總て門衞の差圖通りにして扣所に待居れば、頓て開廷の時刻となり、他の傍聽人と共に公判廷へ呼込まれ、彼の腰掛に欠伸をして居る中、裁判官を初め陪席判事撿察官等の席も定まり、夫より呼出しの聲と共に强盜の金尾取助並びに辯護士口崎輕之助も出來り、形の如く裁判官の前に扣へたり、猫六ハ之を見て』猫六『イヨー彼奴が泥突か、芝居の泥坊たア丸ッ切り大違ひだ』狆九『さうサ矢張り眼玉が二ッあつて口が一ッしかないや』猫六『眼玉が三ッありやア化物だ』押丁『コラ靜かにせんか』狆九『ソラ

〳〵初まつたツ〳〵』
裁判官ハ被告人を眼下に見下し、判事『其方が金尾取助か』取助『御意に御坐ります』判事『其方ハ處々へ押入て多くの人を惱せしのみならず、金錢衣類等を強取したる趣むき、夫れに相違ないか』取助『恐れながら申しあげます、私しハ盜賊を致した覺へハ御坐りますが、人を惱し金錢衣類等を強取するなどと申す事ハ更に御坐りません』判事『夫でハ豫審廷の申し立とは大ゐに相違して居るやうぢや』取助『豫審のお調書にハ何と書て御坐りますか存じませんが、只今申しあげまする通りに相違御坐りません』判事『如何なる事より致して左樣なる不良心を出したのぢや』取助『私しとても素より好んで人樣の物を取度ハ御坐りませんが、實ハ私しに一人の老母が御坐りまして、此老母が永の大病ゆゑ、何かして良ゐ醫者樣にも見て貰ひ、又た良ゐ藥をも飮しましたなら定めし全快するであらうと存じましたれど、何に致せ世間ハ不景氣商賣ハ暇なり、自分一人でさへ今日を送り兼ますのに、生憎と又た老母が大病で御坐りまして是でハ所詮此身ばかりか、大切な親までをも見殺しにせねば成らぬ、ア丶困ッたものだと切端詰りました處から、宜からぬ事とハ存じながら、ツイ賊を働きまして政府のお手數をかけまするやうに立至りましたので御坐ります』檢察官『被告人に本官が一ッ尋ねる事がある、只今其方の陳述によれば、盜賊にハ這入たが人を惱した覺へは無いと云ひ、又た老母の病氣を全快させ度が爲に、ツイ誤つて不良心を出したやうに申せど、果して被告人の云ふ如くならば、何故に兇器を持參致した』取助『イヱ兇器

なぞを持參致した事は毛頭御坐りません』檢察官『イヤ持參致さん事はない、已に十月十一日の夜金有化痴助の家へ押入たる時、一尺五六寸の刀を提げて居りし趣き、被害者よりの申し立である』取助『それは先方の申し立が相違して居るので御坐ります、尤も同家へ這入ました時に主人が目を覺して、矢庭に私しを引捕へやうと致しましたから、私しも捕へられては一大事と存じまして、其處に有合ふ翫弄物の刀だか鎗だか其邊は確と覺へませんが、取敢へず夫を取て、手向ひすれば是だぞと申した事は御坐いました』檢察官『まだ夫ばかりで無く、同月十八日の夜慈悲輪無藏の處へ押入たる砌にも、一尺餘りの拔刀を振廻して脅迫したる趣き、被害者の申し立である』取助『是も亦た餘ほど相違して居ります、彼の時は老母が頻に秋刀魚を食たがりますゆゑ、夫では旨さうなのを見て買て來てあげやうと申して、家を出ましたのが丁度十時頃で御坐りました、夫から魚屋で秋刀魚を二尾買ひまして直に自家へ歸らうと存じましたが、イヤ〳〵自家へ歸ると再び出るのが都合が惡いと存じまして、其儘自家へ歸らずに夜の更るのを待て、慈悲輪無藏と申しますか、お名前は只今承まはりましたのが初めてゞ御坐りますが、其家へ這入ましたので御坐りますから、其時手に提て居た秋刀魚を見て刀とでも見違へたので御坐りませう』

檢察官『夫は其方の云ふ通り果して玩弄の刀であつたか、或ひは秋刀魚を刀と認めたものか、被害者を召喚すれば直に判然する事だが、併し一歩を讓ッて其方の云ふ通り、玩弄の刀とするも又た秋刀魚とするも、已に被害者が之を兇器と認めて恐怖の餘り、其方の爲す處に任したる以上は無論兇器ぢや』

辯護人『一寸檢察官に申しあげます、是は事實御尋問の後、刑の適用に至ッて申し述べきで御坐りますが、聊か御參考までに申し置きます、只今檢察官の仰せには、縱ひ玩弄の刀にもせよ、秋刀魚にもせよ、被害者が兇器と認めた以上は兇器だと仰せられましたが、決して左樣な理屈は御坐りますまい、兇器とは人を害する事が出來得るものを指して云ふので、彼の玩弄物の刀の如き或ひは秋刀魚の如き、如何にこれを以て彼に害を加へやうとしても、決して害を加へる事は出來ないものでありますから、之を指して兇器とは云へますまい、又た已に被害者が恐怖したる以上は云々と仰せられましたが、果して檢察官の御説の如くでありますならば、例へば玆に一人の臆病者があつて夜行するに當り、道に大きな松の木があると致しませう、ソコで彼の臆病者が此の松の木を見て化物と思ひ、キヤッと云ひさま其處に氣絕して倒れ、夫が爲に身に怪我をしたる時に、其被害者が松の木の持主に向ッて、お前の家の松の木は私しを怖して斯々云々の怪我をさせたから、彼の松の木を切て仕舞て吳よと云ひましたならば、其持主が被害者の要求に應ずるでありませうか、否な其持主は却ッて冷笑ッて、イや私しの家の松の木はお前さんを恐怖さうと思ッて植て置のではない、之を怖いと思ッて怪我をしたのは畢竟お前さんの不調法であるから、私しの知た事では無いと云ふでありませう、是と同一の理で玩弄物の刀や秋刀魚を見て恐れたのは此方から嚇したのではない、即ち先方が臆病で恐れたのでありますから、只先方が恐れたるを以て之を兇器と認定する事は出來ますまい』

と頻に辯論の最中、猫狆の二人は例の口輕ゆゑ、相變らず難の艱のとベチヤクチヤ饒舌ッて居るを、彼の虎の威を假る押丁か白眼つけ、押丁『コラ〳〵騒々敷い、其處を何と心得て居る馬鹿めが……モウ傍聽は相成らん外へ出ろ』

と大喝一聲表の方へ突出されければ、猫六『それ見た事か二度ある事は矢張り三度だ』（をはり）

班婕妤　　　　　　飯田武郷

さかしかる君の御代には　さかしかる臣とたぐひて
あけたてはかたはらさけず　くれゆけばみもとはなたず
いれひものおなじこゝろに　世ををさめありときゝしを
花鳥のいろねにおぼれ　たきものゝかをりにめでゝ
たわやめとたぐひありかば　後の世の長きためしに
小車のひかれやせむと　から國のさかしをとめが
おしかへしいさめしことば　今もなほふみにのこして
人ぞいふなる

◉夜行汽車

京都　松華庵主人

余が汽車にて東京大阪間を來往せしは、是れまで幾回なるを知らず、左れど今回の旅行ほど、余をして不愉快の感あらしめたる旅行は、未だ一回も之れあらざりき、今試みに其顛末を物語らむ。

余は五月の末に方り、余が支配する銀行の用務を帶て上京せしが、七月中旬までに、其用務も大概は纒りしを以て、殘務は大阪より從へ來し、役員に命じ置き、七月二十日東京を出發して、避暑旁々鎌倉江の島等の名所舊跡を歴觀し、夫れより一週間許、大磯の濤龍館に滯在して海水浴を試み、松風波聲の間に起臥して、暫し俗塵堆裏の煩情を忘れ居りしが、如何に炎暑の盛りなりとて、何時までも斯く閑散無爲に遊び暮らす可くもあらず、殊に孤客の事とて、無聊に堪へかねしより、今日こそは歸阪の途に上るべしと思ひ定めしかども、晝間は炎熱の爲めに蒸されん事を恐れて、夜行汽車に乘込む事に決定せり、但し此日は八月の二日なりき。

國府津に聊かの所用もありければ、余は午後三時頃より濤龍館を辭して、先づ國府津の舊友を音訪れながら、用事を辨ずる裡に、已に六時過になりければ、匆々に所用を辨じ了はりて、直に停車場に至りたり。

斯て余は先づ手荷物若干を驛夫に渡し、夫より上等待合室に入るに、下等待合室の雜沓に似ず、玆には

一人の客も無ければ、余は先づ其一隅の椅子に倚り、發車時間の來るまで、今日の日記を記るさんと、手革嚢より日記帳を取出して、夫是書き記し、記るし了はりて彼方を見れば、何時しか一個の紳士中央の卓子に倚りかゝりながら、穩かならざる眼にて、下等待合室の混雜せる群衆の中を、注視し居る樣子なり、余は先づ日記帳を手革嚢の中に收め、再び彼の紳士を見るに、横面ながら何となく心覺えあるに似たり、ハテ誰であつたかと、心中に疑問を起しながら、尚ほ彼を見詰る程に、彼は尚ほ余が玆に在るを知らざるものゝ如く、左も思ひに堪へかねたるが如き調子にて『何處へ隱れやがつたか知らん、太へ畜生女だ』と、獨語ちながら尚ほも群衆の中を注視し居りしが、果ては思ひに堪へかねけん、見返へりもせず再び下等待合室の方に出で行けり。

余は彼が風姿の立派なる少年紳士なるに似ず、其言語の野卑なるに吃驚せしが、去るにても彼は確かに余が知れる者に相違なき人物なり、何處にて出で遇ひし男なりしか、何と云ふ人なりしかと、頻りに既往の記臆を呼起す中に、忽ちにして思ひ出だせり、彼は實に長岡新次郎とて、余が嘗て帝國大學に在學せし頃、法科大學の學生中に、美男と才子の評判高かりし男なりき。彼は余が大學卒業の前二年に於て、遊蕩と不都合の所爲ありしが爲めに、退校を命せられたる學生なりき。彼は其後舊主中泉伯爵の家令となりしやに聞及びしが、今も尚ほ其職に在るものにや、サテモ其言語の卑しさよ、など〻、余は今彼が名を思ひ出だすと同時に、さま〴〵の想像を凝らしつゝありし折しも、再び氣遣はしげなる眼にて

此一室を見廻はし、蒼白き貌に何となく穏かならぬ色を現はしながら、入來れる一個の美人ありき。根高く結びし束髮は、油氣なけれど光澤に、惜氣なく剪みし額髮は、フサ〳〵として優に白き額を掩へり。眉美はしく、眼涼しく、鼻高く、口元締れり、貌は中高細面にして、色は白しと云はんより寧ろ蒼く、肉は肥えたりと云はんより寧ろ痩せたる方なるべし、年齡は十八九にて、丈は小造りなり、身には京御召の單衣温和しく着て、黑繻子と繻珍の腹合せの帶巧妙に結び、右手には女持の小革嚢を提げ、左手にはフラチルの肩掛を抱へて、落ちつかぬさまにて立てる姿、眞個に稀有の美人、余は思はず雙眸を凝らせたり。

汽車は間もなく着せり、余は眞先に進みて上等客車に乘込みしが、玆には一個の乘客もなかりければ、余は取敢へず上座に着きて、車窓の外を眺むるに、下等の方は乘客の數極めて多かりしと見えて、出づる者入る者混雜云はん方なかりしかども、僅か四分時間許の中に、入る者は入り、出づる者は出で。汽車は將さに發せんとせり、此時極めて忙てながら、遠く後の方の客車に走せ入りたる者ありき、噫彼は實に長岡新次郎なりき、余は獨旅の無聊を知るが故に、彼れが此客車に乘らざるを見て、極めて遺憾の事に思ひ、尙は又た待合所にて見受けし佳人は、孰れの客車にや乘たりけんなど思ひ續けながら、尙はも外面を眺め居れり、間もなく車長の口頭に笛聲鳴り、汽笛答へ、汽車ハ徐ろに進行を始めたり、余は漸くに頭を窓より引きて、屋上より照らす洋燈の火影に、一車の裡を見渡せしが、見渡すと同時に、余

は非常に驚けり、實に今まで一人も乘客なしと思ひ居りし此一室に、既に何時しか彼の絶美の佳人。曩に待合室にて見受けたる絶美の佳人は、物思はしげに彼方の一隅に坐を占めたりしなり。

余は疑ひぬ。开も此佳人は如何なる階級の人なるべきか、一見し所にては、世慣れぬ處女の如くなれども、其擧止動靜の鋭敏にして拔目なき樣なるは、多少浮世の辛酸を嘗め來れる者なるに似たり。其品位は何となく高尙にして、誰が目にも名門豪族の姫御寮ならんと見ゆれども其造りの意氣に過ぐるのみかは、一人の同伴もなく、然かも何の携帶品なき所より察すれば、全く淑女にもあらざるが如し、彼れは純粹の處女なるべき歟、將た既に嫁げる者なるべき歟、彼れは長路の旅行を試むる人なるべき歟、否な此近邊の人なるべき歟、何さま怪しげなる旅行者と思ひければ、余は更に凝ひの眸を疑らして、再び彼れが面を見詰めたり、而して余が視線と彼れが視線と端無く相衝突するが否や、彼れは急に窓に向て面を回らし、余が注視を避けたり、左れど此瞬間に於て、余が眸裏に刻める彼れが容貌は、曩に待合室にて見たりし折よりは、一層美にして、實に凄き程にてありき、余が疑惑の念も、何時しか此の美の爲めに消滅せて、今は唯此美人と兩個相對して車を同うせる事の、嬉しきが如く、愧かしきが如く、氣の毒なるが如く、一種異樣に感ぜられて、余は唯恍然として彼れを見詰るのみ。

汽車は轟々たる響と共に、風を切り、烟を吐きて、松田を經、山北に達せり、此時まで彼れは一言をも發せず、余も亦た一言もなかりし、午後七時四十二分、山北を發し小山を過ぐる頃より黑雲深く立ち掩

ひければ、月なく、星なく、暗は世界を掩ひぬ、彼の美人は、此暗淡たる風光の裏に、出でゝは入り、入りては出づる、幾多の隧道を經過するに至て、其異常の響を聞き、其異常の光景を透し見ながら『オヤ大變な所ですねヱ、玆は何と云ふ所でせう』と、頗ぶる驚ける調子にて、問ふが如く、問はざるが如く恰も獨語つが如く、余に向ひて突如として問ひ出だせり、余は始めて談話の端緒を得たるを喜び、取敢へず『玆は小山と御殿場の間で、地名は知りませんが、東海道鐵道線路中、一番隧道の多い處なのです』と、簡短に答へて、再び言葉を續け『貴女は始めての御道中ですか、是れから何處へお越しなさるのです』と、反問を試みたり、余がこの反問を發すると同時に、美人は俄かに心づけるが如く、涼しげなる眼にて余を打見やりながら『ハイ』と答へしまゝ、暫ばし躊躇ひて無言なりしが、漸くにして『大坂まで參りますのですが、始めての事ですから、誠に不慣れで困ります』余『アー左樣ですか、夫りやアお心細いでせう、ソシテ大坂は何處へお出でなさるのですか、實は私も大坂まで歸へる者ですから、御一人旅でお困りなら、万事御案内申上げませう』、余は先づ親切なる心を以て、斯の如く云へり、左れど余が此の親切を籠めし一語は、却て彼をして、訝らしめ、疑はしめ、心安からざらしめ、氣味惡るからしめしものなるが如く、彼は左も困つたと云はぬ許りの顏色を示し、極て冷淡なる調子にて『オヤ貴公も夫れじやア大坂へお出でになるので御座いますか、何卒何分宜しく』と、云ひしのみ、再び云はず、頭を回らして窓外を眺むるのみ、余は心中に失敬な女だ、人が切角親切に云ふものを、行先を敎へぬとはと、

少しく腹立たしきまゝ、同じく再び物言はず、臂掛に持たれて、眼を閉ぢたる儘默然たり。

汽車は間もなく御殿場に着けり、余は立て窓より頭を出だし心ともなく前面を見廻はせり、玆には僅か四五名の富士道者が下車するのみにて、其他は乘る人もなく、また降る人もなし。

唯見る最尾の客車より、順を追ふて各客車を點檢する一紳士あり、彼れが未だ三客車だも點檢し終らざる裡に、驛長は彼れに注意せり、彼れは止むを得ず、殘り惜しげに後見返り〳〵、己が乘込み來りし客車に飛び乘れり、飛乘ると同時に、汽笛鳴り、汽車は其進行を始めたり、噫彼の紳士、洋燈の光線力なく、夜目にハキとは見分ざりしかども、彼は全く國府津の停車場にて見受けたる、彼の長岡新次郎にてありしなり、余は彼れが國府津停車場に於ける獨言と云ひ、今亦た玆に不思議なる擧動をなせしと云ひ、彼は何等かの人を見出さんとて、斯く慌て騷ぐ者ならんと推量せり、去るにても彼は何等の人を搜索せんとて、斯く注意奔走するにや、願ふに彼れが曩の口氣より察すれば、彼は舊病今に癒えず、例に依て婦人の關係より、斯く狂奔する者なるべきか、などと疑ひを起しながら、不圖彼の同車の美人を見るに、如何にしけん彼れは肩掛を以て全身を蔽ひ、車の一隅に身を竊めて、面見られぬまでに頭を低れたり、サテ〳〵此の蒸暑きに何たる事ぞと、思ふと同時に忽ち一の疑團は、余が胸中に蟠まり來れり。

想ふに此の美人の訝かしき素振と、他の客車に乘込める彼の長岡新次郎が怪しげなる擧動を對照せば、何人も其胸中に、疑團を生ずるには相違なし、『何處へ隱れやがつたか知らん、太へ畜生なだ』余が耳

邊に殘れる此卑しき呟き、乃ち彼の新次郎が國府津の停車場に於て、人ありとも知らず呟ける此の卑しき一語と、今亦た御殿場停車場に着くと共に、他の耳目を避くるが如く、車窓の下に忍び隱れし此の美人の擧動は、實に人をして其間、密着の關係を有するものたる事を推測せしむる者あり、實に余も然か推測せしなり、余は思へり是れ長岡が偕老同穴を契れる妻なるべき乎、將た彼れが爲めに一時の色を鬻げる妾なるべき歟、若しくは亦た、其身心を捧げて將來に契らんとする、彼が戀慕の眞神なるべき乎、然れども此美人の風姿より察すれば、人の妻とも思はれず、亦妾なりとも思はれず、去りとて處女にあらず、妓なりとも見えず、其風彩の何となく貴きが如くして、何となく貴からざる、其言語擧動の何となく賤しきが如くして、何となく賤しからざる、眞個に是れ一の怪物、其身柄を推測するに由なけれども、兎にも角にも長岡新次郎と、何等かの關係ある婦人にして、長岡の眼光を避け隱くるゝ所の、所謂る『太へ畜生女』には相違あらざるべし、顧ふに長岡は、汽車の各停車場に着する毎に、必らず精細に各客車を點檢するならん、然らば此美人に、如何なる魔術ありとても、終には見出さるゝには相違なし、果して然らんには、結局如何なる珍事を惹起すやらん、誠に氣遣はしき譯合なり、斯く思ひつゝ余は美人の方を打見やれり。

彼れは曩に御殿場停車場にて、窓の下に蹲り居りしに似ず、今ハ窓より頭を出して、遙かに汽車の進み行く方を眺め居たり、佐野の停車場は既に近し、彼れは如何にせんとするか、余は眠れる直似して、竊

かに其動靜を注視せり。

斯くて幾分間かの後ち、彼は俄かに窓の外戸を鎖して、再び片隅に蹲まれり、間もなく汽車は佐野停車塲に着せり、余は此時まで美人の樣子を窺ひしが、愈よ彼は全く新次郎が、此列車中にあるやも知れずとの懸念より、其見出だす所とならん事を恐れて、斯く停車塲に至る毎に、之れを避け隱くるゝに相違なしと思ひ定めぬ、去るにても長岡は如何にせしか、彼れも亦た必らず各列車を點撿しつゝあるべし、余は斯く思ひしかども、尙は此美人の動靜を見極めんが爲め、虛眠りして身動きだもせず。

汽車は再び發せり、美人は徐ろに起ち上れり、流石に暑に堪へざりけん、彼れは僅に余が方を打見やりて、袂より絹手巾を取出だし、先づ其額の汗を拭き、次で其胸其手を拭き了はり、又たもや窓を開きて半身を出だし、涼風に吹かれながら、遙かに汽車の進み行く方を眺め居たり、左れば最早疑ひもなく余が推測に違はずと思ひければ、俄かに余は眠り覺めたるが如き趣を裝ひながら、尙も彼れが動靜に注意せり、蓋し余が考へにては、其正邪は孰れにあるやを知らざれども、兎に角此方は力弱き婦人あり、彼方は屈強の壯年男子なり、若し不意の珍事婦人の身の上に起らんには、誠に憐れむべき限りなり、故に大坂へ着後の事は暫く措て、今此汽車中にある間は、余は及ぶべき丈け彼れを保護せざる可からずと決心するに至れるなり。

汽車の疾行は矢の如く、十四五分間の後ちには、既に沼津の停車塲近く進み來れり、美人は再び忙てた

るさまにて、急に窓の戸を鎖ざし、余が方をヂロリと見て『非常に涼しくなつた事、寒いやうだハ』聞えよがしに呟やきて、再び肩掛に半面を隱くし、窓の下に蹲まれり、余は氣の毒に思ふ裡にも可笑くなりて、思はず吹出さんとせしが、ジツと堪へて窓より頭を出せり、間もなく汽車は沼津停車場の前に停れり、余は玆には長岡が擧動を觀察せざる可らずと思ければ、先首を回して後の方を望めり、果せる哉、彼は立出る群衆の中に立入て、仔細に各客車の內外を注意しつゝ、搜索し居るが如し、余は思へり、斯の如くならんには、彼れが爛爛たる眼は、決して我此客車を見遁がす事あらざる可し、又決して此の美人を見遁がす事あらざる可し、如何にすべき歟、如何にして此の可憐なる佳人を保護す可き歟、今は余は宛も余に保護の義務ある者の如く、宛も余に非常の關係ある者の如く感じつゝ、殆んど熱心に彼れが擧動を熟察せり。

彼れは既に歩を進めて、今や余が城廓に向ひて進擊する者の如く、漸次に此客車に向ひて進み來れり。余は飽くまで美人を保護するに力を盡すべしと決心したれど、今長岡が何となく其顏に憤りの色を現はし、其鋭き眼に、充分の凄味を帶びて、順次に各客車を點檢しつゝ進み來れるを見し時には、流石に心地穩かならず、心臟の皷動も亦何となく高まり來るを覺えたり。

打見し所にては、彼は涼風に吹かれて、徐ろに徘徊しつゝあるが如く見ゆれども、其鋭く凄き眼は、實に仔細に各客車を點檢せるなり、而して其視線は、今や實に余等の乘込める、次の客車に向て注視し居

るもの丶如し、若夫れ彼の眼にして、一度び我此客車に一轉せんか、此の憐れむ可き美人の運命は如何あるべき、而して余が運命も亦た未だ知る可らず、然り、余が心の穩かならざりしも、亦た決して無理にはあらず。

果せるかな彼れが視線は、間もなく我が客車に一轉せり、然れども僥倖にも彼れは、全く此の一車中に頭を現はす、唯一の乘客、即ち余を以て彼れが嘗て帝國大學に在りける日の同窓の一人たる、城野虎雄たる事を覺らざりしもの丶如し、若し其舊友の一人として余を見出したらましかば、『ヤア城野君か、お珍らしい、何處へ』と云へる一語を先陣として、彼れは必らず我此城廓に攻入りしならん、然らんには此を蒸暑き車中に於て、自ら求めて汗水の中に涵されつ丶隱れ忍べる、此の美人の折角の苦辛も、亦た必らず水泡に屬せしならんに、其此に至らずして、彼れが視力の余を舊友として認むる事能はざりしは、眞個に僥倖中の僥倖ありしと、余は心中に喜びつ丶、更に竊かに彼れが方を打見やれり。

此時既に乘客の多數は、車長の注意に依て、孰れも車中に乘込めり、而して長岡新次郎も亦其中に影を沒せり、幾許の間隙もなく、汽車は再び走り始めぬ、余は思はず吐息せり、美人は再び起上れり、月は昇りぬ、風は涼かなり、美人は又もや窓に倚りて、車の疾走を眺めたり。

西北には富岳雲烟漂渺の裏に屹立し、東南には青松白沙望み限りなく、岸打つ浪の聲、松吹く風の響秀絕の風光、天然の音樂、錯綜湊合の妙致を極むるが上に、月あり一段の風趣を加ふ、長き旅行の退屈も、

此に至て洗ひ去るの直ひある、此田子の浦の風光も、余は空しく自ら求めし心配の裡に過ぎ去り、名にし負ふ富士川の鐵橋を渡り、岩淵興津の停車場を經て、既に江尻近くまで進めり、左れど他の疑ひを憚れるにや、此兩停車場にては、長岡は影だも見せず、唯例に依て同車の美人の、蒸されつゝあるを見るのみなりき、余は頻りに、將に來らんとする美人の厄難に向て、保護を全うするの策を考ふる中に、薄情や晝の勞れの爲めか、我れを忘れて思はずも假眠みたり。

斯くて幾分間かの後ち、突然余が背に觸るゝ者あり、余は愕然とし夢驚き、振顧るに、豈計らんや彼の佳人は、何時しか余が傍に來り、例の肩掛を以て深く面を掩ひ、熟睡せり、サテ〳〵不可思議千萬、夢か現か何たる事ぞと、余は只管に疑ひ惑ひながら、近く車窓の外を眺むるに、是れなん靜岡の停車場にして、車は既に其歩みを停め居れり、アヽ此佳人何事ぞ、此薄氣味惡るき擧動、余は唯驚き呆れて言葉もなし。

忽ち窓外に人影あり、余が驚いて振向く間もなく、彼れは其鋭き眼を見開き、余及余が背の方に眠れる彼の佳人を見つめたり、噫是れ長岡新次郎、余は悚然として震立せり、而して余は突然、『ヤア君は長岡君ぢやアないか』と余が心が余に命令せしにはあらざるに、余が口は實に突如として、斯くの如く叫び出せり。

然るに余が此一語は、左まで高からざるが如く覺えしにも拘はらず、如何に鋭く彼れが鼓膜を衝きけん、

彼れは余が聲の未だ全く了はらざる中に、殆んど驚き倒れんとせり、而して余を認むる事もなく、實に見苦るしきまで慌てたるさまに、彼方の群衆の中に隱れて見えずなれり、余は不思議の擧動よと、益々疑ひ惑ひながら、更に夫の佳人を見るに、彼れも亦た色青ざめたる頭を上げて、恰も或る非常の恐れに打たれたるもの丶如く、悄然余を見詰めたるま丶一語もなし、汽車は再び走り始めぬ長岡は如何にせしか、余は唯疑惑の烟の裏に、靜岡停車場の遠ざかり行くを目送するのみ。

暫くありて彼の美人は、突然、『貴郎はアノ長岡を御存じて入らつしやいますか』と問ふ、其聲は支躰と共に打震ひ、蒼然たる顔色、涙含める眼、最と憐れ氣に見ゆれども、何處かに決然たる處あり、余は漸くに推測せり、是れ今余が靜岡の停車場にて、長岡を呼びかけしを聞き、我れを以て彼れが知友ならんと推測し、最早逃れぬ所と觀念して、此儘長岡に引渡さる丶とも、一度びは其一身を捧げて、余に保護を請はんと決心せしものに相違なし、兎にも角にも此方より問はんと思ひしこと、彼方より問起せしは、余が胸中に蟠まれる疑團を氷解するの順路に近づきたるものと思ひければ、余は直ちに『左樣久しく大學に同窓に居つた事がありましたが、其後は打絶えて音信不通です、貴女も御懇意なのですか』美人『ナニアノ別段懇意と云ふ程ではありませんが』余は其言葉の終るを待たず『御見受け申しますと、大層御心配な事がおありなさるやうですが、何か長岡に關して、イ丶エサお隱しなさらんでお話しなすツて下さい、及ばずながら御力になりませう』微笑みながら問ふ、美人は面愧げに『ナニ、アノ別段』

余『先刻からの長岡の擧動と云ひ、又た失禮ながら貴女の御擧動も何だか。誠に失禮ですけれども、モシヤ何か意氣な筋で、貴女が大坂へお出でになるのを、長岡が追跡すると云ふやうナ譯合なのではありませんか』余は今にして思へば、我れすら呆きるゝ許りの無遠慮なる意味、無造作なる言葉を以て、斯く問出だせり、美人は余が此無遠慮なる一言に、唯貌赤らめて俯視きしまゝ答へもせず。

左れど、余は最早茲までに話を切込みたる以上は、今更空しく此儘に退陣す可くもあらず、飽くまで進軍して、彼れが秘密の本城を攻落さゞる可からずと思ければ、再び『斯く御同車すると云ふも不思議な御緣、モシ長岡に關する事なら、及ばずながら小生が引受けて、如何な困難でも切開いて上げませうから、お隱しなすつちやア好けません』と、云へる言葉を先鋒として、騙しつ、慰めつ、充分の心切を以て、種々樣々に問糺せり。

美人は最初余が此の熱心なる質問に對し、甚く其口づから長岡の事を云ひ出せしを悔ひしが如く、此話を以て、曖昧糢稜になし了はらんと勉めしかども、終には余が實意を信じて、其身と長岡の關係を說き出だせり、果して余が推測は違はざりき、實に彼れと渠れとの間には、密着の關係ありしなり。

噫此美人は、實に長岡新次郎が主人として仕へし所の、華族中泉伯爵の長女文子とて、豫て東京の交際社會に、麗容の評判高き令孃にてありき。

今此の佳人が面愧ゆげに、口籠り勝ちに、物語る處に依れば、長岡は大學より退學を命せられし間もな

く、年少の人には不似合なる職務、即ち中泉伯の家扶とはなれり、彼れは大學に在りける日、學術上の成績の常に不評判なりしに似ず、其世才に長けたりとの評判甚だ高かりし丈けありて、万事万端の擧動少しも拔目なく、未だ半年ならざる中に、伯爵は素より、一邸内の信用を博し、今は中泉家に係る重大の問題すら、先づ家令よりも長岡に協議するまでに勢力を得來りしも、彼れが美なる容貌と、彼れが才氣とは、終に彼れが身を誤まるの媒となりしぞうたてき。

斯くて一年餘りも過ぎし後の事なりき或る時何等かの場合より彼れは同家の令孃。絶美の佳人文子と人目の關を忍び竊に怪しき契りを結びしが、うたてきかな文子にはまだ結婚の式こそ擧げね、既に同族中に約束定まれる人あり、茲兩三ヶ月の後には彼方に嫁ぐ可き筈なるにぞ、彼れは开を遺憾に思ふの餘り、巧みに文子を欺きて、同家の金庫より金千幾百圓かを盜み出し、其是れまでに得たる信用と勢力とを見捨てゝ、或る夜終に手に手を取りて、同邸を脫走したり、左れど搜索者の目を眩す爲め、遠くへは走らず、依然東京市中に隱れ、氏を變へ名を改め米相場などに手を出だして、半年餘りも日を送りき。

去る程に惡錢身に着かずの諺に漏れず、新次郎は其盜める金の過半は、脆くも相場に失敗し、其餘は大概驕奢に消費し、今は其日の生活にも窮するに至れるより、淺ましくも白波綠林の群に入り、晝は眞面目な商人風を裝ひて、相變はらず米商會所等へ出入し、夜は文子の目を欺きて、富豪の家に押入り、多くの金錢を掠めて、何喰ぬ貌に世を渡りしが、斯くては何時か絶大の富を極はむるを得ん誠に末覺束

あしとの考へより、彼れは實に驚く可き程大膽なる事を思ひ立つに至れり。
蓋し新次郎が大膽にも思ひ立ちしは、實に紙幣贋造の一事にてありき、彼は此の事を思ひ立ちしより、竊に同志者兩三輩と共に器械藥品等幾許かを調へ、文子は素より同志者等と共に、大磯の海水浴に行くと稱へて、七月の初旬東京を出發し、同志者等は直ちに豫て其職場と定めたる大磯近在の山寺に赴き、其身は文子と共に大磯の某亭に宿泊し、文子の前は程よく拵へ、日々職場に通ひて此憎む可き事業に從事し、尙は其費用の乏きを告ぐる折には、遠く藤澤戶塚近在を徘徊して、同志の者と共に强盜を働き、不淨の財を資金として、不義の計畫を凝らせしも其擧動の溫雅靜着なる爲め、寺僧すら毫しも怪しむ事なく、只々東京の學者等が、態と閑境に世を避けて、何等かの事に從ふ者と思ひ極め懇ろに取扱ひしぞ愚かなる。
文子は又是れまで新次郎が巧に欺むきし言の葉を一切信實と信じ、且つ其身に對する彼が擧動も、日に增し好意を加ふるより、終には全く彼を以て世界唯一の愛す可き人と思ひければ、云ふが儘に些しも疑ふ事なかりしが、大磯に來りしより、彼が擧動の以前に比して、幾分か變はれる所のあるのみならず、日々同志者と討議して國家の爲めに一大著作をなすと稱し、何方へか立ち出で夜に入るにあらざれば歸り來らず、時に依りては一泊二泊して歸り來らざる事すらあり、流石の文子も此に至りて始めて其心中に疑ひを生じたり、但し其疑ひは是ぞとて目指すものありて疑ふにはあらざれども、唯何となく疑はし

く思ひ始めぬ、サテ一度び疑ひ初むる時は、物として疑はしからざるはなく、事として疑はしからざるはなきものにて、是より後は文子が眼に映ずる新次郎が擧動の一から十まで疑はしからざるはなく、今は唯彼が斯く訝かしき擧動をなすに至れる所以の原因を探究して、其身の前途を決せざる可らずと迄、深くも思ひ極はむるに至れるなり。

斯て八月二日の事なりき、文子は新次郎が例に依て朝未明より出て行きし後、日頃其手を放たぬ手革嚢を忘れ置きしを見出したり、疑ひの淵瀬に漂ふ文子が心は、如何で其儘に見逃す可き、直に其を開き見るに中には別に何等の品もなく、唯書簡やうのものを以て滿され居るにぞ、彼は其儘に鎖さんとせしが、更に思ひ返へして恐る／＼取り出し見るに、是れ皆な紙幣贋造に關して同志の間に往復せし書簡にあらざれば、則ち強盜其他あらゆる惡事に關して仲間の人々と交換はせし書簡なり、其他尚はさま／″＼の書付やうのものあれども、孰れも其仲間の暗號符牒を以て記るせるものと見えて、首尾の意味少しも解し難きものゝみなれば、文子は只管驚き呆れて殆んど氣絶せんとせしが僅に心を沈めて考ふるに、是れ實に非常の事なり、彼れは實に非常の惡人なり、噫、是れ我不義に對する天罰にや、斯て此儘にあらんには如何なる憂目を見るやも測る可らず、我身の憂目を見るは尚ほ可なり、是が爲め兩親の名譽を毀損する事ともならば、實に死するも尚ほ我家我身の汚れを洗ふに由なからん、左れば兎に角一時身を隱くして時機の來るを待つに如かずと、賢こくも思ひついては矢も楯も堪らばこそ、今にも新次郎が歸り來る

が如き心地せらるゝにぞ早々に準備を整へ、其身の貯金を收めし女持の手革嚢一ッを携へしまゝ、濱邊に逍遙すべしと程よく欺きて旅宿を立出でしが大磯の停車場より汽車に乘込まんには、忽ち追手の爲めに引戻されんやも知れず、成る可くは遠き地の停車場よりと、我に問ひ我に答へて直ちに人力を傭ひ、途に其身を掩ひ隱くす爲め、フランチルの肩掛を買ひ調へ、先づ國府津へと赴きたり、時は宛も午後二時頃なりき。

サテ漸くに虎口は逃れ出でしものゝ、サテ何方へか落行く可きや、と車の上にて兎さま斯さま考ふるに、東京は知己夥多ありて万づ便り好には相違なけれども、父母始め、我親屬の目に止まりて如何なる事に成行くやも知れず、且つ長岡が目指さん事も必定なり、去らば京都にせんか、大坂にすべきか、京都には叔父君あり、大坂には伯母君あれども、我不埒の行爲は疾くより知りて在さん、去らば尋ね參らすとも許し玉はぬ事必定なり、如何にす可き歟、如何に身を處す可き歟、否々叔父君は兎まれ伯母君は豫て情深き御方なり、事情を申して泣きつきまゐらせんには、マサカに無情も見捨て玉ふ事はあるまじ、然かなり然なり、と漸くに思定めて車を急かす程に、間もなう國府津へ着きたり、左れど發車時間には尚ほ間あれぱとて、停車場傍なる或る茶屋の奥まりたる座敷を借受け、茲に身を忍びて發車時間の來るを待ち居れり。

暫くありて表の方に喧しき響あり、竊に障子の間より窺ひ見るに、綱付の聲勇ましく停車場へ引入る

る人力一輛、乘れる者は新次郎なり、文子は自失する許に驚き呆れながら尙も隱れ窺ふ程に、彼は忽ち停車場の群衆の裡に影を沒せしが十數分間の後再び立出で來り、極めて忙てたるさまにて再度車に飛乘り、何方へか走せ去りたり。

文子は此有樣に始めて蘇生の思ひをなし、ホット息つく間もなく發車時間となりたれば、今は止むをえず恐る〳〵四邊見廻はしながら停車場に至り、サテコソ此夜行汽車に乘込む事とはなりしなり、然かりしかども新次郎が再び取て返へして、他の客車に乘込みしを垣間見しより、文子は又もや苦悶の淵に沈み、他の見る目も厭はず、各停車場に着する每に、一枚の肩掛を盾に新次郎が銳き眼を逃れんとはなせしなり、噫、是れ文子が余が親切を信じて、物語れる其身の經歷の概要なりき。

余は彼が談話の間、或は愕然として驚けり、或は悵然として歎息せり、或は愁然として心配せり、聞了はりて最後に余が胸中に湧出でしものは、最早疑團にあらず、實に如何にして此憐れむ可き美人を危難の運命より救ひ出す可きかと云へる一の重要なる問題にてありしなり。

中泉文子が長き談話の間に夜は漸く更けて汽車は益々疾走せり、島田堀の內の兩停車場も無難の中に過ぎて、今や正に濱松に向て一直線に疾走しつつあるなり、左れど彼の長岡は、余が靜岡にて其名を呼びかけしと同時に、返答だもせず群衆の中に影を隱くせしまゝ島田停車場に於ても、又堀の內停車場に於ても、再び影だに見せず、余は思へり、今文子が物語りし如くなれば、彼れは實に非常の犯罪者なり、

傷持つ足の空恐しく、余が突然其舊姓を呼びかけしが爲めに、疑心暗鬼、若しやと思ふ心より、余を以て其筋の探偵ならんと思ひ誤り、或は其儘靜岡より此列車を辭し去りしにはあらざる可き歟、否な、彼も亦極めて大膽なる惡漢なり、彼處まで追跡し來れる身にてありながら僅に一の疑心の爲に、此列車中、自己が秘密の一切を知れる此美人を空く見遁がす可き男にはあらず、彼は唯此の列車中に己れを知れる者あるを疑ふて、暫し其何人たるかを認むるまで客車を立出しにはあらざる可き歟、否な、彼が進退の孰れにもせよ余は兎に角此憐れむ可き佳人を保護せざる可らず、左れど之れを保護す、知らず如何にすべき歟、如何なる方法を以てす可き歟、斯く思ひ惑ふ裡に。汽車は早くも濱松停車場に着せり、夜は既に一時幾分かを過ぎ居るなり、唯見る三四の乘客の玆に此列車を辭するあるのみにて、他には驛吏の此列車に荷積みする荷車の響の轟々たるを聞くのみ、間もなく三四の乘客は出で去れり、間もなく驛吏の荷積は了はらされたり、今は四隣閑寂、唯停車塲壁、洋燈の光の明かなるを見るのみ、美人は例に依て暗に余に謝意を表しながら、殊更に余が傍に依て、彼の肩掛を以て半面を掩ひつゝ、同行者たるを裝ひ居るなり、余も亦例に依りて窓より頭を現はしつゝ、長岡が立出づる事もやと待ち居るなり、左れど今は余は余たるを長岡に知らしむる事を以て、甚だ不利益なりと思ひたれば、余は帽子眉深に被ぶりて、唯竊に注視し居りしなり。

忽ち一個の紳士は便所の方より立出で來れり、而して余が方をジロリと打見やるが否や、恰も余が視線

を避けんとするが如き有樣にて、稍々慌てながら或る他の客車に乘移れり、僅に瞬間、明かには見えざれども、余が眼は正さしく彼を認め得たり、彼は實に新次郎なりき、噫、彼は依然倘此列車にありけるなり。

汽車は間もなく發せり、余は先づ此事を美人に告げ、且つ彼が憂悶恐怖を慰めながら、心中に思へらく、長岡が手を出だすを待たず、寧ろ直ちに此方より警察の手に引渡す可き歟、否なく、或は此儘に打捨て置き、彼方より手を出だすを待て、警察の手を煩はす可き歟、然り、若し此儘に大坂まで無事なるを得んには、徒らに時日を途中に費やすの恐れもなく、又煩はしき手數を盡す事もなければ、寧ろ此儘に打捨て置きて大坂に到り、徐ろに計るに如かず、若し其前彼方より手を出さんには、其時警察の力を借るとも遲きにあらず、と種々に思案を凝らしたる末、漸くに斯く思ひ定めたり。

夜は益々更け行くなり、汽車は益々疾走するなり、豐橋を過ぎ、蒲郡を過ぎ、岡崎を經、大府を經て、ハヤ未明には名古屋に着せり、左れど濱松名古屋間の各停車場にては、余は充分注意して乘客の出入を點檢せしにも拘はらず、終に長岡を見ざりしなり。

名古屋の停車場に於ける混雜は實に一方ならざりき、余は玆に於てこそ彼が群衆の裏に出沒隱顯して、此美人を見出さんことを勉むるに相違なからんと思ひければ、一層熱心に注意して、彼を見出さんことを勉めたり、然れども余は愈帽子眉深に被ぶり、半面は車中に隱くし、殆んど眼許りを現はす位にし

て、群衆の裡を注視し居れり。
果せるかな、彼は群衆の中に隱顯して、最首より最尾まで、各客車を點撿せり、顧ふに彼は我此客車に此美人あらんとは、實に覺ざるものなるが如し、彼が一身に取りて怪しむ可き、恐る可き、只一の乘客の外に、其最愛の美人あらんとは、實に覺り居らざるものなるが如し、余は彼をして一層疑惑を惹起さしめん爲め、殊更愈々眼を瞋らして彼を白眼み詰めたり。
見るが如く、見ざるが如く、彼は屢々余が方を打見やりしが、終に如何に思ひけん、彼は俄に或る客車に飛入りたり、而して間もなく彼は忙てたる狀にて、一の提革囊と洋傘とを携へ、再び其客車を飛降るが否や、出で行く乘客の跡を追ふて、忽焉停車場外に走せ去れり、サテは彼は余を以て愈々恐る可き者と思ひ、憾を遺して此列車を辭し去れるならん、サテモ笑止、余が斯く思ひつゝ彼が走せ去れる跡を目送する中に、汽車は再び進み初めたり、噫、美人が憂悶の種なる、余が心配の種なる、長岡新次郎は、今や機關車より吹出す烟筒の烟と共に消滅し去て、又影なく、跡なく、唯旭日に輝く名古屋城頭金鱗の光の、漸次に細く遠ざかり行くを望むのみ。
余は文子に長岡が立去れる始末を語れり、語り了はると同時に彼が面を掩へる憂悶の雲は忽焉として吹き拂はれ、限りなき喜びの色は其玉の如く美はしき面に上り來れり、涼しき眼に幾分の嬉し涙を含みて、余に謝意を表する彼が風彩、眞に是れ天眞の美、余は思はず恍然たり。

此日、此列車が、大坂梅田の停車場に着せしは正に午前十一時五十分なりき、斯くて余は先づ文子を伴ふて彼が伯母の許を訪へり、豈計らんや是れ余が知己なる紳商某の家なりければ、余は心中竊に便好かりしを喜び、某及其妻（乃ち文子が伯母）に面會し、始終を語りて文子が爲め謝せしに、彼等は甚く余が好意を感じ、却て余に向て彼が爲めに謝し、且つ盛んに饗宴を張りて更に其厚き謝意を表せり。

余は程よく辭して久し振りに我家に歸へり着けり迎ふる者は我此三月に婚せし可憐の少女、否な最愛の妻と、慈愛なる老親及家族若干名なりき、噫、清涼なる夏は、深山のみならず、海濱のみならず、夜行汽車のみならず、實に紅塵堆裏、家族團欒歡笑の間には常に之れあるなり、余は此夜は旅の勞れの爲めに一切を忘れて熟睡せり、翌朝目覺めて後ち枕頭の大坂朝日新聞を閲みすれば、其一面の末項に、强賊の主領就縛と題して、最初に大磯近在の山寺に在て、紙幣贋造に從事せる惡賊四名、昨日就縛せる由を電報に依りて記るし、次で其主犯たる、長岡新次郎事變名某が、或る一美人を携へて、國府津發の汽車に乘込みし事、及彼等は唯に紙幣贋造の犯罪のみならず、强窃盜其他あらゆる重罪を犯したる者なる由を、同じく同地發の電報に依りて記るし、最後に

然るに右夜行汽車に乘込める奸賊の頭領長岡新次郎は跡を暗ます爲め、名古屋にて一度び汽車を下りしが、同地に於て彼の携へし美人は孰れへか忍ばせしと見え、單身更に午前九時四十分同地發の汽車に乘込み、午後五時過梅田停車場着の上大坂市中に入込まんとせし所を警官の手に捕縛され、直ちに

警察署へ拘引されたり云々

と記るしあり、噫、彼の長岡が猛悪なる眼光、噫、彼の美人の悄然たる容貌、噫、彼等の幻影は忽焉として余が眸裏に現じ来りぬ、嗚呼余が瀛車にて東京大坂間を来往せしは、是れまで幾回あるを知らず、左れど今回の旅行ほど、余をして不愉快の感あらしめたる旅行は、未だ一回も之れあらざりき。

那智瀧歌　本居豊穎

しら玉を氷雨とふらせ　くらおかみそらやかける

天雲をほろにふみさきて　はたゝかみ落ちやくだると

岩がねにたつ足しゞみ　魂もとびてあまがける

三熊野の熊野の那智の　大瀧あはれ

反歌

旅衣ひも吹きはなつ山風に岩もとゆすり雨きほふなり

◉江戸の舞踏會

(一)

眠花道人 戯譯

佛國巴里府にピエール、ロチーと呼ぶ一個の丈夫雄あり、陸軍々籍に其名聲著るしくして天晴干城の軍人なれ共、天性操觚の技を好み、今は花の都に浮世小説家として其譽れ高く虎を手搏にしたる清正公が三十一文字を玩びたる古き例も想ひ遣られて、最と恐ろしく又懐しく思はれたり、ロチー氏は巴里小説家中一二に數へらるゝ作者にして、劍を拔ては忽ち本職の軍人となり、筆を執ては忽ち有名の作者となる、劍筆共に優りて世に謂ふ兩刀使ひの類なり、過る千八百八十〇年即ち我明治〇〇年〇秋東洋の人情風俗を探りて氏が流麗なる筆端に收めんと、フト日本に渡來せり、横濱着は恰も天長節會の二日前にて、氏は直ちに日本外務大臣の招待を辱なうし鹿鳴舘の夜會に臨むの幸榮を得たり、即ち江戸の舞踏會とは日本の秋と題せる氏が紀行中の一節あり、何も彼も西洋眞似好きの日本人に譯し示して、西洋人が日本を見る感情何如を明にす可し、讀者よ、烏の鵜の眞似をして水に溺れるてふ好比喩は東洋の古諺ならずや、細腰を尙ぶ日本婦人が肥腰を好む西洋婦人の眞似をすれば可笑き事のなくて叶ふ可きか、日本婦人は晨に廣袖を着て柳の腰の細きに誇り、夕べに洋服を裝ふて臼の腰の太きに擬ふ、何ぞ其調法にして又伸縮の自在なるや、日本婦人の腰は「ゴム」細

工の如く、日本婦人の胸は飴細工の如く、又た俳優の早變りに似たり、本に鵜の眞似からす飛び、外へは遣らじと申す實に一種の特色を備へり云々と惡口を端書きとして此一篇を譯し來りたる者は巴里の月を眺め盡して今は東京の花に眠る眠花道人とて、哥で和らぐ敷島の大和男兒にぞ侍る。

來る十一月三日天長節に付鹿鳴館に於て夜會相催申度御來駕被下候ハヾ幸甚の至りよ存候早々敬具

明治〇〇年〇〇月〇日

外務大臣伯爵　ソーデスカ

伯爵　ソーデスカ夫人

ピエールロチー殿

此招待狀ハ美事なる金縁を付け、表面の文句ハ都て佛文にして、裏には、當夜午前一時シンバシ停車場より特別汽車差立て候事と英文にて草書せり。

余ハ横濱に着してより僅か二日立つか立たぬに此招待狀を受取り、聊か阿呆に取られたる心地せり、†

ニ〳〵舞踏會……ヘヱー日本にも……フウーもう來たか、併し江戸の上流紳士貴女は燕尾服や巴里化粧で揃ひ給ふか知らん、否踊り給ふか知らん、一體分らぬは東洋の風を見に來た此方に歐羅巴の舞踏會とは……元來其積りで無かつたが、第一此コンデス（伯爵夫人）とは我佛國などにある爵號と同ドものか知らん、昨日も奇麗なる風雅なる雜誌に、矢鱈マルキイス（侯爵夫人）の稱號を見たが、去とは如何なる夫人か知らん、察するに何れも其血筋正しき由緒ある家柄の貴人ならん、日本は貴族政治に幾百年となく敎育風習を染み込ましたるものゆゑ、我國などはなか〳〵以て日本に及ばぬか知らん、彼等の祖先は年古き大昔しに溯りて、歐洲十字軍の年代よりも尚ほ古き起りにやあらん、其交際社會は如何なる高尚優雅の風か知らん、此招待こそ紳士貴女の擧動を窺ふに足らんと、今はなか〳〵に心待ちせらるゝ身とはなれり此夜の參會汽車は橫濱を午后八時に發するなり、橫濱中の歐洲居留地は此日の朝未明より伯爵夫人の招待に酬ひ奉らんとて粧ひの支度頻りにて人々落付かざる氣色なり、其割合に日本の婦人は餘り招待に預らざるは奇體なり、居留地の紳士は疊仕掛の絹帽にて、貴女は獺虎製の外套の下に裙長く着流したる舞踏の衣裳を見せ、レースを縁に綾取りたり、頓て歐洲風なる橫濱の停車場には八時半の列車に遲れまじと待合所に寄り聚ひ、英佛獨語の話し聲其處此處に湧き、余が最も聞かんとする日本語は絕て聞く事を得ざりし……道の程僅かに一時にして此舞踏會列車は江戸にぞ着きぬ。

ナンダ……オヤ〳〵爰は倫敦か、メルボルンか、夫とも廻りて紐育へ來たか知らん。

シンバシ停車場の近邊ハ、最も高き練化作りの軒を並べ、甍を列ねて建ち聳へ、幾層々のガラス窓よりは瓦斯燈の光り輝き、橋の向ひの角屋敷はチンマリとした「ホテル」と見えしが、後にて聞けは誰わらう日本の貴族が設けたる第十五國立銀行なりしと、余は若し誤りて輕卒に此内に飛び込み、「シャンパン」を拔け杯と嚴命を下したらんには、其後悔如何にありしならんと、獨り考へて覺えず赤面せしも可笑かりし、此方の角は木造の三階作りにて天麩羅專門の大店、其際は靴を脫でお辭儀をし乍ら這入る日本風の宿屋なり、固より夜分の事ゆゑ、只其光り輝ける燈火の明りのみを見て、ソリャ倫敦、ソリヤ、メルボルンと思ひしも、讀者は餘り余が驚きを咎めざるならん、尤も其家並は亞米利加風の醜さ加減と云ふ事丈けは夜目にもそれと悟られたり、街頭の光り、見る目遙かに漸く細くして糠星の如きは町々の長く直きを示し、寒空に巣を張り渡して雲の通路吹き閉ぢたるは電信線の軒より軒に通ふなる可し、ソラ汽笛の聲、ソラ車聲の響、ソラ郵便馬車、ソラ鐵道馬車……待てよ、是が話しに聞いた江戸か知らん。

余が停車場の石階を下るや、何やらん黑色の一團ドヤ／＼と襲ひ來り、見る間に余が身邊を取卷たり、偖こそ怪物油斷はならドと、余は「ステッキ」を右手に取り、大地を敲いて叱々と追ひ拂ひたれども倘附纏ひて余が後へにあり、能々見れば人間にて、頭髮蓬々一種の野蠻土人なり、讀者よ驚き給ふな、是が日本の「ジンリキサン」と呼ぶ者にて、馬の代りに、車を引き、見掛に寄らぬ親切柔和の人物なり、余が試みに手袋のまゝ其顏を撫で遣りしに、彼は白き齒を出して莞爾と笑ひ、『ダンナゴジョウダン』と云ひ

たり、誠に愛嬌ある動物にて、婦女も慣れ親しむ事を得可し、しかし彼等は、其仲間に於ては罵り騒ぎ、競ふて余を奪ひ去らんとする者の如し、彼等は身幅のしまつたる上衣を着し、廣く長き佛敦袖を附けたり、又彼等の「ズボン」は最と短くして、大抵は其脛を顯せり、又彼等は黒き切れにて作りたる靴を穿けり、但し親指と他の四指とを分ちて恰も猿の足の如く見えぬ、是さへあるに、彼等の眞黒なる上衣の背中には丸形なる印ありて、其中には大きなる支那字を白色にて顯し、我國にて棺桶に添ふる埋葬符諜の如く作れり、此奇妙なる「ジンリキサン」は何れも小車を其後に控へ、道幅廣き往來に車を以て柵を結べり、余を取巻きたる機嫌よく又勇ましき一群の「ジンリキサン」は、恰も猿の如き手眞似にて、或は己れの股を敲き、或は又腕を叩き、筋肉の強くして車を引くの達者なるを示すものに似たり、余は却て今は之を興ある事に思ひたり。

今夕の主人公より迎ひに出たる大馬車數臺も石階の下り口に備へありたり、此國の人は餘り馬車を見馴れざるものと見え、立止まりたる群聚の土人は、恰も新器械の試驗に臨みし如く、遠く離れて之れを眺め居たり、馬丁は慇懃に馬の轡を兩手にて押へ居たり、想ふに此國の馬は野蠻の獸と見ゆ、讀者よ、馬とは云へど其體軀甚だ小にして面の幅廣く、實に一種の馬なりと知る可し、又其處等あたりを警衛する巡査も余が見降す程の矮人にて、何も蚊も總じて可愛らしく思はれたり。

機嫌よき「ジンリキサン」は余を乗せて一散に狂人の如く走りたり、余と共に汽車にて着したる老少の婦

人も踴衣裳を會釋もなく膝の邊り迄揭げて同じく「ジンリキサン」の小車の内に蹲踞れり、小車は一人以上を乘せざる故、婦人を保護する夫や姉もなく、皆思ひ〱に曳かれつゝ行けり、余は乘車の時鹿鳴舘と云ひたるのみにて、彼等は早速に走り出せり、余の小車の背後には均しき「ジンリキサン」が二人まで後を推して來れり、讀者よ一層注意せらる可し、余の一身は今や日本土人三人の曳く所となるを余は固より鹿鳴舘の何れの方角にあるかを知らず、唯曳かるゝ儘に、他の人々と同じ方角に向ふて進めり、只一つの幸福は其方角が同一なるこそ好けれ、若し其道を分ちて思ひ〱に走りしならんには、妙齡の處女や淑女を彼等小天狗の如き「ジンリキサン」に任せざる可らざるなり、余は此小車の制にて深く感せり、其は別事ならず、日本の人は親族團欒の樂みなく、親子兄弟皆別々の小車に乘りて、親戚類族の成立たざる無茶苦茶の社會に似たる事を。

「ジンリキサン」は疾きあり遲きあり、故に後になり又先になり、其不規則の速度は恰も絲の縺れたるが如し、疾走中には頻りに『ハイ〱』と呼べり、余は是に於て日本の人を追ひ攘ふ言葉は『ハイ〱』と云ふならんと覺えしに、其后或る嚴狀の一紳士が或る貴女と何やらん話すを聞けば是も亦頻りに腰を屈めて『ハイ〱』と答へ居れり讀者よ日本の『ハイ』と云ふ言葉は人と塲處とに依りて大なる意味の變化を顯すものと知らるべし、斯る内にも「ジンリキサン」は長き一隊を不規則に形造りて進み行けり。

余等は不規則なる小車の一隊に曳かれて行間程なく、明り斑點なる最と物淋しき町筋に出てたり、爰は

シンバシ停車場近邊の賑かなるには似もやらで、薄板の小屋、「ブリッキ」の屋根、薄黒き佛像、奇妙なる露店、ところ〴〵に燈火を輝かして次第に薄暗くなり、紙にて張りたる「ランプ」軒先を最と微に照せり、此怪げなる紙製「ランプ」も次第に町筋の暗なるに從ふて其光りを放つこと鋭くなる心地せり……アヽ是が本統の江戸か知らん、儕は嚮の繁昌なる場處は江戸の內の中央市場か知らん……瓦斯の光り……紙「ランプ」の火影……煉瓦の大厦……薄板の小屋掛……如何に違へばとて僅か十四五丁の內にて斯も速かに風景の變化するとは怪む可きの限なり、否々ツウ驚くにも及ばぬ、世界にはこんな都の作り方が隨分なしとも謂れぬ、埃及のカイロ府を思へば此位の變化は未しもの事なり……オヤ〳〵女が脛もあらはに荷車を推して行く、……オヤ〳〵盲人が笛を吹て行く、……オヤ筵の外套、オヤ絹の高帽……コリヤー何んだ、丸で人間がチヤンボンダ……吾々の小車は次第に目的の場處に近づき、兎ある支那風の角の突き出したる城門を過ぎ、全く町盡處に出でヽ遙かに夥多の燈火を樹林の間に認めたり、其景况恰もヴェニスの夜祭りの如く、廣く庭園には無數の燈火、シカモ種々に彩色たる紙玉の中に蠟燭を以て點したる燭火は樹より木に繫り枝より枝に釣されて光明燦然、見る目眩きまでに輝き渡れり、是ぞ今夜の舞踏會場鹿鳴舘なることは「ジンリキサン」が小車を其玄關に横着けにしたるを以て知られたり。

（二）

鹿鳴舘……日本一の建物……オヤ〳〵是が日本一……余は思はず振仰いで眺めたるに、生中に歐羅巴風

の物眞似、總て風韻のなき白色にシカモ粟新しき建物、佛蘭西の田舍の温泉場にある樂堂同然、イヤ〳〵是は日本の一部分、是から追々鹿鳴舘の本舘に移るならん、移るのであらうと、想像したるは全く間違ひにて、余が片足は此時既に確かに本統の鹿鳴舘を踏みつゝありしと知る可し、讀者よ、今夕の舞踏會には其招待客無慮一千人にて、彼の「コンテンス」彼の「マルキイス」、先づ日本の有るとあらゆる上流社會の人々は皆聚り來るものと察す可し、是等幾多の紳士貴婦人は皆一纏めとなりて此樂堂否鹿鳴舘に押込めらるゝと察す可し、讀者よ今一層注意して察す可き事あり、凡そ世界各國の風俗習慣は、皆其國々の古代より其國土人情に適するやう、先賢先哲の工風したる者が、世を累ね代を積むに從ふて次第々々に發達し、其國其時の人が最も目に麗しく耳に面白く思はるゝに至りて當世の衣服となり、又當世の流行となるをを、然るに日本一般の社會は未だ高帽を其頭に美と爲さず、未だ燕尾服を其身に適せると爲さず、未だ西洋音樂を其耳に面白しと爲さゞるのみならず、却て之れを奇とし妙として後指さす程なるに今や此一流の紳士貴女は日本固有の美術を放擲して生中に一般の耳目に怪まるゝ歐羅巴風の新風俗を倣ふに至れり、讀者は毎に「ポンチ」畫にて見たるならん、彼の脊丈け低き紳士が高き絹帽を被りたるを又瘦衰へたる一寸坊の貴婦人が舞衣裳を着けたるを……今夕圖らざりき其實體を見留んとは……是等の實體は大抵小車に蹲踞て此鹿鳴舘に乘り込み來りしと察す可し、余は一々之れを熟視して實に日本人の物眞似に巧みなるに感心し、又其固有の美風を失ふを遺憾に思へり、日本女子の束髮、日本男子の高帽、

見る者も見る者も實に奇々妙々にて、如何に過激なる歐羅巴の破壞黨も、日本の上流人が其固有の美風を破壞して此奇々妙々の異國風を爲すが如き過激なる破壞黨には舌を卷くべしと察したり。「ミカド」の徽章を畫きたる數流の陣幕は翩々としてあちこちに翻り圓形無數の燈籠は燦爛として數條の繩に繫れり、仰瞻れば紫縮緬に菊花を染め出したる小旗中空に掛り、下は一面に花卉盆栽にて一歩毎に裳裾の邊より馥郁たる香氣を放てり、其花其草、其名を知らざるもの多く、見るとして珍奇ならざるはなし、讀者よ、日本は地球上暖帶の位置に横はりて四季寒暖の順序規則正しく、草木に富み動物に富み、實に天然の美國なり、左れば其風物山川の絶勝地球上稀に見る處なり、今此上流の人々は季節に應ずる天然の花卉を聚め來りて此一堂に粹を拔き、來賓をして幾多の愉快を其耳目鼻口に感せしむるものと知る可し……息せきと馳せ來る小車の「ジンリキサン」は汗臭き身をも顧みず、無遠慮に「ポンチ」畫の實體を時刻通り此麗しき花の中へ運び來りて今は逐ひ〳〵舞踏の時刻近よれり。

むき出しの瓦斯燈燿々と燃えて、其傍に帽子外套を預る世話人二三名起ち居れり、何れも可なり格好よき燕尾服を着流し、襟飾りも叮嚀に結びて天晴鹿鳴館の「ボーイ」と見受けらるれど黄色なる小面に細き目を光らして矢鱈にやく〳〵と笑ふは些と小氣味惡く覺えたり是と同樣なる案内人は廊下及び階段の邊り杯に正立して少し小腰を屈め、手を以て一々來賓を案内せり。

舞踏の本室は第二階にありて、其階段の廣やかなる周圍には大中小の菊花を三段に駢列して其美麗謂は

ん方なく、我國の小春時に園生抔を散歩して一も見る事の能はざる花なり、黄菊白菊いろ〳〵に取混せて孰が姉やら妹やら、容姿嬋娟、甲乙なけれ共、中に一際目立ちしは壁打掩ふ薔薇色の大菊にて、其高さは熱帶地方に繁茂せる大樹の如く、其花輪は秋の夕暮に太平洋上に浮ぶ明月の如し、余は此花の間を徐歩して次第に階段を登りつゝあるなり、讀者よ、日本島は實に山水明媚に氣候温和なる一大公園なり、而して其鹿鳴舘は日本の紳士淑女が憩ふ小茶屋なり、若し此小茶屋の主人が、人爲の小細工を眞似ずして斯る天然の名物を其儘來賓の膳羞に供したらんには、巴里の貴婦人も倫敦の紳士も皆喜びて、シカモ心底より嬉敷思ふて其膳に着かん事を望むなる可し余が心中の愉々快々覺えず溢れて其面に顯はれたるは實に此花間を蹊で登段する時にぞありける。

階段の上邊に男女四人の待つ人ありし余は直に今夕の接待員ならんと見て取れり孰れも滿面に笑を含みて最も優く來賓をあしらへり中にも金光爛熳たる數箇の勳章を輝かして白襟附けたる一紳士は擬ふ方なく今夕の主人公外務大臣ツーデスカ伯ならん余は此主人公に眸を凝すの遑なく更に敏捷に其眼を配らざるを得ざる時機に會せり即ち其傍らに立てる三人の貴婦人なり最も眞先に起てるは余が此兩三日來待ちに待ちたる「コンテス」にして讀者は余が此「コンテス」に初めて相見えし時如何なる感情を余が胸間に抱きしかを推量し得るや如何……余は先刻汽車の內にて聞くとはなしに、いろ〳〵の噂話を傍聽したり某婦人は最と嬉し氣に今夕の踏り相手を誰彼とし又日本人が粧飾の風韻に富みて昨年の舞踏會は云々、

イッヅヤの夜會は云々、今年の今夜は如何にあらん云々とて漫に想像を描き出せり斯る中にも男子は急激に人の身上に切り込みて婚禮の雜談、貴孃の失策などを最も面白そうに時々耳打して細語し兎に角笑ひ聲丈けは無遠慮に其調子を高くせり余は着來早々餘り知る人もなく餘所ながら其物語りを聞く中に今夜の主人「コンテス」の事に及びしを以て余は覺えず耳を傾け……偖ては「コンテス」……如何なる風韻を持つ方なるか……平生交際する人々は如何なる氣風の人を好むか……待てよ其氣質に依て今夜のはなし掛け工合もある……「コンテス」は其身に如何なる幸榮を荷ふか……是迄如何なる功勞あるか……如何なる履歴を有するか……爰ぞ一番聞き所ならんと覺えず其身をすり寄せて余が一層注意すれば相語らふ人々も亦一層注意して次第に小聲になれり。

ツーデスカ伯は顏に似氣なく機敏の氣質なり其働きの機敏なる丈け善く遊ぶは動物の性なり伯は即ち動物の天性を完全に備へ居る者にて歐羅巴風に規則正しく遊び、規則正しく働くなり或る夜伯は「ゲーシヤ」と遊べり（ゲーシヤとは酒宴の席抔へ一時賃拂ひして雇ひ入るゝ踊り女の事なり）其時伯は尙ほ外務大臣にてはなかりしが最早世に羨まるゝ位地にありし、伯は日本の外交官となる程ありて其時分より最も巧みに人と交際せり右の「ゲーシヤ」は其交際振りを愛し深く伯を慕へり伯も亦其思ひの切なるを愛せり凡そ人の思ひと思ひと相衝突する時は大に破裂して仲悪き敵味方と分るゝか或は又大に親睦して無二の友となるか夫とも亦相見ざる相思ハざる昔に返るか此三ッの內にあるべし今「ゲ

ーシャ」と伯と雙方の思ひは此三者の孰れに纒りしかを知るや。

右は一車中にて最も若き最も髭の少なき少し頰の邊り桃色ある少年紳士が揭け出したる問題の大要なり此時眼圓にして髮毛の痛く縮れたる中年紳士は此問題に答へて……『余は此塲合に「ゲーシャ」と伯とは第二の衝突をなしたであらうと思ふ』……と云ふや車中覺えず噴き出して余も覺えずもらひ笑ひせりしかし余は此一話を聞て大に「コンテス」の素性を知れり……偖は「コンテス」は其以前「ゲーシャ」孃にてありしか……「ゲーシャ」の身分は抑々如何なる位地にあるものか……「ゲーシャ」の教育は如何なる程度に迄進みしものか……と再び想ひを惱す內に例の「ジンリキサン」騷ぎにて更に之を研究する遑もなく見聞に忙はしくして思はずも鹿鳴舘に着し今始めて此「コンテス」に接するに從ふて嚮の一話を思ひ出し爰に再度の笑を臍の邊りより湧かし來りたれども、ジット耐へて初見參の挨拶を濟ましたり……其後日本の或る紳士より審かに「コンテス」の事を聞き圓眼縮髮者が答へたる第二の衝突は全く誤推にて其實「ゲーシャ」と伯とは第三の衝突に終り今の「コンテス」は由緒正しき或る貴族の令孃なるを知れり讀者よ余が此の長き後悔談の間に……余が「コンテス」に對する感情を推量したりや、しばらく次の一段を蔽ふて再考せよ。

「コンテス」……余は今此珍しき造物主に見ゆる好機會に遭遇せり……此似て非なる巴里風の美婦人に接する好運に際會せり、讀者よ、先づ今夕の主人公たる伯爵夫人は、其容貌威ありて優美……愛嬌ありて

嚴重……德備りて柔和……擧動都て「エチケット」に適ふて、シカモゆつたりとし、自然と犯す可らざるの風釆を完備し居れりと云ふとを記憶せよ、余は今其風釆を見れば見る程自然に愛慕否尊敬す可き貴人なるとを發見せり、又是と同時に、如何に臆測しても此夫人が酒宴の席に賃雇ひに雇はれて踊りを踊りしと思はれず、汽車中の噂ばなしは皆人の德を傷ける小人の言なりと、余は忽ち此夫人の爲めに辯護人の位地に立つ事を避けずと決心せり。

「コンテス」は綠の黑髮を形よく束ね結び、長き手袋を以て臂の邊りまで被らせ・中肉なる細面に薄化粧して、氣高き中にも十分の愛嬌あることを、其持前の、東洋人種の、黑く淸しき兩眼に現せり……余は讀者に忠言す可き事あり、凡て人は極端より極端に走る不條理の心あり、故に人に接したる時などは、先づ其の頭其顏を見るや否、直ちに胸腹の邊を飛び越て腰よりも遙かに下の脛の邊を見る僻あり頭の頂邊より飛で足の爪先を眺め、夫より次第に眸を轉じて腰、腹、胸を見上げ、又元の頭に歸るが通常人と人と突然に相遇ふて見合す順序なり……余は一番に「コンテス」の顏を見、頭を見、握手するに及び、手と手と相案ずるの感覺に依りて「コンテス」の手袋を認めたると同時に其兩眼の眸を凝視し、又是と同時に口元の愛嬌振を見、又是と同時に「コンテス」が總體の仕こなしを見ん事に勉めたる故、余が腦中の混雜は、恰も電話交換處が四方八方より話し掛けられたるが如き想ひを爲せり。

「コンテス」は水紫のシミなる長袴に種々の彩色したる野花を織交せて針目細かに緣取りせり、折目と

折目との縫合せは規則正しき中にも裕然として恰も區劃したる花園に秋の野花が咲き亂れたる如き姿あり、胴衣は細く柔なる絹地へ縫箔して剰へ閃く珠玉其上を綾取りたり……どう見ても巴里仕込み……夫人は夫とも着上手の方か知らん……否々裁縫の上手なる爲め、夫人の身體にシッカリとはまつたのか知らん……何しろ疎かならぬ此裝ひ……此姿……此風儀……此着様……夫人は實に東洋に新體度を作り出したる造物主なり、夫人は實に似て非とは言ひ難き巴里風の貴婦人なり、此時余は覺えず威儀を正して夫人に一禮せしに、夫人は目禮しつゝ靜かに前に進みて亞米利加風に手をさし伸べ、叮嚀に握手の禮を爲せり……待てよ、今の手の出し方にては夫人は亞米利加風の「エチケット」を學ぶものか知らん………イヤ〳〵矢張り巴里風の衣裳……フム分つた、英米佛獨あらゆる世界各國の風采を一纏めに一身に荷ふたる、即ち余が想像したる通りの造物主ならん……讀者よ、夫人は矢張り似て非なる巴里風なり、所謂東洋風の造物主なり。

《三》

此想像の中に又忽ち余が前に現れたる二人の令孃あり、一人はマダ妙齡のおとなしく愛らしき少女「カメリヤ」の長袴を裳裾高く揭げ、薄桃色の衣裳を最と派出やかに着なしたり、又一人は二十歳前後のチト活潑なる貴婦人にて、其名をシリマセン侯爵夫人と申し奉り、此程皇后陛下の式部頭に嫁せられたる方と承はれり、此頃の流行とて丈の黑髮をキリ〳〵と結び上げ、天鵝絨色の眼涼やかに艶なる身體

のこなし振あり、衣裳は――ルイ十五世の象牙色繻子地にて、角張りたる「コルセット」に膨みたる籠袴をリリシク着流したり、佛蘭西十八世紀の文物を今此極東の日本に見るとは、偖も〳〵不思議の奇縁にて、古色靄然たる内に故郷のむかしを想ひ起せるも亦千里羈旅の孤客が常情なる可し……余は此三貴女に向て呉々も將來の健康と成功とを祝す、只「コンテス」の年頃を推量する事能はざりしは、斯る混雜の內に我が思ひの其處に運ばざりしが故なり、余は甚だ之れを遺憾に思へり、しかし機敏なる讀者は、大抵前に述へたる衣裳格合にて四十以上と推測したるならん。

マダ時刻早きにや、待合室內は數ふるに足らぬ來賓、あちらこちらに塲所取り、膝の邊り何となく窮屈そうに椅子に依れり、此室はいと廣々として彼の三婦人の起てる直ぐ後に塲所取りたるものなり、室の左右に附屬の小室數戶相列なれり、化粧道具の音、衣裳取繕ひの聲、微かに聞ゆるを見れば多分支度室ならん……聲はすれども姿は隱れて見えず、偖は天の神女が劉喨たる音樂を玩ぶかと、耳を澄してよく〳〵聞けば、二國の樂隊、窓外にありて佛國樂調の普通に知られたる「コントル」踊りの一曲を獨逸樂に合せて奏づるものにぞありける。

間取りの鹽梅は隨分不釣合にして、其ダヽ廣き所は歐羅巴にて幾許も見る第二等の樂堂に髣髴たり、各室內に天井より吊り下げし武骨なる瓦斯「ランプ」は、彼の愛らしき紙製の燈籠に映じ、叉紫に白の菊紋押したる上品なる日本特色の旗は彼の愛嬌なく風韻もなく恐ろしき龍を畫きたる支那の黃旗と交叉し

て壁を裝ひたる抔は誠に其組合せを失したるものにて仔細に之を吟味して一口に概評を下せば今夕の鹿鳴館夜會たる恰も小家族の祝ひ事に茶番狂言を見るの趣きありと云ふべきなり。

其茶番狂言に集り來る多數の日本貴婦人紳士達は大臣大將文官武官の方々過半を占めて皆何れも得意の色其面に溢れたるを見る紳士の衣裳は總て美々しけれども金銀色の飾りチトたつぷり過ぎて田舍風のゴテ〱作りと申す如き嫌ひあり、中には其昔し一度世に盛なりし——チーム將軍の再來かと思ふ計りの衣裳着けたるもあり、又中には今日吾々の最も醜しとする尻尾附きたる燕尾服を、譯もなく考へもなく只ポンヤリと平氣で召したる連中も多く見受たり、余は試みに日本の上流社會に向て問はん、諸君の脊中は生來洋服を着る樣に出來たるに非ず即ち其祖其宗は日本服に適するやう諸君の躰軀を製造したるに諸君は何故に斯くも見苦き洋服を珍重せらるゝか、余は人情として成るべく余と同色同風同語の人を好めども斯る慾目を以て見てさへ、諸君が固有の日本風を捨て吾々の最も不流行とする衣服に近寄るを訝るなり、況んや諸君は之を其本心に問ふに於てをや必す裏恥しき所なくて已むべきか、諸君は暫らく余に言論の自由を許せ余は今外面より公平に諸君を評せん……是れが本に猿の物眞似と……シテ又爰に聚り來りし貴婦人達なり……婚姻前の盛りの令孃……年増盛りの艶麗しき御新造……世帶ジミたる考へ深き母御達……壁の根に列ねたる椅子に倚りたる夥多の貴婦人……余は思はず噴出したり、余は實に驚きたり、余は誠に奇怪に感じたり、如何に其身に不似合なればとて均しく人間の着る衣服なるに是程まで

も不始末なるか……何處に如何なる所ありて斯くまでに不釣合なるか……不出來なるか……不格合なるか……箇樣に頭から爪先まで一切の工合が狂ふやうに……はまらぬ樣に……可笑なやうに……噴出すやうに……道化演劇のチャリのやうに粧ひ飾るにも亦隨分骨の折れたる話にて若し是れ丈けの不格合が無造作に諸婦人の御身に出來得るとすれば實に不思議なり實に奇怪なり下袴のつけやうが餘り長いのか……否、短いのか……否、上り過ぎたのか……否、おろし過ぎたのか、余は其原因を探究するに苦むなり、「コルセット」の工合も分らず袖の太さの程合も知れず、能くも〳〵揃ひに揃ふて斯くまで多人數の貴婦人が一人も殘らず余を抱腹せしむるものかなと實に驚いた……實に不思議に思ふた……しかし何れも骸骨以上の事にて、眞實其顏が賤きに非ず、又其體が醜きに非ず、流石は侯爵、流石は伯爵……何處となしに威德あり、何處となしに優美あり……余は是に於て竊かに發明したる事あり、餘の儀に非ず、日本上流の紳士ハ斯る體裁の風韻を好む者ならんと云ふ事を、夫にしても最初に見えたる三人の淑女は眞の日本人か知らん……我が眼の迷ひなりしか知らん、想ふに此江戸中にて最も美しき最も着上手なる三人を見本として吾々に示せしものならん……夫にしては見本と實物の相異餘りに甚し、彼等夥多の婦人は如何に奇妙に吾々の目に見ゆるぞ……余ハ斯る中にも言葉を改めて讀者に告る事あり、其ハ日本婦人の手の長く妙に、美しく小なると云ふことを、是實に責てもの取り所なり。

十時……支那公使の御入りなり、秀麗なる一行十三人、座中の面々を流し目に見て靜々と入り來り、な

らゆる小日本人を眼下に見下す容體なり、實際彼等は日本人の群中に僅かに其頭丈けハ高く見受けたり、北部支那の美人、爪先に氣遣ひながら人もなげに落付拂て優々と歩むさま、何ともハヤ形容の爲し難き高尙なる風情なり……日本上流の方々よ、諸君ハ今此支那人、支那風を見て如何なる感情を惹起すや、諸君ハ日本固有の、天然の、特得の絹地を捨て、優しき蠶児の口より出る者を捨てヽ何故にこわ〴〵敷西洋の毛織を好むや、何故に西洋の織物を美とするや……今彼等支那人の一行ハ、いづこ如何なる場處にても其國衣國帽を放さず、彼等が固有の光輝ある絹服に縫ひ飾りせる長衣を着し、八の字ならぬ鼻下髯を眞直に下げて口を掩ひ、剃り上げたる頭の中央より豚尾樣の長髪を背面に下げ、チヨツト瞥見すれば如何にも異風に異樣に見ゆれども、彼等が內心にハ毫も愧る所なく、又毫も沮む所なく、如何にも其身體にはまりて……諸君が曲りたる脊に燕尾服を被せたるが如き比に非ず、又諸孃が平かなる鼻、平かなる面、內股に歩む足に歐羅巴擬ひの衣服着けたる類ひにあらざるなり……彼等が自國の尊大なる、ねつとりしたる美服を裝ふて群衆を打見やりつヽ、輕笑しつヽ、扇子を使ひつヽ歩む樣ハ自然と大國の風備ハりて……諸君がコセ々したる眞似事と大に相違する所あるを悟る可きなり……諸君、彼等が巴里に倫敦に又伯林に夜會に招かれたる時ハ自然と肅々として兎角片隅に倚り、彼等は却て交際仲間を避けんとするの面容あるに、今此鹿鳴館にて彼等の容子を窺へば、却て得意に却て悠然たる姿あるハ、其原因の何の邊にあるやを發見し得らるヽや……支那人の一行ハ、此室內をうるさしとや思ひけん、徐々に

衆群の中を分けて、庭園を見晴す幽靜の欄干に倚りて坐を占めたり。
十時半……余ハ實に驚きたり肝潰れたり魂消たり……讀者よ月世界の人間が出現したり……此世の外の美人が天降れり……此美人の一行ハ余其何の處より飛び來りたるを知らず、唯「ギロフレギロフラ」の音樂に連れて此鹿鳴舘に現れ給ふたるなり、余ハ今讀者に其形容の概觀を物語る可し、先づ其面の小さなること人形の如く、シカモ顏色青ざめて何れも貧血の質なり、其衣裳は吾々の生來見た事も聞た事もなき一種のひろ〳〵としたる物にて髮の毛は恰も人獸像（埃及古物の一にして、體は獅子頭は女人の化物像を云ふなり）の如く、巨大なる頭付は「ク、ブス」想像世界の想像人類（クリプエー氏の小説にあり）の如く、一切萬端、十九世紀の俗世界にハ、滅多に……稀に……不思議に……見る事の出來ざる有樣なり諸者よ此奇妙なる衣裳は、日本を除くの外世界中の繪草紙に未だ一度も畫かれたる事なき仕立なり、蓋し吾々の想像の屆かざる、ダルウヰン氏の人間がマダ猿でありし頃の大昔し、日本の一部に行ハれしものが、十九世紀の今日迄傳ハりて此鹿鳴舘に現れたるなり……讀者よ、余ハ全く己れの身の舞踏會にある事を忘れて一種の觀古美術會に遊びし心地せり實に此いろ〳〵なる扮裝は如何なる巧みの「ファンシボール」に於ても見る事能はざる可し……純紅の部屋靴の如きものを履み、同ド色なる幅廣き膨みたる絹折りの大袴……其裙の邊りは定まりたる區域なく只廣がりたる大袴……眞直に勁張りて馬毛製の西洋袴の如き大袴を穿き、其内にひそ〳〵と人形の足を運ばし給ふなり……其上衣は恰も耶穌教僧侶の肩衣に

似て、色ハ純白又ハ薄鼠又は濃紅とす、尤も近寄りて熟〻之れを視れば、何れも綾に織り成して上り龍下り龍孔雀鳳凰なとを誠に細かく誠に綿密に浮織りし、其美しさ云はん方なく、リオンの織工が兼て目を驚かす日本ニシヂンの製造と思はれたり、上衣の所々に木の葉の如く丸形に縫はれたるものあり、是等婦人方の品位に依りて、いろ〻に分れ、其家族の旗章又ハ紋印を書きたるものと知られたり……衣服の地質は厚く勁く身振ひする毎にザハ〻と音するを聞けり、其上に金銀にて縫箔せる達摸様は派出やかにも亦美々敷して、如何にも重さうに思はる丶……此キラ〻したる剛そうなる衣裳は、最も妙なる天女の襟元より一直線に足下まで着流して、彼等のヒハ〻とした軟弱き身體は都て此衣服の内に隠るなり……彼等の小細き兩の腕、彼等のしなやかなる雙の手は將に其袖の中に失はれんかと思はれ……否思はる丶のみならず、彼等は兎角其の手を兩袖の内に秘藏する氣味ありて、僅かに見ゆるは「ペン」軸の根のところよりも細き指許りなり……讀者よ、尚は想像の及はぬ事あり、彼等の美しき翠の黒髪は、恰も「ゴム」を以て固めたる如く、實に堅固に嚴重に其「ベース」を結合して……迚も人間固有の髪の毛とは思はれず……如何なる細工人を雇ふて其内部を搆造せしめたるかを知らず……巧みに其鬢を廣げたる樣は孔雀の羽翼を伸ばしたる如く、二本の團扇を兩鬢に付けたる如くにて此黄色なる否青さめたる、花顔(即ち紫陽花の散りかゝる時の如き色)を取圍たり、斯く雙鬢に膨脹したる髪の毛の先はペタリとなでおろされ、平かに頸窩を經過して漸く丸く細く脊中に垂れたり、實に此髪形の大きさは、身體の

本部即ち中腹の邊と殆んど同一の太さにて、頭と胴と半々位ひの割合なり……讀者よ、余は以上物語りたるが如きノッペラなるダヽ廣き衣裳の爲めに、其美なる可き乳も腰も吾々の目に其の本體を認むる事能はざりしは、實に殘念千萬なりし……無遠慮に是等天女の總體を概評すれば、恰も古き書物の間に年久しく挾まれたる花片の如く、又植物學者の聚め來りたる木の葉の額の如く、艶消え色失せシナビ果てて折もあらばはう〳〵の體にて逃げ出しそうなる姿なり……其不格合……其無風韻……其不活潑……其無愛想……余の目には之れを浮世の外の人と見ざるを得ざるなり。

外貌の斯る異風あるにも拘はらず、一體に威嚴を保つと優美の仕こなしあるとは誠に尊敬す可き點にて、流石は天女と見受けたり、其周邊に伺候して頻りに頷づく下界殺風景の有樣を厭ふてや、微笑みつゝも、一同打連れて側らの一室に場所取り、俗臭紛々舞踏會合の眞中に、神妙不思議の一團體を形造れり……今余は改めて讀者に天女の御名を披露すべし、ミヤスミ夫人は就中最も貴族にて、カンニヨ孃オツキ孃など〳〵呼び奉るが普通の稱へにぞありける。

《四》

元來佛蘭西殊に巴里風の舞踏は、悠々たる内に自然と音樂の調子に合ひ、下規則の中に容子整ふて、踊りらしくもあり踊りらしくもなしと見すれば〳〵ソレデおしまひにて踏舞上手と云ふは有爲無爲の間に規則に合し、規則外れの樣にてチヤント體度の極りて居るを貴ぶなり日本の諸孃は、日本特有のマヒと名づ

くる踊りに慣れて、歐羅巴の跳ね廻ることは餘り得意に非ざる可し、故に昨今漸く習ひ覺えたる摸型を只戰々兢々として守り詰め、手眞似足眞似をするのみの事故踏舞の間に毫もゆつたりとしたる所なく、踊る者自身も面白しと思ふ事はなくして、只摸型に外れぬやう、一生懸命に心配して、自然に頂を垂れる氣味なること笑止なれ、殊に余は日本樂調の我國の調子と聊か異なる所ありて、兎角耳慣れぬものから、足拍子も狂ひ易く、相手の令孃は亦余の狂ひ勝ちなる足拍子に勉めて合せんとし、雙方氣を揉みて其苦しさ謂はん方なく……誠にお蔭さまにてヤット一番踊りました……去かし斯る中にも注意す可き一大事あり、其は別事ならず、彼等諸孃が白茶けたる長き手袋を以て隱されたる彼の妙なる手は、實に愛するに餘りありて、彼等は其祖先に決して野蠻の系統を戴く者にあらざる事を證するに足れり、否彼等は却て吾々の文明よりも年久しき一種の文明に屬し、今は極めて其精撰の結果を示すものなり、讀者よ更に彼等の足を見よ、彼等は其古し美しと爲せる禮式に從ふて、今尙內股に足を運はすと雖も……吾々は此歩み方を好まざれ共……東洋の年久しき文明、禮儀の成立ちたる種族と云ふ事丈けは、之を以ても明白なり、彼等は今日も猶木製の高き履物を穿てり、吾々の目には如何に危くも亦重からんかと見ゆれ共、習慣の吾々に異なるを以て、其他のあらゆる美性を非難す可らざるなり。

此踏舞塲の土臺輕き爲めに、夫とも外に何かの工合惡しきか、吾々の踊る拍子に安からぬ響して床の高低する氣味あり、余は甚だ踏み惡く感じたれども、丁度此下の室にて歐羅巴氣取りに「ホイスト」を遊び

濟して喫烟などせし先生方は、定めて天井の騷ぎを物憂き事に思ひしならん……之れに反して踊り手は皆面白さうな顔つきにて益々踊り興せりと知るべし。

茲に又余の思ひ掛けもなき不都合を感じたるは踊りの諸孃より何か話し掛けられたる日本語を聞き取ることの叶はざるにあり、讀者よ、余が此山水明媚なる日本に到着したるは、マダ昨日けふと數ふる程にて、日本語を習ひ覺えんと試みたるは、始めて長崎の港に着したるとき雜貨賣る小商人や、半天股引の人足ども位にて、今夕日本上流社會の方々が綺羅を列ねて雲集したる此鹿鳴舘の舞踏場に於て、位高き貴婦人令孃などゝ言葉を交すが如き日本語に非ず、故に一二聞き覺えたる言語の口先き迄は浮び來れども、其儘又口内に封じ込み、終には之を腹内に埋葬する事屢々ありし……去りながら精一ぱい上流の言葉を用ゐ、どうかして出來得る丈けは話し、茲で一番もてゝ呉れんずものどは、普通人間の慾心……眞逆猿のやうな手眞似計りしても居られず……通辯人を頼みて十語話すよりも、自分で直接に一言交ゆる方が心切が届く譯なり……其境に入りて其國語を話す事の出來ぬは鈍き動物なり……一任不辨なりとの嘲りは受くるも、無頓着と笑はれんには優れりと、耳を傷けて他の言葉に注意する内に、漸く一語を覺え得たり……デゴザリマスと云ふ華美にして且叮嚀なる一語を覺え得たり、讀者よ、日本の禮儀作法を重んずる上等社會の間には、通常の世辭言葉の外に、直接動詞と切句との間にデゴザリマスとの一語を用ふるを例とせり、佛國附屬動詞法の不完全なるに比すれば遙かに高尙なりと云ふ可し、斯る調法

なる言葉なれば、今夕は其處にも此處にも皆此デゴザリマスを使ふて、禮漫々たる有様なりし、實に此デゴザリマス語は非常に禮儀正しき會話の基にして、今夕の如き舞踏の大會には、小さな笑ひ聲と此デゴザリマスとが、最も吾々の耳朶に響きたり。

余は突然に相方の令孃に向てデゴザリマスと發言したり、彼等は此日本語に驚いた……彼等は覺ず改りて余顏を眺たり……それも其筈なり、彼等は滅多に外國軍人より日本語を以て話し掛られたる事なければなり、彼等は此デゴザリマスの一言に激されて余の傍を離れず、尚余が言ふ事を聞んと勉めたり、斯る諸孃の中にも、最も優しき一少女の薔薇色したる衣裳して、活々したる花房を胸の邊りに飾り付けたる小乙女、年の頃十四五ある可し、帝國に勳功ある或る武官の娘、確かゴメンナサイ孃と云へるが、マダ遠慮なき子供心に、思ひの儘に足踏み踊りて、餘念なき內に氣高き風情を見せ、今一入粧飾に氣を付けたらんには、左こそ美しかるらめと思はるゝ程の此乙女、能く余の言ふ所を理解し、余が過激に使用する此デゴザリマスの使ひ所を誤りたる時は、艶たる花の顏にニコ／＼と笑ひを含みて、一々之を正し呉れたり、如何に殊勝なる乙女子なるかな、余は斯る愛嬌ある活潑なる少女を育て上げし親々達の顏こそ見まほしけれ。

舞踏室の下は喫煙室衣裳室及び玉突場等にして室の割合に、丈低き鉢栽や菊花を以て粧飾したり、此等の室の中央には三つの大食堂ありて彼の三段菊花の階段を上下して此處に往來する者頻りなり、

銀色の光り目眩き白卓上には燒鳥、鮭、「パテー」、「サンドウヰッチ」氷菓子等を山の如くに盛り供へて、其體裁の整ふたるは完備したる巴里舞踏會に於けるが如し、亞米利加及び此國の見事なる菓實は美しき籠に「ピラミッド」の形を爲し、最上の商標付たる「シャンパン」酒は「コップ」と共に一隅に備へたり……凡そ日本國民が其意匠美術に妙なるは、此飲食室にても十分に發見する事を得べし、余が最も感服したるは、食卓の傍らに葡萄棚を架け、人造の葡萄蔓をからませて之に新鮮なる天然の葡萄を吊し、何人にも取り立ての菓實を食せしむるの思ひを爲さしむる仕掛にあり、余は試みに其一房を摘みて、之を彼の愛らしき乙女に捧げ、以て舞踏の熱を散せしめ、アリガトウの一語を其報酬として受取りたり……日本特有の美術思想は極細微の所に現はるとは兼て巴里美術家の稱贊する所なれ共、余は之を鹿鳴館内の所在に實見して一々感嘆しつゝありし。

余は今や、フランス打扮の多くの日本令孃と裏恥しくも數番の舞踏を濟ましたり、左れば事の序でに、彼の幻妙不思議なる天女と一番舞ふて見ばやと存候……巴里に歸りて土產話と爲さばやと存候……他の賓客の止むるをも聞かで、漸く天女の一群を目指して進み近づき候……ヤガテ古代の衣裳着けたる一美天女を誘はんと莫介にも試みて候。

《五》

夥多ある天女の事ゆゑ、孰れを夫とも見分け難く、少しく躊躇ふ折柄、余の進み近づくを見て聊かから

かい顔したる天女が、余の方を見返りたるを以て、是れ幸ひと直ちに其前に罷り出て、音調ゆるやかに佛語にて相方を願ひ出でたり、此天女佛語に通ぜざるは固より怪むに足らず、只余の口振を見て心當に當るならんと思ふて、斯くゝ無作法にも突然にも言葉を掛けたるなり。天女は先づ余が此はなし掛に驚きて更に推量する景色もなく、急ぎ目配せして其後背に座せるコシモト孃を呼びたり、孃は、余の紹介もなく斯く突然に掛合ひたるは何事ならん、妾こそ其埒を明けて呉れんものと謂はぬ計りの風情にて、ツト身を起しぬ、此起ち上りたる……四角張りたる……異形なるコシモト天女は、悧巧そうなる美しき瞳子を余が方に運ばせ、長寐の夢を破りたるが如き面容にて余の傍らに來り、いと殊勝にも佛蘭西語にて。

『彼君アノ何を此お方にお問ひなされたのデゴザリマスカ』

と其音調少しく不揃ひの點なきにしも非ざれ共、先は可なりに佛語を理解するものゝ如し、余も亦國語にて會釋しつゝ之に答へて、

『私は彼のお方に一手踏舞のお相手の榮を得たく願ひましたので……』

此答へを聞いて彼の妙なる眉毛は忽ち高く上り、一時は如何にも驚きし容子なりしが、漸く其眉を下すと同時に愛らしき瞳子は笑窪と共に現はれて、チヨト會釋し乍ら、徐々と彼の團扇形の髮の毛を天女の方へ向け、余が無鐵砲なる願ぎ事を叮嚀に譯し告げたり……此飜譯に一坐ドット大笑ひを催はせり、又

是と同時に滿座の可笑き面白き目玉は皆余の一身に向つて聚りたり……獨り彼のコシモト孃は余が此不作法なる問ひをも咎めず、叮嚀に返しの謝辭を述べ、天女は此新しき踊りに慣れざる旨を告げたり、此事或は事實ならんか、夫とも外に譯あるか……或は余の不作法なるが原因となりて之を拒まれたるか、余は更にこれを解せず……余は亦初めより斯る事の不作法なりとも思はず……又無鐵砲とも思はず……眞底天女と一組舞はんと所望せしなり、相手となるの榮を得んと欲せしなり、去かし最初他の賓客の余を止めたると、今又滿座の人々の余の仕打を笑ふたるとを以て推量すれば、全く余が此擧動は日本の「エチケット」に於て甚だ無禮なりしものならん、愼む可き事にこそ。偖から自覺して見ると一時も此場には居られず、今は、優しき天女の容顏も余を叱り付けるもの丶如く思はれ、早速此場を引下るが上分別と考へたり、余は其儘すご／＼と一禮して分れたり、コシモト孃も目笑して其團扇頭を振背けたり、後にサラ／＼と絹衣の音したるは彼の舊の席に復りたるにぞあらん……余は此失策の爲めに彼の佛語に通せる天女と會話するの榮を失なふたるを憾み……又彼の音聲の妙なると目元の麗しさを思ひ出し……又彼の小天女は如何にして佛語を學び得たるか、如何なる高等の敎育を受けしかを想ひ遣り、ます／＼懷しく思ふたれ共、余が良心は轉た余を責めて、再び彼の天女の群に近寄る事を許さゞりし

舞蹈は猶も途ぎれずして、佛蘭西の「カドリル」あれば獨逸風の「ブアルス」あり、去かし遊樂の時間は漸くに過ぎ去りて、今はハヤ家路を指して歸り去る小車の音頻りなり、此會も終り近きにやあらん名殘を

しき事共なり

十二時半……「ヴアルス」の一番は夫の文官の娘ゴメンナサイ孃と余が最後の踊ありし、此乙女は、服裝見苦しからずして、恰も我國の婚禮前の作り方あり、但少しく田舍風の嫌ひなきにあらず、尙ほ細かに之れを比較すれば、カルペントラス又はランデルノー邊りの風付なり、今は踊り仕舞て手袋はめたる儘に小指に匙さし挾みて苦もなげに氷菓子を食べ居れり……讀者よ、此愛らしき乙女も、一旦紙作りの圍ひしたる自宅に歸れば、直ちに角張りたる「コルセット」を脫ぎ捨て、花鳥の縫摸樣ある佛敎袖に着替へ、床に平坐して茶碗に盛りたる飯を細長なる二本の棒にて食する事あらん、去かし彼等の家作り、彼等の衣服、彼等の家風、彼等の食物は日々に變化して、初は物眞似に過ぎざりしも、今は却て眞率に之を實行して怪まざるに至りしと云へり、一般に日本人が變化に勇氣なるは彼等が其歐羅巴風の料理を眞底好んで食するを見ても知られたり、實に何事にも英敏なりと云ふ事は、日本人が彼等の祖先より讓り受けたる遺傳なる可しと承知せよ

余と此乙女……今は甚だ親き友とはなりぬ、マルカイボーの「ヴアルス」の踊餘りに長かりし爲めに、身に汗する迄に熱したり……一方の窓押開きて欄干に出で丶新鮮の空氣を容れては如何……然りソレ宜しかる可しと、相携へて、腕組みて一方の戶を明けたるに、嚮に舞踏の始まりしより爰に避けたる支那公使の一行……例のモンゴル髯の長衣を纏ふたる一團欒の眞中へ、知らぬ事とてポカリと出でたり……ア

、しまつた……モ口の内一切默りにて顔と顔……東京以來の敵意執念くも彼等の心猿を騷して、釣上りたる支那眼は鋭き光りを發して悉く余が一身を射たり……ヨセバ好かつた……全く宗旨違の……側へも寄れぬ大清國公使さま……言葉も通せぬ此お仲間……何の因果で斯る空氣の中へ落て來たか、定て彼等にも不興を起すならんにと、例の「コンタクン」帽と豚尾髮の後背を見渡せば、本夕の盛會も地球の迅速なる轉廻を留め得ずして今はハヤ終り近く、最前まで光明赫々たりし燈籠も半ば薄暗く、空には九星其の光を逞ふし、下は一面江戸の大都も暗黑世界と化し去りて、處々に映ずる街燈の光、樹木を照して物淋し、斯る中にも余が腕に助けられたる愛嬌ある乙女は常に機嫌よげに、親切に種々の話を絶たざるに勉め、余をして他念なからしめたり……獨逸風の樂隊は、アメリカ麥酒に浮かされけん、此時忽ち道化樂「マスコット」を勢ひ切て奏し始めたり、場中も爲めに大浮かれ……庭園の片隅より、一聲高く打揚げたる花火砕けて數萬の流星となり、下に群る見物人を照して、又忽ち繁華の鹿鳴館となれり

賓客の過半は何れも暇乞して場内閑豁になれり、淑女の幾群は亞米利加風に退陣を爲すもあれば、襟折り返せし踊り男子と相携へて戸口に赳つもあり、例の黒きジンリキサンの一群は又がや〳〵と騷ぎ出して、一人〳〵彼の小車の内に蹲踞り、暗路を横切り、思ひ〳〵に己が家居を指て歸れり、中にも馬車の相乘は最も勢ひよく、例のハイ〳〵と呼ぶ聲も次第〳〵に聞えずなりぬ、總トて之れを評すれば、吾々に名譽を與へたる今夕の舞踏會たる、實に盛大に、美麗に愉快に、滿足のものにてありし、今夕の會

合……今夕の作法、今夕の舞踏……何れも日本帝室の誘掖に依り學ばれたる……或は不本意乍らも急に學ばれたるものならんかと臆測すれども、兎に角日本上流の貴女紳士が、僅少の年月に此六ヶ敷物眞似を果せる其技能に驚かざるを得ず……兼て輕業仕事に有名なる日本國民の技能を最も有益なる働きに現したるものなりと評せざるを得ず……余が一二其間に快からざる評語を挿みたるは、決して底意あるに非ず只有の儘を寫眞して千八百八十〇年の江戸舞踏會を讀者に知らしめ之れを標準と爲し置きて將來の江戸舞踏會と比較對照せん事を望むのみ、想ふに、瞬息ある速力を以て開化進歩しつゝある日本の貴女紳士も、今數年の後此紀事を讀みたらんには、自ら覺えず噴き出して、前后二身なるかと思ふ程變化せしを悟るなる可し、年々歳々菊の花色いろ變らずも、人は去年の人に非ず、余は現今現在の日本貴女紳士が、數年の後、此花よりも美麗ならん事を祈るなり

招待劵の裏書今は緊要の時となり、一時の特別汽車シンバシを發するに間もあるまじ、組みたる腕も俄に解けて、歸り支度も匆々に』令孃貴婦人及び紳士サヨウナラ　（完）

◉青春夢　　抱一庵主人譯述

ホーソン氏は米國近代の文豪なり。爲くる所の著作、文品倜逸筆致輕妙、而して道義の念つねに文の表裏に充溢す。本邦の文士にして氏の文を譯せるものも尠からず、余もまた曾て其二三を瀆せり。今日本之少年記者の余の文を徵すに遇ふて、ホーソン氏の文を譯せる余の舊稿を把て、删潤改竄して以て其責を塞ぐ。原篇はトワイス、トールド、テールス中に收むる所、懇ろに少年青春の幾度もする躁狂を諷戒せる、奇意芽甲の諷刺譚、讀者は氏の文品を味ふと共に、其意を咀嚼して、深く自から警むるところありて可なり。

龍年七月念三、數寄屋橋外の僑居に於て、抱一庵主人しるす。

第一回　『止めよ、止めよ』

怪奇なる醫博士內道は、一日渠の書齋に四個の友を招ぎ呼べり、其人々は、白髮を戴ける老紳士等、ミストル瞑度運、コロチル奇留龍ミストル瓦穀、及び老寡婦其名を瑪瑠と呼べるものとなりき。此等の人々は、皆過去の生涯に於て不幸不運の裡に懊惱困苦して、今やまた久しからずして、墳墓に託くことの已むを得ざるを、哀み惻み窘しめるの人々なり。

ミストル瞑度運は、渠の壯年の時代に在ては、名だゝる富商なりしかども、無謀の投機業に從ひて、忽

地に資産を亡ぼし竭し、今は街に食を乞ふの徒と、相去る甚だ遠からざるものとなりぬ。コロチル奇留龍は、壯者の鋭氣に任かせて宴博淫遊縱いまゝにせざるはなくそが爲めに、遂に體を傷つけ氣を亡し、今は氣息すら喘々たるばかりなり。ミストル瓦穀は虛名虛譽をのみ赫くが如くに追ひ隨へる、無操無節の政治家にして、暫らくは、其名を世に知られたれとも、世は遂に渠を容るゝを許さず、社會を退隱してより既に幾年、今は失望と云はんよりは、寧ろ怨恨の境に沈み居れり。老寡婦瑪瑠の事に關しては、世は明かに渠の消息を告げざれども、渠が壯時一箇婀娜たる美婦たりしこと、渠が何等か醜惡なる世評を受けて、幾年以來は世と立交じることなく、鬱憂煩悶の裡に生活を遂げたることゝは、朧ろげに世に傳はりあるなり。前記せる三紳士等、ミストル瞑度運、コロチル奇留龍、ミストル瓦穀は、各々過去の少女瑪瑠の憐愛者たりしこと、又渠を獲んとしては、三者互に反目して相爭ひしことのありたることゝを、記臆し置くは、此の一條の物語を讀まん人にとり、甚だ緊要のことにてあり。

此の譚を前むるに先ちて、少しく讀者に暗示し置くべし。他にあらず、博士丙道を始めとして、自餘の來客、時としては渠等自身を離れて一種別樣の人物と化し去りたるが如くに、世間より思はるゝあり。去れど、此とても別に奇しきことにもあるまじ、現時の難義、ニが〱しき過去の臆想に困しみ悶えては、年老ひたる人の己を失ふことは、間々あるが習なり。

座に就きたまへと、來客を撼かしすゝめ、博士丙道は扨て云ふやう『我が親愛なる老友諸氏よ、今日諸

氏の來駕を辱けなふしたるは餘の義にあらず。余が年來此の書齋に於て、經驗したる種々の技術の中に就て、殊に諸氏の補助を請ふて、實驗を全ふせねばならぬ一新技術の之あるなり。諸氏は能く余の乞を許し呉たまふべき歟』斯く云ひつ渠は渠の書齋を子メ回せり。

ア、博士丙道の書齋は一見以て人を驚かすべし、蜘網は左まで高からぬ天井の隅々に罣り纏はり、床には灰色なる塵埃の寸に滿つるまでに堆かく、壁の周圍には其數幾つとも知らぬ、大小の書筐、大少の書籍の、雜然として充ち滿てるが、幾重にか累なり並べられありそが中央なる、一箇大きやかなる書筐を蔽ふて、何者の肖像にや、金銀もて置箔せる一葉の古びたる圖畫の幽然として、掛れるあるが、世の噂する所に據れば、何事にても、渠が一人にて決しかぬる事に遇へば、博士丙道は先づ此の肖像と談義して、然して後何れとも其の事を決するとのことにてあり。更らに右手の薄暗き隅に眸を放てば、ア、愕くべし、其處には見るも恐ろしき骸骨の四圍の闇々たる中に、獨り眞白に睨むが如くに、此方に向つて、屹然としてツッ立てり、又、此方の二箇の筐に跨がりては、半ば虫蝕て、斑なれども、昔は如何に美事に形られ飾られたらんと思はるゝ框の中に、是れも塵埃にて曇り果てたる一面の方四尺あまりの大鏡あり、此の鏡につきては、種々奇怪なる噂の世に傳はりあれども、當博士の手にかゝりて病に死せる亡命者は、渾べて皆此の一面の鏡の裡に住し居り、何時にても、人の此に臨めば、渠者は其のニガくしき面を顯し來るとの話は、當市中にて何人も皆口にする所なり。更らに又入口の右手の壁には、絹緞

子なんどの綺麗びやかなる幾重の衣を纏へる一個妙齡なる少女の丈け長き肖像掛れり、今より五十餘年前、博士丙道は此少女を娶らんとするばかりなりしに、其の結婚の夕に當りて、少女は博士が與へたる方劑書の藥を服したるに、そは藥違ひにて、少女は遂に此が爲めに、彼世の人となれるとなり。奇怪は單り此のみならず。博士は黑皮を以て蓋ひ、銀の鎖匙を以て閉たる、大きやかなる厚き一卷の書を藏めり。其表面には、何等の文字も記しあらず、何人も又此書名を知るものなし、去れど魔術を載せたる書なりとは、何人も之を云ふなり。一日、當家の下婢が何心なく、塵を拂はんとて、斯書を擎げたるに、恠しむべし、恠しむべし、此れと同時に、彼の密房の骸骨は戛然として遽かに高く響き、少女の畫像は一步ばかり床の上に前み出で、大鏡の中には、靑白き幾多半面の貌顯はれ、又彼の中央に掛れる魔像の口忽ち開きて『止めよ、止めよ』と二聲三聲いとも鋭どき音調もて叫べりとなり。以上に記せる如きもの、是れ當家の主人博士丙道の書齋なりき。

第二回　『實に五十五年間』

時刻は夏日の午後なり、一個見事なる玻璃の壺を載せたる、烏木の圓テーブルは書室の中央に据ゑ置かれあり。退色たる薔薇色の帳を透して窓より射り來る光線は、恰かも玻璃の壺の底に落ちて、其燦然たる光輝は、卓子を繞れる五個の人物の灰色なる面上に反射し閃めけり。三鞭酒を盛れる盃、四つばかり又玻璃の壺と共に添えあり』主客坐定まりて博士丙道は更らに又繰返せり『吾親愛なる老友諸氏よ、余

は今斬新なる一奇術の試驗を遂げんが爲めに、敢て諸氏のタスケを請はんと欲す、諸氏之を諾し呉れよ』

前にも云へり、博士丙道は一種奇怪なる老博士なることを。渠は實に種々の偏僻を有し居るなり。而して此の種々の偏僻は即ち種々の奇談を産み出し來るの種子となるなり。余は明ちかに諸君に告ぐ、此等の怪談はヨシ尋常あるまじきが如くに見ゆるも、余は余の良心に問ひて當さにあるべきのこと丶思ひ居るなり。將た今まさに說き出さんとする此の一條の大奇談、若し讀者の直正誠信を駭かすことありとせば、余は虛談家の號稱を甘んじて受くべし。

四個の來客は、丙道の云ふ所を聞て、さては排氣鐘にて鼷鼠を捕ること歟、左なくば、顯微鏡にて蜘の巣を吟味すること歟、左なくば、渠が常に來客をオドカしもて樂とする、此種の惡戲に外ならざるべしと思ひ設け居たり。丙道は人々の答をも待たず、部屋の彼方に走り去り、更らに彼の魔書として、人々の目指し居る大卷を挾さみつゝ出で來り、是をテーブルの上に恭しく据へつ、銀の鎖匙を解きて卷を拔き、ページの中ほどより、觸るれは直ちに粉となるべきまでに枯れ乾きたる一薔薇花を攫み出して、吐息と共に語り出せり『此の薔薇花、此の萎み碎けたる薔薇花は、五十五年前まことに麗はしく咲けるものにてありき。こは、見たまへ、彼處に罣れる少女の像余が未婚の妻、シルビアワードの余に贈れる所のものなり。思ひ回らせば實に五十五年間、此の古卷のページの裡に藏め置けり。まことに淚の種あるかも。イヤ、コは要なき事なり、更らに諸君に問ふべし、半世期を經過したる此の凋落の薔薇花も再

び舊の如く花咲くことの能ふべしと諸君は思ひたまはずや

老寡婦玻璃は嘻々として、輕く笑ひつ『タワ事を云ひたまふもの哉御身の問は、年老ひたる余の如き老婆の、再び昔の乙女に立返り能ふものかと問はるゝにもひとし』丙道『左は云ひ玉ふな。見られよ』丙道は其枯凋したる薔薇を採つて、卓上なる玻璃壺に投ト込めり。始めは泛々として流動物の表面に漾へ居りしが、見る／＼枯れ砕けたる花瓣は、パチ／＼と響して發き始め宛がら死の眠より醒めたる如く、眞紅の色、其花片に灑ぎ來り、幹及び小枝ハ、忽ちに綠色と變化し去れり。之を見るや坐客は一齊に立あがり『イヤ誠とに手際なる瞞技を見たり、主人公、寧ろ吾等にタチまでも示したまはずや』丙道『瞞技にあらず、瞞技にあらず。御身等は二三百年以前、西班牙の冒險者ポンス、デ、レオンが踪迹したる『不老の泉』のことを曾て聞かずや』老寡婦玻璃『去れど渠は遂にそを見出したりしか』丙道『否、渠は見出し得べき場所に於て踪ねざれば、見出し得ざりしは勿論なり。余の聞くところにして誤らずんば、著名ある此『不老の泉』は、マッカコ湖を隔つる程遠からぬ、フロリダ半島の南部にあり、其水源は木蘭玉蘭なんどの靈草異木にて蔽はれあり、此等の樹木は何れも數千歳を經ざるはなけれど、此の靈泉の功德によりて、四時いづれのときも、菫々菜よりも倘ほ軟らかに茂れりとか慥かに聞けり。余の知友は常々より余の嗜好を知るものから、頃日余に其の靈水を送り越せり。諸君が目睹する此の壺中の水は即ちそれなり』

博士が云ふ所に信を置かざる、コロチル奇留龍は呵々と高く嘲へり『まことに受とりがたき話にてあり、去らば其靈水人身には如何ほどの効果あるべき歟』

丙道『そは御身等自身にて判斷せらるべし。御身等は誠とに果報めでたき人なり。此の靈水の功驗のあらむかぎり御身等は是より瞬く間に活潑なる少壯者と變化し了るを得べし。余に於ては此齡まで生長し來るには、中々の苦勞を重ねたれば、急ぎて壯者と變りたしとは自から思はず。他事はさて措き。御身等の許を得ば、急ぎて此の實驗のスヽミを見るべし

斯く云ふ間に博士丙道は、四個の三鞭酒の盃に、溢るゝばかりに、『不老の泉』の靈水を灑ぎ込むよと見えしが、白霧颯と卓上に漲り蔽ひ誰か彼かも見え分かぬと少焉なりしが、忽地にして白霧は消え失せ壺の水の上層には銀色の泡粒プツ〱と沸騰せり。得も云はれざる香氣の紛々たれば、坐客は何等の美味の質の此水中に混りあるを疑はず、博士が所謂回春の力ありと云へることは信せされども先づ一口試み見んとて、各々盃を手に株りて飲まんとするに

『云ふことあり、暫し待ちたまへ』と博士は叫びぬ

第三回　『更らに與へよ』

丙道は儼然として云へり『諸君が此の回春の靈水の功德に據りて復活し、更らに再たび人世の新航路に足踏みせんとするに先だちて、從來歷來りたる經驗よりして、今後御身等が方針ともすべき處世の條

件を、豫め定め置くべきことは、諸君にとりて甚だ緊要の事にあらずや。諸君の如き又と獲難き幸運を得られむとする人々が、今后の壯年者の摸範ともなるの覺悟なくして只だ物ズキに此の靈水を啜らんとするは、甚だ不覺の至りにあらずや、又愧づべきの至りにあらずや』

之を聞ける客の一個だも博士の辭に答へんとはせず、只呵々と打笑ふのみ、如何に密接して悔悟が過誤の迹に尾するかは、明らかに知りつゝも、再び又其過誤の跡を履まんとするが如くに見ゆるなり、博士は腰を屈めて云へり『最早詮なし、去らば杯を擧げたまへ、ア、余は余が經驗を遂ぐるに於て、最も適當なる賓を招き得たるを甚だ喜ぶ』

來客は博士の云ふ處を明らかに解し得ず、ア、解し得ざるまでに渠等は老ひたり。渠等は今再び活潑なる壯者と變り得んとする其門口に立ちてすらも、尙ほ心地を激し得ざるまでに老ひたるなり。渠等は今何等の感ド、何等の慮りもあらず、徒壯者と變り得可くんば壯者と變り見んと欲するが如きあり。此の人生の大變化の岸頭に立ちて、何等の恐懼、何等の歡喜、何等の期望をも抱かざるが如きなり望まざるが如きなり、怖れざるが如きなり。渠等は茫乎として杯を把れり、靈水を啜り了れり。

怪しむべし、怪しむべし。見る〳〵來客の狀貌に、著るしき變化顯はれり、果して靈水の功德なる歟、酒精と日光との刺撃ある歟、渠等の頰邊に淡紅の漲りはドめり、渠等は互ひに睨み合へり、何等の魔力の襲ふありて、現在の地位より遙のカナタに奪ひ去られんとするが如くに渠等は思へり。老寡婦瑪瑙

は手を擧げて渠のボンチットを擧でマワセり。渠は今一個の婦人たるが如き感の起れるなり。渠等は一齊に叫び出せり『更らに、更らに此の靈怪なる神水を我々に與へよ、更らに多く與へよ、我等はヤ、若返りたるが如き心地すなり、去れど倘ほ未だ我は老ひあり、早くよ、更らに多く我等に與へよ』冷然とし平然として、其場の光景をナガメ居たる博士丙道は常よりも倘ほ、沈靜なる音調もて『堪へよ、堪へよ、左までに急くことかは、御身等が今日の御身等と爲るまでには、如何に多くの歳を重ねたるかを臆ひ見よ、など一時半時の猶豫の能はざるものあるべき』更らに又音調を低ふし『左までに懇望せらるゝものを、好し更らに一觴を各位に薦めん』

博士は又玻璃の壺を把つて、四個の杯に靈水を灑ぎ込めり、待兼ねたる如くに、人々はそを握ぎりつゝ、只一呼吸に呑み乾したり。奇怪。奇怪。未だ靈水の渠等の喉を過ぐるや、過ぎざるやに、渠等の四肢五體は俄然として變化せり、ウルミ翳める眼球は燦爛として光を放ち、灰色なりし渠等の頭髮は次第〳〵に黒みはじめり、矯捷敏潑なる三個の少壯紳士は漸やくに二九の春を過ごせしと覺ほしき、艶麗ある一個の貴女と、博士の卓子を繞ぐつて立てり

目を側めて瑪瑙の見る〳〵婀娜たる容姿に變り行くを、ナガメ居たるコロチル奇留龍は飽までに口を開き『オヽ瑪瑙、御身の姿の美はしさよ

奇留龍の賛辭の常に誇大に過ぐるを識り居れる老寡婦、否、破瓜の少女瑪瑙は馳せて鏡面を覗き込めり、

渠は例の醜悪あるシワ面の其處に顯はるゝ可きを懼それ戰けり、コハソモ、妖艶なる一個の美婦端然として鏡中に佇めり、

老耄して平生の知覺を喪へるか、酒精に激せられて、狂痴の境に立てるなるか、若し此の二者の孰れかにあらざりせば、博士丙道の所謂『靈泉』は當さに其功あるべきに似たり。三紳士の不意の擧動は、明らかに其功を證據立つるが如きなり。

第四回　秋天半夜の月光に似たる光輝

ミストル瓦殼の胸中には、政治上の感念のムラ〳〵と充ち滿てり、今は開き得らるゝまでに口を開らきて、愛國心、國家の名譽、人民の權利なんどに就きて、斷續の語を、囂々として叫ぶなり、今は渠自身すら聽取ることの能ふまじと思はるゝまでの低聲もて『コは秘密なり』、『コは秘密なり』と云へる冒頭を冠らして、細々と何事をか囁やくなり、或は高貴の面前に立ちて演說する時にてもあるかの如く、如何にも沈着に、如何にも儼格に、又如何にもリキミ返つて、何事をか切口上にて陳ぶるなり、コロチル奇留龍は、心の底に潛める愉快の感の發揚を自ら抑ひ止むること、能はざるものゝ如く、フラ〳〵と跳るが如くに立上りつ、左手に杯を攫み、右手に肉叉を握り、低く唱ふるザレ謳の調子につれて、面白可笑げに卓上を敲きはじめり、而して渠は又折々に傍らに立てる瑪瑙を偸むが如くに打見やれり、ミストル瞑度運は、貨幣を計ふるが如き手眞似して、又其數をすら口にするなり、斯くして又遽かに憶ひ起した

るやうに『氷塊を東印度に輸らば利益あるべし、其氷塊は鯨の脊に積まば單り手に彼の地に行くべし去らば中々の儲けあらん』など呟くあり、老寡婦瑪瑙に至りては、更らに又笑ふに堪えたり、渠は鏡面に映れる自身の影に對し、或は屈まり、或は立ち、或は世界に又と二人なき親友に對して禮する如く、滿面に笑傾けて挨拶し、或は世界に又と二人なき仇敵を睨むが如くに眥昂げてネメつけ見るなり、渠は斯くして暫らく鏡の前に佇立み居しが、不意に又た、丙道の傍に近づき『親愛なる博士よ、余は今少し若くなり得んを望む、與へ玉へ。今一盞』丙道『御身は慥かにシカク欲したまふや、好し余は吝まざるべし』忽まちにして又、四個のコップに、靈水湛へり、燦然たる細かき泡粒は、恰かもダイアモンドの閃めく乎と、疑はるゝばかり、時は今薄暮にしてヤミは一瞬一瞬に玻璃窓に蔽へかゝり、室内何となく幽然たるに、卓上の靈水を盛れる玻璃壺の底よりは、秋天半夜の月光に似たる青白き光。黝然として、人々の面上に反射する其場の光景一種云ふべからざるスゴミの室内に充溢せり。

博士丙道は平然として、安樂椅子に凭りかゝりつ、太とき煙管をクワひながら、立騰る烟の隙より、今人々が將さに杯を擧げんとするをながめ居たり。

第五回　『許せ余は老人なり』

三度目の觴を傾け盡すや否や、何等か『怪魔』の躍て、渠等の頭腦中に込入りたらむやうに一顧眄の間もあらせず、渠等の態度、風采、宛然、活潑々地の兒童の如くなれり。煩悶憂苦の鎖もて一インチの隙間

もなきまでに、接ぎ續がれたりし過去の『齡』、世を果敢なみて死の淵に自から投ぜんとするまでに迫られたりし『哀』、自から顧みて驚くばかりなりし『老衰』、渾べて此等の憶想は、惱み悶へたりし惡夢、その惡夢より喜んで醒め來りたる時と瞿然として想ひ起こす幻よりも、尙ほ微かに渠等の胸底に印するあるのみ。何人にも平等に天の附與したまひたる。而して渠等自から最も早く消し滅ぼし了りたる壯者の活火、今や亦渠等の期望の上に閃めき輝やけり、渠等は今や新たに造られたる世界の上に、新たに造られたる人の如き感あるなり、

渠等は雀躍して高く叫べり『若し。我等は若し。遊ぶより外。我等は何をなすべき』

世の所謂人の特生たるもの、アマリに年老ひたる人に見るべからざる如く、アマリに年若き人に於て、亦見るとの能はぬあり、渠等は今は、奇留籠にもあらじ、瞑度運にもあらず、只だ是れ兒童の一群たり。數分時の以前までは、渠等實に其人なりし老耄者を今は嘲けり罵り笑ふなり。一人は博士の後背に潛みて渠の白髮を引きつ。博士の苦笑を湛へる顏を見ては、嬉々として手を拍て笑ふなり。一人は眼鏡を鼻の上に抓み載せて、恭しく兩手を膝のほとりに捧げ、身を反らして。博士が魔書を繙き閱する時の如き狀態を眞似し見るなり。

部屋の彼方より此方に馳せ、此方より彼方に驅り、狂ひ躍り回るなかに、流石に瑪瑠は婦女なればや、博士の傍にシヅカに進み『老爺起ちて、余と共に舞蹈みずや』

他の三人は倒れむばかりに笑ひ叫べり『コは面白かるべし、コは面白かるべし、腰の屈める我が老爺が舞蹈するとは』

老博士は靜かに答へり『許せ、余は老人なり、舞蹈の時代は疾くに過ぎたり、御身の如き麗はしき伴侶とは何人も喜んで相手となるべし、他の人々に問ひ見たまへ』奇留龍は傍より『瑪瑙よ、余と共に』聞つけて驅け來れるは瓦穀なり『否、否、否、我れこそ瑪瑙の相手たるべし』他の一人、是れミストル瞑度運なり『瑪瑙とは既に五十年前に約束あり、故の手を他に渡すことは決してならず』

三個は今瑪瑙を繞つて簇がり立てり、一人は手を握り、一人は足を攫み、一人は腰を抱き、互に遣られト遣られじと爭ひ合ひり、瑪瑙は手を擧げ足を撼かし、故意に振はどかんとするの狀態はなせども心よりして、人々の抱擁を避けんとする樣にも見えず、

一面には是くの如く、燃え熾くるが如きニギヤカさはあれども、一面には亦氷よりも尙冷やかなる光景の、室内に蔽ひかゝれり。

此方の長き鏡面には死せるが如き、青白き三個の貌默然として映り顯はれり。

第六回　『只是れのみ』

戞然一聲、中央の圓卓子覆へれり、三個が瑪瑙を擁してタワヒなく狂ひ廻るハヅミに、卓子を蹴倒したるなり。卓上に載せありたる玻璃壺、盃、その他一切のもの渾べて微塵となりて床の上に碎け去れり。

一羽の胡蝶翩々として、輕く部屋の內を翔り居りしが、終に博士の眞白き頭髮の上に止れり。是れ靈水が床の上に流れたるとき、彼を濕ほし、彼れをして再たび陽春のものと化らしめたるなりけり。

博士は椅子を離れ、ヤ、怒氣を帶びたる音調もて『諸紳士靜まりたまへ、亂暴にも程のあるもの、諸君は此の靈水を無にするに至つては、余は最早默しては居られず』

渠等は呆然として靜かに立てり、次でダギ／＼と二三步退ぞき、一戰慄して眼を睜れり、明皎々たる玉殿より、黑闇々たる巖穴中に引入れられんとするが如き思ひ、渠等の胸中に起りたらんやうに見ゆるなり。

博士丙道は、玻璃壺の碎片に附着しありたる、彼の五十五年前の薔薇花を拾ひ上げつ、夕陽の微光にかざし『可憐なるよ、我がシルビアの手に觸れたるもの、ア、今や又枯凋し去らんとす』

實に博士の云ふ所の如くなりき、四個の客かそを眺め居る間もあらせず、霧團々たりし若葉は見る／＼茶褐色に變り、次で灰色となり終はりは觸れば碎けんばかりの脆き枯葉に變化し、鮮妍たりし眞紅の花、亦忽ちに枯凋し去れり。

博士は滴れさらむやうに、丁寧に掌の上にそを載せつ『斯くなりたりとて、余は捨てじ、青新なりし時にも增して愛するなり』斯く云ふ間に、渠の頭上に止まり居りし胡蝶はフラ／＼と床に落ち、再たび舊の如くに死に果てたり。

第六回　をはり

來客は再たび叉戰慄せり、一種云ふべからざるサムミの渠等の頭上を掠め去れり、一瞬一瞬に渠等は再たび舊の老紳士と變化し去らむとするが如きなり。生命の變化が斯る分時に蓁まりたるものにてありし歟。渠等は是れ一群の幻影のみにてありし歟。抑も叉丙道の一場の瞞技なりし歟。

ア、奇とすれば信とに奇なり、然れども彼の靈怪なる『不老の水』は、酒精よりヤ、烈しきものと見ば、それにて足れり、渠等は實に一瞬時にて壯者となり、叉た實に一瞬時にて舊の老耄者と變化し了りたるなり。

博士丙道は、最初に來客に接したるときと同一なる態度音調もて『愕く勿れ諸氏、御身等は實に再たび老者と變りたるなり、見よ『不老の水』は既に盡く床上に滲み了りぬ、去れど余は更らに之を惜まず、ヨシ余が庭前にかゝる靈水の噴出するとも、叉靈水の効が今の如く瞬間ならずして幾年間を支へ得るとも、余は決して啜らむと思ふ心はなし、只之れのみ、只之れのみ、是れぞ御身等が余をして學ばしめたるものにてあり、多謝』

然れども四個の客は、渠等自身更らに之に據て學ぶところのものあらざりき、渠等は朝に夕に、此の靈水を啜らむとてフロリダ指して出立せり。

(大尾)

短篇小說 明治文庫第八編 終

大賣捌所

東京	東京堂
仝	水野慶次郎
仝	東海堂
仝	巖々堂
仝	信文堂
仝	石川商店
仝	上田屋本店
大坂	盛文館
仝	吉岡平助
仝	柳原喜兵衛
仝	梅原亀七
仝	岡島新聞舗
仝	平井新聞舗
京都	中村峯雄
仝	東枝律書房
名古屋	田中治兵衛
仝	川瀬代助
仝	新文舎
仝	片野東四郎
神戸	熊谷久榮堂
神戸	舟井新聞舗
仝	吉岡支店
仝	船山堂
熊本	長崎次郎
鹿兒島	吉田幸兵衛
長野	西澤喜太郎
松本	水琴堂
仝	高美書店
四日市	伊藤善太郎
津	河島九右衛門
岡崎	愛友舍
濱松	谷島屋源三郎
仝	林新聞舗
沼津	蘭契社
甲府	柳正堂
横濱	丸屋書店
仝	里見亭太郎
鴻ノ巣	長島爲一郎
東金	多田屋本店
千葉	仝支店
佐倉	吉田德兵衛
佐原	朝野利兵衛
水戸	川又銀藏
大津	澤一二郎
仝	太田支店
上諏訪	宮坂日新堂
小諸	廣文堂
飯田	皆川文星堂
前橋	煥乎堂
宇都宮	内山湊三郎
栃木	宮川庸三郎
平	清光堂
白河	奥村書店
福島	上野屋彦太郎
仙臺	木村文助
仝	佐勘書店
石巻	山口德之勳
盛ノ岡	佐藤庄兵衛
仝	便益堂
弘前	野崎九兵衛
青森	鎌田商店
山形	八文字屋書店
仝	牧野德太郎
米澤	素月長平
秋田	成見清兵衛
仝	鈴木秋穗堂
横手	大澤忠四郎
増田	東海林書店
酒田	鈴木喜八
福井	品川太右衛門
武生	安立庄三郎
金澤	雲根堂
小松	宇都宮源平
富山	清明堂
高岡	學海堂
新潟	櫻井產作
長岡	覺張治平
仝	目黑十郎
高田	室直三郎
仝	高橋書店
水原	西村六平
松江	川岡清助
岡山	武内彌三郎
姫路	朝榮社
廣島	松村善助
山口	宮川臣吉
和歌山	平井文助
德島	阪井萬吉
博多	積善舘支店
仝	森岡商店
久留米	菊竹儀平
大分	山川正三郎
長崎	虎與號書店
仝	鶴野書店
佐賀	河内汲古堂
函館	魁文堂
札幌	聚文堂
仝	野前長發
仝	小鹽自治堂
仝	萱問左右太

版權所有

明治廿六年八月三十日內務省許可

明治廿七年二月廿六日印刷發行

明治文庫 定價	
一册(二百頁)	金拾五錢
六册前金	八拾五錢
十二册前金	壹圓六拾錢
廿四册前金	參圓拾錢
郵稅一册六錢	

編輯兼發行者 大橋新太郎 日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 杉原辨次郎 京橋區元數寄屋町四丁目貳番地

印刷所 杉原活版所 京橋區元數寄屋町四丁目貳番地

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

博文舘編輯局校訂

帝國文庫

全部五十卷
紙數五萬頁
全部厚サ七尺五寸
一册紙數一千頁

正價 一册金五拾錢〇五册前金二圓四拾錢〇十册前金四圓六拾錢〇卅册前金拾三圓〇全五拾册前金二拾圓〇郵便税一册拾四錢宛〇通運便全國一般一册拾錢

體裁 縱六寸五分橫四寸五分厚サ一寸五分●洋裝背皮金字入堅牢最上美本●毎卷密畫數十個挿入●全文總フリ假名ヲ付ス、印刷ハ日本第一ノ活版工場秀英舍ニテ新鑄五號活字ヲ以テ鮮明ニ印刷ス、洋紙ハ上質堅靱ナルモノヲ用ユ、校正ハ嚴密正確ヲ極ム、全部五十卷ノ體裁同一ナルヲ以テ完成ノ際ハ其美觀實ニ居室ノ飾品トシテ絶美ノ光彩ヲ有スベシ

出版期限 明治廿六年三月ヨリ毎月二回宛出版シ廿八年三月迄ニ全部完成スベシ、本館ノ出版ハ豫約申込ノ多寡ヲ論セズ陸續出版スベシ、殊ニ本書ハ大出版ナルヲ以テ秀英舍ト特約シ數十名ノ職工ト數臺ノ蒸汽器械ハ常備運轉シ期限内ニ全部必ラズ完成ス

本書特色 本書ハ和漢ノ軍書小説實錄等大家ノ傑作名著ハ悉ク網羅纂輯シ其紙數ハ五萬頁ノ大卷ニシテ本邦著名ノ群書類從ニ數倍ノ字數アリ實ニ從來未曾有ノ大出版ニシテ其價格僅ニ二拾圓ニ過ギズ其便利有益ナル、其低廉無比ナル亦多言ヲ要セズ

著述出版の二業は最も文運の進歩を資け而して出版の難きは實に著述の難きよりも難し故に往昔某侯は僅に康熙字典を飜刻するがために其の封三萬石を舉げ水戸侯は大日本史の爲に三代の間年々五萬石を供給せりといふ嗚呼當時に在て大出版の事業は諸侯の力を以てするも尙且辛ふトて之を成せるに過ぎず今や明治聖代活版印刷術の進歩に由て出版事業の難易固より當年の比に非らずと雖も尙は決して容易なりと云べからず弊館幸に優渥なる國恩と世上海岳の眷顧とに由て此大事業を成すとを得るに至れり依て玆に大に奮發して帝國文庫なる大出版を企てんとす帝國文庫は毎册一千頁全部五十卷總紙數五萬頁に達し字數三千二百萬に餘り收むる所幾千卷なるをしらず洋裝堅綴の製本とし尙之を積めば高さ七尺五寸に達す古人等身の書を大部とすと雖も帝國文庫は遙かに其上に出づ太平御覽群書類從の浩瀚なるも本書に比すれば實に遠く及ばざるあり眞に和漢開闢以來絶無の大出版なり、帝國文庫を出版する爲日本第一の活版工場なる秀英舍は精良なる數臺の器械と熟練なる數十名の職工とを增置し特に萬端の準備を盡せり其器械職工洋紙を要すると恰も年中間斷なく日々二萬枚以上を發刊する大新聞と相當れり而して其年月を要ること二十有五ヶ月即ち滿二年と一ヶ月に至る抑も弊館今特に此の大出版を成すは大に和漢名家の好著述を傳へて文運に資益し聊か江湖に酬ゆるの微志に出づ幸に平常愛顧の諸君は此書に由て無二の至樂と明治聖代出版業の大進歩とを徵せらるべし、出版業に尙ふ所は廉價を以て好書を供給するに在り故に本書は和漢開闢以來絶無の大出版なると同時に又古今無雙の廉價を以てせり其鮮明堅牢精正兼ね備へて而して非常の廉價なるは當に當代出版業の摸範たるべくまた以て出版業の大進歩を示すに足るべし

自第一編 至第四編 校訂 **眞書太閤記** 全四册 四千百頁

皇祖開國以來玆に二千五百有餘年、英邁非常の士僅に手を以て算ふべし、然して一時俊傑雲の如く英豪林の如くなりしは元龜天正の際を尤も盛なりとす、中に就て身僕隷より起り風雲に乘して天下を席捲し職關白の尊に至りて位人臣の榮を極め所謂一世の智勇を推倒し萬

古の心胸を開拓するの偉略を備へたるは豐太閤その人に非すや、勳業の隆經綸の大洵に千古比なしといふべし、眞書太閤記三百六十卷、その一生の經歷を摸寫曲盡して人をしてその烱々の眼光を覩、暗啞叱咤の聲を聽くの懷あらしむ、唯た惜むらくは魯魚頗る多く亥豕亦少からず、仍て善本數種を取りて參考比校し、廣く世に公にす、蓋し英雄の面目を全するに庶幾からんか、此書一讀以て閑を消し鬱を排するの小說に充つべく、以て正史の闕漏を補ふべく、亦以て勇武節義の氣象を養ふに足るべし

第五編 校訂 源平盛衰記　全壹册 千三百頁

我邦演義の稗史中殊に奮くして尤も面白きは源平盛衰記に若くものなし其事其文共に千古に傳ふべきに足れり、古來版本寫本十數種ありて廣く世に行はるゝも之が爲めなり、但當時文運未だ開けざるの際に成り、而して歲次の久しき彼此傳寫したるが爲め、魯魚亥豕の訛謬頗る多く、假字の用法を誤れる、假字文中に往々和習の漢語調を雜へたる等は諸本何れも然らざるなし、隨て世人が此書の流讀に不便なるを歎ずること久し、仍て今回數本を集めて互稽參訂し、字を正し、假字を改め、句讀訓點の謬誤を校正して、以て世に公にす、盛衰記の版本世に多しといへども、恐らくは本書を以て唯一の正本となさゞるを得ず、猶ほ古劔の新たに磨を經たるものゝ如く、精氣光怪、千歲始めて顯るゝものと云ふべし

自第六編至第八編 校訂 南總里見八犬傳　全三册 三千五百頁

文の妙、事の奇、馬琴氏の八犬傳は實に宇內有數の珍書なり、唯其卷帙浩澣にして藏架に不便なるを憾むるのみ、本館仍て之を三卷に約す、用紙精良、印刷鮮明、製本は美にして堅く、插畫は密にして麗し、且卷首に附するに、依田學海先生の細評を以てす、先つ批評を讀みて後本書を味ひなば、必ずや手の舞ひ足の踏むを覺えざるの妙味あらん

第九編 東海、木曾 奥羽、江ノ島 道中膝栗毛　全壹册 千二百頁

快活磊落なる二人あり、膝栗毛に鞭ちて海內を跋涉し、足跡大八洲に遍し、頂天立地、旅を家とし形骸を土石とす、放浪自恣、滑稽洒落、その胸中實に光風霽月の如し、三伏の炎暑に苦しめらるゝの人、世途の塵熟に勞るゝの人、無事に困しむの人、匆忙に倦めるの人、共に一本を購ふて以て、清涼の仙丹に當て給ふべし。抑も二人を誰とす、曰く彌次郎兵衛、曰く喜多八、二人の言動を爲したるものは誰ぞ、人も知たる一代の奇人十返舍一九その人なり、一九は如何なる人物ぞ、卷首の詳傳を讀みて、一九と膝栗毛とを知悉すべし

第拾編 校訂 梅曆、春告鳥　全壹册 千百頁

爲永春水の小說は天然の美人の如し、敢て意を用ゐて修飾せざるも、情致纒綿、愛嬌滴れんとするものなればなり、その人を動かす處はその天眞爛熳の處にあるなり、梅曆、春告鳥は、爲永流即ち人情本中の傑出たり、これによりて彼は馬琴、種彦、一九、三馬等と併稱せらるゝを得るなり、梅曆は惠の花、梅曆、辰巳園、英對暖語、梅見舟以上は五種の總稱にして春告鳥は春告鳥、離の梅、春の若草三種の總稱なり、本編は此八種を集めて、例の美麗鮮明なる印刷、堅牢精良たる製本を以て發刊せられたり

第拾壹編 第拾貳編 校訂 通俗三國志　全二册 二千百頁

策畧、戰法、盛衰、興廢共に奇正の變を盡し、謀臣猛將雲の如く、俊傑各々其の技倆を逞ふして、人生の奇觀を極めたるは、實に支那三國の時代なり、東亞の大陸を三分して、奇正相爭ひ智勇相角し、縱橫夢幻殆んど端倪すべからず、之を古今東西の史に求むるも一も比敵すべきなし。故に三國志は水滸傳、西遊記と合して中華の三大奇書の隨一とす。特に此の書は歷史的小說にして、又小說的歷史なり。文章趣向の妙は能く英雄俊傑の眉目心胸を露はし、又奇變縱橫の奇觀を極めて遺憾なし。之を歷史として讀むも小說として視るも眞に宇內の奇書、天下の逸品なり。全部七十五卷今合せて二册とす、後漢の衰運より、奸臣の跋扈、忠良の苦心、美人の魂膽、梟雄の覬覦を首め、時會竟に英雄を生じて、桃林の盟となり、曹瞞の雄圖となり、臥龍の三顧、天下三分の神算となり、又赤壁の血戰に至るまで、人生の奇變、天下の妙觀を極む。

第拾三編 校訂 三馬傑作集　全壹册 千百頁

輕妙の筆を以て、敏活の意匠を寫すものは、式亭三馬が特有の技倆なり「浮世風呂」、「浮世床」が、如何に江戶の社會を、活描せる「辰巳婦言」、「船頭深夜」が、如何に深川の花柳を、摸寫せる「百馬鹿」、「四十八癖」が、如何に人情の微細を曲盡せるかを見よ。

第拾四編 柳澤、越後、黑田、加賀 伊達 騷動實記　全壹册 千百頁

主闇弱にして妻妾驕り、權奸威を弄して佞邪之に乘ず、奸臣驕婦と相結托して、所謂「お家騷動」茲にその形體を生成すめり、古より今に至るまで、殆ど一轍に出づるものゝ如し、而して國亂れて幸に忠臣出づるものあれば、天日を殆ど傾くに回すことを得るも、時に慘毒を後

に殘さゞるもの稀なり、主たるもの深く省みる所なかるべけんや、若し此意を以て此書を讀まば、或は修身齊家の龜鑑に充つべし、獨り消閑の娛樂のみに非さるなり。

第拾五編 校訂 **京傳傑作集** 全壹冊 千百頁

山東庵京傳は我邦小說家中の泰斗なり實に一の滑稽洒落を開きて世を嘲り、又所謂實錄流の一派を開き、門下に有名なる曲亭馬琴を出せり、其傑作の多き中に就て、「昔話稻妻表紙」、「本朝粹菩提」、「雙蝶記」、「忠臣水滸傳」、「優曇華物語」等は彼の創躰に係るものあり、其他「京傳予誌」、「白川夜船」、「通言總籬」、「娼妓絹飾」、「仕懸文庫」、「夜半の茶漬」等は彼の妙筆を揮へり

第拾六編 校訂 **種彥傑作集** 全壹冊 千頁

幽婉の筆を以て偉麗の結構を描寫し、京傳馬琴以外別に一機軸を出せるものは柳亭種彥氏その人なり、惜むらくはその著書今傳はるもの多からず、依て廣搜博雜、「淺間ヶ岳面影草紙」、「逢州執着譚」、「正本製」、「綟手摺昔木偶」、「觀音守護寶劍」、「勢田橋龍女本地」の六部を集めて世に公にす、或は讀本あり或は脚本院出に擬せるあり、之を繙かば一種異樣の光彩眼を射來るを見るべし

第拾七編 校訂 **星月夜鎌倉顯晦錄** 全一冊 / 校訂 **北條九代記** 全一冊

源將軍鎌倉に勃興してより天下の事實に奇觀多し、而も僅に三世にして亡ぶ、次で威柄を握るものは執權職北條氏なり、時政義時の兇猜に始まり、泰時時賴の恭儉、時宗の勇健に成り、高時の暴逆を以て終る、凡て九世の間亦屬目すべきの事少からず、今二書を合せて校訂印行す、源平盛衰記に次ぎて讀まざるべからざる書なり

第拾八編 校訂 **武王軍談** / 校訂 **十二朝軍談** / 校訂 **明淸軍談** 全一冊（二月出版）

第拾九編 校訂 **甲越軍記** 全一冊（三月出版）

第二拾編 校訂 **漢楚軍談** / 校訂 **呉越軍談** 全一冊（三月出版）

第廿一編 校訂 **西鶴傑作集** 全一冊（四月出版）

第廿二編 校訂 **焉馬傑作集** 全一冊（四月出版）

第廿三編 校訂 **風來山人傑作集** 全一冊（五月出版）

第廿四編 校訂 **六樹園傑作集** 全一冊（五月出版）

第廿五編 校訂 **其磧自笑傑作集** 全一冊（六月出版）

第廿六編 校訂 **水滸傳** 全一冊

第廿七編 校訂 **西遊記** 全一冊（六月出版）

第廿八編 第廿九編 校訂 **楠廷尉秘鑑** 全二冊（七月出版）

第三拾編 校訂 **椿說弓張月** 全一冊（八月出版）

短篇小説

明治文庫

毎月壹回發兌○毎篇讀切○彩色密畫挿入○洋裝大判美本

正價一册(二百頁)拾五錢○六册前金八拾五錢○十二册前金一圓六十錢○郵税一册金六錢

最も詩趣多きものは短篇なり、最も雅致を含むるものも短篇なり、最も奇絶なるものも短篇なり、最も壯快なるものも短篇なり、雜感を捨て抽象的に精美を發輝するものも短篇なり、恰も霞中の花の如し、水底の月の如し、流星を驅りて富岳の下を過ぐるが如し、流船を走らして松島の灣を行くが如し、杜鵑の如し、電光の如し、蕣花の如し、一瞬の間に天地の大觀を示す、奇絶壯快之に出するものあらんや。明治文庫は最も短篇に得意なる諸名家の傑作を集め、逐月之を刊行す。千紫萬紅、一たび之を繙かば片舟に棹して急流を下るが如し、奇景百出人をして應接に閑なからしむ。

◉第壹編目次　武内桂舟密畫

巖谷漣山人著
辻占餡　秋の蝶　けなげさ
黒衣魔　白面鬼　梢上月
山時鳥　京自慢　花の旅

◉第貳編目次　小林永與密畫

川上眉山著 雪折竹　村井弦齋著 福の神
廣津柳浪著 佛魔一紙　嵯峨の屋著 薄命の鈴子
石橋思案著 姥櫻　江見水蔭著 驚く鷗

◉第參編目次　武内桂舟密畫

江見水蔭著
劍客　初嵐　痞癖太守
骨武者　畫師　斷絃
信天翁　初楓　故家水
漁郎　わかれ霜　畫師の妻
一夜の宿　雲烟過眼

◉第四編目次　小林永與密畫

幸田露伴著 緣外緣　巖谷漣著 媒介人
多田漁山著 新學士　川上眉山著 風流狂言記
田山花袋著 隅田川の秋　嵯峨の屋著 庭の敎子
渡部乙羽著 都土産

◉第五編目次　三島蕉窓密畫

山田美妙齋著
みゝずはれ　曙の春　月花の見立
紅墻記　頼朝の墓　雪折れ竹
大龍王　田舍聖者　古切手
くされ緣　ゐなか娘　母のなさけ
春の花鳥　鴉の道行　戸隠山紀行
都門雜興

◉第六編目次　武内桂舟密畫

櫻痴居士 忠義お安　學海居士 當世二人女婿

◉第七編目次　三島蕉窓密畫

中村花痩著
俄長者　狂蝴蝶　合歡花
俠魂　片時雨　破鏡

◉第八編目次　富岡永洗密畫

山田美妙著 村上義光　巖谷漣著 若水
嵯峨の屋著 國民大帝　田山花袋著 廿日月
西森骨皮著 滑稽二人男　松華庵著 夜行汽車
眠花道人著 江戸舞蹈會　原田抱一著 青春夢

圖書出版
東京博文館

明治文庫

短篇小説

博文館發行

明治文庫第九編

浮田一蕙。捨扇
邪正一如。戀今様
京屋娘。おぼろ梅
神田七不思議。新奥の細道
玉川河童泳記。故郷の錦繪
吉野初瀬花摺衣。

渡部乙羽著

LIBRARY U OF I URBANA

[stamp]

◉浮田一蕙（上）

渡部乙羽

京の水とさへ云へバ、白粉下と聞ゆべき程の優美なる洛中洛外。三十六峯盆畫の雛形にありさうな風景は、この土地に住まはせ給ふ月卿雲客をして、筋も骨も無き海月に化せしめたるか。如何に世は武家の弄び物となりたりとは云へ、源家の我儘、北條の暴虐、足利の不埒、一々言語道斷の仕方を以て禁廷を所理なし奉り、御所は風雨に荒めども、見て見ぬ振の粧をなし、蔀は破れ、御簾は煤に染むるも、なほ御修繕なし奉る者なし。斯くても、二位三位の公卿は、齒を染め薄化粧して、若柳の下に蹴鞠して遊び給へり。別けて、元弘建武の御代となりては、大宮人に丈夫の魂もち給へるもの少なく、九重の雲は荒れて、帝の御座も定まらず、笠置は雨を凌ぎ給ふに足る無く、吉野は春も寒うして行宮の窓を打つ櫻花は、散りて雪と敷きたれども、月卿雲客大方は武家に媚びて、帝に供奉し給ふ者無し。さる程に如意輪堂にとゞめたる正行が和歌は、北朝に仕へて戀歌の點取を事とし給へる公達の肝を冷やさせたり。こ

ゝに鴨河の流れは長に絶えずして、官女が紅粉の脂を浮かべ、東山に澄む月の影の、野宴の杯中に落つるもの百餘年、徳川氏の政權を專らにするにいたりては、御所はあるか無きかのやうにしなされ、左近の櫻の色も褪めけり。さるにても、氣骨ある殿上人無く、御影堂の扇折して、妻子に愛を運び給ひしもありしとかや。昇平久しきに亘り、江戸の武士ども文弱に流れて、下賤のすなる文金風とやらを好み、衣裳に華を飾り、大小に金銀を鏤めて、姿を婦人に眞似る程なれバ、四民ともに遊惰放逸を事とし、さつても沙汰の限りなり。かゝれバ御所方却て憤怒の餘、窃に王事に勤むる者など、無きにしもあらざりしが、設計ならずして、退けらるゝ人もありけり。

南枝は既に綻びたれど、なほ鶯の塒に足らず。餘寒は未だ殘れども、春の日脚の暖かく、稽古着の儘外面に出でゝ、庭の其所此所歩けども、日影は老樹の枝を映して、地に女文字を印する樹下に、猫の蝴蝶に戯るゝあり、池の周圍の芝草を踏みしめながら。近東氏御貴殿は近頃御入塾遊ばしましたかと、問ふは稻田兵助といふ若者なり。近東は一禮して如何にも拙者は近頃入塾いたせしゆゑ、當家の御家風は一向に存じ申さぬが、朋輩の交誼に御教授をお願ひ申すと云へバ。稻田は微笑み。おう、御存じ無くばお敎へ申さう、我等が先生浮田一蕙殿は、南朝の忠臣備後守高德公より出でさせ給ひ、浮田中納言秀家公が七代の孫なり。學文もあり、智識もあり、第一氣節が高くお在するゆゑ、平素御所の衰頹をお慨き遊ばして、人間には孝行が第一なり、孝が無ければ忠も無し、孝も無く忠も無かりしならば、鳥獸にも劣

るべし、魚鼈もなほ骨あり、況てや人間の氣骨が無くて成らうやと仰せあつて。先づ孝經を弟子に敎へらる。その上、先生の仰せらるゝには、書は是非とも世の中の風敎を補けねバ相成らぬが、丹を舐め紺青を塗るばかりいたして、人の目を悅ばせるのは、私の家の畫風ではない、凡そ畫をかく程の者少しは歷史も讀まねバならぬ、讀んで我君の御爲めに盡すべし、よつて劍術を稽古させるのぢやと。斯樣な御敎訓がありましたが、一々御尤もの御意見では御座らぬかと、後邊を弗と振向きたり。

小椽を距てし彼方の室には、主人の一蕙丹青の技に倦みたりけむ、彩毫擲き立上り、植込みの方に目を注けバ、春未だ早き林には、花といふ花はあらざれど、芝草氈の如き上にて、五人六人の若き弟子ども、竹刀を振り上げ丁々と、試合なしてぞ居たりける。一蕙は微笑して。いづれも能く稽古が出來る、さう精を出すからには、屹度我君の御爲めになるなり、男子と生れて君の御爲めを思はぬ程なら、叱、土百姓になれ、アハヽヽヽ、いづれも此處に飾つて置く鎧を御存じならむ、これは先祖が武功の印、小櫻威とは興ある物の具ではないか。今より後も國に報い家を興すには、この鎧で無くてはならぬ、拙者が師匠田中訥言殿も、其身は典古博識だけに內裏の御衰頽を痛み奉ること甚だしく、常々和畫をかく時すら、忠孝節義の人ばかりを畫き給へり。拙者もその敎を受けたれば、君の御爲めに盡すべきは、命にかけてもなし遂げる氣ぢや。いづれもよく〳〵道理を考へて、君を救ひ奉れと、威儀嚴かに云ひ含めぬ。

床には黑革威と小櫻威の具足を飾り、代々傳はる太刀長刀など置き並べて、いざ事あらバ大內に參らん

用意嚴めしく見えたり。主人は門弟共の試合を興ありげに眺め居けるが、俄に何をか思ひ出しけむ、天を仰いで敬禮し。あア辱なや、早く一天萬乘の我君が、御世しろしめし給ふやうにならば、痩せたりともこの細腕、寸斷たりともこの鎧ひつかけ、關東の奴原を攻め惱ましてやらんものを、えつ、太平は何んたる遺恨ぞ、鎧も汗を出すのみとは、口惜しき限りなりと、拳を握りて憤りけり。

（中）

御所は荒れて、齊しく祇園の町を照らしたる月の光の、春の夜なれバ朧ながらも、端蔀の隙間よりさし込みて、殿中も何となく苔洩る片廂の心地せられ。仙洞の御苑も、林間に酒を煖めたる昔時の衛士も居らねば、石上に詩を題して綠苔を拂はせ給ふ風流のあるべきや。和歌には花見てのみ暮らし給ふやうに詠みたる殿上人も、武家驕りて以來は、さる雅興もあらで、花は塀内の一重櫻を椽側に眺めて、吉野の春を思ひやり、秋の紅葉は大の字山の楓を窓の中より見て、立田川に散る錦の頃を夢に寄せつゝ、述懐の吟詠こそ御慘はしけれ、徃時は物見車の轅は落花に埋まり、供奉の百官、綺羅星の如く附添ひ奉りて青陽の駕を送迎したりしが、今は御野遊はおろか、管絃の御慰みだに稀れなり。

さるにても江戸の春の賑はふことよ。將軍家御成の凛々しさ、なかく京に比し奉るべくもあらず。千朶万朶上野の山に咲きにほふ花の下に、蝶に戯るゝ武士の他愛無さは、朱鞘の大小こそ帶し居れど、祿を何の口に食ふか、妻子を何の腕で養ふか、えゝッ片腹痛きことぞもあり。我一蕙丹青の技に身を委ねて

は居れ、汝等如き海鼠同然なる腸にあらず、江戸は穢土か、あァ呆れ果てたる土地あるかあと、時は嘉永の末、春は今ぞと咲き揃ふたる花の中を、ゆらり〳〵と歩み行く浮田、何う見ても畫師とハ思はれず。」鬢を堅く引ッ詰めたれバ、眥上りて顔に一入の威容を加へ、仙臺平の袴に黒の羽織を纏ひて、蠟塗の一刀を佩き、短刀を挿みたり。娑婆世界にこの五尺の身を置所無しと、世を強ねたる浪人かと見れバ、打扮恰好に金目の品を所持あすこと、祿に飢うる痩狼の類にあらず、さらバ旗下の士なるか、若黨一人召連れぬ所を見れバ、さうした人にもあるまじく、如何なる方ぞと、その人品に目を着くる者あるも、更に見向きもやらず、己が旅宿に歸りたれども、今日の花見に胸が惡うなつたと、奥坐敷の椽側を傳ひて、庭の飛石を蹐り、唐松の邊に出で〻、木刀をうち振り、曳やと聲かけて、根元の一枝をドッと挫きぬ。」さて面白し、世の中も斯く美事に埒が明くものあらバ喜しけれども、思ふやうに行かぬのが遺憾あり。聞けバ亞米利加の黒船浦賀に來りて、頻りに交易を勸むる由なれど、我國にハ我國の掟あり、輕々しく許すまいとハ思へど、あの見る如き武家の心得でハ、所詮日本の武威ハ示されまい。悲しき事あり、恨めしき事なり。我れ去年勅命を蒙りて、御所の御屏風を書きたりし時、御賞めの辭に預りしハ、今以て肝に銘じて忘れぬが、それにつけても幕府の奴原の憎らしさ、其身は人臣にある間敷き豪奢に耽りながら、禁庭を處理し奉るには、御慘はしきまで御質素を旨とし奉り、徳川大奥の有樣は如何ぞ、さッても云ひ甲斐無き人々よ、元龜天正の昔時にかへり何故夷どもに一泡吹かせ遣らぬ、如何に太平は大丈夫の

筋も骨も鎔かすものとは云へ、餘り手ぬるき事ならずや、昔時北條が元の艦を斥けたるを見れば、衰へたりとは云へども、今の德川よりは盛んなりしぞ、昌平二百年武備荒廢したる今日には、伊勢の神風も吹かぬと見える、旗下の氣力無きは固よりなれど、十八大名の中にても、國富み兵强きは、長州か薩摩か、其他一二の大藩を除きては、皆な德川の鼻息を窺ふ白痴のみ、大義名分を知る者は、指を折つて數ふる程なり。さりながら德川已に疲れたること、肺を病める人の如くなれば、終には倒るゝこと疑ひ無けれど、先づ差詰め後楯にして大義名分を唱ふるには、須らく長州侯の力を籍るべしと、先頃我が子をその隊伍に加へたるが、何卒して先祖の御名を揚げ浮田の家を起さしめ給へ、弓矢の神を始めとして天神地神も照覽あれと、天地を拜して一心に祈誓を凝らす中に、その日も暮れて、春の夜の入相靜かに、庭の櫻を朧に染むる月の影面白く、宇宙は唯何となく美くしくて、繪にある如く思はるゝ儘、一蕙も暫しが程は我を忘れ、茫然として木の下に立たりけり。

翌朝は疾く起き出でゝ、冷水に垢離し、天地の神祇を禮拜して、我が子の武運を祈りて後、落花の溢れて露の未だ乾かぬ邊に行き、木太刀を揮ふこと數回、己が居間に立戻りて、今朝は胸中淸々しければ、繪なと畫かんものをと、緋毛氈を敷き居る窓の下に、心地好く吹く朝風の、先づ花の香を寄せて、繪の具皿に時ならぬ立田川を見するは、紺青に花の一片の落ち來るなり。折から案內も無く此室に入り來る一人の武士、次の間の閾の外に手を支きて扣ゆるを、一蕙ジッとうち見やりて。おう悴か、近う寄れ、

早朝に音信たるハ、急用にても起りたるか、氣遣はし、語れ聞かんと詰め寄れバ、浮田可成は嚴然と容を改め、父上口惜しき事にありましたと、涙をはら〳〵と流すに、一蕙は合點ゆかじと膝摺り寄せて。ナニ口惜しき事とハ如何いたしたと、眉根を寄するに、可成は天を仰いで嘆息しつ。余の儀でハ御座らぬが、亞米利加の一條、德川家にては渠が威嚴に恐れをなし、遂に條約を取結びましたと、無念に切齒扼腕するを、一蕙も共に氣を勵まして、其方が今の物語にて、はじめて知つたる德川の所置、して〳〵朝廷の御裁可を經たる後か、ナニ自儘の計らひとな、えッ憎くき武家かな、今一國の安危にも關はるべき大事を勅命をも待たずして、自儘に所分致す段、上を蔑如にすること其分に過ぎたり、誰かある、この亂れたる世に立ちて、大義名分を正しうする者ぞ、あア片腹痛き事どもあり、我丹青の技をこそあせ、祖先は備後三郎殿にて、浮田中納言が七世の孫なり。いざ諸人に卒先して、尊王攘夷の旗上げなさんか、いや〳〵この微力にては叶ひ難し、悴よ、これ見て無念を晴らせよと、展べたる紙に筆を落せバ、忽ちにして成る神風蒙古の艦を覆すの圖、墨色淋漓、風颯々として鳴るか如く、矢飈々として飛ぶに似たり。圖成つて一蕙筆を抛ち、壁を睨んで聲高く。えッ德川の蠅虫共、この畵は其方等の眼に入るまじと、憤怒の顏に朱を注ぎぬ。

（下）

太平無事の口に、千石万石の祿を食む武士の、骨も筋も剛なるは居ず、一意たゞ臆病未練にのみ流れて、

鵜の毛を分くる秋の風にも身震ひし、桐一葉の散るにも膽を冷して、枕刀を引き寄するは、大丈夫たる者のすべき業ならず。徳川の末は乱れたり、大河に水絶えずとは云ふもの丶、源涸れ、支流渇きては、さて如何にすべき。か丶れば勤王倒幕の論到る處に起りて、一派枝を生じて、万派に岐れ、一黨分れて百千の黨派を爲しけるにぞ、斯くては大事に立至るべしと、幕府は之れに怖れをなし、嘉永五年の秋の末、大獄を起して、天下の志士を召捕る中に、浮田親子もその群に入れられ、江戸表へこそ押送せらる丶こと丶なりぬ。

斯くなるも固より天の網乘輿、とは云へこれは大君の、爲に盡せし甲斐も無く、飛ぶべき翼折り挫かれ、駕の鳥にも劣りたる、今のこの身のうたてさや。京を出で丶七日あまりを經る程に、駿河の國は清見潟左は波路、右手は山、富士の高嶺も乘輿の、檐端に眺めて、吉原行けば小松原、露か涙か村時雨、箱根の山に着きにけり。

江戸には漸々近づけど、君ゐます都の空に遠ざかれば、心細さも一入にて、旅の情を慰むる雁の聲さへ哀れなり。長亭短亭夢を殘し、白沙青松詩を題して、早くも江戸に着きたれば、直に傳馬町の牢屋に引かれ、強盗放火と群をなして、暫らく機會の至るを待てり。

浮田親子は日毎に白洲に呼出され、拷問をもて其罪を糺さるれど、大義名分を知るの外、犯せる科は身に覺え無しと申立つるのみ、其他を問へば、目を瞑つて物を云はず、たゞ死を決したる觀念の、巖の如

く堅固なるを見られぬ。

或日の事なり、京都の人池内大學といふ者も、罪無くして配所の月を、浮田親子と共に見てけるが、白洲に召出されて、手強く牢問ひせらるゝに及び、獄中の苦にや泣きけむ、拷問の痛さにや堪へ難ねけむ、二枚の舌を遣ひて、幕府に阿る語あるを、一蕙グッと癪に据えかね、今が今まで眼を瞑りて、徐に觀念を煉りつゝありし埋火を、煽り立てたる大學が不埒、己れと云ひ樣、怒髮天を衝いて蓬々たる鬚を撫で、ヂリ〳〵と傍近く進みしが、奉行が制する一言。此處を何處と思ふ、辱くも天下の決斷所なるぞ、下れ〳〵、叱つ慮外者奴と叱られ、無念を奥歯に噛みしめて抑えぬ。

頓て夜に入りぬ、牢屋の原の秋風は檻の口に音信れて、寒さは鐵の如くなれど、暖をとるべき燈火も無く、居は闇なれバ、餓ゑたる鼠と群をなして、暗所を探る盲人に似たり。空には一輪玲瓏たる明月あれども、窓無ければ光も茲には及ばざりけり、されども枯れたる柳の枝には、塒と賴む小鳥の栖みけむ、月の前に葉を啄みて、時々悲しげに啼くはいと物淋し。一蕙は暗き牢屋を撫でまはし、眼を瞋りて彼方の隅や此方の隅を睨み居けるが、暫らくして意を鎮めて闇を透し眺むれバ、隣室に人の蠢くあり。誰じやと問へば、池内なりと答ふ。一蕙赫と怒りをなして、已れ池内大學、汝は畜生にも劣りたる武士なり、今御所方にも汝が如き二股竹ありと思へバ、我が腸ハ寸斷なり、えつ汝は武士で無いぞ、匹夫ぢや、下郎ぢや、人非人ぢや、凡そ大丈夫たる者、例しや脊髓を拔かれて、鉛の熱湯を注がるゝとも、節を屈せ

ざるは本分なるに、栲問の苦痛に堪へかね、大義名分を忘るゝは何たる不所存ぞ、こりや悴八郎、今よりして汝池内大學と義絶せざれバ、我が子にあらず、汝が父でない、大學は君臣の大義を知らぬ白痴なり、徳川家に阿り、御所を惡しざまに罵るは、言語道斷の者なるかな、今武家權を弄んで、禁庭はなほ曉天の星の如く光無しとは申せ、君臣の分は自ら岐れ居るにあらずや、臣下の身として、一旦勢ひを得たるに任せ、君を窘め奉ること、無禮なり、僭上なり、斯く名分の判然たるものを、兎もすれバ天皇御謀反などゝ唱へ來りて、北條九代の暴戾を擬せんとするか、片腹痛き事なり、曩には山縣大貳罪無きに斬られて、永く王城の守護となり、勤王倒幕の魁となる、今また幕府數十の人を捕へ、餘罪を以て大義の士を殞はんとせり、怨恨の聚る所は、大厦の覆へらんとする兆なり、八郎よ、理を曲げて節を屈すなと、怒りに任せて罵れバ、其聲高く牢屋の外に聞えしより、牢役人は何事ぞと駈け來りて。コリヤ神妙に致せと制し止めぬ。

其後親子は田地家宅を召上げられ、一命恙なく放たれしかど、その名は永く世に傳はりて、花を描き鳥を畫く技よりも、君に盡せし勳功ぞめでたし。

◉捨　扇

秋風　めでたき花もうつろへばそろ〳〵さめる男心人の心はあすか川水くさい男づらとりんきの炎のもえくいに火のつきよひならひにて妾せんさく色事ぐるひにまゝならぬ女の身を悔も又あはれかし

火桶はれとて金銀の捨扇（以上虚實柳巷方言の一節）

其　一

紅葉の名所の瀧の川も秋寂びては、掛茶屋の床几に客足稀れにして、朝の霜夕の嵐に、一葉々々ちらりと散りて、溪川の流水に錦を晒せど、此頃の時雨に坂道は泥深くして、一句捻くる俳諧師のそゞろ歩きにかなはず。小枝には短册の痕のみを殘して、今は見かへる人も無き愛憎の賴み難さに、恨は一層深かるべき此地の景色、何處の里も秋ざれ物淋しき習ひなるに、何事にか浮かれ出されけん、二十二三歲の若者一人、小首傾けながら橋の上に彳み、不動の瀧の白糸眺めて、失神と景色に見惚るゝ折から、秋の空とて變り易く、樹間には日影さして、一點の黑雲だに無きに、北風颯と吹き起り地上の落葉ざわ〳〵と波を騷がすかと思ふ間も無く、紅葉の雨の一しきり。あれッと慌てゝ、傍なる洞の中に入れば、思ひもかけぬ十七八の美人の、若者に先ちて此處に雨やどりするあり。見れば打扮は左迄賤しからぬに、顏は

青褪め髪は亂れて頬にかゝるに、何となく凄味あるが、若者の顏熟々見ては、忽ち笑ひ忽ち悲しみ、何事か思ひ出しつ、俄にわれと笑顏つくりて、若者に一禮すれば、此方は何心無く禮を返して。困ッた降雨と云へど、美人答へも無く、眉を顰めて若者の顏見詰むるに、此方は訝かしさに堪へねど、未だ年若き娘氣に男の言葉を羞らふてかと、自ら他所々々しく待遇へバ、莞爾笑ふて袖口嚙み裂くに、怪しやと思へど深く心にも留めず、此女も驟雨に困じ果てゝ、濡るゝを洞中に避くるものかと、婦女の擧動に眼を注ぐに、神經の作用いと激しきものと見えて足を動かし手を搖かし、物云ふかと思へバ、忽ち口を閉ぢて、下唇を前齒に嚙みしめ睨む眼恐ろしく、天に叫びて黒髮拗るとあれバ、笑ふわく〱。風に砂の飛ぶさへ可笑きか、腹を抱えて大笑なしぬ。兎角する中雨全く霽れて、茜色横雲を彩るに、何處より寄集ひけるにや、村の小童五人六人、婦女の四邊を取卷きて。アレ〱狂人が居るワ、皆な來て怒らして見ねェか、わい〱ワアと聲立てゝ、遊戲盛り惡る盛り、竹杖の頭に古草鞋を結び着け、婦女の天窓に翳しかくれバ、婦女はたゞ笑顏つくりて、小童等の顏つく〲見詰れど、手出しもなさず、袖口またもびり〱〱、忽ち怒りの聲を上げ、今の惡口も一度吐かせ、容赦はならぬと駈出せバ。それ怒ッたと小童等は、逸足出して逃げ行くを、何處迄もと跡追ひかけ、走れバ木の根に躓き倒れ、衣したゝか汚せしのみか、木履の鼻緒をふッつり斷らして、それを片手に引ッ摑み、よろめく足は片跛、追ひ行く姿は木立に隠れて、行方知れずなりにけり。

「お掛けなさいませ、お掛けなさいませ、眺望ハ此處が好ふ御座いますと、未だ四十前後の掛茶屋の婦人が、愛嬌好き呼び聲に、若者ハ此方へ足を向け來り、緋毛布懸けし床几に腰かけ、靜かに煙入草取出して、一喫吸ひつくるに。お火が御座いますかと、婦人は巻上に蒙りし手拭を一寸外して櫻炭入れ代へながら、澁茶一ッと出すを見れバ、容貌に何處やら床しきところありて、昔時は由緒ある人の零落しものかと思はれ、何となく氣高く見ゆるに、什麽あればこそ斯かる賤しき業を營みて、其日を送れるにや世は飛鳥川の淵瀬定めず、變るは人の身の上なるに、盛る者は衰ふる色を知らで、酒に浸り戀に浮かれて、五十年を夢の間に送るもあれど、奢りて奢りに終るは稀れなり。花落ち紅葉散りて、春と暮れ秋と過ぐる草木にさへ、みな夫々の盛衰ありて、詩中の物にあらざるはなし。されば此女の一代聞かば、定めし浮世の境遇に思ひ當ること無いにもあらずと、若者は心中に目算を立て、愛相好く土地の名物など買ひ取て、女の言葉出すを待つに。旦那様只今は厭やな時雨で御座いましたな、着物をお濡らしなさいませぬか、此頃は雨天續きで實に困ります。と云へば若者は言葉を次ぎ、あア、お互に雨天では困るな、此頃のやうに雨ばかり降ッて居ッたら、客も少ないだらうな。はい〳〵、實に左様で御座います、紅葉の盛りは昨日今日、大切な時に降りましたので、例年よりは餘程淋しう御座います、うむ左様であッたか、それは困ッた事だらう、それにこの嵐だからな、あゝ惜しいものを、皆な落して仕舞ッた。と餘念も無く話合ふ折から、最前遁し童子一人。草履のかへしに音させて、茶屋の婦女に聲をかけ。お婆さん

く、此方のお園さんがね、其處の麥畠を荒らしたッて、大層に叱られて居ッたよ、サアサ斑來い白來いと、小犬を驅けさせ走り行く。若者婦人に打對ひ。お婆さん妙な事を聞くやうだが、今の小僧が云ッた、お園さんと云ふのは、あの狂氣のお方かね、うむ、左樣か、しかしあの年の若さに愍然に、生來の狂人でもあるまいにナ、そしてアレハこの近隣の者でもあるのか、何ぢや、お前の娘だ、さうかそれは氣の毒な事だが、一体何うしてあんなになッたのだ、まア、隱さず話して聞かして呉れ、人の身の上と此頃の空合、定めないのは珍らしくもない、云ッたとて何も恥になるぢやなし、早く語ッて聞かして呉れと、若者熱心に懇望すれば、婦人も始めは辭みしが、切りに請はれて遁ぐるに語なく。幸ひ客も少ないゆゑ、いざおはなしまをしませうと、床几の隅に腰かくる時、またもや小兒等走り來て、お園さんは跣足で處々驅歩くと、告げて群立つ友千鳥。婦人は彼方打見遣りて。えゝまた世話を燒かするか、五月蠅浮世と瞼を拭ひぬ。

其二

初秋の朝風浴衣の袂に波を捻りて、柳橋の藝妓衆が、昨夜のお座附の服裝に引代へ、白粉氣無き富士額に寐亂れ髮のばらつくも床しく、客の手巾に口紅の痕を點けて、嬉しがらせしその唇に、未だ新らしき糠袋を啣へ、寐衣姿の寛ぎたる打扮して、直ぐ向の海水浴に通ふ美人を檐端にぞ見る、淺草平右衞門町の横通りに、格子戸づくり一軒建の家あり。いづれ粹樣の隱れ家ならんと、門標を打見遣れば、杉柾

に女文字にて何の某と書くべきを、左は無くて金田小八郎とさも肩苦しい活版摺の名刺一枚ハテなこの意氣な新道にも、大俗の住むものかと、思ひ居る中、さも慈愛深き婦人の聲して。小八郎お前モウお出懸けかへ、未だ時間には早いぢやないか、それにそのお召は大分汚れたから、アノ棒縞の單物の方が、お前にはよく似合と思つて、昨日洗濯して糊をつけたけれど、アンな厭な天氣であつたものだから、未だ乾きやアしない、お羽織もモウ今日からは袷の方が好いだらう、昨夜仕立上げて疊んで置いたから、今躾糸を拔つて上げるよ、辨當は此處へ置きます、今日のお菜はお前の好きな玉子燒を詰めて上げたと部屋に入りて袷羽織を取出し來り、躾糸を拔りて悴の肩へ後邊から着せかける母御の心切。小八郎といふ若者は憚かり樣と云つて袖を通し。それぢやアお母さん行つて參ります、お園は未だ寐んで居りますか、お稽古に遲くならんやうに大抵にして起して遣つて下さいませ、近頃は眞に暑くなく寒くなく、朝の寐心は好う御座いますこと、左樣ならばと母御に會釋すれば。それぢやアお出懸けかへ、眞に未だ殘暑が烈しいから、日影のある中に詰めるが好い今夜は、お前の好きなとろゝを拵へますから、お役所を少と早目に退るがよいと、毎日の事も子を思ふよりの世話燒、漸う悴を役所に詰させ。あアこれで朝飯前の用事が濟んだと獨言。

金田小八郎の母をお槇と云ひて、四五年前に歿去し主人は、或る省中の利役とて、なか／＼に巾利かしたるものなりしが、弗と中症といふ長煩ひに罹りて、春の曙霞やうやう棚曳く頃、梢を拂ふ朝風に脆

くも散りし梅花一輪、それよりは後家のお槇道徳堅固にして、浮かれ事に心傾もせず、悴小八郎が廿三歳になるを力にし、娘のお園が未だ十二三歳の花も香も無き、若木の行末を樂しみにして、隙行く駒の足搔き早きも知らざりける。

されば亡夫が在世の頃蓄へ置きし財産は、婦人若者の活計に慣れぬとて、今はハヤ大方は費ひ盡して、饒ならぬ身代となりしも、娘はあまり內氣の性ゆゑ、踊三味線など習はしたら、胸の開くる事もあらうと、他人の勸めに可愛き我子、若し病氣などするならば、賴る甲斐なき捨小舟と、つひ隣町に住む師匠の許へ、初めの中は厭がるを、母親自から三味線持て、朝な夕なの送迎ひ、園や〳〵と甘し置ば、何歲になりても幼稚氣離れず、雛の遊びや菊節句、飾る小袖の伊達模樣、手毬の唄も母親が、添寐の晩の伽噺し、未だ遊藝を習はぬ前は、微塵も戀は無かりけり。

さる程に小八郎は或る人の推擧によりて、淺草區役所の書記となり、僅少ながらの月給を、少しづゝも蓄へ置きて、せめては活計の足にもせんと、若者の癖に感心なる心懸け。朝は他人より早く出仕て、煙草休みに事務を胡麻かす事もなく、通勤怠りなきゆゑに、部長のおぼえもいと愛でたく、心を出世の一途に傾くれど、妹お園の性質は、兄とはてんから表裏にて、遊藝習ふてそれからは、朝は兄御が役所へ詰めし後ならでは、日一日も臥房を出でず、煮焚の業は母に任して、手水は湯にあらねば遣はず、夜は他人より早く臥せど、手づから衾設けしこともなし。我儘自然と慣るにつけ、衣裳髮飾に難癖つけて、わ

れと流行物の價高きを喜ぶも、活計ハ活計の身上なれバ、夫思ふ儘にあらぬとて、母に意地惡くあたりてハ、お稽古休むと氣樂云ふ事屢々ありき。

今朝も旭日高く昇りて、部屋の裡大分明るくありしに、お園ハ未だ起き出でず。母ハ飯後しまひ中途にして、娘を靜かに呼び起せバ、五六度呼ばれて漸う目を覺し兩の手に寐い眼を摩りながら。お母さんモウ兄さんは行ッたのかへ、あゝさう、それぢやア大層に遲いのねー、もッと早く起して下されバ宜かッたワ、お母さん明朝からハ暗い中に起してお吳なと云へバ、母親ハ吹き出して笑ひ。ほゝゝお園お前厭だよ、何時でもそんな事バッかり云ッて、今朝なんぞも幾度起したか知ないよ、あんなに起したッて起きない癖に、暗い中になんぞ起したら、お前に何んなに怒られるか知ないよ、さア〱早く帶をして、湯を注いでやるから、お手水を遣つてお仕舞ひと、爐の火の消えかゝるをも忘れて、娘の機嫌を取れど、お園ハ一向喜バず。お母さん、もう何時だへ、おや〱もう八時だ、あら斯うしちや居られない、今日は七時半からお溫習があつたんだよと、又しても機嫌克顏ハ見せず、御飯も食べずに母を急がし、夫に三味線抱えさして、師匠の宅へと急ぎけり。

其三

裏屋住居の日あたり惡しく、昨夜の緣日に買ふて來し根松の鉢植の濕氣未だ乾かぬに、はや十二時の時計ぞ響く。秋の日和好き日曜日は、出仕する人の心にとりては、二六時中千金にも代へ難き程の惜しき

ものとて、其人々のおもひ〳〵に、釣を垂れて樂しむものあれば、碁を圍んで興を貪るもあれど、金田小八郎は今時の壯年にしては隱氣過ぎる位な性質とて、熱鬧場裡に足を曳くことを嫌ひ、演劇見なども餘り好まぬところから、日曜とさへ云へば一間の室に引籠りて、書見に耽るを樂みとし、文に厭いて氣が沈めば、手近にある詩集を取りて、小聲に賦みはじむる頃には、母が茶を煮て小八郎の氣を倦ませぬやうに力めける。

午後ともなれば小八郎は箱庭のやうなる庭前に出でゝ、昨夜買ふたる鉢植に水を灌ぎ居る折柄、母は椽側に針箱据ゑ、一散に我子の冬着縫ひかけの手を止めて。コレお前が着て居る着物の寸法を見せておくれ、たしか五寸で好いと思つたが、少と丈が短くなつたやうだ、一寸試つて見ませうと、小八郎の脊丈に尺度當てゝ、量つて見ては頭傾け。二寸だね、左樣々々行も去年から見ると二寸伸びました、多くの他人樣と交際つて居ては、あんまり汚れた衣裳を着て居ると、お前ばかりぢやなく親までが笑はれるホヽヽお前そのお繻絆は未だ汚れアしないかへ、汗が染みたら遠慮なくお出しよ、お園がア世話を燒かすものだから、兎もするとお前の世話は疎にするかしれない、そしてお前今日は何處へかお出でぢやないか、おや〳〵梅澤さんが居らつしやる、そりやモウお出でになつた、此方へお通しまうさうかと、境の障子をガタピシ開けて、戸口に音信ふ梅澤を座敷に通し、手早く茶を汲んで出せば、小八郎と梅澤とは氣が合ふて居るものか、笑ひつ語たりつ樂氣に話し居るにぞ、日頃笑ひ顏の少ない悴が、機嫌好氣な

る躰を見て、母御もジッと乘地になり。梅澤さん貴君がお出で下さいますと、小八郎は何時も嬉しさうに笑つて居りますが、自家の忰も餘り隱氣で困ります、近かの日曜にも御本などばかり見て居りまして……何うぞ折々入來つて下さいませ、今日は何處へかと問はれて、梅澤といふ若者これも年齡は小八郎と同じ年輩、標致も十人並は優れて好けれど、唯何處となく嬌喃居るは此男の疵、何うやら心意氣の程も見透されて、世に摺れて居るところも見え、言葉遣ひもいと懇ろに。いゝえ別にこれと云つて何處へも參りませんが、私が一体ジッとして居るのが嫌なもんですから、金田君と寄席へでも行かうと思ひましてそれでハイ、君そんなに書見ばかりして居つては、氣が欝いで惡んだらうと話の時しも、駒下駄の音高く鳴らし、格子戸ぐわらりと繰り開けて入り來りしはお園なり。お母さん兄さん只今と座敷へ通れど、客來に驚き張子の龜のやうに首を縮めて、母の後邊へ極り惡るさうに隱れ、羽織の紐を弄りながら丁寧に會釋するを、母は譯無く微笑みて。おやお園、そんなに後邊で御挨拶まうし上げては、お母さんがお客樣のやうですよ。ホヽヽドリヤまた節を忘れぬ中次の間で温習て上げませう。

一間の裡にて。お母さんがアンナ事を云つたもんだから、妾は羞かしくつて仕樣がなかつた、お母さんは惡い人だ、意地惡だと娘が自暴出すを。平日の事と耳にもかけず。サアサお園妾が調子をとつて上るから、常盤津のお温習をいたしませう、最初は手ならひ子をやらうね、さア好いか　唄「今を盛りの花の山、きてもみよしの花のかげ。あかぬ眺めのかはゆらし、おそ櫻まだつぼみなり、花娘寺子戻りの道草

に、てんと見ごとな色櫻、ひな草結ぶ島田わげ、はしたないやら戀しいやら」チャン〳〵おい、はゝお園それぢやァ調子が違つてるよ、「はしたないやら戀しいやら」と云ひ切たら、二の糸を引き締めるんだよ、さァ好いか、はゝゝと笑へば、娘は俄に自暴出して。あらお母さん笑ッちやァ厭よ、妾ァもう遣ますまい、拙いもんだから可笑がッて、はい何うせ妾ァ判らないんですよ、お母さんの常盤津はちやんと判ッて、誰にでも調子が合ひませうよ、いゝえ、お師匠さんに習つた妾のにばかり合ないでせうよ、もう宜う御座います、お温習なとしませんから、はゝ、可笑いよ、お母さんにやァ判らなくッても、お師匠さんにやァ、ちやんと判ッてますよ、お母さんが唄ひやうが悪るくッて、それぢやァも一度遣つて御覧なさい、いゝかえ、何時しか花もチリテツトンおい、さァお母さん、あら厭だね。おう〳〵今遣りますよ、さァさ好いか　唄「肩ぬひあげのゑとけなく、こよりくゐ切緣結び、ほどけかゝりし繻子の帯」と聲張上げて唄ふ親、子の可愛さに氣まぐれて、合はす調子の手拍子に、娘も彈くや三絃の糸、いとし戀しと年數に無き、戀を唱歌の文句に覺え、親は小兒とあまえても、われと苦勞を紫檀棹、心の駒も外れ初めて　唄「ふりの袂のこぼれ梅、花のゑがほのいとしらし、ふたつもじから書そめて、りん氣はづかし角文字の、すぐな心の一トすじに、お師匠さんのおつしやつたを、ほんに忘れはせぬけれど」あら其處は違ッた、お園しッかりおしよ。お母さん、此處は一番六ヶ敷ね。あゝ、好いかへお前「ほんに忘れはせぬけれど」ッ、はゝゝ。あらお母さん、ほんに忘れはしませんよ。はゝゝ、お前洒落どころぢやァな

いわね、ツリヤ忘れおきやアお遣なさい、さア唄「ふッつり悋氣せまいぞと、たしなんでみてもおさけなや、まだ娘氣の跡やさき、あぢはひもなきわざなさは、粋なとりなり目に立娘」と子ゆゑに唄ふ仇文句、これが母御の躾振か、我手で娘を自墮落さすなり。またもや母は聲を續けて唄「戀のいろはにほの字を書て、それで浮名のちりぬるをわか、よたれそつねならむうゐ、心おく山今日こえて、逢ふたゆめみし嬉しさに、飲めどもさらに醉もせず」と唄ふを聞いて小八郎は、思はず眉をうち顰めぬ。良ありて梅澤通次の歸り去るに、お園も母と共に門口に見送りて、やがて姿の見えずなる頃。お母さん、今のお方は新駒に肖て居るわ。とまたしても俳優の噂、斯迄性質の卑るものか、實に畏るべきは敎育なり。

其四

お母さん早く搔上げてお呉んなさい、タボなどは何うでも宜う御座いますよ、そんなにまご〳〵して居ると、モウ日が暮れて仕舞ひます。そらモウ平日の豆腐賣が參りました、アレが來ると日の暮れには間も無い事と知つて居ながら、お母さんは意地惡く態とぢやらくらして居るんだもの、仕樣が無いねー自烈たくて〳〵妾何うしやうね、お母さんモ少と早く出來ないのかへ、お爨どんが居眠りしながら雜巾をさして居る時のやうに。眞に捗がいかないよ、えゝ厭、厭、いやだ、自烈躰ねーと母御に髮を梳れ居ながら、厭さうに頭掉るにぞ、我子ながらも腹立しく、立てたる毛筋棒を一寸己れの丸髷に挿して。えゝッ勝手におしよ、何うせ本職のやうには出來やしないわね、だから云はぬ事ぢやない、妾なんぞは何

うせお前のやうな大人しい娘のお氣に入らないから、お民さんのところへお出でと云つたら、日㬥れ方で忙しなからうから、お母さん何うか搔上げてと賴みながら、妾が少とでも好くして上げやうと思つて居ると色いろなことを云つて、獨りでぶツ〳〵怒つて居るよ、ホンに此樣に世話の燒ける娘はない、朝から晩まで何一ッ、お母さんの世話にならないものは無い癖に、何時も〳〵小言たら〳〵、お前に左樣がみ〳〵云はれるので、妾は寧そ瘦せて仕舞ひます、アレこの娘は厭な娘だよ、妾が少と何か云ふと、直ぐ泣いたりなんぞして、勝手にしなさい、えゝ今度から何も彼も決して構ひはしませんから、いゝよ、御勝手になさいませと、子に甘いだけ怒るも早く、少との事を耳にして、泣いて見せたり强て見て、母と娘の見界なく、一枝の花を爭ふては、止つた蝶を遁がしたとか、根も葉も無いに怫として、お稽古休むの飯食べぬの、氣儘氣隨の瘦我慢、それを親御が心配して、演劇へ遣るの繪双紙のと、好きな甘餌に育つれば、羽も弱々の籠の鳥、雲井に啼くはおろかのこと、縮み上つたぬくめ鳥、飛ぶも懶くなるものなり。二人が爭ふ其聲を、平素の事と思へども、小八郎は一間を出で。をや〳〵お園、またお母さんにおむづかりだねと笑つて云へば、お園は傍にある鏡を手を伸して取り寄せ、天井の方を向て顏を眺め。アレ噓兄さん妾は何うもしないんだけれど、お母さんか色々なことを云つて、妾を困まらすんだもの。アレ噓をお云でないよ、お前こそお母さんをしたゝか困らした揚句の果にアンな氣樂を云つてるよ、お前は日㬥れになると云ふけれど、御飯の準備をするぢやアなし、寄席へ行くのにそんなに騷ぎ立てずとも好い

じアやないか、ねー小八郎梅澤さんだつて其様に早くゐらつしやりはしませんよ、アレ御覧兄さんが二人の悪い事を脊負込んで、今夜ハ留守居をしてやるから、機嫌克搔上げてお貰ひッて、サアやりませうよ、お前この根元を緊かり持て居てお呉れよと、夕陽さしこむ西窓の下に鏡臺据て、母がかけたるゆふ襷、かける根掛のすが糸も、彼か是かと撰り好み、少しも他人に見榮え好く、見せてやりたき親心、此處を直して鬢搔き立てゝ、みどり溢るゝ高島田、合せ鏡に露分つ姿も顔も嬋妍さに、母は見惚て餘念もあらず。

梅澤さんお待遠さま、それぢやァ小八郎留守居を頼むよと云ひ捨てゝ、戸外に出づれば、其處此處に火影ちらつく宵明り、闇夜ならねど月も無ければ、地上に影はうつらねど、母は境の小柴垣、右に梅澤左にはお園が華美な夕化粧、娘盛りの色盛り、源氏車の染浴衣に、瀧縞南部の袷羽織、蝦茶の丸紐ちよんぎり結び、黒の駒下駄からころと履き鳴らしてぞ、柳橋へと來かゝりける。星と閃めく檐提燈は、流るゝ水を彩りて。水の底にも浮世あるかと怪しまれ、鱗も躍つて舟に入れば、光りを便りて群がる鷗も、中は首尾する屋根舟の、心も知らで船頭が、さすや水馴の棹音に、おつまる鳥がパッと飛び、闇に迷ふて百本杭、宿る塒はさて何處ぞや。橋のたもとに虫賣が、秋を荷ふて捨賣に、鈴虫召せや轡虫、籠も好いのを安賣すると、觸る傍に按摩針、流して客の無いものか。杖に縋りて虫の音を、聞き分けないと叱られて、しぶ〳〵ながら手を曳かれ、家路に戻る孫連れ祖父あり。仇な音色に彈く三絃は、誰がお座敷の

忍び駒、秋風吹けど靡くてふ柳も見えず檐毎に釣す名うての御神燈、いづれも變らぬ御繁昌。サアいらつしやいと、木戸場の男が呼聲に、梅澤通次は先に入り、木戸錢濟まして此方へと、云はれて座につく親子の者、梅澤さんお世話さんで御座いました、お園お前此處の方が高座が好く見えますよ、この新柳亭もなか〳〵好くなりましたね、梅澤さん今度は誰が出ませうね、燕が濟んで小さんでせうか、ホヽヽヽお園お前何故そんなに默止て居んですよ、もッと梅澤さんの方へお寄りよ、そんなにお母さんの方へばかりお寄りだと、妾ァ熱くつて仕樣がないよ、チー梅澤さんこの娘のやうに身躰ばかり大きくつて、お坊ちやんなのはありアしませんよ、よ、お園それおやァお母さんと場所を取換ませうと、中央に座を換へ聞き耳立つれば、出で來たりしは手品の一曲、手際奇麗にやつて退け、また差かはる時代のお咄し。梅澤通次は腰のまはりに手をやつて、煙草入を拔きとり、二三吹續けのみにして。コートお園さん、貴娘は何がお好きです、手品も好う御座いますが、娘義太夫もまた面白う御座いますね、さう〳〵その義太夫がお好きですか、矢張常盤津など習つてゐらつしやるだけ、何うしても節つきのものはお好きでせうと、言葉をとゞめてお園の樣子を打見遣れば。赧らむ顏に手をあてゝ。お母さん火鉢を其方へ遣つて下さい、妾熱くて仕樣がないワと。俯看く樣のしほらしさ。折からドヤ〳〵入り來る客に、お園は弗と目を着くれば、常盤津稽古の朋輩なれば、おやと聲かけ一禮するに、彼方は氣輕の三人連。アラお園さんがお出でだと、寄つては見たが見も馴れぬ男の居るに驚きて。場所は彼方の隅が好いワ。

其五

金田お園が常盤津の師匠といふは、藝名文字清とて、元はそれしやのなれの果、色と戀とを玩弄物にしての悟り顔、時にとッては浮氣の師匠も仕兼ねぬ氣性、このやうな婦人に、娘の躾を頼む親達は子ゆゑの闇の盲目も同然、餘程お目出たい方々なるべし。師匠の文字清は、日三竿に上る頃、漸う起きたばかりと見え、楊枝なが〳〵と遣て、朝飯の事下女に吩咐け、寢衣の儘、羽織を引ッかけつ、朝湯に出で行きたる跡へ、稽古に來し娘子達、格子戸を明くるや否。お師匠さん、お早う御座います、おやお三どんお師匠さんはゐらつしやらないの、おやさう。今お目覺めで御座いますかと、頭立たる人無ければ、孰れ小鳥の百囀り。おやお松さん、浮名新聞が來て居ますよ、さア御覽なさい。お浮さん、一寸妾に貸して頂戴な、今日の繪は何んなのがあるの、ほうこれは好いわ、お竹さんも御覽なさい、慶年の繪があります、この繪は何んだらう、厭な男だよ、妾は慶年のよりは、年形の方が惡い癖が無くッて好いと思ひます、この繪を……こんな氣障な男を書きなすもの。あゝさうですね、だがその氣障で思ひ出しましたが、昨夜新柳亭で逢ひました男は何うでせう、お園さんの兄さんのお朋友だッて、いやにやけた男ですね、それにお園さんも妙ですよ、屹度五度も六度もお逢ひなすッたでせうに、あんなしら〳〵しい御挨拶なんぞしてね、お松さんさうぢやありませんか。眞にね、妾も左樣思ふよ、だがお園さんの目色が妙でしたよ、あの時は……。はゝゝ、お松さんは目色なんッて、厭に細かな處へ眼を付て。はゝゝ、

それハそれとして、後邊に眼をつけて居ないと、お園さんがお出になるといけませんよ、あら〳〵もうゐらッしやいました、お園さんお早うと云へば、お園も一寸會釋して。皆さん、今朝は少と遲くなりましたと下座に直れバ。お園さん、もッとお進みなさいよ、昨晩は失禮をと、昨夜の寄席を思ひ出して挨拶すれバ、お園も同じやうに時宜して、手持不沙汰に扣ゆるを、中でも蓮葉のお松といふ娘ハ。お園さん、何處かお惡いのですか、さうぢやないの、ぢやァ何か考事でもあるのですか、ほゝ、何か思案に身を投げ島田、ねー皆さん都々逸の文句にありますね、をやお園さん、お氣に障ッたら御免よ、その島田で思ひ出しましたが、お園さん、貴女のお髮が大層好いのね、何時お結ひ遊ばしました、今朝で御座いますか、それで遲くなッたの、はァ、だがねお園さん、昨夜のお方は、ありや何處のお方、大層意氣な方ね、とまたしても男の噂、お園挨拶に當惑する折柄、格子戸ぐわらり。それッお師匠樣がと各々打扮つくらふ時、しかも厭らしい聲音にて。ほゝ、大層陽氣で御座いますこと、皆さんお早う。お師匠さんお早やう御座います。

常盤津の師匠文字清ハ、浴後姿のしどけなき躰して、椽側に身をくの字にかゞめ。おさんや、一寸剪刀を貸して頂戴と、二三歩あるけバ濟ことに、臺所より下女を呼んで、戸棚の隅にある剪刀をわざ〳〵取出させ、手足の爪を丁寧に切つて、痕を木賊で摩り磨き、朝風の心地好氣なるに、眼を細くして鉢植の白菊を眺めてハ、またしてもお鬟を呼んで水を灌がせ。おさんや、その敷石にも水を撒いておくれ、日

向りが好いから直ぐ乾くよ、あァ眞に心地が清々したと、衣物の裾引摩ながら、長火鉢の傍へ懶さうにベタリと座り、四邊へ眼をきよろ〳〵と配れども、用事を吩附るでもなく、物を考へるでもなく、眼瞬きもせず朱羅宇の長煙管にて煙草を喫つた儘、しばらくはその煙を吐きもせず、無言に扣へて何を見詰むるか、眼は思ひもよらぬ方向にあり。間もなく思ひつきし事でもあるやうに、眼の位置を變へて、續け樣に煙草三四喫、啣へた煙で文字書くやうに、細く悠々と吐きかけて、傍に温習居る娘子の、節付き惡さに弗と口出し。それ〳〵其處は左樣ぢやありませんよ、しつかりとお遣んなさいと、忽ち口を噤んで、下女が雜巾がけするに目をつけ。おさん御飯の準備はモウ好いのかへ、それぢやァ此方の椽側も一寸拭いてお呉れ、大分砂が這入つたよ、此頃は風ばかり吹いて。仕末に行かない、おや〳〵お前臺所の戸棚をお拭きかへ、いけないね、アンな粗忽い拭きやうしては、縞目が未だ殘つて居るぢやないか、お前雜巾をよーくお絞りでないね、汚れ雜巾で拭いちやァ何度拭いたつて仕やうがないよ、アレを拭き直してその雜巾を妾に貸して頂戴、火鉢の上を拭ひて遣るから、そして灰を振るッて置かなくちやいかないけれど、仕樣がないねーおさんはウッカリだから、ほゝゝ皆さん大層に待たせましたが、一寸待つて居て頂戴よと、一間に入りて朝化粧、衣更へして出來り、食事緩々濟まして後、黑文字噛んで吐き出して。何方も御精の出ますこと、そしてお園さんのお髮が、大層好う御座いますこと、今朝方お結ひ遊ばして、左樣で御座いますか、妾も今朝結はふと思ひましたら、ツイ晏起しまして、おさんや一

寸髪結さんのところへ行つてお呉れ、今が恰度手空きのところだからつて、直ぐ同道に連れて來てお呉れよと煙草輪に吹く容躰ハ、華美な中にも何處となく、澁味たッぷり色たつぷり、物ハ唐繻子に黒の帯、腹の黒さも見透されける

其六

葉芋の露に月宿り、雫は星と飛ぶ狀は、それは田舍の月の宵、これは都會の月の宴、華奢風流を盡さねど、月待つ宵の睦み語、五人六人團坐して、興無き談話に花を着け、笑ひさゞめく樂みは、また面白の世の中や。

今宵は梅澤通次の宅にて觀月の宴を催せばとて、小八郎に妹同道來て呉れたまへと、口輕な通次が案內に、勸まぬ悴を母が諭して、娘には正午過る頃より、それ紅よ白粉よと、汗になつての立働き漸う打扮し了りて、母御は前に立ち後邊に廻り、娘の縹致に失神し、見れば見る程美くしや、髪は根上り島田に結ふて、桃色すが糸の根掛をあしらひ、團扇形の銀釵に塗櫛挿して、前髪大樣にとり分け、瓜實顏の色白く、眼はパッチリとして口元締り好く、眉濃かに鼻尋常に靨に無量の愛嬌を湛へて、富士額に生際美くしきは何たる趣ぞ。衣裳は時の流行を趁ふて、アレのコレのと撰り好みしたるだけ、惡からう道理なく、夕風戰ぐ頃より、一人乘の腕車二輛仕立てゝ、梅澤が宅へと急がしける。

此方へゐらつしやいませ、さ、さ、モ少とお進み下さいと通次が世事馴れし愛嬌に、お園は兄の後邊に

小さくなり、出されし座布團にも時宜し、侑められし茶にも會釋して、羞しげに俯看く樣は、日影にからむ牽牛花の、露欲しさうな風情にて、これ程男が怖きものなら、末の末まで色も戀もなるまじきものなるに、憎いは可愛の裏にして、情けは仕打の下行く水、遠くて近いは男女の中、斯道ばかりは理詰めにはならぬものなりけり、通次は冷えし茶を入れ代へて、言葉輕く小八郎に打向ひ。金田君よく來て呉れた、君が餘り遲いもんだから、お家に差支へでも起りはせぬかと、實は少々心配して居つた、何は兎もあれ御來車あつて恐悦至極ハヽヽ君膝をくづして話したまへ、サアお園さんそれじやア餘り窮屈で御座いませう、御覽の通りの男世帶、女氣の無いところへ態々お呼びまうしまして、何程かお氣詰りで御座いませう、今夜は生憎親父も居りませんでと急に舌を反して。喃金田君、親父が居なくて生憎とは云ふものゝ、我輩にとつては天下太平といふべしだ、實はね會社の用事で八王子まで行つたのぢや、底で以て今夜の觀月の宴ありサ、明日は日曜で御同然氣樂なもの、一体君明日は何か奇な催しでも御座るかな、相變らず讀書三昧とは、チと御老躰じみはせぬか、君、つまらん菓子だが摘んで呉たまへ、お園さん誠につまらん菓子ですが、サアお一ッと麥落雁を摘み出すを、お園は紅葉のやうな手を出して頂き納め、懷中紙を取出して傍に置き、袂より絹手巾を取出し、折つて見たり疊で見たり、手持不沙汰の樣子を見てとり。おうそれ〳〵すつかりと忘れて居つた、親父が好きで買ひ溜めて置いた錦繪があつた筈だ、ホンにお園さんのお相手が無くてお氣の毒ですねと、違ひ棚より錦繪の帖を出してお園の前に並べ置き。

一向つまらぬ錦繪ばかりですが、お好きでゐらつしやるなら御覽なさい、たしか其中には似顏繪もありました筈、成田屋はお家柄だけ代々お眼玉が大きう御座いますな、睨んだところは日千兩、はゝゝ私一人でお饒舌して居る間にモウ日も暮れかゝつた、そろ〳〵月も昇りさうなものと、飾る机に月見草、薄に亘る夕風も、粹を利して燈を吹き消す强さに小八郎は、觀月の宴に火點すは月の意を知らぬといふもの、闇は反つて興あるべしと、三人齊しく座を立ちて、毛氈かけし欄干に凭り、見詰むる空は光り一杯、茜色の雲次第に消えて、追々兎の白み亘るに、それ明月が昇つたと、通次は月を觀る振して、お園の顏をさし覗けば、眞白き顏に光りをうけて、その美くしさ云ふばかりなく、戰吹く風の後れ毛を、ひらつかしてハ生際の、揃ふた額を惜氣なく、見すれど掩ふ袖屛風、赧らむ顏は白雪に寒紅梅を散らすが如し。意ありて見る目には、葉末の露も玉と見ゆべく、昨日今日まで氣も止めず、お園が風姿を見し時は、何の心もあらざりしが、今宵八月十五日、夜好し月好し風も好し、見れば打扮の嬋妍さ、てんとたまらぬ花娘、末ハ誰が手に散ると、惜しや欲しやの煩惱に、またもお園を見かへれば、此方も同じ思ひにて、前の雫や後の水、若し愛嬌が溢るゝものなら、この月影にはらはら〳〵、互にハッと氣がついて、小八郎の樣子を見れば、戀は微塵も知らぬ樣子に、小聲に吟む詩一首、疑ふらくはの一句に驚き、今の素振を氣づかれしかと、呆れて傍を振向ば、首を擧げて地上の霜と、餘念無氣なる李太白。通次は俄に氣を利して。コレサ金田の李白先生、飮まずば詩も遣れまい、サア飮むべしと、女中が運ぶ

廣蓋を、二人の前に置き並べ。お園さん召上つてと侑むる時、小八郎は便所へ立てば、跡には戀ふ人戀はるゝ人、極り惡る氣に言葉なく、座もはや白むに氣轉な通次。サアお一ッと注ぎかゝる、銚子に云はす戀の謎、酬す盃に文もあるべし。ドン〳〵梯子を上る足音、やがて小八郎が座に着くを見て。金田君、君の居ぬ間に斯う二人が呆然して居るところは、媒人無しの祝言といふ躰があるだらう、はゝゝと通次は何の氣なしに云ひしが、お園は如何に解釋しけん、家に歸るも言葉の疑團は解けざりけり。

其七

戀てふものを唄の文句や、踊の身振に知り初めても、眞の戀の初峯入に、お園は前夜酒の座に、通次が云ひし一言の耳に殘りて忘れかね、媒人無しの祝言とは、何うした心で云はれしか、意あり氣のお詞なれど、妾のやうな幼稚には、一向意味が判らぬと、萠した戀を我と我が、幼稚の二字に打消して、見れども斷念かねつ、夜半に枕を欹てゝは、また其事を思ひ寐に、熟睡む夢にあり〳〵と、戀しき人を見てしより、現に物ぞ思はれて、安き心地もなかりけり。さても其後二人の戀は、觀月の宴より深くなりゆき、日に〳〵迷ひの道に分入り、兎につけ角につけて、逢ひたさ見たさは胸一杯、心はそれに傾きて、物事更に手に就かず、適か逢へば逢ふにつけ、儘ならぬ浮世の程の果敢なくて、花を見れども面白からず、月はもとより虧るが習ひ、不平不滿に十日と過ぎ、一月あまりを送る頃には、娘心の切なさを、母も推し兄も悟りて、眉を顰めつ打語らふ事多かりしが、母も我が可愛き娘の愛する男ならば、已れが

情の脆きに比べて、如何で憎きことのあるべきぞ、娘の愛を半バ分ちて、右にも櫻左にも梅の、變らぬ色を眺めて見たしと、先づ通次の男振にぞッこん惚れ込み、娘の好いたも尤もぢやと、此方から床しく思へバ、其人のする事爲すこと、一々己が氣に合ふて、アノ方ならバお聟さんにして見たいと、早くも初孫に考へを走せ、婚姻といふ人間の一大事を、馬市へ行き一繫ぎ三兩の瘦馬を買ふやうに心得、未だ聟殿の氣性も觀察かで、一ッ二ッの愛嬌を、深切者と買冠り、娘の浮氣に乙かけてやること、子に甘い親御が、我子の爲を計りながら、却て不爲の事して呉るゝ者、廣い世間に有勝なり。

母はお園が所存を聞取り、小八郎にも仔細打明けて話しけるが、今日はまた何うした事ぞ、衣裳着代へて代地の師匠文字清方へ行けば、恰度好く在宅の折とて。マア〳〵此方へと、下には置かぬ粹者の所置振、はい〳〵何うぞお搆ひ下さいませんで、これからは度々出ますかも知れませんから、はゝゝ妾は未だ用向も申上げん前から、コンな氣樂な事ばかり申上げて、實は何で御座ます、日頃のお別懇だけ、万事打明けてお話いたしますが、實はそのお園の事に就きまして、少々御無心に上りました。アレ何で御座いますつて、お園さんに虫がつきましたつて、それは何處かの經師屋連で御座いませう、はゝゝ妾としたことは粗忽しい、ッイ聞き違へまして、いえ〳〵貴女がお早口でゐらつしやる故でも御座いますまいが、アノ御新造さん、そして御無心とおつしやるのは。はい〳〵そのナンで、お園が縁談の事に就きまして、少々貴女に御無心と申すのは、實はそれ先方樣は會社のお役員樣とかをなすつてゐらつ

しやるが、その御子息さんは色の白い好い男、それがアノナンで、悴のお友人なんで、それで宅のお園も年頃でもあるし、先方様でも多少かお思召があるやうで御座いますし、えェ五月蠅ねー畜生と傍へ寄る猫を彼處らへ退け。それで御座いますから、お園を先方様へ差上たいと存じまして、えゝッ何てー猫だらう五月蠅ねー、シッ〱、で御座いますゆゑ實はその貴女様にお媒人を御無心いたしたいと存じまして、お園も大分好いてるらしい樣子。えゝッ何して此樣に、猫、猫、畜生ッと猫を追ひ出し。で御座いますゆゑ、お厭でも御座いませうが、是非と云つて會釋する時には、猫は文字清の膝に上りて、右の手に頭を撫られ居たり。文字清は內儀の言葉を聞了り、片頰に微笑を湛へて。御新造さん、たしかに承知いたしました、妾が引受けまして。岐度御緣談を取結んで差上げますと云ふかと思へば、抱きし猫に口寄て、玉よと愛する聲のみ聞こゆ、されども內儀は打喜び。それは〱有り難う存じます、おやおや可愛い猫で御座いますこと〻、今改めて猫を賞むれば、文字清は左も意氣惡さうに。いゝえ何うも五月蠅御座いますよ。

喜びの色を顏に現はして、門口より小八郎はお役所から歸つたかと、入り來りしお園の母御は、さもせセッコマしき有樣にて。お園や兄さんは歸つたか、おに部屋に居るッて、よし〱お前は此方へ來てはいけない、小八郎今日は大層遲かつたねと挨拶すれば、彼方も一寸一禮して。いゝえ、そんなに遲くも御座いませんでしたが、貴母が御不在でそれで。あァ左樣だッた、妾が遲かつたんだよ、今日は御師匠

さんの御宅で御馳走を頂いて來たもんだから、お腹が好くつて、實はそのお園が縁談の事で、一寸頼みに行つたが、存外に快く承知して下すつてね、まァ〳〵一ト安心しましたよ、あァ急いで來たら喉が渇いた、お園お茶を濃く出してお呉れな。

其八

梅澤通次の父は名を正義と云ひて、日本物産會社の役員なるが、先年最愛の妻を喪ひ、それよりは枯野の片鶉の連合無きを憾み居りしが、了得は派手な商賣柄だけ、老いたりと雖ども、佐野常世がそれの破甲を引冠り、懇親會送別會の崩れより、春は彌生の嵐に花は吹雪と散りしく吉原の里に浮れ、秋は木枯しの物淋しきより、隅田の月に想ひを寄せて、柳橋の燈影に夜を更かす事など無きにしもあらねど、これも我より好んでするにはあらで、友なる人にいざと誘引れなば、厭とは云はれぬ浮世の義理、老い年をして女狂ひと、我と我身を捨り見る事もある程なれば、忰通次へは父が行儀を習はせまじと、態と筋違ひなる區役所に勤めさして、人間出世の邪魔ひろぐ、女厄といふを遠ざけたるも、一家持ちて世に立たんに、父にも子にも配合無きは、信用の如何、世間の思はくにも關はればとて、子息通次の年頃なるを幸ひ、良き縁談の口もあらば、優しき花嫁貰ふて、この身代を忰に讓り、年々に老ひ行く坂道を安堵して越え行かんものと、其處か此處かと媒妁口を搜し居たれど、下世話に云ふ帶に短し襷に長しの規則通り、何れも是もつぎはぎにて、未だこれぞと定めたるも無き折から、忰が朋友の家に年頃の娘あり

て、通次とはかねて面識越の中なればとて、文字清とやらいふ方より、媒妁ありしを便好しと心窃に喜びしも、先づ肝腎な悴の肚を問ひ尋ね、さて其上にて分別せんものと、休暇日に齊しく家に在る折を見て。コレ通次、今改つて云ふ程の事でも無いが、お前も年頃になつたのに妻も迎へず、獨身で居ては何日までも世間に信用が得られぬ道理、尤もお前は私と違つて、商賣が商賣だけ、物事總て信用でばかり遣り通すと云ふ限りは無いが、家持ちが年頃になつて女房の無いのハ、身に締りがつかぬもの、それに斯うして打捨つて置いては、第一親が呆然して居るやうで世間躰もまことにいかん、そして嫁を貰ふ事について、つい先日の事であつた、お前がお役所へ詰めた後に、代地に御座る文字清さんといふが参られて、お前も豫々親しくして居る金田さんに、年頃な妹御があつて、私は勿論その妹御を見たことも無いから、性質や行儀の事は皆無だが、小八郎さんのお妹と聞いては定めし優しい方と思ふし、何も世の中が開化したからと云つて、何も彼も西洋定規にやつて退けて。細君にするには舞踏をやつてからの後、妾にするには散々遊んだ後の事と、上下着たやうに萬事万端角立てずとも好い話しで、私だつて逝去つた妻と婚姻した時などは、恰度美人天上より落ちたかと思ふ程の不思議、ソリヤお前にこれ進上しやうと、花嫁を糊つきの單物を貰つたやうに、着心は好いやら悪いやら、少とも譯が分らなかつたが、了得に三行半といふ騒動にも立至らなかつたやうなもので、はゝゝ、マア世の中は斯うしたもので、だが今の世の中は別物〳〵、けれどその娘にはお前も五六度逢つて話もして見た事があるさうだが、何

方道嫁は貰はにやならないところだから、一刻も早く娶つて、私もお前も早く締りのつくやうになりたい、餘の事とは違つて婚姻は人間一生の大事だから、私は誰を止して誰にするが好いの、此處には斯う云ふ娘があるなど、お前の心を迷はせぬから、確と返答をしてお呉れ、私は會社などへ勤めて居つては、今日此地に居ても、明日は函館とか長崎なんどの支店へ遣らるゝやも知れぬ身の上、ナニ、その娘で好い、左樣かよし〱、それで私は安心した、放棄放しの親父でも、親子となつてはこれでも心配はなか〱絶えぬものぢやテな。

其後常盤津の師匠文字清が媒妁にて、通次お園は目出度結婚したりける。好た同士の中なれば、夫婦中ことに睦まじくして、一月半月唯譯もなく心嬉しく、他人に逢ふても羞かしく、女房ある事を隱立して素知らぬ顏に打過ぐる頃の面白さ、浮世に外の望みもあるまじ。されど世間の花嫁といふものは、辛きものゝ雛形となりて、夏瘦と答へて忍ぶ涙かな、意地惡き姑には鬼も涙を溢すものなるを、今のお園が身の上は、目角五月蠅き小姑だになく、親父樣はゐらつしやれど、いと御深切のお方にて、氣兼苦勞は露程も無し、外に一人の下婢あれど、これとても惡氣無ければ、何日ぞや縮緬の半襟一筋與れしより、御新造樣〱と愛嬌好く、何一ツ用事を背きたることさへなければ、お園は喜び、妾友人に聞しには、花嫁は氣詰りありて自儘は微塵もならぬものゝ由なるが、案じるより生むが易く、これにては小舅の五人十人、なんの鬼子千疋に向ふものかと、朝は下婢と共に起き出で、煮焚の事に立働き、飯の加減や汁

の塩梅、意を注けて父と夫に進むれば、これは結構、冷へぬ中其方も共々食べるが好いと、親子三人膳を並べて、いと睦まじく食事せし時は、和合の風儀の美しさ、思へば果報の掘出しものなり。

其九

梅澤一家の睦ましき樣は、春の海の穩かなるが如くにて、入舟にも似たる嫁のお園は、温む風の吹くに任せて、波立たせねば、水夫も居眠り勝なる楫のとりやう、その和合の美しさを、見る人羨まぬは無き程にて、初秋の夕、涼風檐端を音信れて釣せし風鈴の響く折は、父御の正義一人留守居し、辭退する嫁に夫通次を伴はせて、場末ながらも本所二ッ目の通を、ぶら〳〵と散歩させては、情濃き夫婦に一入の油をかけやり、己れは椽側に轉だ寐して、歸りし悴に呼び起されては、土産にとて買ふて來たる鈴虫籠を、庭前なる松が枝に懸けさして、あア好い音を出す哩と、また失神となるところを、お風邪召してはと、寐衣そろりと嫁にかけられ、目を覺ましてお園が深切を嬉しく思ひ、芝居に嫁を連れて行ては、縹致自慢に鼻高くするも、親としての總ての親の意なるかも。その年も暮れてお園十八歳の春を迎へぬ、凡よ婦人の十七八は服飾化粧に氣をとられて、瓦も玉と化する頃なるを、お園が容色は瓦にあらず石にあらず、磨かずして其儘の玉なるを、さればそれを化粧立てゝは、錦上に花を添ふる美くしさ、親御も嫁の縹致に比べて、早く玉のやうなる孫が見たしと、茶喫み咄しの折に串戯云ふて、お園の顏を赧くさせける。

おそのお園と父の呼び聲に、何事ぞと閾の上に手を支けば、一寸茶を一ッ出して呉れ、そしてお前も此場で喫むが好い、のう通次、今朝は何日にない早起した、しかし早起をするのは大層心地が宜い、あア茶か、うむ朝茶はまことに結構ぢや、お園お前もお上り、遠慮せずと、跡仕舞やなんかはお六に任して置いても宜い、何うぢやあの鉢植は、昨夜の緣日を素見して、つひ買はせられたが、これは少と高値と思つたが、今朝見るとそんなに木振が惡るくも無いな、通次これは何うぢや、あの方は六錢ぢやが、此方のと比べて見ると安直な。はい左樣です、お父さんはお買物がお上手でおいでなさるから、そんなに高買るやうなことはなさらないよ、ねーお園あれが六錢なら實に安いものぢやないか、私共なら十錢はとられるのでございました。眞に左樣で御座いますね、それに大層枝振が美事でございますこと。左樣か枝振がそんなに惡くないか、それぢやアこれは安直かつた、お園お前の兄さんも植木が好きぢやナ、うむ左樣〳〵、宅へ來ると何時も失神と眺めて居るからと談話に餘念無き折から、下婢のお六は臺所にて御新造さま、御新造樣ッ。

人數の少くなき家内は、ことの外心やすきものとて、梅澤家にては主人ハ役所へ出仕すれば、親御の正義も會社へ詰めて、後ハお園と下女お六ばかり、氣兼も心配も入らぬ女同士、何んでも無き談話するにも、笑つて腹を捻る面白さ。此處にてハ主從の懸隔も無く、下婢も座臥を頽して饒舌れば、内室さまも腹を抱えて笑ふ。御新造さん、妾ハ洗濯をして仕舞ひますから、貴女樣は旦那樣のお歸りにならない中

に、お髪をお梳き遊ばしませんか。あゝ左様しやうか、だが未だ早いから後にしませうよ、お六お前洗濯おしかへ、妾も手傳ひませうよ。いゝえ滅相なこと、決してお構ひ下さいませんでと、襷懸けにて井戸端に立てば、お園も後邊につゞいて、白地の手拭巻上げに豪り、紅襷に兩袖を端折りながら。お六妾にも水を汲まして頂戴、あらそんなに遠慮おしでないよ、さァお出しよと手をさし出せバ。貴女様こそ御遠慮遊ばして、何うせ二枚や三枚でございますもの、そんなに大層らしくお手傳下さらないでも宜う御座いますよ。それだつて、妾は傍に茫然見て居るのは厭だから、何か手傳はして頂戴よ。左様でございますか、それぢやァ之をお願ひ申しませう、宜うございますか、その竿へ懸けるので、あァそれで結構で御座います、何うもあり難う存じます。あらお六は厭だね、禮なんぞ云つてさ、それも序に懸けて遣やうか、おや未だ洗ひ了らないの、さう、だが此處は日中りが好くつていゝね、それに梅の花も外より早く咲くだらうよ。はい〳〵左様で御座いませうよ。おやお前、花の咲いた時分は此家に居なかつたの。いゝえ、もう二年ばかり御奉公いたして居りますが、元のお宅は花川戸で御座いましたから。左様か、それぢやァこの本所へお引移り遊ばしたのは近頃なのかへ。はァ、未だ半年ばかりにしかなりません。さうかへ、それぢや花の咲いたのを知らない筈だ、だが此邊は閑靜で宜いね、淺草の實家なんぞハ、騒々しくつて仕様がないよ、それに井戸の近いのは何より嬉しいワ。左様で御座います、何より仕合せです、以前のお宅に居りました時なんぞハ、それハそれハ酷う御座いましたよ、井戸が遠いものでご

ざいましたから、水汲みばかりにも日短かな時には半日も潰しましたよ、それに肩が痛みまして、あの度々手桶を提げましたので、ほゝ、もうこれでお仕舞になりました、さア御新造樣、お髪をお梳き遊ばしませ、お部屋が明るくつて宜う御座いますから、鏡臺をこの口元へお据ゑなすつて、妾もお手傳いたしませう。さうかへ、お前も手傳つてお呉れかへ、あら嬉しいことゝ急々と己が部屋にはしり入り、對ふ鏡に映つる姿に莞爾と笑みて。眞に丸髷に結ふのかと思ふと、何うやら氣羞しくつて仕やうがないワ

其十

御一新以來、毛色の異つた夫婦者が、この豐葦原といふ神國に入込んでより、麻上下が廢れて、黒羅紗の洋服が流行し、男は燕尾服を着用して、つばめが巣を造る眞似をすれば、女子も高髷は油臭いと、無精者がぐる／＼巻きしたやうなものを束髪と唱へて、小原女の薪を載する用意を仕はじめ、打扮は孔雀の化身となつて、燕と共に連れ立ち行くは、おれはまことに面白いと、洋語を半熟に聞かぢつて、鉛筆を耳に挾む連中が、なんでも情交の濃かなるを望まば、是非雛形を西洋に取らざるを得ずと、湯屋に行くにも、夫婦連れ立ち出懸けては、他人に笑はるゝを與ある事に思ふて、猫も杓子も鵜の眞似をする烏を極め込むより、俄に二人乗の腕車が殖え出し、南無三寳！髯むしやが人目を裹んで圍ひものにして置きし妖魔の手を握り、花に紅葉に浮かれ歩きて、百鬼晝行の圖を作れば、親の手前は身を崩縞の木綿着に仔細らしく見せながら、家を出るや寸善尺魔、藝妓の肩によりかゝり、芝居見物して嬉しがる。祝

儀の衣裳も白黒の差別あれば、鷺も鴉とうつりかはる世の不思議さよ。

今宵は飯田町中坂世繼稻荷の縁日とて、春の夜の月も好ければ、參詣の老若男女織るが如く、お宮の門前には植木屋數多、品物を一面に並べて、根上り松萬年青葉蘭の翠色より、紅梅白梅種々の彩糸もて、錦繍の帳を編みたるやうに、なか／＼の眺めあり、それに續きて大道店には、小間物賣に今戸燒、風船玉に喇叭賣、小兒を連れたる内室樣の容易に通れぬ始末とは、さても賑はふことゞもなり。

御神樂堂に田樂始まりしとて、見物の人山をなす賑はひを、五月蠅氣に避けて、本社の方に歩み來り、賽錢上げて一寸伏拜み、また連れ立ちてそゞろ歩く若夫婦あり。女房と見ゆる十八九の婦女は容色美くしくして、服裝も左程醜からぬに、髮は丸髷艶々しく結ふて、鼠縮緬の羽織は風に波を寄せ、黒塗の東下駄輕さうに鳴らして、しやなり／＼と蓮歩をすゝむる樣、えゝ何たる趣ぞ、この年の若さに嫁ならば姑もあらうに、世間に苦勞も無いやうな顏をして、しかも夫と連立ながら、縁日歩るきとは、果報の上の果報者。されば夫といふ人は如何なる身分の方ぞや、思ふに富足り財饒かにして、興を花に月に買はるゝ福徳長者か、何としても天下の仕合男、他人に羨まるゝやうな女房を持ちて、手を握り合はさぬばかりの睦ましさ。斯して人間一生を安樂に暮されたらんには、なんぼう戀の嬉しかるべきに、明日知れぬは秋の空と、氣の浮ついた男の愛情、この夫婦は果して心からの好た同士か。そんな事は後にして、あれさ彼方の大道流しの新内節を聞かうぢやないかと夫は女房を促がし立てつゝ、彼方へ行き過ぐ二人

を見れば、それよ通次にお園ありけり。
貴夫大層上手な新内語りですね、妾に一寸聞かして頂戴な。お園そんなもの聞かんで早く行かうぢやないか、見苦しいからさア御出でよ。と云へばお園も足を早めて。はい／＼參りませう、眞に新内節は面白うございますね、貴夫お嫌ひですか。いゝや、私も好きだけれど、あんな大道で聞くのは厭ぢやないか。さう／＼左様で御座いますね妾は好きなものでございますから、つい失神して、ほゝゝ、あの新内節で思ひ出しましたが、近日中にお師匠様へ參りたう存じますが、お暇を下さいませんか。あア宜しいそれはさうと三崎座を出たばかりで、未だお腹が好いから、招魂社へ散歩しやうぢやないか、それともお前はお腹が空いたかへ。いゝえ、この上何も戴けませんよ。左様かそれぢやア九段をちつとぶらつかうやと、二人ひとしく柵の内に入れば、春の風温く吹き亘りて、芝草の上をなぐる心地好き、朧にかすむ月影を、惜氣もなく踏み行けば、露は木履の歯に碎かれて、はら／＼と迸しる面白さも、お園通次が目には入らず、何事か頻りに話しかけては、折々微笑む有様を、他人の見ば戀とや思はん。時しも此方を指てドヤ／＼と人の來る氣色に、お園はハッと打驚き、握りし手先を我と放して、傍に倚て人を通せば、後邊振顧き走り行く。通次は少し笑ひかけて。お園斯うして歩くところは何うやら落人のやうぢやないかと、天を仰げば雲無き月は二人の後影を地上に映して、またもやお園を羞かしがらせぬ。

其十一

御免なさいませと、格子戸徐に開けて、お師匠さんはお宅でゐらつしやいますかと音信へば、常盤津の師匠文字清は、障子一重を隔てゝ、長火鉢の横坐にすわり居ながら、ツイ鼻ッ端の入口に、來客の足音を聞きつけて、應接に出やうともせず。べたりと居座りし儘、自烈躰さうに眉毛を釣り上げながら、はい何誰樣で御座いますか、お三やお客樣がゐらつしやいましたから、一寸出て見てお吳んなと、朱羅苧の長煙管にて、煙草橫柄にふかし居り、一向に取合はぬ不挨拶も、禮儀といふもの知らぬ賤しき婦人には、これも是非無き事とは云へ、この師匠に躾らるゝ遊藝、何がなんで娘子供の益に立つものぞ。おほよそ泥水に入浸りて、腸黑くなり果たる者は、世に搨れ心捻くれ、他人に對して深切といふもの微塵も無く、善人にも惡人にも、たゞ瞞着といふ二字にて交り、先づ己が身を益する程の者ならば、服裝の可否より眼を着けて、これは德用、あれは損物と、道具屋が引越の雜荷を踏み付けるやう、人物の高下によりて所作するゆゑに、己れが眼下の者にして、血筋の者にあらぬ限りは、愛も慈悲も日中の芋の葉に置く露の如く、あるか無いかも判らぬものなり。お三は主人が呼び聲に、仕かけた用事を投り捨て、忙しさうに濡手を前懸に拭ひ、かけた襷を片手で外して袂へ押込み、入口の障子を手荒く開けて、輕く會釋しフッと頭を上げ。おや何誰樣かと思ひましたら、お園さんでゐらつしやいますと、文字清の方を振顧いて云へば。なにお園さん！おやまア貴女ゐらつしやいまし、お上りなさいませんものですから、妾やア初めてのお方でもおゐんなさるかと思ひましたよ、眞にまア好うゐらしつて下さいましたこと、此

間中からお噂ばかりまうして居りましたよ、はゝゝ、さア〳〵モッと近くへお寄り遊ばせ、先日は緩々御馳走さまに……と下へも置かぬ世辞馴れた口上に、お園はたゞ會釋ばかりして。いゝえお師匠さん、何ういたしまして御承知の通りの無人なもので御座いますから、折角お出で下さいましても、お粗末ばかりで……其後は御不沙汰いたしまして、上らう〳〵とは思つては居りますもの丶、親父様は會社の方へゐらつしやいますし、宿は御案内の役所へ出ますものですから、上らうと思つてもツイ〳〵延引になりまして、ドウもまことに……。はゝゝ、お園さん其樣にお言譯遊ばしますと、却つて痛み入りますと云ひながら、下女が進むる座布團を、お園が辭退して受けぬを見て。お園さん、まア貴女よろしいぢやありませんか、サアお敷き遊ばしませ、それに貴女がゐらつしやる故か今日は正午前だけにしてお稽古も休ましたから、御緩くりとお話しなさいナ、御存じのこんな狹い家ですけれど、氣兼の無いだけがお宅よりお樂で御座いませう、チエ貴女、何程姑御が無いからと云つても、お嫁さんといふものはなか〳〵辛らいもので御座いますからねと、喫みさした煙草をポンと灰吹に叩きつけ。お三や、一寸お茶道具を洗つてお呉れなと云ひつゝ、汚れもせぬ火鉢の緣を雜巾で拭いて居るにぞ、お園は女中に持たせ來し包みを膝下へ寄せつけて中より進物取出し。お師匠さん、何かと存じましたが、まことに粗末な物で御座いますがと、氣の毒さうに時宜して出すを。おやお園さん、ナンですねー、貴女決してそんなお心遣ひなさらないで、ドウも誠に痛み入ります、毎度お珍しいお品を頂戴いたしまして、はゝゝ

ホンに通次さんは未だお年もお若いのに、万事に御如才なくつてゐらつしやるから、貴女も何様にかお勤め易う御座いませう、だがねアンマリ殿方のお氣がついてゐらつしやるのは、お内儀さんの手落が見て、實はよしあしなもので御座いますが、通次さんなんぞは其樣事は万端御承知のお方だから、貴女はホンにお仕合せだよ、だから此間も皆さんとお噂を申して居りましたが、人の行末なんていふ者は、少とも判らないもので、アノ貴女と御一所であつたお松さんが、柳橋から藝妓になつて、この頃では大分賣出しましたよ、アノ方も負けぬ氣の御性分だから、行々は好い藝妓衆におなんなさるだらうと思ひますよ、だから人間の一生は判らないもので御座いますね、貴女左樣ぢやありませんか、ねー他人……他人の……と云はれてお園はさも驚ける樣子にて。ホンに左樣で御座いますね、お松さんが藝妓におなんなさるとは、何うも驚き入りました、そして此節はお賑かで御座いますか。いゝえ、貴女方のゐらつしやらなくなつてからは、いつそ淋しう御座いますよ、それに當節はお少さいお方ばかりですから、妾も骨が折れて仕やうがありません、おや／＼お三、アレ／＼御覽な、斑がまたお隣家の屋根に上つたよ、呼んでお呉れな、斑、ぶち、來う／＼、殘つた御飯でも喰さしてお呉れな、それ／＼お隣家の玉も來た、シッ／＼アレお鉢へかゝるよ、お三やお前見て居ておくんなね。

其十二

月も花も命あつての物種、弗と無常の風に吹かれたら最期、色も戀も何んでも無い事と、悟つて見れば

さてツマらぬもの、果敢ないもの、味氣無いもの、面白からぬもの、これ程厭な娑婆ならば、五十年の壽に熨斗をつけて、乞食が長者へ進物にもすべきなれど、左樣した沙汰を未だ聞かざるは、浮世も辛らいものにはあらず、死んだ生きたは、奉公人の出代りと、大目に見て働いたなら、悲しいの裏は喜びの相長屋、善惡邪正も壁一重の隣合なるべし、金田小八郎は半年程以前、肺焮衝といふ病に罹り、急場を過して療養疎略ならざれども、如何せん日頃身躰虚弱の質とて、快氣の模樣少しも見えず、日に〳〵衰へ行ばかりなれば、母は心痛一方ならず、娘お園にも相談して、大學病院に入院さし、看護に一層意を注け、服藥養生に怠らざれども、傾きたる家の容易く立直らぬと同然、唯おぎなひ藥に危うき露命を繋ぐばかりゆゑ、母の切なさ當人の心細さ、なか〳〵に哀れなれば、お園も梅澤より暫時の暇貰らうて兄の枕邊去らず看病するにぞ、小八郎もいたく打喜び、この二三日は心地清々したればとて、病院を退き自宅にて療治したき旨母に語るに、かねて醫師よりも存命覺束無しとの内諭あれば、此上は快く臨終さするこそ病人の本意ならめと、早速に小八郎の意に任して、今をも知れぬ病人を、釣臺に載せて靜に舁がせ、母もお園も心細氣に附添ひながら、漸う我家に着き、小八郎が書齋と定め置きたる部屋を病室に充て、枕元を半時も離れず介抱すれば、梅澤家にても親子交々見舞ひ來て、病人の氣を慰め呉るゝに、母もお園も夫に聊か力を得て悲しき中にも喜び居りぬ。

何日も來る度毎に緩りと尻を落着けて、病人の氣に適ふやうな談話しては、親御や嫁の喜ぶ顏を後邊に

見ながら、歸り行く梅澤正義も、今日はまた何うした事か、車夫を門口に待たせ置き、さも忙しさうに勝手口に座りて、挨拶に出し母御に。病人に變りは無かと突然問ふに、はい其通りでと答へて、煙草盆を進むれども、煙草喫はんとする樣子もなければ。今日は何うやらお忙しさうなと問ふに、正義はいゝと會釋して、實は其事で上りましたが、恰度昨日の夕暮で御座いました、會社の用事で急に長崎行を仰せ付られまして、近日中に先方へ出立ことになりました、つきましては跡は若い者ばかり、お園も私の留守中は時々本宅へも歸るやうにしてそして看病もして呉れるやう、左樣申し聞けて參りますが、貴女からも宜しく仰しやつて下さいませ、この事小八郎さんに云はぬ方が好からうね、病人に心細がらせても惡いが、一寸逢つて參りませうと、部屋に通りて枕下に座れば、面窶れたる病人が、息遣ひ苦しさうに此方を向いて。ようお出で下さいましたと云ふ。正義は熟々とその顏を打眺めて、小八郎さん今日は何だ、氣を丈夫に持つて居なくつちやいけないぜ、喃、お園兄さんのお顏色が漸々好いやうぢやないかさうだらう先日から見ると大層好いやうだ、あアこれは惡けない、斯う立籠めて置いては、衛生上に害があるから、その障子を開けて置くが好い、そしてその鉢植を兄さんの見えるところへ置けば好いのに寐ながら花を見たら幾分か氣が慰めるわな、まアお園兄さんを大切に御看病申すが好いぞ、今日は少々忙しいからこれでお暇しませう、と立てば母御はお茶一ッと止むるを、勝手口までまかり出で、お園を呼んで小聲になり。兄さんは大層樣子が快くないから、傍を離れぬやうにするが好い、ねー左樣ぢやあ

りませんかと、母御の方を振顧いて云ふに。何うも困つたもので御座います。ウム困つたものだ、醫師がなんと云ひました、ナニ六ヶ敷と、それハ何うも御心配な、まアお大切に左様なら。

午後ともなり小八郎ハ少し心地快ければとて、枕を上げて一ッ二ッの物語りなどするに、精神少も耄はず、語氣平生の儘なれど、息途斷らして苦しき樣、頰はこけ落ちて眼陷り、鬚蓬々と生へて、見るから哀れの容躰を、傍に看病する人々の心ぐるしさ。兄さん、今日は少とは快う御座いますかと云へば半バ閉たる眼を微に見開き。あア、大層快いやうだ、お園心配するな、もう死にやアしないよ。あら兄さん死にやアしないなんて、そんな事を思つてゐらしつてハいけませんよ、氣を壯健にもッて居て下さい、醫師に伺つたら、追々快い方だッて、だから厭なお藥も我慢してお上りなさると、宜うございますけれど、ねーお母さん。さうとも〱、小八郎そんな弱い心でハ快くなれないよ、お前になぞ茲で居なくなられると、跡に殘る妾ハ何うする事だ、何うか早く快くなつて吳れと云へバ、小八郎ハ懶氣に頭を左右に打振り。いゝえ、お母さん私ハ此分でハ……と云つて眼を瞑れバ、包み餘れぬ淚がぽろり。母も妹も耐え切れず、聲立てゝ泣き出しさうになるを、片袖に隱して母親は。小八郎お前何んだね、そんな心弱いとを云つて。はいお母さん御免下さい、だがお園や、お前通次さんと睦まじくして、お母さんに御心配をかけるなよと云ふかと思へバ、さもむ寐さうに眼を瞑る時、窓外の初櫻、夕暮の風に散りて障子にはら〱〱。

其十三

開化といふ荷車に載せて來し文物制度、惡からう筈はなけれど、人間智慧つくに隨つて、邪正の追分を誤り、路次口にまごつくところより、義理人情は吉野紙よりも薄く淡く、輕躁を如才無いと唱へ、浮薄を才子と呼び做す不思議な世の中、お化けは函根以東に居りませぬとは、それは古風の大入道、目に見ゆるものならば、退治のしやうもあるべきに、無形の惡魔は始末仕惡く、廉恥といふ蟇目の秘法が地を掃つてより、障子に目鼻壁に耳、好い事は詐欺しても我物にし、惡い事なら自分の落度も他人に塗りつけ、借りた金は證文が化けて口を利かぬまでは知らぬ顏の半兵衛殿、會社は支配人の旨い汁を啜る場所ときまり、銀行は機關、紳士の髯にも苦し涙の露が宿る、萬事萬端押出しばかりの道具立、他人の腰を足代にして三層の高樓を建てる商會あれば、それが向ふを張る山師者が、借金を土臺にして借金の山を築くといふ危險い浮世、如才內證は遣り繰りの魂膽に、身を區役所に梅澤通次の父正義は、日本物產會社の命により、肥前長崎支店の役員に任ぜられ、日ならず彼の地に赴くとて、正義の親しき朋友は、そが送別の宴を新大橋のたもとなる萬千樓にぞ開きける、されば通次も父が惜別の宴會なれば、彼事此事と奔走して、定めの刻より追々に參會まる人々の、席順の次第など女中と共々周旋して、手落無きやう勤むるにぞ、見る人流石は如才無き男なりとて賞め稱へぬ。

午後二時よりといふ觸れ込みの宴會なれば、夜の九時頃になる時は、來し人の一人去り二人歸りて、今

は只通次の外に三四人の來客殘るのみなれば、さらばとて酒を改め肴を撰み、しんみりとした小酒宴に先刻呼びし藝妓の、隣りの客間に未だ居ればとて、それ呼び寄せて、爪彈の沈み調子に、屋外の水の音まで、床しさを添へ、何となく興あるにぞ、座に在るヽ皆酒を過ごして、銘々持前の隱し藝に、またもや一花を咲かせぬ。暫時して其宴も了たれば、通次は獨り居殘りて、會計何に彼の事を埒明けんと、女中を呼びて、また戯談に笑ひ居けるが、旦那ハ未だお歸んなさらないのと、嬌喃しき一聲に椽側の障子を開けて入り來しは、以前の藝妓小松なり。女中もそれ者氣色をはかりて。おや姉さん、まアお這入りなさいと、己は少しく座を讓りて、通次が向ふ正面に女を据ゑつゝ、銚子と奧へ立去りぬ。通次は不思議に思へども、斯る事には場所馴れて、何とも思はぬ男なれば。さア一ッ献じませうと、猪口を洗つて女に配せば、有難と一口呑み干しつ、盃洗の水にそれ洗つて、御返盃と通次に返すを、通次は訝かしさうに藝妓の横顔眺め居けるが、小首傾げて。をい、僕はお前を何處でか見たやうな心地がするが、はてなアと思はず眉を顰むるに、女は莞爾と打笑ひ。はヽヽ、もうお忘れなさいましたのでございますか、妾は能く覺えて居りますよ。なにお前の方で覺えて居る、はてこれは愈々判からないぞ。あア何處であッたらう。はヽヽ思ひ出せませんね、妾から云ひませうか、それ／＼何日ぞやお園さんと御一所で、新柳亭へゐらつしやいました折に……。あア左樣だッた、それぢやアお前はアノ折の三人連かへ。はい、左樣で御座います。さう／＼僕も何處でと思つたが、何うも思ひ出せなかつたと、互に献しつ酌む酒に

今は通次も微醉機嫌、大分醉つたと立上れば、跟蹌く足のしどろなきを、あれお危險と抱き止められて、見れば藝妓の小松なり。障子開くれば川風淸きに、醉ひを此處にて醒まさんと、欄干に凭れば月澄みて、二人が思ふ心や照さむ。

通次が立てば。アレ妾もと後邊より踵いて來る藝妓の小松を、醉眼ながら容子を見れば、年も盛りの十八九、强られし酒に眼元ホンノリと美くしく、化粧らぬ木地の愛嬌は、露ならば溢るべし。便所を出でゝ手を洗へば、絹手巾もて拭いて吳れぬ。よろめきながら椽側行けば、お危險う御座いますと手を握り、歸ると立てば、未だお早う御座います、醉を醒してゐらつしやいませ、お胸が痛くば撫りませう、何うせ奥様のやうでは御座いますまいが、マア宜しいぢやアありませんか、お園さんとは稽古朋輩、遲くなつてお小言かありましたら、お松に逢つてとおつしやれば、お腹立ちもありますまいと、顏を素向けて俯視く樣は、海棠雨に惱むとはこれ。通次は醉ふては居るものゝ、緩みし帶を引締直し、着せかけられたる黒の羽織の、袖を手早く通せし後。車は來たか。いゝえ粹を利かして參りません。それは誰かの事だらう。はい〳〵奥さんが待つてゐらつしやるのに、惡止めしては罪になります、ほゝゝ。はゝゝ、コリヤ何うしても迷ひ出しさうだ。

其十四

杖とも頼み柱とも便り切ッたる悴小八郞に死別れ母は寄邊無き捨小舟の楫を絶え、數々の憂目を忍べど、

浮世の波の荒くして、なか〱に思ふが儘ならねば、今は活計に困じ果て、此上は似合はしき手內職なりと、思へど、これとて都合好きは無きに、かてゝ加へて小八郎が病氣より、思はぬ負債の嵩み來て、この小身代に何十圓といふ高なれば利息ばかりも月に何圓と拂ふて、二月や三月は遣つて退けしが、入口無くして出るのみの寐暮し同樣、後には如何で堪へらるべき、日每〱の催促に、もう言譯も云ひ切れず、明日は何うしやう、明後日はと唯行末の世間が恐く、さて一日とて胸を痛めぬ日はなかりけり。」

今日は小八郎が一周忌なればとて、母は未明より家を出でゝ、菩提所なる谷中無明院といふに至るに、苔蒸したる石碑草に交りて立並ぶ樣いと哀れなり。母は閼迦桶に水汲みて、角の花屋にて調へたる香花を我が子の墓前に手向け、南無阿彌陀佛と唱ふる唱名さへ、逆緣供養の悲しさ、湧き出づる涙に眼を泣きはらして、爪繰る念珠の百八煩惱、何處の鄉を彷徨ふやらん。卒塔婆の戒名見るにつけても、想ひ出さるゝは小八郎が世に在りし時の樣々。眞に悴は不仕合な子だ、妾等を安泰に暮させたいと思つて、始終心配ばかりして、そして斯んな事になるとは、世の中は皆なこの樣な儘ならぬものだらうか、それにしても後に殘つた妾は悲なしい、追々に活計に困つて來るし、思はしい商賣も內職もない、まんざら無くもないとしても、梅澤の家の前もあるから、そんなに見苦しい事も出來ぬ、たゞでさへお園が家元が貧しいと、嫁の氣がひけるものと溢して居るのに、だが通次なぞは仕合な者だ、半分は親父さんの世話で遣つて居るが、彼アだと苦勞も心配もあるまいが通次の壯健で居るにつけても、小八郎の事が思ひ出

されると、唯さへ狹き女の胸は、有耶無耶の考へに裹まれて、立去るも名殘惜さに堪へねど、何時迄も斯くてあるべきにあらねば、さて匆々にして家に歸りぬ。

二三ヶ月以前の事なりし、是迄の家宅にては獨住には手廣きのみか、よろづ贅費多ければとて本所林町に移りけるに、今までの宅とは違ふて殊の外見苦しく、雨に黒みし瓦屋根は、苔に蒼み草生じて、見るさへ中々いぶせき有樣。今更世の中の榮枯盛衰の賴み難きを觀じて、唯一層に家業に怠り無かりき。或日の夕刻、上總戸ぐわらりと開けて入り來しは、家主の手代が家賃取立にとて來りしなり。されども少しの蓄へだに無ければとて、種々に言譯云ふて歸せしが、引續てハイ薪屋で御座い、味噌屋で御座いと、脂薪に火の點きしやうに、烈しく催促さるゝにぞ、母は金策の屈托に窶れ果てゝ、我と我身で世間を狹め、自宅の閾もおのづと高き心地して、水汲みの出入にも、大屋の目褄に慄としては、猫に覗はるゝ痩鼠の如し。想ひ廻せば去年の春は、心優しき悴と共に團欒し、雨の日の寂寞する折も、笑ひ聲に花を咲して、近所の者にも家内の睦まじきを羨まれしが、今年は如何なる凶年ぞ、秋風簾に音信れて、入相の鐘に哀れ散りしく桐一葉、それよりといふものは獨り身のうら淋しさに、亡き人の昔時のみ思ひ出でられ墓參を今の身の勤めとすれば、物事總て手につかず、泣いて送る日のみ多きに、窓外の木枯し冬を知せて、霜は枯草の褥に重く、またと去年の快樂無きに、諦めては見るものゝ、慰むる人無きにつれ、浮世は厭、厭、いやで堪らず、寧そ死んでと思へども、また忽ちに心が變り、娘の身の上苦にやみては、三

度の飯も容易くは喉に通らぬ憂や辛らや。えゝ自烈たいと縫ひかけし洗濯衣裳を投げ退けては、慌てゝ拾ひ皺延して。勿躰ない、手内職して日を送る貧乏者が、破れたりとも寒さを凌ぐ衣裳を投げては罰があたる、別けてこれは亡なつた小八郎の遺物の袷、何日ぞやお園と二人して藏前の呉服屋から買つて來たこの木綿縞、摸樣も色も悴には似合ふと思つて買つたのが、これが遺物とならうとは、ホンに人の壽命は判らぬもの、幼少時分にお醫者さんに伺つたら、身躰が弱いから長生はしまいとおつしやつたが、二十歲代で死なうとは思はなかつた、それにお園も一躰が陰氣な方だから、三味線や踊でも習はしたら氣が開けて宜いだらうとのお話ゆゑ、遊藝を習はせて氣が大分引立つたとは云ふものゝ、根が物事に屈托する性分だから、小八郎が死んでから大分力を落した樣だ、それに妾が斯う零落れて居るものだからます〳〵力を落したやうだ、引きかへて梅澤は見榮張家ゆゑ、妾が斯う見苦しい宅に居るのを、嫁の家の貧しいのを、出入の人に知らさぬためか、お園にも以前のやうに往つたり來たりさせない樣子、通次も通次だ、盆と正月に來るばかり、平日は門口を通つても、立寄つて吳れぬどころか、お變り無しかと只の一言慰めて吳れもしない、世間といふものは的にならぬものだ、通次が左樣云ふ氣で居る位なら、お園の辛らいのも思ひ遣られる、聞けば此頃は藝妓買ひなどもする樣子、男の腕次第で放蕩するとは云ふものゝ、賴み少ないお園の氣が何んなだらう、あァホンに世の中は辛らいもの、いや〳〵辛らいの心配のと云つたところが、追つ付いた話ぢやない、それよりは内職に精出すのが肝腎、せめて一錢でも二

錢でも餘計にお錢を取つて、お園に小遣ひをやるのが好い、おや〳〵モウ晩くなつて來た、何うして此樣に日が短かいだらうね。

其十五

殘春の朧月、櫻の梢を黑めて、落花庭前の雪と散り敷けばとて、梅澤通次の女房お園は、部屋の圓窓より顏を出して、失神と景色を眺め入るに、氣も澄み心も淸み行きて、何とも云はれぬ心地好さに、我を忘れて呆然と見惚れ居けるが、暫時して心何物にか驚かされけん、思ひの種々むら〳〵と胸に湧き出ては、愁ふべき事悲しむべき事、夫等の物が差別なく、そが身邊に聚りて、眼を瞑れば影あるが如く無きがごとく、唯有耶無耶の中なるにぞ、また眼を開きて四隅を見れば、幻中に見し蝶も花も、これ窓外の眺望にして、さて眼に障る雲霧も無し。見るともなく見ぬにもあらで、また庭前を眺め遣れば、梢に見ゆる微風に篩はれて、花の粉雪のちら〳〵と月影に散る樣の、得も云はれぬ趣きあるに、失神と景に見惚れて、また瞬きもせぬ眼には、何時しか愁の霞たなびき、物思ひに沈む折から、わが耳朶の邊にて、囁くか苦吟くか、己が考への一ッ〳〵、聲あるが如くがや〳〵と音して、お園が胸を取圍むにぞ。今は堪え難しとて、庭前にあり合ふ駒下駄穿きかけ、飛石傳ひにそゞろ歩けば、不圖耳に入る腕車の音あり。それお歸りかと膽を冷して、臥房の方へ寄らんとするに、聞こえし車聲は遠く響きて、我家の門邊に着きしにあらず、ハテなと眉を顰むれば、遠吠えの犬の聲、わが月影に夢を破られてか、微かに吠ゆるは、

お園が心に身を刻む聲とや聞くべし。夢ばかりなると詠みけん春の夜も、はや漸くに更け亘りて、距離間近の隣家にも、語る人聲無くなりぬ。お園は臥床に入來りしが、寢んとする樣子も見えず、さりとて用事ありげの摸樣も無し。さも〳〵力無氣に、夫が文机の前に座りて、またしても何物をか見詰め居けるが、何を的にして、想ひを煉るか、何を樂しみて、意ひを遣るか、心の奥底は微塵も知り難し。良ありて傍にありし新聞紙、手にとりて讀みかけしが、胸を拊つ事やありけん、矢庭にばらりと引裂きて、裂きし一片を指頭にからみつけ、怨めしさうに噛み〆めしが、嘆息ほッと一ッつき。えゝ、自烈たい、厭、厭だ、浮世は厭だ、ホンに婦人の身ほど辛らいものはない、つまらないものは無い。五年三年勤めても、厭られた日にはツイ三行半。それも厭いたら厭きましたと、判然云つて何うなと所分をおつけなされば宜い事に、厭とも云はず嫌ひさうな顏もせず、家内を外方なる今日此頃、今夜もお歸りなさらないのか、先刻聞いたのが十二時、アレ〳〵今鳴るのは一時、ホンに仕やうが無いね、二日も三日も寐泊して、家内の事を何んと思つてゐらつしやるだらう、それにアノこの頃のやうに火事早い時節に、若しも萬一の事などあつたなら、妾とお六ばかりで、マァ何うしたら宜いだらうね、ツイ一昨夜であつた、お向ふの薪屋さんで洋燈を轉覆へして、危險いところであつたといふに、ホンに物騒な晩だのに、家内には男ッ氣の一人も無いは、不用心でありやァしない、厭、厭、嫁と云ふものは此樣に氣が揉めるものかしら、實家へ歸つたからッても、お母さんがァゝ云ふ風では、少とも力になりはしないし、仕やうが

ないね、旦那は旦那でアノ通り遊んでばかりゐらつしやるし、それに此家の御身代は何程おあんなさるか知らないが、藝妓買ひなぞ遊ばしたら、末始終は續きはしまい、早く何誰か說諭して下さるといゝけれど、宅へゐらつしやる御朋友は、みんなお眼下のお方ばかりで、其樣なお役に立つお方は一人も無い、え、自烈たい、お母さんに云つたからつて、たゞ心配をかけるばかりで、力になつて下さると云ぢやあなし、ホンに兄さんが今頃まで居て下すつたら、妾ア何んなに力になつたかしれやアしない、それを思ふと口惜しくつて仕樣が無いと身を震はして泣き伏しける。暫時して弗と四邊を見れば、臺所に洋燈明るく點けあるにぞ、何うした事とさし覗けば、下婢のお六雜巾さしかけて、コクリ〳〵と居眠る傍に、鼠騷いで戸棚荒せば、呼び覺して戸締り堅め。六や、モウお寢み、ドウセ旦那は今夜もお歸りになるまいから。

其十六

悋氣も少しはわさびにて、色の中のりんきのないは、風の無い時の凧のぼり、拍子のないものなれども、右にむなぐらとり、左に疊たゝいての山の神の悋氣は恐しゝ、牡丹花のかんばせうちしをれ、三日月のやうな目から恨の泪はら〳〵、しほらしくも氣の毒也、又筆びやうしの代筆に、さのみおもはぬ中なるを、鬼にもなりさうな恨のかず、氣味の惡いほど書ておこし、壁隣の呼聲ゆふべなんやらいふて、高笑する聲のきこえたるは、愛憎もこそも月夜に釜、ぬけた樣になつて居る男ほど馬鹿らしき物はなしと、

昔の人の誰やらが云ひけんも、實に面白き言の葉ぞかし。なべての女房に多少の嫉妬無きはなけれど、分に過れば波風の基、愼しまねばならぬものなれど、およそこの悋氣といふは、夫思ひの內儀に多くて旦那を踏臺にする程の山の神には、悋氣も家には居ぬさうな。されば候ふ。情男に眞實をうつして、花も月も隱れ首尾の中に見る外妾が、毛唐人に嫉妬やきたる例は聞かねど、平生には交情好き夫婦の中も弗とした口說に自暴出して、所以も無き娘の噂に、奧方角を生したまふては、道成寺の下稽古。宴會の歸宅遲ければとて、露ばかりも罪も報も無い夫を、彼アか斯うかの揣摩想像に、袖から落た梅の花を捕へて、色香を枷に無理難題、ツイ想ひ出しもせぬものを、女房の方から云ひ出して、燒木杭に火を點けて遣るやうな、迂濶な事をする人あり、惜まるゝ物は見たく、止めらるゝ袖を振切つても退けたきは男の意氣地、嫉妬とてもその如く、浮氣する夫殿が惡所通ひの前途に立塞がり、酢の蒟蒻のと嫌味云へばとて、ウンと云つて思ひ止まるは、千人に一人も無く、大抵は女房の顏を土足で蹴ても、存分にして退けるものなれど、さるを反對の仕打を見せて、可愛いアノ兒に早く行て逢つてやつて下さいませと、後邊から羽織着せる女房あらば、男子は固より情に脆いもの、捻けた魂性も張合拔けて、焉に情夫はあるまいか、こりや此儘に出られぬと、夫先づ一方の心を疑ふ、斯くして女房が操愈々現れなば、實意の地金はこれにて知れなむ。さる程にお園は夫の歸宅を、今か〳〵と待居けるが、次第に夜も更け亘るにつけ、戸叩く風に幾回かぢらされては、寐苦しき夜半の夢に、性根疲れてとろ〳〵と熟睡む折しも、忽

ち高く呼ぶ者あり。驚き覺めて枕邊見やれば、通次物をも云はず長火鉢の傍に座りて、さも不平氣にお園の顔をじつと見つめ。オイ水を呉れ、コリヤ水と云ふのが聞えぬか、お園早く持てと云ひつゝ、詰めし煙管の雁首にて、火の無い火鉢を掻き廻し、えゝ自烈ていと、吸ひかけた煙管を疊へ投げつけ。オイ水を何うしたと、眼を光らして詰り問へば、お園は亂れし鬢の毛を、掻き上げながら、ツンと濟して平氣な顔。ハイ只今六が……。ナニ六……が何故お前持つて來んのだ、お六早う持てと、出されしコップを引掻くやうに手に取りて、一口にグッと呑み干すを、お六は圓盆つき出して。モ一ッ差上げませうかと云へど、お園の顔を睨んだ儘、言句もあらで扣へ居るにぞ、下婢は恐々盆を退くるを。お園は傍から言葉を出して。六や、今夜ハ旦那が御酒を召上つてゐらつしやるやうだから、余りお水を差上げぬ方が宜からうよそうして妾がお相手をするから、お前ハモウ寢んでも好いよ、と勦はられ、お六は部屋を退きさしが、旦那の機嫌は未だに復らず。お園、其方は亭主の歸つたのを知つてるかへ、失敬な、今の高鼾は何うしたのだ、亭主が歸つたのに、門口に一時間も立、して置いて、それで留守居の役が濟むと思ふか、無禮極まる、しッ失敬と眼の色變へて詰め寄れバ、お園は一向沈着きはらひ。はい、それを存じませんのハ重々妾が惡う御座いました、モウ近所でもお寢みなさいましたのに、そんな大きい聲をお出しなさらなくつても宜いぢやアありませんか。あッ何んだ、遲く歸つたから大きい聲をするなと、これハ怪しからん何故大きな聲をして惡い、主人が他家から歸つて來て、部屋まで這入ても、今の高鼾は何だ、オイ何で大

きな聲が惡い、さア聞かうと膝を進むるを、お園は横目でぢろりと見遣り。はヽナニもそんなにお怒りさらなくつても、宜いぢやァありませんか、今夜ばかり他家へゐらしつたやうに、ホンに度々宅をお明けなさりませんものですから、お待受けまうして居りませんのは惡う御座いました、はヽ、何うせ今夜もお歸りが無いと思つて、實ハ寢すんでしまいましたと、下を向いて素知らぬ顏するを、通次よく〳〵見兼ねたりけん。あ、な、何んと云ひなつたと、醉ひしに任せて小鬢を拂へバ、お園ハ驚きあれッと云ふ時、丸髷解けて大わらわ。おい園、無禮な阿魔、此家へハ置けぬ、さア出て行けと、袖を無手と引攫み戸外へ出さんと挊けバ、お園も今ハ一生懸命、泣いて拒めど力及ばず、はや戸の方に追ひ出され。今更妾を厭いての沙汰かと、格子に縋りて泣き沈みぬ。

其十七

本所林町のお園が實家を、夜もはやいたく更けたるに、戸扉はと〳〵と打敲くものあり。中なる婦人ハ弗と眼を覺して、猶能く其音を聞判くるやうなりしが、いよ〳〵我家の門口なれば、訝かしげに眉を顰めながらも、起き出でヽ帶手早く引〆めて。誰だらう、今頃來る人ハ無い筈だが、門違ひではあるまいか、こんな夜の短かいのに、用事があるなら明日にして呉れヽバ宜いが、だが夜中に來る位な用事だから、屹度急なことに違ひないよと、寢むそうな眼を摩りながら、戸口まで出來りて。何誰樣でございます、そして御用はと、扉を開けて、先づ其用事を確かむるに、戸外にてハ唯「妾」との一聲に、母ハ小首

を傾けながら、お園かへと問へバ。お母さん妾だよと微に云ふに。おやお前、何故こんなに遲く來たのだよ。お母さん、宜いから開けて下さいな。あア今開けるんだけれど。この懸鍵が何うかしたかしら、えゝ自烈躰外れやアしない。お母さん未だですか、そんなに何時迄も立つてますと、犬に吠えられまさアねと内外に互に氣を揉みしが、漸うに戸を開き母ハ手の頭を撫りながら。眞に何時も〳〵も困るよ、何うせ如斯家だから、盗賊も這入はしまいけれど、でも締りをしないと、何んだか氣がすまないと云ひながら、糸心の手洋燈持て。お園お六どんは。お六なんぞ參りはいたしませんよ。おやアお前一人でかへ、こんな夜更に何うしたんだね、お六さんを途中からでも歸したのかと、問へども お園ハ無言にて、たゞ潸然と泣き居るに、母ハ一層心配まさり。お園お前泣いたりなんぞして、何うしたのだへ、通次と喧嘩でもしたのか、夫に髮も亂れて居るが、何處怪我でもしやせぬかと凋れて問へバ、お園ハ漸う涙を拂ひ、今夜の有し次第を語れバ、母も呆れて娘の顏を見瞻りしが、流石ハ親の分別早く。お園そりやアお前口惜いだらうが、もう少つと辛抱おしよ、我家も小八郎が居る頃でもあつたなら、通次位に負けて居る事はないが、何んと云ッても此通りの始末、今更彼家を止して、他家へ嫁入するとしても實家が斯んなでは、貰ひ人もないだらう、よお園そりやア妾だッて泣く程口惜いが、二年も三年も彼家に居て、今更止すのが何うも惜いぢやアないか、通次の浮氣するのも若氣の一時の事だらうから、其中にハお前が爭は無くつても、自分から氣がついて止すだらう、だからモ少つと辛抱するが好い、眞にねーお園、人

ハ貧乏にはならないものだ、實家が惡くなつたッて、女房迄が邪慳にされるかと、親子互に手を取り交はし、口惜し涙袖にはら〳〵。

近かお前に逢つたんだから、妾も一時も餘計に留めて置きたいが、底はそれ……それにお前こんな夜更けに來たのだもの、せめて今夜だけも泊めて遣りたいところだが、斷り無しに泊つてハ、かへつて此方の落度になり、向ふへはます〳〵理のつく道理、のうお園妾の云ふ事聞容れて、機嫌克歸つて呉れ、辛抱すると云ふのハ此處の事だよ、お前歸つて呉れと、母ハ泣きつゝ賴むやうに言聞かするに、お園も漸う我が非を覺り、涙を袖に拭ひながら。眞にお母さん、妾が惡うございましたそんなら今夜ハ歸りますよと、亂れし髮を搔き上げて、立たんとすれバ母親ハ。お園髮が大層見苦しいから、一寸櫛卷にして遣りませうと、立ちて娘の後邊にまはり、手早く髮を結ひ了れバ。さア出來ましたよ、そんなら宜しくお詫をしてね、宜いかと娘を勦れバ、左樣ならバお母さん、大分夜も更けましたから、お風邪感さぬやうにお寐みなさいよ。なアお前も壯健で……、はゝゝ旅行でもするやうだ、お園宜いかへ、左樣〳〵眞に妾も左樣思つてハ居るけれど、なか〳〵大抵な心配ぢやアないからね、妾もお前と一所にでも居られる事にならうものなら寧そ嬉しいけれど、だが通次も赤坊でも出來たなら、左樣何日迄も今のやうでも無からうからね、妾も送つてゝも行きたいところだが、この服裝でハ却つてお前の氣が引けるだらう、それ〳〵其處は危險よ、溝板が腐つて居るから、氣をおつけよと、何彼につけて子の案じらるゝは親心の平生なり、

母は門口に立出でゝ、朧夜ながら娘の影の微かになる迄、跡見送りしが、軈て物思はしげに、戸を鎖して臥房へ入りぬ。

其十八

温く吹く春の風、竪川の橋のたもとに餘りて、林町なる實母が住居より、とぼ〳〵と歸り行くお園が、亂れし鬢の毛を吹き分くるに、今が今まで物思ひに鎖されたる胸も、自と開くる心地して、弗と後邊を振向けバ、朧ながらも我が姿の地上に影を映すにぞ、月あるに初めて氣がつき、澄み亘る蒼空を打見やれば、傾きかゝる月代を、向ふ河岸の竹屋の竹が受止めて、的に一矢の趣あれば、兩側の家の棟、黒く影を宿して、往來にハはや足跡は絶え果てたり、橋上に立つて、川の上下眺むれば、濁れる水も銀を流して、波の碎くる岸際に苫かけたる漁舟泊ぬ。お園は何の心も無く、水の面を眺めては、又湧きかへる思ひの種を打消さんとはするものゝ、心鎮まり氣平かになるにつけて、却て煩惱の數を増したり。夫は何う遊ばしたか、お母さんはお寢みなすつたらうか、此儘歸つて入れて呉れやうか、お六が起きて居つて呉れゝば好いが、何とお詫びを云つて歸らう、短氣なお夫の顏を見るのが厭でならない、これといふのもアノ藝妓奴が……聞けばお師匠さんの世話ださうだが、ホンに呆れたお師匠さん、旦那が彼妓を好いと思つて居らつしやれば、假令今夜は歸つたところが、末始終が纏りのつかぬこと、寧そ離……いや〳〵死んで……いや〳〵、モウ何時の間にか宅へ來た。と云へども門内に入る樣子もなく、暫時して罪

造りの竊聽に耳を傾けたり。

三時の鐘は鏘々と響き亘り、朧月雲に隱れて、四邊漸うに小暗くなるに、梅澤通次の臥房には、燈いと明くして、男女相對の影ありありと障子に映れば、それにつれて嬌喃しき聲の、戸外に微けく洩れ聞えぬ。貴君其樣ことおつしやツたツていけませんよ、お園さんといふ確なお内室さんがゐらつしやるぢやありませんか、憎くらしい、氣休めばかりおつしやつて、眞に罪だよと女は男に怨ずれば、男は莞爾うち笑ひ。はゝゝ、お前何故其樣に疑ぐり深いだらう、女房があるのなら二人持たうと云いやしない、お園にやアもう暇遣たから。お前を女房にしやうと云ふのだ、何うせお前にやア私のやうな男は似合ふまいよ、流石は柳橋のはやりツ子、引手數多のお前だから、外に云交えた男もあるだらうよ、人面白くもねエと、乙に身をひねれば、女は俄に怫として。何んでございますと、別に情男があるだらうツて、はいありますとも〳〵、通さんといふ立派な情男がありますと、男の頰を一寸突けば、男は其手を確かり握るに、女は強ねて身を交はすを、最前より此躰を見詰め居たりし、お園は如何に口惜かりけん。齒切み身震ひ、拳を握りて、已れと云ひ樣睨みし眼は、人か夜叉か、いと恐ろしかりけり。憤怒の眼に朱を注ぎて、憎し〳〵と見詰めし影も戸外には斯くとも知らざれば、何憚からぬ高聲に口説ば高じて厭味となり、互におぢれてぢらされて果は可もなく不可もなく、女が抓れば男も返し、男が語れば女は答へ、見る〳〵二人の姿は消えて、睨みし窓も眞の闇。此時お園は半狂乱、嫉妬の炎に心も迷ひ

我れか他人か我身を忘れて、是非の分別あらばこそ、門口に至り開けてわけてと、呼べど叩けど音も無し。他家の女に夫を寝奪られ女房が傍に見て居らりやうかと、いと高聲に叫べども、聞えぬ振の高鼾。憎しと云ひ様小石を拾ひ發矢と投れど手應へ無きに、お園は口惜さ百倍増り、歯を喰ひ切り身震ひし、亂れし髪を無手と掴みて、みり〳〵と挘れば、指にからまる五筋六筋を、絲斷歯に噛み碎きては、忽ちそれを吐き出し空を睨んで大笑すれど、四邊に見る人更に無し。斯くするかと思へば、また忽ち心變りて、戸を密々とうち叩けど、答ふる者もあらざれば、力任せに格子戸引けど、女の力の如何で堪ゆべき、破ぶるゝ様子の見えぬに腹立ち、指頭もて引掻ては、俄に思想の變りけん。莞爾笑ふて跡振顧み、口の中にて物云ひながら、迷ひまよひて行方知れず。

お園は去るともなく行くとも無く、本所二ツ目橋のたもと迄來りしが、向ふから來し巡行の巡査が見咎め。こわお前何しちよるか、と問へども更に答無きにあやしと角燈振上げ見れば、未だ年若き婦人の髪ふり亂し、装服取繕ろひもせず、裾はろつかせて、とぼとぼと歩くに、巡査は一向合點ゆかねど、女子なればと、氣を沈着けて。お前この夜更けに何處へ行くのぢやと、問へど、今回も答なきに此方は訝かしげに角燈振上げ婦人を見れば、お園も熟々顔を眺めて、唯にや〳〵と笑ひ居るにぞ、後にはそれと覺りたりけん。お前住居は何處ぢや、あゝ自分の家を知らんと云ふ事はないぢやらう、なんぢや林町ぢや、うむ左様か、何番地ぢや、なに金田といふのか、何番地ぢや、知らぬ事はないぢやらう、あゝ何と申した、お

い〳〵此方は林町ぢやないぞ、あに緑町へ行くと、こりや住居は林町と云ッたぢやないか。と詰り問へば、お園は忽ち歩を轉じて林町の方へ走るに、巡査も其後に踵いてはしる。お園は漸う我が家の前に着けば、弗と足を停めて物思ひに沈むに、巡査はいと和かに聲を細めて、住居は此處か、よし〳〵とうち點頭きつゝ、門扉ほと〳〵と打敲くに、裡には母の未だ熟睡せざりけん。おうお園かと聲立てゝ、門の戸細目に開けかけしが、巡査の姿にふッと眼をつけ、呆れて言語も出さぬ折から。あらお母さんが出て來たと、逸足出して逃げ出すお園を、巡査は片袖確と捕へて。こは此方の娘なら引渡す、注意して居らんけりや、不可んぞ。

其十九

お園は思はぬ憤怒に逆上してより、輕からぬ神經病に罹りて、後には往來を狂ひ歩くにぞ、母は行末の事案じ煩ひ、一旦通次と離緣せしとは云ふものゝ、娘に落度ありてせしにもあらず。云はゞ今回の病氣こそ、夫の不仕末故なれば、如何に邪慳な男でも、此譯をうち明して、共々治療を加へなば、萬に一ッも癒らぬといふこと無かるべし、左樣すれば破鏡再び元にかへり、また妹と脊の姿を寫すこともあるべし、と兎につけ角につけて、娘の身の上氣にかゝり、口惜しさ胸も張裂くばかりなれど、賴る緣家も無き身には、名を知れば惡人も慕はしく、浮世に鬼は無い筈と、見苦しき打扮も搆はず、緑町なる梅澤通次の許に至るに、門口の柳のみに變らぬ色の翠濃けれど、主は何處へ引移りけん。板戸に「かし家」の

貼札ありて、引越先も知れざれば、尋ね訪ふとも詮なかるべしと、母は涙をおしとゞめて、果敢なき浮世を悲しみけるが、さりとては他人の心の淺猿しさよ、今は兎もあれ、疇昔迄も一昨日までも、藝妓とやらに馴染ぬ前は、偕老同穴の契淺からずして、朝夕の起臥にも、お園〳〵と女房にまさる、可愛き者無しと迄、寵愛もし契りもしたりし身が、仇し女と情交せしより、罪無き妻に難題云ふて、厭がるを無理に離緣し、それが根本にて狂者とまでなりたるに、此事知らぬにもあらぬ通次、住居知れては何彼に六ヶ敷かるべしと、今日訪問るればはや住人は影を隱して、柳の枝を吹く風のみは、昔時馴染に我を招けど、世間の人は斯く無情かと、此家の方を振顧み、さて我家に歸りけり。隣家の嫗に看病賴みて、綠町まで行てかうと、急いで來しが今の始末、はや日の暮るゝに間も無からうと、家事や娘の案じられ、歸る家路も薄暗がり、おう〳〵遲くなりましたと、留守居を賴みし婆々に會釋し。眞にお待せまをしました、お園は別に變りがないかと、不具の娘は一層可愛く、臥房の行燈に火を點け了り。お婆さん、いろ〳〵お世話樣になりました、まアお茶でも召上つて、あらもうお歸りなさるの、それぢやア明日緩とゐらつしやいと、歸るを送りてまた臥房に入り、眠れるお園の顏を眺めて、はや潸然とうち泣くに、お園は何に驚かされけん。むつくと起きて枕突き退け。あアお母さん、それ〳〵小松の阿魔女が來ましたよあれ捕まへてお吳んなさいと、人無き影に驚きて、走り出でんとするを引止め。これお園、何誰も來やアしないワねと、力かぎりに抑ゆれば、お園は忽ち氣も鎭まり。おやお母さんか、たッた今誰も來やわ

しおいかへ、あゝ左様かと母の云ふをばうち聽き、平生のお園に變り無きに、母は可愛さ一層まさり、この娘に病氣はあるのかと、思はず涙に暮にける。

其二十

なか〳〵にお園が病氣癒ざれば、他人の敎に隨ひつ、瘋狂病院に入院さして、治療に疎略はあらざれど、快癒の模樣も見えざれば、今はた詮方無しと諦め、醫師の勸めもあればとて、其後娘に退院させ、住みし都に名殘惜めど、野路の霞に浮世を任して、閑地療治を行ひける。

そりや狂女が來た、無事は通すなと、村の子供等寄り集り、惡戲を面白しと、犬を駈けさせ、小石を投げて、ワツワア〳〵と追ひつ追はれつ、田の畔路を辿りては、泥田の中に落ちつ轉げつ走り歩けば、今は村中誰一人知らぬ者とて無きに至りぬ。されども田舍は都と違ひて、他人の噂も少なきに、母は心を沈着けて、其身は瀧の川へ茶見世を出し、夏は瀧見の客を勞らひ、秋は紅葉の色を眺めて、麓の川の流れと共に、行衛定めぬたゞ住居。さきには琴よ三味線よと、娘の愛に羈されて、心の駒の狂ふも知らず、夢に月日を重ね來て、追々寄るは年の波、腰さへ曲む坂道に、またも子故にこの苦勞、親あればこそ、子あればこそ斷つても斷れぬはこれの緣なり。さればお園も此處に來てより、何くらか精神も鎭まりて、心地清々する日には、畠の間を遊び歩きて、尾花や野菊を折採りて、心慰む日も多かり。

春は菜の花に狂ふ蝶を趁ふて、野路徑畦駈けめぐれば、菫蒲公英、ぺん〳〵草、色美くしく染めなして

都ならねど唐錦、織女とぞ見るお園の打扮振。つくろはぬ髮は油氣無ければ、翠なすとは評し難きも、花にも月にも粧ひし身の、いかに病氣に窶れたればとて、玉は瓦に變ることなし。紅白粉は粧はねど、垢は衣裳を染めたれども、また天眞の美は隱しても隱されず。路傍の花を折採りては、とぼ〳〵と行く後姿、思ふては行き考へては歩み、首を垂れ眉を顰めて立止るかと思へば、飛び出る雲雀に氣を呉れて、またもや夫を追ひかけぬ。夏は木蔭に日影を避けて、田中の清水のちよろ〳〵と流るゝを汲みとりて咽喉を濕す。明月芋の葉の露に碎けて、光線はら〳〵と溢るゝ夕は、薄女郎花に招かれながら、田の面に出でゝ捨てし案山子に驚きつ、それ村の方が追つかけるぞと、影に魂消て走る罪無さ。野分け木枯し桐一葉、漸う冬近くなる風の音に、お園も淋しさを知りてにや、母が傍を離れぬ日は、また常人に異ることなし。お園が此地に來てよりは、たゞ山水を朋として、戀知らぬ木佛金佛、不慾やこれが今の身の上。

茶屋の主婦が長物語に、はや日も暮れて四邊小暗くなりたるに、晩風吹き出でゝ、ちら〳〵と紅葉を散らせば、流水は秋の錦を織りて、宛然綾羅の幕や懸けん、坂の小徑は落葉に埋まり、むざ〳〵蹈むも惜しさ一入。始終を聞き居し若者は、梅澤通次が薄情なるにうち驚き、或は怒り或は悲しみ、もらひ涙に呉れけるが、日も暮れぬるに斯くて在るべきにあらざれば、そが志を愍みて若干の茶料を與へ、後日を約して歸らんと、はや立かゝる其處へ、歸り來りし以前の狂女、早くも若者に眼をとめしが、いと

聲高く。お母さん、通次さんぢやないか、あァ、左様ぢやないと、さうかへ、大層肖て居るねと、床几にどッかと腰懸けて、若者の顔熟々覗き。ほゝ、通次さんぢやァ無いわ、若しも左様だッたら、思ふ様怨んで呉れやうとおもつたけれど、とたゞ莞爾と笑ふこと、罪無き様は小兒のやうなり。此時お園は袖の中より、拾ひ集めし落葉をいだし、床几の上にばらりと散らして。お母さん、御覽なさい、これこれ花が咲きましたと、たわい無く見惚るゝを、母は傍より言語を出して。お園そりやァ花が咲いたのかへ、ほゝゝ、眞に美くしいなと、娘の心を慰め遣れば、お園は唯嬉しげに小首傾げて、にやり〳〵と笑ひ居るにぞ、若者不愍さ一層まさり、落つる涙を袖に拭ひて、別るゝ聲は樹間に聞え、さらば〳〵。

其後通次小松は如何にしけん、行末の善惡は知らず、斯く世に捨て人に捨てられしお園こそ、氣骨も折れし捨扇、世に怨めしきものはたゞ、これこの秋風ばかりかは

（をはり）

◉邪正一如

（上）

是好良藥今留在此と病苦の中にも、法華經壽量品の一偈を唱へて、漸うに近づく臨終の際さへ、生死の道辨へし高德なる梵僧の身には、來世何の恐からず、眼を瞑つて口に題目の語氣絶せし時なく、二尊四菩薩諸天善神を象りたる念珠爪繰りながら、端然と衾の上に起き直り、柔和なる兩の眼を活と瞻開き、枕上に伽せる人々にうち對ひて。予が命數もはや旦夕に迫りぬ、されば生ある者は必ず死あれど、生死は長夜の一夢にして、人眠るより覺むる迄は、乃ち刹那無明の闇なり。如是我聞、生者必死、世事輪廻の理、唯之れのみに限らんや、天地あれば日月あり、陰陽あれば善惡あり、迷ふて悟り無き者あらず、佛魔は一紙、邪正は一如、落花流水意あればこそ、ひら〳〵と瓣を筏として、深山の櫻花を樵夫の鉞にもあてず、馬蹄の下に踏み腐らせず、溪川の水に得道さして、つひには大海の波に浮び、一葉地角を徘徊するは、たとへば凡夫の佛に逢ふが如し、水と花と相約してこれあるにあらねど、前世の緣に繫りて雨露花英の母となり、咲いて月に伴はれ、春暮るゝに先ちて、またしても風雨に散らさる、これ因果の爲すところなり。予も一度は迷ふて悟りて、因果の道を歩み來りぬ。今予が一生の履歴を語らば、佛敵となり佛弟子と變り、五戒を破りて五戒を持つも今迄は予が恥辱を愧ぢて、身の惡事を裹み隱せしかど、

今日を限りのこの命數、云はずは未來の迷執とならむ。況てやこの遇ひ難き妙法に遇ひたてまつりては經文は母なり、釋尊は父なり、子にして親に罪を裹まば、來世の業因恐し怖ろし。聞け、聞け、善男善女、懺悔は浮世の鑑となるべし、しかも法華經は後生の耻を隱す衣なり。末代惡人等の成佛不成佛は、罪の輕重に依らずして、但此經の信不信に任すべしと宗祖大菩薩も宣へり、予は既に今身より佛身に至る迄法華經を持ちながら、隱して益無き入悟の罪過、語らむか、えゝッ語るべし、各々題目賴むと云ひつゝ、眼を瞑つて南無！

予奥州塩竈に生れて、未た物心無き頃生母を喪ひ、繼母の手に成長りしが、父といふは漁獵を業として、朝な夕なに炊ぐ煙もいと淡く、網の目のあらき浮世を渡りけるが、貧しきが中にもいたく酒を嗜みて、月も花もこれ無くてはと、少との端錢あれば旗亭の床几に半時の愉快を購ひ、酒臭き息匂はしながら、揚々と家に歸りて、嫣秀坊は泣いては居ぬか。とごろりと寢轉び、予を抱きて可愛やと頰の邊を輕く吸はるゝに、嬉しさに堪へずして。お父さん鬚が大層生へました。と頤を撫で、撫ては鼻をつまむに、寢むさうな眼を微に開き。坊のお手は冷たいな。とまたしても口に含み、予をしッかり抱きしめて眠るに、霎時は唯何の心もなく、父の顏を熟視りては、鼻毛など覗き見て、鼾の音の恐ろしきに不思議立てつゝ、興無き事に痘痕の數を算へて樂しむ。眠るともなく現ともなく、耳底に秀坊やと呼ばれし一聲は、たゞ何となく厭らしく聞ゆるにぞ忽ち眼を覺まして、其人打瞻れば母御なり。衾設けたれば臥すべしと云は

るゝも、予父の懐中離るゝこと厭なれば、寐むしと云ひて眠りかくれば、無手と片袖を攫みて。早くお寐よと急がし立てられ、啜り泣してついにはとろ〳〵。

すでに其夜も名残無く明け放れて、旭日きら〳〵と波を彩り、出船の欵乃節面白く、沖の方には白帆風を孕みて、驚く鷗のはしるが如く、籬の島は倒に影を浸して、翠松水中に立てり。景に慣れたる予が心にも。たゞ失神として海上を眺め居けるが、父は窓より顔をふいと出して。今日も天氣は快晴だ、秀坊何を見てゐるんだ。と柔和と問はるゝに。お父さん、鰡が大層跳ね上るよ、もう魚捕りに出かけるのか、お父さんが居ないと僕は面白くない。と厭らしい顔を父に見すれば。何で面白くないのだ、なにお母さんが何うしたと、たゞ厭だつて、其様事云はないで、温良しくして待つて居るがよい、今日はお土産を買つて來て遣るから、秀坊は好い兒だよ。と脳天静に撫でらるゝに。お父さん、も一度撫でゝ御覧よ。と云へば父は訝かしげに。何故そんなに撫でさせるんだ、よう秀坊、お前嬉しいのか。あゝ、お父さんの撫でるのは嬉しいけれど、お母さんの撫でるのは痛いよ。と予は無心に云ひはなてるに、父眼の色を變へて。なに撫でらるゝのが痛いか。と戸外の方を睨まれしが、見れば母御は檐下に乾かし置ける、干魚を鳥が來て啄めばとて、鳴子の糸を手早く曳けば、その物響に驚きて、あつまる鴉はてんでばら〳〵。

或日の事なり、父は酒機嫌に予を愛して、うち興じ居られけるに、かねて得意の割烹店より、思ひ設けぬ來客あれば、新らしき魚漁り呉れよとの註文を早速に承知ひて、網肩にして出かくるを。酔ふて足元

たしかならぬに、はや日暮れにも近ければ、今日ばかりはお止しなされ。と母御もいたく引留めしが、父はなか〳〵承引れず。五つや六つの魚捕るに、夜に入ればとて何の暇の費ることぞ、殊に今夜は月も明ければ、夜網は結句興あるべしとて、足を急めて出で行きける。夕陽向ふの端山に落ちて、松島の松一ッづゝ黒み亘るに、兎角して日は暮れぬ。明月今もや出でんかと、空うち眺むるに黒雲漸うに重りて風さへいたく吹き出でたれば。こは如何にせん、夫は雨具持ち行きたまひしかと、母は一方ならず思煩ひ、門口に立ちつゝ歸宅の遲きを待詫びけるが、大粒の雨ぽつ〳〵と降り來りて、風に捲かるゝ飛沫の勢ひ激しく、隣家の檐より流るゝ滴は、百練の絹を懸けたるやうなれば、予と母は唯驚き呆るゝばかりなるに、割烹店よりは未だ魚は捕れぬかと、雨を犯しての催促に、さらばとて母は衣の裙端折り、濱邊の方へ走り行きしが。しなしたり。思はぬ風雨に舟覆りて、父は歸らぬ客となりける。

佛事供養も式の如く執行ひ、一年ばかりは母とも〴〵貧しく暮らし居たりしが、父上の世に在りし時さへ、嗣母が邪慳の激しかりしに、ましてや離れ鳥の頼む所無く、彼方は龍の雲を得たる勢にて、予罪無きに折檻止む時無ければ、後には苛責に遇ふことの悲しさに、仕果てぬ用事も言語を構へて、母の手前を繕ふにぞ、嘘云ふことも心に慣れては、それ好き事にして、しかも十二歳の夏の末なり、窃かに母の紙入より少との錢を盗み出して、欲しやと思ひし品物買ひしが、其罪露顯ぬを面白き事に思ひて、悪念しきりに増長しける。去る程に繼母も夫を喪ひては、芭蕉風に破れて冬の夜の閨淋しきに、昨日の

思ひに堪へざりけん、其頃怪しき男を戀ひて、隱れ首尾の果敢なきを樂みしが、情念募るに從ひ、邪魔者一家に在るを嫌ひて、菩提寺の和尙が予を可愛がりたまふを幸ひ、十三歲といふ秋の文月、寺子にもつかず、また出家させしにもあらで、唯漠然と其處へ預けられ、夜は長老と共に經机並べて實語敎の講釋に勵み、あるは和尙が授齋の供して、油揚の饗應に逢ふを喜ぶ。年の暮に佛供米を集めしは兩度、棚經誦の供巡りして、春と秋とを夢の間に送る二年、今は予も十五歲にもなりしかば、身の上の分別少しは覺りて、惡しき手癖も幾何か薄らぎ、勤めの道に勵み居けるに、或日の朝なり。春暮れて踈簾瓣を編み、落花地を彩りたればとて、箒肩にして庭に立出でしが、向ふから來る十四五の婦女は、岩橋何やらといふ旦那の娘にて、曩頃乳母を喪ひしが、悲哀の情は今に禁まず、日毎の墓參怠り無く、丁稚長松に閼伽桶持たして、己れは紅桃の蕾なるを一枝提げ、しと〳〵と步み來る姿は、物に譬へて何と云ふべきぞ、脊丈すらりッとして、色白く鼻たかく衣裳化粧は云ふも更なり。遠く見ても近く寄つても、これはと驚く程の美人なれば、予たゞ恍惚と見惚れ居けるが、散る花の襟元に飛び込むに氣がつきて、俄にぽつと顏をあからめ、箒手に握り一はき掃ふて後邊を見れば、幸ひ四面に見る人無きに、この滿地に散敷く落花、無下に拂はんも惜きことゝ、箒の頭にて女といふ文字書きつけたりしが、看經了りて廊下傳ひに此方へ來らるゝ和尙殿、それを早くも眼にとめて。やッ秀や、その文字何ぢやと睨めつけられ、忙てゝ其儘掻散らせるは、思へば惜しき事してけり。

（下）

憖に戀といふもの身に知り初めてより、種々の物思ひに責められて、安き心地も無かりける。さる程に予岩橋の娘を戀慕ふことの、心いよ〳〵切なりければ、兎につけ角につけて、其人の素振に嬉しく、やがては庭前の花までも、美くしさを彼の容色に比べて、あの色の紅なる若しも唇に似たらんには、蕊の白きは齒並揃ひし口元、これなんめりと譯も無く失神し、蜂に刺されて肝冷せしことさへありき。去れば娘の乳母の墓石には、朝な夕なに花を供して、せめては此方の心の中、萬分一も御推もじあれかしと、肚の中に思ふのみにて、よし逢ふたとて口へ出して云はれぬ初戀、たゞ可愛しさといふを知りしばかりにて、戀なることは己にも判らぬ位。行末の考は少も無く、此時の胸の中には汚れたる想像は露程もあらざりしが、何時の頃よりか、無垢の精神の墨に涅められけん、漸うに色つき初むるにしたがひ、果は非望の望を起して、戀の雛形を和尙殿が大黑を圍ひ置く事に眼を着け、我もとの慾を懷きて、ひとしく人間に生れし甲斐あらば、戀は美人に限るべしと、俄に心を娘の容色に走せて、先づ本堂の欄間を眺め、天人の容顏より見比べて、觀音樣の柔和なるが氣に入り、さても岩橋の娘に似て、似て、若しも姉妹にてはお在さぬかと、狂人じみた考を起し、乳母の命日をあて込みて、其日の朝なり、箒肩にして庭掃きに出しが、先づ岩橋の墓所に至りて、亂れし花を見榮好く供じ、傍の井戸より淸き水汲みてそれ手向けつゝ、弗と氣のつくは予が打扮なり。彼方は豪家の娘なれば、衣裳帶地も華美を好みて、新らしき

ものぞッくり重ね着、髪は土地の本職に結はして、頽れし鬢を見せしこと無きに、戀ふる予はこの醜しき單物、膝の邊は色褪めて、大分着摩れも見ゆるは、何うやら氣のひける事と、思はず閼伽桶の中を覗けば、予が姿はわり〳〵。あれッと云ひつゝ熟々と顔見詰むれば、まこと垢に染まりて、首頸は墨を塗りし如くなれば、これではならぬと、己大發明したるやうな心地して、二度目の手水仕果し時、納所の方に呼び聲するに、ふいと彼方を向けば。秀吉や、授齋のお供いたせ。

待つ事ありて時を過すは、刹那も千秋の思ひにして、予は漸う寺に歸りて、さて岩橋の墓所に至るに、未だ失せやらぬ線香の薫は、戀ふ人の墓參仕果て歸りし後とおぼしく、敷砂の上に駒下駄の痕二ッ三ッ予たゞ忙然と手を叉んで、手向けし花の枝振見れば、予が手向けしに快からでや、折角の心盡しをめちや〳〵にして、樒と取代へしは何の心ぞ。予が思ふ心底は未だ彼方へは通らぬかと、唇噛んで卒塔婆を睨み、えゝ口惜やと、力に任せてそれを手折りぬ。暫時して彼方に至るに、兎も角も胸に浮ぶは娘の事なり。つく〴〵胸に手をあてゝ考ふれば、今の短氣何うしても氣にかゝり、折りたる卒塔婆を拾ひ上げて、はて何うしたものぞ。

盂蘭盆十三日は、何處も同じ佛參の日とて、寺も俗家もその心組忙しかりける。予が住む寺にても、有縁無縁の供養燈を檐下に釣して、夕暮より參詣の人を待つに、見る〳〵石塔の陰に、盆燈籠二ッ三ッと數加はりければ、予その景色の興あるに見惚れ居けるに、樹の葉隱れにちら〳〵する丸に鷹の羽の紋

つけし弓張は、それッ岩橋家の參詣なりと、見れば旦那殿孃樣連れて、一人の丁稚に提灯持たし、納所の方へ來らるゝに、予たゞ糸の切れし奴凧、ぬッと立ちたるばかりに、身動きもせず見瞻りしが、漸う此方に近寄るに、俄に戰と怯氣立ちて、其人見詰むる勇氣も挫け、はッと一禮なしけるのみ、氣を沈着けて顏を上ぐれば、旦那も娘も後姿の怨めしさ、提灯の火影に明るき方には、透矢の帷衣紅襯着の色をほのめかして、何ぢややら金目のある女帶、譯もなく予が眼を眩ましぬ。其年も空しく明けて、彌生幾日といふは、岩橋の乳母の一週忌とて、本堂にて法要營みけるが、さて口惜きは娘が此日の有樣なり。見れば思ふ人は艶々しき丸髷に結ふて、年數二十一二とも見ゆる男の傍に坐を〆たるゝ、はて心得ぬ、予が知らぬ間に聟貰うてか、永の月日の心盡しも、水中に下圖を描きしのみにとゞまりたり。よし〳〵三千世界に女といふは彼ばかりかは、苦むも樂むも五十年は人間の相場、一生此寺の庭男に果んも口惜やと、迷ひ出せるは十七歲の夏、しかも寺の使ひ戻りに、弗と眼に着きしは土地の女郎なり。彼方は涼みがてらに、夕風を濱邊に納れんとそゞろ歩く折から、此方は急々と家路に歸る途端、思はず袖摺合はせしは予が一生の不覺！其後十八歲の冬なりけり、叱ッ、叱ッ、汚れし戀ゆゑに大惡念を起して、吹雪の夜を幸ひと、予が住む寺の本堂に忍び入り、賽錢箱より財寶盗み出して、それ遊蕩の資にせしが、其罪の露顯せんことを恐れ、住みなれたる故鄕を逐電して、兩毛の間にうろつきしが、つひには旅籠屋の宿引となりて、一念の惡性益々募り、二十六歲の水無月八日、箱根の山中に日は暮れても、飢じき腹に

路銀無ければ、三島に二里の道程なれど、困り果ける折からに、傍の辻堂に婦人の苦吟く聲すれば、驚きながらも其處へ至るに、堂中は暗くて黒白も判かねど、旅する婦人の病氣に惱む樣子なれば、その傍に立寄りて懇に勦るに、嬉しきか微に眼を開き掌を合はして、予が方を伏拜むれ、五十路に近き老婆なり。打扮は左迄見惡くからぬに、千ヶ寺詣とおぼしくて、枕元に團扇太皷うち棄てあり。斯くする中に明月山の端に昇りて、峯松の陰よりきら〳〵と光線辻堂に射すに、眠る婦女の横顏つく〴〵見れば、いたく癩病に惱むものと覺しくて、眉毛脱け落ち艶々しき頬の色は紫色を帶ぶるに、予愕然せしが、いや〳〵この儘此處を去りては、一合の酒さへ呑めぬはと竊に懷中探り見れば、縞の財布にしたゝかの黄金あり。それよと獨り點頭つ、病苦に疲れて熟睡るを幸ひ、膽太くも盗み出して走る前途に白雲淡し。三島の宿の町外れに、名物の燒蛤賣る煮賣茶屋あり。予は其家へ入りて飢ゑたる腹を肥さんと、懷中せる財布を取出して、金員打改むるに存外なり。あの癩病婦が二百兩の大金を、と呆れて言語も出ざりしが、これには仔細あることゝ、熟々見れば紙に何やら記せるものあり、開き見て今更打驚きぬ。予斯く罪深き金なりしとは思はざりしに、しかも病婦の父と云ふは、いと貪慾の男にて年若き頃持參金の夥だしきに、眼を眩まし、癩病婦と婚姻せしが、生れ出でしは彼にして、其後父母ともに死歿り、今は浮世に便無しとて、蓄へ置きたる財寶を身延の御山へ奉納なし、來世の苦患を遁れんものと、さて千ヶ寺詣とはなれるなりける。予此書を讀みし時は、夢の如く、現の如く、心地俄かに厭らしくありて、五躰

殆んど痲痺れしやうに、手に持ちし盃思はずとり落して、唯茫然と呆れけるが、他に端錢あれば夫もて拂ひを濟まし、元來し路を引返して、すでにその夜の明方近く、漸う其處へ走り着きしが、えゝ遲かりし、病婦は予が無情を憤りけん、舌うち嚙みて敢なき最期。この樣に驚き呆れつ、血迷ふてか其場に倒れ、朝風松の雫を拂つて、予が顏に落つる迄は何の心もあらざりける。

されば予病婦の素志を果さんとて、その後身延山へ登りしが、心に怯氣あるものゝ、神經に惡魔を生んで清淨の靈地に身を容るゝ事の恐しく、二王門に至りし時は、現世の罪業一つ二つと數へらるゝ如く、身震ひ、眼眩み、後邊より剛力に縛り上げらるゝやうに覺えて、思はず我と眼を瞑れば、幽冥の中に病婦の俤見えて、耳元に苦吟くが如く聞こゆるに、大焦熱の苦患を忍び、眼を開けば烱々たる兩の眼を見張りて、予を睨めつけ給ふ金剛神の威風恐ろしく、あつと苦しき聲を絞りて、恐しと呼びつゝ眼を閉づれば、またしても耳元に聞こゆるは、病婦の聲なり。救はせ給へと高く叫びて眼を開くに、金剛神の威嚴しき彫像恐ろしく、遁るに力なく、座するに席無く、乾坤氷結して五躰碎くる如く、見る〳〵惡念に凝りし臟腑微塵に散りて、予我が魂魄の存るか無きか、生けるか死せるか、大幽冥、大光明の中に眼を開けば、二王尊は其儘の木像にして、人を睨み、人を縛るの力無し。心沈着けて耳を澄せば、太皷の音賑かに聞えて、題目の聲勇ましきに、予初めて我あるを知るとき、和風薫ばしく、明月いと淸らかなり。

本堂に至りては予が身の罪障を懺悔して、修堂金を奉納し、追善供養の大施餓鬼を行ひけるが、間も無く神經本に復して、心地いと淸々しぬ。七面山に登りては、いよ／＼勇猛精進の行者となりて、法華受持の外餘念なく、池の邊に至りし時は、端無く予が姿を水に寫して、予と我が罪障に窘められ、容貌また人間の生色無きを愧ぢ、水を邪正の鏡にして、懺悔得道の新發心、墨染の法衣に浮世の塵を掃ふてよりは、月を見ても花を見ても、俗に在りし昔時悲しく、せめては予が爲に死を早めし病婦の供養にもと、一字一石法華經書寫を朝夕の勤行にして、建てたるは庭前の題目塔、悟つて見れば浮世程樂しきはなく、我も可愛く他人も可愛く、今更繼母を怨みしことの愧かしければ、故郷に消息して、永年世話になりし和尚殿の樣子を聞くに、人の命と花の滿開程、哀れにも脆きはなし、御兩所共死去給ひしとて、書狀の末に戒名二つ。嗚呼予も近づく知死期の時、佛菩薩はや來迎を垂れたまへ、たゞ此上の樂は靈山に詣で、宗祖に逢ひたてまつること、予が本願！得入無上道、速成就佛身と、唱ふる聲も次第に細りて、呼吸漸く必迫し、眼を瞑れバ小鼻動て、その儘成佛、南無妙法蓮華經。

◉戀の今様

（上）

萱の檐を黒むる炊ぐ煙の靉靆に添ふて。龜戸村を離れ、土橋、石ばし。一、二、三、四ッ目の朽れかゝりたる板橋を右に折れて、五六尺ばかりの畦道ハ、さて無慘やな。昨日の雨にこれハしたり。隣り村から香載せて來し、車の轍に嚙み蹂られ、今日名殘なく晴れ亘りても、遺恨の痕ハ地に幾條の軌道を造りてがた〱、お抱への召物に羽織の色を摩り剝くお役人樣もあり、されど景色の陽氣なる事、何んと申して宜いのやら、心に餘りて口へハ出ず、なんともいへぬ春のあけぼの、ほんのりと裾野をぼかして、木下川の流れ長へに白し。虫ばみたる乱杭ハ淸き波に洗はれて、止る鴉も美妙に肝や撲たれけん。ほろ〱と二聲三聲、飛び退きもせず。來る人を嘲けりて、木の頭を啄む氣長さ。枯蘆にうま〱と眠る鳧の夢驚かして、一艘の小舟出でたり。目暗縞の衣、裾短かに端折り、棹操つらんとも思はず、一人の船頭煙管横柄に含へて、ぱか〱とふかす長閑さ。苫の燻るハ煙かと見れバ、きらりと水を射る旭日に、濡れを乾かす陽炎なり、向ふの岸邊にある一抱への靑柳ハ、小野小町の俤ありて、歌詠むか、枝つよからずして、腰折もなく、鏡の面をあぐつて、霞を起す面白さ。此方に見ゆる一叢の竹林ハ、ゆつたりと結ひ回らせし小柴垣に圍まれ、白斑の狗日向に眠る。彼方にハこんもりと茂れる木立ありて、白屋の

三ッ四ッたち交る中に、檐は傾き椽側の凹んで見ゆる家の前に、筵敷きて襤褸を縫ふ母は兒の膝を離れて地を這ふを知らず、川端に白葱の根を洗ひ居し娘、これを見付けて危險と馳け着け、濡手で抱けバ、子供ハヒヤリ、驚いて泣き出せしに心付き、母ハ前垂帶のしだら無き躰を起して、ふつくらせし乳房を當がへバ、忽ち默りて。泣じやくり二ッ三ッ。堤の芝草をがさつかせて走り來る三四人の腕白小僧。學校歸りと見ゆるが、草紙の包み路傍に投げ捨て、ワッワーと叫けびつ、彼方の田甫に行く四五人に、取つて返しての惡口も、見る間に石戰爭となりて、遁ぐるあれバ追ふもあり、遣水の別るゝ水門を堺として、犇々と詰め寄せ、互ひに五分〳〵の口爭ひ。何方が勝つたやら負けたやら、譯の判らぬ水掛論、田の畦でするも道理なり。万頃の田、一道の水、調へたり駒の嘶き。鈴菜すゞしろ踏みしだき、手綱手繰るも緩やかな今日の天氣や。

深窓に養はれ隙洩る風にも戰として、風邪を恐がる姫御前ハいざ知らず。今日の日和の麗かさ、暖かい風頬を辷つて、襟元を靜にあしらひ、日蔭の温氣を羽織に着ての野遊びにハ、先づ大抵の人にハぞッこん嬉しかるべし。されバ木下川の梅ふき出して笑ひ、門前に葭簀張の茶屋二三軒、菓子くだ物の仕入美くしく、別けて此處の名物ハ、慈姑粒芋の串刺。これも一興と捻つて通がる、風流人に教唆かされて、この二三日の人出ハ山──川よりハ短艇に召されて、お疲れさまや、白のしやつハ汗にしつとり。東下駄の音次第に近くありて、あら好くつてよのかんばしつた聲聞え。藁屋の蔭からぞろ〳〵ぞろと姿を現

はせし十四五人の女生徒一群。親愛ある日曜日むざ〳〵と暮さうやとのお心より、臥龍梅、小村井へシツと足を延ばされたる遊び事あり

梅は幾本と問ふだけ野暮、女生徒の頭らしき孃様、樹の澤山なのに驚いて、聞けバ五百株とのこと、千朶万朶といふも嘘ならず。あはれ二三羽の鶯もあらバ、其色ひき茶に見立て、梅を泡雪と云はゞ如何。奥には掛茶屋ありて、池の上に造りし座敷の欄干に凭りて厭くまでも花を眺め盡す二人の若者、小娘が勸むる茶に喉を濕ほして一寸四邊を見れバ、最前の女生徒はや池の邊に集り、鬼事に狂ふ様子に井上といふは後を振り向きて、池の魚の躍るを見て居たる若者を呼び。

「井原君チト鬼事でも見給へ、何うだアノ愉快さうな様子は、

井原と云はれし男、フヽンとたゞ鼻で挨拶して、また池の面を眺めて考へ込む様子に、井上は隙を置かず、またも井原の膝を突き、

「あれ、あれ、何うだ女らしくない處はいゝぢやアないか、あア運動するのは、實に宜いねー、オイ井原、井原君、いくら考へたッて、何うせ腰折の一ッもやつとだらう、止せ〳〵。つまらない。その恍惚してゐる様子はなんだ、阿片に醉つた支那人の様だ。ハヽヽ

井原はしばし考へて、

「あア、やう〳〵一首ありついた。どれ白紙は無いか、さて〳〵用心の悪い男ぢや、料紙を貰うか。

「料紙盃これへ持て、エヘン

「洒落てやがらア、へンつまらない、十段目か、十段目といふ柄ぢやアないせ、オイ姉さん硯箱と紙を貸してくれ。

筆とりてさら〳〵と一首を認め池の端なる梅の南枝に結び着けて、素知らぬ顔して座につくを、女生徒一人も知るまいと思ひの外、十七八の色白な藤村といふ令嬢、横目で睨んで男の顔を遠廻しに、池の面を熟々と眺め居たり。

まこと井原といふ男、男にしては色白な方、眼はキリヽツとして眉黒く、鼻筋とほりて見ゆれど、此人肝癪持か、物に厭き易き性質か、眉間狹し、青髯の痕美くしき中に、唇の色一點紅きは、詩に何んとやらの趣あり。頤の少し尖りたるは、痩躰の爲かと見れば苦にもならず、黒の三ッ紋の羽織は七子のしつとり物、竪縞結城の薄綿入古渡唐棧の下着、紺地一本獨鈷の博多の帶に、時計の紐しだらなくからみ着け、鼠羅紗の山高帽子を傍に脱ぎ捨て、身躰をくの字に曲げ、片足を座布團の外に辷べらして臂を欄干に寄せ懸けて、右手にこはくのぱいぷをもち、頭を垂れて泉水を見下せば、風のまに〳〵我が顔の延びたり縮んだりするは、馬鹿氣さの數が分らず。彼方の岸を見やれば、短冊結び付けし梅の樹の下に、一人の令嬢佇むに、如何なる方かと見れば、これはまた存外な美人にて、まともに顔を見合せては恥かしき位なり。折しも突然後から大袈裟に呼び懸ける井上が、もう歸れとの云ひ草は名殘惜しい樣なれど

さて詮方なし、向ふも此事を知りしか、シゲ〳〵と見送る樣子。情知らぬ女生徒共ハ後より、藤村さんと呼びかけて傍に來り、貴女鬼ですとの一聲。胸にぎつくりと應へしが、此所を離れて人を追はねばならぬ塲合。さアお逃げ遊ばせと僞勇氣を見せたれど、いろ〳〵と口姦ましくからかはれて、くすぐる樣お嬲られ方に口惜しさに堪えかね、彼方此方追ひ巡りて、やう〳〵恨みを鬼にて返し、最前の樹の下に來て見れバ、二人の影ハ何處へやら、池の水青く梅花白し。せめては移香なりともと思ひて、稍眺むれバ短冊風に戰いで我を招くに未練の念また〳〵募りて、遺物なりとも手を伸して取らんとすれバ、意地惡るく茶屋の女中が、にが〳〵しく此方を見て笑ふに、もしや素振を覺られしかと、氣にすれバ恥かしく、羽織の紐に留まる落花を摘みて、匂ひを臭ぐ眞似し。またも短冊に手を懸けんとすれバ、仕損じたり、彼方より足音高く歩み來る傍輩。

「藤村さん、貴女何うかなすつたの、

「イヽエ、この匂ひがよくつてよ。貴女臭いで御覽なさい。

「ホヽヽ、殘り香。なんだか琴の譜にでもありさうですね、

「殘り香つて何が、いやお富田さん。人を、

富田といふ令孃ハ太い息をついて、

「おア、草臥れた。藤村さん皆さんがモー歸るつて、

云ひつゝ手近にある短冊を、心無く讀み下して冷笑ひ、無心に捨てゝ彼方に去れり。藤村ハ一足後れて、捨てられたる短冊を拾ひ上げ、駒下駄の泥拭ふ眞似して、右手に確と握りしめ、十間ばかり行き過ぎて後を振り回り、また逃ぐるやうに走り去りぬ

（中）

あつたら一人の娘を疵物にしたり。未だ東京に出さぬ前までハ、天晴の淑女と人に賞められ、兩親の肩身も廣かりしが、今ハ年齡の上とハ云へ、纔か三年か四年の間に、しつかりと都風に漬かりて、親でさへ齒がうく浮氣者を拵へたり、お怨み申す學校の御師匠樣、娘を旅に出しましたのハ、御前樣をお力にして、あの子の躾何に彼にと、立派な者にして貰ひたく、月に何俵といふ收穫を金に換へつ、娘の云ふ事ハ酢も蒟蒻も、それ〳〵と付け届けして、待ち遠き行末を樂んで居りましたに、何うして惡魔の魅入りしやら。お向ひの孃樣も娘と一所に登られしが、去年の秋しかも紅葉も錦を纏ふ頃、出世目出度迎ひの人と共に歸りて、私の家に參られし時ハ、これハしたり。失禮致しました。市長樣の内室と間違へ、奥の間に通して御用ハと聞けバ、ホヽホヽと笑ふて、もうお忘れで御座いますかと云はれ、驚いて其人を見れバ、おやお見忘れ申しました。貴女ハまァ御立派でゐらつしやることゝ近寄りてその風俗に恍惚し、見れバ髮ハいぼぢりとやらに束ねて、黒縮緬の羽織床しく、行儀正しく座に着くを見れバ、田舍に居てハ年に一人か二人しか拜まれぬ氣高さ、人品の麗ハしさ。思へバ娘怨めしく、老の樂み一つ殺いだ

り。あの子とて同じく此地に居りし頃は、朝飯を急ぎ二人連れ立ち、學校を勵みて、復讀の當番を孃樣と爭ひ。それよりは一夜づゝと定め、首尾能及第せし時の喜び、其時はねだられし釵、云ふ通りの物買ふて遣りぬ。それに行儀の優しい事、左樣なら行て參ります。只今歸りましたと恭々しく挨拶さるゝに、年老りて自然頽れし行儀も子ゆゑに直り、前搔き合はして、早かつたねと愛嬌つくれバ、娘も莞爾笑つて、今日先生に面白いお話を聞きましたと、そろ〳〵と草紙の包みを解きて、修身書取り出し、唐日本にありし昔語りを親父樣顋髯捻ねりながら聞かれ、子供の發明に若返る樣な心地して、早晩其晩は召仕に請賣の茶話しぬ。親の身にあつて御覽なされ、何んなに氣味好いか、腹に惡るいと知りつゝ、褒美物に食傷させて、眼を病ませしこともあり。忙がしい中の隙つぶしも、可愛い娘の髮、他人の手にかくるも惜しく、精一杯に結つて遣りしが、存外拙さに娘だれ出して、御飯を食べぬとの始末に、怫として聲をうるせま、親父樣に叱られし時の外は、アレの顏を不興に見たる事無く。腹立たしき時も彼の娘の機嫌に怒りを消さる。さて初めて東京へ登する時の苦勞——心配。先生樣の甘口にふわと乘り、もそつと學問さしたなら。天晴あお方にと御親切の御言葉。嬉しさと別れの辛らさが交み上げて、何んとお答へ申して宜いやら、それにつけても旅へ手離しする事なれバ、蟲氣の心配よりは、行末の苦勞むら〳〵と胸に浮び、年頃にもあればバ何んな間違ひ無いとも知れず。恰度幸ひの媒人あるを早速取り極め、納結取交はして、許嫁の夫持たせたり。未だ〳〵夫ればかりかは、名殘惜しさに泣き明せし一夜、せめてもと祈

りし雨も降らず、定めたる立日今更延ばされぬ仕儀に病はぬ樣にとの一言ハ精一抔。別れし其夜より俄かに徒然を覺ゆる儘娘の可愛がりし猫抱きて寐しが、これとても下婢の扱ひ惡るいと見え、四五日經て姿を隱しぬ、淋しく消光せし二年の後、待ち焦れし娘、暑中休暇にて歸りけり。しばらく見ぬ間に大分變りし風俗、活潑とやらに流れて、女らしきところ少なし。これとても學問さしたお庇陰かと大目に見て、聟に逢はすれバ存外なり。娘ハ更らに喜ぶ氣色無く、再び東京に登りしが、それよりハまる二年、今としの今月怨めしい音信聞きたり。あんな事なら初めより膝下に置いて、よし學問が少なくとも孫の顏でも見るのであつたに、年老りの今の苦勞。親樣に箇程の難儀懸くる者、はて何人か事の起原聞きたし。

藤村ハ越後新潟の生れにて、名をお靜と云ひ、今年十八の若盛りの、男の陰噂に春の日も長しと思はぬ年頃。四年前或る女學校に通ひ初めてより、日に學びの道に勵み、今半年と云ふ際に、氣保養が增長して寄席も好きになり。演劇も好きになり。次ぎの日曜指屈つて待つ程なれバ、なか〳〵學問に實が入らぬなり。朋友の骨牌遊びに招かれてよりは他人の身の上まで氣にする樣になり。無くとも濟むべき苦勞を考へ出して、世を怨むやうになりぬ。木下川の梅見に見初めし男を下宿屋の近處にたび〳〵見かけしが、その時ハ手拭下げて湯屋に通ふ道筋。小川町の通り右に折れて、桃の湯の前にて礑と突當りぬ。されども未だ無心の頃なれバ、居どころを衝き留めもせず別れしが、先日の男振に俄に惚々して、遺物の手跡

持ち歸りて文庫の底深く秘め置き、癪摩する守札となし、墨の香の迸るを、たとうの裏に封じて、寐覺めの移り香と臭ぐも嬉し。其後如何にしけん、彼の男ふッつり姿を見せず、何處に引ッ越せしか自烈躰く、宿捜さうにも東京の廣さ。かてゝ加へて此頃より弗とせし病氣に、髪の亂れも苦にならず。たゞ物事が懶惰く覺えて、窓外の遲櫻夕風にチラ――チラと散るも詫びしく、俄かに感情激しくありて、忽ちに泣き、忽ちに笑ふ、其上他人のする事腹立たしくて譯も無いに當り惡るく、くさ草紙二三枚讀みてハ書中の男の强情に怒りて、挿畫さんざんに引き裂き、人さし指にからみつけて、怨めしげに片端を噛み切り、椽先に捨て置けバ、何時の間にやら一羽の蝶。落花に心ひかれて、地に匂ふ餘香に迷ひ、輕く飛び輕く揚りて、すて紙の邊に來るに、蝶も俄かに憎くなりて、捕へんとすれバハッシと身を躱はしたり。口惜しさに堪へず、障子を礑としめ切りて、褥抱え他目もふらず涙はら〱。さても戀は曲者なり。

お靜が久しく學校を休みしに、富田おちよといふ朋輩、病のよしわし案じ煩らひて、今日しもそが宿を音信たり。日頃中の好い朋輩あれバ、澱みなく話しかけらるゝに何時になく、笑ひちらして腹をよりけり。

「藤村さん、昨夜小川亭へ行きましたら、大入で酷う御座いましたよ。

「おやさう。貴女お一人ッきり、

「イヽエ、叔母さんと一所に、

「面白い事でもありましたか、
「あるの、おいのつて貴女、餘程嬉しい事があるんですよ。
「おや、何が
「さア、さア、これからが貴女がお嬉しい段になるの、
「いやお、人を冷やかして、
「イヽエ、何うしても天金の價値があるんですよ。貴女あてヽ御覽なさい。
「賣卜者ぢやあるまいし、妾だつて判りやしませんよ。
「判からないのが價値のあるところです。ホヽヽ
「あらいやお、妾の顏ばかし眤んで、さ、云てお仕舞よ。
「お賴みとあらバ、云ひもしませうが、云つてお仕舞よとい氣に食ないワ。ヘン聞かして下さい位なお言葉が承りたう存じます。
「ハイ〳〵、そんなら御叮嚀樣に、お聞かせ下さいまし。
「ホヽヽ御病氣があんまり早く癒るとお名殘惜しいからね。
「それぢやア病氣の妙藥でも考へついたの、
「イヽエ、おか〳〵、

「ぢらさずと早く聞かして頂戴。
「是非に及ばず、ハッ、木下川に鉄ヶ嶽、この位の事にしませうよ。
木下川の一言を聞いて、藤村思はず笑みを洩らしぬ。
「木下川ッて、何うしたの。
「しらばつくれてるよ、昨夜寄席で逢つて、猿樂町の下宿屋まで見屆けて來ましたよ。貴女がお可哀さうだからさ。
おちよ孃のすつぱぬきに、嬉しさ消されて恥かしく、その日は不平の躰にて別れしが、陰ではあり難くお千代大明神とふし拜みぬ。翌日よりは食事もうまく、風俗も粧裝たく、さて鏡臺に對ひては窶つれし姿の今更怨めしく、この顏の色早く本の儘にしたしとて、最寄の醫者に走せ行き、代診の何んとやらに脈取られし時こそ、一生に二度と無い嬉しいやら恥かしいやらの目に遇ひぬ。

（下）

神田猿樂町の中程に、門戸いかめしき病院あり。堂名は濟生堂とて、町名に緣あるお能の假面を並べし樣な男四五人、ぞろりと卓子を取り卷きて、藥局の裡にくさい議論もなく、正午前にうつて變つての噂話し。井上と云ふ書生は調子外れの聲高く、
「飯村君それはさうと、例の別嬪は何うした、不思議でならんな。

「さう、さう。僕も怪しいと思ふよ。何うも不思議だ、それに何んだか、井原と妙に親しいぢやないか
「然り〳〵曰くありさ。
「そりや一体何うしたんだ。話したまへ、
「曰くッていのハ、あアと何んだ。今春であつた、僕と井原とそら、木下川へ梅見に行つた事があるだらう、其時から井原に御座つてるらしいよ。
「アハヽさうか、それぢやア病氣ハ無いんだ子。
「無いこともなからうが、何しろ妙な病氣だよ。で、院長も不思議だつて、それ程大病でも無いのに入院を望むのを、
「さうだ〳〵井原彼奴太いやつだ。が何くら戀が手傳するからつて、あんまり酷いぢやないか、婦人の身で大膽な入院して……
「入院して何うした。大膽! なにも大膽な譯ハ無い。そこがそれ多年の功勞なんだ。
「多年の功勞ッて、
「功勞ッて云ふのア、多年運動場で、男の品評した功勞なんだ。
「アハヽ婦人も豪氣に進化した子。
「恐れ入つたらう。

「あァ先づ嘆息の至りだ。
一同吹き出して笑ふ。されども火口ハ矢張井上飯村の二人にあり、飯村口を出して、
「だが、何うも別嬪だ。第一色が白く、鼻が高く、口ハ優しく、目のパッチリして居る工合、それに額の生へ際の美くしいこと、脊丈が並で實にこの上なしだ。井原ハあり難い者に食ひつかれたな。あァ人間ハ何處に運があるか判からない。
「さう〳〵それに風俗も實に立派だよ。聞けバァノ婦人の家元ハ新潟でも名高い豪家だと云ふ事ぢやないか。
「さうか、そりやァ實にうまい、安くつても井原にゑやも位ハ、
「アハヽさう〳〵諸君何うだ。
ゑやもの發議に、聞くよりも食ふ方の一同。
「ヒヤ〳〵、總起立。
折りから玄關に車とまる。
「そりや、代診のゑやもが歸つた。
これハしたり。車夫の聲高く、
「お歸り引

一同忙てゝ玄關に出で迎へぬ。
此噂耳に入りしか、上等三號室の病婦、間も無く退院して宿に下りぬ。それよりハこの噂いよ〳〵本塲になりて、井原といふ代診生、腹を痛めてえやもを氣張ること度々あり。
十年の癩病も名醫のお手にかゝりて、眉に毛が生へたと喜ぶ嬉しい世の中に、これはまた何んたる事ぞ、癒りし病氣に藥呑みて、俄か入院の長病ひ。代診の井原とやらに脈試らるゝ時ハ、院長に倍してあり難く、目を瞑つて南無と拜まぬばかり、寢臺の上に腹摩られてハ、眼を細く見開き、男の顔まともに眺めて、耳の蔭から熱迸り、頬の邊さッと紅くなるに、風邪の氣味ぢや大事にせよと心づけられて、なんの虚と思へども、我れと病を拵へしなり。頤に柔らかな手を當てがはれては舌よりも赤い心、萬分一も御推もじあれと、非望の望起して、流眄に色たつぷり。察しが無いやらさて諄々しい、食事はと問はれて俄かに口籠り、鳩尾の動悸激しくあるに、先生またしても頸傾けぬ。大抵の病人あらバ、病氣の模樣聞くべきに、思はく胸にあれバ、聞いてその人困らするも何んとやら、漸々にして思ひ届き、やれ嬉しやと其人に逢へバ、噂ばッと廣がり匆々にして病院を退き、下宿屋に來りてよりハ、病氣全快と披露し學校へも通ひ初めしが、何がさて學問腹に入らず、物事手に着かず。平生ハ左まで好まざりし運動も入院せし時より衛生の彼是のと難癖つけ、此の頃ハ星飛び風烈しき夜も、お茶の水に汗拭ふての散歩と下婢が眉を顰めての話し。途にて行き逢ひし人の語るを聞けば、その夜ハ恰度月清く、松の木影長く地に

蟠りて、堤の半面を墨汁一刷毛にサッと塗り消し、草の中に螢ピカと光りて、微かに水を照らせり。橋上の人誰かと見れバ、姿ハ正しく婦人にして、影はたしかに男あり。怪しいやうな、氣味惡るいやうな處に散步するお靜、外泊も度々する中、如何にしけん身の邊りの物次第に少なくありて、國元よりの仕送り度重なりぬ。暑中休暇の歸國を斷りてうまく〳〵と試驗に仕損じ、それよりハヤケになりて、學校へハ顏も出さず。兎角する中已れと一所に上京せし同鄉の處女が首尾能學校を卒業してこれ見よとの歸國を、羨ましけれど躓きてハ詮方なく、結句やぶれかぶれと、膽太くありて、飼犬に足を嚙まれぬ。度胸しかと定めても驚く事一ツあり。婦人になくてならぬものを見ぬのみで無く、お鮓の出處戀しくありて、日を重ねてつく息の肩に響いて苦しく、何うしやうかと男に明せバ、男は手を組んで言葉なし。かてゝ加へて朋輩の歸鄉してよりハ、國元の仕送り弗と止りて、下宿料に苦しむ程なれバ、斯くと男にうち明せバ、案外しら〳〵と承知し、二三日の中に金策するとの事に、その實意を幾度も夢に見て、嬉しや其日は來れど、何うした事やら音沙汰もなし。

斯うありてハ平生親切と思ひたる、下宿屋の主人も青筋立てゝ云ひ罵り、追ひ遣り兼ねぬ見幕に、漸やうと泣き縋りて、一日と延バし二日と延ばし、だら〳〵とまた三四日延せども、金どころか顏さへ見せず、逢へバ思ふ樣怨みを云はんと、待つ人ハ邪推深く、待たるゝ人ハ面目無故か、今に風のたよりも無し。男の不實を夢に見てハ、存外に可愛き所あるに、未練また〳〵起りて、そんな方で無い筈と判斷しても

逆さまと悟れバ當てにもあらず。殘りし手道具殘らず曲げて、少しの穴ハ塞ぎたれど、待つ人ハ未だに來ず國元の書狀着きたり。嬉しやと讀み了らぬに、わつと泣き沈みぬ。今更悔いても及バぬ仕儀、兩親に勘當受け、許嫁の夫ありしも、それさへ破談してハ、再び國へも歸られず。思案に暮るゝ鐘よりも激しく、郵便と一聲投げ出したる一通を、手荒く裂きて、息急き讀み下せバこれも存外。たゞ思ひ切れとの文面。叱ッ！　無念やな。遺恨に噛み〆めたる唇。齒當り荒く血さッと迸るに、下宿屋の主人打ち驚き、死なしてハ一大事。宿料の殘高進上申せバ、一刻も早くお立ち退き下されたし。行かぬ行けとの騒ぎの機會。お靜の力身に餘りて、俄かに産の氣つき、産婆の來るのも待たず、片付いたり七月の半産世の中に縁の無い赤坊生れて、母ハ産後の肥立ち惡るく、二月程のぶらり病ひに、浮世の味氣無さを考へぬき、三月目に床上げして、下宿屋の御恩報じと、我れから下婢を所望し、快よく立ち働くに、身躰もとにかへりて、ぬけたる髪次第に生へ、生來の珠再び光りて、下宿屋の呼鈴とあれば、奇を好む書生方、そりや面白いと宿られて、お茶漬の給仕を乙に色つけ給へバ、お靜目を閉ぢ口を縫ひて、戀知らぬ俄か啞。或日の夕暮、家の前をお抱への車勇ましく、チラリと通りし丸髷の婦人。おやと持ちたる箒落して、考ふればこれハしたり。富田の娘が内室姿美くしきを、我身に比らべて口惜しく、未練ハ罪を重ぬる譯と、後姿見送りもせず。高聲に書生の談話聽けバ、井原ハ女義太夫に馴染みを重ね、院長の金を遣ひ込みて、行方知れずと新聞の聞きかぢりに愕然胸を冷やして、己れの部屋に走り行き、手文庫の蓋を

手荒く取り退け、何日ぞやの短冊攫み出して憎しと二三度唾し。火中に燒せバ、昨日床しき薫り失せて戀、煙となりけり

（完）

◉京屋娘

（上）

根が浮氣を御神燈のふら〳〵と暮らす藝妓新道。見榮と愛想の二軒目の、花屋といふを右に折れて、三尺にも足らぬ露路。露路といふれたゞ文字の名ばかり、兩側の檐と檐重なりて、露さへ溝板を濡らせし事なく。朝な〳〵の日光も、わづか障子の二ッ――三ッ目まで照すばかり、夫よりハ終日拜んだことなければ、結句朝寐にハ持ッて來いといふ處なり。氣根よく觸れ歩く豆腐屋も、此處を朝寐横丁となづけて、朝の一度ハ足早に通り過ぐとかや。されバ雨の日の鬱陶しさ、もしも薪焚く家あらバ、なか〳〵お化粧、氣にする御孃樣の、住はるべき處にあらねど、たゞあり難きハ葭町のお庇蔭たけありて、屑拾ふ人

も住まず、襤褸買ふ商人も居らねバ、本所の露路と比べにハあらず。これが芝新網邊にあッたなら、通る人鼻を摘んで去るべきに。まとや隣りから隣りまで格子戸造り、一寸見て意氣など振り返る若旦那もあり。すべて露路の窮屈なるハ、此處のみに限らねど、盆栽一ッ据ゑる庭もなけれバ、水道の水牛町先の大屋さんにあるばかり。まことに陰氣――不自由と、他人の陰氣を頭痛に病む譯ならねど、ともすれバ頭痛も病みさうなハ露路住居なり。岡目の陰氣と裏表なるハ、この露路の三軒目の家なり。内にハ歌三味線の音絶間無く。格子戸の陰の下駄箱にハ、黒塗の小供下駄五足十足列を揃へて、人足の繁き割にハ板の間ハ存外に汚れず。上り口の障子ハ玻璃の中透にて、障子越に姿を現はせし四五人の娘。お師匠さん左様ならの聲聞くと間もなく、身ハはや格子戸の外に見えて、しかも口姦ましく「お由ちやん、履物が違がやアしないかへ」「オヤ妾のが違てるハ」「いやな人だよ、妾のをつッかけてサ」「お光ちやん何うぞ御免よ、アラ待ッてゐらッしやいナ、ようムいますよ」と口五月蠅き十三四の小娘。いま清元のお温習了りて、家路に戻る勇しさ。孰れ心ハ籠の鳥の雲井に啼く、思ひ嬉しきものなり「お花ちやん、今日の御仕舞ハ例日より余ッ程早いのね」「さうよ妾その譯知ッてるわ」「アラお花ちやん可笑よ、譯ッてどんな譯があるの」「無ッてよ、お光ちやん貴女知らないの」「知りませんよ、ほんとうに」「アラ虚。そら、そら、まだ判らないの、あの長火鉢の傍に……」「梅次郎さんが何したッていふの」「梅ちやんも今ハあんな厭な藝人のやうだけれど、あれでもお師匠さんのアレで有たッて」「アレッて何んで

すよ」「ホヽヽお弟子であッたんですとサ」「お弟子だからッて、何も可笑いことはないぢやないか」「イヽエ」「ぢやア何」「それでもお師匠さんたア、をかしいッてサホヽヽ」さすがは藝妓新道の隣りに住居て、味な事見聞き覺えあるとはえ、年に似合はぬ口の利き振り。さりとては早くはじけ豆、實に油斷のならぬ世の中と、摩れ違ふた老人は念佛唱へて通りしとか。されどつら〳〵この娘共の年を見るに、未だ男のよしあし品さだめ、しらふでする柄にもあらず。察するに無心が大膽な事を云はするにてはあらぬか、六ッ七ッの腕白小僧、よく飯事の遊びして、隣りの花坊と嫁入の眞似。添ひ寐して耻かしとも思はぬは、みな無心のさすることにて、腹に汚点無き乙女氣も、また男女の影噂して、苦にせぬ類ひなるかぞも。一人が話せば一人が答へ、面相顏して笑ふ中にも、氣取ッて歩く可笑され、何處やらに踊りの手振を覺えて、乙に天神髷の天窓をふり、緋鹿子の帶太皷に結びて、未だ肩上の殘るも愛らし。見る間に姿はチラ〳〵と、彼方に見えずなりにけり。清元の師匠と云は、もとは柳橋の流れに垢ぬけせしかど、ふける年には白粉の功能も無く。若い頃は一寸の流行ッ子と、持て噺されし昔時の夢も、今となりては駿馬の骨。誰に身を任さうともなく、この露路に引ッ込みて、踊り清元の師匠に送くる月日は早く。はや一年も過し頃には、近處隣りの娘ッ子、我れも〳〵と見習ひ、お師匠樣〳〵と頼みに來る者多く、今は活計も結句氣樂になりて、藝妓の時の氣兼せしを、阿房らしいと笑ふ時もあり。されば身の樂になるに隨ひ、心もやう〳〵道樂に傾きて、此頃何やら形に添ふ影法師、時々雨夜の障子に映るとか

稽古に來る娘どもの噂とり〴〵。お師匠さんと云はるゝは、藝名延定本名は菱屋お定とて、今年三十一二、未だ何處となく匂やかな姥櫻。齒をも染めねバ眺め一層なり。されバ娘ッ子とゝもに踊り、清元を敎へる外ハ、これと云ッて外に格別の用事もなけれバ、向ふの海水浴でハ長湯との噂とる位。お化粧の隙つぶしを、退屈凌ぎと思ふ氣樂。あるハ長火鉢の傍に坐を占め、お三の雜巾掛するを横目で睨む位の用向、まづ隙のある身体なり。怪しいハ雨夜の影法師、此奴未だ年若な癖に藝人風のなまめかしさ。まづ敎育のない婦人にハ、好かれさうなめかす方、晝ハ清元の群れに交りて齊しく習へバ、まづお弟子と云ふても宜い男。それが何うして雨夜の影法師、さても怪しや、此家怪物屋敷でもあるまい。お定ハ長火鉢の横坐に坐を構へて、朱羅宇の長煙管を薫らせバ廿二三の若者、その向ふ側に膝を頽して坐り居るのが、影法師の梅次郎といふ男なり。笑ひながら話しかけ居る側に、瘦躰のさも柔和な美形一人。これハ堀留町の呉服屋、京屋の一人娘。年ハ十七、人並秀れて縹致も姿ものびたる方、此頃此處へ清元の稽古に通ふなり。今日ハ店の都合の惡るいにや、例もの丁稚長松、時間を過ぎても迎ひに來ず、何うした事ぢやと待てバ梅次郎に話しかけられて、乙女氣のモヂ〳〵しながら、問はるゝに答へ、語るを聞けバ、なか〳〵その談話の耳ざはり好さ。見れバ身装も目に慣れし番頭の質素な様子と違ひ。意氣な素振に戰として、問はるゝ事も身に染み亘るやうに覺え、初戀のこは〴〵しさ。何んと云つて好いものやら、どぎまぎするをお師匠さんも悟られてか、いろ〳〵な事梅次郎の肩を持たるゝに、何んとして此塲を拔け

やう。こんなに恥かしい目をするのなら、いッそ早く迎ひが來れば宜いと、待つに其の人は來ず。話はいやまし進み行き、師匠のお定憚りへ立つ間の極りわるさ、我身で我身を持て餘す位なり「お香さん、モウ淺妻をお上げなすッたの」「ハ……ハイ」「夫は何うも御勉強でゐらッしやいますこと」「イヽエ一向なんで御坐います」「チト敎へて戴きたう存じます」「アラあんな……、おなぶり遊ばして……」思はず顔を紅らめ下を向いて、羽織の紐を捻ねる床かしさ「イヽエ串戯ぢやァありませんよ、ほんとうですよ、あなた」「妾知りませんよ」これはしたり「ぢやァ淺妻の身振を何う遊ばして、右の手をかう上げて、これで斯う履むので御座いませう。どれあなたのお手を」と云ふや否。お香の手を確と握り、斯う斯うと師匠ぶらるゝ氣味惡るさ。お香は俄かに顔熱くなりて、目はチラ〳〵し、その極り惡るさ。今が今迄こんな耻かしい目は見たことなきものを憎らしい男の心。折りから師匠のお定、手拭で兩手を拭ぐひながら、奥より來るにお香は穴へも入りたき心地。「お師匠さま、淺妻のお稽古を……」師匠のお定、お香をじッと一目見て、「梅さんに敎はつてゐらしつたのホヽヽ」「あらいやな、お笑ひ遊ばして」お香は最早座にも耐かね、モヂ〳〵する中。丁稚の長松、お迎ひに參上つかまつりぬ。「何くら待ッたか知れないよ」罪もない長松に當り惡るく、逼ぐる樣に暇乞して、門を出て見てホッと溜め息。思はず振り返ッて「長松やお前早かッたね」

（中）

四里四方を二つに割ッて、東へも二里西へも二里。東海道の廻り雙六、此處からふッて京都で上る。さてさて長い通り、あめが下の眞中は東京の日本橋なるべし。其處の堀留町と云へば、河には舟楫の便利ありて、向ふの藥屋——唐物屋の荷倉へ、船頭が捻ぢり鉢卷勇ましく、荷を擔ふて這入れば、煩はしき大八の力假るにも及ばず。夜は出船の欵乃に明けて、旭きら〳〵と水を彩り。晝は入船の炊ぐ煙に暮れて、火の番の拍子木幽に響く。商家は孰れも豪の者のみ集まりて、黑塗りの土藏棟いかめしく。中にも檐下の天水桶に金目見えて、紺地白貫きの長暖簾、筆太に京屋の二字古風に染め出せし家は、此邊でのえらい者と見え、手代丁稚も數多く。帳場格子の陰に光るは、眞鍮の火鉢あらで、支配人の善兵衛天窓を蠅がすべるも知らで、算盤に目ハパチ〳〵、はじくありけり「半どん、若旦那の仙臺へお立ちになるのは、明日の一番汽車だらうね」物價表を拾ひ讀みして居たるは手代半六。善兵衛に問はれて、火鉢の陰から天窓を擡げ「へイさうでせうよ」「さうでせうでは判からない、奥で確と聞てお出でな」「へイ」半六を澁々立たせて、次には丁稚長松を叱りつけ、「コラ〳〵行儀が惡るい、あんだその懷手ハ」「へイ」「あゝと貞どん、お華主の御土產に印附の手拭三反はかり包んでおくれ。そして熨斗紙ぢやア品が惡るいから、水引をかけてな、いゝか」「へイ」折から半六奥より來り「只今奥でおッしやいましたが、若旦那のお立ちハ明朝の一番汽車だそうです」「ナニ一番汽車？」、それぢやアモウ荷造にかゝらなくちやアならない、奥へ行ッてモ一度聞いてお出で、荷の中へ入れる物がありませんかッて、あゝ好い、私が

行から、誰れをお供に連ていらッしやるか判らないから」。善兵衛の奥に入りたる後は主無き天下、思ひ〳〵に串戯交りの高噺し。半次といふとぼけもの、莞爾〳〵と笑ひ出して。「貞どん〳〵、粂子さんが來て居るネ」。「粂子さん?、あァお粂さんか、なんだ粂子さんッて、乙に學者ぶッて」。「學者ぶるんぢやアない、向ふを學者に見てやるんだ」。「なにも子の字が付いたッて、學者に聞える譯がないやな」「だッてもそれ、何々令嬢ッて云はれるお方は、みんな子の字が付くぢやアないか、畠野芋子、そら〳〵、子の字の付のは女學者の符帳だ。宅のお香さんなんざア令嬢ッて云ふのよりは、寧ろお孃樣の方が適當だアンな踊りや清元が上手だッて、令嬢ッていふ柄ぢやないやね。お粂さんなんざア大層學者だッて、だから何子樣ッていふのは適當なんだ」「ヒヤ〳〵」「オヤ洋語なんぞ遣ッて、ヘン」「だッて學者の談話にやア、學者らしい返答もしなくッちやアならないサ」「アハヽヽ、洒落てやがらア、リーダーの一册目も讀めない癖に」「リーダーを知らなくッても、レーデ位は知ッてるよ」「ヤヽ誰から聞いた」「聞いたヽア恐れ入ッた、僕だッて竈はストーブ、豆腐は田樂位は……」「ヘン、そんな事は獨案内にもありません、お氣の毒さま」「半どん失敬ぢやアないか、そんな事知らなくッて」「オイ〳〵、何を饒舌ッてるんだ、品物を出しッ放しにして」思いがけぬ後ろより善兵衛、九天の霞をもれし鶴の一聲。一同「ヘイ」聞けば此家奥羽中國に手廣く商ひ。先代より堅氣との評判受けて、江湖の信用いと愛でたく、日に増し殖える華主の數。餘れば溢れて、主人の金兵衛ふとした病氣に死歿り、近頃漸やう忌も明けたばか

りの跡は、後家のお濱、未だ悟るといふ年にもあらねど、一人娘の成長を樂しみに、道心堅固に守りて。身裝はかへッて質素に拵へ、姿は年波の寄るに任せ、お化粧で隱す下心もなく、佛壇の花挿下女の手を待たず、食前のお勤め能く佛に仕ふ。獨り身にありてよりは、一層に店の締りに心をつけ、召仕ひを勵り、仕入に氣を入れ。注意到らぬ隈もなければ、支配人の善兵衛老實〳〵しく立ち働き。飾りなけれど翼となり鰭となり。大旦那よりの家名ハ落すまじと、大風呂敷を脊負ッて立つ強の者、老人も居らねバ家の締りハつかぬものなり。主人金兵衛の在世の頃より、娘お香に定め置ける夫あり。名を石井慶三郎といひて、今年廿二の若盛り。一寸あの妓に好かれそうな男振り、なれど締りのない巾着旦那の類ひにあらず。廿一の秋商業學校を卒業して、或る商會の顧問役に撰ばれ。眼ハ實際の懸引に慣れ、廢物利用の謀方寸に秘め置く事あれバ、他人の名跡を繼ぐ養子如きハ好まねども、京屋とハ縁家の間柄にもあり、娘ハ縹致好く素直の性質なれバ、せめてもの賴みに親の慫慂に從ひしなり。されバ金兵衛の病中より、引き續いて京屋にのみ寢泊りすれど、未だ婚禮の式も擧げねバ、妹と云ひ兄と呼バれて、寢るさへ部屋の別れ〳〵。母御の心怨めしけれど、母にハ母の苦勞ありて、未だ肩あげも愛らしさ、お香が身体にさはりハせぬかと、慈くしむ親の心にハ、何歳になりても小供の樣に取扱ふハ、これも眞の一つなるべし。

娘の我儘ハ母御の甘口より起るものにて、京屋の後家ハ旦那に死なれてより以來ハ、娘ばかりを一層に可

愛がり。それお香が何うするの、彼うするのとお手玉に取て勧れバ、芝居も好きになり、寄席も好きになり、好む衣裳に金銀を厭はず。花見遊山にハ女中の四五人も連れ、日毎〳〵の贅澤三昧、慶三郎ハ氣に食ねど、未だ同衾せし中にもあらねバ、染々と意見もせず、云へバ何時も母御の氣色を損ずるばかり。眉を顰めて一家に住めバ、何時になく親子の間に針の柵を立てける。

お嫁さんになると三味線も習へぬ、清元も習へないと、お香のねだりに母親ハ延定に通はして、好き次第の藝を仕つくれバ、娘心の變りやすき。たとへバ春慣れぬ蝴蝶に等しく、櫻の色香に惚々して此花ならばと思ひしも、今日となりてハ昔の事。海棠の婀娜な姿、これにもまた心うつり、羽かた敷きて恍惚してハ、思はぬ露に濡るゝこともあり。さればお香も仇めかしき歌の文句に、年並ならぬ戀知り初めて人知れぬ苦勞を我から求め。踊りの身振りに仕打慣れて、通らぬ思ひに強ねて見てハ、罪もない乳母に當り惡く。御飯も食べず口も利かず、夜ハ人より早く寐て、うつら〳〵とツイ明方の夢見惡しきに、降らす涙の玉あられ。あられもない人に思ひをかけて、我身の上に比べて見れバ、恐ろしいやら怖いやら、向ふの人の心も知らず、此方ばかり苦勞しても、嬉しいものハ初戀の頃なり。されどお香が踊り清元の稽古を望みしも、惡氣ありてせしにハあらず。此娘なか〳〵負嫌ひの性質ありて、たとへバ交はる朋友の中に、唄三味線の類ひに限らず、諸藝總てのもの、己れより立ち優るものあれバ、俄かにそれを乘り越したき心する癖あり。これも我儘氣儘より増長せるものなれども、この性質今一歩正道に進まバ、天

晴人の下風に立べきものならねど、見識如何にも狹く。交るハ己より眼下の者にて、談話とし云へバ俳優の噂、遊藝の品評ごときに止れバ、お香の智慧の増すべき道理もなく、上見ぬ里の蝙蝠。よく〳〵世の中に暗いゆゑに、淸元の稽古を望みしも、或る宴會の席に呼ばれ、同じ年輩の娘がしてやりし藝に膽を潰し、さて急に稽古を思ひ立しなり。されど師匠の延定夫しやの果。頼まれもせぬ事の師匠ぶりて、未だ色づかぬ初紅葉に、思ハぬ霜の媒するとハ。頼む娘のお師匠さまがこの通り、さて〳〵世の中ハ怖いもの。慶三郎ハ面白からず日を送れども、一旦此家の養子となりては、輕々しく家も出られず。ことに知る人の思はくもあれバ、暫らく樣子を伺ひ居しを、支配人の善兵衛三人の中好からぬを、粋樣に悟りて、俄かに若旦那に勸めての仙臺行。代替りの花主廻りハほんの名ばかり、實ハ若旦那に日光松島を見物させ、その留守に三人の中を具合よく和らげやうとの下心。慶三郎が氣に入りの棟梁を供にさせていよ〳〵明朝の出立と極りたり。慶三郎が實の妹のお粂と云ふハ、今年十七才の美形。其上兄の氣性に似て。學文に勵み宗教を信ずるゆゑに、自然見識も高く、行末ハ天晴の女學士となるべしと學校での評判。明日ハ兄の仙臺へ出立するとて、見送りの爲め泊りがけにて京屋に來れど、お香の氣性とハ思はしからぬ中ながら、お粂なか〳〵如才なく、心万事に行き亘り。その上淡薄なる性質なれバ、後家のお濱殊の外可愛がりぬ。日もはや暮れたれバ、いろ〳〵と翌日の用意も了り、一家親しき物語初まりたり。一夜明くれバ、平日より二時も早く起され。手代丁稚ハ目を摩りながら、はたき懸るあり帚取るあり。雜

巾の見えぬに丁稚臺所にうろつき、御飯の煮え立ち遲きに、お三何時になく奥のお眼玉にふれ、その混雜云はん方なし。

緣り無き人の去るさへ、名殘惜しきものなるに、現在夫と定る慶三郎の、今はや奥州へ旅立たうとするに、お香ハ一間に籠りてお化粧に氣を奪はれ、家内の者へハ顔を少しも見せず。それに引きかへお粂ハ兄の事、何彼にと心を注け世話する氣立の嬉しさ。されど慶三郎堪へかねて母に向ひ「おッ母さん、お香ハ何うしました」母ハ俄かに心付きし樣に、一寸あとを振り向き「オヤほんにお香ハ何うしましたらう今朝ハ少ッとも顔を見せませんよ。お粂さん憚りさま、一寸呼んで來て下さいな。兄さんがモウお立ちなさるからッて、お坊ちやんで困るよ、屹度耻かしがつてゐるに違ない」。お粂はお香の居間に至り、「お香さん兄さんが立つとこですから、一寸見送ッて下さいッて、おッ母さんが左樣おッしやいましたよ」お香ハ一寸後を振り向き「オヤさう、兄さんは未だお立ちにならないの」。と云つたぎり、お化粧更らに止る氣もなし「妾ハね、お師匠さんと梅ちやんに、芝居へ連れてッてもらふ約束しましたから、それで大層忙はしいの」。お粂ハグット癪にさはりしかど、左あらぬ体「さうで御座いますか、それぢやアお忙がしいでせう、折角お化粧遊ばせ」。言葉を殘して立たんとする處へ、椽端を走ッて來し後家お濱「お香や、兄さんがお立ちになるのに何をしてお出でだえ。いやな人だよ、お前耻かしいと思ッてだらうネ」「アラあんなこと、いやお氣の早いのね。お母さん妾が行かなくッたッて、いゝぢやァありませんか」「宜くな

いから迎ひに來んですよ。よ、一寸でもお出な、ホンたうにお母さんに世話を燒かせる子だよ。オヤこの子は何うしたんだらう、泣いたりなんぞして、妾がチッと何かいふと、直ぐ泣く人だもの困るぢやないか。そんな泣き顏なんぞ見せちやア、かへッて兄さんの氣に障るから、モウ御挨拶をしなくッても宜いよ。ホンたうに云ふとを聞かない子だよ。」これも云ひ棄てゝ、慶三郎の傍に來れば、慶三郎は待ち兼ねし樣子にて、帶の間より時計を出し一寸眺めてオヤと驚く。「お香は恥かしいのだから、慶三郎あんな子に構はないで……」。慶三郎俄かに眼色を變へしが、見れば妹お粂の莞爾笑ふ機嫌顏に氣を奪はれて、口まで出でし厭味も呑み込んで勇ましく「それぢやアお母さん行ッて參ります。みんな留守を賴むよ」「道中氣をお付けよ、いゝか棟梁賴みますぞ」「左樣なら御機嫌よろしう」見れば黑塗りの車三輛餘る一輛は善兵衞が停車場まで見送るなり。茜色の雲追々東より西に流れて、上野の森に鳥の音勇ましく、良らくして風鈴の響、チリン〳〵。

（下）

娘氣の染まり易すき、實にしら糸の亂れては、容易く解く由もなく。京屋の娘お香は、慶三郎の旅立ッてより以來は、いや增しに募る戀。されどもまだ初戀のことなれば、梅次郎が顏容の麗しきに惚れ込みたへて氣立の善し惡しを知らねば、末愛でたき戀にはあらず。一たび悟りの道に近づきなば、忽ち醒むることあり。まこと梅次郎の樣子、一寸見て藝人肌の垢拔けせし抔、なか〳〵店のものゝ類にはあらず。

衣類も人の目に立つものを好めバ、外歩くにさへ乙に氣取りて色男を鼻にかけ、誰の聲色やら妙な口の利き振り。これで女の子に好かれるとハ、さて〳〵世の中も様々なり。今日ハお香も慶三郎が生家の振舞に呼ばれ、厭やながらも一座にハ就けど、一時も早く家に歸りたき心山々なり、されど世の義理人情もあれば、厭やな顔も見せられず。御馳走の珍味も殆んど目を瞑ッて、口に入れし位、面白からぬ宴會なり。是までハ我が眼下の者より外に交はりし事なきお香。今日此家に呼ばれて見れバ、お粂の朋友と見ゆる如何にも立派なる令孃あり。孰れ見識のあるらしく見えて、我れながら少し恥ぢらふ様子。なれど身装のよきをせめてもの自慢と、お粂に導かるゝ儘に別室に通れバ、此家ハ書齋と見えて、左程に廣き座敷ならねど、床の間、違ひ棚の拵へいと古風に見えてゆかし。お粂もお香ハ兄の細君なれバ、眞實姉の如くいと心切に抜け目なく取り扱ひ、更らに間を置かねバ、それに幾分か氣を勵まされ、庭先の景色など眺めて、思ひを遣水の此方、樹の間に光る燈籠の、池の水を射りて面白く、一入に眺め居たり。共に一座にあるハお花とて十七八の令孃。今日ハほんの近付の初なれど、これもお粂が學校の朋友と覺しく、語る談話さへ思はず知らず理に落ちて、お香の氣にハ更らに面白からず「石井さん貴孃春の舍の妹と脊鏡を御覧遊バして、可哀さうに學問がないので、とう〳〵身を投げましたネ」「さう〳〵、夫になんぢやァ御座いませんか、水澤も敎育のない女子を妻にしたので、あんな不幸……。男ばかりでもありませんネ、婦人だッてアノ通り顔色で善惡を定めるやうぢや、何うしてもいけません、氣立があはなく

ッちやア」眼は木立の間に注げども、耳は敏くも二人の談話に向ひ、芝居遊藝の品定めに聞きわきし耳には、今の談話は聞慣れぬだけ面白く覺えて立耳すれバ、これはしたり。お香が身の上を當摩する樣、我身から氣を廻しては、負け惜しみの氣性にたゞ腹立たしく「チー石井さん、何うもさうの樣で御坐いますね。西洋の小説なんぞ讀みましても、敎育のない婦人は夫婦間の愛情も……………」「さう〱何うしても劣情に傾く樣で御坐いますね。學識のない婦人は……」

お糸は持ち前の淡薄な氣性。一氣呵成に云ひしものゝ、氣が付いて傍を見れバ、お香が恥らふ樣子の何處となく物憂げに見ゆるに、俄かに話柄を他に轉せしかど、お花孃は斯くとも知らで、ます〱話しの圖に乘りて、いろ〱とお香の氣に障ることのみ語りぬ。お香は負け惜しみの念募りて、口惜しさに堪へねど文學のことなど露知らねバ、他より口出す便宜もなく。怨みを呑みつ耳欹つれバ、一言〱氣に食はぬ事のみ多く、膽攫まるゝ樣に覺えて、坐にも堪へかぬる位なれど、暇もらふて歸る譯にもゆかず。さりとて膝交へて話す事も慵く。家に居ては女中と打ち交りて、世間の噂咄しするは得意なれど、この學識ある姫方と言語交ふべくもなく顏を斜向けて庭先を見やれバ、松の葉は針を食む如く、風にすごく柳は我をぢらすかと思はれて怨めし「お香さんチトお話遊ばせ」と云れて辭むに由もなく、座に交りしが、二人の談話を聞くばかり、さて外に詮なし「お香さん貴孃新富の替り目を御覽遊ばして」「ハイッイこの間行ッて見ました」「左樣で御座いますか、今度の六歌仙は大層好う御座いますッてね」「さう

で御座いますよ、貴孃まだ御覽遊ばしませんか」「ハイッィ學校が忙はしいもんですから……」學文に忙がしき人さへあるに、自分ハ遊藝に暇なしとも云はれぬ時宜思へバ恥かしき身の上なり。お花ハ俄かに思ひ出せし樣子「お粂さん日曜日に敎會へゐらッしやいますか」「參ります貴孃もゐらッしやいませう」「ハイ御一所に願ひます」お香は我が身に比べては、恥かしきことばかり、この年の若さに神賴む殊勝さ。我れハ戀ゆゑ神賴めど、他人ハ身を修むるに神賴む。さても心のいろいろさよ。お花ハさも馴〳〵しく「お香さん貴孃聖書を御覽遊ばして」「イヽエ聖書ッて何んで御坐います」「ホヽ未だ御存じないのですか」お香を見て柔和に笑ひし顏。お香ハその恥かしさに、ヅク〳〵と身震する程なり「聖書ていふのハアノ新約全書の事で御坐います」「オヤ左樣で御坐いますか」「御覽遊ばすのならお貸し申しませう」「何うぞ……」「それぢやアお粂さん、貴孃の餘分がありませんか」「あァありますよお香さん差し上げませう」親切に聖書を取り出だして、お香の手に渡すを、開いて見れば、當てにせし挿書はなけれど、讀めば傍訓ありて解り易すし。お粂は聖書と共に持ち出だす本を、お花の前に置き、貴孃これを御覽遊ばしましたか」お花は本を手に取り「イヽエ未だ拜見いたしませんよ、貴孃御覽遊ばしたなら、妾も拜見いたしたう御座います」「御覽遊ばせ」お香ハ何本かハ知らねど手に取りて、見れども横文字の讀むべくもあらねば、その中の繪のみ撰りて、眺めて居る傍よりお花は問ふ「お香さんそれは一冊目で御座いますか」問はれても横文字は一字だに知ねバ、一さへ二さへ判らぬハ悲し「一寸貴孃お

貸し遊ばせ」。

此夜ハ三人心地好く別れしかど、お香ハ家に歸りても口惜しさ云はん方なく。さりとて女中に語りて、鬱を遣るべき由もなければ、たゞ一間に籠りて聖書を繙き、拾ひ讀にすれバ、初めの一二度こそ意味も道理も解らねど、讀むに從ひ顧みて己れの心に比べ見れバ、恐ろしさ云はん方なし。次の夜ハ日曜日。お粂お花の二人に誘引はれて、最寄の教會に至りぬ。はや定めの時も過ぎしと見え、室内に夥多の男女いと親しく打ち交りて、神に祈を捧ぐる殊勝さ。お香ハ二人の中に交りて、左右よりいと心切に聖書を教へらるゝに、我知らず一章讀み二節誦して、齊しく讃美歌を謠へバ、その聲麗はしく。良らくして心を鎮め目を閉づるに、堂中靜まりかへりて、牧師の祈禱ハ信者の心耳を清めしむ。また目を開けバ、彩燈堂中に閃めきて、さも氣高き米國婦人の演説聞くに、一々我が身を刺すかと怪しまれ、汗流れ唇顫けども、左あらぬ体する苦しさ。間もなく耳元近くお香の腸を貫ぬく聲『妻なる者よ爾曹その夫に服ふべし。若し教に循はざる夫あらバ、教に由らず妻の行に由て服はん。それ爾曹の恐懼を以て潔き行をなすと見るに因りてなり。爾曹の裝飾ハ髮を辮み金を掛また衣を着るが如き外面の裝飾に非らず。たゞ心の内の隱れたる人則ち壞ることなき柔和活靜なる靈を以て裝飾とすべし』この章句はお香が胸にハ一句一苦。過てり定まる夫ある身にて、不貞とも不操とも仇し戀に心を亂し、今更悔ゆとも詮なけれど、懺悔には萬の罪も滅ぶとかや。我れたゞ梅次郎に優しき言葉かけられしのみにて、心を亂せしとせば、

この會堂の男女は皆戀ゆゑに寄べきに、神に捧ぐる祈のために、親しく交りて親しく語る。斯くゑてすら、人の心の善惡の判ち難きに、たゞ一言二言云ひ懸けられしとて、それを情けに實を盡さバ、世には鬼無し、天下の人みな戀ならぬはなし。悟れば昨日の迷の雲、あり〱晴れて月影の冴やけきに、我が後姿も恥かしく、門口まで送られし二人に別れ、家に歸りて寢に就きしが、一度ならで二度までも同じ夢。平れ伏して今迄の罪を夫に謝すれば、たゞニヤ〱と微笑まるゝに一層身の上を恥ぢて、たゞ嬉し涙に夜着の襟濡らせしかと思へば、東ハはや白み障子に寫つる鳥影二三羽。此日の夕暮最寄の待合茶屋にて、師匠の延定よりお香さまに一寸來て玉はれとの使ひ。お香ハはやよき友得てより、見識も幾分か增したれバ、鄙しき踊り清元の稽古は、今日より思ひ切るべしと諦めしが、さりとて十日なり二十日なり、師匠と頼みしその人の只今との使ひに、いそ〱と供をも連れず茶屋へ尋ね行けバ、表ハ舟板塀の意氣造り。庭石傳ひてお師匠さんハと聞くに、彼方ハ一向怪訝な顔。お師匠さんハ男の方かと問はれて、お香も訝しさに堪へねど、慥しかにお宅で御座いますと問ひ答への其中へ、二階の階子をトン〱下り來る女中。最前迎ひに來りし者とてお香を見るや、お待兼です彼方へと案內して、奥まりたる座敷に通し、女中は萬事如才なく、このお座敷ですと云ひ棄てゝ勝手の方に去りぬ。お香ハお師匠さまと云ひつゝ、障子明れバこれはしたり。驚きし聲忙はしく、姿ハその儘中へハ入らず。

艶々しき島田髷夕風に吹かれて、鬢の毛のチラ〱頰にかゝるも怨めしく。黒塗の東下駄塵を蹴立てゝ、

縮緬のけだしひらつくも急がし。お香ハこの夕暮に供をも連れず、一人いそ〳〵と堀留の河岸傳ひ、家に歸りて母親に物も云はず。已れが部屋に通りてたゞ潸然と泣く、母ハ常ならぬ様子を案じ「お香お前何うしたのです、泣いたりして、お稽古に行ッて誰かと喧嘩でもしたのかへ」問はれても答へず、たゞ口惜しさに袖噛〆て、涙さへ――はろ〳〵聲なり「コレお香、お母さんに譯をお話し、何がそんなに口惜しいのだへ」お香ハ口惜しさと、怨めしさに口も廻らず「お母さん口惜しくつて、モーチッとで人を慰みものに……」あとハ問へども答もせず、女中に床しかせて寝るとの事ゆえ。母ハ合点ゆかねど様子有りげなれバ、お香が心の鎮りし上にてと、思ひを殘して勝手に去しに、眠るかと思へバ左ハせず。燈掻き立てゝ涙を拭ひ、机に向ひ聖書繙き目を閉ぢて（アーメン）翌日母ハ譯を聞きてこれも驚き、此日より清元の稽古を斷り、築地に居らるゝ米國婦人コールト、ヒング孃に就き洋學を修めしめぬ。延定より歸り來し手代の話にハ、お定と梅次郎ハ其後近所で駈付ける程の喧嘩して、今ハ梅次郎の行衛も知れぬよし。お香ハ今日となりて、夫の離別を輕卒にせしことと思へバ、悲しく口惜しく。何んと云ッてお詫びせうやら、一間の中に閉ぢ籠りて、言譯の文なが〳〵と認め、女中の手もからず、自から郵便函に投り込みぬ。心元に復りてハ、優しき夫の慕はしく日毎に母と影噂して。俟てバ生憎に雨。晴るゝ日の少なきに、もしや道中に變りハないかと、用もなき電報度々掛けて、返事聞く事の嬉しさを、枕に通ふ移り香と見て、今宵も歸宅の夢に覺され、時ならぬ夜中に起き出て、母に何ぢやと叱られてハ、我れながら蓮

葉に恥かしく。雨ハ晴ましたと云ひ拔けて枕に就けバ、また一睡の夢とも判かぬ間に、夜ハはや明けて旭キラ〳〵雨戸を射すに、氣もいそ〳〵と精一杯の化粧も、今日ばかりハ夫に喜ばせたく。お迎ひとして善兵衛を停車場へ急がし立てしが、後で無粹でゐらッしやると、心にも無く神樣をお怨み申すも、まこと造物主の自在力ましまさバ、この永い日を何んとして、塩竈よりの汽車上野に着くまでハ（完）

◉こぼれ梅

其一

元祿の名殘未だ失せやらで、人は蝶花のうつら〳〵と、華美のみを衒ふ寶曆の頃は、袿裃の鯨自然と挫けて、骨の無き武士の多かる中に、これはまた女性の身として一段に勇しき二人の尼あり。

さりながら其名も伏屋の裏に、埋木の花咲く折もなく、世の秋を觀じてにや、時雨の落葉に身を任して、老いて俤の移れば、色も香も無けれども、墨染の腰衣に娑婆を包んで、門外不出、他人に見らるゝを好

まねば、盆に栽ゑし吉野櫻も年々に憔悴して、可惜盛りを垣間見られずして凋む憾みあるを、況てや女子に百年の春あるものにあらず、一朝粉膩の粧ひ褪めては、花の木蔭に駒繋ぐ人さへあるべからず。この二人の尼の昔時の俤慕はしきは、今も眉目の間に殘る愛嬌あり。何時の頃より頭剃りこぼちて、斯かる土地に住み詫ぶるにや、訝かしき限りなりと、村内の不思議の一つに算へられけり。

名にしおふ隅田川白髭の社より、やゝ東の方に踏ん込みて、秋ならば白晝も虫の音を聞くべき閑靜なる處に、よしありげなる庵あり。小柴垣を結ひめぐらし、門の栞戸半ば開きたり。一方は竹叢に隱れて自然の城廓をなし、一方は田の面を見渡して、清風絕ゆる間なく、垣の外には小川流れて、さや〳〵と水音の聞ゆるに、春は一枝の梅にも知られて、南は早く笑ひ初め、麗らかなる日晷の茅葺屋根の廂を辷りて、障子の骨四つ五つ目を照しぬ。只看れば容貌うるはしげなる尼の、庭前の井戸端に立出で、閼伽桶に水を汲み、早咲の梅花一枝手折りて、竹椽の下に立寄り。手向けの花を折りたれば、靈前に供へ給はずやと呼はれば、室内には念佛の聲頓に止みて。新らしき花を供じ給はんとな、命日の靈も嘸ぞ喜び給ふべし、いざ此方へ賜はれと云ひつゝ、障子開けて立出で、靈前に花を供ずるは、こもまた優しき尼なりけり。手にかけし念珠に稱名の數とりながら、椽の端に直と座して。おう何時の間にか、美事に梅も咲きましたな。御身も妾も斯かる身になりてよりは、花も月も慕はしき事のなく、たゞ〳〵一門の冥福を念ずるより外無ければ、春秋も知らぬ間に過ぎ、こゝに三昔しの今日は、大石殿始め各々が果て給

ひし日なり、松風吹いて寒月泉岳寺の墓前に冴ゆれど、妙海殿は菩提所を守護し給ひて、念佛修行に退轉なく、妾等も此處に庵を結びて、御奉公申し居れど、今もなほ慕はしきは父上の御事なり、時も如月の半ば過ぎぬれば、俗にありし頃は、父上と共に野に清香を趁ひける折なるに、斯くありては蝶に心の移らふともなくて、徒らに餘年を貪ぼることの氣樂さよ。御身は回向仕果て給ひしか、妾の勤めは濟みたれば、代りてなし給はぬかと睦ましげに辭を交ふれば、庭前にありし尼はうち頷きて。さらば妾代りて回向いたすべし、いざ見たまへ、出家には要無き色香なれど、梅花の咲き揃ひたる抔、なか／＼に興ある眺めなり、庭前に下立ちたまはずや、履物を參らせんとて、室内に入れば、尼は云ふが儘に庭前に下りて、其處此處とそゞろ歩く時、物申の聲して、門より入り來る男あり。年は五十路の坂を越えつらんか、相好に憎氣なく、腰には大小を佩したりけり。

尼慌たゞしく出でゝ、何處よりと問へば、男は慇懃に會釋して、我はお目付役を勤むる者なるが、弗と御門前を通りかゝりしに、折かけ垣の梅の花の、いとも美事に咲きゐたれば、數奇の心に立寄りたり、煙草の火を惠み給はれと云ふに、尼は機嫌克氣に微笑みて。おう／＼、ようこそ入らせられし、こなたへ掛けさせ給へ、妾等斯く住み詫びては、訪ふ人も無き柴の戸、雨に曝されたる椽なれど、塵は能く拭ひ置きたれば、腰を下させ給へと、うち解けて物云ふ程に、茶を汲み來りて客にすゝめ。常に客人とて無ければ、茶臺樣の器もなし、ゆるし給はれとて、差出す茶碗を客は手に取りながら、只見れば尼の掌

に刀瘢とおぼしき痕あり。訝かしと思ひながら、その顔ちらと打瞻れば二人ともに賤しき人とも見えず、今もなほ優しき顔に、凛としたるところありて、人品の氣高さこと高家の姫君とも見擬ふべし、兎も角も若き時のさま、思ひやらるゝまゝに、客は茶に咽喉をうるほして。尼御前には、何日の頃より此處に住み給ふぞ、若かりし時は、お宮仕へなどし給へりしや、花も羞らふ御俤にてありしならん、世の諺にも容顔美きは身を滅ぼす斧とか申す、お小姓の誰やらと、左樣した譯の事ありて、浮世の中の儘ならぬより、斯かる姿になり給へるにはあらぬか、懺悔には百の罪も消ゆると聞く、語り聞かし給はずやと問ひ出づれば、二人の尼は涙ぐみて。いえ〳〵、さる浮事は身に覺えだに無けれども、この掌の傷は、つゝむ由ありて、年月他人に語る事もあらざりしが、仇々しき事にて、年老いたる尼に濡衣着せ給ふことの、口惜しう思ひ侍れば、聊か身の上をお話し仕るべし、其處は端近なれば、此方に入らせ給へとて、客を一間に招じたり。

其二

京の嵯峨野を零落し身の捨處と、荒家の裡に侘びしく暮す浪人体の男あり。以前は播州赤穂の侍なりしも、主君淺野殿の雲隱れしたまひし後は、諸士其所此所に離散して、流浪の身の定め無き世に住み侘び、農と變じ商と化し、纔に口を糊する者の多き中に、これはまた世渡りの事を知らぬ男にや、たゞ徒らに座して喰うて、饑餓の來ん日を待つものゝ如し。よしや鷹は死すとも穗を摘まず、士は窮しても迷はぬ

ものとは云へ、無爲に暮し居ては、米が天より降るものでなく、金銀は地から湧くものにあらず、働いて食ふにさへ、世辭辛き世の中なるに、浪人の分際でお米庫の二つ三つも所有て居るらしいアノ顔色は。あア今の中に佩せる兩刀の鞘を外けて、槇木割にでもすればよいのにと、何日も近所に住む芋作が、口の端にかゝりぬ。

小唄に名高き嵯峨や御室も、花の盛りの過ぎ去りては、夜は淋しき片山家、野面の秋の裏枯れつ、嵐山颪そく〳〵と、荒屋の檐に音させて、窓に射し込む月影も、更けて一入冴えかへり、四隣物凄きまで寂寥せり。破れし垣根を結ひまはせし茅屋の裡には、病み衰へたる浪人が、布團の上に起き直りて、隙間洩る風に瞬く行燈の下に、愁然と腕組みしてうち凋れ、幾回か嘆息なして獨語やう。云ひ甲斐無き今の身上や、我も山岡覺兵衛とて、淺野の藩中にては、他人に知られし武士なりしが、かく零落れては存命ても詮なし。主君不慮の御最後ありし以來、仇吉良上野を覘けねらへども、時期到らねば手出しもならで、諸士其所此所に潜伏なし、敵方の隙を窺ふ折柄、如何せん我この病氣にかゝり、苦痛に奪れ貧に痩せ、氣力頓に衰へて、復讐なんどは思ひも寄らず、糊口する道さへ盡きし儘、餓ゑて死を待つ苦しさは、想ふに前世に犯せる罪の深くて、斯くは武士道に外るゝにや、聖賢の敎にも君辱められ臣死するは理の當然なるに、病みて今迄生き延びしも、皆これ上野を討たんが爲なり、さればこそ一家中の面々も、あるに甲斐なき活計して、時節到來せんを待居らるゝに、我のみ武運に盡き果てゝ、座して死を待つ無念

さよ、さりながら大石殿が御前途見屆け、その上にて割腹なさんと思ひ居たれば、今死なんも口惜し、別けて女房が心切を無にするは情無き業なり。我の病床に臥してより以來、朝夕の煎藥時刻を欠かせし事なく、馴れぬ世帶の繰廻しも、貧をば我に知らさじと、辛苦に弱る心も掬まで、今更自害があるものぞ、あア辛らや男並の武士一人が、生死の境に身を置き兼るは、えゝッ殘念と、切齒をなして口惜がり、拳に落る涙をはらひて。それにしても山科の安否如何やら、大石殿は御無事なるか、都に遠き住居には風の便も聞くことならず、あアまた木枯の音がするに、女房は何故歸らぬかと、表の方をうち見遣りて、たゞ落涙に及びけり。

折から雨戸を押開けて。覺兵衛どの只今歸りました、途中で手間費りましたので、何時までも御不自由をさせました、今日は天氣も快晴つたゆゑ、市の方も豪らう賑かで、それは〱面白う御座いました、北野の天神さんへも參詣しましたら、恰度懇意な大原女に逢ひまして、變つた噂を聞いて來たが、ホンに人の心と云ふものは、明日は知れぬもので御座いますな、それはアノ山科に御閑居の大石殿がと、辞を切れば覺兵衛思はず膝を進め。おう、その大石殿が如何なされた。まア斯うで御座います、アノ大石の御家老様が、何うした風の吹き廻しか、後月の中旬から、祇園町の一力へ流連の御全盛、幇間末社に取卷れて、揚屋酒に入浸り、太夫とやらの膝枕に、たわいも無く泥醉て御座るとか、あれでは智恩院の鐘の聲でも目が覺めまいと、見て來たやうな巷の取沙汰、妾も聞いて吃驚し、告げて呉れた女に別れて、

祇園詣りの序でがてら、近所へ行つて噂を聞けば、まんざら嘘でも無いらしい、こりや斯うして居る場合ぢやないと、急いで戻つて參りましたが、息が斷れる路が遠い、ホンに隙が入りました、御塩梅は如何で御座います、藥も煎じて置いた筈、もう召上りましたかと、慰むれども覺兵衛は默然として腕を組み、唇噛みしめ居たりけり。

やゝ良あつて顏を擡げ。女房ども好う聞いて來て呉れた、その噂耳に入らずば、何日までも大石殿を忠義無二の武士と心得、復讐の事打任せ置くのであつたに、あァ頼み難きは人の心ぢやなと、口惜氣に云ふ夫の顏を、女房つく〴〵打瞻るに、眼もうるみ血色も惡しければ、若しも風邪など感かんかと、脱ぎある夜着をかけてやり、其身は携へ歸りたる包みを解き、中より地紙取出して、扇折をぞ始めける。

覺兵衛それにジッと目を注け。女房そりや何品ぢや。はい〳〵これは六角の扇屋から頼まれた手内職、貴夫へ申上げるのをツイ失念して居りました。ナニ手内職！えッ誰が許してその扇引請けた、浪人しても武士の女房、町人のする手内職して、夫の顏へ泥を塗つたな、そ其扇折氣に食はぬ、富を願はゞ再縁いたせ、この覺兵衛は暇を呉れる、出で失せよ、さア出て行かぬか、もう言譯は聞かぬ哩、我貧困に迫るといへど、甲冑一領傳來の太刀一振は、死すとも側を離さぬ覺悟、さるを一時の貧に苦しみ、夫の許さぬ賤しき業して、病む身に藥餌を侑めんなぞとは、その志卑劣〳〵、えッ出て失せよと、驚き騒ぐ女房が、袖を摑んで戸外へ突き出し、門かけて座に直り、涙に暮るゝぞ仔細あるべし。

其三

後髮彈く三味線は祇園町、茶屋の仲居が取巻きに、大石良雄は本性を失ひて、腸を色酒に腐らし、海鼠のやうに泥醉れつゝ、幇間末社の手拍子に、乘つて胡蝶の夢心地、呂律まはらぬ舌頭に、池の汀の鶴龜はと、小謠唄ひ扇もて、調子とり〳〵後につく、女中はいづれ花の雲、霞たなびく振袖の、裏より匂ふ留木の薫に、良雄は一入興がりて。やア嬋か〳〵、皆の者奥に行て遊んだがよい、もう踊も厭きて、三味線も嫌ひになつた、そう耳元でヂャン〳〵やられては、この耳が聾になる哩、馬鹿奴、岩戸神樂ぢやあるまいし、大抵にして酒も切り上げよ、燒石に水の比喩はあれど、大石に酒を爾う呑まされては堪らぬ、拙者は此處にゴロリと轉んで、ドリヤ一寢入いたすと云よう、蝶になれ〳〵莊子の夢が、アハヽヽヽヽ、女中共次へ立て只今これにて御寢あるぞと、他愛も無き肱枕は何事ぞ。身は一藩の大身として、其君辱められし上は、城を枕に討死をもすべきに、生を偷み人目を忍びて、花に戯れ月に醉ひ、御馬前までと預りたる、命を酒と色とに奪はれ、家中の諸士と誓ひたる復讐の事抔は、今日にあるまで鵜の毛程も口へ出さず、たま〳〵決意を問ふ者あれば、浮世は兎角色と酒ぢやと、大盃笠に高鼾。樽を枕の底ぬけ大盡、綽名を有喜樣と呼ばれて、五條の橋より評判高し。

布團着て寢たる姿の圓山も、薄墨流す一刷毛の、闇に隱れて淡く濃く、鴨の水音聞えねど、こゝ一力の奥庭は、敷き詰めたる枯松葉に、零れし程の露の玉、遣水清く魚躍りて、釣燈籠の向ふには、芭蕉の風

に破れしあり。その椽端に大石は芋虫のやうに轉寢せしが、四邊に人無きを窺ひ、岸破と起きて庭前じッと打眺むるに、今さし昇る廿日の月、竹の葉越にきら〳〵と、座敷の隅を照すに目をつけ、物をも云はず凋れかへり、落る涙を袖に拂ひて。アヽ變らぬは月の影、變るは人の身の上やと。思はず獨語折から、栞戸の蔭に婦女の聲して。御家老樣と微に呼ぶ。呼ばれて大石驚きながら、早速に身を反して寐轉び。コリヤ女中共は居らぬか、水を持てと呼ぶ聲は、未だ本性は違はざりけり。
呼べども囈語と聞流して、寄り來る者もあらざれば、良雄はその儘高鼾、頓ては前後も知らず眠りぬ。
夜は次第に更くれども、大石が四圍に人影だになく、宵の口には舞子お山と取卷きて、女護島の涅槃像の如く賑はひしも、眠れば色香忽ち散りて、蜂も宿らず鳥も栖まず、此室のみ寂々寥々たり。
表の方のざんざめく、豪遊を避けて裏座敷に、良雄はまたも起き直り、栞戸の方見瞻りながら、訝かしげに頭傾け。はて合點ゆかぬ、最前たしかに我を呼びしは婦女の聲、舞子お山が呼聲ならば、有喜樣とこそ云ふべきに、家老呼ばゝりは片腹痛し、聞說く仇上野方にては竊に忍びの者を入れて、味方の動靜を窺ひ居るとか、察する所最前の婦女の聲は、我心を試さんための、敵方の計畧にてはあらざりしか、さるにても上野が心の穢なさよと、冷笑ひつゝ油斷なく四方に眼を配り見れば、垣根の下に人影あり。
良雄は早くも目を注ぎ。其處に居るのは誰ぢやと問ふ。彼方も後邊に意を配り、恐る〳〵近寄りて。御家老樣、御免なされて下さりませと、云へども此方は心を緩めず、刀の鯉口うち濕して、曲者ならば斫

らんと詰め寄る。されど婦女は少しも臆せず、妾で御座いますと、燈籠の火前に顔さし向くるを、良雄はつく〴〵眺め了り。おう、御身は山岡覺兵衛殿が内方、何用あつて此席へは參られしぞ、他目については惡しければ、疾く〳〵立去給はれと、血相變へて云ひ出せり。婦女は潸々と泣き伏して。推參ながら此處まで忍んで參りしは、夫覺兵衛が最期の所存を申上げんためと、聞くや良雄は仰天し。ナニ覺兵衛殿が最期の遺言とな、さて〳〵樣子は如何で御座ると、膝押進めて打問ふに、婦女は始終涙に暮れ、兎角の辭も出でざりき。良雄は急き込み。えッ未練なり、此處を何處と思召さるぞ、暇どつては人目あり、事の大畧搔摘んで物語らるべし、早く〳〵と勵まされて、婦女は漸う涙をとゞめ。申すも悲しき事ながら、一通りお聞き下さいませ、夫覺兵衛こと本國を立退きし以來、嵯峨野の奥に侘しく暮らし居りし處、重き病氣に犯されて、足腰さへも自由ならず、無念の月日を送る中、北野で聞いた他人の噂に、赤穂の御家老大石殿は、祇園の揚屋に入浸りて、主君の仇を討たうともせず、酒に魂打拔かるゝは、腰拔武士の手本ぢやと、取沙汰するを眞實と思ひ、聞いたる儘を夫に話せば、口惜涙に搔き暮れ給ひて、變り易き人の心やと、嗟嘆の餘り妾の不在を幸ひに、ツイ自害して果てました、其後肌の守を見れば、神佛の符璽樣の物もなく、たゞ君父讐共不戴天と書いたる遺書一通あり、これ御覽下され、懐劍までも持添へました、この上は夫の志遂げさせたければ、名を連判帳へ記して給べ、婦女の淺い心から、御前樣を浮いたる方と思ひ込み、夫を先達てましたる罪を、お免しなされて下さいませと、地に額づきて

泣き詫びける、良雄は嚴然と容を正し。あヽ覺兵衛殿は不愍な最期を見給ひしよな、さりながら其志は屹度遂げさせやる程に、暫時山科に隠れ居るべし、サア人目無き間に立去れと、云ひて嘯く月の前、水も眠りて音絶えつ、葉竹戰ぎて白露の落ちて閃く光あるのみ。

其　四

土一升に金一升を篩にかけて徹したやら、万家の瓦は砂子を撒きしに異ならず、草より出でヽ草に入りし、月は昔時の月影ながら、變り果たる武藏野の、腹皷打つ狸の名は、色里にのみ微に殘りて、簑輪の田甫に蛙の聲を漸と聞く、こヽ大江戸の賑はひは、またと類ひはあらざるべし、別けて兩國橋の繁昌は、二六時中に三筋の鎗絶えたることなく、往ふさ來るさの人の足は、水ならねども波を打て、空に埃の雲を靡かせ、觀世物小屋の太皷の音は、雨ならざるに百雷の響を起す、少し距てヽこの雜沓を知らず顔ある、本所二ッ目の橋通りは、お屋敷の長屋檐を並べて、物見格子に御次男が、通る女性の品評め、續く土塀に樂書の、相合傘の戀知りか、見かけで云へば嚴格しき、五十餘りの老人が、未だ年若な娘をいたはり、急そ〳〵歩む行先は、吉良の屋敷を折曲がりて、松井町なる煙草屋へ入りぬ。

老人は店の閾に腰うちかけ。十次郎殿よく御精が出ますな、拙者は今日しも小春の空には珍らしい上天氣ゆゑ、娘を連れて墓參りと出かけました、貴殿は、お年もお若いのにあか〳〵御奮發なさるヽことぢ

や、時に少と折入つて語したき一大事がある、一寸勝手へ參つてお耳を拜借いたさうといへば、主人は刻みかけし煙草の手を休め。ナニ一大事とな、山科より音信でもありましたか。シッ聲が高いワ、靜になされい、壁に耳あり、障子にも目がある世の中ぢや、謀計は密なるがよいとあれば、此處は端近にて他目がある、奥へ〱と語り合ひつゝ、娘を店にとり殘して、二人は一室へ入りにけり。

頓て老人は主人へ斯く〱と耳打すれば、聞き了りて莞爾と笑ひ、俄に丁と小膝を叩きて。大石殿出來されたり、小人は酒色を以て誑らかさゞれば、其隙に乘ずるの機無し、今や吉良上野介、年頃の警衛に倦みて、漸う準備を疎畧になし、剩へ好色の白痴とて、酒に溺れ本心を掻き亂して、美目好き侍女を召抱ふる由風聞す、その噂若し眞ならば、早く我方より手を廻して、御息女お松どのを屋敷へ住み込ませ、討入の夜の案内をもなさしめ給へ、遲れなば他人の足跡や蹈まん、さりながら最愛のお娘御を人質同樣になさるゝこと、何程か御心苦しかるべし、またお松どのが胸の中の切無きこと、餘所ながらお察し申すと、涙を隱して云ひ出れバ、老人ハ頭をうち掉り。いや〱左樣ハ仰せられな、御身とても拙者とても主家沒落の其折から、一命ハ晩かれ早かれ無きものと覺悟の前、娘とてもその通り、御臺樣に冊き奉りて、松よ〱と御慈悲を下し賜はりし御恩報じに、御主の爲めになることなら、たとへ此身を粉に碎いてもと、親ながら氣味の好い程潔き決心を、大石殿に言ひ遣れバ、そんなら直に傳手を求め、吉良の屋敷へ入込みて、始終の樣子を注進せよ、若し謀畧成就せバ、四十七士の一人にも增したる程の忠義な

りと、事を分けてのお勸めに、親子共々喜びて、この嬉しさを御身にも知らさうものと、態わざ參つた、十次郎殿喜んで下され、足はぬ娘が此親に優りし忠義を立てるかと、思へば何やら鼻が高い、が、たッた一つ悲しいは、許嫁ある御身と娘と、未だ祝言の盃もさせで、王照君が胡關の恨み、見す〳〵敵の邸内へ、手離して遣らねばならぬ武士の意氣地、あァ味氣無い身の上ぢやな、あれ〳〵店に居る娘の姿を御覽じろ、未だ十八の蕾の花、雨にもあてず嵐にも、吹かせずこれまで育てたる、親の苦勞は並大抵では御座らぬぞ、しかも十五の春の暮、お屋敷なる奥庭の、櫻も今を盛りぞと咲き揃ひたる折からとて、御臺樣には和歌の筵を開かせられ、御奉公申上ぐる女中衆も、數多自詠を參らせけるに、娘の歌はその中での秀逸とて、身に餘りたる御賞辭、其上御身と娶合せんと、勿体ない御臺樣の御媒妁、貝合せ好い一對の夫婦ぢやと、羨まるゝ程肩身か廣くて、今日か明日かと祝言の御沙汰をのみ待ち居りしに、御家騷動ありてより、花に嵐は物憂き事の始めとなり、對の扇は離れ〳〵て、何處の風を便るやら、明日からの娘の身が不愍ぢや、え〻この別れ、氣骨が折れて、宗右衛門年の五つも老つた樣な、了得の勇士も恩愛の絆に愚痴を溢しけり。十次郎は默然として俯向きし顏を擡げ。先刻より段々の御話し、御心切あり難う存じまする、殊に御親子の御間柄、その御嘆きもさるとながら、武士の妻ッタ娘にして、敵の陣中に擒となり、忠孝二つを全うせしもの、和漢古今に其例あれば、御嘆きは御無用たるべし、拙者には未だ許嫁のみの妻なれど、夫婦共々君に忠義を立るのは、身後の名譽この上やあるべき、さるをなどて

悲しみ申さん、鶴龜〳〵と勇み立てバ、老人原宗右衛門も今の言語に勵まされ。おう勇ましや聟殿、御身にさへ御異存無くバ、我等親子の如何で躊躇いたすべき、娘來よ〳〵、十次郎どのより許が出でしぞこゝへ來て禮を云やれと呼び立つれば、娘は半バ羞らひつゝ、暖簾をくゞり父の傍、袴の裙に纒綿りて聲だに立てず辭儀する樣ハ身丈伸びても小兒氣の、愛度無き風のしほらしさ、晴れの小袖に晴れやらぬ雲もあるかや裙摸樣、曙染にぼかせるは、娘が顔のホンノリと、これ一對の色合なるべし。

折から店へちらと來て、頼みませうと音信ふは、ツイ聞き馴れぬ女性の聲なり。

其五

如何に忠義の爲めとは云へ、振分髪の頃よりして許嫁の、妻よ夫と晴れて呼ぶ日を樂しめバ、花にも鳥にも目が移らず、命までもと意に誓ひし男に別れて、原宗右衛門の娘お琴は、王照君の恨を呑みつゝ吉良の屋敷へ女中奉公に住み込めば、上野介固より好色無頼の痴漢とて、お琴が艶色にいかでか意馬を狂はさゞらむ、狂ひ初めては繋ぎ止むべき手綱をだに持たぬ身の、忽ち魔界に脚を辷らして、驕奢放逸酒を被むり肉を貪り、その上口入の烏婆を説き伏せて、お琴を掌中の珠玉にせんと謀るこそ、斑猫の毒あるを知らずして、新菊の香に醉ふ熊蜂の危きが如し。

吉良上野が警衛の尻押には、當時十八國主の隨一と聞えたる上杉彈正大弼殿の見張ありて、蟻一疋も無斷に御門は通さぬ掟ありしが、敵も味方も睨み合の合戰には、双方氣拔して、一年半年と空しく過ぐれ

ば、何日しか互に弦を外し楯を伏せて、安眠を貪るが例なり。

上野介もそれに眞似てか、今日の今まで手出しだにせぬ赤穗の諸士を臆病と嘲り、骨無き海月と冷笑ひて、齒牙にだにかけぬやうになれば、風無き舟に帆を上ぐるに及ばぬ道理と、俄に夜徹しの張番を止めて、たゞ老耄たる仲間二人に夜を守らせ、居眠する間々に拍子木の音かち〳〵かヽッと響かせり。

總じて高家衆の驕傲なるは、言語に絶えたる程なりしが、別けて吉良家の權勢の熾なるは、空飛ぶ鳥も落なんばかりの有様にて、先づ大名と婚嫁を結び、分に超えたる奢を極めて、下に對すること、塵芥の如し。斯かれば小大名を見ることは、恰度狆狗なんどを待遇ふやうになしけるにぞ、血性男子の如何で腹をや立てざらん、淺野が一太刀怨みを報ひしも、所以なきわざにはあらずかし。

やがて死ぬ氣色も見えず秋の蟬、夕陽を射くる小座敷の、障子にちらと映し繪の、木影を眺めて茫然と過去未來の事を考へつヽ、襟に頭の半ばを埋めて、牽牛花の露欲しげなる風情するお琴、花の姿も想ひに瘦せて、綾羅の衣も重きを喞つ。やヽあつて顔を擡げ、ふりかヽる鬢の後れ毛掻き上げては、またも思ひに塞がる一間、明けて訪ひ來る朋輩さへ無きにぞ、いとゞ心も結ぼれ勝、たゞ降るにつけ照るにつけ、忘れかぬるは夫の安否、父御の消息。渡りに舟もあらぬ身は、風の便りもあらずして、蘇武が匈奴の幽囚も、斯くまで辛らくはあらざりけむ、あァ味氣なき身の上やと、袖に時雨の乾く間もなし。

折から雛といふ小間使の小娘、閾の外より聲かけて、お琴さま、今中の間に煙草屋が來て居りまするが、

貴女も一喫吸つけ煙草召し上がらぬか、その商人の男振は、役者で云へば辰之助ぢやと、皆の衆が大騒ぎで御座んすと告ぐるにお琴はうち驚き。もしやそれかと椽側傳ひ、窃と近寄り障子の穴からさし覗けば、擬ふ形無き十次郎なるにぞ、飛び立つばかり悦こびしが、顔見て嬉しい素振をば、朋輩衆に悟られて、粋た中ぢやと氣つかれたら、それぞ計畫の破るゝ源、左すれば是まで盡したる、忠義も水の泡となりなん。逢はぬ昔時と諦めて、お傍に居ぬこそ互の爲めなれ。左樣ぢや／＼と獨語て、已が部屋へ立戻らんとなしけれど、未練に弱き後ろ髪、引かれてまたも寄り來るを、ジッと堪へて我慢して、居間に歸るや溜め涙、袖に降らして忍び泣く。

居間ある床に懸けたる軸は、しかも深雪に常盤の圖、泣き叫ぶ兒をいたはりて、頼む木蔭の市女笠、九郎に風を中てさせまじと、つくる袖垣、關の戸を叩きかねたる落人も、時節を待てば梅の花、咲いて其名を世に殘す。妾は常盤に及ばねど、時機を待つ身は一つあり、悲しき目にも遇ふてこそ、男子の爲し得ぬ効力も立つれと、氣を取直し、流石に武士の娘とて、女々敷き擧動あらざりけり。

さるにても逢ふて知らする事もあり、聞きたきこともあるものを、一目なりとも顔見たやと、またも未練に掻き亂す、心の絲の結ぼれは我と解く由あらざりしが。漸うにして容を改め、涙を衣もて拭ひ了り。ホンに未練に泣いて居た、こんなに氣が弱くては、所詮御臺樣へ忠義とやらも立てられまい、かゝる苦勞をする事も妾ばかりの上ぢやなし、何日ぞや十次郎樣のお宅で逢うた山岡の御内儀も、遙々東へ下ら

れて、此後傳手もある折には、當御屋敷に御奉公遊ばされて、妾と一緒に仇を討たする手筈を内通なさるゝとか、こんな大事な役目を帯びて、このお屋敷へ入込みし妾なるに、何故このやうに氣弱になつたかと、胸に問ふては自ら勵む勇ましさ。俄に何をか思ひ出けん。墨磨り流し紙を展べ、さら／＼書きて巻き封じ、また中の間に行き見れば、十次郎は今や女中に會釋して、門より歸へる際なれば、お琴はこれぞ屈竟と、表の長屋に密と入りて、物見格子の障子を開くに、天の與へか見る人無ければ、早速に釵拔き取りて、認め置きたる書狀を結ひ付け、通りかゝる十次郎が足下へ、ヒラリとばかり投げ出すを、彼方は早くも拾ひ上げ、格子の窓を見遣るを名殘、閉づる障子に急ぐ足音、右と左に別れても、思ひの種は盡きざりけり

其六

容目好き花の盛りをのみ愛づるものかは、婦人は若葉の三十一二、年數から云へバ、色も香も溢るゝ程は無き頃なれど、それまでには見えぬ若化粧の一得には、剃りたる眉の痕匂やかに、染めし齒並の美くしきにも、人の目を引く山岡が女房お粂、去ぬる頃大石が計畧にて東に下り、本所松井町なる矢間が家に宿かりて、十次郎が姉なりと世間へは吹聽し、吉良の屋敷へ出入する商人なぞを頼みては、只管御奉公に上らんものと、いろ／＼心を砕きたる甲斐ありて、翌年如月の始め、諸鳥梢に馴れ睦む時、上野介が館へ入込むことを得たり。

されども原宗右衛門が娘のお琴は奥勤めにして、其身は臺所廻りに働けバ、十日餘は互に相見ることもならで、お琴はまたお粂がこの屋敷に居るといふことさへ知らずに、また四五日は過ぎにけり。
今日は初午祭の當日なるに、空は清く晴れ渡りて一點の雲も無く、春風の心地好く吹き送るに、何所よりか梅の香の音信れて、夕暮よりは月のあるを一入に、千金の儲け物と、屋敷の隅の稲荷社には、參詣の老若引きも切らず。漸う童の凧を收むる刻ともなれバ、いづれも夕餐に忙しき折とて、人の足も稍々閑なるを見計らひ、吉良家の主人上野介は、黒羽二重五所紋の羽織を着流し、同じく黒の二枚襲ねを裾長にひらめかして、巾廣博多の帶に脇差のみを佩き、庭木履輕らかに踏み鳴らして、からころ〳〵と散歩く後の方に、たゞ一人附添ふは女中のお琴なり。矢飛白のお召に友染縮緬の下着を襲ね、緋金襴の帶を竪やの字に結びたり。鬱金縮緬の帶上げを垂れたるは、蝶も菜の花に擬ひやしぬらん、眞紅の繻絆を庭中の黄鸝も花とや眺めん。髪を中高島田に結ひて、銀平打の釵を挿し、手には紫の服紗もて主人の佩刀を捧げ持ちたり。肌の色は白くして雪に優り、容目美しくて天女の姿やこれなるべし。上野介滿面喜悦の色を現はして、折ふし後邊を顧みながら。琴や何んと心地好きことではないか、斯く並びある行燈に火を照しなばまた何程か美しからう、夜に入りなば女中共大勢と一緒に遊ばうではないかと云へば、お琴は莞爾と微笑みて。ホンに御意の通りに御座います、今日一日の面白さに、壽命の百年も生延びたさうなと、お奥でお噂を申して居りました、永の月日御奉公をいたして居ります中にも、斯した事

のありますのは、何よりお嬉う存じますと、羞らふ如く打俯けば、上野介は一入笑壺に入り。アハヽヽヽ、氣の輕い事を申す女ぢや、まこと奉公は氣の詰まるものであらうな、殊さら其方位な年頃でハ屋敷勤めは窮屈なものぢやが、この上野介が不愍をかけて遣はせば、泣かずに辛抱するがよいぞ、そして年齒は。はい十八歳の遲そ生れで御座います。なに十八ぢやと、屋敷へ來ずば未だ苦勞だに知らぬ蕾が、多くの人に交はりて、雨風雪に苦しめらるゝは、さて〳〵惜しきものではあると、口の中にて獨語時、後邊にどや〳〵人の足、何事ならんと振顧れば、お末を勤むる女中輩の、賄方用人に眼隱しかけて、鬼事をこそするありけり。

今日は夜更けて就寢るまで、遊戯を搆ひ無しとの事より、家來は轍鮒の水に入り、籠の鳥の雲井に啼く思ひして、今鬼事の眞ッ最中ゆゑ、御前も構はず逃げ隱る、彼方の木蔭に潜みては、飼犬に裙を噛まれ、此方の垣根をぐる〳〵廻りて、茨に袖をからむもあり。鬼さん此方ぢや手の鳴る方へと、囃子立てゝは吶と笑ふ。その一群の中よりして、逋ぐるに見せかけお琴が傍へ寄り添ふ者あり。お琴は訝かりその顏眺めて、言語やかけんとしたれども、上野介に怪しまれては一大事と、眼もて知らせば彼方も察し、此所を離れて奥庭に又も千鳥の立つ如く、ハッと散りては直に寄り、笑ひ興じて樂む中に、日ハはや曛れて月出でたり。

上野介は居間に戻り、お琴は用事も果てたれバ、部屋に戻りて着替をなし、庭口より忍び出でゝ、以前

の處に至り見れば、樹の間〳〵に行燈照して、火影を乱す人も無し。月はあれども葉隠れの、闇こそ好けれど忍び來る女中は山岡お粂なり。待ち設けたるお琴にも、敵地の事とて油斷せず、微けき光明を便りとして、來る人の顔篤と見究め。お前ハお粂樣ぢやないか。おうお前ハお琴さま、御無事で何よりお嬉しう御座います。妾も貴女に逢ふたので、何んなに氣強うなつたか知れぬ、あアこれまでの苦勞心配で、これこのやうに瘦せました。ホンに大分肉が落たさうな、そして當家の用心ハ何うで御座います、未だ仇討の時節ハ來ぬかと、十次郎樣が一方ならぬ御心痛、山科からも使者が來て、屋敷の樣子ハ如何ぢやと度々の申越し、それで妾も此月始め漸う此家へ入込みました、これからハ二人心を協せ、屹度吉左右知らして遣りましよ、お心強うお思召せと、慰め遣れバお琴ハ喜び。それで妾も安堵しました、そして父さんハ御壯健でか。おう〳〵御父樣も御丈夫、十次郎樣にもお變り無うて、折ふしに貴女の噂話、貴女の方でも夢見の好い夜ハ、屹度お噂の出た日ぢやぞえ。あらまたその樣な事云ふて、妾を嬉しがらせると喜び涙に暮れにけり。

其七

龍も時機に遇はざるときは、空しく淵に潜むことあり、されども一旦雲を獲るの曉には、また池中のものにはあらざるべし。原宗右衛門の娘お琴は、吉良の屋敷に入込みて、敵の動靜を探るといへども、花の姿の十六七、未だ年若き身の上にては、憂き事前に重なりて、味方に知らする音信さへ、心の儘に

なさざれバ、泣いて袂に時雨して、秋も過ぎ冬も暮れ、翌年二月の末つかた、梅咲いて花の噂のとりどりや、鳥も囀づる頃なりけん、待つ甲斐ありて山岡の女房お粂にめぐり逢ひ、それよりして龍の翼を得じ如く、喜び勇むも道理なれ。

過ぎ行く月日も半年あまり、今年も早く秋風立ちて、巷に賣るや虫の聲、風鈴の音の靜けさにも、日和の好きを知られけり。

日は曛れて七日の月は木立に隱れ、庭は一面一刷毛の隈を描いて墨繪の松、釣り燈籠の火影も暗く、築山の彼方に葉竹戰ぎて、雨降るかとも疑はれ、泉水の響は琴の音を彈でゝ、寂として夢を喚ぶなる淋しさに、お琴は今宵は非番なれバ、已が部屋へと引下りて、行燈の下に書さし展べ、結ぼれし氣を慰むるに、晝の疲勞にや、机に臂をもたせし儘、我とも知らず居眠りけり。

訝かしや今が今まで、我が部屋なりと思ひ居たるに、これは如何、いと廣漠なる原野に出でたり。時は秋の最中なれば、萩桔梗こそ盛りなるべきに、左は無くて山櫻の時を得顔に咲き誇るあり、怪しみながらも進み行けバ、諸鳥梢に囀りて、霞の幕を春の山、花燃ゆるかと思ふバかりの麓の方に、小袖幕を打めぐらして、花見の群ぞ居たりける。朗々と吹きすさむ笛の音ハ、晴れたる空に響き渡りて、その心地好さ、言語にハ得も盡されず、お琴も現心にありて、笛の音の聞ゆる方に行かんとすれバ、側に咲ける吉野櫻の木蔭にて、駒いと高く嘶きけり、恐やと驚き走せ行きつゝ、なほ振顧りて彼方を見れバ、月

にも擬ふ美少年の、銀鞭腰に挿狹みて、根方に倚りて立たりけり。熟々見れば矢間なり。お琴は喜び十次郎様と呼ばれりつゝ、走り寄らんと近づけば、矢間は手をもて押止め。粗忽ばし玄給ふな、今日は殿の御供いたし、櫻狩に參りしなり、如何許嫁の中とは云へ、餘りといへば見苦しきその振舞、人目が御座る、世間がわるぞ、エッお抑へなされと叱られて、お琴は取付く島もなく、泣くに泣かれず佇立めば、矢間は結びし手綱を解き、駒を牽き立て行かんとするに、お琴は悲しさ口惜しさ、暫時待つてと云ひつゝも、十次郎が袖を抑へて泣き沈み、逢ひたかりしと喞ちけり。

矢間は嚴と容を改め。そは未練なり、不覺なり、御身も武士の妻女ぢや無いか、一旦心を決せし上、敵の陣中に忍び入りては、一命は元より君への捧げ物、さるを暫時の間我に逢ふ事ならぬとて、陣屋を拔け出で來りしこと、云ひ甲斐なき不所存なり、我は斯かる女々敷き妻女は持たぬ筈、然るを夫と呼び給ふは、人違ひにて侍らずや、他所をお尋ねあるべしと、袖打拂ひ塵拂ひ、駒にヒラリと乘るよと見る間に、一鞭あてゝ雲霞、跡をも見ずに駈けて行く。お琴は尚も追はんとすれば、思ひもかけぬ横合より上野介ヌックと立出で。お琴〳〵と呼び立つる、お附の女中も一同に。アレ召しますと云ふ聲に、弗と眼を覺ませば夢なりけり。月落んとして枯柳の枝に懸り、孤雁一聲雲重くして、風習々と衣を吹きぬ。覺めたる後も呆然と、お琴は夢を判じかね、たゞ有耶無耶の境に迷ひて、兎角に出づるは涙なり。

かゝる處へ椽頰の障子を開けて入り來しは、山岡の女房お粂なり。持てる雪洞の火を消して傍に置き、

お琴樣何う遊ばしました、また父御の事を御案じあされてか、泣いて居る塲合では御座いませぬぞ、大石樣の方にては、諸事万端準備も出來、今か〳〵と討入の日をのみ待つて居給ふのに、未だ書きかけた繪圖面も出來上らず、思はしい音信もせねば、何のやうに待ち詫びておいで遊ばすやら、あア心配ぢや心許なや、それではお琴樣、今宵は妾も手傳ふ程に、何日ぞやの屋敷の繪圖を、書き上げて仕舞はうではお座りませぬか、遲れて敵に知られては一大事ぢやと、氣強く云はれてお琴も勇み。そんならこれを書きましよと、手文庫の內搔探りて、討入りの夜に用ふべき、吉良の屋敷の繪圖面を、一心籠めて書きはじめぬ。

夜は更けて木立を度る風凄く、水の音さへ微かにて、戶外は闇夜、室內もまた靜まりかへりて人語無く、漏々と響く時辰儀の音のみ、廊下に聞えて物淋し。お琴は一生懸命に墨摺り流して繪圖を書けば、お粂は眼を四方に配りて、他人や來ると見てあるに、天の加護にや、知る者絕えてあらざるにぞ、二人は大に打喜び、首尾克く繪圖を書き了り、翌日密に矢間方へ送り屆けて、復讐の日をのみ、今日か明日かと待居たり。

其八

時機は再び獲べからず、傳へ聞く吉良上野介は數年來の警備に倦みて、今は殆んど我に敵あるを思はず、色に耽り酒に浮かれて、露ほども武邊に心を置かぬのみか、四季折々の物見遊山に、分外の華美を盡く

して、小袖幕の中には美人の粹を萃め、驪山宮の俤を移して、肉羹の山に白魚の波を湛へ、宛らの酒池肉林を見るやうなれば、亡國の兆は眼前に迫りたり。此時に討たずして、また何の時にか討つべきやと、堀部彌兵衛を始めとして、一味の面々心を協せ、聲を揃へて申しければ、大石内藏助も今は默止難しとて、竊に城州山科の家を遁れ、暫時蹤跡を晦まして、人知れず江戸へ下り、討入の夜の方畧などに思慮を凝らして居たりけり。

十二月十四日は朝來の凍雲空に凝りて、一天布もて覆ふが如し。高輪泉岳寺は丘に據りて建てたる精舍にして、門前には渺茫たる滄瀛を湛へ、漁舟波に隱れて白鷗汀に飛ぶの景色を貪り、境内には老杉古松森々として、風常に颯々たり。春は御殿山の夕暮に、花を散らす鐘を撞きて、遊人に夕殘の句を吐かせ、秋は袖ヶ浦の月に、看經の聲を送りて、見る人の胸を爽かにすれど、冬枯れの朝、野分の夕、驛鈴の音遠く微に聞えて、物淋しさもまた一入なり。

赤穗の城主淺野内匠頭の墓前は、流石に荒れしといふにはあらねど、一家中離散の後は、構へて手入を怠り勝になしければ、荊草間々塚の邊に茂りて、霜夜の月を弄び、杉の木立の陰をなして、晝と雖どもなほ暗かり。況てや此頃の寒空に霜重くして、墓石も凍り崩れなんとする中とて、香花絶えて人の訪ふ者なく、卵塔の傍には、霜柱の踏めば氷を碎く音あり。

斯かる處へ何人とも知れぬ旅打扮の男三人、彼方此方の石塔の間を拔けて來りつ、齊しく内匠頭の墓の

邊に立止まり、後を顧み前程を眺め、見る人無きやを確めたる上、三人顔を見合せて、莞爾と笑みを傾けたり、中なる老人聲を潜め。大石殿矢間殿見る人が無くて仕合であつた、各々少しも早く亡君の御墓前に御回向申さうでハ御座らぬか、我々本國を立離れてよりハ、態と參詣の足を遠ざけ、御墓前を荒れに荒らしたる今迄の不忠ハ、今日ぞお詫びを致しませう、あァ〳〵老の身の、亡君の御墓を見るにつけても、先立ものハ涙ばかり、愚痴と笑ふて下さるなと、合羽の袖に眼を拭ひ、愁然として差扣ふれバ、内藏助もうち凋れ。まこと原殿の云はるゝ通り、四十七士の同志ありとハいふものゝ、敵に内意を悟られてハ一大事と思ふがゆゑに、心ならず御墓參も致さず、荒れたる狀を見るにつけ、亡君が御無念の程思ひ遣らるゝ、えッ、已れ憎くき吉良上野、多年の遺恨、今宵ぞ思ひ知らして遣らむ、地下に在ます先君にも吉良の屋敷へ照臨まし〳〵孰れもが手練の程、枉げて御覽じたび給へ、今日の今まで家中の諸士が不甲斐爲さを見給ひては、嘸ぞ切齒くや思しけん、復讐延引いたしたる不忠の罪は、明朝一同御墓參の上幾重にも御詫び仕るべしと、涙を流し聲を上げ、拳を握りて震ひ泣く、十次郎も涙ながらに、閼伽桶の水を墓前に供へ、合掌禮拜したりけり。

時刻を遷して人目に立たば一大事と、宗右衛門が云ふをそれぞと、各々別れ〳〵とあり、家に歸りて日の暮るゝをぞ待詫びぬ。

冬の日の暮れやすく、はや黄昏となりけるに、朝より催したる凍雲、漸う暖氣を含みて、誰彼れ別かぬ

頃より、一天霏々たる雪とはなれり、大石内藏助は討入の準備全く整ひたれバ、今や矢間十次郎が來たるかと、隱れ家の庭前を眺めやりて、松が枝の白うなるを、心地快氣に賞めぬ。

内藏助は色青白き方にて、脊丈は中人よりは小し。柔和温順にして常に言語少く、莞爾と愛嬌多き人なるに、今宵は復讐の夜の事とて、滿身の勇氣、滿面の喜色、溢るゝばかりなりけれバ、威風凛然と四邊を拂へり。

降る雪を合羽に凌ぎて、息急き駈け來るは矢間十次郎なり。冠れる笠を門口に捨て、出口の椽に腰うち掛くれば、内藏助は辞をかけ。屋敷の樣子は如何なりやと問ふ。首尾は上首尾。今宵は雪見の宴ありとて、來客も數多あれば、出入の人に立交りて、屋敷へ忍び入るべしとの愚妻が知らせ、天の與へ賜ふの時機、はや〳〵屋敷へ忍び込まんと、勇んで云ふを内藏助は制し止め。否々、急ては事を仕損ずる、計畧は密なるをよしと聞く、さらば此趣を原宗右衛門殿へ知らせ遣らんと、立上る袖を抑へ。その御手配は御無用なり、拙者此方へ來る途にて、宗右衛門殿に逢ひたれバ、始終の樣子を打合せ、折好き場合に合圖をなさんと約したり、御案じあるな、サア〳〵早く屋敷へ忍び入らんものと、鵞毛に似たる雪掻き分け、鶴氅とも見る合羽の袖を拂ひもせず、吉良の屋敷へ急ぎ行きぬ。

其九

武士も町人も太平の御代に馴れて、泥醉漢さへ滅多には鞘を外さぬ靜けさより、自から治に居て乱をう

ち忘れ、お侍が咽喉の美いのを自慢に、隆達節唄ふ元祿の末年は、馬も肥えて、脾肉のみ日每に太る折からに、古今未曾有の一椿事こそ湧き出でたれ。

元祿十五年十二月十四日は風神の怒號烈しくて、朝より飛雪紛々と舞ひ下り、飛んで花の如く庭を粧ひ、積りては萬瓦を裹んで、巷は布を敷けるが如し。

復讐の日を今か〳〵と待詫びたる四十七士、今日こそ多年の本望を成就して、曩昔までは無爲に暮らす腰拔け武士と、嘲けりし者の眼を驚かし吳れんずものをと、滿身の勇氣、滿腔の熱血、撲たば迸しるべく思はれたり。

多年の辛苦その甲斐ありて、赤穗の義士は首尾克主君の仇を討ちぬ、その討入の夜の模樣は如何なりしやと、當時の人の種々に噂取沙汰しけり。

大石良雄は十四日の夕暮より矢間十次郎と共に、吉良家の裏門より忍び入らんものをと、同志の諸士に別れて、降り頻る雪を物ともせず、一目散に駈けつけたれど、未だ屋敷にては、お琴お粂の首尾整はざるにや、門扉堅く鎖して、吹雪に石橋は埋まりあり。

兩人顏を見合せて、邸内の準備は未だ整はぬなど、語らひつゝも往來の人に眼を注ぎて、更に油斷はせざりけり。

大事はこの一時の瀨戶なるぞ、千丈の堤も蟻の穴から洩るゝとか、十次郎殿前後に氣を注けられよと、

良雄が云ふに打頷づき。心得ました、が、邸内の樣子は如何やら、なんと氣の採めることでは御座らぬか。そは拙者とても同感なれど、急いては事の仕損じあり、其内にはお琴殿が、門の戸開くるは必定なれば、暫時辛抱あれかしと、空をバ掊と打見やりぬ。

夜に入りて月のあるべき宵なるを、雪は巴と降り頻りて、小歇みだに無き折からの、人は鶴氅を着て行くもあれど、みな白妙の衣の袖、濡れて鷺にも似たりけり。

待つこと良久しかりしが、門の開くべき氣色も見えぬに、兩人心は穩かならず、お琴お粂の身の上に若し變事などありはせぬか、萬が一怪しと認められしとて、一命を捨てゝ勤むる兩人なれバ、復讐の事は死ぬとも口外いたすまじ、さアらバ如何にせし事ぞと、苦慮一方ならざりき。

邸内にハお琴の物思ひ、今宵を瀨戸の大切な御用を、若し失策などあつたなら、妾は何うして好いものかと、末を案じて兎や角と隙のみ覘ふ其間に、日ハはや暮れて奥の間は、今宵ぞ雪見の御酒宴と、銚子膳椀持ち運ぶ、足に隙無き腰元の身の上。

月無き夜を幸ひと、お琴は裏口から窃と忍び出で、雪を搔き分け踏み敷きて、漸う門へ辿り着き、弗と息して戸を開けバ、此方は待ちに待ちたれバ。其方やお琴かと矢間の聲、斯くとは知れど不意に驚ぎ。えッ、十次郎樣かと呼び返し、雪明りに眼を配りて、前後をジッと透し見つ。おう、ホンに逢ひたう御座んしたと、戀に大事を打忘れて、寄らんとするを良雄は遮り。大事の前の小事を愼め、佇立みて他目

につかば事は六ヶ敷、いざ門内へと、云ひつゝ闇にも意を配りて、そろり〳〵と奥へ踏ん込み、腰元部屋なる椽の下へ、合羽着た儘忍び入りて、夜の更くるをば待ち居たり。

上野介が居間の方にては、酒宴今を盛りと覺しく、歌吹の音の手にとる如く聞ゆれバ、身は椽の下に置きながらも、胸は煮え立つ憤怒の炎。憎つくき上野介が擧動かな、主君長矩公は汝の爲めに非業の御最期遂げ給ひしに、世間の手前も憚からず、歌舞遊興は何事ぞや、今死ぬる身も知らずして、酒や女色に現無きは、最期を早むる自業ぞと、云ひ合はさねど心は一つ、顔を寄せては共々に、口惜涙に袖を絞ぼりぬ。

神ならぬ身の斯かる事とは知るべきや、上野介は雪見の酒に盛り潰され、座に居るさへも太儀の身をやつと起して椽側傳ひ、女中の肩に抱へられ、ひよろ〳〵と行く千鳥足に、敷きたる毛氈に波をよらして、香燻き籠むる部屋の内へ、ごろりとばかり寐轉びては、水を持てとぞ叫びけり。

お粂はこれには頓着せず、他人の見ぬ間に握飯を製へて、手早く竹皮包みにおし、闇を傳ひて裏口の、部屋の戸口に立寄りては、前後を睨みて安堵なし、履脱石に下立て、靜に呼べバ微に聲あり、妾はお粂で御座います、何程かお饑じからう、お腹塞ぎにこれなと喰べて待ち給へ、上野殿は今がお休み、夜更を待つて呼ぶ程に、暫時辛抱遊ばせと云ひて、早くも身を隠しぬ。

良雄は涙を流しつゝ。あァ是非も無き身の上や、我も一國の家老とて、千万人の上に立つべき身を持ち

ながら、一つ二つの握飯に、饑をバ凌ぐ境界に陷りたるかと、涙に咽ぶも道理なり。

其十

夜の更くるまゝに雪は小歇みして、朧ながらに十四日の月の、庭前の木立を照り反して、油繪めける隈取の泉水築山の影を黒むれバ、風は篁を吹き騒がして、さら〳〵と池に音するは、積れる白きもの、搖はれ飛ぶなり、大石内藏之助と矢間十次郎は宵の中より、吉良家の奥庭に忍び込みて、更くる夜を鐘の音に待詫びつゝ、待てば嬉しきこと、悲しきこと、腹立たしきこと、嘆かはしきこと、口惜しきこと抔、胸に聚り來て、涙の露に袖を濕し、齒を嚙ひ切りて無念がるに、勇氣日頃に百倍して、腕の我から鳴るを覺えず、矢間は殊に血氣の壯漢、奥の間より洩れ聞ゆる上野介が、酒にたわい無き聲を聞きつけては、さても無念、もう忍耐はなりませぬ、奥へ駈け込み、敵の細首たゞ一ト討ちにと、鯉口くつろげ椽側へ足踏みかくるを、思慮深き大石は刀の鐺を緊乎と摑み。逸り給ふな、こゝ一時は生死のかね合、多年の辛苦を水に流すも、マッタ本望成就するも、今眼前に迫りたり、分別はこの大石が胸におれバ、騒いで人目にかゝり給ふな、潜むは伸ぶる裏なるぞ、表に同士ハはや集まりたるか、えゝッ冬の夜の長さ、氣を揉ませることであると、制し止められ詮術無く、また靜まりて時を移せバ、丑滿の鐘陰に響きて、其聲雪に凍るにや、天地閴然、草木も眠るかと思はれたり。

あれ聞ゆるは丑滿の鐘、時分は好きぞ、十次郎殿用意召されと、雨戸の傍に立寄れバ、冴えざるまでの

月影も、二人の姿を地に映しぬ。見る人無きかと四邊を睨めば、笠松の影、枯柳の影、さては燈籠の影までを、敵の忍び寄るにやと、身構へすれど、人の氣色も無きこそ道理、果は兩人からくと笑ひながら、非情の草木にも心を置かる、あァ忍ぶ身の便なさよと、云ひつゝ立てバ、雨戸の口より女の顔の月に白くぞ見えたりける。

それとは早くも目を注けながら、此方はなほも油斷せず、敵にやあると月光に透して、女の顔を佶と見れバ、山岡が女房お粂なり。やッお粂どの、首尾は如何と詰め寄れば、サァ寢所へ案内しましよと、大石が手を執るに、矢間も後より摺足して、椽側傳ひに寢所へ進み、それ此處なりと云ふがまゝ、障子の隙よりさし覗く内藏之助、つくぐ隅々見檢むれど、それぞと思ふ人も居ず、訝かりながら室内に入れバ、床は空しき總枕、たゞ燻き籠めたる香の煙の、枕屏風を黒むるのみ。

玄なしたり、敵は早くも遁げ失せしか、えッ殘念と齒切をなし、腕を撫りて口惜がるに、お粂も驚き呆れしが、弗と案じつく隱れの小座敷、アノ邪智深い上野ゆゑ、こゝを寢所と見せかけて、彼方に臥すに極ッたりと、大石の手を執らんとして、提げたる刀の刄を無手と攫めど、慌てし折とて氣もつかず、その眞暗き廊下を行けば、椽側なる鐵行燈は風に消えて、烏羽玉の闇に歩みを運ばすに、地獄の路を辿るが如く、冥々としてまた冥々たり。廊下を出れバ中庭あり、閉ぢ殘したる雨戸の隙より、向ふの小座敷を眺むれば、伊達に造れる圓窓より、行燈の火影洩れ射して、袖垣の雪を照らしぬ。彼方にこそと勇み

立ち、障子の外に立寄りて、聴耳立つれバ鼾の聲あり、天の與へと喜びながらも、なほよく室内を覗き込めバ、枕元の燈火は寝顔を照して、眼鼻立の具合なんど、手にとり見るより確なるにぞ、内藏之助はうち喜び、それと下知すれバ、障子を蹴はなし駈け入る矢間、其身も直と進み入る物音に、忽然と眼を覺したる上野ハ、枕刀を手早く拔くを、鐵扇もて丁と落して。如何上野介、我等を何と心得るぞ、陰暗き事ハ汝が肚に覺ぞえあらん、去ぬる頃、汝か爲に怨恨を呑んで、御最期ありし淺野内匠頭が家臣四十餘人、今日たゞ今主君の讐を報ゆるぞ、觀念せよと呼ばゝりつ、立たんとする上野が腰の番ひを、力足に蹴つくれバ、よろめきながら倒るゝ間に、十次郎ハ椽側に立出でゝ、呼子の笛を吹き鳴らすに合圖の吶喊を哄と揚げ、門内俄に犇き合へり。この物音に南北兩隣の屋敷よりハ、何事の起りしかと、屋の棟に物見を上げ、定紋打たる高張提灯を、星の如くに點し列ねつ、物見ハやがて聲をかけ。深夜に他家を騒がすハ、狼藉者か、強盗か、ただしハ意趣ありての業か、隣家の交誼、時宜によつてハ御助太刀の一手仕らんと、呼ばゝりたり、大高源吾ハ聲張上げ。否左樣なる者にてハこれなく、我等ことハ播州赤穂の城主淺野内匠頭の家來、故あつて今宵主君の仇を報ずるもの、目ざす敵ハ上野殿一人なり、もとよりして、狼藉いたす所存も無く、火の元堅く取締り申せバ、出火の憂ひもこれあるまじ、御助太刀ハ御無用なり、それとも強て一矢を賜はらんとならバ、武門の習ひ小勢なりとも、御相手仕らんと勇ましくぞ答ふれバ、物見の武士ハ靜まりかへりぬ。

朧ながらも月明りに、吉良の屋敷を打見やれば、右往左往の人の足れ、宛ら立田川の秋にも似たり。

其十一

浮世の夢の曉近く、入り亂れたる赤穂の義士に、長夜の眠を覺されて、寢耳に水の大叫喚は、實に三界は火宅の諺を現じて、綾羅の蓐に蝶と化したる女の童、腰元、仲間、草履取の小者に至るまで、泣き叫び逃げ迷ふ有樣は、殿司の筆に殘る地獄變相の繪に寸分も違はざりき。

されども義士の面々は逃げ迷ふ賤しきものには眼もかけず、目ざす敵は上野介一人なるぞ、物の數にも足らぬ下司下郎を殺ひて、後々の物笑ひとなるな、別けて女性は緣無き者なれば、勦りて遁がせよと、表門を堅守たる原宗右衛門、老いたれども勇氣凛然と、長身の鎗を杖になして、雪に足場を踏みしめつゝ、拮と睨んで呼ばゝりぬ。其聲朗にして凍るが如くなれば、了得に騷ぎ立ちたる屋敷も見る間に靜まりかへりたり。

朧ながらも十四日の月、雪氣を含む大空一杯に凝りて、影は玄關の廂を照せば、乱れ入る味方の火事羽織のみ、微にそれと見え判きて、松明高張のきら〳〵と入口の板戸に映るは、星飛んで庭の松に宿るかと思はれぬ。

折しも納戸の口より長刀を閃かしつゝ、現はれ出でたる腰元二人、緋縮緬の襷、白絹の額巻を夜更の風に靡かして、群れ居る義士の眞ッ只中へ割つて入りぬ。一同この有樣を勇ましげに見遣れば、一人は花

も羞かしかるべき美人、後に立てるは冬の松の色無けれど、威風犯すべからざる女丈夫なりき。大高源吾は持てる松明を高く振翳し。さても勇ましき御婦人かな、兩刀佩む武士さへ、後背を見せて遁げ失せる中に、吉良殿とは如何なる所縁のお兩方か、後殿して我等に手向ひ給ふこと、天晴の御心根、大高源吾ほと〳〵感服いたしたり、苦しからずバ御名を名乘らせ給へと呼べバ、不思議や女性は聲うるませて、大高殿よう問ふて給はりし、妾等ことは斯世に家無き果敢無い身の上、父や夫は赤穗方の御味方ながら、娘や妻は其方様へ手向ひせねバならぬ義理、何をお隱し申ませう、それなるは原宗右衛門殿のお娘御、これは山岡覺兵衛が後家のお粂、吉良家の内情探らんため、假りに奉公するとは云へ、一日仕ふるも君は君、今主君吉良殿が討たれ給ひしを、餘所に看て遁げられませうか、斯くなる上は所詮赤穗へも歸れぬ成行、娑婆に家無く親なくバ、潔く死んで忠義を徹底させませう、サア斬り給へ、いざ〳〵お手向ひ仕つらむと、持てる長刀振廻して、寄らバ切らんと身構へたり。

後邊に凛たる聲あつて。今の一言殊勝なり、それ矢間どの生擒られよと、粹なる下知に重次郎も、進みかねてや二の足踏むを、心弱しと大石ハなほ聲高く。矢間どの怯れしか、えッ優しやと呼んだりけり。並み居る面々、眼を注ぎて女性を見れバ、實にこれ梅か、梨の花、艶なる色の紅白は、源平いづれ旗色好きか、風情はなほも一入の、露の涙に打濕れぬ。

二人は慇懃に手を支きて大石に一禮し。妾々斯く一同に取圍まれては、所詮遁げ延びんことも叶ひ難し、

存分に御成敗給はれかしと述ぶれバ、内藏之助は頭をうち掉り。いや、いや、其方がやうな忠義な者を、赤穗の武士は手に懸けぬぞ、生きて忠孝全うするは、おう／＼それよ、兩人とも尼にして遣はすぞ、此處を立て、時刻移らば故障や起らん、各々吉良上野介が首級を揚げたるぞ、積年の鬱憤今ぞ晴れつらむ、これ見られよ、この口にて主君内匠頭様を嘲りしか、この眼もて能くも我君を蔑視たるよなと、遺恨の數々並べ立て、一同歡喜の聲を震はし、嬉し泣きにぞ泣きにける。

はや夜は明けたり。アレ／＼東は白んで、鷄も啼き出でたるぞ、この間に一同引揚げよと、大石が下知に喜び勇んで、吉良家の門を立出れば、朝風亂れたる鬢の毛を吹きて、その寒さ肌を劈くが如し。

されども聞き傳へ云ひ傳へて。それ前代未聞の目覺しき復讐あるぞ、今の時に見後れなバ、悔ゆとも詮なかるべしと、人の山、足元の波、一條の往來を差挾んで、中央を悠々と通り過ぐる四十七士の裝束、いづれも火水の難を辞せぬ火事羽織着て、積れる雪を黒めつゝ行く態の男らしさ、鎗の穗先の立並ぶは、佃島の朝景色かとも思はれて、帆柱の林を兩國橋の上に見けり。

頓て泉岳寺も近うなりぬ。高輪の海晴れて、万波熨すが如く平かに、さし昇る旭日曈々として水を彩り、鵆の飛び立つは引揚げを喜ぶか、滿城の人は恰も狂するが如くありき。

高輪の出口に今朝咲きし二枝の花は、これお粂お琴が義士の泉岳寺へ引揚ぐるを、遠く打眺め居るなりけり。竪やの字の帶、御殿風の髪風俗、誰が目にもお屋敷の庭に芽生えの名木と、銘をも打つべき身に

て、仲間もつれず小者も無く、伸び上り伸び上りて、嬉しげに物見する樣の怪しきを、通りがゝりの人々足を留めて睨みぬ。

其十二

あるに甲斐無き身と思ひながらも、浮世にあれば憂き事に責められ、て涙に袖を干しあへぬ人ぞ悲しき、別けて女性の身は、粉膩のたしなみありて、紅よ化粧よと娑婆を飾り、世間を躰よく包み、枯木に色香を添へつゝも、稻舟の招く方に漕ぐことの口惜しさ。

原宗右衛門の娘お琴は、親に離れ夫に別れて、今は從ふべき人も無く、盛りの花を無殘や、頭ごぼと剃りこぼちて、墨染の衣に昨日の色香を包むめり。

お粂は固より埋木の、其儘朽ち果つべき身を、亡くなりし夫に操立てゝ、吉良家へ奉公に住み込み、首尾克義士に本懷を遂げさせて、それよりは浮世に用なしと諦め、これも優しき尼となり、圓頂白衣の垢無き境界を樂しみて、念佛修行に餘念無し。

一所不住の僧ならバ兎も角、形ばかりとは云へ、乾坤の間に結べる草の庵ありては、夜半の嵐に袖濡らすこともあらで、唯一念に佛を信じ、花を供じて、過ぎ行く月日を送りつゝも、なほ待たるゝは義士の消息なり。

世に恐ろしき大罪を犯せる夫すらも、家に待ち居る妻の心にありては、一日も早く牢屋を出でよかしと、

待詫びける甲斐も無く、出家の今もなほ戀ひしき矢間が、父宗右衛門と諸共に、泉岳寺に於て四十七士殘らずの切腹、モ一度逢うてと思ひし綱も斷れ、お琴は漕ぎ行く船に離れて、沙上に足摺する程の悲しさ。其日初めて罪も無い神や佛を恨んで、聞えませぬと泣く心の不愍さよ。

斯くなりては愈々味氣無き浮世を觀じて、俗を慕ふ念は露しも無く、頭を圓め、白衣を着け、腰法衣を纏ふては、見榮も飾りも無くなりて、年數も積れ、皺の波も寄れ、化粧て見すべき男も無しと、たゞ後生の事を樂みけり。

閼伽桶の清き水を汲みては、眞如實相の月影も宿れかしと願ひ、花を佛壇に手向けては、天より種々の花も降れよと望み、偏に我が住む庵を常寂の光土に見て、浮世の風へ一切飛んで來な、墨田の土手の塵一本、この竹椽には入れまじきぞと、精進退轉なし。春は鄙ながらも田を温める風の、花を吹いて香を窓に送り、夏木立の清涼、水も氷にやならむ、秋は虫の音に哀れを覺えて、昔時の夢に涙を浮べ、寒月枯木に冴ゆる夜は、思はず書寫の筆を捨てゝ、清光卒塔婆を照らすを拜む。あァ有難き世や、樂しき娑婆や、俗にありて他人をも神をも怨みたりし煩惱は、實に意馬心猿のうたてき心にてありしと、今は珠數もて肩を拂ふこと屢々なり。

茲に埋もれて幾歲か過ぎけん。訪ふ人も無き柴の戸、水鷄にのみ欺かれしこの庵に、尋ね來給ひて、妾等が素性を問はせ給ふ御身は、如何なる因緣のある人やら、前生は必ずしも一河の流れを汲みける中に

やわりなん、興も無き長談義は比丘尼が馴れたる口の端とのみ思ひ給ふな、されば御身がいたく怪しみおはする掌裏の刀瘡も、今の話にて大方は察し給ひけん、固よりして浮いて尼となりし身ならバ、經も讀まず、佛も念せず、氣儘氣隨に奉加しても世を渡るべきに、嬉しき世の中とて、志ある人は我と足を運びつゝ、喜捨し給ふこと、これ皆大石殿が餘徳、人間としてありたきは誠なり。アレあれを見給へ、梅は盛りに咲きたり、咲くまでの辛苦を如何に思ひ給ふぞ。邪魔する雪に枝を折られ、雨風に吹き曝されて、世間を狹め、人に疎まれ、結句花と咲いたる今日の譽は、これに優る草木ありとも聞かず。武士の心懸けはこれ、婦女の手本はこれ、美くしい梅の花では御座りませぬかと、お粂比丘尼は聲麗はしく物語りぬ。男は始終を聞き畢り、膝を叩いて感心し。あア左樣な御身分の方々なるか、さりとは知らで先刻よりの無禮、平に御免下さるべし、我もお目付の役を勤めながら、斯かる名高きお兩方を今日の今まで存ぜざりしは迂濶千万、笑ふてばし下さるな、してまた御菩提所へは折節御墓參なされますかと問へば、比丘尼は爪繰る念珠を止め。はい、殿樣の御命日をはじめ、御家來衆の命日には何日も妾が參ります、これ御覽下さいませ、殿樣はじめ御家中衆の御位牌を斯く吊うて置きますと、紙門を開けて佛壇を見すれバ、まこと香花は新らしく、常燈微に煤びたる過去帳を照しぬ。

男は四邊を眺め居けるが、弗と片脇に立て懸けある短刀に目をつけ。これ、これは、何で御座る、出家の御身に不似合なと、咎むる如く尋ぬれば、比丘尼は側のお琴を指し。それその尼に問ふて見給へ、妾

は確とは知らざれど矢間殿が遺物とやら、世を捨てし身とは云ふもの丶、夫を戀はざる妻やあらむ、深く問ふて罪を作らせ給ふなと、云ひつ丶稱名申しけり。

いざお暇と立出る男、送り出す二人の比丘尼を後に見て、香に迷ふて行く田の畔に、人知らぬこぼれ梅二輪、これも渠の身に似たる花と、神妙に拾ふて懷紙に納め、家に歸りて世の人に吹聽しけるに、人は一代にして名は末世に高く。伽羅は香あるが爲めに挫けても、消えぬ薫りの今に殘りぬ。

◉神田七不思議

西窓に映る芭蕉葉の影法師の外には、語らふ友も無き、六疊の一間は我住む本城にして、青史黄籍四邊に散りて、さながら戰國割據の世に似たるも、主人元來懶惰なれば、洒掃の責を盡さず、首を塵埃の裏に埋めて、想を千古の遠きに馳せ、靜座書を讀む、時に蝶あり栩々として几邊に飛び來れば、身は早くも莊子の夢と化して、暫らく我あるを知らず、忽ち後邊の障子を容捨もなく、瓦落裡と開く者あるに驚き、誰何すれば、見も馴れぬ貸本屋の草双紙四五冊を手にして入り來る樣の可笑しさに、眠を覺してそ

の双紙手にとり上げ、表紙を開けば、これは如何、世に和印とかいふ淫書なるに、怫として大喝一聲この本何ぢやと睨めつくれば、渠一向平氣な顔して、へゝゝ浮世は萬事お色氣ですと、取合ぬ商賣氣に呆れかへりて双紙を戸外へ投げつけ、用事は無いと邪慳に云へば、怫となさるは未だお若いと、冷笑て座敷を立出でまた、隣座敷に入りて三國志の御用は無いかと廻り歩くはこれ神田七不思議の中の一つなり、それに未だ〳〵可笑しきは、近邊の下宿屋に居る下婢、白晝の間は垢つきし衣着て、髮さへ亂れし儘にとりあげぬに、はや黄昏ともなれば、夜騒ぐ蝙蝠の如く、髮梳り衣紋つくろひ、紅を濃くさし、厚化粧する有様は、百鬼夜行の繪卷物の首座をも占むべく、思はれて怪しくも可笑しげなるが、夕餐の膳を座敷〳〵に持運び、媚を賣り世辭をふり撒きて、ポッと出の田舎書生にお芋を驕らす事、近頃大分火の手をあぐ、これも不思議中の一つに算へてよし、頓て夜にも入りければお茶の水橋のたもとに行き涼しき風に吹れんものと、未だ寒からぬ此頃とて、八日ばかりの月代清きを幸ひ橋の上に至りて、上と下とを見渡せば、月光に向ふ對岸は青草の葉末に露置きてきら〳〵と光る色面白く、一方の崕は、陰になりて隈どりたる、異國の繪とも見ゆ、聖堂の森に寢鳥の聲も聞かねど、長き土塀のうね〳〵見るは、蒼龍臥すとも思はれて、師となるべき人々の、物學びする行末の目出度をも思ひやらるれ。お茶の水白く見て、漕ぐ舟黒く木の葉浮ぶ如し、折ふし棹を下しては、澄む月の影を亂して江戸川の方へとのぼりぬ。この景色詩人の眼にはいと興あるべきも、住む家近き名所とて、左迄にも思はず、歩みをかへして小川

町に出れば、此處は書生の蜂の巢とて、むら〳〵と出て來る兵子帶黨、袖腕にいたる先生あれば、雲耶山耶譯の判らぬ豪傑もあり、先づ大道の古本屋大抵は見盡し、雜誌屋繪草紙屋と眼を配りて進み行くに只ある牛肉屋の二階に方り、皿を叩きてオッペケ節を唄ふ殿方あり、我も以前にハこの黨なりしと、そゞろに昔の戀しうて、其家に入るに、胡座組みて法理を談ずる民法家あれば、半熟の肉を割いて衛生を論じたまふ前期醫者どの、口角泡を吹き過して、隣の職人に談じ込まれ、失敬の捨臺詞に情なくも敵に後背を見せたまふあり、實にや浮世は千差萬別、この二階の中に一つの世界を造れるは、妙、憶ふに氣の利いた小説家などが、若し玆に女中となつて半月も入り込まば、人間運命の説明所か、トンだ妙な趣向の湧く事は澤なるべしと、酒呑まぬ身の餒ゆるを待つ間の退屈さに、また家の樣子を熟々見れバ、梯子の上り口に、一脚の床几ありて煙草盆と朱羅宇の煙管とを備ふ、床几に女中四五人、腰うちかけて煙吹いて居る處へ、上り來し三人連の書生あり、女中は顏見るや、喫つた煙草をポンと投いて、佐藤さん大分、お見限りですねと肩頭を叩けば、來られない譯があるんだと、啣へた紙卷煙草の灰を拂ひて、わが傍に陣取りしにぞ、目も放さずその打扮を觀察すれば、蒙つた黒の山高を脇に措て、コウト何にしやうか、ロースで櫻田が宜からう、自轉車は廻り過る、キリンは好かんとした處で、花は櫻田人は麥酒、お春さん、早くして頂戴よと、自慢らしく指環を隣客へ吹聽する工合、これが書生とは、情な過ぎて涙が溢れる、着たる衣裳は、赤柄の唐棧縞の袷に白ッぽい艶消し双子の羽織を着流がし、皮色博多の帶締め

しは、何う見ても鈍帳の申上げますの種類なるべし、女中は梯子を輕業のやうに登り來て、お待遠さまと、盃盤を置いて、貴君大層お痩せなすつて。さうさ痩せる譯があるからです。譯々ッて先刻からおつしやいますがタヾは聞きませんよ。聞いて呉れなきやア察して貰ひたいねとニッタリと笑ふ、女中も一つ酌をして床几に戻る時、奥の方から出て來し書生、ふら〳〵する千鳥足を踏みしめ、床几の前に來て女中に串戯を云へば、一喫召上れと喫つけ煙草を出す樣は、色町の格子に縋る如し、これもまた七不思議の一つなり、後其家を立出で、小川亭の女義太夫を聽きに這入込みし大半の書生は、いづれも樂屋覗きの方にして、惡口利くを得意と思へり、先づ樂屋口の梯子の際に居る洗ひ張せる太織の袷着たる男、鳥打帽子を目深にかぶりて、欄干に身を寄せ、義太夫聽くともなく失神するところへ、前座を勤める義太夫娘、眞暗な物の蔭より伊藤さんと呼ぶ、梯子口の書生、おうと返事して座を立ち、こそ〳〵と耳打して、笑つたり囁いたり、兎角する間に中入ともなれば、樂屋より二三人の女義太夫語り出て來て、例の書生に一禮すれば、書生は菓子賣を呼び寄せ、娘共に好む菓子を取らして、己れ懷中より錢とり出し拂ひを濟まして後、樂屋へ入りてべちやくちやと饒舌くる中、また三四人の書生交りて、さも睦まし氣に語り合ふハ、如何なる趣旨か、これも不思議の一つなり、寄席はねたれバ、家に歸らんと急ぐに、戸田家の前に、三人の書生往來に立跨りて用捨もなき放尿、無禮な奴等と思へバ、行き過ぎながら振顧るに、巡査なんか構ふものか、咎め立てすると法律でいぢめてやる、法ハ死物だそれを活用するハ腕にあり、鷺

を烏と云ひくるめても法をくゞれバいゝではないか、と云ふのを聞いて仰天し、さて〳〵妙な事を聞くものかな、法律を學ぶハ詐僞取財を巧手にやる爲めでもあるまいに、馬を指して鹿といふを、腕がいゝとハ、これも一つの不思議なり、夜も更けたれバ、足早に行かんとするに、辻待の車夫ッと出て、旦那北廓へ參りませうと跟て來る、宅ハ近所と挨拶すれバ、天窓を掻いて引ッ込む、總じて書生が北の方向に足を運ばすれバ、屹度北廓と跟け來ること、神田の車夫の通例なり、これまた不思議といふの外なし、漸うにして家に歸れバ、家人皆臥せりしに、隣家の二階にガヤ〳〵と人聲して、ヤクだヒカだと爭ふハ、まがひも無き花合戰、斯くして二時も過ぎ、三時にも垂んたるに、未だ爭ひの止まざれバ、われハ疲れて熟睡みぬ、夜ハはや明けて七時に近く、朝日麗かに東窓を射りて、心地いと爽快しきに、臥房を出でゝ、朝餐濟まし、文讀み行くに、十時を過ぎたり、されども花好きの書生ハ、未だに眠りを覺さぬハ、何の時に學問する氣ぞ、これも不思議の一つなるべし、その他にも女學生の往來、下宿破戸漢等、數々の不思議あれども煩ハしけれバ畧す

◉新奥の細道

森羅萬象形あるもの悉く畫なり、されば窓外風に亂るゝの竹は、能く描法に適ふて介字の體あれば、階前雨に浴するの青山は、まさに米點の趣あるべし、山の青き水の白き一つとして畫に入らざるものなく、臺閣器財みな夫れなり、されど其景其物も處によりて變じ、國によりて異なるべければ、之を驅りて韻あり致ある繪畫となさんには、見聞を博めて餘師を求めざれば妙想を構ふること難し、故人破笠青鞋よく旅の憂苦を嘗めて、ちら〳〵と散る山櫻に腸をなぐり、秋雨の物淋しさに心を痛めたるは醉狂に似たれど、も味はまさに玆なるべし、外國はいざ知らず、日本廣しといへども八十餘州汽車汽船に縮めなば、一九の手鞠ともなるべけれど、苦無くして得たる旅の眺めは樂もまた淡く、廣重の五十三次、今初めて有がたく東海道の價値それこゝの事なり、五十年は愚ろか二十年も前までは、初旅する者先づ草鞋喰に足を痛めて松青き一里塚の邊に隣村遠きを怨みたる奥州も、今は足を汽車の外に伸ばさねば旅のやうなる心地せぬことゝはなりぬ、元祿のむかし芭蕉が奥の細道をたどりし頃は、路いと難義なるが、仙臺に畫工加左衛門と云ふ知る人ありてそれが所々の古跡を畫にして贈れるより、その畫圖にまかせて尋ね歩きたること見えたり、其時の様今の旅する人に見せてやりたし

二十三年四月二十四日、友人石橋思案と共に、故郷米澤に歸り、居ること十日あまり、五月九日家内の

者に別を告げ二ッ橋の宅を出づるに、親しき友なる落合琴花、遠藤山樓、實兄治兵衛などの人々わが後影を見送らるゝに、行道すゝまねど町はづれにて厚意を謝す、さて陸前の松島より都の方をこゝろざし、其日は上の山といふに泊る、此處にはいで湯ありていと賑やかなり、翌日は山形を過ぎ關山といふに至るに路惡しければ車斷りてとぼ〳〵と歩み行くに兎角して山上の隧道に着きぬ、此處は山形より宮城に越ゆる山道にて洞門を堺にして兩縣分轄の標木あり、それよりは下り路なれど、山嶮しく石高ければ、穿き慣れぬ草鞋に歩み心地惡しく汗を杖にたどり、脚下に水音遠く聞えて弗と膽を冷やし、襦袢の裏に寒氣ぞく〳〵と立ちて恐ろし、洞門口の茶屋にて聞きしに今宵宿るべき作並といふ温泉場は三里に近しと聞きしが最早それ程の路は歩みたる筈なるに、來る人に問へばなほ二里ありと答ふ、日は西山に傾きて端山の嶺を照せども麓の方漸うに黑み亘りて溪川の流れ樹の間に白し、なほ進むにほろ〳〵啼きの鶯の聲面しろく谷陰に聞えて、茅葺の屋根一ッちらと木立の隙より洩れたり、近づけば樵夫の家にやあらんいとあやしげなる住居なれば、其處をうち過ぎて板橋を渡り流れに添ふて下るに川水俄かに濁りて幾箇ともなき薪の水のまに〳〵流れ來りぬ、二人は立ち止りて眺むるに景色ことによろしく山秀で溪深く巖に碎けて球と散る波の花は足もと暗きもそれと白く見えて泡となり流るゝさま眺め一しほなり前林に燭點せる躑躅の花手折りて出で來たる男あり、都にては見もなれざる風俗の怪しげなれど路を問へば慇懃に答ふ、行先同じければ男と共に連れ立ちてたどり行くに、言語動作質朴にして仁に近し、溪川

に薪流るゝ何の故ぞと聞くに水を筏として仙臺に送るなりといふ、山路にもまた重寶なる物ありと戯れ歩くうち、何時しか湯元に着きたり、岩松といふに宿かりて夕餐も濟まし浴みすれば、今日の疲れ頓に癒え前峯後溪の雲はやく眠りて人意穩かなる處何よりの眺めと枕に筧の水音聞きてついとろ〳〵と一夜を明しける

五月十一日、仙臺大町陸軍士官佐藤氏宅に泊り、此夜氏と共に揖翠館に飲む、館は仙臺城と對して、廣瀨川の激流その下を流れ景色ことに好し、十二日榴ヶ岡に遊ぶ此處は元祿の頃國主伊達綱村がこの地を開きし時釋迦堂を建てしより俗に地名を釋迦堂と呼ぶ、園中櫻多く樹ハ悉く絲輪櫻にして枝垂れなり古苔蒼々たる孰れも數百年を經たるものにして上野向島には見べくもあらず、その西に天滿天神の社あり東は宮城野の曠野を抱えて菜の花美くしく眺めよしされど古歌に殘る枯野の萩も年とゝもに苅られて今は服紗に俤を留むるのみなり十三日鹽竈より小舟を艤して松島にいたる此日天曇りたれバ如何やと氣遣ひしが、ぽつ〳〵と降り來し雨も暫時にて霽れ霞のうちより島一ッづゝ現れ出づるに初めは二ッ三ッと算へ抔して舟を行るに淸き波を碎きて舟端に寄る鷗あり、それ捕へんとて船頭に叱られ、また五ッ六ッと手帳に書き留め島の由來など聞けば孰れもあり難し、折々に水に躍るもの何やと問へバぼらなりと答ふ、岸に上りて觀月樓といふに憩ひ、島傳ひに五太堂にいたる、堂古く松綠に煙波岩を洗ふて雪と散るさま得もいはれぬ景色なり、此處に二ッの短橋あり透し橋といひ、此方の島より彼方へ架せるものにて

橋板の間を四五寸づゝ透しあれば歩みながら橋下千仭の絶壁を見るべし、其處を出でゝ波止場を右に觀瀾亭の下に至るに、亭は水に臨み丘に據りて建て組竹の垣根いと風雅なり、それに沿ふて漁家二ッ三ッ茅葺の屋根黒む炊く煙立ちのぼるさまもよし、僧西行が戻り松は今は枯れて無けれど、地藏堂のほとりより水際を通りて御嶋に至るに渡月橋といへる橋あり瀾干なければ危げなれど透し橋とは比べにもならず、御島はもと雄島といひて、女人禁制なりしを加賀千代女渡り初めてより男女の區別無くなりぬ、念佛堂、薬師堂ありまた俳人の石碑多し、古松白沙三百の群島一々名あれども記さず、新富山に登れは眺望殊に好し、藻鹽焚く煙は彼方の濱邊に長く、青螺を疊む島々は漁舟來りて碁盤の石を算ふるなるべし、歸路瑞巖寺に至る、仁明帝承和年間開く處にして今の寺院は慶長年間伊達政宗の改造するものなりと、この寺うしろに青山ありて蒼瀛を前に湛え境幽にして趣あり門傍にある岩洞を法身窟また無相窟といふその左右に畫家小池曲江が建てたる唐吳道子作摸造の觀音の石碑二ッあり、右にあるもの二丈餘の大石にして左は一丈二三尺あり、ともに觀音の立像にして落款は曲江平維則寫と書き三經天覽の書印を用ゆ曲江は陸前鹽竈の人畫を能くす、曾て京都に遊び岸々駒等と交り才名高き人なり、今左方の碑面に下の如き文あり、唐吳道子作、中華南海普陀山立石之尊像摹造而建於東海松島山瑞巖寺無相窟之傍寛政庚申夏五月作曲江池維則謹摸寫、とあり、此日鹽竈に歸り鹽竈神社及び神竈社に詣す、太田樓に宿かりて翌朝日の出の景色を眺めたるが、これを何よりの土産として十四日午前七時其處よりの汽車にうち乘り

目出度歸京したるが、山に靈あるか水に神あるか、或は颯々の松風耳に殘り渺々たる波濤眼にちらつきて、忘れ難ければ後の祟りを畏れ此文を草し、畫に代へて聊か青山と白水とに酬ゆるの微意とすと云爾

◉玉川河童泳記

赤髯が日本の土地へ渡つて來て、避暑といふ一つの變な風俗を移し植ゑてからは、東京の紳士夏分になると大磯鎌倉小田原などへ我も〱と出かけ、海に浴して日にやけ、寢轉び食ひ過ぎて胃病になり、秋風萩の下葉に音信るゝ頃迄、に百千の黄白を抛て買ひ得たるものはこれ「母上只今歸りました」「おう歸つたかそして大磯のお土産は」「別に土産はムいませんがこれを見て下さい」と誇顏して衣をまくり午蒡のやうな黒い腕を出し見せれば「おやお前酷くお色が黒くなつたぢやないか、恰度出山のお釋迦

様のやうだ」「ハヽヽ身體から後光でも射しますか、これがそれ三週間に遣つた金の光で御座います」と、避暑に行て色の黑くならないものはまるで當世の紳士と云はれぬまでの成行相場、さる程に相州の海面には、好男美女の首が幾箇も波に浮かんで北條沒落の有樣を現はし、汀の岩上に龜が甲を干すでなくて、大森細工の膃肭臍が轉がつて居るやうな、洋服打扮の貴婦人居ませり、炎天に背を曝してそれで避暑になる事なら魯西亞の人が濠洲へでも避暑に行きさうなものなれど、左樣した沙汰も聞かざるは彼國我の愚に及ばぬものと見える、不平序に云つて置んに、別莊の濫用は拙者甚だ喜ばぬ所だ、近頃の新聞を御覽なすつても判るであらう、何々伯だの某々侯なぞヽ云はるヽ大政事家が、一朝國事に小六ヶ敷ことがあれば云ひ譯に一寸口を出し、その意見が旨く行かぬ時二言目には別莊行き、我不關焉と濟し込んで松青く水白きの邊、愛妾携帶の屈原を氣取り、別莊の門前に虚病の申譯仍如件との張出し手におへぬものなり、それのみならず御召があつても仙人磯上に釣して評議の間に合はず、何日も遲かつた由良之助を極めるはその罪何にかある、何でもない別莊の科なり、底で拙者は別莊引ッたくり法案なる者を次の議會に提出せんと思ふ、閑話休題茲に銀坐の眞ッ只中に太郎坊に桃堂といふ二偏人あり、毎日某社の編輯局に筆を舐つて、午后三時頃になれば文字を考へる振して內證で居眠りもしかね間敷き呑ン氣な人物、何事によらず他人の眞似をする事を嫌ひて失敗をとること多々、何か今度も他人のせぬ遊びして半日を送らんものと、一切万端紳士風を鵜の毛程も吹かせず、昨日の朝未だ夜の明けぬを幸ひ、

二人名を駈落にかゝり桃堂は洋服に山高、太郎坊は紺飛白に藍棒の古袴へ草鞋を着け。新橋より車を飛ばし品川の入口にて下り、徒歩して鮫洲に至れる頃は海面白み渡りて眞帆片帆の船算へらるゝやうになりぬ。鈴が森に驛路の馬の鈴の音も聞えず松の下露に袖うち濡らしながら濱邊の石に腰かけて海上遙かに見渡せば、白ペンキの剝げしやうなる雲次第に消えて茜さす雲の破れ目より、天道樣酒に酔つてかひよろ〳〵とさし昇る、波は一面硝子の如く照り渡りて景色の好き形容するに辭なし、大森の入口には魚市ありてねぢり額卷せし男なんど勇ましく犇めき合へり、腹空りたれば飯食ふ家もやと四邊を見れど一膳飯一錢と筆太に障子へ書ける家ならで無きに、二人とも業を煎やして、よし〳〵池上まで辛抱すべしと空腹を抱へてやがて池上山の裏手へ出でぬ、朝靄松蔭に晴れやらずして雲岫を出るの趣あるに、青田の稻に風そよ〳〵と見えて心地好きまゝ光明舘を餘所に見て山へ登れば、境内よく掃ひ淨めて地に帚の痕波の形を印し、本堂に看經の聲聞へて床しさ勿躰なさに口を嗽ぎねむごろに參詣しぬ

七堂伽籃朝靄につゝまれて確とは判かぬ木下蔭を歩み行けば、衣したゝかに濕ひたれど夜露ならねば心地いと清々しぬ、ぐる〳〵と山の中をめぐり苔蒸したる塚などうち叩きては人の哀れを語り合ひつゝ仁王門に憩ふ、深草の元政上人が身延紀行に「やつがれは一日先だちて池上へ行てこゝろしづかに法文など尋ねていたうふけて書院なる所に臥ぬ夜靜に心すみてしばしねられねば枕をさゝへて人世少ニ智音一、追レ師斯再尋、今宵池上月、依レ舊照ニ天心一」とあり、洵に都下に得難きの靈地なり、漸う門前に出れば

檐を並べし茶店あり、今し起き出たりと覺しくていづれ寢氣の姫百合の花、帶しだらなく締めたる下婢なんど箒持てるもあれば釆配かくるもあり、近江屋といふ即席料理屋へ入り何ぞあるかと音信へば、いらつしやいませ能うお出でなさいましたが料理は少々隙どりますそれでも宜しくば先づ此方へと二階へ案内するに、心づいて時計を見れば未だ七時には四十分も間のある程の早さ、此分では即席料理も急には間に合ふまいと、弗と階の下を覗けば蚊帳の手を一つ外せる中に五つ六つばかりの太肉の男の兒が盥煎餅攫めるまゝ餘念無く眠れる樣の愛らしさ、我等も寢くなりたれば肱枕して池上山の景色を眺め應擧が描いた畵のやうだと賞むれば桃堂早くも熟睡して鼾雷の如きに引かれ我もとろ／＼まどろみぬ、眼を覺ませば清風徐に來たりて單衣にては寒き位なり、緩々と酒を呑み腹をもこしらへて其家を立出で、腕車雇ひて新田の社へ急がす、新田の社は人も知る義興公を祀れる所にして祠古びたれど神寂びてたうとし、それより十騎の社に詣で、矢口渡に出でたり、この川は玉川の裾なれども日頃の雨に水濁りて甚だ清からねど喉渇きたれば手もて掬ふて呑む、渡口の小砂利に尻おちつけて渡りの舟を呼べど、船頭煙長閑に吹いて容易來ぬに癪に障るとて、別に傳馬舟を雇ひ直に川崎に行かんとぞ思ひ、堤上の茶屋へ入りて舟を雇ひ、やがて小舟に乘りうつる時後ろに喇叭の響す、それよ我が船を新田義興公と見誤り竹澤右京が詐討するぞ頓兵衛が娘お舟ハ居らぬかと顧向けバ、四五十人の陸軍兵卒渡場の邊にランドセイを下して水練を試むるなり、あら面白やと立たり居たりうち騷げバ、舟ゆら／＼と搖めくに座つて御座れ

と船頭に叱られて二人閉口しぬ、川ハ淺瀬と聞いて急に泳ぎたくなり、衣を脱て飛び込めバ桃堂も續いて這入り泳いでハ舟に遲れ水を潜つてハ前に立つを恰度河童の水泳ぎのやうですと船頭惡口を云ふ、興あるに腹も立てずこれ船頭この淺い川で左中將義興殿ハよく死なれたものだなと問へバ、昔しハモッと深う御座いましたらう淵ハ瀬と變る世の中で御座います。はゝゝ違ひないお舟に溺れた中將だものと笑ふ、川の深い所に至れバ舷に上つて背を天日に曝すなど何うしても生蕃中の人物だと桃堂我を冷評すをまた味噌を上げるかと突ッ込む、談話途切れて想起す百年ばかり前の事平賀源内といふ男下宿屋の拂ひに困り、この矢口の渡へ駈落し荒村の月夜遠砧を聞て一盃を傾けながら、神靈矢口渡といふ義太夫本を考へ出し、當時才名を一世に鳴らせりと聞くが二人が今日の遊び事源内程の錢儲けが出來ずとも何か面白い新聞の種でも拾ひたいものと、商賣氣を出してハ景色の好いのも目に入らず、何時しか煉瓦製造所の前をも過ぎて川崎の土手へ着く、土手を上れバ近頃出來し海水の湯屋あり我友某子大師河原の平間寺に浮世を感ぜし頃、この湯屋の板の間に座禪を組みしことありと聞けバ、寄らまく欲したれど汽車の時間に急き立られて無沙汰し、十一時四十六分笛の音に五尺の身躰を任して搖られ揉まれて東京に歸へり、また編輯局に筆を舐る、知らず今宵の夢蝶となつて蘆洲白沙の邊に到るや否や

◉故郷の錦繪

石上に詩を題して綠苔を拂ふの風流無くとも、林間酒を溫めて紅葉を焚く位の藝は誰でも出來るぞと、またしても平生の步き道樂、人每に一つの癖はあるものを我にゆるせ紅葉狩と、先づ日光へ足を向けんとせしが、いやいや二荒山は霜未だ淺くして楓葉錦を懸くるの期は早かり、秋風ぞ吹く白河より北の方は寒さも一入强うして塩原信夫の山々なんどこそ眺望大方好かんめれと、二日の休暇を幸ひ上野より福島までの切符を買ひ汽車に乘りぬ、宇都宮那須野も過ぎて一步々々づゝ我が故鄕に近くなることの嬉しさに其處邊の景色も眼に入らず、福島より故鄕へは山路十三里の間べタ一面の紅葉眺めんものと、汽車を下るや車急がして飯坂といふ溫泉場に參る、此處岩代信夫郡の內にありて福島より二里三十町、戶數一千ばかりの一村、山に據り水に臨みて建てつらねたる宿屋堀江といふに宿假りて四面の景色をうち眺むるに、容色美き尼君の昨日今日剃刀あてたるやうに翠々せる向ふの山を、鳴虫愛宕となん呼びて、麓の水淸く砂白き流れを剃髮川とぞいふ、下の方に鐵の釣橋架りて橋向ふを湯の村と稱す、日暮頃にもなれば一村共同の外湯へ、嬌喃しき女郎が前懸帶のだらしなき樣して通ふに、頰冠りせる若者が小唄唸りて來るも可笑ければ、稍々暫らくは欄干に凭りて往還の方のみ熟視しが、今宵は陰曆九月十五夜明月川向ふの小山より昇りて峯の松を黑めては、前の溪河に白銀を流す眺め得も云はれぬ絕景なれども、明

日はまた九里十里行かねばならぬ旅人の、夜を更かさんは早立の邪魔にもならんかと、障子に映つる松の影を淋しき宿の友としてとろ〳〵と熟睡めば、山青く小川の流れ白き處に茅葺の屋根幾何もありて、古井戸の端に群れ居る子供木攀りする赤ン坊あるに、アレ危險いと駈け寄つて引き下せば、ハテ見たことのある兒ぢやと首を傾くる時、叔父樣と後邊に呼ぶ聲訝かしと振顧けば、去年の歸省に見知りたる兄御が惣領、おう珍らしかりしと小戻りするに、羞かしいと見えて夕顏棚の蔭に隱れ青葉の隙から目を出して覗きぬ、頓て我家へ立歸へれば、ツレ歸つたと家内がまるで鼎の湧くと同じこと、草鞋の紐を解くやら足の泥を洗ひ落して呉れるやら、漸う椽端へ上れば、ノタ〳〵と我が膝に這ふて來る男の兒あり、見ればこれも去年の春姉御が産の紐解いて産みたる一子、その折我と石橋思案と名を春藏とつけてやりしに斯う大きうなつたかと引寄せて喜ぶ刹那、耳元にまたも我を呼ぶ聲驚いて眼を覺せば、今見し夢は痕無く消えて村の者が朝湯に通ふ鼻唄の聲したるなり、兎角して車雇ふて宿屋を立出で隣村まで來りしに、村の小兒が田の畔にツッと立ちて會釋したは、村役人とでも思ひ誤りての禮儀なるべし、石高道に腕車の輪を噛まれて覆へらんとすること幾度か、漸う關場といふ村に着けば、此處よりは本街道とて道幅も廣くなり、山の景色も眼界一際改まりぬ、されども道は山路にて次第に爪先登りなれば車夫の骨折り一入に思はれて乘りたる客も快い心地はせず、下りやうかと云へば旦那此處邊を骨折場所と云つてはこの栗子山は通られませぬと誇る、左樣かそれは豪氣だと賞めてやる中、我が乘りし車夫小石に躓いて生爪を

剝がし血は流れて地を染むるに、驚いて車を飛び下り、ハンケチにて結ひやるに、旦那あり難う御座いますと鬼のやうな黒男が露の清げなる涙を出すに、痛むかと問へば、大丈夫で御座いますとまたも車を挽き出したり、崖に沿ふて石橋を渡り溪河の水雪と碎けて流れ行くを横に見やり、隧道一ッ過ぐれば山の形も異なりて紅葉次第に色づくに、嬉しさに堪へずして快哉々々と呼ぶ聲頻なり、旦那この邊は未だ紅葉には少と早いが二ッ小屋といふ隧道より先は好う御座いますといふ、左樣かと問ひ答へする間に大瀧村へ着く、車を斷りとぼ／＼と歩み行きぬ

山深くなるにつれて氣候寒く霜重く紅葉なか／＼に見事なれど、道の嶮岨に汗を絞り漸う二つ小屋へ着き、茶屋の床几に腰打かけて暫時憇ひ清水に喉をうるほし麓の方を眺むれば男波のやうに重なる山々、遠きものは霞にかゝりて淡墨もて畫ける如く、近きは錦の幕を張りて花に優る幾層倍、此處より草鞋穿きて三町二十間餘の隧道を越え行けば紅葉の好きことはまた一入にて黄める枝は黄金咲かせし花咲せ老爺が技か、紅きものは朝比奈まつた金時が顏よりも赤く、花燃えんと欲すと毛唐人が春の山を形容せしは虛の皮にて秋の山こそ火も出んばかりの美くしさ、それも十三里が間の紅葉なれば、何處向いても錦の中、笠伏せたやうな山もあるに削りなせる如き岩石、珠簾を懸けし瀧の水は碎けて玉を轉ばせば、斷崖に架けたる危うげなる木橋渡る者も畫中の人なり、此處を畫工に描かしたならとそろ／＼と歩くにこれも梢を染めなしたる林の中より麓を流るゝ川を眺めて一心に圖を作る人あり、傍へ寄ッてソッと覗けば

其人われに一禮してまたもや圖どりにかゝるを、大層新圖が出來ましたなとお愛相すればハイ私は西京西陣の者でおますがこの紅葉を織物の雛形にしやうと思ひますといふ、ソレは好い思ひつきですと別れてまたも錦の中を分け行けば、何とも云はれぬ心地快さに大平村といふに至る、茶屋に休みて澁茶を啜り、土橋渡りて登り行くにちよろ〳〵と淸らかなる谿水の山間を流るゝところに草を褥として村の婦人七八人若きも老たるも憩ひて握り飯を喰ふあり、蕈狩りかと問へば然なりと答ふ、なほ進むに荷車に炭幾駄かつけて夫婦して山坂を登るあり、空身ですら汗の流るゝ栗子峠の昇降にしかも五十貫百貫目の重荷つけて登る辛抱、斯くして得る所の錢十か二十に過ぎざるものを、さても世の財寶の尊やと、後邊より手傳ふてやれば嬉しがりて坂道一つ挽き越しぬ、岩間より湧き出づる淸き泉あれば召しませぬかといふ、頂戴せんと傍へ立てば車力の子の五つ六つばかりの男の兒が走つて來て杯を貸し與へぬ、その兒があまりに可愛らしければポッケットより餡パンとり出して與ふるに、親子三人に懇々と禮いはれ、却て氣の毒なれバ足早に通り過ぎ、漸う八町二間ある栗子隧道の東口に着きぬ、炬を點さゞれば暗うして通り難しと聞き、茶屋に就いて二本を購ひズボンを膝までまくり上げ仁田四郎が富士の拔穴といふ見榮にて進むに、岩を傳ひて滑り落つる涓滴の襟元にヒヤりとせるに驚き、炬を振り上げて洞内の模樣を打見やるに道幅四間ばかりもあるべし、滴り落つる雫は窪き處に溜りて泥は荷馬の蹄を沒す、氣候寒く道暗く炬照せどもたゞ僅に點せる人の身邊に輝くのみにて物凄きこと云はん方なし、後なる人は進

む者の聲を便り怖々歩みて行き逢ふ人の顏を見れば、白き顏は其色黄みて鬼かとも思はる、漸う中央まで行けば前の口も後の口も判たずなりぬ、處々に栗木の梁を渡して岩石の崩れ墜るを防ぎしはいと危うげに思はれ震身ひして足早に進むに、二十分ばかり過ぎ八丁二間餘の洞門を出たり出口には栗子隧道の石碑ありて有栖川宮の篆額あり、力餅賣る二間の茶屋あれど憩はずして下るにこの處より米澤まで五里の間は眞ッ下り道なれば駆けつ急ぎつ瞬く間に麓の村の瀧の澤へ着きぬ、車を雇ふてひたはしりに走らすれば頓て苅安てふ隧道と三ッ四ッの小村をも過ぎて、松川の流れ白く川原の柳風に戰ぐ彼方の里こそ忘れもせぬ故郷なりと喜び勇みてそれと車を急がしたり

故郷に飾る錦繪を、土產の印と寄り集りし小兒等に分けて遣れば、京の叔父御にこれ貰ふたと喜ぶ顏の罪の無さに、可愛い兒おやと腦天撫づれば、嬉しいやら珍らしいやら我が股下をくゞり拔け角兵衛獅子の眞似をしては已が姿を花と見て花に咲いたり咲かせたり庭前に下りては黃菊白菊の咲き溢るゝを拗つて見て、ソレ雪が降ると花を散らして喜ぶめり、頓て我が歸鄉しとの報知八方四方に行亘れば、嫁入したる姉も駆けて來、用達に出し兄も歸り、圍爐裡をぐるりと取卷きて、互に恙なきに喜び合ひ、談話は江戶の繁昌に移り淺草の塔凌雲閣近頃珍な出來事無いかと、百鎗蝟集する拙者が身邊、出來るだけの名所咄も聞かしてやりなるたけの喜びをも語れば、家內は一同和氣團々春の波の穩かなるにも似たりけり

斯くて談話は今宵秋の夜長の語り草として先づ亡き父母の墓參すべしと云へば兄御も共に行くと同ず

さらばとて出んとするに竹馬の友なる落合琴花我をも共にと、三人して東寺町なる菩提所に至る、日は西の山の端に傾きて暮雲蒼茫墓一ッづゝ黒み亘る中に隣家遠く萱草茂ければ虫さへ鳴き出でゝ心無き身にも哀れ知らるべき荒村の夕まぐれ、我ハ閼伽桶手に提げて車井戸より新しき水汲みとり、鳥にも花にも涙を濺ぎて回向仕果てつ、寺の向ひに我が甥あれバ誘引ふて佐氏泉に祝ひの酒を酌まんと急ぐ、路狭斜に入りて相生橋の邊に出づるに、松川の流れ白く白旗松原ハ薄墨一刷毛の霞に隠れて、吾妻嶽南に聳え、栗子山東に連り、煙を帯ぶる孤村の柳、風に戰ぎて秋を知らする、川水にハ紅葉流れて錦を懸けぬその川下に川狩する童子ハ竿を肩にし割出川の木橋渡りて市街の方へ急ぐさまハ、これや田舎の桃源なるべし、漸う佐氏泉へ着き花都といふ割烹店に入り、二階の廣間を同行四人にて專領し、湯に浴り茶を煎て茶人を氣取る欄干に凭りて四方を打眺むれバ宵闇ながらも千苅バかりの田を隔てゝ彼方に見ゆる鎮守の森あり、提灯點けて畦道通るハ螢火かとも思ハれて面白く、清き泉の湧き出づる堤の上を白鶴臺と云ふ、千歳經ぬべき松の嵐の颯々と音するハ流石に昔忍ばれて佐藤庄司が當時の事など想像られぬ、一体この佐氏泉ハ、壽永の晩年陸奥の豪士佐藤常信が住みにし屋敷跡にして、觀月臺庭園の樣など今に存れど、庄司が功蹟ハ何をか算へん二人ある子の嗣信ハ屋島の浦に征矢の的となりて仕ふる主に代れバ跡に殘りし忠信ハ吉野山に後殿して君が行衛も散る花の吹雪に迷ふ下道を容易落して振り上げし碁盤に譽を殘せしかど、親御の常信亂世に處して功も無く月雪花を友垣に結ぶ柴戸小柴垣華奢風流を事としては

たまさか近郷近在を狩鞍に踏み歩きしも國滅びて山河在り骨朽て荊草青し、此處もまた芭蕉が涙を落す所かと泣いたこと無き辨慶面の我輩も何うやら浮世が厭らしと腹に無く聖人ぶれば、マア一ッ呑むべしと琴花子杯を出す、よし〳〵と傾けて十六夜の月今や昇るかと待つ中に東の山の端明るくなりて蒔繪のやうな雲がたなびき朧月ちらりと鏡臺の上に懸りぬ、この鏡憂ひある美人の吐息に曇りてや今宵は何うやら玲瓏とせず、前の田の面に影を浸せど風が邪魔して圓くは見せず、たゞ金蛇のきら〳〵と走るのみ、月昇つて虫聲細く虫聲斷じて近所の村より笛の音聞えぬ誰が月に嘯くにやあらん、草を友なる片田舎にも斯かる風流はあるものを、兄御が不意氣な扱より銀波の谷子品川の竹子なんど呼ぶ歌妓を呼びて酒の座を持たせける、その風俗の異るもまた面白しと此地の名物甚句踊を所望すれば、畏り候と袖を飜へして踊る可笑さに腹を抱へて酒を湛え食を貪り山家の名物松蕈、鯉、小鳥、鮒などいづれも一種の風味あるを存分につめ込み興盡き酒冷え松風白露夜の更くるに及び醉歩踉々月を踏んで家に歸り翌々日故山の愛を割いて上京なしぬ

◉吉野初瀬花摺衣

年々に上野向島と同じ所の花見んも興なきわざなれバ、今年ハ吉野初瀬の櫻狩こそよかんめれと、尾崎紅葉が發企に一味して、連判に加はる面々にハ、西の京の住人巖谷漣を始めとし、江戸表にてハ江見水蔭中村花瘦と予の四人なり、旅の用意もはや整ひたれバいざやとて同行四人、四月十二日の一番汽車にうち乘り、新橋の停車場を立出でぬ、國の名も武藏相摸駿河遠江參河と遠かり行き、風物も自然と異なる程に、乘り詰めの長旅も厭きの來ぬこそ妙なれ、頓てハ雲の富士を車の廂に眺め、濱名の湖水を窓前に熨して、見る間に雨そぼ〳〵と降り出でたり、雨になりてより一入哀れげに見らるゝハ桶狹の古戰場ぞかし古りたる、松の樹の下に墓の物淋しく建ちあるさま抔、繪にしたらんにハ如何に趣あるべき、日暮るゝ頃尾州名古屋に着けバ、車をはしらして富澤町の旅籠屋志那忠に泊る、翌朝ハ雨も疾く霽れて青絹熨せし如き空に、汚点ほどの雲だに無ければ、一同喜び勇みて、京都なる巖谷漣の許へ柘植停車場にて落合ふべき電報を發し、車を熱田に急がしたり、名古屋の名物ハ名古屋帶に尾張太根ハ云ふも更なれど佛師の多きにハ驚きぬ、又車上にて弗と目につきしハ兩替屋の目票なり東京にてハ大抵分銅を看板にすれど此地にてハ寛永通寶の錢形を以てせり

熱田の宮に詣でしに、近き中に御遷宮あるべしとて作事を取急ぎ居る番匠ハいづれも、裝束を着けたり、

宮居は白木造りの質素を旨としたれば神代の古事も想ひ出でられてその尊さ云はん方なし、茅茨さらず柴椽けづらざるは聖代の德にして、儉の一字は實に國を興すの基礎なり、されば人にして若し奢侈に長ぜんか、その久しく榮えざるは火を睹るよりも明かなり、予今この宮に詣でしにあくまでも金碧を退けたる造り樣こそ搖き無き國の要ぞと自ら頭の垂るゝ心地ぞする、社内あちこちと巡拜して海岸に出で、此處より勢州通ひの汽船に乘りて午後一時頃四日市に着く、午餐喫べて汽車にうち乘り柘植驛に向ふ、途中關町に至れば名物の菓子關の戸〳〵と呼びて車の外を賣り歩く、關よりは山路なれば隧道も二つ三つあり、溪に架けたる鐵橋などありて、山の容水の色眺望頗る美くしく、關西の函嶺とも云ひつべし、柘植に着けば予等より前に巖谷漣畵工歌川國松と共に京都より來合はして二時間あまりを待詫びたり、先づ茶屋に打集りて一別以來の挨拶をなし、それより車を列ねて芭蕉翁が生地を尋ね、日闌くる頃伊賀上野へ着きぬ、宿を友生屋といふ、主人は風流の心得ある者と見えて翁が書ける色紙短册など數種を秘藏せり、山家の馳走にはかゝるものこそよからんめれとて予等が居間に懸けしを見るに、如何にも美事なるものなり、夜に入りて予は水蔭國松二子と共に夜芝居を見る、鄙びたるは一入の見物なりし

十四日朝早くより宿を立出でゝ城山に登り古城の趾をたづね、鍵屋の辻に至りて伊賀越復讐の古事を茶屋の老婆に問ひなどしつゝ、午後より大和の月の瀨に向ふ、四里許の道程なれど平地ならねば荷物を供なる男に負はせ名々身輕に打扮ち、溪流に沿ふて進むに丘に據り水に臨んで悉く梅林なり、未だ其村に至

らざるに、滿山花は散りたれども餘香なほ衣衫に薫ず、渡し場あれば向ふの岸に上りてなほ溪に沿ひ行くに見る限りの山は梅樹をもて充てり、想ふに春色三分の折には如何に美くしかりしならん、登ること七八町眺望頗る佳なる處鍋屋といふを宿として、各々日記など認め了り水色山光を集めて晩酌を試みし後、夢に羅浮仙に逢ふと見て一寝入に夜を明しぬ

十五日は月の瀬の宿を立出でゝ、桃が野、奥ケ原抔いふ小村を過ぎ柳生村にて午餐をしたゝめ、柳生山に登りて天の岩立神社の扉石と、柳生家の菩提所とを巡覽し、山駕籠を雇ひて笠置山へ向ひぬ、抑も此山は千有余年前、天武天皇其性御獵を好ませられ或時御幸し給へる折節、犢に勝れる大鹿の跳り出でゝ帝を追ひ參らせいとも危く見えしかば、帝は大に驚かせ給ひ一心に天に向ひて祈誓を凝らし給ひしに、不思議にも帝の御馬一躍して遂に虎口の難を免れ給へり、仍てその報恩に一の伽藍を建立なさんと思召し、御召の笠を此處に置きて後の標とし給ひけり、其後侍臣命を奉じてこの山に來り見るに、一羽の白鷺飛び起て笠の所在を示したり、則ち玆に巨大の岩に彌勒の佛像を彫刻して本尊となし文珠藥師の兩彫巨石を内に籠めて、廣大の伽藍を營み給ひ鹿鷺山笠置寺と號せし由縁起等に見ゆ、斯かる靈境あれば予等も麓の路を分け入り登り〳〵て鷄の森といふに至れば、翠松徑を挾んで露滑かに、野草芃々として路迷はんとす、詩に曰ふ國亡びて山河在と詠みける意のそゞろに思ひあはされて、感慨の涙に胸塞がり今より思ひ奉るも畏れ多き事ながら、そも元弘のその昔後醍醐帝が花の都の御座所さへ、春の嵐の荒けれ

め圍まれし時、帝の軍兵この岩上にて陣螺を吹き味方を指揮せし處なる由、岩上より四邊の景色に眼を配れバ、連山屛風の如く峙つ中に、木津川の清流麓を縫ひて白く、眞帆片帆の遠く鷗の遊ぶやうなるハ淀に通ふ舟にやあらん、岩の下にハ二株三株の山櫻時知り顔に咲き誇りて、散り際脆き形を現はし眼前に沙羅双樹の盛りを見せぬ、この時案内する男遙か彼方の山蔭に見ゆる一村を指して云ふ、彼をアスカゼ村と呼び侍るが、その往古元弘の戰に敵の軍勢を間道より導きて此山を陥れたるハ、同村に住みし桶屋の老婆なりとて、近村その不忠不義を憎み今に至るも婚嫁を交へざるのみか、村人罪障深き故にや癩疾に罹る者多しと、賴山陽の詩に「居民爲レ我指二村墟一。當時導レ賊實由レ渠。至レ今猶不レ交二婚嫁一。覰面唾罵視二僕奴一」と聽て山内を一周し了りて麓に下りぬ

散り敷く山櫻花に餞の句など考へつゝ、一同笠置の山を下り、麓の茶屋に憩ひて澁茶に咽喉をうるほし、こゝにて木津川を舟にて下るべき約束を取結び、輿丁に送られて川原に出れバ、漫々たる長流、水瑠璃の如く青し、川向ひの村ハ南笠置にして家の數五六十もあらん、山坂形に建て連ねたる家の檐端の花や青木に立交りて、水村山郭いづれも畵中の物ならぬハなし、脆きハ人の心とて景に遇ふてハ一同洒落も云はず、鹿爪らしく詩人を氣取る者あれバ、圖にして見ま欲しなど立騒ぐもあり、頓て舟の準備整ひしとて船頭に促されて、我も〳〵と舟に乗り移る、屋島落ならねバさな急ぐべからずと頭立たる人の制するをも聽かず、得手勝手に艫の方に出で快哉〳〵と景色を賞めぬ、船頭ハ親子して帆を上ぐれバ滿

帆風を孕んで疾きこと矢の如し、兎角して舟は駒返し岩の邊に至る、此處は元弘の昔し楠正成赤坂の城陷りたれバ、君居ます笠置の山に至らんとて此ところまで來りしに、笠置も敵の攻むる所となりて炎煙天を焦し早くも落城なしたるにぞ、詮なく駒を引返したる處なりと云ひ傳ふ、それより古歌に名高き甕野原を過ぎて、山城木津町に着く、白沙青松の間に一帶の長橋横はるゝ、蒼旻雲無きに何の龍ぞ、直に馬車に乘りて日暮奈良の古都に抵る

この夜は御門町の魚屋といふに泊り、草臥たれバ湯に入り按摩など呼びて宵の中より枕に就きぬ、座敷は主人が計らいにて猿澤の池に臨みし上段を與へたれバ、寢ながら興福寺の五重の塔を眺め、水を度る大佛の鐘の音を聞きつゝ、宿の女中に土地の名所あるひは噂話など問ふに、關東とは事違ひて奇しき事ども多かりき、此地の遊女は襠姿なるを元林院といひ、素人風なるを木辻と云ふとぞ、俳人汝邨が記文に木辻の待宵、鳴川の別れ、情に万金を盡し、思ひに一命を輕むず、とあれど見ねバ知らず、翌十六日小雨降れば見物を見合して、一同宿屋の二階に洒落會といふを開きぬ、午後に霽れたれば打揃ひて春日の宮に詣でり、南都賦にあをによしならの都は御さふらい三笠山の麓なり、元明天皇和銅二年藤原の宮より此京に移さる、大宮殿、大佛殿、佛神をあがめて王法を輔け、若宮のやしろ、月日の宮、竈殿、尾上の宮、鏡の神は橘の廣繼をまつり、浮雲の宮は鹿島立の始とす、氷室、卒川東大寺の八幡二月堂に若狹井あり三月堂四月堂云々其他の名所に至りては數へ盡し難し、芭蕉が句にも奈良七重七堂伽

籃八重櫻、と以てその盛なるを知るべし、一の鳥居を行けバ無數の鹿ども右に左に纒綿ひて馴れ睦む樣の愛らしさ、一同興がりて糠煎餅に財布の底をはたき、雪消の澤に昔しを忍びて、二の鳥居より進めバ苔蒸せる春日燈籠は道の両側を狭んで古色掬すべし、本社に詣で若宮にまゐり、巫女に神樂を奏さしめて神慮を鎮め奉る、それより若草山の麓に至り茶屋に憩ひて早蕨を肴に名物のあられ酒飲んでほろりと酔ひ、二月堂の階前に老婆の賣る葛餅を味ふ、東大寺の大鐘を三つまで撞きその響きの消えぬ間に大佛殿に入りて、種々の寶物を一覽し博覽會にて土産の品など買ひ取る程に、日も西山に傾けバ急ぎ足に其處を立去りて、また一の鳥居の邊に歸るに、折しも牧童が吹きすさむ一聲の短笛に、今まで野に伏し丘に臥したる男鹿女鹿のわれ遲れじと、構柵の中に馳せ入るさま、柔順にしてよく牧者と睦まし、紅葉の秋には如何に興あるべきや、興福寺に入りて南圓堂、金堂等を巡覽し、日暮るゝ頃宿屋に歸る、歸へれば旅客室に滿てその繁昌云はん方なし、かの鄙歌にも奈良の旅籠屋三輪の茶屋二十日餘りに四十両遣ひ果して二分殘るとあるを見れば宿屋は此處の名物にや、許六が旅の賦に旅店のさまを記す、上段に書院床、釼菱のすかし、火のなき火燵にやぐらかけて、門口の入湯桶、かたふけて据たり、底に小砂のさはるは、夜べの殘りかいぶかし、出女のたて島は春秋をしらず、根太板敷は落て隅々まで疊とをかず、天井襖は雨もりにきはづき、鉄行灯ハくらく、紙ハわらんべの心といふ事に燃たり、錢賣、草鞋賣にせがまれ、やう〳〵に枕をかたぶけ心よき寢入ばなは、馬さしの聲に夢を破る、出立は七つといひふく

めたるに、旅人も亭主もよく寝て、夜のあけてふためくつらもにくしと、寔に其實境を寫したりといふべし

青丹よし奈良の都に二日逗留して、大佛の鐘に諸行無常を悟り、猿澤池の八重櫻の花の色に盛者必衰の理を鑑み、詩情を肥し、旅の草臥を癒して、十七日の午前十二時法隆寺に至れり、汽車を下りて一同野道を辿るに空朗々と晴れ渡りて心地よき風の頬を撫でゝは、何處よりか花の香を送り來て菜の花に蝶の狂ふも面白く、途中も飴賣などに戯れて歩く程に、巖谷漣はいたく打興じつゝ「草鞋から蝶々踏み出す野路かな」と一句を口吟めば、江見水蔭手を拍てそは秀逸なりと賞めぬ、十町餘ある路筋を苦もなく歩して法隆寺の裏門前なる加世屋といふに中食を喫ため、案内者を雇ふて境内殘り無く見物するに、七堂伽藍は昔時の儘に存りて夢殿、舍利殿を始めとし金堂に入りて、曇徴が壁繪に驚き、五重塔に進みては塑造の須彌山に魂を銷す、人は唯新造が三味線のみに魂を消すものと思ひしに、今此境に入りてよりは神澄み氣爽にして極樂の淨土に拔苦娛樂するが如し、峯の藥師堂に詣れば、小高き丘とて景色一入美くしく、遙に金剛、葛城の諸山霞の笠を脫ぎ捨て足踏み伸せるが如き連脈は、一帶に紫嵐の色を凝して眼も文に、麓の村々の杉の木立に交るに床し、堂に入りて參拜し、思ひの儘に見物して、急き宿に歸り、車を馳て初瀨に向ふ、途中田原本の町を過れば、畝傍山右手に見ゆ車上ながらも遙拜し奉りて天長無窮を祈り、三輪に入りて明神前の茶屋に憩ひ、車夫の案内につれて明神の境内に詣るに、森々たる

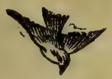
杉の木立茂り合ひて神寂びたる社なり、夫より二里の間を四十分ばかりに急がせ、車の初瀬へ着きたるは入相の鐘の聲山をめぐりて長谷寺の長廊下に散る花のざはつく頃なりし、初瀬の宿を井谷屋といふ、夜にいりて江見水蔭中村花痩二子と共に長谷寺に登る、樓門より本堂まで一町に餘れる石壇は廻廊屈曲して頗る壯觀なり、壇の左右に牡丹多し、舞臺に上るに初瀬の町は悉く眼界に落て景色雄大なり、翌朝衆と共に再び此山に登りて瓦の寄進に我が名を留め、内陣に入りて十一面觀世音を拜す、見物を畢りて一同多武峯に向ふ、尾崎紅葉獨り脚疾あるにより車を驅つて壺坂を越え吉野山に急げり、殘れる面々は櫻井の町外より車を下り、多武峯に登るに、麓の石の華表より談峯神社まで五十餘町あれど、路左程に嶮ならず、一町毎に標石ありて一々路程を刻めり、抑談峯神社は大職冠鎌足朝臣を祀れるなり、其蜩翁草に和州多武峯は鎌足公入鹿を討んと欲するとき帝と此山にいつて談合し給ふ、故に此山を談ひ山といふ、鎌足をまつりて談山權現といふ、談と多武と聲通ず、また入鹿を討て武功多しといふ意にて多武峯といふかと見ゆ、境内清淨にして楓樹多く、氣候頗る寒し、社殿悉く丹を以て塗り、青山に朱を點ずるが故に景色一段あるを覺ゆ、先づ社務所に至り神樂を所望せしに、十二三歳許の神女二人出でゝ神前に舞を奏し神慮を鎭め奉りぬ、畢つて寶物を一覽し、天竺の菴羅といふ樹を眺め、名に高き十三塔を見物して、花中宿といふに中食を喫す、想ふに此地春季に登山せんよりは却て秋こそ優るべし、蓋し紅葉滿山二月の花よりも紅なるべければなり此處にて四人結束し村の男一人を雇ひて銘々の荷を負はせ、

上市町へと急ぐに、山漸く嶮しうして溪水迴かあり、諸鳥梢に啼き渡りて耳を洗ひ、煙樹雲を吐いて眼爽かありといへども、路の嶮なるに若かず、一同汗を絞り嘆息を洩らして纔に山頂に登り、一軒茶屋に澁茶を啜りて渴を癒し、こゝに再び勇を皷して上市に出でたり、吉野川滔々と流れ、兩岸を挾んで妹山脊山峙ちぬ、されども山櫻の一木だに無くて青葉のみ茂れるは、芝居で見る書割とは大に違ふと一同不平を云ひたり、此日舊暦の三月三日に當り桃の節句あればとて上市の川原に素人相撲あり、鄙の質朴ある繪にして、見たかりし、櫻の渡場を渡り尙は行く五十町、吉野山にぞさしかゝりぬ

日は西の山に、落ちかゝりて花の下道辿りけるに、兩側の櫻ハ梢を交へて天織るが如く、一帶の白雲凝つて更に動かぬに、寒からぬ雪のひら／＼と散りて塵に汚れし草鞋を撲てど消えもせず流れもあへず、餘香は衣に薫じて蝶の行く春を惜むも床し、夕陽のやゝ沈みかゝりて千葩万葩を照すにつれ、花の光るかと疑はれて長途の疲れも忘れたり、此處を何處と名に呼ぶにやと案内顔する水蔭に問へバ、渠ハ寫生せんとして下したる筆を止め、一目千本とハ此處なり、貞室がこれハ／＼と知紀が霞の奥ハ知らねどもと口吟みたるも此處の事を詠みたるなりと、一同喜び勇みて大橋を渡り金の鳥居を入りて、佐古屋に至れバ、紅葉早くも此處に着きて二時間餘も待詫びたりといふ、湯に浴りて寐轉び、歴史文學の話などして寢に就きぬ、翌朝宿を出でゝ先づ邊近き藏王堂より吉水神社へ參詣しぬ、此處にハ延元帝の玉座の間源廷尉が閑居の跡、其他南朝代々の遺物等種々あれバ、請ふて拜觀するに、いづれも懷舊の涙を落さし

めざるものなく、至尊の御身の斯かるいぶせき宮居に詫びしくお在まして、落花珠簾を撲ち、春風御苑に度るの外御目を慰さめ奉つるものもなく、僧は敲く月下の門てふ詩中に在るが如き御住居まし〳〵たる、當時の御心や如何なりけん、今にして遠き昔日を思ひ見るも恐れ多きことなりけり、夫より岨路に沿ふて如意輪堂に詣で、延元帝の御陵を拜し奉るに、荒れたる昔時の俤は無くて、石階塵無く、陵上苔青し、落花深き處に南朝を説きたる眉雪の老僧は見えざれども、掃除行屆きて箒の痕波の形を印す、御陵の下に小楠公の髻塚あり、芳名石に銘して永く朽ちず、一同參拜し畢りて、竹林院といふに行くに豫て宿に吩咐け置きたる辨當を斷の雨掛にして持て來るに逢ひぬ、紅葉は山駕籠に搖られて花を仰いで眺め、斷は瓢簞と緋毛氈を肩にして附添ひ行き、櫻の樹の間を潜る樣は師宣が遊山の圖にも似たり、後より續く一同は脇指さゝぬ元祿奴の脚胖掛けたるも可笑し、寺に着けば、青草の上に毛氈を敷き、山海の珍味を堆き迄陳べ列ねて且つ呑み且つ食ひ、藏王堂の森を遙に見渡せば、朱塗の伽藍高く聳へて、青綠の山、後をめぐり、釋迦ヶ嶽、東に峙ちて、雲牟嶺を徘徊す、二株三株の山櫻は彼方の溪間、向ふの峯に今を盛りと咲き亂れて、去年に變らぬ色を見せたり、變らぬは實に山水の形なれど、變り果てゝや吳王宮中人去り盡し、年々の春色誰が爲に來るとは、此山を評するの語乎、頓て酒も醉はぬ程に飲みて杯盤を供の斷に取收めさせ、宿に歸りて直に結束し、一同下市へ急ぎぬ、途中村上義光の墓に詣で、官幣吉野宮の宮司を訪ひて、山を下るに日和好ければ、花見の男女の打つどひて來る樣の興ある、昔時は

靜路の嶮なるに艱みて去りにし人の行衛を追ひかね、今は小娘の花見に山路を辿るも可笑し、兎角して下市に着けば、車を驅つて高田停車場へ急がす、吉野川を渡り、車坂を踰え、戸毛、御所町を過ぎて、十九日午後二時半頃高田に着す、三時半汽車に乘りて、大和を出で、河内に入り、津の國浪華に着きたるは五時頃なり、港町の停車場より、大坂の町を腕車にて横切り、梅田より又汽車にて京都に乘込みたるは夜の八時過なるべし、こゝには巖谷漣の家に七日餘逗留して、名所舊跡を探り、花を見、月に浮かれ、鴨河の水に旅の垢を流して、嵐山の晩霞を吸ひ、都踊りに魂を奪はれ、壬生狂言に腹を抱へて、文學家懇親會といふに臨み、京、大阪、神戸なんどの歴々諸士の厚遇を辱ふして、酔て一同祇園町といふ名高き處を見物せしに、紅葉取あへず「春の夜や化物までも美くしき」といふ奇警の句を吐いて、厚化粧の鬼の恐るべきを諷したれバ、予は無雅の人の長く止るべき場所ならざるを悟り、其月下旬歸宅したり、穴賢



短篇小説　明治文庫第九編　終

谷文晁輯畫

羽田子雲増補

谷文晁本朝畫纂大全

畫伯谷文晁、古名畫を摸臨して座右の實什となせしもの、裒然積て册をなす、仍てその粹を拔き珍を選び、印刻して世に公にしたるもの、即此書なり、雲上にハ後陽成帝爲成卿より烏丸光廣卿に至り、武將にハ平清盛足利義政あり、僧侶にハ日蓮上人玄澤以下澤庵和尚に至るを集め、名媛にハ平政子等を納む、その他專門の畫家に至てハ千餘年間諸流名匠の筆蹟、殆んと備ハらさるハなし、且一々筆者の小傳を附したれハ、畫家ハ勿論苟も文藝に心ある者に在てハ希世の珍玩たり、左に其目次を掲ぐ、

全四册和裝美本
定價金壹圓貳拾錢
豫約實價金八拾錢
郵稅十二錢
製本既成
着金即日送本すべし

(前編上卷目次)

筑陽 福祿壽○ 尊後 猿○ 照陽 草花○ 洞文 人物○ 文孫 雁○ 幸益 人物○ 空海 人物○ 綱政 牡丹○ 徽堂 人物○ 正成 大黒天○ 雲津 猿○ 雲溪 鷺○ 僊桂 鷲○ 宗淵 花鳥○

李欽 葡萄○ 玉堂 花鳥○ 等禪 柿○ 鑑貞 山水○ 道安 草花○ 興悦 梅○ 賢家 人物○ 爲正 不動尊○ 等悦 鶏○ 大藏郷 鹿○ 豪信 菅公○ 友閑 人物○ 正吉 鷹○ 有孝 草花○

雪舟 水仙○ 守信 唐子遊○ 尚信 人物○ 守景 鶏合○ 一蝶 武藏野○ 英信 麥○ 益信 節分○ 重信 人物○ 明響 螢○ 道安 蓮○ 松花堂 人物○ 長春 人物○ 等益 稻刈○ 吉里 人物○

元信 梅○ 安信 雉子○ 周信 風○ 守景 人物○ 一蝶 人物○ 山雪 雁○ 友松 鶴○ 榮信 管公○ 明響 月見○ 閑月 擣衣○ 松花堂 瓜○ 長春 獅子○ 等顔 雪山水○

(前編下卷目次)

雲甫 觀音○ 永海 人物○ 信秋 人物○ 桐江 竹○ 周元 達磨○ 松屋 大黒天○ 泰經 柳燕○ 仙可 梅○ 信春 梅○ 龍登 山水○ 應舉 虎○ 蘆雪 雉子○ 師宜 人物○ 紹叔 不二○

無關 人物○ 朝湖 山水○ 長門 神農○ 長利 人物○ 信海 鬼○ 意足 人物○ 永納 人物○ 等作 龍○ 玄岱 人物○ 明雲 鷺○ 月溪 牡丹○ 素絢 人物○ 師宣 人物○ 等揚 人物○

光茂 人物○ 起 春草○ 光貞 支猪○ 光芳 葵○ 光琳 鹿○ 秋月 人物○ 信繁 人物○ 西山 達磨○ 榮賀 人物○ 等元 神農○ 等全 菊○ 等月 梅○ 正甫 鶏○ 鳩巢 竹○

光茂 人物○ 光起 秋草○ 光貞 曲水○ 伊年 菊○ 光淋 千鳥○ 周文 達磨○ 亮仙 觀音○ 龜玉 盧雁○ 光賴 犬○ 等有 竹○ 等甫 鷺○ 顯山 人物○ 元喬 蘭○

亀田鵬齋
谷文晁
序文

抱一上人編

光琳百圖

尾形光琳は丹青社會に於て、新に一派を開きたる俊傑なるも、其の畫の後に傳ふるもの多からず、この書は一世の名僧として殊に畫道に精練なる抱一上人が光琳の畫圖中、尤も卓絶せるもの二百餘圖を搜羅して摸刻したるものなれは、美術世界に籍するもの丶、座右缺くへからさる寶典たり

前編二冊
後編二冊　全二卷
和裝美本
正價金五十錢
豫約定價金四十錢　郵稅八錢
着金即日送本ス

（後編上卷目次）

宗丈釋尊　雪村松樹　寒殿主仙人　昭乘人物　支也花鳥　蛇足人物　信繁人物　雪洞瓜　章岳竹　興雲逹磨　定昭鶏　守安逹磨　印可山水
光長人物　道晃人物　滿昌柳燕　等梅鷺　光則人物　如拙人物　紹仙花鳥　慧麗山水　高辨不動　淸眞月波　雲谷山水　得水竹　周耕花鳥
啓書記觀音　祐宜布袋　陳興子福祿壽　時信仙人　後陽成院人物　寄堂竹　圭信鯉　完山葡萄　乾山三福神　眞能人物　養溪釋尊　玄澤人物
僧一之佛　光信天神　日蓮大黑天　吳俊明鐘馗　信尹逹磨　眞能鷄　義峯仙人　尊證波千鳥　宗謙御秡　揚月猿　江漢鷺　淸忠虎

（後編下卷目次）

了慶神農　政子觀音　宗丹逹磨　盛直人物　江西人物　尊後佛　等坡草花　總長柳月　義與鐘馗　淸盛佛　光元山水　等益山水　景種人物
立德梅　寂蓮人物　宗栗觀音　眞藝山水　雪崖梅　元後人丸　等宿犬　隆長山水　義隆觀音　爲成宮殿　雪休人物　等瑞枯木鳥　高映鷲
之信四睡　竺箏人物　善長鐘馗　宗譽壽老人　嵩之釋迦　其角人丸　義教觀音　勝以蛭子大黑　道信觀音　光廣草花　可翁龍　周楊猿
有孝佛　竺仙葡萄　慶山牡丹　義政山水　嵩谷逹磨　許六草花　宗三梅　善雪釋迦　湛園竹　澤庵人物　福信孔明　新屋人物

短篇小說

明治文庫

毎月壹回發兌○毎篇讀切○彩色密畫挿入○洋裝大判美本

正價一册(二百頁)拾五錢○六册前金八拾五錢○十二册前金一圓六十錢○郵税一册金六錢

最も詩趣多きものは短篇なり、最も雅致を含むるものも短篇なり、最も奇絶なるものも短篇なり、最も壯快なるものも短篇なり、雜感を拾て抽象的に精美を發輝するものも亘篇なり、恰も霞中の花の如し、水底の月の如し、宮沿流串の下を驅り過ぐるが如くして、漁船をゑ走らしむるが如く、松島の灣を行くが如し、杜鵑の如し、電光の如し、葬花の如し、一瞬の間に天地の大觀を示す、絶壯快之に出ずるもの有らんや。明治文庫は短篇に得意なる諸名家の傑作を集め、逐月之を刊行す。千紫萬紅、一たび之を縮めて片舟に梓がば、流るゝ如く急にして奇景百出人をして應接に閑なからしむ。

◎第壹編目次　武内桂舟密畫
巖谷漣山人著
辻占飴　秋の蝶　けなげさ
黑衣魔　白面鬼　梢上月
山時鳥　京自慢　花の旅

◎第貳編目次　小林永興密畫
川上眉山著 雪折竹　村井弦齋著 福の神
廣津柳浪著 佛魔一紙　嵯峨の屋著 薄命の鈴子
石橋思案著 姥櫻　江見水蔭著 驚く鷗

◎第參編目次　武内桂舟密畫
江見水蔭著
劍客　初嵐　瘠瓣太守
骨武者　畫師　斷絃
信天翁　初楓　故家水
漁郎　わかれ霜　畫師の妻
一夜の宿　雲烟過眼

◎第四編目次　小林永興密畫
幸田露伴著 緣外緣　巖谷漣著 媒介人
多田漁山著 新學士　川上眉山著 風流狂言記
田山花袋著 隅田川の秋　嵯峨の屋著 庭の敎子
渡部乙羽著 都土產

◎第五編目次　三島蕉窓密畫
山田美妙齋著
みゝずはれ　曙の春　月花の見立
紅墻記　賴朝の墓　雪折れ竹
大龍王　田舍聖者　古切手
くされ緣　ゐなか娘　母のなさけ
春の花鳥　鶉の道行　戸隱山紀行
都門雜興

◎第六編目次　武内桂舟密畫
櫻痴居士 忠義お安　學海居士 當世二人女婿

◎第七編目次　三島蕉窓密畫
中村花瘦著
俄長者　狂蝴蝶　合歡花
俠魂　片時雨　破鏡

◎第八編目次　富岡永洗密畫
山田美妙著 村上義光　巖谷漣著 若水
嵯峨の屋著 國民大帝　田山花袋著 廿日月
西森骨皮著 滑稽二人男　松華庵著 夜行汽車
眠花道人著 江戸舞踏會　原田抱一著 靑春夢

版權所有

明治廿六年八月三十日内務省許可
明治廿七年四月二　日印刷發行

明治文庫	
一册(貳百頁)	金拾五錢
六册前金	八拾五錢
十貳册前金	壹圓六拾錢
廿四册前金	參圓拾錢

定價

郵稅一册六錢

編輯兼發行者　大橋新太郎　日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　宮本敎　神田區小川町壹番地

印刷所　愛善社　神田區小川町壹番地

發兌元　博文館　東京日本橋區本町三丁目

大賣捌所

東京　仝　仝　仝　仝　仝　仝　大坂　仝　仝　仝　仝　仝　仝　京都　仝　名古屋　仝　仝　神戸

東京堂　水野慶次郎　東海堂　慶々堂　信文堂　石川商店　上田屋本店　盛文館　吉岡平助　柳原喜兵衛　梅原亀七　岡島新聞舗　平井新聞舗　中村条雄　東枝律書房　田中治兵衛　川瀬代助　新文舎　片野東四郎　熊谷久栄堂

神戸　舟井新聞舗
仝　吉岡支店
仝　船山堂
熊本　長崎次郎
鹿兒島　吉田幸兵衛
長野　西澤喜太郎
松本　水琴堂
仝　高美書店
四日市　伊藤静太郎
津　河島九右衛門
岡崎　愛友舎
濱松　谷島屋源三郎
仝　林新聞舗
沼津　関契社
甲府　柳正堂
横濱　丸屋書店
仝　里見亭太郎
鴻ノ巣　長島爲一郎
東金　多田屋本店
千葉　仝支店

佐倉　吉田徳兵衛
佐原　朝野利兵衛
水戸　川又銀藏
大津　澤一二郎
仝　太田支店
上諏訪　宮坂日新堂
小諸　廣文堂
飯田　皆川文屋堂
前橋　煥平堂
宇都宮　内山港三郎
栃木　宮川庸三郎
平　清光堂
白河　奥村書店
福島　上野屋彦太郎
仙臺　木村文助
仝　佐[illegible]書店
石ノ巻　山口讀之勤
盛岡　佐藤庄兵衛
仝　頓谷堂
弘前　野崎九兵衛

青森　鎌田商店
山形　八文字屋書店
仝　牧野徳太郎
米澤　素月島平
秋田　成見清兵衛
仝　鈴木秋穂堂
横手　大澤忠四郎
増田　東海林書店
酒田　鈴木喜八
福井　品川太右衛門
武生　安立庄三郎
金澤　雲根堂
小松　宇都宮源平
富山　清明堂
高岡　學海堂
新潟　櫻井産作
長岡　覺張治平
仝　目黒十郎
高田　室直三郎
仝　高橋書店

水原　西村六平
松江　川岡清助
岡山　武内彌三郎
姫路　朝榮社
廣島　松村善助
山口　宮川臣吉
和歌山　平井文助
徳島　阪井萬吉
博多　積善館支店
仝　森岡商店
久留米　菊竹儀平
大分　山川正三郎
長崎　虎與號書店
仝　鶴野書店
佐賀　河内汲古堂
函館　魁文堂
札幌　聚文堂
仝　野前長發
仝　小鹽自治堂
仝　萱間左右太

一九〇

博文舘發兌圖書總目錄（其五）

學習院教授從七位峯是三郎先生著

●實驗立案 修身教授及訓練法　全一冊　正價廿五錢　郵稅六錢

修身教科書採定の時機目前に迫れり、之と同時に口授法を行ふも亦た可なるの訓令出づ。孰れにしても之を教授し、之を訓練するに、百般の注意を要するを明なり。本書は全篇七章五十二節に分て、前記兩樣の教授、訓練法は、細大悉く之を擧ぐ。其の說く所、實踐應用を主とし、都鄙の別なく之に據ることを得せしむ、夫の理論に汲々として、實用に迂なるの比にあらざるなり

從二位伯爵東久世通禧公題辭
東京教育社長日下部三之介君謹撰

●教育典範　全二冊　正價六拾錢　郵稅八錢

大君に忠なる者にあらざれば。國民の名譽心を惹起して。立憲の美政を確保することを能はず。國家を愛する者にあらざれば。海陸の業務に從事して。公益を作興することを能はず。是等忠君愛國の氣風を養成せんには。之れに適應する所の國民必讀の書なかるべからず。著者特に玆に感あり殆ど二箇年間の苦心盡力に依りて。本書編述の成功を見るに至れり。抑も本書は。明治廿三年十一月下し給ひたる敎育に關せる、勅語を繹し敷衍し。事實を擧げて格言に證し。篇を別ちて國體篇、孝悌篇、仁慈篇、勸學篇、義勇篇、遵守篇の七篇に分ち。更に二十章に分類し。之を百八十節に區分したり。要するに國民必讀の書たることは。七篇に命名したる題目を視るも。亦之を知了するを得べし。凡そ忠君愛國の事より孝悌仁慈に至るまで。記して漏すなく論じて餘すなし。特に文章簡潔意義明瞭。若し夫れ之を學校の教課用書となさんか。高等小學校の教師用となすに宜しく。尋常師範學校の參考書となすに宜しく。又尋常中學校。高等女學校生徒の修身教科用書となすに宜し。大方の諸君願くは一本を購求して。子弟教養の用書となされんことを

宮城縣尋常師範學校敎頭是石辰三郎君序文
西大條規君校閱　鎌田彥之進外三君合著

●尋常小學教授法　全一冊　正價二拾錢　郵稅二錢

本書は能く小學教授法の正鵠を得たるものにて文辭簡明平滑義旨精確實に斯道の指南車と傳ふべきなり故に職を訓導教授に奉ずる諸君は素より苟も國民教育の必要に留意する人は須らく一本を座右に備へ以て滿腔の精誠を發揚して可なり

內藤耻叟先生校閱　奧山千代松君著

●勅語釋義　全一冊　正價拾錢　郵稅二錢

本書は教育勅語に付き日本全國民の日夜肝胳に置くべき忠孝の大道を講じ發倫の本義を敷演したるものにして殊に教育に從事する者は宜しく本書を供へ以て兒童教育の基本とせざるべからず

岸弘毅君編輯

●修身入門畫　附一冊圖解　銅刻密摺　正價卅五錢　郵稅六錢

著者小學兒童が修身の材料に供せむとて修身入門畫と題し修身入門圖八十箇の鮮明美麗なる石版畫を掲げ其上段には尋常小學兒童にも了解し易き簡單なる訓語とまた之を敷演したる物語を載せたり別に又詳細なる圖解ありて朝夕の行儀作法より小供の心得となるべき訓誡と古今の例話を掲げ毎項備考として生徒に教授すべき要針を示したれば教員諸君には勿論小學兒童には尤も必要なるべし之を鮮明美麗なる人物鳥獸器械草木其他遊藝に關する畫帖とすれば大に兒童の心目を娛ましむべく之を修身書とすれば至極輕便にして早く兒童の肺腑に入りやすき新讀本なるべし

大和田建樹先生著　（尋常高等共文部省檢定濟）

●尋常小學 帝國唱歌　全二冊　木版　正價一冊七錢　郵稅各二錢

目次

（上卷）●始業の歌●好き家●鯉よ龜よ●朝の歌●田植の歌●國民●親の恩●神風●小蝶●はぜつり●貧しき人●今こそ●旅の空●ドドドドン●終業の歌（下卷）●八咫烏●日本武尊●富士の高嶺●元旦の歌●時計●皇后の祭●宮の山●謠へよ波●高津の宮●運動會●今日から休●源平●夕霜●湊川●にひなめ

高等小學帝國唱歌

全二冊 木版 一冊正價拾二錢 郵税各二錢

目次

（上卷）●春の歌●如意輪堂●月と我と●湯氣の水●ほたる〳〵●時は翼●夕の雲●閣龍●妹の名●池の蛙●秋は來たり●水蒸氣●農家●希望●すみれ●菅公●樂しき時●母の心●夜あけ●採集の歌●鍛冶の歌●兒●夕暮●君恩●竹馬（下卷）三種の神器●夢●和氣淸麿●自然の音樂●忍耐●子ども●嵐山●雛の雀●二月十一日●車はくる〳〵●千鳥の聲●蟻の子●伊勢の宮居●夕立つ雨●祝日●亡友●すゞみの歌●水の草●工女の歌●學校の道●水の歌●笛の音●おとづれ●石橋山●老木の陰

此二書は兼て唱歌作者として老練の名ある、大和田先生の歌に附するに、和洋諸大家の作曲を以てせしなれば、歌は平易優美にして趣味多く、譜は簡潔流調にして、尤も兒女を喜ばしむべし。歌には一々傍假名を附け、間には細畵を挾みて餘情を示せり。

學習院御用掛陸軍大佐從四位高島信茂公題辭
東京音樂學校敎授正七位上眞行先生校閲
學習院音樂敎官納所辨次郎君編纂

日本軍歌

全一冊 木版 正價拾二錢 郵税二錢

目次

海ゆかば●千代田振●ふみこめ入々●たまちろつろき●ひまゆく駒●すゝめ〳〵●凱歌●大和島根●おぼろのさぎり●きるべし●おやの恩●ますらたけを●宮城●いざすゝめ●御國の旗●春は露●進擊歌●みづくかばね●學びの道●ほしがたな●功戰

學校練習用 日本地理暗射分割圖

十一枚 銅刻 正價拾錢 郵税二錢

目次

●日本地圖●畿內地圖●東海道地圖●東山道地圖（中仙道部）●東山道地圖（奥羽之部）●北陸道地圖●北海道地圖●山陰山陽兩道地圖●南海道地圖●西海道地圖●大隅諸島琉球諸島地圖

學校練習用 萬國地理暗射分割圖

全七枚 銅刻 正價七錢 郵税二錢

目次

●世界全圖（東半球西半球）●亞細亞全圖●歐羅巴全圖●亞非利加全圖●北亞米利加全圖●南亞米利加全圖●大洋洲全圖

地理教授上最も必要なるものは暗射練習に供する分割圖なり近來梓に上るもの頗る多しといへども簡畧に失せされは繁密に過ぎ失ひも本圖の繁簡當を得て教授上練習上に適切なるに及はす且圖樣鮮明紙質堅靭ペンの尖の爲めに破碇しインキ浸潤の憂なきは勿論何人の著はせる地理書に適用するも聊も枘鑿の憂なし請ふ購求して之を知れ

新撰 學生實用 日本地圖

全一冊 正價二拾錢 郵税四錢

地理學の必要なる實に今日に始まるにあらずしかれども地理學に地圖を俟つて始めて其用を著はす、若し地圖なければ恰も磁針なくして航海するが如く何れの處にか達せん山河都鄙國境郡堺等一目明了直ちに火を指さすが如きに如かさる也殊に小學兒童にあつては一目數段の辨明に勝るの功用あり地圖亦鮮明確實にして各府縣大小の學校に適當の良本なり

新撰 學生實用 萬國地圖

全一冊 正價二拾錢 郵税四錢

忙手卷を披けば河海山岳の噴隆都鄙萬國の形勢細大漏さず歷々として眼中にあり航海線彼に達し鐵道路此に顯る方今宇內文明の運開け萬國比隣の如く交通國內の如く社會萬般の事日々頻繁を加ふるの時に當ては地圖の必要益々大なり、あに是のみならんや四方遠征の志萬里鵬程の遠謀直ちに盡すへき也殊に本圖は舶來の原書によりて編纂したるものなれば鮮明美麗なるのみならず又其の記名の確實詳細なるは固く保證する所各府縣學校は勿論一箇人と雖も携帶すべき最良本なり

須永金三郎君編纂

東京修學獨案內

全一冊 正價廿五錢 郵税六錢

學海茫々たり、羅針なくして渉る可からず、修學案內は學海渡航者の爲には最新最好の羅針盤なり、學問の價値、學科の撰擇、上京前の注意、學校の撰擇、入學手續、寄宿舍生活、下宿生活、學資、都下學生間の弊習、諸學科の大要、都下官立私立各學校の位置、規則、課程、學資、入學試驗例題等、凡そ遊學者の爲に切要なる大小の事項は一切網羅して遺す所あらざれば、一たび之を繙いて後舟を學海の中流に浮ぶれば、潮勢の急變以て患となすに足らず、成功の彼岸一瞬にして達す可し

樞密顧問官伯爵勝安芳公。向山黃村先生題辭
清國欽差大臣黎庶昌氏序文 井上陳政君編

曲園自述詩

全一冊 正價廿五錢 郵税二錢

支那十八省中第一等の碩學老儒と聞えたる曲園先生兪樾氏が自家の情況を述べられたる詩なり蒼老簡古、雄渾雅健、以て當代無双の文雄が襟懷を看るべく、溫籍着實、以てその人の境遇を看るべきのみにあらず、併せて清國の國風を觀るべく亦以て清國の風調を察するに足るべきもの此書を措て他に求むべからざるなり

西村茂樹　櫻井勉　岡本監輔
小山朝弘　谷口鐵臣　野口勝一　諸先生序跋及評
衣笠豪谷　尾高惇忠　高雲外
鷹洲織田完之君著　小野湖山先生評

厚生利用集

全壹冊　正價貳拾錢　郵稅四錢

鷹洲織田完之先生の詩集なり、詩集題して厚生利用といふ、以て尋常偶花捉月品紫評紅の吟にあらざることを知るべし、先生耕藝に明にして文學に精しき已に世人の知る所なり、然れども此書がこれを證するの的確明白なるに如くべからず、且以て眞詩を學ぶの規範に供すべし

黃石岡本廸先生題辭
湖山小野長愿先生題辭　幻堂内山正如君編纂
南洲西郷隆盛公
松菊木戸孝允公　遺稿　石版肖像挿入
甲東大久保利通公

維新元勳三傑詩文集

全一冊　正價拾貳錢　郵稅四錢

詩は人の天性より發露し、文は人の天品より凝成す、故に眞成の詩文は詩人文客の口より出でずして、偉人の眞心より出づ、西郷、木戸、大久保の三士は、明治中興の柱石にして、家康以後の俊傑、多く國家の危境、險路、要職、樞機に斡旋せり、其人の天性と境遇とを發して高大雄偉の詩となり、磊磈淋漓の文となるは其の所ならずや、此の書今盡く之を藏めて光燦絢爛たり、一世の眞詩好文集といふべし

栗本鋤雲翁題詩　蒲生褧亭君序文　片岡孤松君編

學生錦囊名家詩纂

全一冊　正價拾貳錢　郵稅四錢

長詩短句の精を撰び華を拔く大凡四百五十首、猛虎寒月に嘯く如きもの、嬌鶯春林に謠ふ如きもの、孀姉泣き、鬼神哭し、高士笑ひ、百華舞ふ如きもの、節々相接す、琅琊誦し來らは、意氣軒宏八宏を吐呑し、神幽意暢天地に冥合するの感を爲さん、有爲の好少年は以て其の氣節を砥礪すべし、卑歌俗調に耽る者は以て其腐腸を一洗すべし

本居豐穎先生序文　岸本宗道、大宮宗司兩君編

新撰長歌集

全一冊　正價廿五錢　郵稅六錢

長歌は文學の最も重ずべきものなり最も雅なるものなり一たびこを詠まむか心常にもあらずつれ〴〵の日ぐらしにはこよなきものならむ本集は明治以降の名家即ち故人には日下田足穗僧辨玉村山守雄等今人には福羽美靜小中村淸矩黑川眞頼本居豐穎鈴木重嶺等の傑作數百首を載せたり且つ附するに古今今樣集を以てすまた最終には物集高見落合直文等の新體歌をも載せたれば消暑のなぐさみにはこをおきてまた何かあらむ幸に高評を賜へ

第一高等中學校教授落合直文先生著

新撰歌典

全一冊　正價六拾錢　郵稅拾貳錢

歌は文學の最も高尚なるものなり、月夕花晨一たびこれを詠ずれば美感踊躍その快樂實にいふべからず、頃日落合直文先生には本書を著されたり、世の文學嗜好の人この書を一讀するときは、その面目の改りたるを知るに足らむ、和歌沿革の如きは、作法の如きは、最もおもしろく、類語は充分又精選せられ、證歌は萬葉集をはじめ、代々の撰集、家々の歌集最近の歌人の歌にいたるまで、その英華なるは漏すところなし。殊に長歌の如き、今樣の如き、その他歌體の如き、皆これ感情の神美にして大に見るべきものあり、而してかの戀歌といふものを減じ、更に人倫の部を設けられたるなど、最も苦心のところにして、先生の經營慘憺たる意匠の深きを知らるゝなり、その他和歌書法或は冠詞より、更に和歌に關したることゝは詳細漏すところなし。歌を學はむとするもの、此書をおきてまた他に何かあらむ。

石川鴻齋先生著

小學日本文範

全一冊　正價拾五錢　郵稅四錢

文を作るには文事の資本を蓄はへざるべからずこれを六經諸史に求むるは容易に得べき字にあらず此編は高等學業を積ずして速に古語熟字等を知得して記事論文序跋往復の書翰等心に欲する所自在に筆を走らして人を驚かすべき文を作る捷徑の書なり則ち方今必用の漢文を上欄に載せ其文を國字を雜へて翻譯するの法を示し故事熟字等を解し難きものは悉く國字を以て註解を加へ師に從はずして文を學び文を綴る事を得せしむ請ふ此書に由りて人をして目を刮らしむるの文を綴り玉へと云爾

石川鴻齋先生著

初等 文法詳解

全一冊 正價二拾錢 郵税六錢

世に文章を學ぶ書多しと雖も或は古人の熟語を集め或は助字虛字の作例を說のみにて一篇一章一句一語悉く法則あるとを說くものなし苟も文を作る者法則無きときは徒らに文字を綴るのみにて之を文章と云ふべからず先生夙に文法詳論を著せしが高尚に過ぎて幼童の爲に解し難きを以て今又斯編を著せり此書は初學文章を作る者の捷徑にて國字を以て誰にても解し易く曉り易く一度通覽すれば句法章法字法篇法單行散駢對字對句首尾照應抑揚頓挫開合波瀾の妙處悉く自得せざるとなし古人より本邦人の漢文を作るものは皆作例を以て綴るのみ故に言語の緩急を知らず先生親しく清人沈黄諸氏に學び言語より出て文章に成るとを詳解し箸を以て食をくゝめる如くに教ゆる書なれば初學文に志すもの一讀して會得せずんばあるべからざるの書なり

從三位子爵福羽美靜先生校閲　田中澳平君編

假名交文典

全一冊 正價八錢 郵税二錢

此書は、世の青年の爲に、文法の假名遣を訂さんとて、著はしたるものなり。文章に志すもの、之を座右に備へば、筆下に完全の文を得べし、實に珍重すべき好文典なり、曩に 天皇陛下及兩皇后陛下へ獻納し辱くも嘉納せられたる貢書なり。

權掌侍税所敦子。竹屋雅子兩君題歌

佐々木信綱先生撰

婦女詞藻

全一冊 正價拾二錢 郵税四錢

優美なる詠歌高雅なる作文は婦女子の性質に最も適當せるものなれは彼の伊勢、紫式部、清少納言、赤染衛門等をはじめ歌作文章家多くは女性中より出で後世文學の摸範となる者少なからず方今婦女子中國文和歌を修むる者又甚多し本舘此に見る所あり和歌今様和文消息文等の名吟高作をあつめ博く世に現はさん事を思ひ其撰擇を佐々木信綱君に乞ひ出版せり婦女諸君倍奮愛讀せられんとを

幻堂內山正如君編纂

詔勅類纂 祝辭演說一千題

全一冊 正價拾五錢 郵税四錢

社會の文明益々其度を高め社會の交際愈々親密を固むるの今日に膺て最も必要不可闕の者は祝辭文及び演說法なり況や內治外交を首め教育文事勸業殖產の開會開場の如き益々繁多なるをや本書は主として在野在朝名士の祝文演說を蒐集せし者にて殊に讀者の便を計りて評點を附せり特に我至聖至仁なる 天皇陛下の大詔勅を前編に具載し奉れり嗚呼國民たらんもの造次顚沛の間も忘るべからざる一大寶鑑稀有の珍冊なり

從四位巖谷修先生題字　內山正如君編著

實地活用 日本用文大全

全一冊 正價廿五錢 郵税六錢

高きに躋らんとせは先つ低きより迦らさるべからず、遠きに到らんとせは先つ近きより參まさるべからず、物に本末あり始終あり其先後する所に乘せずんば假令百鍊千磨の功を積むも畢竟畫餅たるに過ぎず、本書日本用文大全は甞に日常用文の骨髓要門を記載するのみならず其記する所の諸篇は最も平易流暢精細緻密にして細大漏す處なく能く婦女幼童の爲に習學上の好伴侶となり、指南車となり、進ては世人の座右寶典となり際涯なき便益を與ふるなり故に本書の初めて世に出つるや四集八來大に愛讀の幸榮を博し忽ち再版〳〵又再版遂に第七版を發賣するに至り今や又々全編の組織を一新して鼇頭熟語記事諸緜の增補を施こせり故に本書の眞價たる瀾よ其光彩を揭け所謂錦上に花を添へ霜さ霜を加へたる者と謂ふも誣言にあらさるなり請ふ大方の諸君奮に倍して愛讀し其眞價を咀嚼せられよ

谷口政德君著

獨習自在 生徒用文

全一冊 正價四拾錢 郵税四錢

小學生徒をして容易に作文の法を知らしめん爲め日用文及雅文體數十篇を揭げ其文の末尾には作文に必要なる熟語數十を示したれば生徒には必用なる作文寶典なり

文學士高田早苗君
文學士井上哲二郎君 序文　吉田巳之助君譯述

成功遂志 勸學要訣

全一冊 正價三拾錢 郵税三錢

學問を修むるは猶ほ海に航するが如し、彼の航海は始めより漕舟の術に熟し、且つ其の到達すべき目的地を定むるにあらずんば、得て彼岸に達すべからず、學問も亦然り、平生修學する爲に服膺すべき規律を守らず、亦其の學問の目的を定むること無んば、數年の苦學も遂に成る所なく、徒らに世路風濤の險に妨げられ、中道にして檣折れ、楫摧け、空しく望洋の嘆を發して止むべし、此書はスマイルス氏のスチューデントマニュアルに據り、學生必須の事項は細大漏らさず之を網羅して以て學海航行者の指針と爲せるなり

文科大學講師文學士高津鍬三郎先生校閱
下野遠光。山崎庚午太郎兩君編述

日本文學集覽

全一冊 上製　正價 五拾錢　郵稅 拾錢

本邦文學の趣味漸く吾國人民の知るところとなりたれども尚ほ未だ不滿足の感なき能はず、本舘先に文學、歌學の兩全書、及德川時代の書類を刊行して、大に讀者諸君の喝采を給はり、冊每に三四版に至らざるものなかりき、此書も亦本邦文學の由來及碩學の名論卓說を論述したるものにて、和文史、和歌史、國史及び法制等を詳述し、特に篇每に教草といふものを設けて學者の參考となるべきものを掲載せり、其文躰や明晰、其筆力や流暢、殊に有名なる高津文學士の助筆になれるものなれば、その一大好書たる推して知るべし、洛陽の紙價爲に貴きを得ば幸甚

後藤點本 五經

十一冊 木版　正價 壹圓四拾錢　郵稅 錢

四書五經に良點本と稱せられ方今世上に專用せらるゝ者は後藤點なり抑々後藤點は道春點の難讀を改訂修補し專ら平易通解せしものにして是皆講讀者の熟知する所なり本舘は世に良點本を紹介し且つ文字鮮明製本堅麗なるを以て講讀者の爲め便益を與ふる所少なからず請ふ陸續愛顧の榮を賜はらんことを

栗原亮一。宇田友猪兩君編纂

板垣退助君傳

卷之一 上製　正價 九拾錢　郵稅 拾貳錢

今や自由黨總理板垣退助君の傳記栗原宇田兩氏の手に成る蓋し栗原氏が君と十數年來の素交有る最も能く君の閱歷を悉くす復た事實の正確なるを疑はず凡そ東西の廣き古今の久き未だ必しも英雄偉人に乏しからず然れども其遇の離奇變化而して能く難を排し紛を釋き經國の大業を奏せし者我が板垣退助君の如き果して幾人かある而して君の事歷を察するに實に三期の變遷を見るなり（第一期）は王政維新の遭際に於て風雲龍騰の勢を以て雄偉なる革命家として見れ勤王の志士と深く結んで討幕の謀を運らし又奧野に長驅して金戈鐵馬の間手に唾して絕大の武勳を博せり其の（第二期）は進んで廟廊の班に列し在朝の政治家として藩を廢め縣を置き士の常職を解き四民均一の制を建て宛も勁風乾擢を蹉くが如く蹶騰なる識力能く王業の恢弘を圖れり而して（第三期）は身を江湖の濶きに處し心を魏闕の遠きに擧げ在野の政治家として自由を教へ民權を鳴らし刻心瀝血の餘茲に帝國萬年の基礎を築く顧ふに幕末騷亂の時より延ひて立憲政治の今日に至る其間凡そ三十餘年治亂盛衰世勢の趨向人事の推遷も又悉く包括して君の傳記に存す即ち君の傳記は擧げて一部の維新革命史、政黨變遷史、立憲政史に充つるを得べし今其第一卷正に成れり其卷中の要目は君が提孩より壯時に至る迄の奇行●藩政に參與して容堂公を輔翼したる事跡●藩內尊王佐幕兩派分岐の際に處したる擧動●江戶に入て四方の志士と結託し討幕の擧を企てたる事情●王師に將として東征し會津城陷落に至る迄の狀況を記し以て筆を收む且つ東北の戰圖、勤王志士の書牘、板垣君始め其他人物の肖像を鮮明雅麗なる寫眞石版として之を挿み一目の下歷然として當時の形勢を指さしむ乃ち板垣君の鬚眉面目躍々として照らすあり實に是れ志士必讀の良書なり

陸羯南先生序。三宅雪嶺先生跋。國分青崖先生贊
文學士 千頭清臣先生述。宮崎晴瀾君編綴

ソクラテス

全一冊　正價 拾貳錢　郵稅 四錢

教育社會に其人ありと知られたる、文學士千頭清臣先生、曩きに鹿兒島造士舘の教頭となり、一朝其地を去らんとするに臨み、舘中の子弟を集め、懇ろに希臘の大聖ソクラテスの事を語りて、別を爲せり、此書は即ち先生の演述を、宮崎君が魁麗奇峻の筆によりて編述せられたるものにして、陸羯南、三宅雪嶺、國分青崖三先生の序跋贊あり、全國の青年諸君は、之を一讀して必ず奮起する所あるべし

想像子智外先生著

空前絕後 世界大演說會

全一冊　正價 拾貳錢　郵稅 四錢

近來日本社會の演說流行極りて滔々皆是れ陳腐に落つる所俄然一大波瀾を起し奇想天外より下りて蘇秦の發起と爲り古今列國の哲人君子英雄豪傑等各種異樣の人物十有五名各々嘗て言はんと欲して未だ言はざりし所の思想幽玄の秘を闡き雄辯滔々一瀉千里の勢を以て空前絕後の一大演說會を開ける者は即ち本書なり千歲の一遇天の與ふる奇書失ふ可らず乞ふ大方の諸君疾く一本を求めて人後に落つる事勿れ

從四位文學博士重野安繹先生考證題跋

赤穗義士眞蹟帖

全一冊 帙入　上製 貳圓五拾錢　並製 貳圓　各通運料 三拾錢

赤穗義士復讐の事蹟今を距ると二百有餘年の上にあり而して其忠誠大義日月と光を爭ひ兒童走卒に至る迄其名を知らざるは無く亦其風を聞て感奮激勵せざるはなし眞に是れ千古の快擧美談なり北越の豪農長谷川某氏最も赤穗義士の偉蹟を慕ひ資を惜まずして其眞蹟を集めんと欲す偶大石良雄以下同盟四十七人及び其事に關係最深き者若干人との手筆を蒐集せし一卷を得て多年之を珍藏す實に希世の寶什なり重野文學博士嘗て之を見其湮晦に埋沒するを惜み慫慂して石版に轉寫し之を世に頒たしむ弊舘

特に撰まれて石版印刷の事を囑せられ辛苦經營して業今全く成る其書は概ね義士が相共に贈答せるものにして原書の形は毫も伸縮する所なく一點一畫も其眞に違はず眞個に書は能く其人の性情を發揮す一度之に對すれば義士の音容髣髴さして眼前に現はれ緇閲の間覺へず肅然さして容を改め頑夫も廉に懦夫も志を立つべし義士の風を慕ふ人々は須らく坐右に備へられて可ならん

勝安芳伯著 流芳遺墨 附追贊一話

石版摺 帙入 正價壹圓五拾錢 郵稅拾六錢

眞蹟目次

八代將軍吉宗公　室鳩巢　貝原益軒　細川重賢　石川忠房　漂民幸太夫　高野長英　藤田東湖　大原重德　村田新八　横井小楠　矢部定謙　岩瀬忠震　中江藤樹　木下順庵　上杉治憲　柴野栗山　柳里恭　賴山陽

岡本成　岩倉具視　僧月照　堀田正睦　井伊直弼　水野忠德　山岡鐵舟　大岡忠相　伊藤仁齋　深草元政　松平定信　中川忠英　太田南畝　高島秋帆　戸田忠敬　西鄉隆盛　山內容堂　成島司直　川路聖謨

鳥居忠耀　熊澤蕃山　釋契沖　毛利重就　尾藤二洲　松尾芭蕉　本居宣長　箕作元甫　島津久光　伊地知正治　木戸孝允　水野忠邦　杉田正鄉　下河邊長流　荻生徂徠　加茂眞淵　中井履軒　山鹿素行　林子平

羽倉用九　島津齊彬　坂本龍馬　鍋島閑叟　男谷信友　新見正路　大久保一翁　新井白石　山崎闇齋　池無名　古賀精里　伊能忠敬　渡邊登　德川齊昭　姉小路公知　大久保利通　佐久間象山　阿部正弘　江川英龍

大鹽平八郎眞蹟

畫箋紙 石版摺 正價三拾錢 郵稅貳錢

右は子爵品川彌二郎公秘藏の眞蹟を撲寫したるものにして字々飛動するの勢あり額面又は卷物習字本に適當のものなり

憲法發布式之圖

畫箋紙 石版摺 正價廿五錢 郵稅貳錢

右は憲法發布の實況を洋畫專門家波々部氏の寫影したるものにして人物は殊に似顏を寫し見るものをして此の盛式に列するの思ひあらしむ額面には尤も適當なり

東洋之壯觀 日光山之眞圖 附錄 日光案內一册

全一枚 銅刻 正價拾五錢 郵稅四錢

天下無雙の名勝さ聞えたる、日光山壯觀雄景は收めて、鮮明美麗の本圖にあり。附錄には日光案內書あり一々之を詳說す。三伏炎夏の日、此名勝に遊び、淸風流泉を樂まんさするものには、低廉輕便の良袖珍なり。

鹽溪紀勝

文學博士重野成齋。文學博士川田甕江兩先生序文

蘭田 奧三郎兵衞君著

全一册 唐裝帙入 正價貳圓五拾錢 郵稅拾四錢

鹽原の溫泉は下野國鹽谷郡鹽原山の麓にあり、山水の風景畫の如く、鑛泉の効能神の如し、暑避くべく、痾養ふべし。東北鐵道那須停車場を距る六里、東京より一日程さす。本書は商界の英物にして、詩文丹靑の妙に兼ね通ずる奧蘭田君が、東京より鹽原に遊ふの紀行にして、沿道の勝地は流麗の文さ、雄渾の詩さ、雅健の畫さを以て、且つ賦し且つ描き、傍はら其地に產する王石竹木角牙水晶化石等を以て當代の名家に囑し、印章數十顆を刻せしめて之を捺す、加之溫泉の性分病症の主治を首さし、古今人の該地に於ける、傑作の詩文を網羅す、韻士雅客の坐右の珍、鹽溪探勝の爲めには、無二の好案內なり。

家政の栞

女子高等師範學校長 細川潤次郎先生序文

華族女學校長 女子高等師範學校助教諭 共立女子職業學校講師 寒澤振作君著

全一册 正價貳拾錢 郵稅四錢

本書は尤も多數なる中等社會の婦人を標準さして平易に家政上の事柄を述べたるものにて其目次は總論に於て主婦の務めの貴重なる所以を論じ二章以下時間の儉約、物品の整頓、品物の時價、貯蓄、經費、手藝、物品の保存、雇人の待遇、室內の取締、家屋の構造、廢物利用等全篇十二章に分ち詳密に辯せしものなり請ふ良妻淑女一閲して家政上の智識を得られんとを

閨秀錦囊 日本女禮式

一名婦人一代重寶鑑

坪谷善四郎君著

全一册 帙入 正價五拾錢 郵稅拾貳錢

目次 總論 人間に禮式の大切なること 婚姻 ●日本の婚姻禮式 ●支那婚姻禮式 出產 姙●

娠中の心得附姙娠中の養生法●出産の心得●産後の心得●子を育つる心得附子守りへの申渡

教育。奉仕

●夫に事へる心得●家族に對する心得

交際

●起居動作の心得●給仕の心得●日本料理饗應の禮式●西洋料理宴會の禮式●食事の心得●身じまひの心得

諸藝

●詞つかひの心得●作文のしなり●和歌の心得●茶道の嗜み●挿花の心得●香道の嗜み

經濟

●衣服裁縫洗濯染め樣の心得●衣服洗濯のと●飲食料理獻立の心得●住居の心得●奉公人を使ふ心得●病人あつかひの心得●金錢出入幷に貯蓄のこと

讀書

女今川●女子訓●女小學●女大學●愚蒙いさめ草●婦人六德和解●女五常訓●米婦人心得草●やまと言語心得草●女孝經●介婦の戒め

保田安政君著

商業讀本

全三冊 一冊拾三錢 郵税四錢

單に枯淡無味の結構と文字を以て小賣仲買問屋銀行會社貨幣手形等の解釋を排列したるの書は世已に乏しからずと雖も是等の外尚ほ商業地理の歷史經濟簿記算術書信商品等廣く商業學科の全躰に涉つて其要を摘み萃を拔き經傳新文字簡潔用意周到巧に之を說明するの間にて立身致富の要訣を示し內外豪商の列傳を揭け鮮麗優雅の圖畫を挿み少年者をして一誦一讀其難澁倦厭を覺ふるに遑あらずして早已に商業上の智識を磨き德行を修めしめ而て眞個に適實に讀本の用に供すべきの書世未だ之あらず之あるは實に此商業讀本を嚆矢とす本書の特色實に是に止らず主として忠君愛國の大義を明にし切に勤儉着實の美德を奬め嚴に豪逸輕奢の惡風を戒め上は忠良の臣民と爲り下は有爲の商人たらしめんと欲する其造詣の深遠く亦此讀本に於て始めて見る所たり故に本書は高等小學校尋常商業學校幷に其豫科速成科夜學科等の讀本若くは其他諸學校の商業教科書に適當なるのみならず又一般商業に志す人若くは現に實業界に在る人に向つても慥に一讀の價値あるべきなり

天城安政君著

商業教科書

（文部省撿定濟）

全一冊 上製 正價六拾錢 郵税拾貳錢

高等小學校用商業教科書の世に出づるもの本書を以て第一とす其編たる分ちて度量衡、通貨、郵便電信、利子、貯金送金、運送商店及會社、賣買、金融、相場、保險、貿易、商業單複簿記の十となす每編講話摘要、教授要領、教授方法復習及應用問答等の數項を擧げ用意懇到說明精緻一點の間然すべき所なし其教則大綱第十七條の旨趣に適合せると教科用書として一大良書たるは勿論商家の子弟をして讀しめ商業上の智識を與へ商機を敏捷ならしむる等其裨益する處豈鮮尠ならんや

米國シカゴ商業專門學校卒業深町藤藏君著

米國商家實見錄

全一冊 正價三拾錢 郵税六錢

新たに國を東半球に始めて、未だ百年に過ぎず、而かも其の繁榮富强は年々に歩を進め、駸々乎として旭日の東天に昇るが如きものは北米合衆國と爲す、方今宇內の各國、森羅星列、其數十百啻ならずと雖ども、人皆一意實業の振起に力め、鬪爭を避け、侵略を圖らず、唯だ平和に勤勉努力して富實を增殖せんと欲するの美風は、米國に於て始めて之を見る、其年々富强の度を進めて、今や世界に雄視するもの豈故なしとせんや、其俗須らく學ばさる可らず、本書は著者久しく米國に留り、細かに其國商家が日常營業の實況を視察し、其の致富の原因を究めて之を詳述したるもの、實業に由て身を立て家を起さんと欲する者には、無比の好師友なり、

福澤諭吉先生立案 福澤一太郎 仝捨四郎君筆記

實業論

全一冊 正價拾錢 郵税貳錢

今の時代は實業時代なり近年實業界にも頗ぶる活機を生じ外國貿易より內國の製産業、金融、經濟のことに至るまで年一年に面目を新たにして將さに『實業革命』の時代に近きたりとて三十年來世故に慣熟し事態に老練なる福澤先生の活眼早くも茲に注ぎ其の奇警傑拔の識見を以て親切に我が實業界に方針の論じたるもの此の書なり之を讀まば開國以來二十餘年間の實業進歩の大體を明かにするのみならず今後の方針明確にして我が實業者を益すること至大ならん苟くも時勢に後れざらんとする者は是非此書を一讀せざるべからず

三井銀行京都支店長小野友治郎君著

ブールス

一名 取引所の眞相

全一冊 正價五拾錢 郵税八錢

取引所法實施せられ、各種の取引所は將さに遠からず、全國到る所の都會に設立せられんとす、其の法律の規定甚だ寛大にして、株式會社組織、會員組織、撰む所に任かせ、定期取引、直取引、延取引等各欲する儘に行ふを得、此制にして正しく行はるゝを得ば、物價の平準を保ち、商業取引の圓滑を助くること大なるべし、唯だ世人往々取引所の眞相に通ぜず、之を以て賭博類似の場と爲し正人の臨むを恥づるものあり誤れるも、甚はだし是畢竟取引所の何たるを知らざるに坐す本書著者往年特に歐米各國の取引所制度取調の爲に巡廻の途に上り、歸朝の後此著あり、蓋し方今我國の新定取引所法の如き、亦資を此調査に取るもの多し世の取引所に臨む人は勿論、凡そ商業に從ふものは、皆座右に備ふべきの書

なり、本書從來定價金壹圓なりしを、今般其半額を以て諸君の需に應ず、

高市佳太郎。川上忠平兩君纂譯

●貨幣問題　全二册　正價卅五錢　郵稅四錢

●本書には詳細なる圖解二十餘を添ふ

外國銀貨の大暴落は、現今に於ける經濟社會の、大波瀾なり、大驚慌なり、今や地を捲き、風を起して、我日本國に來る、目前及び將來に於ける、救治の方法を論じ、健全正確なる、豫防法を指示するに止まらず、仔細に西洋各國に起れる、銀貨の歷史、浮沈、その影響及び其の結果を敍説したるものは、朝野新聞經濟主任記者の手に成る、貨幣問題是なり、世に實業家、經濟家饒かに、再讀の價値あり、

文學士天野爲之君著

●銀行論　全一册　正價廿五錢　郵稅三錢

銀行は金融の根幹、資本集散の樞軸にして、商工業振否の分るゝ所は實に此の機關の能く其効用を盡すと否とに因るものなり、我邦人未だ銀行の本性に通ずる者少なく、爲に金融の圓滑ならざるを歎き、或は商工業の扱はざるを慨く、憫れまざる可けんや、本書は銀行の性質効用より、其の處理宜しきを得ざれば害毒を社會に流がす所以に至るまで具さに之を論じ、而して其行文は流暢平易何人も能く其旨義に通ずるを得せしむ。世の經濟の學に志さす者は固より論なく、苟くも殖産興利の事に意を注ぐ者は、旦夕此書を讀みて金融機關の利用を知らば其利益する所廣且大なるべきなり、

遠藤芳樹君著

●日本商業志　全一册　正價廿五錢　郵稅三錢

我が國古來商業の事を敍述したる歷史なし、之あるは實に此の日本商業志に始まる、蓋し四面繞らすに海を以てし、近く亞細亞の大陸を控へ、遠く亞米利加の大陸に對し、南方は南洋の諸島嶼に枕す、天然の地勢最も商業に適するの國にして、邦俗商事を重んぜざるが爲に、常に微々不振の觀を免かれざりしは甚た惜むべし、然れども此の天與の商業國豈に古來全たく商業事項の記すべき者無らんや、唯だ封建の弊習士農を重んじて工商を賤視したれば、爲に其事湮滅して傳はらざりしのみ、細かに之を探れば我國商業の盛衰沿革せる所以のもの甚だ研究を要するあり、本書之を敍すること甚だ詳かなり、

米國商業博士フリードレー原著　阪牧勇助君譯補

●金即權 能散能聚 金　正續合本　全一册　正價三拾錢　郵稅六錢

鳴呼金なる哉金なる哉金力の在る所は權力の存する所、地獄の沙汰も金次第、阿彌陀如來も金の爲に光る、金ある者は愚者も賢に、金なき者は賢者も愚なり、此萬能力を有する金を得るの道如何、本書之を説くと最も委はし、本書が發兌以來此に十數版を重ねたるにて其の眞價を知るに足るべし、

農商務省農務局纂訂

●大日本農史　全四册 上製　正價貳圓五拾錢　郵稅四拾貳錢

肥沃の土地溫和の氣候最も美穀を産するに適す古來我國農を以て國を立て豐葦原瑞穗の國の稱あるは宜へなり故に歷朝常に民食を重し萬機政務主として農桑に原づく然れども物換り星移りて史書散逸し今にして之を探討するにあらずんば遂に文獻の徵すべき者なきに至らんとす農商務省は此に見る所あらせられ明治十六年四月省中に農史編纂掛を置き品川子爵當時農商務大輔として之を統督せられ前元老院議官田中芳男君之が長となり文學博士黑川眞賴溝口傳三織田完之の諸君をして編纂に從事せしめ拮据六星霜を閲して成れるもの即ち此大日本農史となす上は神代に始り下現時に及び上下二千五百載農業上の事蹟は細大漏すをなし其參考書の如きは官庫の秘錄に徵し一に各藩の圖書を探り凡そ八百七拾餘部を渉獵す其考據の該博と記事の正確とは固より論なく全編十五卷今洋裝に改めて美本四冊と爲し尙ほ二千頁に至る實に近來無比の大著述なり此の豐葦原の瑞穗國の美穀を食する者之を熟讀せば其の利用厚生の道に於て發明裨益すると蓋し夥多なるべし茲に縮刷發行の榮を被むり今回漸く其功を奏し廉價を以て世に公にす江湖の諸彦幸に高評を賜へ

帝國大學總長文學博士加藤弘之先生序文

アゲツルド氏著述　法學士織田一君譯述

●日本振農策　全一册 上製　正價卅五錢　郵稅六錢

民力休養地租減輕の大聲は我三百代議士が人民の輿論を負ふて帝國議會に要求せし反響なり而して我國現時の農業は依然舊套を株守し毫も改良の見るべきなし本書は我國の爲めに萬世の大計を定めんと欲し日本農事の現況より日本形勢の急其他農事改革案より外國より及ぼせる影響等敍述したるものにして國民最要の必讀書なり

閑院宮載仁親王殿下題辭
農科大學園藝講師從五位福羽逸人先生著

蔬菜栽培法

全一冊　正價七拾錢　郵稅拾六錢

本書目次

○總論●蔬菜栽培の現況を論じて將來の方針に及ぶ●蔬菜園の位置方位及氣候●土質●客土●園用水及灌水法●蔬菜園の形狀及區劃●肥料●園地の膨鬆●床地●床場●軟化室●循環播種●菜園に要する器具●貯藏法●蔬菜類別

根菜類●葱頭●瓜哇薯●菾菜●胡蘿蔔●蕪菁●洋芹●蘿蔔●牛蒡●甘藷●卷丹●蓮●甘露子●慈姑●菊芋●薯蕷●波羅門參●きくごぼう●蕪菁甘藍●菁芋●毬根塘蒿●緒

葉莖菜類●石刀柏●甘藍●姬甘藍●絲葉甘藍●毬芽甘藍●花椰菜●木立花椰菜●山東菜●歐冬●水薪●蘇●筆頭菜●茼蒿●料理菊●湖南竹●塘蒿●野苣●萵苣●立苣●苦苣●濶葉苦苣●縮緬苦苣●野生苦苣●シコレー●ウヰトルーフ栽培法●韮菜●酸模●朝鮮薊●菠薐草●蒲公英●みづたがらし●野蜀葵●土當歸●葱●カルドン●はまな●紫蘇●[illegible]蓬●おかひじき●蕨菜●蕃杏●小松菜●芥菜●大芥●京菜●蕓薹

蓏果類●甜瓜●胡瓜●蕃茄●菜豆●豌豆●蠶豆●苺●茄●南瓜●西瓜●越瓜●苦ノ瓜●絲瓜●冬瓜●扁蒲●刀豆●鵲豆●豇豆●玉蜀黍●あめりかれり●防風

菌類●洋菌

香辛料類●旱芹●蕃椒●薑●蒜●わさびだいこん●辣蕎

本書は園藝に有名なる福羽逸人君が多年の實地經驗と歐米に在て研究せられし實際とを一々學理に照し東京内藤新宿植物御苑に實施し且つ駒場なる農科大學々生に講述せられし本邦及び歐米の蔬菜栽培法にして世上栽培書多しと雖も此書の如く和洋共に備り且つ實際に適切なるものなし本館幸に全君に乞て之を刊行するを得たり世の園藝及び農事に志す諸君は御一讀あらんことを望む

農科大學講師農學士横井時敬先生著　（文部省撿定濟）

農業讀本

全二冊　正價廿四錢　郵稅六錢

農業は立國の基礎蒼生の賴て其命脈を維く所なり然り而して世の風潮は幾多の少年子弟をして徒に輕浮高諺を喜ひて勞力を厭ひ空論虚談を快とし實業を賤するに至らしむ此勢にして止ますんは民生疲敝して立國の基礎撼搖するの憂あらん豈に慨して慊せさるへけんや是れ方今實業教育の必要なる所以にして此書の成る之に由れり此書意を用ふる所特に多し獨り農界の事物に就き其義を説き理を解するのみならす怠惰と奢侈を戒め勞力と勤勉を勸め加るに忠君愛國と護國上國民の義務を陳ふると丁寧反覆要は少年子弟をして忠實の國民となり老練の農家たらしむるを期するにあり故に本書は高等小學の農業科若しくは農學校の教科用に供すへく又尋常實業家農學の初歩を修むるの資となすに足れり

瓜生寅吉君譯述

頤氏材力論

全一冊　上製　正價五拾錢　郵稅八錢

住居は人間生活に一日も缺く可らざる要件衣食と並び稱せらる然れども住居の家屋を建築するや我國にては古來唯だ經驗を以て傳ふるのみにして學理に由らず故に其技甚だ進まず近世に至り寧ろ退歩の感無しとせず泰西諸國の建築術は經驗に加ふるに學理を以てし年一年進んで止まず是れ深く察せざる可らず本書は佛國の建築學士アンダーソン氏が金石土木凡そ建築材料の性質を論究し其利用の方法を説きたるものにして我國に在ては古來未曾有の新書世の建築に志ある者は皆一讀せざるべからず

內務大臣官房報告課編纂

日本帝國 國勢一斑

（第十二回　廿六年改正）

全一冊　上製　正價三拾錢　郵稅四錢

土地戸口農商業水產貿易衞生司法議會に至る迄凡て我日本國の大勢一見手と共に眼下に落つる國勢一斑第十一回迄は定價六十錢なりしを今回弊館發賣の榮を得たりしを以て更に從來の半額となし以て江湖諸君の需に應ず

伯爵勝安芳公著　海軍大佐本宿宅命君鈔述

海軍歷史鈔

全一冊　正價三拾錢　郵稅八錢

勝伯は我邦海軍の創業の祖たり、躬親ら其術を修め、之を邦人に傳授して又海軍卿の職に在りき、曾て其躬行實踐せし所に據り、海軍創業より慶應末年までの事を述べて海軍歷史を著さる、固より他人の爲す能はざる所、而して天下の寶典たり、只其浩瀚に失するを憂ひ、海軍大佐本宿宅命君の鈔畧せられたるもの苟くも國家に志ある者の熟讀せざるべからざる書なり

樞密顧問官勝安芳君題辭
海軍中將伊藤雋吉君序文

列國海軍提要

海軍大佐本宿宅命君著

全一冊　上製　正價四拾錢　郵稅六錢

海國の强は首として之を海軍に望まざる可らず而して我帝國は海國なり亞細亞大陸の岸頭に表立して東洋の安危を決するの要地を占むるものなり

り此に於いて輓近海軍擴張の論朝野に囂々さして宛然國家の一大問題さなれる者の如し然りさ雖も火鐵世界の外に立つて火鐵世界の事を談ずるは所謂群盲器を評するものゝ亞類のみ若し夫れ艨艟北海の濵に集り甲艦東海の岸を衝くの曉に至れは此輩其れ果して何等の用をかなさん、本宿海軍大佐夙に之を患へ列國海軍の要を集め彼此相考較して之を一機軸に卷き以て大に帝國海軍擴張すべき所以を論ぜらる其說く所懇切にして細鉄を苟くもせずよく空論家をして背後に瞠着たらしむるの値ひあり世の海に觀る所あらんさする者此書に就き之を求めば則ち其得る所盖し尠少ならざらん

政治新論

文學士三宅雄二郎先生序文　坪谷善四郎君著

全一冊　正價貳拾錢　郵税四錢

地方制度は既に實施せられ帝國議會は將さに開設に近つき都鄙至る所政論勃興し人皆政治熱の爲に狂せんさするの今日に當ては粗策誇大の空論の爲に小は一身一家を誤り大は世上の公衆をも過まつ者無きを保せず此書は此等政熱に逆上して迷途に彷徨する空論者の爲に熱を醫するの清涼散さ爲し暗を照らすの電氣燈さ爲さんとを期し主さして學理上より前記の各項に就き簡明平易に論述したるものにして議論周到文章簡潔世の政治思想を抱有する者は以て坐右の寶典さ爲す可く演壇に上ぼつて雄辯を皷せんさする者は以て六韜三畧さ爲すに足るの好著述なり請ふ一讀して其言の誣ならざるを知れ

政治原論

法學士石原健三君著

全一冊　正價廿五錢　郵税三錢

政治熱漸く上騰して人々皆狂するが如きも眞に能く政治上の學識を有する者幾ばくもなきは我邦近時の通弊なり石原法學士此に感ありて廣く歐米諸大家の所說に據り之を我國の風俗人情に鑑みて著作せられ世の政海に航する者の磁石たり燈臺たるとを期せられたり

財政學

法學士橫田秀雄君著

全一冊　正價廿五錢　郵税三錢

吾人が日夕大旱に雲霓を望むが如く翹首して渇望せる帝國議會は將さに十一月より開設せられんさす今夫れ此議會に於て最要部の議題さなるべきものは何ぞさ云はゞ專ら財政の事に屬すべきや必せり國家の依て以て存立する所以のものは其政務執行の諸機關存するが爲なり而して其諸機關の能く休止することなく運動する所以のものは經費の之に供するものあればなり實に國家の費用は國家存立の大基礎なり然り而して彼の經費に充るの資金は自から湧出するにあらずして全く國民の懷中より徴收せざるべず然かららば則ち經費の多少は忽ちに其の影響を全國民の頭上に及ぼし直接なる利害休戚を感せしむるものなり故に國家存立の爲に經費は之に供せざるを得ざるも無用の經費は全く之を削除し且成るべく少なき經費を以て成るべく多くの效用を爲さしむるの方法は實に財政の主眼さする所にして租税や國債や官有財産や其他の手數料や皆是れ國家の經資の收入を得る方法にして國債償還や帝室費用や諸官廳費や抑是れも又地方若くは民間事業の補助や皆是れ國家の支出すべき費目なり此の支出を計りて收入を爲すべき積算は乃ち豫算表にして之に依りて收支出納を實行するは會計の責任なり其會計執行後其當否を檢査するは是れ會計檢査の任なり總て此等立法會計行政會計及司法會計のことを說明するは財政學の本分にして實に國家存立の根本さ云ふべし本書の目下に必要なるは多言を要せんや

歲計論

文學士添田壽一君著

全一冊　正價廿五錢　郵税三錢

今や歲計豫算は帝國議會の最大問題にして、天下の人は皆頸を伸ばして其議定の如何を望み、之が豫算案に對して、議定の意見を抱持する者に硬派あり、軟派あり、之が爲に壯士製ひ、警官備り、議論紛々、風物慘憺たり、此の時に當りて、眞に能く國家歲計の原理を說き、豫算案の調製議定及び施行を論じ、詳委綿密、眞に能く議員及行政官其人の爲には、經綸の指南車さなり、他の全般人士の爲には歲出入の眞相を指示するもの、蓋し此書の如きは、從來未だ曾て有らざる所なるのみならず、亦目下の最大必要の良書なるべきなり、

統計學

總計專門家吳文聰君著

全一冊　正價廿五錢　郵税三錢

臆測推斷の空論其の蹟を韞め引證的確の正理獨り其勢力を有するに至るは蓋し必然の勢にして議論の當否事實の正邪を判別するは統計の力を假るより善きはなし然れさも我國此學未た幼稚にして浮誇推斷の論說を往々會議場文學上に行はるゝは歎すへきことに屬す此書は此憾を除かんが爲め統計の原理さ應用さを詳細親切に講明せるものなり

國際私法

法學士伊藤悌治君著

國際公法

法學士石川錦一郎君著

合一冊　正價廿五錢　郵税三錢

國際私法

條約改正の問題は方今世の政治家が最も注目する所なりと雖も而かも其條約を改正して愈々內地雜居の曉に至り歐米人民陸續我邦に入り來りて我邦人と萬種の取引を行ひ又は結婚養子等の關係を生ずるに當り其人々常に日本國內にのみ住居せずして頻りに彼我の數國の間を往來しつゝある人々間に於て生ずる所の法律上の關係は何れの國の法律を以て之を管轄すべきかは將來必ず屢々發すべき問題なるも人の能く目を此に注ぐ者稀なるは抑々何等の不注意ぞや是れ國際私法の攻究の今日に在て最大必要なる所以なり何となれば此等の問題は總て國際私法の範圍に屬すればなり

國際公法

外交の事日に漸く複雜ならんとす此際外國交涉の法理に通ぜずんば學者政治家皆其事端を處理論究するに堪へざるべきなり本書は泰西公法學の諸大家最近の學說を採り流暢の筆と博洽の識とを以て極めて明晰に此法の一大原理を論究し以て世の政治法律經濟の諸學を講ずる所の人々の爲めに一大稗益を與へんことを期せり

法學士龜井英三郎君著

●會議法 ●撰擧原理

合一冊 正價廿五錢 郵稅三錢

會議法 多數の智識を集めて最良の方法を案出し鄭重謹愼以て事を處するは實に代議制度の原則にして世の開明に進むに伴ひ萬種の事務其の公私に論なく此の主義に依らざる可らざるは自然の勢なり唯た人々會議の理に通せずんば代議制を用ゐると雖も其効なし此れ先づ會議法の研究を要する所以なり況や府縣郡會市町村會を始とし吾人が日夜渴望せる帝國議會も將に開會の期に迫れり世の公會の席に列するの任を有する人誰か會議法を講ぜずして可ならんや本書の如きは實に目下必要の良書なるべし

撰擧原理 卓群超出の人材を撰擧して公共事務の代表者たらしむるは代議制度の一大原則にして議定と執行とに論なく皆此の主義を應用すると實に今后の我國の制なり然らば則ち撰擧の事豈深く之を研究せざる可んや我國人士未だ撰擧の事を慣れず故に往々貴重の撰擧權を遺棄する者あり豈に可不歎哉本書は我國撰擧法會議法等に於て最とも通曉熟練の稱ある龜井法學士の著なり

法學士嵯峨根不二郎君著

●經濟原理

全一冊 正價廿五錢 郵稅三錢

經濟學の一般の原理を未た其思想なき人にも容易く了解せしめんが爲に嵯峨根法學士近時流行の言文一致躰を以て極めて詳悉明晰に講述せられたり

法學士有賀長文君著

●經濟原論

全一冊 正價廿五錢 郵稅三錢

政治思想は全國到る所に勃興して沸騰點の頂上に達すと雖とも經濟思想は未だ冷淡にして躰溫以下にありて爲に說く所の政談は往々空理に流れて實際に適せず國力の如何を顧みずして偏へに黨派の軋轢を事とするは實に我國近時の通弊なり若し產業振はず金融壅塞し國庫空乏を告ぐるが如き時に於て高尚なる政論も亦何の用をかなさん若し夫れ經濟思想を養成せんと欲せば先つ全般經濟の原理を論したる本書の如きより研究せざる可らず

法學士天野爲之君著

●經濟學研究法

法學士嵯峨根不二郎君著

●應用經濟學

獨乙經濟博士ミハエリス君講述

●經濟學史

文學士坂谷芳郎君著

●日本會計法要論

四書合一冊 正價廿五錢 郵稅三錢

經濟學研究法 複雜錯綜せる經濟學の性質及び其研究の方法を簡單平易にして何人にも會得し得へく編述したる伊太利國經濟大學者コッサ氏の原著により天野文學士得意なる流暢の筆を以て譯述せられたるものなり

應用經濟學 經濟の理論を說くの書少なからざるも之を實地の問題に應用して學理と實際との關係を明かにするもの少なし伊太利の大經濟家コッサ氏其著す所の經濟書を理論と應用とに別ち而して其理論の部は世間之を記述するものあるも應用經濟は之を譯して世に公にせるものを見ず是れ嵯峨根法學士の此書を記述せられたる所以なり其議論の精細的證なるが上に文章は流暢明快なり

經濟學史 經濟の學近時之を研究するの徒少なからずと雖も其の古來の變遷沿革を知る者少し而して之を知らざるが爲に尚金貿易主義の得失重農主義の利害或は之を政畧上に實行したる所の成蹟に暗く專ら純正なる理論のみに因て此學の應用を爲さんと欲し時に蹉跌失敗を見ること屢しばなるは是れ經濟學の罪にあらずして實に學者の罪

なり而して此等の殷鑑に顧りみて眞正に此學の効用を發輝せんと欲せば先つ其の歴史を知らざるべからず本書は獨逸學協會學校に於てミハエリス先生の親しく講述せられたる稿本を請ふて之を出版せるものにして元より小冊子に過ぎざるも能く經濟學歴史の梗概を知るが爲には他の巻帙浩澣なる大作にも劣ることなきを保するものなり

日本會計法要論

財政の學識なきものは以て政治を談ずべからず財政の學識を得んと欲する者は先づ國庫出納の原理を知るを要す而して之を知るは夫れ實に此書なるべし本書は我國々會計法制定の衝に當りて最も多く力を盡されたる坂谷文學士の著に係るものなり

法學士江木衷君著

近世民法汎論

全一冊 上製　正價六拾錢　郵税拾錢

民法解釋の書其數少しとせす然れとも其の詳なるものは浩澣に過き、其簡なるものは粗略に失し、能く繁簡詳略の宜ろしきを得る者稀なり、況んや此等著書は僅かに字句の解釋に止まるか或は陳腐の舊説を臚列するに過きずして、能く英佛獨墺各國の法理を咀嚼し、採長補短以て最近學説を吐露し、快刀亂麻を截るが如く、明鏡の妖魔を照らすが如く、群疑を決し研嬢を別かち、浩澣に流れず、粗略に失せず、世の法海に棹さす者をして航路の磁針盤たらしむる者に至ては、絶て無くして僅かに有り、江木先生の此著乃ち此れなり、曾て刑法の著書盛んに出版せらるゝに當り、先生の刑法汎論は卓然時流に超絶し、無數の解釋書中に在て第一位の名著として聲價一世を壓倒せるは世人の明かに知る所なり、今此著は先生の苦心は更に前著に勝さること數倍なりといふ、其の良書たることは亦多言を要せずして可なるべし、今や刻成る幸に愛讀を賜へ、

法學士江木衷君著

法律解釋學

全一冊　正價卅五錢　郵税八錢

新法日に出で舊律月に改められ法律專門家も專門家ならざる人も之が研究と理解との爲めに前後應接に遑あらざらんとす惟ふに限りある法令を以て限りなき世上の事物を支配す法文如何に精細なりとも豈に能く一見して之を理解し各場合に適用して過ちなきを期するを得んや茲に於てか法律解釋學の必要生ず此書は法律解釋の原理を詳論して蘊きに世上の大喝采を博し爲めに洛陽の紙價を貴とからしめたる好著にして法官と學生とを論ぜず苟くも法學に志ある諸君は共に一本を坐右に備ふべき法典なり

法學士石原健三君著

法理學

全一冊　正價廿五錢　郵税三錢

時の古今と國の東西とに因て法律制度を異にせざるべからざるは人情風俗の異同に依て然るものにして亦止を得ずと雖も一般法理の原則に至つては猶示風鍼の方向に於けるが如く必らず其揆を一にせざるはなし故に英法家佛法家に論なく皆に學ぶべきは法理の學とす本書は乃ち一般法理の原則を最も親切に講明せる者なり

法學士神崎東藏君著

商法原理

全一冊　正價廿五錢　郵税三錢

一擧手能く鉅萬の贏利を攫取し一投足忽ち累代の家產を倒盡し浮沈常なく榮枯定らざるものは商業場裡に馳驅する所の人々の身上なり實に商業取引なるものは此の如く盛衰榮枯の頻煩なるものなりと雖ども之を統制する一定法規の設けあるときは以て能く需用供給相投合し賣る者買ふ者共に利益し社會分業の功用を發達せしむるを得べし我國從來商法典の設けなきが爲に時に技機的賭博的不正の商業行れて商海の波瀾を平地の上に起したること多く爲に奸者に福し正者に禍せること少なからざりしと雖も今や商法典は制定せられて我商業取引上の秩序此に漸く定らんとす唯だ之を實施するの時期に關して遲速の論爭ありと雖も法律は明かに明年一月より施行すべきことを命令し其期は既に五ヶ月の後に迫れり惟ふに法律を制定するも之を放擲し各人の皆之に通曉するを待つは猶ほ百年の淸を待つに等しく宜しく之を實施して當業者の必要に迫られ奮つて之が研究を促がすに如かざるなり若し夫れ商法の實施せられざる間は舊に依つて奸商利を博して正賈產を失ひ投機商業獨り盛んにして着實の取引日に衰退せざるを得ず此の商業の不振を挽回し此の信用の減縮を矯正し權利と義務との必行を保するは實に商法の實施にあり而して其の實施の前に各人は皆商法の原理に通せざる可らず商法の正文凡て一千六十條能く之を說明論究して繁簡詳略の宜しきを得何人にも之に通曉するを得せしむる者は蓋し此の商法原理の右に出る者稀なるべきなり

法學士城數馬君著

刑法原理

全一冊　正價廿五錢　郵税三錢

刑法に關する著書啻に汗牛充棟のみならずと雖も能く繁簡其宜を得て讀者をして容易く其要を得せしむる者稀なり先生此弊を避るか爲め久しく東西刑法の原理を探り廣く内外諸大家の說を叩き拮据經營遂に此著を爲す紙數五百頁にして刑法上の眞理を網羅せり

法學士平島爲平君著

民事訴訟法原理

全一冊　正價廿五錢　郵税三錢

民事訴訟法は将さに本年十一月より實施せられんとす世の權理を法廷に訴へ曲直に訴訟を爭はんとするもの皆訴訟の原理に通せさるべからず本書は平島學士得意の快筆を以て積年蘊蓄せられたる訴訟法の原理を最も詳委最正確に論述せられたるものにして職を法律に從はるゝ人々は固より論なく總ての攻法家は一般に必讀の好著なり

辯護士法學士朝倉外茂鐵君校閲　宮川大壽君著

現行民事刑事訴訟手續　全一冊　正價拾八錢　郵稅六錢

必らずや訴なからしめん乎、是れ各國立法者の皆望んで以て遂せんと欲する所、社會の衆人悉く之を希ふ所なるも、哀哉八間に弱點の多く、社會構成の圓滿ならざる、未だ爭論を見ることなきの美域に到ること能はず、乃ち訴訟を爲すを許さゞるを能はざるなり、然るに訴訟は直者必らずしも勝たず、曲者必らずしも敗ぶれず、能く手續を知り、之れに循て運動する者は、曲者と雖ども訴訟に勝を制するとを得るが如く、其手續を誤るものは直者と雖ども曲者に制せられざるべからず、而して訴訟は身の浮沈と家の興廢に關る、訴訟手續の考究豈に諸を忽にすべけんや、然るに民事訴訟法の註釋書に就き之を視るに、何れも皆な一片の理窟論に止まり、實用に迂なるを甚だし、中には實用に適ふべく作られたるものなきにあらざるも、杜撰盂瀆、實さに甚しく、一閱、嘔吐を催ふすに足る、身の浮沈に係り、家の興廢に關かる大なる所の訴訟手續を指示する書にして斯の如し、豈に社會の一缺點にあらずや、本館此に見るあり、此に本書の發兌に從ふ、本書は、其記する所は繁からざるも、又敢て粗略に流れず、訴訟を爲すものに注意すべき要訣より、必要缺くべからざる手續は、其文例を併せて之れを網羅し盡せりと謂ふべし、實に訴訟を爲す者の指南車たり

大審院檢事長從四位名村泰藏君題辭
司法省參事官法學士江木衷君
控訴院評定官法學士伊藤悌治君校閲
坪谷善四郎君著

市制町村制註釋　全一冊　正價拾五錢　郵稅六錢

本書の解釋正確詳密なるは既に江湖の定評ある處にして今や第十三版を發兌するに至れり曩に發兌の市町村議員必携と比較研究せば地方自治の要領を了知するに足るへし價格の低廉なるや又非常と言も可なり

文學士高田早苗先生序文　坪谷善四郎君著

增訂 萬國憲法　全一冊　正價拾五錢　郵稅六錢

本書英佛米獨等十三國の憲法正條を輯め之を沿革上より探らんが爲に今憲法略史を附記し又其正條を分析して解し難き所には略註を附記し以て普ねく江湖の需めに應ぜんと欲す蓋し他日政治海に楫を取り船を濟ぐの人々は勿論苟くも其船の乘客たる憲法の下に支配せらるべき諸君は必らず一本を備へて坐右に欠く可らざる也

鑛山局長和田維四郎君著　密圖入

帝國鑛山法　全一冊 上製　正價九拾錢　郵稅八錢

上下両院幾多の異論ありしにも關せず我が鑛業條例は廿五年六月一日より實施せらる金銀銅鐵石灰石油我國の鑛物は天下に充滿し力めて之を採取せば全土盡く鑄るべく焚くべき也世の殖產致富に志あるの士請ふ此書を讀て鑛山法律の規に通じ然後彼の山野滿地の遺利を採取して遺す勿れ

鑛山局長和田維四郎君著

坑法論　全一冊 上製　正價三拾錢　郵稅六錢

我國全國到る所最も多く遺利を存するものは鑛業にして金銀銅鐵の諸鑛を始め石炭石油の鑛物に至るまで地下に埋藏するもの其幾ばくなるを知らず眞に是れ山を鑄野を熔かして國庫を充實せしむべきの富源なり唯夫れ此等の諸業は從來未だ幼稚にして其規定も亦た疎なりき坑法上の訴訟屢々發生して當業者を苦しめ當局者を煩すや是れ目下完全なる坑法を制定し且世人をして普く坑法の原理に通曉せしむるを要する所以なり蓋し坑法中に許多の原理を包含するも單に法文を一讀して之に通ずるより難し和田鑛山局長此に感あり乃ち坑法の性質原理より歐米各國の典例に至る迄具さに之を論述して以て此書を編せらる本館其書の最も世に稗益あるを悟り請ふて之を公にす請ふ世の鑛業當事者當局者は勿論苟も富國利民の志を抱かるゝ人々は一本を求めて遺利の發掘を勉められんとを

北畠道龍師著

眞宗眞要　全一冊　正價拾五錢　郵稅六錢

眞宗は近世佛教の精華なるもの、其盛衰は直に佛教全門の隆替を來すか如し、故に佛教の隆盛を企圖するは、必ず先づ眞宗の教義を起し、佛教の眞髓を求むるを捷徑とす、北畠道龍氏博學治聞、夙に眞宗の法將を以て鳴る、後ち印度、歐羅巴を跋涉して、彼土の政教を觀察し、歸朝して大に佛教の改革を首唱す、其至誠の發揮する所說教となり、書冊となり、就中數十の卷帙世に著はれて、氏の德聲は益々其隆盛を極めたり、今又た本書を著はして眞宗の教義を詳かにし、併て抱負の改良を明かにせり、要之其記事簡畧、其義旨周到、平易流暢間々歐語を加へ、問答を挿み、委しく兩願成就の文を說示せり、嗚呼世の此點に注意する人は、請ふ早く此の寶卷を購讀して、氏が說述の高妙なるを知るべし。

博文館發兌

小學校教科用書採定廣告

東京學士會院從三位子爵福羽美靜先生校閲　東京女學館講師西田敬止君編
◉**帝國女子修身鑑**　全四册　定價一册拾二錢　郵税一册四錢

文科大學教授栗田寛先生校閲　國學院講師今泉定介君著
◉**初等日本歴史**　全二册　定價一册八錢　郵税一册二錢

大和田建樹君著
◉尋常小學**帝國唱歌**　全二册　定價一册七錢　郵税一册二錢

大和田建樹君著
◉高等小學**帝國唱歌**　全二册　定價一册拾二錢　郵税一册二錢

吉田正雄君著
◉尋常小學**珠算教科書**　全二册　定價上卷拾二錢 下卷拾八錢　郵税一册四錢

岡村增太郎君著
◉尋常小學**筆算教科書**　全一册　定價金四拾錢　郵便税八錢

印藤眞楯、岡村增太郎兩君合著
◉**幾何畫法**　全一册　定價金拾二錢　郵便税四錢

右各書ハ今回審査會ノ決議ヲ以テ**奈良縣。山梨縣。秋田縣。德島縣**ヲ始メトシ各府縣ノ**教科用書**トシテ採定セラレタリ

戸川残花先生著

三百諸侯

全部拾二卷 毎月一回發兌洋装

正價一冊（大判百廿頁）十二錢〇六冊前金六十七錢〇全十二冊前金一圓廿五錢〇郵税一冊四錢●一ケ年間ニ完成ス

第壹卷 三月廿日發兌

目次

第一越前　第二伊達　第三池田　第四蒲生
第五眞田　第六相馬　第七北條　第八佐野
第九松前　第十大村　第十一筒井　第十二奥平

花は櫻、人は武士、武士の精英は戰國の世にあり、足利の末葉にあたり風雨蓁然として江湖を暗くす叱咤して黒雲を掃ひしは三百諸侯の祖先たり、今や旗下八萬騎の一人戸川殘花先生淸艶の健筆を以て、名将勇士の美談を著述せられたり、先生が短篇に妙、史談に巧なるは世の知る所、實に此書は明窓浄几の伴侶。教壇講筵の材料、爐邊の教師なり、讀み來れば旭日に匂ふ櫻花の蔭に武士の劍を提げて立つあるが如き感ある可し。

小宮山綏介先生編輯

徳川太平記

全部拾二卷 毎月一回發兌洋装

正價一冊（大判百六十頁）十五錢六冊前金八十六錢全十二冊前金一圓六十錢〇郵税一冊六錢●一箇年間に出版完成

●第壹編 家康公 三月二十日發兌

徳川氏三百年間の大平は古今稀有の隆運にして社會文明の進歩殆んど其の項點に達せり隨て名臣賢相節婦義子の事跡、姦吏兇豎の行状を首め詩文の妙、工藝の奇、風俗嗜好の變等實に千秋に照耀すべきもの多し小宮山南梁先生は徳川時代の史乘に委しきと實に内藤耻叟先生と共に現代の巨擘たり今先生拮据勉勵して此の大著作に從事す其の一世を裨益し後代に補資する必らず大ならん史書篤志の諸君幸に御精讀あらんとを

本書目次

第一編 家康公	第四編 家綱公	第七編 吉宗公下	第十編 家齊公下
第二編 秀忠公	第五編 綱吉公	第八編 家重公家治公	第十一編 家慶公家定公
第三編 家光公	第六編 家宣公家繼公吉宗公上	第九編 家齊公上	第十二編 家茂公慶喜公

博文館編輯局編纂

廿七年四月一日出版

傳家寶典 明治節用大全

全一册洋裝背皮最上頗美本
紙數千四百頁
製本体裁●縱八寸八分横六寸七分厚サ二寸
正價 貳圓五拾錢
豫約實價 金壹圓五拾錢
通運料 二拾五錢

口繪（彩色木版）三都風景並風俗畫 四氏密畫
三島蕉窓。武内桂舟
富岡永洗。寺崎廣業

御宮城眞景寫眞石版。日本並に萬國地圖數葉挿入

節用の書、古來出版せられたる者數十種、皆な能く日常必需の事項を網羅し、之を坐右に備ふれば、事として辨ぜざるなく、機に臨み變に應じて、望む儘に用を達すること嚢の物を探ぐるが如し、然れども明治の聖世と爲り、泰西の新事物をして採用すること日に多く、人間生活の必要事項は盡く面目を改む、而して其明治新天地の森羅萬象を網羅し、日常坐右の寶典と爲すべき大節用集は未だ出でず、是れ昭代の大缺典なり、弊館久しく之を憾み、當代知名の諸大家に囑して材料を收集すること此に數年、漸やく編次して此の書を爲す、　皇室古今御歷代の系統、武家の系圖、和漢洋古今有名人物の傳記を始とし、衣服の裁縫、飲食の料理、各種の製造法、家屋の搆造、室内の裝飾、　庭苑の排置等は勿論、男女禮式、家政整理、女子手藝の方法、香花、茶湯、音曲、等の諸藝、農、工、商業、水産、養蠶、製茶等生産業の方法、男女日用公私用文例若くは歷史、地理、文學、理化學、事物起元、神社佛閣、名所舊蹟の由來、詩、歌、連俳、文章の作法、和漢洋宗敎の由來、開基者の傳記等總べて人間の處世上知るを要する事は、一として備はらざるなく、眞に古今來唯一の大節用集、　全編大版一千四百頁の中に集めて漏さず、江湖諸彦、請ふ幸に愛讀を賜へ、

横濱ガゼット新聞記者 井上十吉君英譯

英文忠臣藏

製本既成

全一冊大判和裝 富岡永洗密畫入 正價五拾錢 郵税四錢

日本演劇中の第一として、最も人を悦ばしむる『忠臣藏』は、其の事蹟最も美にして、文章結構亦最も妙を極め、淨瑠璃文中の冠冕たり、日本演劇文章の模範、日本人種忠義の典型として、之を宇内に誇揚するに足る。今之を廣く海外へも示さんがために、英文に飜譯して、出板す譯者井上十吉君は十一ヶ年間英國に學び、歸朝して高等中學校及學習院等の教授となり、後聘せられてガゼット新聞の記者となり、本邦英文學者の随一と稱せらる、其の能く原文の美を傳ふるや知るべし、卷中の挿畫は富岡永洗氏最も力を効したるもの、且つ用紙印刷製本の精良なる、皆日本文學技術の進歩を徴表するに足れり、請ふ英文學に志あるもの一讀あれ、

ウヰルソン氏原著 澁江保君譯述 （製本出來）

人類學

全一冊洋裝 正價拾二錢 郵税四錢

本書にはウヰルソン氏の人類學を、其儘に譯述したるものにて、人類の起原、人類の祖先、人種の區別、宇宙に於ける人類の地位、言語の起原及び區別、文明の進歩等を委しく說き明かし、且つダーウヰン派、即ち進仙論派の意見と、アガシッズ派、即ち創造論派の意見とを一目瞭然たらしめ、又附錄には、タイラー氏の古物學を載せて、第一世界及び第二世界なる、兩前世界の有樣を明かにし、第三世界なる現今世界との關係を示したれば、人類學并に古物學に關する諸書中に於て、最も簡明適切なる良書と云ふも決して不可なかるべきなり、

獨逸化學博士フーフェラント 獨逸醫學博士クレンケ 合著 坂田孫四郎君譯

長命術

全一冊寸珍 正價金拾錢 郵税四錢

鶴に千歳の齡あり龜に萬年の壽あり何ぞ人にして長命を保ち得ざるの理あらんや今本書は人間の幼時より老年に至る迄の身躰精神の攝養法を學理と實驗より說明指示して綿密精緻遺漏する所なく一般の衛生書と大に其趣を異にし一度之を通讀せは豁然として長命の術を會得し無病健康に長く現世の生活を樂しむを得べし

◉衛生美身術 全一冊 正價十錢 郵税四錢

◉小兒養育法 全一冊 正價十錢 郵税四錢

◉通俗簡易治療法 全一冊 正價十錢 郵税四錢

◉通俗看病法 全一冊 正價十五錢 郵税六錢

空前無比 ◯ 帝國文庫 ◯ 最大出版

帝國文庫第十八編第十九編發兌廣告

三月二十日發兌

校訂
通俗十二朝軍談
通俗武王軍談
通俗明清軍談

三書合一冊脊皮上製　正價五十錢郵稅十六錢

十二朝軍談は盤古氏以來殷紂に至るの史にして支那歴朝軍談中の最古のものなり、武王軍談はこれに次きて殷末より周秦に至る歴代の事蹟を叙す、此の二書以て支那上古の治亂盛衰の狀を窺ふべし而して本編附するに明清軍記を以てす、所謂國姓爺の雄材偉畧を叙して歴朝史の殿後たるもの、本編は支那軍記を先鋒と殿軍とを集めたり

三月三十日發兌

校訂甲越軍記

全一冊洋裝脊皮上製　正價五拾錢郵稅拾六錢

甲將は精、越將は猛、天地間の奇觀は甲越二將の戰に極めたり、ナポレオン、ウエルリントンと逢ふ、此の奇略にあり、此の精猛は未だし、鞭聲粛々夜渡レ河、曉見千兵擁二大牙一、遺恨なし兩人の川中島に戰ふの奇觀

帝國文庫目次

編	書名	冊數・頁數
自第壹編至第四編	眞書太閤記	全四冊 四千百頁
第五編	源平盛衰記	全壹冊 千三百頁
自第六編至第八編	南總里見八犬傳	全三冊 四千頁
第九編	東海、木曾、奥羽、江ノ島道中膝栗毛	全壹冊 千二百頁
第拾編	梅暦。春告鳥	全壹冊 千百頁
第拾壹編第拾貳編	通俗三國志	全二冊 二千百頁
第拾三編	三馬傑作集	全壹冊 千百頁
第拾四編	柳澤、越後、黒田、加賀、伊達騷動實記	全壹冊 千百頁
第拾五編	京傳傑作集	全壹冊 千百頁
第拾六編	種彦傑作集	全壹冊 壹千頁
第拾七編	星月夜鎌倉顯晦録　北條九代記	合壹冊 壹千頁
第拾八編	通俗十二朝軍談　通俗武王軍談　通俗明清軍談	合壹冊 壹千頁
第拾九編	甲越軍記	全壹冊 壹千頁
第貳拾編	漢楚軍談　呉越軍談	合壹冊 四月出版
第貳拾壹編	楠廷尉秘鑑	全壹冊 四月出版

帝國文庫●全部五拾巻總紙數五萬頁一冊壹千頁餘全部厚サ七尺五寸●每編脊皮金字入上製堅牢美本
●●一冊五拾錢十冊前金四圓六十錢卅冊前金拾三圓全五拾冊金二拾圓●郵稅一冊拾六錢

柏軒松井廣吉君著

戰國時代

（製本既成）

全一冊

四百五十頁 洋裝美本 正價三拾錢 郵税六錢

戰國時代は日本人種の最も發達したる時代なり、勇武進取の氣象殆んど其の頂點に達せる時代なり、「戰國時代は」乃ち能く當時の智勇辨力を描す、本書の著者曰く「歷史は人世の花なり、根幹なり、國民の氣性を涵養し、之を鼓舞奮勵するの靈効あるのみならず、又國家の榮譽を發揚し、國民の品格を裝飾す」と、「戰國時代」は果して我が「帝國の花」として榮譽を發揚するに足る乎、「國民の品格を裝飾するに足る乎、「帝國の根幹」として我が國民の氣性を涵養するに足る乎、少くも本書の讀者を鼓舞激勵し、勇武進取の氣象を發作せしむるに足る乎、江湖の君子請ふ本書を一讀して之を判せよ、

社會文庫第五編發刊 廣告

高橋泥舟先生題辭 文學士長澤市藏先生序文

在法科大學中島滋太郎君著

日本外交の大勢

全一冊洋裝 正價拾二錢 郵税四錢

本書は著者が極めて公正なる審斷と精確なる材料とに據りて、神代より現世に至る我邦外交局面の大勢を詳論したる珍書なり、苟も身を外交多端の今日に置くの國民は其職業の何たるを問はず、其地位の孰れに論なく、須く一本を座右に俱ふべし、一たび之を繙くに至ては、三千年間に於ける我邦外交の泉源流末胸頭に的々歷々たり以て始めて溶漾茫漠たる外交問題に對する公明の斷案と剴切の立論とを望むべきなり

社會文庫目録

第一編 個人對國家論 永井久滿次譯
第二編 日本ト布哇 外山義文著
第三編 理想的國家 荻原絹涯譯
第四編 教育時言 坪谷善四郎著
第五編 日本外交の大勢 中島滋太郎著
第六編 金銀貨幣論 木下政二郎著
第七編 日本海運論 坪谷善四郎著

社會文庫定價 一冊拾二錢六冊前金六拾七錢拾二冊前金一圓廿五錢○郵税一冊四錢○毎月二回發

大和田建樹先生著　小野鵞堂先生書

明治女子書簡文

製本既成

全壹册木版新刻
和裝製本頗美麗
正價金卅錢　郵税四錢

文は巧なりと雖も其書あしければ取て手紙書習ふ手本とは爲し難く書は妙なりと雖も其文適せざれば用ひて實地應用の文例とは爲すべからず此二者を兼得たるものは抑も此の明治女子書簡文か文は實地通俗を主として「なん」「こそ」「侍る」的の和文臭味を脱し書は優美明亮にして平假名は讀みにくきものと誤解せし世人の迷を覺ますに足るべし是ぞ此れ明治女用文中の玉にして令孃袖珍中の梅櫻

● 巖谷一六先生書　**明治書翰文**　全一册木版和裝　正價金三拾錢　郵税四錢

● 大和田建樹先生著　西村貞先生校閲　河村墨稼君編書　**初學手紙の文**　全二册木版和裝　正價金三拾錢　郵税四錢

● 橘千蔭先生書　高等女子習字帖　**鳥丸帖**　全一册木版和裝　正價金三拾錢　郵税四錢

（製本既成）

菊醉山人羽山尙德君著

初等教育 作文眞訣

全一册洋裝　正價拾二錢　郵税四錢

文章は人たるもの學ばざるべざるの要道たり此書部門を讀書、文法作例、文字、文話の五種に分ち而して門中又數種の小部類ありて其要道たる文章を作る方法を敎ふる事極て正格に極て平易に極て懇切にして恰も老翁の兒孫を指道するが如し斯の道に志すもの宜しく一讀して其眞訣を悟るべし

ヘーゲル氏原著　幸福散史澁江保君譯述

歷史研究法

全二册洋裝　一册拾二錢　郵税各四錢

◎下卷　三月廿五日發兌

本書は獨逸國の碩學ヘーゲル氏の歷史哲理講義を譯述したる者にして。上卷には先づ歷史に三種の別あることより說き起して、原史、講史、論史、各自に詳說し、此の世界は道理の支配する所たると、歷史は精靈發達の經歷たると、精靈の目的は自由に在るとを論じ、次で國家の盛衰興亡、政體の眞否等に及ぼし、及び其他諸種の論據より以上の件々を確め、下卷にては支那、印度、波斯、猶太、希臘、羅馬、其他古代の東洋諸國及び今日の歐洲諸國に前述の件々を適用して一々論究したるが故に、史學に志す者、必讀の眞書と云ふべきなり

圖書出版

東京博文館

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN